大雪山から育まれる文献書誌集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

第４集

北海道
東川町
－写真の町－
写真文化首都

北海道・東川町

表紙写真　日本一と言って良いほどの、チングルマの大群落地、裾合平（すそあいだいら）。
雪解けが遅いため、例年７月下旬に見頃を迎え、その花畑の間の木道を抜けてい くと、
天然温泉の中岳温泉があり、足湯も出来る為、絶好の休憩場所として人気 がある。
（撮影：大塚友記憲　YUKINORI OTSUKA ）

ふるさとの山、大雪山の文献書誌

東川町のエリアに大雪山国立公園の主峰・旭岳がすっぽり入っています。ふるさとの山、大雪山は、アイヌの人々がカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭の意味）と呼んでいた特別な山です。豊かな自然はさまざまな野生の命を育み、町から眺める姿は雄大で美しく、日本を代表する名山のひとつです。

自然が豊かな山であると同時に、さまざまな人がかかわり、多くの本や研究が残されてきた大雪山です。人とのかかわりを視点にすると、日本一の「文化の宝庫」ともいえます。北海道が蝦夷地と呼ばれていたころから多くの探検家が歴史的な紀行文を残し、明治時代の文士が名文を残して、大雪山は徐々に全国に知られていきました。

高山植物、動物、昆虫、地質、火山、気象、雪の結晶などそれぞれの分野の研究者が登り、研究成果を発表しています。登山、縦走、冬山、スキーなど登山記やガイドブックは古典的な名著が多く、そして最新版としてこれからも発行され続けていくことでしょう。優れた写真家たちが心血を注いだ素晴らしい写真集にも恵まれています。そして、これからも写真家たちは大雪山を撮り続けることでしょう。

大雪山の文献書誌を東川に集め、多くの人に読み、親しんでいただき、「文化の宝庫」を全国に発信していきたい。そのような目的で、どのような本が東川にはあるのか、「目録」を作りました。ふるさとの山への知識を深めていくきっかけになることを願っています。

なお、『大雪山から育まれる文献書誌集』は平成 26 年 3 月に発行して以来、第 3 集まで発行してきました。これを合本したうえ、その後に入手した図書、資料を書き加えて第 4 集としました。これまでに紹介してきた寄稿、諸団体・諸機関の活動は再掲し、新たな寄稿を含め、編集しました。

目　次

文献書誌集に寄せて

『黒岳石室、それは木炭１俵の荷揚げから』……佐藤文彦……1
『大雪山を詠う　句集「雪晴風」から』……斎藤信義……2
『大雪山との出会い』……鳥羽晃一……3
『たまには山へ恩返し』……佐久間　弘……4
『エゾモモンガにひとめぼれ』……大塚友記憲……5
『忘れ得ぬ思い出』……黒田　忠……6
『大雪山、判らなくなってきたこと』……菊地　基……7
『松浦岳はいかにして消えたか』……寺口一孝……8
『大雪山の文化を育む』……下條典子……9
『天人峡の植物調査に同行して』……宗万　忠……10
『私と大雪山』……東　延江……11
『ふるさとの山 大雪山の本』……佐藤一交……12
『太田龍太郎の生涯』……笹川良江……13
『松山温泉といった頃』……鮫島惇一郎……14
『憧憬の大雪山ふたつ』……清水敏一……15
『偉大な大雪山と小さな私の接点』……俵　浩三……16
『夢を見たくなる東川からのささやき』……寺島一男……17
『「大雪山昆虫誌」をまとめて』……保田信紀……18
『旭岳のギンザンマシコ』……大橋弘一……19
『遠くにあってほしい場所、隔絶された白い世界・旭岳』…柏　澄子……20
『大雪山を聖地として』……塩谷秀和……21
『「大雪山讃歌」を出版して』……高澤光雄……22
『大雪山に抱かれて』……春菜秀則……23
『移住者の体感時間』……林　拓郎……24
『遥かなる山稜』……本村勝伯……25
『「われらの大雪山」(愛山渓新聞社々歌) の誕生まで』……大須賀羊一……26
『大雪に魅せられて　～父、戸川幸夫に流れていたもの』……戸川久美……28
『大雪山スキー滑降、気圧計で命拾い』……前田光彦……29
『ヒマラヤと大雪山』……梅沢　俊……30
『美しい雪の結晶が降る大雪山の麓』……神田健三……31
『血縁の山　小泉岳』……小泉雅彦……32
『北の山にあこがれて』……嶋田　健……33

『「東川町民」を自称する初代レンジャー』……二橋 愛次郎…… 34
『永年にわたる大雪山への思い』 ……渡 辺 康 之…… 35
『大雪山に関わる歴史・人文の足跡を追い求める』 ……武 田 泉…… 36

大雪山文献目録 …… 37
総 記 …… 38
研究書 …… 51
実 録 …… 61
人物誌 …… 72
案内書 …… 78
図録類 …… 91
文学書 …… 102
紙誌、部会報 …… 118
その他文献 …… 138

インデックス …… 151

大雪山関係機関、団体の紹介
人が来るほどに美しくなる山へ
大雪山・山守隊の発足 ……岡 崎 哲 三…… 176
大雪山国立公園パークボランティア連絡会 …… 183
旭岳ビジターセンターと旭岳の四季 …… 186
旭岳ビジターセンター …… 188
環境省 東川自然保護官事務所 …… 189
NPO 法人大雪山自然学校 …… 190
旭岳ファンクラブ …… 191
大雪と石狩の自然を守る会 …… 192
あさひかわジオパークの会 …… 193
一般社団法人 ひがしかわ観光協会 …… 194
ナキウサギふぁんくらぶ …… 195
山のトイレを考える会 …… 196

書籍紹介

高山のコウモリ ……出 羽　　寛…… 198

戸川幸夫著『牙王物語』を読む ……岩 田 好 宏…… 202

東川に移住した笹川良江さんの貴重な資料 …… 206

泥流地帯・続泥流地帯 …… 207

太田龍太郎の生涯 …… 207

凍(しば)れるいのち …… 207

絵はがき …… 208

小泉秀雄の貴重な手書き資料集 …… 210

天人閣支配人 40 年、大門金光の幻の原稿 …… 213

受け継がれて 41 年　カレンダー「大雪山の四季」
　営林支局、高橋秀雄さんから写真家、後藤昌美さんへ …… 218

半世紀を超える研究、学習の歴史
　北海道教育大学大雪山自然教育研究施設 …… 219

宮部金吾博士の大雪山高山植物園構想
　90 余年ぶりに偶然発見 ……俵　　浩 三…… 225

一の弟子・舘脇操と大雪山
　宮部博士の歴史的資料発見に寄せて ……清 水 敏 一…… 235

黒岳石室、それは木炭１俵の荷揚げから

佐　藤　文　彦

経歴
1942年5月生、大雪山とやや本格的にお付き合いをいただいたのは、高校生時代の石室のボッカと学生時代の石室管理人、大雪営林署の高山植物パトロール。1998年永年勤めてきた会社を定年後は「風の便り工房」設立。知人より紹介され「山と高原地図」の調査執筆を依頼されて、利尻礼文羅臼斜里阿寒、大雪十勝連峰石狩ニペウペペ芦別夕張を担当することになった。3年前から私は小冊子の執筆だけを担当している。この間、2000年から大雪山高原ヒグマ情報センターの管理運営にも携わっている。

黒岳石室は、大正12年に旭岳の避難小屋と同時に建立され、旭岳避難小屋経由で松山温泉まで（現在の天人峡温泉）登山道も開削されたと資料には掲載されている。開通したばかりの登山道はさぞかし気持ちよく歩けたんだろなあと考える。雲の平のお花畑はアースハンモックの踏みあとだけだったかもしれないし、北鎮岳の肩分岐から旭の山頂経由姿見の池までは、踏みあとすらなかったかもしれない。

さて、私の石室管理人時代に戻ろう。高校生、学生時代（昭和30年代後半～40年代）のバイトはもっぱら石室物資の荷揚げの対応だ。ほとんど誰もやらない。だが木炭一俵（30kg）持っていけば1000円は稼げた。登山者の燃料用の木炭だ。この時代にガスボンベを使用していた登山者などは、見たことがない。アルコール燃料か、よくて灯油のマナスル。ホエブスなんぞは高根の花であった。

4月上旬、黒岳石室の屋根が見える。
右手から桂月岳、凌雲岳、北鎮岳

小屋の燃料さえ、ハイマツの枯れ枝なんだから推して知るべし。このハイマツ燃料は3年くらいで終わりを告げた。周囲にハイマツを切った時の鋸目が残ったり、作業に携わる人手がだんだんといなくなってきたこともあったからなどと聞いている。

管理人はまだまだ次の業務が待っている。下の水場から天秤棒で水を上げなきゃならないのだ。この水場の向かい側、広場が黒岳のテン場だったのだが、キャンパーが残飯を土中に埋めてしまうのでここにヒグマが付いてしまい昼間も出没するようになり、ついにハンターの出番となる大騒ぎとなりヒグマ1頭が犠牲になってしまった。この間の仮のテン場が現在のテン場である。

この辺の何年かと記憶しているが、赤石川を渡渉してから分岐点を作り右は北海岳、左にミクラ沢、雪の沢を越えて烏帽子岳に至り、現在もあるベンチの休憩所を経由して白雲岳山頂にという登山道計画が持ち上がり、実際に実施されたのである。私も垂木に赤い印をつけて作業に参加していた。まだ特別保護地区や第1種の制度に指定されていないころであるが、今でも遠望すると殆どリハビリされていますがその名残が見えるところがある。

現在は天然記念物になり、捕獲して逮捕者まで出ているウスバキチョウを始めとする4種の高山蝶なども、どこにでも飛んでいた。私はなんて素晴らしい大雪を経験してきたか、あらためて感じている。

大雪山を詠う　句集『雪晴風』から

斎　藤　信　義

経歴
昭和 11 年 2 月 1 日、増毛町生まれ。高校時代から俳句を始め、新聞や結社誌に投句していた。昭和 40 年、赴任地福岡で野見山朱鳥から直接指導を受ける。朱鳥亡きあと、岡部六弥太主宰「円」に参加、初代編集長。傍ら、伊藤通明らの「裸足の会」に参加、上田五千石を識る。五千石主宰「畦」同人となるが平成 9 年、五千石急逝で廃刊。平成 14 年から「俳句寺子屋」塾を主宰している。俳人協会、北海道俳句協会の会員。句集に『神色』『天景』『氷塵』『雪晴風』があり、『氷塵』が第 33 回北海道俳句協会賞（鮫島賞）、『雪晴風』が第 33 回北海道新聞俳句賞を受賞。

増毛町で生まれ 18 歳の時に上京し、勤務した東京の会社の転勤で九州・中国地方の担当を 13 年間勤め、東京本社に戻って 60 歳の定年を迎えた。故郷に独り残った母の懇願もあって、無理矢理退職し、旭川に新居を構え母と同居した。初めて住む旭川、東方に聳える大雪山は眩しい存在であった。

趣味の俳句は増毛高校時代からで、九州で高浜虚子の愛弟子、「ホトトギス」の精鋭であった野見山朱鳥に出会い師事し、俳句の本質を学んだ。

私の俳句は朱鳥の掲げた「生命諷詠」を引き継ぐ伝統俳句であり、風土や自然詠が基本となり、大雪山系はその中心的なものとなった。第 3 句集『氷塵』は、ダイヤモンドダストの北方季語であり、今回上梓の第 4 句集『雪晴風』は“ゆきはらし”と読む浅春の季語である。この句集の後書きに次のようなことを記した。

「ここには日本一美しい雪が降る」

と言った中谷宇吉郎博士の言葉があるが、こことは、旭岳の「天女が原」のことである。

この旭岳の中腹に位置する天女が原の元朝を詠った次の句をこの集の巻頭に据え句集は始まっている。

明け方の天女が原の淑気かな

なお、集名は次の句群から採った。

うっすらと昼の月ある雪晴風
山巓の無垢なる白さ雪はらし
肝に沁むほどの眩しさ雪晴風

旭岳の雪晴風（ゆきはらし）
札幌好日山荘元社員･木村洋一さん撮影

これらの作品など 437 句を収載した第 4 句集『雪晴風』は、北海道新聞社の第33回俳句賞を受賞した。

また、第 3 句集『氷塵』の中にも次のような作品が収載されており、北海道俳句協会の第 33 回鮫島賞を受賞している。

はごろもの滝恋々と凍りをり
さはさはと氷塵降らせ空邃し
月明の大雪山よりの飛雪かな

このように大雪山系は、一幅の絵のように我が心のなかに鎮座している。

大雪山との出会い

鳥　羽　晃　一

経歴
1970年千葉県生まれ。1996年より札幌の自然学校やNPO法人で環境教育指導、山岳ガイド、エコツアー、子どもの自然体験活動に従事。2009年に独立、ガイドオフィス風主宰。大雪山を中心に全道各地で登山、エコツアー、スノーシューツアーなどを年間150日程度行っている。2005年より東川在住。日本山岳ガイド協会認定登山ガイド・スキーガイド、環境省自然公園指導員、障がい者スポーツ初級指導員、東川町大雪山保護協会遭難対策協議会会員。

私が初めて大雪山を訪れたのは20歳の夏。気の合う仲間と黒岳からトムラウシを経て富良野岳まで縦走する5泊6日の計画を立てた。パンパンに膨らんだザックの重さは30キロ近くになり、背負いバンドは肩に食い込んだ。

黒岳山頂への急登はペースが上がらず、予定の倍の時間をかけ、喘ぎながら登った。ふらふらになりながらようやくたどり着いた山頂からみた大雪山は雄大な山並みと、見渡す限り咲き乱れる高山植物群が充実感と感動を与えてくれた。生気を取り戻した私は、ハイマツを横切るキツネに驚き、ヒグマの気配を感じながら、遥か彼方まで続く登山道を興奮しながら歩いた。

満天の星空を飽きることなく見とれるうちに、荘厳なまでの日の出を眺めることが出来、美しい山並みに歓喜の大声をだしてしまった。コマクサやチングルマが咲く岩場では、いつのまにやら昼寝になってしまい、そのような山行だから遅れに遅れた。

道草と悪天候予想の為、縦走登山はトムラウシまでになり、化雲岳から天人峡へ下山することになった。長い登山道を下り、天人峡温泉が近づいた時には久しぶりの入浴と人の気配に安堵した。その半面、素晴らしい体験が終わってしまうことへの寂しさもあった。

6年後、脱サラし札幌でガイド業をはじめた。お客様を山岳地域にご案内する時にはこの縦走を思いだすことがある。私のガイドとしての原体験は大雪山なのだ。山頂をただ目指すだけでなく、心に響く風景や懸命に生きる動植物との出会い、時には厳しい自然環境を体感し、そして自然の中にいる人間の大きさを感じることができる。大雪山はそんな場所だ。

トムラウシ山登頂が大雪山との出会いだった

たまには山へ恩返し

佐久間　弘

経歴

高校時代に初めて登った白馬岳がきっかけで山にハマり、大学卒業後穂高の山小屋の小屋番に。1995年に東川町へ移住し、登山ガイドを始める。2001年、登山ガイド組織「山樂舎BEAR」を立ち上げ、2003年には旭岳の自然を守るために「旭岳ファンクラブ」を設立する。2015年に「旭岳ファンクラブ」は解散するが、その志を引き継ぐ「一般社団法人　大雪山・山守隊」が2018年に設立され、立ち上げに関わる。

大学2年の夏に初めて大雪山を訪れた。旭川から乗ったバスを天人峡で降り、クワウンナイを遡って初めて立った山頂がトムラウシ。そこから主稜線を北上して旭岳や黒岳の山頂を踏み、愛山渓温泉へ。下山後に汗を流した露天風呂の浴槽にヘビが入り込み、コワい上級生のリーダーが悲鳴をあげて浴槽から飛び出したのを昨日のことのように覚えている。

あれから40年近くが経ち、東川へ移住してからも早いもので20年以上経つ。あのとき入った露天風呂も今はなく、路線バスもなくなった。天人峡の宿は2軒に減り、今年（2018年）は道路の復旧が間に合わず、愛山渓温泉へは行けずじまい。羽衣の滝は5年ぶりに姿を拝むことができたが、ここ数年の夏の豪雨被害で閉鎖されたままの林道があちこちに増え、山を取り巻く環境は年を追うごとに厳しさを増している。

変わらないように思える山の景色も、気がつくと変わっていたりする。以前は高山植物が咲き乱れるお花畑だった場所が笹原になってしまったり、以前は当たり前のように綺麗だった紅葉が色づかずに枯れてしまう年も少なくない。温暖化の影響だろうか、今年の秋は異常に暖かく、この原稿を書いている12月上旬でさえ、田んぼは雪に覆われていない。

温暖化による変化は植生ばかりではない。21世紀に入ってから永久凍土帯の登山道の荒廃が目に見えて進んだ。法面がブロック状に崩落したり、ある日突然地面が陥没したりと、ここ数年は特に激しい。

気候変動を止めることは難しいとしても、登山道のこれ以上の荒廃を食い止めることはできないものかと立ち上げたのが、市民参加型の登山道維持管理イベント「たまには山へ恩返し」である。行政や民間事業者・研究者が協働し、山岳環境を保全するこのプロジェクトは、ここ数年で急成長し、年間百人以上が参加するイベントになった。さらにそこから一歩進めて、民と官とが一体となって大雪山の環境保全を進めていくための中核組織を目指す「大雪山・山守隊」の立ち上げにも参加した。

国内屈指の原生自然を誇る大雪山を未来に残すために今後も微力を尽くしたいと思っている。

クワウンナイ・滝ノ瀬十三丁
初めて大雪山を訪れたときに遡った

エゾモモンガにひとめぼれ

大　塚　友記憲

経歴

1979年生まれ。千葉県野田市出身。東京写真学園（松濤スクール・オブ・アーツ）プロコース科卒業。「大雪山」をテーマに山岳風景と、そこを拠点に活動する人々の姿などを撮り続け、アウトドア関連企業へ作品を提供し、山岳雑誌『岳人』などにも寄稿している。北海道知事認定アウトドアガイド（夏山／冬山）、北海道山岳ガイド協会会員。公益社団法人日本写真協会正会員、特定非営利活動法人北海道を発信する写真家ネットワーク理事。著書に『ブラボー！　大雪山』（新評論刊）。

千葉県野田市は茨城県と埼玉県に挟まれた一番内陸に位置する。その辺りで生まれ育った者にとって身近に感じる山は、北に筑波山、西に富士山となるだろう。快晴の冬には小高い丘や土手からよく見えていた。

多くの小学校は校外学習となれば筑波山へと登る。ケーブルカーも使って、中腹から登り始め、山頂付近では雄大な関東平野を見渡し、感動した。冬は我が家ではよく日光へスキーに行った。私の「日本の山岳風景」のイメージはそのような中で培われていった。

そして、20歳になって人生に右往左往していたような時に、漠然とした北への憧れだけでたまたま飛び込んだのが、勇駒別（ユコマンベツ。通称・旭岳温泉）。11月初旬だった。毎日のように降り続ける雪に最初は新鮮に感じていたが、仕事での除雪が続くと、すぐに滅入ってしまった。

それでも、なんとか乗り越えて厳冬期の1月を迎えると、当時はバックカントリースキーの欧米人はまだそれほど多くなかった為、勤務の日でも休憩時間に一滑りできるようになり、徐々にその環境に慣れて、楽しんでいた。そして、ある時、友人からエゾモモンガの写真を見せられて、ひとめぼれ。その手のひらサイズほどの小動物がいる森に出かけていくと、運よく遭遇。まつ毛も凍るような氷点下20℃以下の環境で、そんな小さな命が生きているという事実にただただ感嘆し、私の浅い「日本の自然」観が見事に打ち砕かれた瞬間だった。

そこから私の大雪山との細長いお付き合いが始まったように思う。最初は「動物」だけをテーマに撮影していたはずだったのに、風景も撮影するようになり、そして夏山だけだったのが冬山も行くようになり、気が付いたら10年ほど経っていた。そして、写真の町・東川町のご協力もあり、10年分撮りためた作品を四季に分けて、平成30年7月に写真集「ブラボー！大雪山」（新評論刊）を出版という機会をいただくことができた。

その本の中でのまえがき・あとがきにも書かせていただいているが、大雪山とともに歩んでこられた諸先輩方との出会いがなければ、こんなにも長く住み続けることもなかっただろうし、撮影することもできなかったと思う。改めて感謝申し上げると共に、多くの方々に愛される大雪山がこれからも変わらぬ原始山岳風景として守られ続けることを切に願う。

忘れ得ぬ思い出

黒　田　　忠

経歴
大雪山国立公園パークボランティア連絡会会長。
昭和25年5月、山部（富良野市）生まれ。富良野高校、法政大学卒。昭和50年、北海道警察巡査拝命、32年間の警察勤務の間に山岳遭難救助活動に度々出動、平成19年道警退職。二十代から登山に親しんできた山男で、平成16年から大雪山国立公園パークボランティアに参加、平成23年から会長。

私が道警の山岳遭難救助隊隊員の指定を受けたのは、1981年で、それから退職するまでの27年間、山岳遭難救助の現場で活動しました。恵庭岳で救助訓練を受けたとき、故川越昭夫氏から「人間は時として大自然の前に遭難という憂き目に遭うことがあるが、誰も遭難したくて遭難する人はいません。救助活動に従事する皆さんは、山を愛する友人、親・兄弟が遭難したのだと思って寛容な心を持って遭難救助活動に当たってください」と言われ、いつも、この言葉を胸に救助活動に当たりました。

中でも忘れ得ぬ山岳遭難事故は、トムラウシ山（2141 m）で1979年に起きました。7月29日に層雲峡黒岳から入山した親子が予定の日時になっても下山しないと家族から届け出がありました。父親H氏（48歳）は東北大学医学部助教授、トリチュウム研究で将来を嘱望された第一人者です。息子さんの名前は高峰（たかね）。同じ呼び名の高根ヶ原を一度見せてやりたいと、中学の夏休みに仙台から大雪山に来たまま消息を絶ったのです。

たどったと思われるコースは黒岳→白雲岳→高根ヶ原→忠別岳→五色岳→ひさご沼→トムラウシ山で、大変広い範囲であり、北海道警察は旭川、釧路の両方面から捜索隊を出し、私は帯広署からの参加でした。実は当時、山岳会などと合同訓練を予定しており、訓練が急きょ本番になって食料など装備の準備はすぐに出来ました。

8月10日午後5時頃、旭川の捜索班がトムラウシ山山頂から北東約700メートルの沢でH氏の遺体を発見、翌朝、高峰君も付近で遺体で発見されました。現場の様子から、急斜面の雪渓で父親が滑落し、岩に体を打ち付け絶命。父を助けようと後を追った息子さんも急斜面でなすすべ無く疲労凍死、行きつ戻りつした足跡が雪渓にいっぱいついていて、隊員も涙したと聞きました。私たちも、待ちわびていたご家族のことを考えると元気で返してあげられなかったことに悔し涙が流れました。

私の大好きなトムラウシ山ではその後も遭難は続き平成14年7月、福岡県からのツアー登山の8人パーティーが台風の影響で大荒れの中、登山を強行、トムラウシ山山頂付近で行動不能となり低体温症で女性客（58歳）が死亡。事故の形態は、平成21年7月発生のアミューズトラベル株式会社のトムラウシ山ツアー登山で8名が死亡した最悪の山岳遭難事故との共通点も多く、福岡の教訓が全く生かされずに大変悔やまれます。

トムラウシ山で高山植物が一斉に咲き競うころ、この花々は、トムラウシ山に眠る人々の慰霊のために咲いていると思うのは私だけでしょうか。静かに手を合わせ、この山で亡くなった人々のことを思い出してください。神聖な天上の聖地だから決してこの山は汚してはいけません。

高根ヶ原とトムラウシ山　緑岳からの眺望

大雪山、判らなくなってきたこと

菊　地　　基

経歴
関東生まれ、2000 年頃より北海道在住、2005 年より旭岳ビジターセンター勤務。

エゾアカガエル

「旭」がほぼ現在の形になってからの数千年に比べても、最後の小規模な爆発が起きてからの数百年に比べても、人間が大雪山に触れ、記録を残すようになってからの歴史はごく浅く、また、ひとが大雪山を登ったり関わったりできる期間はどう長くても 1 世紀にとても満たない。

尊敬する登山家が「スキーを外し歩いて帰ってきた、何十年も前から来ているが、こんなことは初めてだ」と、春スキーの帰りがけに話していかれたことがあります。標高差が少なくスキーを滑らせるのにむしろ苦労する場所の話なので、にわかに信じられませんでしたが、ベテラン山スキーヤーはアイゼンに履き替えて帰ってきたそうです。第 3 集で前田支配人が述べられた想像を越える暴風やその前兆もやはり、大雪山の歴史のなかでは、実はそう珍しくなく起き、しかし多くは忘れ去られ、似たような出来事が繰り返されているのでしょう。

また、林業の衰退や近年激甚化しつつある気象災害などにより、大雪山への入り口は昔より減っています。大雪山について、いろいろと判ってきたこともある反面、判らなくなってきていることがたくさんあるように思います。

さまざまな季節や場所、方法で、この自然がまず体験・共有されますように。

エゾライチョウ

エゾヤチネズミ

松浦岳はいかにして消えたか

寺　口　一　孝

経歴
昭和 21 年 2 月 1 日生まれ。青森県黒石市出身、登別市在住。平成 21 年「室蘭ネイチャーオフィス（H20-1/1 開設）」にスタッフとして入り、活動中。北海道体験観光推進協議会の委託を受けて山岳の講習並びに審査・検定を全道規模で実施中。北海道山岳連盟、室蘭山岳連盟に所属し山岳遭難事故防止・安心安全登山の普及に努めている。著書に道内の 1,600 座の山名とアイヌ語との関連を調べた「カムイミンタラの山」、「カムイミンタラの山再び」の山辞典、アイヌ語辞典の和・夷辞典夷・和辞典「イランカラプテ」など。

大雪山系はどこからどこまでか、そしてその山系にいくつ山が有るのか。いわゆる大雪山国立公園だ。東西に 59㌔南北に 63㌔有り、かみ砕くと表・北・東大雪と十勝連峰全てを含む。

そこにどんな山々が有るのか気になるところだが、今回は松浦岳を中心に調べてみたい。

ご存知の通り大雪山の各々の山名はほぼ小泉秀雄が中心になって命名されている。

そして北海道や大雪山に大きく貢献した偉人達の苗字を当てている事もご存知の通りである。

昨年は北海道命名 150 年で道庁を中心に色々な催し物が有った。私の命名 150 年は山名辞典を作った経緯から松浦岳の復活で有った。大雪山系には偉人の名前が随所に有る、曰く【間宮岳…間宮林蔵（探検家）】・【荒井岳…荒井初一（大雪山の調査会長）】・【小泉岳…小泉秀雄（植物学者）】・【近藤岳…近藤重蔵（探検家）】・【松田岳…松田市太郎（大雪源流部調査隊）】・【永山岳…永山武四郎（屯田兵長官）】・【桂月岳…大町桂月（文人・探検家）】等で有る。北海道探検調査の内容から判断しても松浦は決して劣るものでは無く、松浦岳が改ざんされる理由は無いのだ。

大正 6 年の小泉原圖ではこの緑岳には【南岳一名松浦岳】の記載が有り、緑岳では無かったのである。いつ、誰が、何の目的で緑岳にしたのかは文献を当たったが分からなかった。一方写真家で山岳ガイドの大塚氏は蝦夷母子蓬の緑系の色からしっくりくるとしている。私は近くに赤岳・黒岳が有るので短絡的に緑岳にしたのではないかと感じている。

松浦岳、木道材料運び上げ

只、この山には個人的には 10 年前に 6.8 トンの木道運び上げに参加した事も有り、松浦岳には強烈な思い入れが有る。だからこの山は松浦岳なのだ。

※松田岳と近藤岳は同じ山。

※ちなみに大雪山国立公園には 300 余の山が有る。

※十勝連峰の大麓山は元東大総長の菊地大麓氏から命名。

大雪山の文化を育む

下　條　典　子

経歴

東神楽町生まれ、旭川育ち。山梨県の大学時代に山を歩くことが好きになり、アウトドアメーカーに10年間勤務。2015年、自身が働く店舗で開催された合同会社北海道山岳整備主催の写真展「山守人」を見て、自然が復元するきっかけ作りをする人がいることに衝撃を受け、自分もやりたいと願い出る。合同会社北海道山岳整備で学びながら、一般社団法人大雪山・山守隊スタッフとして活動中。

大雪山が見える場所で農業を手伝うことがあります。話をすると、ほとんどの農家さんは大雪山に登ることはありません。ですが毎日山にかかる雲を見て、雪の付き方や減り方を見て「あそこに雪が付いたらこうなる」「山に雲がなくなったからこうなる」と予想し、それがけっこう当たるんです。そうやって数十年見続けている方もいます。「昔はこんなこともあったぞ～」という話はいつも楽しく、驚きがあります。登ったのは昔一度だけだったりしますが、毎日山を観て、変化に気が付いています。

大雪山の麓にある喫茶店によく立ち寄ります。ほとんどのマスターの方は夏山シーズンは忙しく、山に登るのは年に1度か2度。ですが多くの方が「大雪山が好きだからここに来た」と言います。生活の拠点を移すほど山が好き。本当に“大雪山愛”がある方が多いように感じられます。

いろいろな地域の山の長老とお話することがあります。「もうあまり登れないんだ～」と言いながらも元気な方が多いのですが、昔の登山の話を聞くと驚くことだらけです。50年前の植生や道の様子。盗掘者との攻防。考えられないほど自由な登山。興味深い話に事欠きません。今の山を作ってきたのはこういう方々なのかもしれません。

山の文化は山岳関係者や登山者だけで作られているものではなく、風土を感じる地元の方々がそれぞれの立場で山を想うことによって成り立っていると思います。

大雪山の現状を知り、様々な協力をしてくれるのもこの方々です。山守隊では今期（2018年）数回の一般参加型の登山道整備イベントを行ないました。「現場には行けないけれど～」と言いつつ、整備に参加してくれた人へ食事や農産物の提供、資材費の協力、情報の拡散、などなど。荷上げや作業をするだけが山への恩返しではないことを気づかせてくれます。

大雪山という風土は、もっと広く深い文化を作っていけるほど大きなものだと思います。

また、風景や歴史上の人物だけでなく、身近にいる大雪山を作ってきた人、地域を作っている人に視点を向けると、まだまだ違う面白さが生み出せる気がします。それらが培われたとき、今よりももっと多くの人が大雪山に関わり、守り、発信し、「大雪山を守ることが地域の誇りになる」という文化ができるのではないでしょうか。

天人峡の植物調査に同行して

宗　万　　忠

経歴
（株）総合企画代表取締役会長。1938 年、旭川生まれ。1978 年、株式会社総合企画を開業。1985 年 6 月 1 日、東川町が「写真の町」を宣言した当時、企画立案にかかわる。1990 年、旭岳温泉「グランドホテル大雪」DM 制作で全国印刷物コンクール郵政大臣賞受賞。1992 年第 1 回ワークショップ＆大撮影会を東川町で開催。1994 年、天人峡温泉観光協会「羽衣伝説」制作。1997 年、APA 日本広告写真家協会第 9 回通常総会を東川町に誘致。2000 年大雪山サンロード観光振興で東川など 4 町の広域的パンフレットを企画、制作。

昭和から平成にかけてのころ、天人峡温泉株式会社「天人閣」は毎年、小中学校を修学旅行の形で地域ごとに分けて招いていた。記念品として天人峡地域の植物集を作って差し上げようと参考資料を求めたが、手ごろなものが見いだせない。この際、天人峡地域の植物調査から始めようと昭和 63（1988）年 7 月、故吉田友吉氏（旭川市）を訪ねた。吉田氏は野生植物生態研究家であり、北邦野草園の初代園長を勤めた方である。事情を説明したところ快くお受けいただいたが、「この資料はいつごろ使用しますか」と質問されるので、「先生のご都合に合わせようと考えている」と答えた。すると吉田氏は「いや、植物の都合に合わせるべきです。時機的には、越冬した翌年の新緑のときが一番落ち着く」とおっしゃったことが印象に残っている。

ところで、昭和 44 年か 45 年頃、私は先代の総支配人、故大門金光氏から「この天人峡にしか自生していない植物がある」と伺っていました。漠然とした話でしたので、それから本屋に日参し、ようやく見つけたのが「ハゴロモホトトギス」でした。吉田氏にハゴロモホトトギスのことを話すと、「実は私も旧道道天人峡線 77 曲がりを越えた辺りからつばめ岩、くるみの沢、柱状節理、羽衣の滝、敷島の滝まで植物調査をしたことがあり、このとき、自生を確認しており、現在どのような状態か非常に興味がある」とおっしゃっるではありませんか。

そして平成元（1989）年 7 月 7 日朝 8 時ごろ、奥様同乗で来社された吉田氏のお顔が紅潮していたのをはっきり記憶している。何事かと思うまもなく、「宗万さん、大丈夫、元気に生息していました。調査報告書を置いて、これから天人閣に行ってきます」と、あわただしく車を走らせていった。

故吉田友吉氏

吉田氏の報告書に目を通すと次のように書いてあった。

「この地域で特に注目すべき植物は『ハゴロモホトトギス』、学名は『トゥルキルティス　マキノアナ』。私は寡聞にして、この植物が天人峡以外に自生するとは聞いていない。たぶん、天人峡特産種ではないだろうか。命名者は、北海道における植物学の泰斗、故舘脇操博士でハゴロモは無論、『羽衣の滝』に由来する。自生株は少なく、自生地も限定されており一般に発表されると、山草愛好家たちの盗採によって、あっというまに絶滅するだろう。自生地は秘匿すべき」

調査に同行した天人閣元支配人・水尾昭治氏と私は、吉田氏の秘匿すべきというご意見を今も尊重している。

私と大雪山

東　　延　江

経歴
昭和 13 年 4 月 12 日旭川生まれ。詩人。日本現代詩人会会員。北海道文学館評議員。北海道詩人協会。旭川詩人クラブ理事。旭川文学資料館副館長。北鎮友の会理事長。
詩集『湯の花』『花散りてまぼろし』ほか。
著書『旭川詩壇史』『北海道の碑』『旭川街並み今・昔』ほか。

なんと端正な美しさだろう。訪れる度にみつめるのが旭川を発し、東川の町を過ぎ旭岳温泉に近づくにつれくっきりと姿を現した旭岳の姿。

ここにどれほどの人を案内したことか、その度にわずか旭川から一時間少し、別天地の様に自然に囲まれ、そこに端正な美しさを見せる旭岳に感歎と羨望の言葉を浴びせられる。

大正 10 年 8 月 19 日、大町桂月は層雲峡から大雪連峰の山々を通常 4 日で縦走できるところ 6 日間かけて登り、松山温泉に着いた。

その時の登山記「層雲峡より大雪山へ」（大 12.8　中央公論所載）が詩文集『層雲峡四季』（昭 22.7　北の女性社刊）と『層雲峡―大町桂月記念号』（昭 27.6　大雪山調査会刊）に転載されているのを改めて読み返して今更のように驚かされた。

まず山に登るまで、旭川駅を発し、比布駅に降りてそこから層雲峡まで徒歩というから驚きである。通常の倍近くもかかったため、“行方不明”と新聞に報ぜられ一時は大騒ぎとなった。

私はこの登山記の冒頭の文ほど“大雪山”を表現するにふさわしい言葉を未だに見つかってはいない。

北海タイムス
（大正10年8月29日発行）

―富士山に登って、山岳の高さを語れ。
　大雪山に登って、山岳の大さを語れ。
　大雪山は北海道の中央に磅礴して、七八里四方の地盤を占め、
　頂上の偉大なること、天下に比なく、群峯集って天を刺し、旭川の市街を圧す。―（後略）

大正 10 年、桂月の称賛した“大雪山”は、山ふところに住む人と街の宝であるまいか。

私が中学一年から 10 年ほどを過ごした石北線中愛別に母方の祖父の知人で、大正 12 年から黒岳の石室番をしていた皆木四郎さんという老人がいて、いつも聞かされていた大雪山の話しと玄関にどっかりと置かれていた“黒岳”の焼き印の押した下駄の思い出。毎日ながめていた大雪連峰。それらが、今も季節ごとに私を旭岳の山裾に向かわせているのかも知れない。

ふるさとの山　大雪山の本
－大雪山国立公園 研究・文献集について－

佐　藤　一　交

経歴
1975 年山形県庄内地方に生まれる。全国転勤による渓流釣りに憧れて 1995 年環境省に入省（入省当時は環境庁）。阿蘇くじゅう、大山隠岐、陸中海岸（現在は三陸復興）及び磐梯朝日などの国立公園に赴任し、2010 年東川自然保護官事務所に着任。

大雪山国立公園は日本最大の指定面積を誇る山岳公園であり、これまで様々な研究の対象地となってきました。しかし、その分野が多岐にわたることや広大な大雪山において行われた研究であったことからその成果は把握できていませんでした。数字的な比較は困難ですが、一つの国立公園でこれほど多くの研究が行われた場所は日本国内でも少ないのではないでしょうか。多くの研究対象地となったことは、大雪山の自然環境が他に類を見ない特別な自然環境であることに他なりません。

これらの貴重な成果を地域住民や一般利用者が閲覧できるように大雪山国立公園連絡協議会※では、この研究・文献集作成に平成 22 年度より着手しており、平成 25 年度に完成します。

内容は鳥類、雪氷・気象、ほ乳類、植物、国立公園、地質、昆虫といった各カテゴリー毎に関係する論文であり約 2700 件もあります。もちろん新規の論文も今後追加していく予定です。

この研究・文献集の収集という取り組みは他の国立公園では殆ど見られず、先駆的でユニークな取り組みです。また研究・文献集は次のような形で活用される可能性を持っています。

（1）国立公園の基礎資料
大雪山国立公園の公園計画変更や、今後世界自然遺産に係る検討を行う場合に、研究・文献集を基に対象とする自然資源の評価ができる。

（2）地域の魅力向上や新たなエコツアー創出のための素材提供
「こんな自然もある」「あんな生物もいる」といった知見を誰でも知ることができる。例えばエコツアーガイドが新たな話題のネタにして、国立公園の魅力を PR することができる。

（3）地元学校教育のための素材提供
近隣学校において、研究・文献集の知見を授業に取り入れてもらうなど環境学習の素材とすることができる。

（4）地域の郷土史編纂等の支援
各自治体での郷土史編纂や案内パンフレット作成の際、大雪山の自然に関する情報を効率よく網羅的に収集することができる。

なお、研究・文献集は学術論文の原著であり、難解な表現も多く一般的ではないことから、平成 26 年度以降に、最新の学術知見を抜粋し分かり易く表現した「アカデミックパンフレット」を作成することとしています。

※大雪山国立公園連絡協議会　大雪山国立公園の関係 10 市町で構成している協議会。

太田龍太郎の生涯

笹　川　良　江

経歴
1942 年東京三田生まれ。太田龍太郎（おおた りょうたろう）の直孫。東京の家政女学院卒。日本放送協会その他勤務。茶道教授。民生・児童委員（５期 15 年）。国勢調査員。2004 年「大雪山国立公園」生みの親太田龍太郎の生涯を北海道出版企画センターから出版。道内４カ所で太田龍太郎展を開催。新聞、テレビで紹介された。現在は、太田龍太郎研究家として 50 数年足跡の研究を続けている。東川町在住。
電話 0166 － 73 － 5268　携帯 090 － 2259 － 3053

私が 12 歳の時、神奈川県逗子で、父が病で亡くなりました。父が大切にしていた品の中から祖父の書いた本を、母の父が見つけました。祖父太田龍太郎の「霊山碧水」という本です。私には、読めないのに、とても興味がありました。それから 50 年が過ぎ、私は 2004 年 12 月４日大雪山国立公園指定 70 周年の記念の日に「太田龍太郎の生涯」を出版しました。本の中には、明治 44 年東宮閣下（大正天皇）旭川行啓第７師団偕行社においてご覧賜った石狩川上流の霊山碧水（現層雲峡）の真影とその裏に太田の直筆の説明文、当時の石狩川上流探検の写真、書簡、新聞記事、掛軸など太田の生涯を祖父が残した手記を入れ年表化しました。復刊「霊山碧水」はルビを振って収録。太田龍太郎は文久３年～昭和 10 年（1863 ～ 1935）熊本藩勘定方の家に生まれ、後に国の役人となり九州から北海道まで各地で明治維新後の日本を夢中で築いた一人です。明治 30 年北海道庁長官官房秘官として道庁入り明治 43 年愛別村長（現愛別町・上川町）になり、鉄道敷設が必要と石狩川上流を探検しました。この地は断然一頭角を抜きん出て、国宝的大自然の真美と驚き北海タイムス（現北海道新聞）に載せたところ土地払い下げ運動猛烈となり、ばらばらにしてはいけない、国家が保護すべきであると考え、「石狩川上流霊域保護国立公園経営ノ件」として、後藤新平逓信大臣兼鉄道院総裁に嘆願しました。「石狩川上流約 10 里四方の地域は、厳重保護取締り一切個人及び団体名義を問わず、土地払い下げ絶対断然禁止さる可」と。これは、大雪山国立公園指定の 23 年前のことです。尚、鉄道は、旭川―遠軽間（石北線）。旭川―帯広間（石勝線旧士幌線と国道 273 の基礎）。愛別中越北見の滝之上の３路線が後藤新平総裁の承諾を得られました。そのことを「北海道の奥の院」と題し 36 回北海タイムス（現北海道新聞）連載。太田龍太郎の生涯の中の霊山碧水に紹介しています。世界遺産実現により、大雪山が後世まで守られるように願っております。私は、大雪山の主峰旭岳のある東川町に在住していることを主人と喜び満足しております。

松山温泉といった頃

鮫島　惇一郎

経歴
1926 東京に生まれる。
1947 北大札幌臨時教員養成所卒。
1950 北大理学部植物学科卒。
1955 同大理学部助手。
1956 農林省林業試験場に出向。
1964 同場育種研究室長。
1985 同林業試験場を辞職、自然環境研究室を設立主宰。

1948 年の夏でありました。日高の山を終えて急いで黒岳石室までやってきましたが、舘脇先生を親方とする「大雪山植物調査」の一行は、すでに前日出発したと聞きました。調査のお手伝いをする約束だったのですが、仕方ありません。明日早く追い掛けましょう。

どうやら化雲岳で調査中の一行に追いつきました。急に力が抜けてしまいました。日が改まります。今日は化雲岳から北へ拡がる台地の調査です。お花畑あり、高山湿原あり、また巨大なネマガリダケの群生地です。歩いたり調査したり、結構骨がおれますが、やがて森林帯。文句をいいながら三十三曲がり、急流にかかる吊橋を渡ると松山温泉でした。

松山温泉への吊橋（1953.8-1）

ユコマンベツ白雲荘（1953.8-1）

まだ天人峡などという酒落た名はありません。そしてこの日、宿屋はありましたが湯槽は露天でした。洪水で屋根が流されたというのです。でも青空を仰ぎながら広い湯槽に浸る気持ちは格別でした。野趣満々の山の湯！　もう 70 年近い昔の出来事です。

翌年になります。気の合った連中を連れて、層雲峡から旭岳を越えて勇駒別温泉です。白雲荘に一泊して松山温泉となります。それに今日は温泉から少し下った熊の沢あたりで運材のトラックに便乗できたのです。木材の上に揺られて旭川四条駅近くまで。ここから先は警察がうるさい？からと車を下りることになります。でもありがたかったですね。

旭川電気軌道東川駅で（1950.9-2）

1950 年に旭川で北海道博覧会がありました。その中に高山植物館があり、手伝いをすることになりました。期間中は生きた高山の花を見てもらおうという企画でした。面倒な制約のなか、何回も大雪山と旭川の街を往復することになるのです。やがて博覧会は閉幕となります。お役目解放？　の意をこめて、気楽に黒岳からトムラウシ山を訪ね、松山温泉へ下りる山旅を選びました。期待が勝手に膨らみます。温泉からはバス。東川から旭川までは旭川電気軌道の電車も待っているはずです。

憧憬の大雪山ふたつ

清　水　敏　一

経歴
1933 年／京都に生まれる
1964 年／北海道岩見沢に転住。2016 年／東川町へ移住
所　属／山岳史家、日本山書の会会員
編著書／『大雪山文献書誌』全４巻、『小泉秀雄植物図集』『知られざる大雪山の画家・村田丹下』『大雪山の父・小泉秀雄』『山岳画家・加藤淘綾 - 歌と旅の人生 -』
『大町桂月の大雪山』
『松浦武四郎研究家 吉田武三私伝』

私にとって大雪山は遠く遥かな山であり、憬れの山でしかなかったが、北海道岩見沢に転住したお蔭で身近な山になった。初めて入山したのは昭和 38 年の大晦日、まだ勇駒別温泉と称していた頃で、もちろんロープウエイもあるはずがない。それでもバスは温泉まで入っていた。翌元旦、スキーにシールをつけて雪面をひたすら登る。姿見の石室にスキーをデポ、ピッケルとアイゼンをつけて強風のなか、氷結した尾根を登ること２時間、ついに最高峰旭岳の山頂に立つ。温泉から延べ６時間近くを費やしたが、憬れの山であっただけに感激もひとしおであった。

だがスキー初心者の私には、石室からの滑降という難行苦行が待っていた。滑っては転び、滑っては転びの連続で、意識の中では百回くらいは転倒したと思う。登りよりよほど疲れてやっとの思いで温泉に下山したのである。

２日、勇駒別からバスで旭川、またバスに乗り換えて層雲峡へ、流星・銀河の滝、大函小函の景観を楽しみ層雲峡泊。３日帰宅、３泊４日の山旅を終えたのである。初の大雪山、大滑降？とともに、今から思えば車もなく高速道もない、けれどもゆったりまったりの何とも悠長な山旅のよき時代を思い出すのである。

もうひとつはトムラウシ山、この山は大雪山系の最奥に位置し、更に遠い遥かな憬れの山である。時は昭和 64 年７月 15 日、56 歳であった。マイカーを駆って一路天人峡へ。そこから曲折する急坂を一気に登りきり、羽衣の滝をうしろに緩やかになった尾根の登降をくり返しながら、ただひたむきに歩くのみ。化雲岳に至ってやっと登山者に会う。そして山頂への岩塊を登りきって 12 時 30 分、ようやく三角点の頂に立った。

休むまもなく下山、ほとんど一息に駈け下り、薄暗くなった天人峡着 19 時 10 分。行程往復 33 キロ、延べ 15 時間、こうして岩見沢からの１日往復計画を成し遂げることができたのである。同年１月の六甲全山縦走 56 キロより距離は短いが、時間は長くかかったということは、やはりトムラウシは遠い山であった。

今ではもはや大雪山は憧れの山ではなくなった。手近な山であり、親しい山になった。だがそれは反面一抹の淋しさを覚えるのである。それでも私の数ある登山のなかで、このふたつの大雪山行はひときわ心に残る登山として、今も脳裏に深く刻み込まれていることに変わりはない。

偉大な大雪山と小さな私の接点

1957年、黒岳山頂付近にて

俵　　浩　三

経歴
1930 年、東京生まれ。千葉大学園芸学部卒業。1953 ～ 1959、厚生省国立公園部勤務。1959 ～ 1983、北海道職員として自然公園・環境保全行政に従事。1983 ～ 2001、専修大学北海道短期大学教授。1984 ～ 2008、北海道自然保護協会理事（1994 ～ 2004 会長）。
主な著書、『北海道・緑の環境史』（北海道大学出版会、2008）、『牧野植物図鑑の謎』（平凡社新書、1999）、その他。

このたび東川町では大雪山に関する文献などを集積し、情報を広く発信する事業に着手したと聞きました。たいへん結構なことと思います。

私が初めて大雪山に登ったのは 60 年近くも前、当時の厚生省国立公園部レンジャーとして北海道（支笏湖）へ赴任した時です。その後の私は北海道庁で仕事をするようになり、大雪山・阿寒・支笏洞爺の国立公園などの業務が私の担当となりました。昭和 30 年代初めの道庁では毎年夏、一般市民を対象とする登山講習会を大雪山地域で開催しており、それも私の担当だったので、大雪山や十勝岳にしばしば登りました。

1979年、姿見池畔に立つ浩宮殿下と、その隣で展望を説明する私。この時の浩宮殿下は旭岳から黒岳まで縦走された。

個人的には札幌山岳クラブという会に所属し、休日は仲間とともに各地の山に登りました。当時は北海道の山岳案内書がなかったので、新しいものを編集しようということになり、私も手伝って大雪山を含む『北海道の山々』（朋文堂、1960）が生まれました。その次に、私は北海道の国立公園などを中心とするガイドブックを頼まれたので、『北海道の自然美を訪ねて』（山と渓谷社、1963）を書きました。これは山と旅のガイドだけでなく、動植物など自然観察に役立つ情報も含めたことが特徴でした。

1979 年には浩宮殿下（現皇太子）、1980 年には常陸宮・同妃殿下の大雪登山をご案内する機会にも恵まれました。私は 1983 年に道庁を退職して専修大学北海道短大で学生を教える立場になり、また北海道自然保護協会の理事にもなったので、大雪山地域を訪れる機会が増えました。とくに 1990 年前後は士幌高原道路計画が自然保護の大問題となったので、東大雪方面を訪れる機会が多くありました。

大雪山国立公園は日本最大の優れた国立公園です。国有林・道有林が多いので森林行政とうまく協調しながら自然保護を強化するとともに、健全な野外レクリエーション利用を心掛け、「大いなる自然遺産」を次の世代に引き継ぎたいものです。

夢を見たくなる東川からのささやき

寺　島　一　男

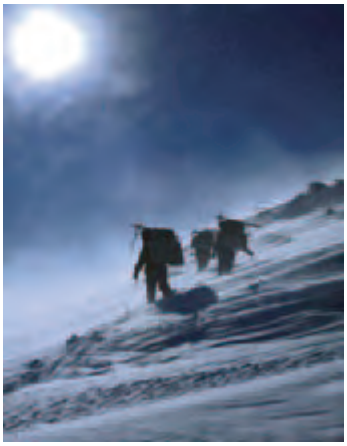
経歴

1944 年北海道上川町に生まれる。13 歳のとき初めて愛山渓から大雪山（永山岳）に登る。1980 年厳冬期の記録としては初めて、大雪山国立公園を石北峠から富良野岳まで 20 日間かけて縦走。1972 年大雪縦貫道路問題を契機に自然保護運動を始め、以後、石狩川の公害問題や大雪・日高・知床など北海道の開発問題に取り組む。大雪山講座「ひぐま大学」を主宰し、石狩川の野生のサケ回復運動に取り組んでいる。現在、大雪と石狩の自然を守る会代表。前北海道自然保護連合代表。

いい扉を開けたと思う。東川町の大雪山に関する文献書誌発信事業である。大雪山は傑出した自然と類を見ないスケールによって、昔から世の耳目を引き人々との深い関わりを生んできた。それだけに関係する資料も多い。大雪山系に係わる論文やレポートだけでも、少なくとも 2700 編は超えており、それ以外のジャンルの歴史や文学、記録や記事等々まで含めるとなると、その数はおそらく膨大なものになると思われる。そのすべてを収集し網羅することは、不可能とは言わないまでも至難の業である。

およそ関心のない人にとって、目録の類いほど味気ないものはない。だが、必要とする人にとってこれほど貴重で味わい深いものはない。大雪山に関する情報のまとまった拠点がないため、ネットで探し、図書館にあたり、個人の情報に頼るしかない現状を考えると、このような企画が進むこと自体がすばらしい。

だが、東川構想のもっとすばらしいところは、利用者の便利さを図ることよりも、散逸し消滅しかかっている大雪山の知的遺産を保全して後生に残そうとしていることにある。同時に地域おこしの新たな財産にしようとしていることにある。大雪山の旧来的な活用法は、ハード的な開発であった。けれどもこれは、ソフト面から大雪山を活用しようという新しいスタイルの試みである。



名もない人々の地域ならではの書誌も集められ、要約文もつけられて発信されるというから、これは何かの折りに訪れたいと思う人は増えるにちがいない。何よりも地元の人がこの財産を積極的に活用すれば、今度は地元の人自身が財産になる。

この財産を生かして地元の高校に、大雪山の自然遺産学科を設けてネイチャーガイドの養成を図れば、若者の定着にも大雪山の自然保護にも役に立つ。東川町は大雪山の恵みをもろに受けて水も米もおいしく、景観や環境に優れるところから、移住する人も増えてこよう。この試み、いまは東川からの優しいささやきだが、やがて東川町を大雪山のメッカとする大きなエネルギーに変わるように感じてならない。

「大雪山昆虫誌」をまとめて

50 周年登山、2011 年８月、黒岳山頂

保　田　信　紀

経歴
1941 年生まれ。広島県呉市で育つ。元大雪山国立公園層雲峡博物館館長・学芸員（現層雲峡ビジターセンター）

1961 年７月、夜行列車と青函連絡で２夜を明かした３日目の夕方、初めて大雪山山麓の層雲峡に訪れた。大雪山での滞在はわずか 1 週間であったが、昆虫少年の頃からのあこがれであった高山蝶のウスバキチョウにも出会うことが出来たし、何よりも大雪山の雄大な青い連なりは私の心を永遠に捉えてしまった。

ウスバキチョウ

その後、上川町に移住した。幸い層雲峡登山事務所、層雲峡博物館に職を得ることができ、大雪山国立公園の自然の紹介や昆虫相調査のために、それこそ公私ともに豊かな自然の中で長年を過ごすことができた。

しかし停年間近になって、残念ながら体調を崩してしまい、これまでのような山岳地での調査が不可能になってしまったので、長年の懸案だった、「大雪山昆虫誌」のまとめにはいることになった。

基本方針としては、これまで収集していた既発表の資料から大雪山産昆虫目録を作成することであった。その結果、1922 年以降、2012 年度までの 91 年間に、短報を含めて 2295 編を超す報告がなされていることがわかり、大雪山国立公園とその一部周辺部から 25 目 414 科 6538 種の昆虫類が記録されていることが判明した。これは、現在北海道全地域から記録されている昆虫類の約 57％以上が記録されていることになる。さらに私自身も長年の調査研究で多くの新種や日本未記録種の発見に恵まれ、大雪山の高山性フアウナに新知見のいくつかを加えることができた。大雪山の昆虫相の大きな特徴は、日本最大の高山帯にふさわしく、高山蝶のウスバキチョウで代表される氷期の落とし子ともいえる高山性昆虫が日本で最も豊かに生息していることである。

こうして現在「大雪山昆虫誌」をまとめてみると、やはり意図していたほどの充実した内容には至っていないと感じている。例えば、有名な大雪山には古から全国各地から多くの研究者や同好者が訪れており、その成果や情報などの発表された文献も全国各地に散在していると思われ、多くの貴重な文献も欠落しているかもしれない。さらに「大雪山昆虫誌」としてまとめたわけであるが、一部の分類群を除いては、情報不足と著者の不十分な能力のために詳しい現況を解説することが出来なかった。これらのことについては将来の研究にゆだねたいと考えている。そのため「大雪山昆虫誌」が今後の大雪山昆虫相のさらなる解明のための基礎資料の一つとなれば幸いである。

旭岳のギンザンマシコ

大　橋　弘　一

経歴

1954 年東京都生まれ。札幌市在住。野鳥写真家。新聞・雑誌連載、テレビ・ラジオ出演、執筆活動等、生態系保全を訴え多彩に活動。その一環として 2003 年より北海道自然雑誌『faura』編集長を務める。おもな著書に『庭で楽しむ野鳥の本』『散歩で楽しむ野鳥の本』（以上、山と溪谷社）、『北海道野鳥ハンディガイド』『北海道野鳥観察地ガイド』（以上、北海道新聞社）、『鳥の名前』（東京書籍）など。（公財）日本野鳥の会・SSP 日本自然科学写真協会各会員。早大法学部卒業。

ハイマツの梢にとまるギンザンマシコ（雄）。鮮やかな紅色の姿は存在感抜群だ。2014年7月、旭岳姿見の池自然探勝路で撮影

今から 25 年ほど前のこと。野鳥写真家としての活動を始めて間もない頃の私は、毎年 7 月に大雪山系旭岳での取材を定例化しようと考えていた。目的はギンザンマシコだ。

高山の鳥を撮るためには高山へ行かなければならない。しかし、つらい登山はできるだけしたくない。そう考えると、ロープウェイで一気に標高 1,600m のハイマツ帯へ行ける旭岳が最も効率的に（本当は「楽をして」だが）高山の鳥を撮影できる場所だと思えた。

日本で「高山鳥」と呼ばれる鳥はライチョウ、イワヒバリ、カヤクグリ、ギンザンマシコの 4 種しかない。ホシガラスやサメビタキなども含める考え方もあるが、高山の厳しい自然環境の地だけを子育ての場と定め生命をつないでいる鳥を一般に高山鳥と呼ぶ。

これらの高山鳥のうちでも最も撮影のチャンスが少ないのがギンザンマシコである。日本では北海道でしか繁殖せず、とにかく個体数が少ない。大雪山系にいることははっきりしていても広大なハイマツ帯のどこに現れるかわからない。登山道以外に足を踏み入れることのできない山岳地帯にあって、出会えるかどうかは運次第だと思われた。

日本で初めて大雪山系でギンザンマシコの繁殖が確認されたのは 1975 年のことだという。文献でそのことを知って以来、当時東京在住だった私にとってギンザンマシコは北海道を象徴する存在として憧れの鳥になった。その赤く大きな姿に出会えば登山の疲れも吹っ飛ぶという話を聞き、まだ見ぬギンザンマシコへの思いは膨らむばかりであった。

ついに旭岳で初めてギンザンマシコに出会えたのは 1991 年 7 月。目論見通りロープウェイに乗り姿見の池の遊歩道を歩いてのことだった。小鳥と呼ぶには大柄などっしりとしたその姿はまさに北海道の高山の申し子に見えた。ノゴマやカヤクグリの個体数が多いことにも感動した。以来、ギンザンマシコと夏の旭岳の鳥たちは私の心を捉えて離さない。

遠くにあってほしい場所、隔絶された白い世界・旭岳

柏　　澄　子

経歴
1967年千葉県千葉市生まれ。山岳ジャーナリスト。主な著作は『ドキュメント山の突然死』『山登りの始め方』など。ほか、webや山岳雑誌に山岳ガイドやクライマーのインタビューを連載、クライミングのフィルムを作るチームに参加など。この秋は若手クライマー達とネパールヒマラヤへ向かう。
https://www.facebook.com/sumiko.kashiwa

初めて東川町を訪れたのは、10年ほど前の冬。羽田空港から新千歳に飛び、列車で北上した。旭川駅から旭岳温泉に向かって、宿泊者用の無料バスが出ていたのには驚いた。スキー板に登山道具と大荷物を抱えた私たちは、旭岳温泉のバス停に降り立った。雪に閉ざされ、音のないとても静かな土地だった。以来、毎冬のように仲間と一緒に訪れ、旭川空港からレンタカーも使うようになった。するとあんなに遠く感じた旭岳温泉が、東京の自宅から正味3時間で到着することがわかり、それにも驚いた。しかしそれでも、旭岳が遠くの土地である印象が変わらなかったのは、そこは雪一色の世界であり、一切の雑音が断たれ、登っては滑り、登っては滑り、美味しいごはんを食べて温泉に入って寝て、そしてまた登っては滑ることだけを繰り返す、私にとっては極楽のような場所だからだろう。冬になると旭岳へ行くことを繰り返す私を見て、ある人は言った。「強風になるとロープウェイは止まるし、効率よく滑れないでしょう」。そんなことはまったく気にしていなかった。荒天で山に上がれないのは当然。そんなときは、温泉三昧読書三昧の罰が当たりそうなほど贅沢な時間を過ごしていた。宿のご主人が、クロスカントリースキーコースを整備していることに気づいたのは、2度目の冬だった。ワールドロペットマスターでもあるクロカンの専門家であることや、トップ選手たちが集まることも知った。私がクロカンを始めたのはそれから5年以上経ってから。山に上がれない日はクロカンを楽しむようになった。

最近になって東川町の方々に文献書誌集のことを教えていただき、古今東西問わずさまざまな分野の専門家が旭岳を目指し、通い続けたことを知った。そうかみんな惹かれるのかと思った。日本中の山を歩き回った田部重治や大島亮吉も旭岳を愛した。高山蝶の研究家であった田淵行男が成果を残したのは北アルプスだけではなかった。『大雪の蝶』という分厚い写真集がある。雪の結晶について研究した中谷宇吉郎も、この極寒地を貴重なフィールドと認識していた。穂高岳を描き大成した足立源一郎の作品には、大雪山もある。これはまた、読書の楽しみが増えた。

個人的なことであるが山の近くに仕事場を持ちたいと考え、この冬はあちこち好きな土地を移動しては、そのことを考えている。さっそく12月に東川町を訪れたが、すぐにここは移住先ではないとわかってしまった。私にとっては、初めて旭岳温泉のバス停に降り立った時の印象が強すぎるのだ。自分が住むところから時間をかけてやってきて、日常から隔絶された特別なときを過ごす場として、とっておきたい。そんな贅沢な我儘が理由だ。東川町にある旭岳と旭岳温泉は、私にとっては近しくて遥か遠くにあり、そして遠くにありながらも近しく思える場所である。

大雪山を聖地として

塩　谷　秀　和

経歴

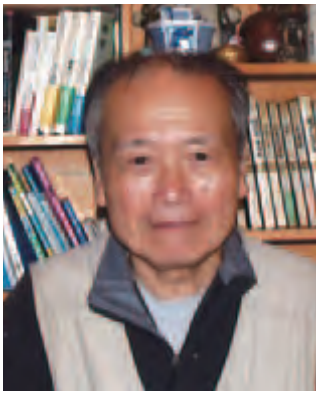
1949 年銭函に生まれ、手稲・函館・森町で育つ。17 歳で放浪の旅を始め、12 年間に亘りヒッチハイクと野宿を重ね、北海道から沖縄を何度も往復する。各地の森や沢を歩き山に登り、沖縄の島々では海に潜り魚を突く。1988 年「大雪山ネイチャーガイド」（山岳・自然ガイド）を始める。著書「大雪山の四季」（実業之日本社 1998 年）他。北海道山岳ガイド協会副会長。東川町在住。

初めて大雪山に登ったのは、放浪の旅を始めて 2 ～ 3 年たった頃だろうか。記憶も定かではないが広々とした高山帯は、我々の祖先が歩いてきたかもしれない、シベリアのツンドラ地帯と同じように感じられた。遥かな昔を思い出すような、懐かしいような感情が込みあげ、今にも霧の中からマンモスが現れるのではないかという思いに捕らわれてしまった。知床から西表島までの山や森を歩き回ったが、これ程のスケールで野生が残っている場所を私は知らない。

40 数年前の大雪山はまだ登山者も少なく、広大な風景を独り占めしているような気分にさせられたものだ。その頃の私の登山は計画もなく、山に居られるだけ居るというもので、避難小屋に残していった食料を頂いたり、小屋を修理したりというような気ままなもので、食料が尽きたら買い出しに下山する事もよくあった。山頂には行ってみるが、目的はできるだけ多くの時間を山で過ごすということで、ただ景色を眺めて座っているだけでもよかった。登山道を外れて偵察に行ったりもしたが、足跡を残さないように気を使ったものだ。道内の山を登り歩いたが、最も多く登ったのはやはり大雪山ということになる。いつしか、暮らすのなら大雪山麓でと考えるようになり、すでに東川町民となって 35 年もたってしまった。大雪山麓で暮らし始めた時から、私にとって世界の中心は大雪山であり、日々仰ぎ見る聖地として大雪山は鎮座している。百年前に大雪山の土地払い下げをしてはいけない、国家が霊域として保護すべき土地であると喝破した人物がいる。

大雪山を汚すことなく後世に残そうという熱い思いが人々に引き継がれてきたに違いない。意識するしないにかかわらず、大雪山麓に暮らす人々にとって大雪山こそが聖地なのだ。人間が自然界の頂きにいるとの思いは錯覚にすぎない。圧倒的な自然の前で人はそれを自覚するしかないのかもしれない。人は自然に属しているのだから。

「大雪山讃歌」を出版して



高　澤　光　雄

経歴
1932年江別町字美原で出生。1941年に札幌郡白石村に移住。戦後、学校の遠足で札幌の円山に登り山の醍醐味を知る。高校に進学し山好きな先生に引率され山に登る。1951年に丸善㈱札幌支店に入社。1968年に札幌山の会を組織し登山技術を研修しながら険悪な山を目指す。深田久弥、今西錦司らの知遇をえて北海道の山に同行。刺激を受けながら「北海道登山史年表」の調査作成に没頭、数々の講演を行う。2015年『大雪山讃歌』四六判229㌻、北海道出版企画センターより出版。

東川町が大雪山の資料を収集し、平成26年3月に「大雪山から育まれる文献書誌集」を出版された。そこに拙著が5冊も列記され、「愉しき山旅」から引用し、「高校3年の旭岳登山で松山温泉の佐藤門治に助けられ、勇駒別温泉で工藤虎男、速水潔らと知り合うなどさまざまな山仲間との出会いを書いている」と評され驚いた。

その時に世話になった方は忘れられない。その恩義に報いようと、収集してきた大雪山の古い絵葉書や諸資料を東川町に寄贈した。昨年は国立公園指定から80周年の節目であり、私は山岳雑誌などに発表してきた大雪山系の紀行文を纏め「大雪山讃歌」として出版することにした。

序文は東川町長の松岡市郎様、巻頭は「写真で見る探検・登山・保護への歩み」として、古い写真の一部は東川町から提供された。寛政2（1790）年から最上徳内、間宮林蔵、松浦武四郎らが踏査・測量で奥地へ入山。小泉秀雄、大島亮吉、大町桂月らが続々と大雪山に登り名文を遺す。

昭和26年9月26日に襲った台風15号で、大雪山一帯の樹林が大被害を被り、林道は奥地へと開削された。それが登山道となり石狩岳やトムラウシ山などは容易に登れるようになった。旭岳と黒岳にロープウエーが敷設され、登山は大衆化された。

最高峰旭岳に測量技官館潔彦が一等三角点を設置したのが明治33年9月。平成12年に測量記念百周年記念イベントが東川町公民館で催され、所蔵品を展示して「旭岳測量前後と館潔彦にふれて」を講演したのでこれも載せ、館の北海道での測量の足跡を網羅した。

主な紀行文だが、記載年月は登った時のもの。昭和25年7月「初めての大雪山」、36年7月「勇駒別温泉から旭岳を経て愛山渓へ」、37年3月「冬の十勝岳」、48年9月「遭難寸前の大雪山クワウンナイ川遡行」、49年12月「正月の永山岳、愛別岳、当麻岳」、平成3年9月「紅葉の東大雪山縦走」、4年9月「十勝・大雪縦走記」、8年7月「高山植物の咲き誇る北大雪の比麻良山」、15年6月「高山植物盗掘で入山が厳しい扇沼山」、24年10月「然別湖の白雲山」など。未踏だった通称「オッパイ山」の西クマネシリ岳は、アイヌ伝説を詳記した山本多助翁の著書を調べ、昨年9月末に取材で登ってきた。人物伝は「雪城山と大島亮吉」「初期の大雪山案内人として活躍した成田嘉助翁」「大雪山天人峡温泉を繁栄させた佐藤門治の俳句」「大雪山登山史年表の詳録者吉田友吉氏を偲ぶ」など。

大雪山に抱かれて

春　菜　秀　則

経歴
北海道胆振管内むかわ町生まれ。ぶらり放浪の末、大雪に住み着く。ロッジ・ヌタプカウシペを経営。

2018年5月31日逝去。この寄稿は2015年3月発行の第2集に掲載したものを再掲。

旭岳に通って四十六年、ほとんど半世紀になってしまいました。そして、此処に住み着いて三十五年も経ちました。日々、自然の息吹が漂っている中で生活出来るなんて！

友達と旭岳スキー滑降の時に、必ず立ち寄るところがあります。赤エゾ松の木々に囲まれた湿原、天女ケ原です。深い森の中で青空を見上げ、「直行さんの世界だ！」と叫ぶのです。坂本直行画伯の『冬の針葉樹林（天女ケ原にて）』は、まさに此処で描かれたのです。

旭岳温泉がまだ勇駒別（ゆこまんべつ）と呼ばれていた頃、遅い秋の寒い早朝、古ぼけた僕の店の前で、一人のお爺さんが、折りたたみの椅子に座って旭岳をスケッチしていました。温かいコーヒーを一杯持って行くと、カップで両手を暖めながら、

「あなた、良いところに住んでいるね！本当に良いところに！」

この方は、ヒマラヤの画文集で有名な藤江幾太郎画伯でした。僕は、その言葉を生涯忘れることはないでしょう。

裾合の真ん中に……中岳温泉ゆ～らゆら～と唄う「裾合のうた」かの有名な愛山渓倶楽部の歌「われらの大雪山」北大山岳部の「山の四季」等、大雪の山々を唄った歌は数々ありますが、僕達の仲間も、時間を掛けてマニアックな曲を沢山書いています。トムラウシをたたえたり、霧の中の高山植物に心揺れたり、甘い山のにおい、重い荷物に喘ぎ、汗の臭いまでして来ます。

天女ヶ原

僕達のテーマでもある此の山懐の中で、自然と一体となって、笛を吹き、ギターを弾き、ラッパを鳴らし、机を叩き、手拍子を取り、踊り狂って、時には盃を交わし、語り合い、そして又唄う。これが「大きな森の小さな音楽会」なのです。

随分昔の話ですが、勇駒別川に掛かる橋の上や草むらで、夢遊病者のように試験管を空中にかざして、空気を採集している人がいました。時には取り出した椅子に腰掛けておもむろにヴァイオリンを奏でます。又立ち上がって踊るように瓶を振りかざし…、後で分かったのですが、彼は空中に降る宇宙線を集めていたのです。

このように大雪山には色々な人々が集います。既に絵や画文集、歌、詩、などたくさん出回っていますが、大雪山に対する想いは、形をかえて、世の中にどれほど出ていることでしょう。

移住者の体感時間

林　　拓　郎

経歴

1961 年 広島県呉市出身。フリーランスライター。大学入学をきっかけに上京。在学中から編集者としてバイク雑誌制作に携わる。20 代後半でスノーボードに出会ってからは取材の場を雪山へと変更。以降、スノーボードを主軸に雑誌記者として活動。近年は雪山を歩いて滑る、山スノーボーディングに傾倒。滑る楽しさと自然の豊かさとを融合したストーリーの描き出しに情熱を注ぐ。2014 年、東川町に移住。

住み慣れた東京を離れ、東川町に移住してきて約 1 年。20 年以上にわたってスキーやスノーボードの雑誌制作をお手伝いしてきましたが、取材の中で巡り会った風景や雪質から、いつかは北海道へという想いを抱いてきました。行くならスキー場の多いニセコか、仕事の利便性を考えて札幌か。家族とも宝くじが当たったら、という夢を思い描くのと同じわくわく感を持って移住先を考えてきました。けれど話し合ううちに、どうせ住むなら北海道らしいところがいい。玄関を出たら大地が広がり、遙か彼方に雪をかぶった山が連なるようなところがいいと、望みは高まる一方。やれ星のきれいなところがいい、美味しい水が飲めるところがいい。もちろん冬には滑りたいのだから、いい山が近くになければいけないと、理想を語り合うのが日課になっていました。

そうして先入観を取り除いて地図を眺めてみれば、北海道の真ん中には大雪山系が横たわっています。しかも旭岳は北海道最高峰。その標高と極限まで乾いた雪を意識し始めたとたん、滑り手としての気持ちは一気にこの地へと引き寄せられていきました。おりしも、2013 年のモンベル高輪ビルの落成式に出席させていただいた際、松岡東川町長のお話をうかがう機会に恵まれました。そこで町長は「東川町には上水道がありません」とお話しになったのです。大雪の山が雪と雨をたたえ、その水が暮らしの中に沸き上がってくる全戸地下水の町。そのエピソードが後押しして、我が家の移住先は訪れたこともなかった東川町へと絞り込まれました。そうなれば、あとは実行あるのみ。居と住民票を移すまで 1 年かからなかったのは、仕事する場所を選ばないフリーランスの強みだったかもしれません。果たして移住してみれば、山も水も町も人も、すべてが素晴らしく想像以上でした。何よりも四季を通じて大雪の山々はもちろん、晴れれば遠く十勝岳連峰まで見渡せる。夏の爽やかな風に、秋の愁いを含んだ夕焼けの光に、冬の凜と澄み切った朝の気配に、そして早春のまろみを帯びた陽光に浸りながら、この山の美しさに触れるたびに、柔らかな幸福感が胸の内側に沸き上がってきます。

この一年、毎日のように来て良かったねと語り合う生活は、驚くほどの早さで過ぎていきました。北海道の生活は東京に比べれば遙かにゆったりしています。けれど、幸福に満たされた時間は思っているよりもスピーディーです。移住初年度。東川での生活は、今まで味わったことのなかった速度感で春を迎えました。

遥かなる山稜

本　村　勝　伯

経歴

1973年生まれ。幼少の頃から大雪連峰を望み育つ。スキーに没頭した後、13歳頃に出会ったスノーボードに夢中になる。その後、ハーフパイプのプロ選手として活動を行う傍ら山岳地帯に興味を抱き徐々に活動の場を移す。2003年 FIELD EARTH 設立。スノーシェルを製作後、世界初の立体形状スキーやスノーボードを製作。2011年 株式会社 BAYON CREATIVE 設立。同社 代表取締役 http://www.field-earth.com

BAYON CREATIVE

30代の始め「遥かなる山稜」と題した言葉で綴った写真展を開催した。それまでに、四季折々の大雪の山を撮り溜めておいたフィルム写真と、その頃強く感じていた自然への想いや青き悩みで重ねた言葉の個展は、当時の自分と向き合うには必要だったのかもしれない。様々な想いから生まれる悶々とした気持ちの答えを探しに日々向かった大雪の山々。そして、これから続くであろう人生とを重ねた想いが写真展の題名に込められていたものだった。

幼少の頃から両親と親しんだ山旅からはいつしか離れ、また、再開した頃には冬季登山や山岳滑走など挑戦の場として生きる意味や価値を確認する対象となっていた。多くの経験を重ねる時間は自身の考えをより深く強く形成するには難しくない。実際の体験からのみ実感できる感覚は普段の生活にも生き続けている。当時は人間社会の矛盾や人が自らの行為で自然や生活を脅かし、豊かな気持ちを持ち難くなっていることに強い疑問を抱いていた。

自然環境や人の意識がより良い方向に向かうには、自然に触れ感じ想うことが大切なのではないかと考えるようになる。また、押し付けの知識では本質も伝わらない。頭で考えるのではなく感じること。純粋に楽しむことから生まれる気持ちを願い、自然と繋がることのできる「ひと・もの・こと」を主に出来ることから始めようとの想いから、FIELD EARTHという名前に山のロゴを作り活動を始めた。

20代後半の一人旅。原始ヶ原から愛山渓への山旅は強く心に刻まれている。多くを感じたこの地から伝えるため、ブランドのロゴは実際に歩いた大雪十勝連峰をシルエットにした。また、当時、口ずさんでいた「フィールドアース」の言葉に込められている「多くの方々が人間社会だけではなく、その外側の世界の自然に触れることが少しでもできるのであれば、きっと、全てが良い方向へ向かうはず。」との想いをそのままにブランド名とした。

ある穏やかな秋。その日は美瑛富士避難小屋でのテント泊だった。夕陽色に染まる石垣山の稜線まで登る頃、とても優しい風が背中から吹き抜け、黄金色の草花を揺らしながら遠くオプタテシケ方面へと流れていった。その時、ふっと、「この稜線を流れる優しい風のように人生を歩んでいきたい。」と感じた。挑戦の場として向かっていた山での新たな想い。そんな時に浮かんだ言葉が「遥かなる山稜」だった。

あの頃抱いていた想いは、大雪山の大きな懐で様々な感じ方や価値観を育み自身の生き方や考え方を形成させた。今でも多くの思いを感じさせてくれている大雪連峰は心の中に存在し続けている。

「われらの大雪山（だいせつざん）」（愛山渓新聞社々歌）の誕生まで

大須賀　羊一

経歴

1931年、野付牛町（現・北見市）生まれ。1954年、北海道学芸大学旭川校（現・教育大学）卒。遠軽・紋別・旭川にて高校在職43年（音楽担当）。その間、山岳部顧問、高体連山岳部専門委員として生徒を指導。登山を始めたのは1952年。愛山渓新聞には1958年より学芸部長として参加、第3代社長を務める。「大雪山山の村」に改組後は1972年より議長を23年間、1994年より第9代村長として13年間在職。2007年、村民高齢化により「山の村」は愛山渓新聞から通算50周年にて閉村。

その昔、国道から20㌔、大雪山の山懐に抱かれた冬の愛山渓は陸の孤島であった。その愛山渓での年越しを目指して冬山の重装備で深雪を踏み分ける山男たちがいた。1957年、重装備の中に中古の謄写印刷機一式、インク・ザラ紙まで忍ばせて現れたのが、後に「重い神々の下僕」で直木賞の有力候補となった三好文夫だった。本邦初の山岳新聞を発刊しようと言うのである。居合わせた山男たちも忍（たちま）ちこれに同調し、1957年12月29日「愛山渓新聞」第1号の発刊となった。発行母体名は「愛山渓新聞社」。印刷機一式所有の資本家：三好文夫が当然のように初代社長となった。

社歌「われらの大雪山」は、詩人小野寺与吉（第2代社長）が書き下ろし、1961年発行の第23号に掲載された。初めてガリ版で描いたと言う坂本直行画伯の「雲井が原から」が紙面の上半分を飾った。第1節「愛山渓」、第2節「旭岳」、第3節「トムラウシ」、第4節「大雪山」と主題別に描かれた「われらの大雪山」は、集う社員・山男一同の共感を呼ぶ詩であった。

- 第1節　“オブジェの谷”は、後の名誉村民根守悦夫画伯が既に紙面を飾っており、“粉雪ふんでラッセル”はスキーを履いていても胸まで埋まる軽い雪に悩まされたラッセル。“雪煙なびく頂き”愛別岳は愛山渓のシンボル。（“粉雪ふんで”は後に“木洩れ日受けて”に改変）
- 第2節　“噴煙白い姿見池”で旭岳の頂きに谺（こだま）を響かせたいと思わない山男はいるだろうか？
- 第3節　銀杏が原の岩銀杏の白い花、音をたてて流れる清冽な雪水、昏（く）れゆくオプタテシケ～十勝岳のやまなみ…は正に大雪山の白眉。
- 第4節　狭い深い碧空（あおぞら）、一面の紅葉と新雪の峰々の対比は、沢のぼりの醍醐味。

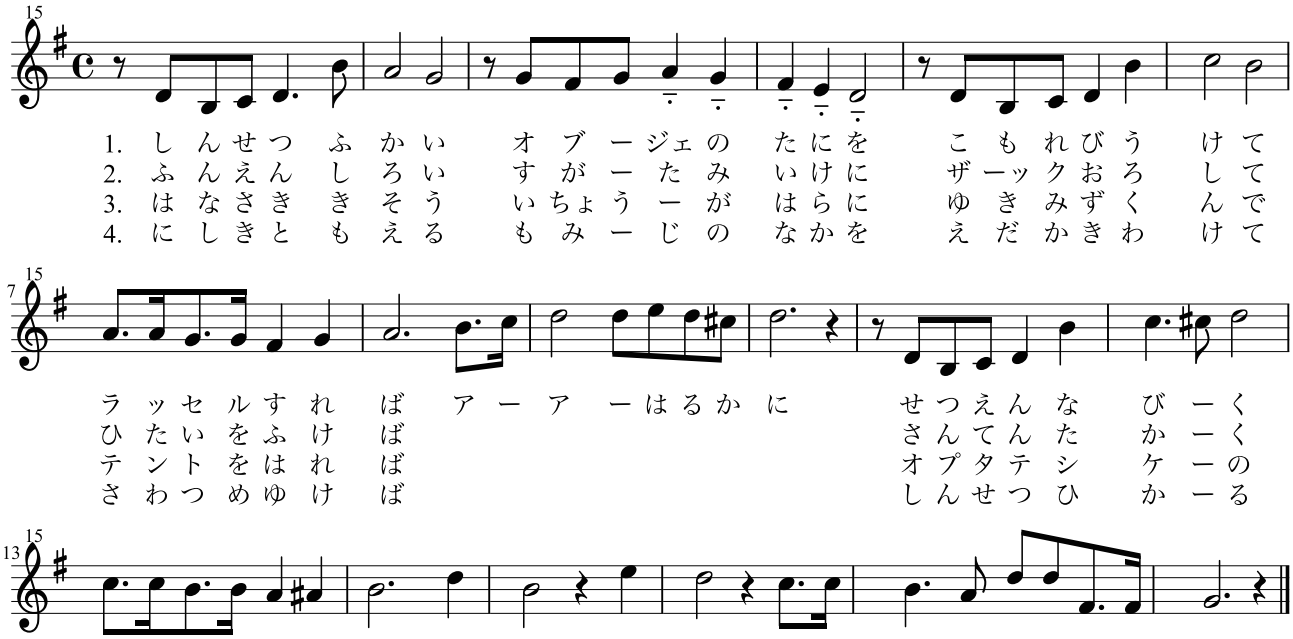
さて、新聞第25号発刊数日前の新年大宴会中、当時学芸部長だった私は「社歌を作曲せよ」との至上命令により、通称社屋と呼ばれていた新聞制作所（10号室）に軟禁された。廊下を隔てた食堂からの放歌高声に「出来た！」…「歌ってみろ！」…。歌謡曲「新雪」のメロディで「新雪深―い…」と歌い始めると「駄目だ！戻れ！出来るまでは飲ませない！食わせない！」と再び社屋に監禁され、何とか書き上げた曲が承認され、宴会に戻ることが許されたのだった。

社歌として楽譜付きで紹介されたのは1962年1月5日第25号であった。何故か発想標語「明るく活き活きと」の後に続けた「鶺鴒（せきれい）が飛ぶように」はカットされた。なお「大雪山」は、その雄大さを思わせるためにも、必ず「だいせつざん」と歌うことが作詞者小野寺与吉のこだわりである。

昭和 36 年 8 月 1 日発行の「愛山渓新聞」№23。農民画家、坂本直行が『ガリ版で絵を描いたのは初めて』と言った「雲井が原から」が紙面の半分を占めた。「われらの大雪山」の歌はこの絵の下に掲載、お披露目された。

われらの大雪山（愛山渓新聞社歌）

作詞　小野寺　与吉
作曲　大須賀　羊一



1、
新雪深い　オブジェの谷を
木洩れ日受けて　ラッセルすれば
ああ　遙かに
雪煙なびく頂きは呼ぶ
ヤッホー　我等の愛山渓

2、
噴煙白い　姿見池に
ザック降ろして　額をふけば
ああ　遙かに
山巓高く　谺は招く
ヤッホー　我等の旭岳

3、
花咲き競う　銀杏が原に
雪水汲んで　テントを張れば
ああ　遙かに
オプタテシケの　山脈昏れる
ヤッホー　我等のトムラウシ

4、
錦と燃える　紅葉の中を
枝掻き分けて　沢つめゆけば
ああ　遙かに
新雪光る峰々は呼ぶ
ヤッホー　我等の大雪山

「愛山渓新聞社・大雪山　山の村通算40周年記念誌」から

大雪に魅せられて　～父、戸川幸夫に流れていたもの

戸　川　久　美

経歴

認定 NPO 法人トラ・ゾウ保護基金（JTEF）理事長。http://www.jtef.jp/
イリオモテヤマネコを発見した動物作家、戸川幸夫の次女。父の動物文学を児童書へリライト、解説などを行う。1997 年にトラ保護基金を設立。2009 年トラ・ゾウ保護基金として新たに NPO 法人を取得し、絶滅に瀕するトラ、ゾウ、イリオモテヤマネコの保全活動を行う。インドやケニアに出向き、現地の協働パートナーと共に現地の 保全対策、違法取引防止、国内での普及活動に尽力。西表島でも交通事故からヤマネコを守るために「やまねこパトロール」、島の全小中学校 で「ヤマネコのいるくらし授業」を行っている。
青山学院大学文学部英文科卒。YMCA 東京日本語学校講師。

あっという間の出来事だった。父が家で指圧治療を受けていた時、飼っている日本犬のコマが庭から指圧師さんに向かって飛びかかったのだ。咬む犬ではなかったのだが、正面から飛びかかられた指圧師さんはよろけて腰を抜かした。私が子どもの頃のことだ。

父、戸川幸夫の愛する犬は日本犬であった。土佐犬のような大きい犬ではなく、柴犬より少し大きい中型の四国の猟犬で２ｍ位の柵も身軽にらくらくと飛び越えていた。家族には甘えるが外の人には決して心を許すことのない日本犬が父の大のお気に入りで、私が生まれてから父が病気で倒れるまで、ずっと家には四国犬や北海道犬などが何頭もいた。

普段、父は２階の父の部屋で指圧を受けるのだが、その日は春の初め、やわらかい風が心地よかったので１階の部屋で窓を開け放ち庭を眺めながら治療をして頂いていたのだ。コマにしたら、見知らぬ男が大切なご主人さまの体に乗って襲いかかろうとしている一大事だったのだろう。父はコマを叱り部屋から追い出し指圧師さんに謝っていたが、内心は嬉しかったにちがいない。

父の作品には犬がよく出てくるが、大雪山を自由自在に走り回る「牙王物語」の主人公、オオカミとの混血の「キバ」のように野生の匂いをぷんぷんさせる犬で、ペットの犬ではない。家で飼っていた犬たちにも父は決して「お手」や「お座り」など覚えさせたことはなかった。東京で飼うにしても、野生の世界で闘うような日本犬の本能を失わせては犬たちに失礼だと思ったのだろう。

北海道から西表島まで父は日本の秘境を訪ね歩いた。子どものころから動物好きではあったが、父の関心は動物１頭１頭の個体ではなくその種が生き続ける世界にあった。生きものたちの住処が狭められる開発や、周囲の人たちの心なき振舞には生きものたちの気持ちになって怒り、哀しんだ。人の手でオオカミを北海道から葬り去った歴史には心を痛め、作品の中でオオカミに詫びた。

そんな父の思いを私が受け継ぐと決めたのは、父が脳梗塞で 10 年間車椅子生活になってからだ。父が作品を通して訴えたかったこと、それは私たち人間にも大いに関係のある自然環境を守ることである。自然は穏やかな美しい時ばかりではない。時には厳しく人間を試すときもあり、私たちは人間の小ささを思い知らされる。人間は大自然を作れない。だからこそ、今、残存する大自然には、お邪魔させていただくという謙虚な気持ちで向かいたいと思っている。

大雪山スキー滑降、気圧計で命拾い

前　田　光　彦

経歴

カムイスキーリンクス支配人。
1940 年、函館生まれ。函館西高で山岳部。三年先輩に歌手、北島三郎がいた。1967 年、全日本スキー連盟公認指導員、1968 年、公益社団法人日本職業スキー教師協会設立発起人、山岳スキーのガイドを始める。1979 年、富良野プリンスホテルスキースクール、1981 年から神居山一帯の調査を始め 1984 年 12 月、カムイスキーリンクスオープン、35 年目となる。

大雪山に初めて登ったのは函館西高一年生の夏休みでした。十勝岳から旭岳まで行くつもりでしたがオプタテシケの下で三日間、強い雨と風が続き、やむなく白銀温泉へ下山することになりました。それから約六十年が過ぎた昨年、私と妻を息子の岳哉がガイドしてくれて、大雪山の縦走を決行しました。六月末から七月初めにかけてオプタテシケ、コスマヌプリ、三川台を経由してトムラウシ、白雲岳を最後の泊りとして六泊七日、年齢的にも良い山行となりました。

若い頃の夏山登山は、大雪山の峰々のてっぺんからスキー滑降するための綿密な事前調査が目的のことが多く、残雪を滑りながら冬本番のコースを確認していったものです。

冬の大雪山はすごく厳しいのですが晴れた時の美しさは格別です。十勝岳はスキーに最適の斜面もあり、写真に撮るとまさに「絵になるところ」が多いのです。私は、多くの山々の山頂から滑りました。アイゼン、ピッケルで登ってくる登山者の横をカリカリと音をたてて滑って、その時泊まっていた十勝岳温泉の凌雲閣で「あんなところをスキーで滑っちゃだめだ！」と怒られてしまいました。それ以来、気をつけていることとして、登山者の登るところ、特に人のいるところは滑らないようにしております。

冬の大雪山でスキー滑降のとき、カメラマンと晴天を待つために、雪の降っているうちに山に入り、テントで何泊かしたことがあります。特に思い出してしみじみ良かったと思うことがあります。それは、ピウケナイ沢の最上流部にテントを張り、泊まっていた時のことです。持っていた気圧計が急に下がり出したので、これは危ないと思い、すぐにテントをたたんで樹林帯まで下り、雪洞を掘って、そこで強風をしのぎました。晴れてからテントを張っていた辺りに行ってみて、あまりの様変わりにびっくりしました。雪はすっかり吹き飛ばされて無くなり、岩がむき出しになっていました。この時の風は旭岳ロープウエーの屋根さえ吹き飛ばしてしまったのです。当時としては気圧計が頼りの時代で本当に助かったと思い、今でも自分の部屋に大切にしてあります。

旭岳山頂より

これからはもう十勝岳や大雪山へ登ってスキーをすることはないかもしれませんが、スキーの思い出を本当にたくさん作っていただいた十勝岳連峰、大雪山には感謝の気持ちでいっぱいです。

ヒマラヤと大雪山

梅　沢　　俊

経歴

1945 年、札幌市生まれ。北海道大学農学部農業生物学科卒業。登山を続けながら大雪山のお花畑など北海道の野生植物の写真を撮影。著書は「花の散歩道　正・続」（北海タイムス社）、「花の山旅①　大雪山」（山と渓谷社）、「北海道のシダ入門図鑑」（北海道大学出版会）、「新版　北海道の高山植物」（北海道新聞社）など花や樹、登山ガイド関係が多く、「北海道夏山ガイド」（北海道新聞社）など共著も多数。最近はヒマラヤの山と花の撮影など海外での取材活動を続けている。

ずいぶん通ったと思う。大雪山とのお付き合いは大学生時代からだから、もう 50 年になろうか。年に 2 ～ 3 回登った年もあるので通算 150 回は超えていることだろう。私の登山の主目的は写真撮影であり、四季を通じて訪れているが、カメラを携行してもほとんど撮影しないで下山することもしばしばあるので、大雪山の魅力は被写体としてばかりではないような気がする。夏が近づくと毎年大雪山にやって来て滞在を決め込む道外の友人がいる。どうやら大雪山に接していないと落ち着かないようなのである。私も含めて“大雪中毒患者”といってよいかもしれない。

M.grandis subsp.olientalis
（青いケシ）

かように魅力的な大雪山ではあるけれど、ここ数年足が遠のいている。それは毎年夏の声が聞こえ始めると私はノコノコとヒマラヤに出かけてしまうからである。ヒマラヤ、そこは大雪山よりはるかにスケールが大きく、山体の成因も異なるこれも魅力的な地域である。旅の目的はもちろん写真撮影であるが、ヒマラヤといっても山岳写真ではなく花の写真である。夏は毎日のように雨が降り山はその姿を見せることはめったにないのであり、対称的に山腹は花々で彩られるのである。私はその中でほとんど人目に触れたことのない“幻”的な青いケシの仲間を探し出して写真に記録することを主眼に雨の中を歩き回っている。

セイタカダイオウ

ワタゲトウヒレン

青いケシも然ることながら出会う花々の多様なこと。大雪山では見られない姿で厳しい高山環境に対応すべく生存戦略をとっているのである。セイタカダイオウに見られる温室植物、ワタゲトウヒレンのようなセーター植物、ナデシコ科がつくるクッション植物などに接するとつくづく花たちは知恵ものだと思う。ヒマラヤは私にとっては玉手箱のような存在であるが、ただ難点がひとつ。そのお花畑のほとんどが家畜の放牧地となっていることである。つまり、ヒマラヤのお花畑は彼らが食べ残した種によって構成されているお花畑なのだ。

その点大雪山は、近年エゾシカの食害が問題視されているものの、基本的には生まれたままの姿である。これは世界に誇ってもいいことだと思う。

だから大雪再登山はひそかに“老後”の楽しみとして残してあるのである（笑）。

美しい雪の結晶が降る大雪山の麓

神　田　健　三

経歴

1948 年、福島県喜多方市生まれ。高校生の時、中谷宇吉郎や雪に関心を持つ。信州大学理学部物理学科の学生の時から北アルプス穂高岳の雪渓を研究。高校教師を経て、1994 年から 20 年間「中谷宇吉郎雪の科学館」の開設準備、学芸員、館長を務め、現在同館友の会会長。『天から送られた手紙［写真集 雪の結晶］』を編集・執筆。『雪と氷の大研究』を監修。雪や氷の実験普及で小柴昌俊科学教育賞奨励賞を受賞。

冬の大雪山旭岳温泉へは 7 回出かけた。大雪山や十勝岳に降る雪はまことに美しい。思い出すのは、旭川からバスで旭岳温泉へ向かう途中、層雲峡での時間調整の時だった。薄暗がりの中に降り出した雪は、結晶が一つ一つ独立し、透明で美しい六角形が肉眼でよく見えた。美しい雪の世界に今から分け入るのだという期待感に、同行の皆は顔を見合わせてうなずきあった。

「馬橇（ばそり）にて深山（みやま）の林進む時透明な雪にしばし息のむ」（関戸弥太郎）

これは、中谷宇吉郎が雪の研究のため十勝岳の白銀荘へ向かう途中、同行した門下生の関戸が作った短歌だが、大雪山麓へ向かう私たちも、関戸と同じような感覚だったと思う。

戦前、宇吉郎は白銀荘を雪の研究の拠点にして約 3,000 枚の結晶写真を撮り、雪結晶の分類を行った。次に、北大の常時低温研究室で世界初の人工雪作りに成功した。80 年前（1936）の 3 月 12 日のことである。

戦後は、宇吉郎は大雪山へよく出かけた。忠別川流域に一冬に降る雪の量を約 2 億トンと算出し、又、雪の核を電子顕微鏡で調べるため旭岳温泉で結晶を採集した。宇吉郎が監修した「雪の結晶」（岩波映画）のロケも旭岳温泉の仰岳荘で行われた。その撮影を担当した吉田六郎は、旭岳温泉で独自の方法によるブルーを背景にした美しい雪の写真を撮った。その後も、雪を撮影する人の多くが旭岳温泉を拠点にしている。

私が旭岳温泉へ 7 回行ったうち、最初の 2 回（1994, 95）は映画やテレビの撮影現場の視察で、次の 2 回（2001, 02）は教材用雪のレプリカ作りや顕微鏡撮影が目的だった。そして、その後の 3 回（2004, 05, 10）は加賀市から親子を募集・引率し、「子ども雪博士教室」の雪の観察・体験ツアーとして出かけた。冬休みに入ってすぐの 3 泊 4 日、白樺荘に泊り、降る雪の観察、雪洞の中での顕微鏡観察、やわらかい雪での雪遊び、雪中キャンドルなどを楽しんだ。東川町の親子が日帰りで合流・参加することもあった。

雪洞の中で顕微鏡観察をする少女

美しい雪の結晶が降る大雪山の麓で、その観察や体験の機会は今後も求められるに違いない。宇吉郎は、「不思議さと美しさとにおどろく心は、単に科学の芽生えばかりではなく、又人間性の芽生えでもある」（「自然の恵み」）と述べたが、美しい雪の結晶を体験する企画が、新しい形で生み出されることを期待したい。

血縁の山　小泉岳

小　泉　雅　彦

経歴

1954 年、兵庫県神戸市生まれ。同市在住。公務員在職中からマイカー登山と写真撮影を趣味とし、50 代前半で日本百名山登頂を達成。百名山の内、北海道にある九山には、岳友と共に延べ 30 回余り登っている。2014 年の定年退職後は厳冬期の北海道を含めマイカーによる 5,000km を超える撮影旅行を楽しんでいる。

私の祖父、小泉秀雄（1885-1945）は「大雪山の父」と呼ばれている。寡黙な明治の男であった祖父は、山の命名など大雪山との深い関わりを家族に語らなかった。そのため、小泉岳を孫の私が知ったのは 2002 年、神戸から車を走らせ家族 4 人でその山頂に立ったのはその翌年だった。8 月の初旬、銀泉台から残雪を越えて赤岳に達した。小泉岳に続く緩やかな稜線は終始深いガスと風の中だったが、大正時代にこの山域でパイオニアワークを成した祖父を偲ぶ忘れ難い山行となった。

私は 30 歳頃から登山に情熱を傾注してきた。ある日、母から祖父の名を冠した山があるらしいと聞き、登る人も稀な山だろうと思いつつ山名辞典を繰った。予想に反し、大雪山系の 2158m 峰と知った時は驚いた。この山に関する情報収集を経て、多年の取材に基づき祖父の人生を記した山岳史家、清水敏一さんに出会った。そして、祖父の生い立ちや植物学者として牧野富太郎に次ぐ膨大な標本を採集した業績を知った。さらに、祖父の教え子で、植物図集の出版に全面的に尽力された北海道女性薬剤師会会長（当時）の矢武三知さんとも知己を得た。

祖父の兄、源一は研究者の王道を邁進し、京都大学の植物学講座初代教授の名誉を得た。退職後は生家のある山形県米沢市に戻り、1953 年長泉寺に葬られた。今年の 10 月、墓参のため同寺を訪れたところ、応対いただいた住職夫人の仲介により、生家を守っている純子さんと思いがけず会うことが出来た。祖父が大雪山の一山に名を残した縁で、没後 70 年を経て、源一・秀雄兄弟の末裔が邂逅した訳だ。小泉岳はまさしく血縁の山だった。

祖父は 1945 年に病に倒れ、トラック 3 台分という膨大な植物標本が残った。標本はミサオ祖母と祖父の理解者の尽力により、戦後の混乱の中、散逸を免れ国立科学博物館に収容された。標本は同館の近田先生らにより長年をかけ学術資料に整理され、検索に不可欠なデータベース化も成されている。

このように祖父は大雪山に名を残す栄誉を得たのみならず、その標本は学術資料として保存・活用され、情熱的な人生を伝える伝記と、優れた観察眼と描写力を示す植物図集も出版された。多くの方々のご尽力により祖父の人生と業績が評価され結実していることに深く感謝を捧げたい。

北の山にあこがれて

嶋　田　　健

経歴

1950年、埼玉県生まれ。75年、北海道新聞社入社、2011年の退職まで主に記者職に従事。11年、テレビ北海道に移り、報道制作を担当、15年退職。海外登山の経験はないが、中国チベット自治区、新疆ウイグル自治区のほかブータン、ネパール、インド、パキスタンなどの山岳地帯でふもと歩きを楽しんできた。写真撮影も趣味。13年1月に東川町文化ギャラリーで開催されたグループ写真展『写真交響楽』に参加した。札幌市在住。

石狩岳の山頂で。右端が筆者。横長のザックやニッカーボッカー姿が懐かしい＝1978年8月

都会の喧騒から離れたい、南の沖縄か北の北海道で暮らしたい。41年前、迷った末に私は「北」を選びました。その選択の大きなきっかけは山だったと思っています。

都立高校では山岳部に所属していました。北アルプスや南アルプスの天幕のなかでは、しばしば北大の山岳部歌『山の四季』を歌っていました。顧問の先生が北大出身だったのです。ニセイカウシュッペ、トムラウシ、ペテガリ。なんと魅惑的な山名でしょう。山好き少年の心ははるか北の空に飛んでいました。

高校山岳部ではよく山関係の本を読み、大いに刺激を受けました。なかでも、大島亮吉の『石狩岳より石狩川に沿うて』を読んだときの感動、とくに山中でアイヌ民族と出会う場面の清明な描写は忘れられません。私のなかで北の山の存在が確実に大きく育っていました。

北海道の新聞社に職を得た私は休日を使って山を歩きました。初任地が旭川だったことは幸運でした。東川町とのお付き合いの始まりです。職場の仲間との山行では沢登りとスキーの多用に驚きました。ときには東京から山仲間が遠征に来ました。強く印象に残るのは石狩岳からトムラウシへの縦走です。強烈な藪漕ぎと大きなお花畑、そしてトムラウシの雄大な山容に圧倒されました。入山口の十勝三股駅で友人たちが乗り越し料金を払おうとしたところ、「釣銭がない」と駅員さんにいわれて一同絶句しました。友人たちは証明書を書いてもらい、新得駅で釣銭を受け取りました。いまはなき秘境駅の懐かしい思い出です。

新聞記者として山関係の記事を書く機会にも恵まれました。古くは速水潔さん、吉田友吉さん、その後は高澤光雄さん、清水敏一さんはじめ多くの皆さんから貴重なお話をうかがいました。この大雪山文献書誌集に名を連ねる尊敬する大先輩たちです。清水さんの助言をいただきながら小泉秀雄の事績を取材した折には、もちろん小泉岳に登りました。小柄な小泉が求道者のように大雪を踏破したであろう姿に思いをはせながらの山行は趣深いものとなりました。

最近の新聞を読みながら、東川町が写真の町として一段と存在感を高めつつ、移住者をひきつける地域振興に積極的に取り組んでいることに目を見張っています。そしていま、東川にとってすべての基盤となる大雪山を主役に文献書誌集作りという独創的な事業を推進していることにも心より敬意を表するしだいです。

「東川町民」を自称する初代レンジャー

二橋　愛次郎

経歴
昭和19年、長野県飯田市生まれ。昭和42年、厚生省国立公園局入省（箱根、利尻礼文、大雪山、中部山岳、瀬戸内海、足摺宇和海、支笏洞爺、釧路湿原、阿寒、知床の国立公園管理等に従事）。平成7年、東北海道地区自然保護事務所長退官。平成21年、北電総合設計株式会社退職。札幌市在住。自然公園指導員。

一昨年（2014年）は大雪山が国立公園に指定されて80周年の年でした。

私が大雪山国立公園の管理員＝レンジャー（現・自然保護官）として東川町に駐在していたのは、昭和47年から52年のちょうど国立公園指定40年前後のことでした。

大雪山国立公園には昭和28年から層雲峡に1名の管理員が配置されていただけであったため、当時の町長（故・中川音治氏）は東川町管内の勇駒別集団施設地区への管理員駐在を永らく働きかけていました。

中川音治氏は、昭和42年から平成3年まで6期24年の永きにわたり東川町長を務め、その間「北海道自然公園協会長」として、北海道の自然公園の施設整備や管理体制の充実について多大な尽力をされた方でした。

ウスバキチョウ（食草：コマクサ）

昭和47年8月、町長室で両手を広げ満面の笑顔で迎えてくれた中川町長の姿が今でも鮮明に想い出されます。国立公園管理員が赴任した喜びを「国道も国鉄も無い町に初めて国の機関が出来た」と表現したことを記憶しています。

当時のレンジャーは、事務所も官舎も何も無く、辞令1枚で任地に赴く状況でした。事務所は旧公民館の一室にあった教育委員会事務局の一隅をお借りし、手作りの事務所看板の掲出が仕事始めでした。

住宅は町営住宅に入れて頂きましたが、古い棟割り長屋で、台所の流しに「手こぎポンプ」が付いていて愕然としたことや、もちろん風呂は無く銭湯通いで、氷点下20℃を超える真冬には、洗髪がアッと言う間にバリバリに凍ってしまったことなど、今でも懐かしく想い出します。

クモイリンドウ

4年8ケ月の東川生活で、沢山の人々に随分とお世話になりました。東川の人々は人情豊かなおおらかな気風で、山好き、鳥好き、酒好きの仲間たちが集い、楽しく付き合って頂きました。

あれから40余年が過ぎましたが、今でも東川を訪れると旭岳の秀麗な山容と古い友人・知人が温かい笑顔で迎えてくれます。

自称「東川町民」として度々機会を得て、楽しい一刻を過ごしにかの地を訪れたいものと願っています。

永年にわたる大雪山への思い

渡　辺　康　之

経歴
1951 年、岡山県吉備郡大和村に生まれる。兵庫県尼崎市で育ち、1970 年に北海道大学へ入学。同工学部大学院修士課程を修了。学生時代より大雪山へ登り、ウスバキチョウなどの生態を調査した。1984 ～ 86 年、二度にわたり白雲岳避難小屋で越冬し、初代の白雲小屋管理人。著書に「大雪山越冬記」、「ウスバキチョウ」等がある。日本鱗翅学会理事。

大雪山に登り始めてから半世紀近くが経過した。ここ 10 年は毎年延べ 50 日間ほど山上でウスバキチョウなどの高山蝶の生態を調べ、保田信紀氏（大雪山自然史研究所）と高山帯の昆虫相の調査を行っている。学生時代には山岳写真家の田淵行男氏が大雪山で撮影されており、後に「大雪の蝶」を上梓された。これに触発されて、専門分野の有機化学ではなく蝶の生態調査や撮影がいつの間にか本職となった。その頃は高山植物の監視が厳しく、狐塚定央さんや亀谷芳生さん、柴田清美さんら大雪営林署の監視員が健在で、登山道を踏み外して怒られる一方、山小屋で昔話を聞かせて戴いた。後年、道の自然保護監視員を嘱託されて監視する側になり双方の立場が分かるようになったが、注意された人は今でもよく覚えているそうである。

山上の越冬は冗談話がきっかけで、高橋伸幸氏（北海学園大学）と白雲小屋で酒を飲んでいて、ここで冬を越して気象観測をすれば面白そうだという事で盛り上がった。曾根敏雄氏（北大低温科学研究所）も加わり、大学院生らの協力で秋に半年分の食料や燃料の荷上げをした。そして 1984 年末に入山し、翌年３月まで小屋で越冬して気温や風速などの気象観測を行った。今では機器が発達して人間が直接観測する必要はないものの、非常に貴重な体験であった。２月にはＮＨＫ取材班が同行し、ローカル放送で冬の風景や調査の様子が放映された。この時の矢内万喜男カメラマンは山男でもあり湾岸戦争の取材などで活躍されていたが、1991 年６月に雲仙普賢岳の噴火による火砕流事故で殉職され、たいへん痛ましく今でも残念に思う。

小泉岳から緑岳への稜線を蛾の調査に向かう。前を行く渡辺は灯火採集用の発電機を背負っている（2009 年７月 20 日）

高山蝶の生態については、最近になってダイセツタカネヒカゲが卵から成虫になるまでまる３年かかる場合があるなど新しい知見が発表されている。新種や未記録種の昆虫類も発見されており、未知の領域が少なくない。これからも可能な限り、地道に大雪山で調査を続けて行きたい。

大雪山に関わる歴史・人文の足跡を追い求める

武　田　　泉

経歴
北海道教育大学札幌校准教授。
1962 年、東京都生まれ。1989 年に来道し、1995 年に北海道教育大学岩見沢校に赴任し、その後北海道教育大学札幌校に異動、現在に至る。人文地理学、国立公園問題等の環境政策論、交通政策論を専門とする。
なお、北教大大雪山自然教育研究施設の連絡先他は P219 を参照。

暫定的に存置された十勝三股林鉄修理庫

まずは大雪山との出会いについて。鉄道等道内交通の研究を目指して来道したものの、当時の北大の指導教員から示されたのは、予想外の大雪山等の国立公園での歩行交通と人為的登山道の侵食との関係の話。それまで国立公園とは、東京出身なので単なる自然中心の有力観光地としか考えが及んでいなかったため、大いに面喰ったものである。

その後、黒岳ロープウェーや８合目で、靴の種類と装備のカウント調査、また各登山口によって入林届の方法の相違や、土地所有での国有林（御料林等）と道有林との色分け（特に真っ二つに分かれた旭岳温泉界隈）、林野庁と環境庁（当時）との対抗関係や攻めぎ合いで作られる公園計画（特に地種区分や道路付近だけこんもりとした作為的な地域指定、等）に興味を抱いた。また大雪山の各登山口の歴史、例えば、愛山渓の背後では戦前の幻となった冬季五輪計画での滑降会場を想定し、安足間から鉄道の支線敷設の構想も出たという話、層雲峡は洞爺丸台風被害後の風倒木処理と造材飯場相手の商店が旅館・ホテルに鞍替えした話や、湧駒別から銀泉台への横断道路建設の頓挫、旭岳温泉（湧駒別）からのロープウェーは、戦時中の硫黄採掘の索道跡を利用したもの、そして旭岳温泉と天人峡までのバスがかつて地元温泉協会負担のため無料で乗車可の全国的に稀な路線バスであったこと、十勝三股の環境省計画に森林鉄道修理庫を何とか含められないか、そしてこのため環境省が糠平で開かれた検討ワークショップの席上で発言し、地元の自然保護だけの意見に加えて両論併記へと書き加えさせた等、様々な人文面での諸点の把握へと、興味関心が向かった。こうした各種の取材のため、本書誌集掲載の諸氏を訪問したこともあり、「大雪山に関わる４人の軌跡」（旭川市史研究）として投稿したり、近年は北教大の施設研究報告（紀要）に大雪山に関わる人文分野の書籍の書評を、網羅的に掲載を画策しているわけである。

では、当人の山行能力は？というと、以前腰のヘルニアの手術をしてから、重いザックを背負えなくなり、またテント泊も良く寝付けず、日帰り圏でかつ車が無いので、交通機関でアクセス可能（又は前泊）の範囲に限られる。そして天候との兼ね合いもあり、最近はなかなか山行の機会には恵まれず、残念至極である。想い出では、今は無き愛山渓からのバスで、ある時乗り遅れて下山者の車に乗せてもらうことに難儀したことや、銀泉台と高原温泉は紅葉期シャトルバス他が走るが、砂煙を上げる車内で車掌からきっぷを買ったこと、さらにはあのトムラウシ山低体温症集団遭難事故のパーティーが旭岳から入山した翌日、旭岳頂上を目指した際に、８合目より上部でやけに寒かったこと、等がある。

姿見駅で登山者レクチャー風景

最後に、北教大大雪山自然教育研究施設について一言。同施設は国立大学では稀な温泉付の研修施設である。ログハウスの入口には「六陵山荘」の看板が掛けられている（旭川校同窓会の名称）。但し管理人によれば、最近は学内利用ではゼミ合宿をして温泉入浴で帰ることが多く、以前のような登山やスキー利用はそれほど多くはないとのことで、残念なことである。

大雪山文献目録について

1、定義

ここに記載する大雪山文献目録（以下、文献目録という）は、大雪山域の文献を収録することを目的とし、以下の基準に従って収集したものである。

2、収録山域範囲

ここに記載する文献目録の山域範囲は、原則として十勝連峰、東大雪連峰を含む大雪山国立公園地域とするが、周辺地域を含むこともある。

3、収録年代

文献目録は近代以降、明治維新以降、現代に至るものとする。

4、文献目録の分類

収集した文献目録は次のように分類する。

1、総記

辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など全般にわたるもので、２以下の分類に属さないものとする。総記は更に次のように分類する。

１－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
１－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

2、研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告書類とする。研究書は更に次のように分類する。

２－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
２－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

3、実録

事実をありのままに記したもので、登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション類を含む。実録は更に次のように分類する。

３－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
３－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

4、人物誌

人物伝、人物史、人物研究、追悼録など、人物を主題としたものとする。人物誌は更に次のように分類する。

４－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
４－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

5、案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子など、初心者から熟達者までそれぞれを対象とした各種の案内ガイドブックを含む。案内書は更に次のように分類する。

５－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
５－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

6、図録類

写真集、画集、図集、画文集（図画が半数以上）、各種図録。イラスト、スケッチ、漫画類を含む。図録類は更に次のように分類する。

６－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
６－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

7、文学書

小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、アンソロジーなど、文学に関わるものとする。文学書は更に次のように分類する。

７－１、文献の全てが大雪山に関するもの。
７－２、文献の一部が大雪山に関するもの。

8、紙誌、部会報

新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物、もしくはそれに準じて刊行されているものとする。私的刊行物、不定期刊行物を含む。通常、紙誌、部会報における大雪山文献は、その一部なので次のように分類する。特集記事、連載、シリーズ物も同様である。

８－１、新聞紙面に大雪山関連の記事が掲載されているもの。
８－２、雑誌上に大雪山関連の記事が掲載されているもの。
８－３、部報、会報、機関誌などに大雪山関連の記事が掲載されているもの。

9、その他の文献

上記１～８に分類し難いものはその他の文献とし、次のように分類する。

９－１、大雪山に関する小冊子、パンフレット類、絵はがき類（セット物、袋入り）、チラシ類、または複写物で、表題を付けて綴じてあるもの、もしくは袋に入れて表題を付け整理されているものとする。
９－２、直接に大雪山文献とはいえないが、間接的に関連づけられるもの。
９－３、大雪山に関する音楽、映像など、ＣＤ、ＤＶＤ類、もしくはそれに準ずるもの。

上記分類は、「大雪山房」主宰・東川町大雪山アーカイブス専門員、清水敏一さんにお願いしました。

総記
辞事典、図鑑類、書誌、地方史誌、講座、講演集など

1－1 総記（全てが大雪山）

001　ウッドペッカー vol.1
大雪山自然観察講座を記録する会／大雪山自然観察講座を記録する会（東川町教育委員会内）
1984 ／ 460 －ダ
大雪山自然講座が３年目を迎えた 1983 年、記録を残すことになり、講座の日程、講師の解説の内容、参加者のレポートを１冊にまとめた。公民館での夜間講座が７回、天人峡地区や旭岳温泉地域などでの野外講座が４回開かれた。講師は佐藤文彦、石川信夫、大山明、野呂一夫、小菅正夫、佐藤忠雄。

002　ウッドペッカー vol.2
ウッドペッカー Vol.2 1985 編集委員会／大雪山自然観察講座を記録する会（東川町教育委員会内）
1985 ／ 460 －ダ
大雪山自然観察講座の内容が盛りだくさんになり、前年の講師陣に新たに吉田友吉、山本牧、塩谷秀和、佐々木仁、中谷泰治らが加わり、講座の記録もイラスト図解、写真が豊富になり、読み物として面白く、充実した第一級の講座記録集となった。「大雪山文献書誌集」の先駆けともいえる講座の参考文献の紹介と、座談会が巻末にある。

003　ウッドペッカー vol.3
大雪山自然観察講座を記録する会／大雪山の自然観察講座を記録する会、東川町、環境省東川自然保護官事務所
2010 ／ 460 －ダ
大雪山自然観察講座を始めて 30 年となる節目に記録誌３号を発行した。1981 年から始めた講座の日程、内容を全て再録し、講座の思い出スナップのカラー写真、講師の言葉を池永甦次、佐久間弘、勇駒別駐在の初代レンジャー、二橋愛次郎ら歴代のレンジャーを紹介している。

004　大雪山及石狩川上流探検開発史
河野常吉／大雪山調査會
1926 ／ 291 －コ
大雪山に関する代表的な一冊。層雲峡開発に情熱を注いだ荒井初一が大雪山調査會長となって、大雪山と層雲峡を全国に広く紹介しようとあらゆる努力をしていた時に編纂された。体裁（約 15cm、約 9cm）は小さいが中身は濃い。

005　大雪山 ―神々の遊ぶ庭（カムイミンタラ）を読む
編者　写真文化首都「写真の町」東川町、執筆　清水敏一、西原義弘、写真　大塚友記憲／新評論社
2015 ／ 291 －シ
大雪山を素材にした物語を通じて、大雪山と東川を全国に発信しようと町が編者となった本。執筆は「大雪山房」主宰、清水敏一と東川町企画総務課町史編さん室が担当。天人峡地域に自生するハゴロモホトトギスの命名の由来、登山者が稀だった大正時代に霊峰旭岳登山を８回もしていた東川村の女性のことなど、17 話を盛り込み、カバーやグラビアは大塚友記憲の大雪山の写真を使った。

006　大雪山のあゆみ
層雲峡観光協会／層雲峡観光協会
1965 ／ 291 －ダ
層雲峡開拓時からの写真や大雪山に関わる著名、研究内容などの紹介。大雪山、層雲峡が開発されるまでの歴史が良く分かる。文学を扱う「詩藻」で、大町桂月が作った七言絶句「羽衣滝」の３行目にある「青蓮」をなぜか「謫仙」に換えている。桂月全集の３行目は「相看唯誦青蓮句」であり、青蓮は中国の詩人李白の生まれ故郷、謫仙は優れた詩人のこと、いずれも李白を指す。

007　大雪山のお花畑が語ること
工藤岳／京都大学学術出版会
2000 ／ 471 －ク
様々な草木が美しく咲き競う夏山のお花畑。しかしそこは１年の大半を雪で覆われる極めて過酷な世界である。植物はいかに生き抜いているのか。可憐な花々の意外なしたたかさを鮮やかに描く。

008　大雪山のキノコ　新版
佐藤清吉／総北海
2015 ／ 474 －サ
著者は定年退職してから大雪山のキノコを調査するために、上川町の自宅から主に銀泉台―赤岳に通い続けた。キノコの専門知識はなく、札幌の研究家らを訪ねながら独学。デジカメに撮りため、パソコンに入力した際の操作ミスで相当量のデータを破損したのが悔しくてならない。標高 1,835m で見つけたマツタケモドキが標高では一番高く、標高 1,700m 以上

で約 50 種類を採取した。キノコを研究して約 30 年、80 歳で出版にこぎつけた労作。

009　大雪山の自然 2 高山植物
昆野安彦／北海道新聞社
2003 ／ 471 －コ
大雪山の高山植物の多様性とその生態について、様々な角度から論じる。また、北海道内と本州の植物、さらに北極圏の植物についても紹介し、日本の高山植物の成立要因や地史的背景にもふれる。美しいカラー写真を多数収録。

010　大雪山の自然 3 動物 昆虫
昆野安彦／北海道新聞社
2004 ／ 480 －コ
ほぼ写真集のような研究書と言ってよい。大雪山のマスコット、ナキウサギについての生態、特徴が写真と図によって詳しく、分かり易い。写真が多いので、これを見るとナキウサギに会いたくなる。動物、昆虫が数多く紹介され、ツヤクロヤマアリが蟻酸を使ってハンターとなる様子、巣に運ぶ時は解体までしてしまう手際が衝撃的。エゾシロチョウの幼虫（毛虫）にも衝撃を受ける。この幼虫は液体窒素－ 196℃の中に入れても 1 時間程度なら死なない。氷河期時代から現在に生をつなぐ生態に感動する。

011　大雪山の植物
舘脇操／林友會旭川支部
1949 ／ 471 －タ
戦後の混乱期に、原始相が色濃く残る大雪山に 3 年間通って植物研究に没頭、広大な大雪山の植物を丹念に調べ、まとめた先駆的一冊。子弟らが大きな影響を受け、その後の植物研究の基礎となった。

012　大雪山の洗礼
四十年前の黒岳石室宿泊名簿
都竹一衛（謄写）／層雲峡観光協会
1965 ／ 291 － S
層雲峡温泉街で営業していた菊谷清蔵が所有していた黒岳石室宿泊名簿（大正 15 年～昭和 2 年）に歴史的無限の価値を感じた都竹が謄写版で書き写し、複製が発行された。昭和 2 年 7 月 26 日には童謡詩人、野口雨情の名もあり、同行者は塩谷忠と画家・村田丹下。

013　大雪山の花
永田芳男／文化出版局
1983 ／ 472 －ナ
季節を追って春の足音、夏雲湧く、秋風立つなどの順に、一枚一枚に撮影日を入れた花紀行。大雪山に咲く約 160 種の花、実を紹介。

014　大雪山の花
山田恵一／山と渓谷社
1990 ／ 472 －ヤ
サブタイトルに「登山道から見られる 153 種」とあるように、一般的な花を選び、草原の花、礫地・砂礫地の花、湿原の花などに分け、和名の解説を載せることで花の名前を覚え易くしている。

015　大雪山文献書誌 第 1 巻
清水敏一／私家版
1987 ／ 291 －シ
大雪山に関わる様々な文献を研究し、広く紹介することになった最初の本。著者は「私にとっての大雪山は、登山もさることながらこの山の文化史（探検、調査、研究、開発、登山など）に大いに関心がある」と文献書誌探索の思いを書いている。

016　大雪山文献書誌 第 2 巻
清水敏一／私家版
1988 ／ 291 －シ
十勝岳爆発関係の書籍をはじめ、山の芸術誌・文芸誌「アルプ」の紹介とアルプに掲載された大雪山関係の記述目録、百山選書などを紹介している。

017　大雪山文献書誌 第 3 巻
清水敏一／私家版
1989 ／ 291 －シ
三好文夫の詩画集「大雪山素描」、原田豊の「仙峡の思い出」、北大山岳部々報（戦前編）などを紹介している。

018　大雪山文献書誌 第 4 巻
清水敏一／私家版
1993 ／ 291 －シ
「層雲峡温泉小唄」「大雪山縦断行軍写真帖」、小説「大雪山」などを紹介している。著者の代表作でもある文献書誌シリーズは第 4 巻で終わっている。

019　大雪山物語
北海道新聞社／北海道新聞社
1985 ／ 291 ーダ
北海道新聞社の朝刊旭川版・上川版で昭和 59 年 4 月から 66 回にわたって連載した記事に、大雪山ミニ百科、年表などを書き加えた。連載は大雪山国立公園 50 周年記念年に企画された。

020　大雪の高山植物
野呂一夫ほか／北海道新聞社
1978 ／ 471 ーノ
野呂一夫、山口正弘、田村健太郎の 3 氏が 5 年をかけて撮った 147 種を紹介している。植生全体をとらえたものと、花や実をアップにしたものを組み合わせていて、分かり易い。

021　中央高地　登山詳述年表稿
吉田友吉／私家版
1994 ／ 786 ーヨ
著者が昭和 40 年ごろから書き留めてきた登山史年表を、古希記念に私家版で出し、「同好の方々に誤謬や脱落を指摘してもらい、より正確な資料にしたい」と送った稀少本。

022　中央高地登山詳述年表稿　出典準拠 [増補]
吉田友吉／私家版
1996 ／ 786 ーヨ
営林局勤務で大雪山に精通し、旭川市内嵐山の「北邦野草園」初代所長として活躍した著者が明治、大正時代の新聞記事などを丹念に読み 32 年間に亘って書き留めた中央高地の登山年表。2 年前にワープロ打ちの自家用年表を発表し、関係者からの「校正」を得て、増補版をまとめた。大雪山に関するもろもろの事柄を年表にした労作。

023　道博高山植物館と植物園
舘脇操／「寒帯林」別刷
1950 ／ 606 ータ
昭和 25 年、旭川で北海道大博覧会が開催され、その一画に高山植物館と植物園が造られた。高山植物は大雪山系から運び、役目を終えると大雪山系の元の位置に埋め戻された。責任者となった舘脇博士が計画から完成、運営などを裏話を含めて書いた。旭川営林局「寒帯林」9 号（1950 年）別刷。

024　ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第 1 ～第 3 話編
上川支庁、上川中部広域市町村圏振興協議会／制作　FM りべーる
2002 ／ 291 ード
2002 年 2 月 3 日から 17 日までの毎週日曜日午前 11 時 30 分から正午まで、FM 特別番組として放送した内容を、タブロイド判 8 ページの小冊子にまとめた。表紙、裏表紙、文中にもカラフルな大雪山の写真がある。第 1 話・大坪三好、第 2 話・清水敏一、第 3 話・荒井一洋と斎藤しのぶ。

025　ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第 4 ～第 6 話編
上川支庁、上川中部広域市町村圏振興協議会／制作　FM りべーる
2002 ／ 291 ード
同じくなので省略。第 4 話・保田信紀、第 5 話・太田眞、第 6 話・小桧山俊介。

026　ナキウサギの声が聞きたい
監修　川道武男／日本評論社
1999 ／ 489 ーナ
副題に「小さな NGO の悪戦苦闘物語」とある通り、「ナキウサギふぁんくらぶ」の誕生のきっかけから全国的な保護運動へ広げていった活動のエピソード、ナキウサギ裁判の経過、そして後半は、鳴き声の分析、貯食の観察記録、世界のナキウサギの種類など、生態が良く分かる。

1 ー 2 総記（部分が大雪山）

027　石狩川 100 話
石狩川治水 100 年の歴史をたどる
石狩川開発建設部／石狩川開発建設部
2010 ／ 517 ーイ
石狩川の歴史が分かる。川の名前、生活様式、橋、地形など。「大雪ダム」を写真入りで説明している。

028　石狩日誌
著　松浦武四郎、訳　丸山道子／凍土社
1973 ／ 291 ーマ
武四郎日誌の逐語訳ではなく、原文の持ち味を失わないように改訳しているのでわかりやすい。原著の図版も挿入する。そのひとつに石狩岳頂上眺望の図があり、ユウハリ、トカチ、クマネシリなどの山々が遠望される。解説とあとがきによって

訳者の意図を知ることができる。推定する石狩岳（大雪山系）踏査図もある。

029　イララエカッチ 02

編　鎌田明徳／ GFA ワークショップ委員会、大雪と石狩の自然を守る会
2002 ／ 379 ーイ

大雪と石狩の自然を守る会が、小学生を対象にした自然体験学習「グリーンフォーラム」を 1975 年から始めた。2002 年までの活動の歩みを一冊にまとめた。

030　NHK ふるさとデータブック

北海道 NHK 情報ネットワーク／日本放送出版協会
1992 ／ 291 ーエ

全国で全 10 巻のうちの北海道編。合併前の 212 市町村ごとに、各種データを項目別に 1 市町村約 2 ページ前後にまとめてある。人口、世帯数、面積のほか、写真とともに観光資源、名産・お土産、歴史上の人物、イベント、四季の風物、主要文化財、歌碑や記念碑、歌謡曲、文学作品、郷土歴史家、映像記録者、天然記念物、よくわかる参考図書など多岐にわたる。紙面スペースや項目に差異があるのは、提供する市町村側のデータ量の多少と、編集者の採否によるのだろうか。一時期の興味あるデータを与えてくれる一冊。

031　岳人事典

岳人編集部／東京新聞出版局
1983 ／ 786 ーガ

山に関する地形、気象、雪崩、医学、文学、絵画、音楽、民俗、スキーなど、あらゆる分野にわたって、それぞれ専門家が概説する。人名、用語は辞書式。そのほか山名表、登山史年表もあるが、総じて大雪山系の記事は少ない。

032　活火山・活断層

千葉達朗／技術評論社
2011 ／ 453 ーチ

表紙に、「赤色立体地図でみる」「日本の凸凹」「逃げられない日本列島の宿命がリアルに浮かびあがる！」とある。日本全土の紹介で、北海道は十勝岳の赤色立体地図が載っている。

033　角川日本地名大辞典
北海道・上巻地名編

「角川日本地名大辞典」編纂委員会／角川書店
1987 ／ 291 ーカ

別巻を含む全 51 巻のうちの 1 巻北海道地名編である。単なる行政地名だけではなく、山岳、河川、台地、平野、温泉、史跡名勝、天然記念物などのほか、過去に失った地名も立項する地名百科である。例えば大雪湖、大雪国道、大雪山、大雪山国立公園、旭岳、黒岳、羽衣の滝などもそれぞれ立項、その数合わせて約 1 万 5 千 5 百項目。

034　角川日本地名大辞典
北海道・下巻総説・地誌編・資料編

「角川日本地名大辞典」編纂委員会／角川書店
1987 ／ 291 ーカ

平成の大合併前の全道 212 市町村別に、現況、立地、沿革、現行行政地名を記述する。沿革では古代から現代へ、将来への目標に至るまでの歴史的経緯を記述する。巻末には支庁、藩県、市町村沿革表、団体移住一覧などもあり、資料としての活用度は高い。

035　金沢山岳文庫　北海道山岳文献目録

編　斎藤浪子／私家版
2006 ／ 291 ーカ

「斎藤俊夫追悼」の副題がある。斎藤は当別町金沢で山岳文庫を主宰していたが、2004 年 68 歳で病没。本書は追悼の意味を込めて、収集した山岳文献目録と遺文・遺稿、寄稿によって構成される。夫人・浪子、サッポロ堂・石原誠の編集、故人は絵や版画をよくしたことがわかる。別に布装、箱入りの限定本が 35 部ある。

036　かみかわ　小学校社会科副読本

上川町社会科郷土読本編集委員会／上川町教育委員会
1980（奥付欠）／ 375 ーカ

表紙は牧場と大雪山、冒頭のグラビア写真には大雪山や石狩川、層雲峡がある。文中には大雪山や層雲峡の説明や折り込み鳥瞰図がある。

037　かみかわ＝生物編＝

上川町立上川中学校　理科グループ／上川町教育委員会
1981 ／ 375 ーカ

「中学理科」とある。同町の昆虫学者・

保田信紀が囲み読み物になっている。身近な生物が中心だがヒグマや大雪山のナキウサギや高山蝶もある。

038　かみかわ＝地学編＝

上川町立上川中学校　理科グループ／上川町教育委員会
1979／375 ーカ

「中学校理科授業書」とあり、大雪山麓の町であるだけに、大雪山に関連する図や写真を用いた記述は多い。大雪山の航空写真は同町の写真家・志賀芳彦撮影。

039　上川町内のアイヌ語地名解、上川町の川の名・沢の名

成田新太郎／上川町自然科学研究会
1990／291 ーナ

会報『上川町の自然』に発表したものに、その後の調査考察を加えて 1 冊にまとめた。大雪山に関する山や川の地名について各説を紹介して解説する。折り込み地図を付してあるのも親切である。川の名、沢の名については、アイヌ名のほか、支沢、枝沢の名は和名が多い。32 図もある地図から、その位置と名称を知ることができる。

040　上川町の自然　生物目録集

編　保田信紀／上川町自然科学研究会
1985／460 ーカ

町域の半ばは大雪山国立公園であり、この目録も大雪山に大きく関わる。植物目録では高等植物を旭雅人、シダ植物を佐々木太一、蘚苔類を伊藤律子、キノコ類を成田新太郎、動物目録では哺乳類を成田新太郎、鳥類を磯清志、爬虫類・両生類を保田信紀、魚類を中条良作、蝶類を野田佳之、大雪山・石狩川源流地域の真正蜘蛛類、甲虫類を保田信紀が担当した。

041　上川の概況

上川支庁／上川支庁
1957／318 ーカ

上川支庁管内（当時 29 市町村）の概況を記述したものである。内容は概説、戸口、産業、運輸、文化、観光など、多岐にわたって統計資料を図示しながら説明する。写真も多く、当時の作業や暮らしぶりを活写する。管内の映画館 30 館、テレビはわずか 76 台しかないところだった。表紙は残雪の大雪山を背景に、田んぼの手作業での草取り中の写真。観光の項には大雪山、十勝岳、層雲峡、天人峡、愛山渓、勇駒別、白金温泉などの写真も豊富に記載する。

042　かみかわ＝野外観察編＝

上川町立上川中学校　理科グループ／上川町教育委員会
1980／375 ーカ

「中学校理科資料集」とあり、表紙の写真エゾシカは志賀芳彦撮影。「ヒグマの生態観察」では、ヒグマに対する注意、危険なヒグマなどを記述。「山の学校」では、大雪山について、生いたちから、地質、地形、植物帯までを図示しながら記述してある。

043　郷土資料事典―北海道・観光と旅

編　人文社観光と旅編集部／人文社
1966／291 ーキ

都道府県別シリーズの北海道編で、各市町村別に紹介している。特に「旭川市と大雪山国立公園」の項があり、周辺市町村も含めて詳しく紹介する。巻頭に概要、巻末に各種資料がある。北海道出身の著名人（現存者）一覧もあり興味を引く。特別付録として「北海道庁管内巡覧記」（明治 28 年）がある。巡覧記は今でいう案内記である。

044　熊に関する百訓

阿部泰三／山音文学会
1973／489 ーア

著者は元・自衛隊員で札幌北部方面総監部化学課長を経て退職。自衛隊が演習訓練中にしばしば熊が出没した。標津方面の被害がはなはだしく根室支庁から自衛隊派遣の要請があったことから、熊の被害防止のために上官から熊対策を命じられた。文献を調べ、学者、有識者の教示、実体験者からの聞き取り調査、実地検証、動物園やクマ牧場に足を運び、熊の生態研究とその対策をまとめたのが本書である。1962 年、標津の出没情報が突出して多いのは、同年の十勝岳噴火による降灰の影響といわれるが明らかではない。本書は北部方面総監部が発行、訓練資料として全道の各部隊に配布され、版を重ねた。そのことが新聞に報道され、道民の要望にこたえて山音文学会が発行し、これもまた版を重ねた。自衛隊の初版は 1963 年である。

045　敬山愛林 秀岳荘創業 50 周年記念誌
編　高澤光雄／秀岳荘
2005 ／ 786 ーケ
北海道の山の店「秀岳荘」が発行した記念誌「山の仲間と五十年」について、同社に礼状などの書簡が数多く寄せられ、それらに新聞、雑誌での紹介記事を交え、「書信・書評集」として発行した。表題は同社の経営理念標語。

046　決定版　日本の探鳥地　北海道篇
BIRDER 編集部／文一総合出版
2004 ／ 488 ーニ
北海道篇は道央、道南、道北、道東の 4 地域に分け、60 カ所の探鳥地を選び、観察できる鳥、観察に適した時期、必要な装備などを紹介している。大雪山は黒岳・層雲峡で高山性の鳥からカワガラスなど渓流の鳥が見られる。旭岳は、ロープウェイ終点の姿見駅前のハイマツ帯から周辺の遊歩道を歩くだけで、カヤクグリやノゴマの姿と声をふんだんに楽しめ、時にはあこがれのギンザンマシコを見ることができる。他に然別湖の紹介も。

047　原色野生哺乳動物
編著　小田島護／家の光協会
1979 ／ 571 ーオ
北海道のヒグマから奄美大島のアマミノクロウサギまで、全国各地に生きる野生哺乳動物を紹介している。

048　高山植物の話
武田久吉／大阪毎日新聞社
1924 ／ 471 ータ
登山者や研究者向けのポケットサイズながら 106 ページもあり分厚い。「高山上の荒々しい気候と戦う高山植物の生活は、その花の可憐なるにも似ず、実に容易なものではない」「一枝一葉は、困苦の結晶とでもいうべきもの」などと解説。巻末に山名を頭にする植物一覧があり、アカンスゲ（阿寒）、リシリリンダウ（利尻）などがあるがダイセツはまだ一つも見られない。大雪山の記述はないが大正時代に出版された高山植物の古典として取り上げた。

049　国立公園シリーズ 1 ～ 23
編　国立公園／明文堂
1952 ～ 1967 ／ 291 ーコ
1 上信越公園、2 中部山岳、3 秩父多摩、4 十和田、5 霧島、6 大山、7 阿蘇、8 富士箱根、9 雲仙、10 吉野熊野、11 日光、13 伊勢志摩、14 大雪山、15 阿寒、16 支笏洞爺、17 瀬戸内海、18 西海、19 八幡平、20 伊豆、21 陸中海岸、22 白山、23 隠岐島根半島三瓶山。12 が欠。

050　国立公園図鑑
監修　環境庁自然保護局国立公園課、編集　財団法人国立公園協会／大蔵省印刷局
1995 ／ 629 ーコ
名の通り全国の国立公園を写真と解説で紹介する図鑑である。指定年月日、面積、関係都道府県名のほか、景観や動植物の写真、景観の特色などをワンポイント・アドバイスしている。

051　コンサイス日本山名事典（修正版）
編　徳久球雄／三省堂
1979 ／ 291 ーコ
コンパクトながら内容が充実している。山名のほか、山群名、峠名、高原名も含めて 13,000 項目を収録し、主要な山には概念図や鳥瞰図も挿入している。山名考、地名考の囲み記事があり、参考になる。大雪山は概念図入り、ヌタクカムウシュペ（大雪山）、ヌタフカウシベ（石狩岳）からも引くことができる。旭岳の項では、大雪山火山群の主峰であり、北海道の最高峰云々の説明文が続く。熊ヶ岳、荒井岳、松田岳などの小さな山も立項している。

052　再発見　ふるさと北海道
編　北海道新聞社／北海道新聞社
1986 ／ 291 ーサ
北海道再発見のカラー写真集。山や自然とともに、祭りやイベント、登山など、人との関わりを表現する。大雪山系の写真も素晴らしい。デスカバージャパン、ふるさと再発見、一村一品運動時代の写真集である。巻末に資料編があり、一村一品も掲載している。

053　札幌・大正の青春
編　札幌市教育委員会社会教育課／札幌市教育委員会
1978 ／ 051 ーサ
―雑誌「さとぽろ」をめぐって―という副題がある。「さとぽろ」とは 1925 年（大正 14 年）に創刊した詩と版画の同人雑誌のこと。本書は角背布装の上質な本であるが非売品。大雪山とは直接に関連はないが、創立同人は教授、北大生、予科

生ら８人で、そのうちの伊藤秀五郎（詩）は北大山岳部を創立、北海道の山に大きな足跡を残す。相川正義（詩）は北大で山とスキーに活躍、のち旭川市の相川精神病院院長・理事長を務めた。伊藤義輝（版画）は北大山岳部々報の表紙を描いた。

054　山岳講座　第８巻

編　南條初五郎／共立社
1936 ／ 786 －サ

巻頭グラビア写真が十勝岳。巻末に千島・北海道の山案内（佐々保雄）があり、中央高地の山々について夏期、冬期とも詳しく案内され、当時の登山状況を知ることができる。山岳講座は全８巻。

055　山岳事典

編　川崎隆章／山と渓谷社
1960 ／ 786 －サ

『山岳講座』全６巻の別巻として編集された。山岳高度表、登山年表、山岳図書一覧、登山用語辞典などを記載する。大雪山に関する山岳図書には、小泉秀雄、大島亮吉、伊藤秀五郎らの著書をあげている。「山岳団体一覧」「山小屋一覧」は、地域別に記載しているので、当時の北海道の状況がわかり、きわめて興味深く資料としても役立つ。

056　三省堂日本山名事典

編　徳久球雄、石井光造、竹内正／三省堂
2004 ／ 291 －サ

コンサイス版をさらに充実させ、新しい視点の異なった山名事典として編集している。収録項目数 25,000、ヌタクカムウシュペの項はさすがにもうない。山、峠のほか、山脈、高地、高原、丘陵名も立項している。GPS に対応して、経度、緯度も付記してある。巻末の「山名考」には、山名の由来、アイヌ語源の山、十二支の山などの記事がある。全国の富士山名には美瑛富士もある。

057　志賀重昂『日本風景論』精読

大室幹雄／岩波書店
2003 ／ 291 －オ

岩波現代文庫の帯に「誇るべき国粋（ナショナリテイ）の現実、明治期ベストセラーの解読・書下し」とある。

058　自然保護事典［山と森林］

編　全国自然保護連合／緑風出版
1996 ／ 519 －シ

危機に瀕する自然を読む事典である。「山と人とのかかわり」「山岳観光道路の自然破壊」「森林の荒廃」など識者、自然保護活動家が論述している。大雪山では大雪山縦貫道路を取り上げている。今なら考えられないような大雪山の尾根を縦貫する自動車道開発計画であったが、反対運動によって中止に終わった。「北海道の森林」の項でも触れている。

059　新日本山岳誌

編著　日本山岳会／ナカニシヤ出版
2005 ／ 291 －シ

日本山岳会が創立百周年記念に出版した。高頭式が『日本山嶽志』を上梓してから百年目に当たる。約 2,000 ページ、4,000 山を収録した山岳百科事典。大雪山域の山々は、「北見山地」の項に含めて紹介説明している。

060　森林王国の復活

編　宮島寛／北方林業会
1999 ／ 650 －ミ

北方林業会の創立 50 年に、「北方林業」に掲載してきた中から抜粋して編集した。台風 15 号による風倒被害、北海道に降る雪と本州に降る雪は違うというエッセーなど。

061　世界山岳百科事典

編　岩間正夫／山と渓谷社
1971 ／ 786 －セ

山名、地名、人名、技術、用具、山岳書、主な山岳会、部会報など、山岳関連のあらゆる項目（アイウエオ順）を、網羅的にまとめた事典。図版、写真も豊富、索引、解説を含めて 1,000 ページに及ぶ。一例を大雪山にあげると、旭岳、大雪山、大雪山国立公園、天人峡、羽衣の滝、勇駒別温泉などをそれぞれ別項で記述している。以降、これ以上の山岳事典の刊行はない。

062　増補　大日本地名辞書　第八巻

吉田東伍／冨山房
1885 ／ 291 －ヨ

初版は 1909 年、地名辞典の古典である。新潟県生まれの吉田は独学で歴史地理学者となる。一時期、積丹半島・美國の道庁支所の書記をしており、北海道ゆかり

の人物でもある。本書の石狩國上川郡の欄に、オプタテシケ山（ケルンニ）、忠別岳（ヌタカムシュペ山）、石狩岳、石狩水源（大雪山）、十勝國河東郡の欄に、然別湖、ウペペサンケ岳、同十勝國上川郡の欄に、十勝岳、石狩岳などの項がある。

063　大雪山の父　小泉秀雄
清水敏一／学研教育みらい（道徳教科書）
2011 ／ 375 －チ
教科書「中学生の道徳３年」（北海道版）に北海道中学校道徳資料研究会が北海道郷土資料として清水敏一著「大雪山の父小泉秀雄」を掲載した。1、命を失いかねないほどの重傷を負っても、秀雄が調査研究を続けたのはどうしてだろう。2、幾多の困難があっても、秀雄はなぜ研究をあきらめなかったのだろうーを考える。

064　十勝日誌
著　松浦武四郎、訳　丸山道子／凍土社
1975 ／ 291 －マ
冒頭の両見開き大雪・十勝山系眺望の図は壮観、石狩ノタツカウシヘ岳、チクヘツ岳、ヒエ岳などの山が描かれている。訳者の解説、十勝越えの推定地図もある。それによると美瑛から富良野岳南方（原始ヶ原のあたり）の峠を越えて、十勝へ下ったようである。

065　十勝の森林鉄道
小林實／森林舎
2012 ／ 656 －コ
著者は十勝の鉄道史、軌道史を研究する郷土史家。副題に「森とともに生きた幻の鉄路を捜して」とある。新得、音更側の東大雪の風倒木処理に活躍した森林鉄道音更線などの盛衰史。

066　登山講座　第５巻
編　川崎隆章／山と渓谷社
1960 ／ 786 －ト
全６巻のうちの第５巻が積雪期登山の講座で、巻末に北海道の山の案内（北大山岳部）がある。表大雪、裏大雪、十勝岳はいずれも積雪期中心の案内で、松山温泉口という表記が残る。

067　日本　200　名山
深田クラブ／昭文社
1987 ／ 645 －フ
深田クラブは、深田久弥の『日本百名山』を完登し、その精神と文学を受け継ぐことを目的として 1974 年に発足。大雪山、石狩岳、ニペソツ山、トムラウシ山、十勝岳などを紹介している。

068　復刻版　日本山嶽志
編著　高頭式／野島出版
1970 ／ 291 －ニ
高頭は越後（新潟県）の資産家、日本山岳会創立者の一人で第２代会長。『日本山嶽志』を編さん、1906 年に博文館から発行しており、本書はその復刻版。彼が精魂を傾けた大著で、1,400 ページ、収録した山岳は 2,000 座を超える。大雪山は未知の山域であり、「十勝火山群」の項に、石狩嶽（別称・ヌタプカフシベ）とオプタテシケ（別称・男嶽女嶽）があるだけで、いずれも登路不詳とある。本書には日本山岳会編「越後の旦那様」（高頭仁兵衛小伝）が別添されている。

069　日本山岳ルーツ大辞典
監修　池田末則、編著　村石利夫／竹書房
1997 ／ 291 －ム
山名と所在地、名称の由来、主な山には高山植物や景勝地を紹介している。富士山は別格の山として、巻頭 30 ページにわたって解説する。都道府県別、アイウエオ順に配列、13,000 山、1,000 ページ以上の大冊である。旭岳を例に挙げると、「大雪山火山群の主峰、この山は群を抜いて高いので、日の出を拝光できる山ということ」。そして高山植物、姿見の池、天人峡、羽衣の滝、敷島の滝を紹介している。

070　日本三百名山
編　荒井魏／毎日新聞社
1997 ／ 291 －ニ
深田久弥の「日本百名山」や「日本山岳会編日本三百名山」を元に全国の 301 山を選び、北海道から九州まで 10 地域に分けて、地域ごとに山名を五十音順に紹介している。トップを飾るのが旭岳。所在地は東川町、神々の遊ぶ庭などと紹介している。グラビアページにも富士山に次いで２ページめに旭岳の夏姿を載せている。大雪山は他に石狩岳、十勝岳、トムラウシ山など７山。

071　日本山名総覧
武内正／白山書房
1999 ／ 291 －タ
「１万８千山の住所録」の副題が付いてい

る。山名を頭にヨミ、標高、所在市町村名を記した文字の羅列で、説明・解説はゼロ。しかしこれがまたきわめて面白い。北から南へ、都道府県別に並べ、北海道は北部、西部、中部、東部に分け、大雪山は中部に書いてある。境界の山には複数の市町村名を記載。興味深いのは各種の分類表で、北海道の標高順では上位を大雪山系が独占しているのは当然としても、全道市町村別山数順位では、上川町が 60 山で 1 位、東川町は 17 山で 23 位。ちなみに旭岳は全国に 7 山あり、最高峰は北アルプスの旭岳（富山県）だが、三角点のある最高峰は大雪山旭岳である。

072　日本地名大辞典・北海道

編　渡辺光、中野尊正、山口恵一郎、式正英／朝倉書店

1974 ／ 291 ー二

収録した地名は、行政地、自然（山、湖沼、河川など）、集落、交通経済（道路、峠、鉱山など）観光地、歴史地を含めて総項目 13,000。50 音順なので大雪山関連は各所にたくさん立項している。

073　日本地名大百科

編　秋庭隆／小学館

1996 ／ 291 ー二

地名で引く百科事典というべき本で、挿入の写真、挿絵、地図はオールカラー。都道府県名、市町村名、山、高原、滝、史跡名勝など、あらゆる地名、名称をアイウエオ順に引くことができる。一例をあげると、「旭岳」「旭岳温泉」「大雪山」（写真と鳥瞰図で大きく説明）「天人峡」（羽衣の滝の写真あり）、「東川町」「羽衣の滝」（桂月命名とある）など、それぞれ別に立項しており、見て楽しく、使って便利な事典。

074　日本地理大系 10　北海道・樺太編

編　山本三生／改造社

1930 ／ 291 ー二

昭和 5 年に発行された約 520 ページの分厚い事典。北海道の開拓、アイヌの暮らし、霊山碧水峡と呼ばれていたころの層雲峡など、地理、歴史などが写真、地図と共に著名な先人らの文章で解説されている。大雪山関係の貴重な写真も多数。伊藤秀五郎は旭岳の写真に添えて次のように解説している。「殊にこの山の夕映えは美しい。夕陽をうけると羞しさうに俯向きながら、華かな薔薇色に染つて仕舞ふ。それは彼女が、いつも朝霧に膚を洗つてゐて、誕生幾萬年の今日も、まつたく清浄無垢でゐるからだ」（抜粋）。

075　日本動物大百科

川道武男／平凡社

1996 ／ 482 ー力

全 11 巻の 1 巻。エゾナキウサギ、エゾユキウサギ、エゾリス、エゾシマリス、エゾモモンガ、エゾタヌキ、オコジョ、エゾクロテン、ヒグマなど北海道全域に生息している。エゾナキウサギの項の写真に「大雪山はわがすまい」として、緑岳の岩場での「瞑想」ポーズを使っている。

076　日本の高山植物

編　豊国秀夫／山と渓谷社

1988 ／ 471 ー二

日本の高山植物 953 種類を徹底収録した山渓カラー名鑑。大きめの写真によって、花の姿形が分かり易い。

077　日本の国立公園　１～６

環境省／環境省

2008 ／ 291 ー二

1 利尻礼文サロベツ、2 知床、3 阿寒、4 釧路湿原、5 大雪山、6 支笏洞爺。大雪山は北海道の中央にそびえたつ大屋根として紹介。各シリーズの裏表紙に初代の東川自然保護官だった二橋愛次郎が描いた花の絵を載せている。洞爺湖サミットに合わせて作られた。

078　日本の自然公園　自然保護と風景保護

田中正大／相模選書

1981 ／ 629 ー夕

第 5 章国立公園の中で大正 11 年、国立公園候補地 16 カ所に大雪山が入っていなかった、後から追加されたのが大雪山。「大雪山は保護すべき風景であって、開発に毒された国立公園運動に批判的態度を持っていたのであろうか」など、興味深い。

079　日本の樹木

編　林弥栄／山と渓谷社

1985 ／ 653 ー二

山渓カラー名鑑の樹木編、1,446 種類を載せている。

080　日本の伝説 17（北海道の伝説）

更科源蔵、安藤美紀夫／角川書店

1977 ／ 388 ーサ

アイヌ伝承や義経伝説などを収めた。大

雪山系のオプタテシケ山と雌阿寒岳は夫婦だったが別れてしまい、雌阿寒がオプタテシケに怒りの槍を投げつけたが肩をかすっただけで済んだ。オプタテシケが槍を投げ返し、雌阿寒の中腹に当たり、そこから今も膿（硫黄）が出ている。

081　日本の名山 1
大雪・日高と北海道の名山
第一アートセンター／ぎょうせい
1984 ／ 645 ーハ
北海道の主な山の紹介で、研究者らの山に関する解説、登山記など。鮫島惇一郎が担当した「大雪山と石狩山郡（中央高地）」の項に、北海道の屋根といわれる大雪山らしく、山の高さを強調した立体イラストを載せている。九州・阿蘇まで、シリーズで全 12 巻。

082　日本の名山を考える
斎藤一男／アテネ書房
2001 ／ 641 ーサ
美しい山の自然を、私たちの祖国日本へ、愛する子孫に遺してもらいたい。それが、本書を世に送る本来の目的である、と筆者は『はじめ』に書いている。

083　日本の山
山と渓谷社／山と渓谷社
1969 ／ 291 ーニ
全国の山岳、高原、滝、渓流などをカラー写真と解説で紹介し、造山運動など山の成りたち、山の鳥、野生動物、近代登山の歴史、伊藤秀五郎の寄稿「北の山」余禄など、盛りだくさんの図鑑。大雪山の写真は志賀芳彦、白籏史朗らが担当。成松岳人撮影の「羽衣の滝」が美しい。

084　日本の山（山渓カラー名鑑）
山と渓谷社／山と渓谷社
1981 ／ 291 ーニ
全国の山岳を紹介する約 600 ページの分厚い名鑑。大雪山関係は、美瑛町水沢ダムから写した大雪山連峰遠望を皮切りに旭岳、トムラウシ山、十勝岳など 22 ページにわたって前田真三、白籏史朗、市根井孝悦らの写真で紹介している。

085　日本百名谷
関根幸次、中庄谷直、岩崎元郎／白山書房
1983 ／ 291 ーセ
北は知床半島から南は九州屋久島の宮之浦川まで、代表的な 100 ルートの沢谷を紹介する。遡行図やコースタイム、装備や適期についてのアドバイスも収録。大雪山系はクワウンナイ川、トムラウシ渓谷。トップページに紅葉のクワウンナイ川の写真（梅沢俊撮影）。

086　日本百名峠
編　井出孫六／桐原書店
1982 ／ 645 ーイ
道内は石北峠、美幌峠、狩勝峠を紹介。石北峠の項では蝦夷地の開拓、監獄囚徒の使役、洞爺丸台風と風倒木処理などの歴史が分かる。

087　日本野鳥紀行
蒲谷鶴彦／小学館
1998 ／ 488 ーカ
野鳥の鳴き声 CD 付き。大雪山の野鳥と鳴き声はミソサザイ「ピィツィッピュルル」、ノゴマ「チュイーチュチュチュ」、ギンザンマシコ「ピィーピィーピュルピュル」、ルリビタキ「ピッヒューロヒュロヒュロ」。ナキウサギの紹介も。

088　北大山岳館　蔵書ガイド
編　北大山岳館運営委員会／北大山岳館運営委員会
2010 ／ 019 ーホ
北大山岳館は道内一の山岳書を収蔵する。稀少、貴重な文献も多い。本書はそのなかから選んで、書影と著者略歴、内容を解説したもので、小泉秀雄『大雪山　登山法及登山案内』も収録、関連蔵書も紹介している。ほかにも大雪山関連の蔵書がある。

089　北海道から　第３号
山根対助／北海学園
1987 ／ 051 ーホ
「特集 : 北海道をより深く知るための本 539 冊」という副題がある。基本文献とする 539 冊について、各分野の専門家が 1 冊ずつ解説するほか、市町村関係資料目録、タウン誌、日刊新聞などの記述がある。北海道を知ることはすなわち大雪山を知ることにつながっていることを知る本である。

090　北海道山村経済の実態
上川郡上川町の調査報告
編　北海道総合開発委員会事務局／北海道総合開発委員会事務局
1953 ／ 318 ーホ
巻頭グラビアに大雪山、層雲峡の写真がある。上川町の概要、経済構造（農業、林業、商工業など）の実態調査報告書で、調査には東京教育大学農学部の協力を得ている。謄写印刷 168 ページ、粗末な作りの一冊であることが時代を物語る。

091　北海道自然保護小史
俵浩三／北海道自然保護協会
1977 ／ 519 ータ
北海道自然保護協会会誌第 16・17・18 号別冊、国立公園雑誌第 331・332・342 号別冊に掲載したものを 1 冊にまとめた。

092　北海道史の歴史
高倉新一郎／北海道郷土資料研究会
1959 ／ 211 ータ
著者・高倉は北海道史研究の泰斗。北海道の歴史に関する江戸期以来の主要文献と、その著者たちを解説する。河野常吉にも紙面を割いており、編著『北海道史跡名勝天然記念物調査報告』『大雪山石狩川上流探険開発史』もある。タイプ印刷の軽装本。

093　北海道　集落地名地理
栃木義正／私家版
1992 ／ 291 ート
「5 万分の 1 地形図」から集落地名の起源や由来を、山や川、植物、動物、歴史など、16 章に分類し解説している。例えば索引から「大雪通」を引くと、山の名の節にあり、「旭川市北東部、もと永山通、東方に大雪山連峰を見る」とある。「ノカナン」は川の大小・沢の節にあり、「東川町南東部、忠別川右岸。ノカン・ナイ＝小さい沢の意か」。同意の集落は、「ヌカナン」（幌延町）、「野花南町」（芦別市）にもあることが分かる。

094　北海道地名解
磯部精一／富貴堂書房
1918 ／ 291 ーイ
著者は旭岳ふもとの「姿見の池」の命名者として知られる旧上川中学（北海道旭川東高校）の教師。アイヌ語も研究したことから、主にアイヌ語に由来する地名を解説している。ちなみに大雪山には、「たいせつ」のふりがなを付け、アイヌ語の山名「ヌタッカム、ウシュペ」を「頬（ほほ）の山の義、山頂が禿（は）げて、草木なきこと、恰（あた）かも頬の上部に鬚（ひげ）なきに譬（たと）へたるなり」と解釈している。

095　北海道地名誌
編著　NHK 北海道本部／北海道教育評論社
1975 ／ 291 ーホ
地方別、市町村別、項目別の地名事典。例を東川町に挙げると、上川地方の部にあり、まず町名の説明に始まる。そして「山岳・高原・岩壁」には旭岳、北鎮岳、沼の平、七福岩など、「河川・沢・峡谷・滝・湖沼」は北二線川、忠別川、ピウケナイ沢、天人峡、羽衣の滝、夫婦沼など、「温泉」は天人峡温泉、勇駒別温泉、「字名・町区名」に阿波団体、北忠別、光和、ノカナンなど、細かく立項し、地名の由来や位置を説明している。境界の山や川などは、複数市町村に記載される。市町村別に見るには、きわめて便利な事典である。

096　北海道と環境保護
編　札幌学院大学人文学部／札幌学院大学人文学部
2003 ／ 519 ーホ
札幌学院大学人文学部が 1998 年度に「北海道の環境保護」を共通テーマとした公開講座を開いた。10 人の講師による講義記録である。俵浩三「北海道の開発と自然保護―過去・現在・そして未来―」では、事例のひとつとして層雲峡における太田龍太郎の国立公園指定陳情に触れ、また士幌高原道路（然別湖）の経緯について語っている。

097　「新版」北海道の高山植物
梅沢俊／北海道新聞社
2009 ／ 471 ーウ
800 種以上を収録した高山植物の決定版、カラー写真は約 1,700 点と図鑑随一。

098　北海道の高山植物と山草
伊藤浩司／誠文堂新光社
1982 ／ 471 ーイ
北海道の植物 1,600 種から 630 種を選び、679 枚のカラー写真（梅沢俊ほか）と共に個々の植物を解説している。

099　北海道の地名
北海道地方資料センター／平凡社
2003 ／ 291 ー二
郷土歴史大事典・日本歴史地名大系 50 巻のうちの北海道編である。名の通り歴史的見地から記述している。総論、北海道（国別）、各支庁（各市町村別）など、独自の配列で解説する。国別とは石狩国、十勝国など 11 国。小項は巻末の索引から引き出すことができる。大雪山関連の記述も多い。

100　北海道の地名索引
栃木義正／北海道教育新報社
1980 ／ 291 ー ト
1973 年時点の国土地理院発行「５万分の１地形図」にある北海道 272 枚から収録した地名索引である。当時、２万５千分の１はまだ発行されていなかった。地形図に載っている全ての地名を、自然地名と集落地名に分けてアイウエオ順に並べ、地形図名とその位置を示している。自然地名とは山、岳、川、沢、沼、池、湖、峠、岬など。「羽衣の滝」を引くと天人峡だけでなく、中頓別にも同名の滝があることが分かる。なんと「丸山」は 56 山もある。「豊里」という集落も全道に 15 カ所ある。

101　北海道の伝説
編著　更科源蔵、渡辺茂／楡書房
1955 ー 1956 ／ 388 ー ホ
序を高倉新一郎、知里真志保が書いている。全 286 話を地域別に分け、「大雪山附近」の項で 22 話を記載している。本書はすべて出典を明記しているのが特徴で、例を挙げると「忠別川上流の地獄穴」（永田方正著「蝦夷雑話」）、「大雪山の伝説」（近江正一著「伝説の旭川及びその附近」）、「十勝岳と雌阿寒」（十勝高島、山越三次郎老伝）など。「太平洋岸」の項にも「十勝川上流の神座」（工藤梅次郎著「アイヌの民話」）など十勝側からみた大雪山系の伝説が数話ある。

102　北海道の百名山
編　道新スポーツ／北海道新聞社
2000 ／ 291 ー ホ
道新スポーツに連載された百名山。旭岳を速水潔、赤岳を阿地政美、黒岳を保田信紀が担当、地元ゆかりの執筆陣となっている。

103　北海道の野生動物
小田島護／北海道新聞社
1982 ／ 480 ー オ
エゾヒグマ、オコジョ、エゾモモンガ、エゾトガリネズミ、ゴマフアザラシ、サンショウウオなど、陸と海の哺乳類、爬虫類、両生類を 41 種類紹介する野生動物の生態図鑑。

104　北海道まちづくり 100 選
編　北海道、北海道新聞社、NHK 札幌放送局／北海道まちづくり 100 選実行委員会
1989 ／ 318 ー ホ
大雪山国立公園地域では９地域を紹介している。富良野市「麓郷の森」、上川町「エスポワールの鐘」、東川町「写真の町の氷彫刻のあるまち並み」、美瑛町「千代田公園」「拓真館」「美馬牛小学校」、上富良野町「日の出公園とラベンダー園」、士幌町「馬鈴薯コンビナート」、上士幌町「熱気球フェスティバル」、鹿追町「然別湖のイグルー村」、新得町「新得山スキー場のフラワーガーデン」。

105　北方昆虫記
河野廣道／楡書房
1955 ／ 486 ー コ
蝦夷ケ島時代の害虫、開拓に伴う昆虫相の変遷、アイヌが毒矢に用いた昆虫、昆虫のアイヌ名、大雪山の蝶など、読み物として面白い昆虫記。昆虫に関する古典ともいえる先駆的な一冊。

106　野外見分け図鑑　北海道の高山植物
梅沢俊／北海道新聞社
1986 ／ 471 ー ウ
1986 年から６回も増刷されている程のポピュラーな北海道高山植物の図鑑。

107　野鳥の羽ハンドブック
高田勝、叶内拓哉／文一総合出版
2008 ／ 488 ー タ
大雪山に生息する野鳥も載っている。運が良ければ羽を拾う事もあるだろう。家に持ち帰るには？持ち帰った後？羽が汚れていたら？整理方法、収納する時、鳥を丸ごと拾った時は？などの疑問に答える。

108　山　生きている大地
編　相賀徹夫／小学館
1978 ／ 454 ー タ
小学館の学習百科図鑑の一冊で、世界の山を科学的、登山的な視点から分かりやすく解説している。大雪山は美しい山の代表例として、旭岳の写真を挙げて解説している。ほかに火山、山の気象、山の生物、登山、山の怪異などの章がある。

109　山ことば辞典
著　岩科小一郎、編　藤本一美／百水社
1993 ／ 382 ー イ
―岩科山岳語彙集成―という副題がある。岩科は山村に古くから伝わる山ことばを収集、発表してきた。それに藤本の調査を加えて編集したのが本書である。猟師、杣夫、木地師など山里の方言も含んでいる。基本的には本州の言語であるが、全国的に登山用語として定着している言葉もある。ガラバ、ガレ、ツメ（沢の）、ナメ（滑）など。例…ヤチ＝谷を当てる。アイヌ語ヤチ（湿地）が語源である。ヤツ（谷、谷津）も同義語。

110　山と私たち ～北海道自然保護協会～
㈳北海道自然保護協会／㈳北海道自然保護協会
1992 ／ 462 ー ヤ
「火山と湖」に旭岳と姿見の池、山の自然案内人として東川町在住、塩谷秀和らを紹介しているほか、「北海道の山の本」「高山植物」などを紹介。

111　山の本販売目録
編　茗溪堂／茗溪堂
1975 ／ 025 ー ヤ
茗溪堂は山の本の販売店として知られており、自社でも山の本をよく出版した。「この図書目録は、茗溪堂で入手可能な、山と探検をテーマとする本を選んで作成したものです」とあり、分野別に分類された山の図書目録で、もちろん北海道の本もある。書名索引、編著者索引のほか、注文の仕方、小包料金早見表まで付されている。

112　山の履歴簿　第２巻
渡辺隆／北海道出版企画センター
2015 ／ 454 ー ワ
山について人がかかわることであればアイヌ語の山の呼び名から山小屋、山岳基地、山岳遭難、登山・縦走記録など文献書誌に遺されたことを事細かく記録している。一例をオプタテシケ山の「山名掲載資料」にとると、「ヲツタテシケ山」（蝦夷地図・重藏図）から「一名をクンルニという」（大日本地名辞書）など 26 項目に上る徹底ぶり。第 2 巻は北海道中央部の十勝火山群、占冠山地、日高山脈編。

113　山・やま事典
編　第二アートセンター、監修　近藤信行／大修館書店
1988 ／ 821 ー ヤ
漢字百話シリーズ「山の部」で、山の付く漢字がずらりと並んでいて壮観だが、読める字は少ない。「山なんでも事典」「故事・ことわざと山」「山嘘文字考」などの項があり、文字と言葉と写真でつづる山の百話とうたっている。「日本の名山」14 座のなかにトムラウシ山がある。

114　山を読む事典
編　徳久球雄／東京堂出版
1981 ／ 786 ー ヤ
編者は従来の事典の形を破り、読むことを前提としたという。自然、生活、文化など 6 部構成で、それぞれ専門家が論述する。北海道の山の節に大雪山の記述があるのは当然だが、それ以外の項にも断片的に大雪山関係の記述がある。例として索引から、ヒグマ、ナキウサギ、シマリス、ダイセツタカネヒカゲ、ダイセツヒトリ、永久凍土、構造土などを引いて解説を読むことができる。

115　吉田友吉の嵐山百科
吉田友吉／旭川旭山ビジターセンター
2004 ／ 291 ー ヨ
著者は上川町出身で、旭川営林局に長く勤め、旭川市の嵐山にある「北邦野草園」の造成を手掛けた。嵐山は勿論、大雪山に精通していた。北邦野草園長のころに講演や寄稿が多く、その際の詳細なメモを元に百科事典編集に取り組み「アイヌ」から「ワラビ」まで約 1,000 項目を解説している。

116　歴史の山 100 選
桜井徳太郎／秋田書店
1974 ／ 291 ー サ
山の持つそれぞれの歴史を知って登ると、また違った目線で山を感じる。大雪山の項は今村義孝が執筆。大雪火山群にアイヌは神霊の威力を感じたことから神々の庭と呼び、赤く焼けた山肌の比布岳を雷

神の天降るところと尊敬した―など、アイヌ伝承を紹介している。

研究書

学者、研究者、専門家の自然科学に関する学術論文、研究報告、関係機関の調査報告

2－1 研究書（全てが大雪山）

117　ＲＯＳ　利用者の多様性に応じた自然公園管理のあり方に関する調査研究報告書（その２）

代表　山口和男／－

2002／629－ヤ

ＲＯＳ手法による大雪山国立公園管理計画の立案―という副題がある。報告書は、ＲＯＳの考え方に基づいて、大雪山国立公園の管理計画をまとめたもの。1998年に発表した『ＲＯＳに関する報告書（その１）』の続編にあたる。

118　ＲＯＳ
～新たな自然公園管理に向けて～

代表　庄子康／山岳レクリエーション管理研究会

2005／629－ヤ

大雪山国立公園を「原生、自然、準自然、準整備、整備」の５つのゾーンに区分して、自然公園としての理想的な利用と管理について考察した報告書。大学の教授や研究者ら６氏が研究会を作り、大雪山のし尿問題とトイレ、湿地帯の木道などを根底から考え、ゾーンによって考え方が異なることを提起している。

119　旭岳

北海道地下資源調査所／北海道開発庁

1968／455－ホ

旭岳の５万分の１地質図幅と説明書。旭岳、忠別岳、トムラウシ山、白雲岳などを包含する山岳地帯の地質調査のまとめ。地層と岩石、黄金ケ原のカール、トムラウシの多角形土、流土階段、雪田雪蝕地形、天人峡や勇駒別温泉の湧出口と泉温などを調査した。

120　石狩川源流原生林総合調査報告
1952-54

石狩川源流原生林総合調査団／旭川営林局

1955／652－イ

松川恭佐を団長に植生班（舘脇操、高橋啓二）、地質班（石川俊夫）、他に気象、虫害、菌害などの専門分野に分けた調査団が編成され、昭和27、28年度に総合調査が実施された。

121　石狩川源流森林総合調査報告書

日本林業技術協会／旭川営林局発行

1977／652－イ

石狩川源流地域の第２次（昭和48～50年度）調査報告書。

122　石狩川上流高原温泉の植物

舘脇操／北海道大学植物園研究報告

1969／472－タ

高原温泉地帯は高温の地熱によって冬も雪が解け、地面がむき出しの所がある。学術的にも景観的にも異色の地域を舘脇をリーダーに鮫島惇一郎、伊藤浩司、佐々木太一らが調査した。当時は科学的に未記録の秘境だった。

123　石狩川上流のことども

舘脇操／「寒帯林」別刷

1970／291－タ

著者が石狩川に初めて出会った大正７年から、天皇陛下を高原温泉にご案内された昭和42年までの回顧。大正14年、層雲峡での夏期大学では「宮部金吾先生は上川駅から乗馬」「私は、膝栗毛に鞭をうちつつのお伴である」。「半世紀に近い年月の間、石狩川源流を楽しく歩かしてもらい、研究させてもらい、そして『その思い出の記』の最後を、両陛下をご案内した章でこの稿を結ぶ。明治っ子としてのよろこびである」。石狩川源流原生林の総合調査、洞爺丸台風、大雪国道、陛下の休日など。旭川営林局「寒帯林」別刷。

124　ウスバキチョウ

渡辺康之／北海道大学図書刊行会

2000／486－ワ

著者はウスバキチョウの研究、観察、撮影のために1971年から大雪山に通い続けている。半透明の黄色い翅に赤い鮮やかな斑紋をもつ美しい姿をとらえた写真に、食草のコマクサをかじる毛虫、石や枯れ枝に産み付けられた極小の卵など生態が写真によって一目で分かる。研究のまとめは過酷な条件下での越冬失敗、羽化不全、天敵など死因は興味深く、ほかに研究史、形態と変異、生活史、食草と吸蜜植物、生態観察記録など多岐にわたる。

125　エンレイソウ

鮫島惇一郎／北海道テレビ放送
1974 ／ 479 －サ

エンレイソウは染色体の研究に適している。著者のライフワークともいえるエンレイソウ研究が詰まっている。ＨＴＢまめほん。

126　上士幌町ひがし大雪博物館研究報告

上士幌町ひがし大雪博物館／上士幌町ひがし大雪博物館
1980 ～ 2005 ／ 069 －カ

大雪山国立公園と周辺の自然史に関する論文、短報、資料などを収録した研究報告書。東川町大雪山アーカイブスには 5 号（1980 年）から 6、7、8、9、12、15、20、22、27 号（2005 年発行）がある。カワゲラ、トビケラ、クモ、ハエトリグモ、コウモリ、鳥相、蛾類相、エゾライチョウなど調査、研究の対象が実にバラエティーに富んでいる。ひがし大雪博物館のホームページで検索できる。

127　観光の泣きどころ

舘脇操／北大季刊第 26 号別刷
1964 ／ 377 －ホ

北大季刊第 26 号に掲載。「昭和二十年代の末期より観光という言葉がホウハイと起こってからは、自然公園がソロバン公園と化し、政治公園もあらわれ自然はテンヤワンヤの状態」と嘆く。石狩川上流も第二次大戦中に木材資源の一大センターとなって原生林は痛めつけられ、昭和 29 年の第 15 号台風で大悲劇となり、それに輪をかける電源開発で渓畔林景観は失せたと憂えている。

128　高山植物園新設設計書

宮部金吾／
不詳／ 525 －ミ

年月日の明記はないが便箋 7 枚に記述された、宮部金吾直筆の大雪山に高山植物園を新設する計画書である。地域は山頂高山帯（白雲岳、小泉岳、赤岳、烏帽子岳の一帯）と山麓層雲峡である。（225 ～ 236 ページ　参照）

129　高山帯における登山道やその踏みつけによる被害への対応

小林昭裕／日本造園学会誌『ランドスケープ研究』61 － 5 抜刷
1998 ／ 629 －コ

大雪山中心部の登山道と、赤岳第三雪渓に限定した地点で観測した調査を、図表とともに論述している。赤岳第三雪渓では雪渓の後退とともに変化する動線を図示、本来の登山道からはずれて踏み跡が複雑に交錯する状況がわかって興味深い。立地環境の特性、かつ利用者の歩きやすさを考慮した対応が必要という。

130　高山蝶

渡辺康之／築地書館
1986 ／ 486 －ワ

高山に生息している蝶についての生態が詳しく記されている。中でも大雪山のウスバキチョウについて仔細に深く研究している。

131　山岳性自然公園における利用者の意識構造に関する研究

小林昭裕／専修大学環境情報科学研究所（美唄市）
1997 ／ 629 －コ

調査範囲は表大雪から東大雪、トムラウシ、十勝までほぼ国立公園全域にわたっていて、調査方法は利用者（登山者）へのアンケートを基本としている。図表を多用しながら利用者の実態を考察、今後の保護と対応について論述する。85 ページの論文。

132　山岳　第拾貳年第二・三號

小泉秀雄／日本山岳會事務所
1918 ／ 786 －サ

小泉秀雄の「北海道中央高地の地学的研究」ですべてを埋めている。「山岳」は様々な人たちの山に関する寄稿で編集されてきたが、第 12 年（大正 7 年）の第 2 号、3 号は合併号にしたうえで小泉の寄稿を特集した。つまり、大雪山の紹介特別編になったわけで、このような構成は「山岳」の長い編集史で後にも先にもこれのみ。附録の大正 6 年、小泉秀雄制作の 20 万分の 1 地図に「羽衣滝」の記載がある。羽衣の滝は大正 7 年、大町桂月が命名という通説はこの地図からも明らかに誤りである。

133　自然公園における野外レクリエーションに伴う過剰利用に処するための方策

小林昭裕／専修大学北海道短期大学紀要・第 29 号別刷
1996 ／ 629 ーコ

過剰利用、管理、自然公園、利用体験、機会、資源をキーワードに論じている。文末の参考文献に「自然公園等における自然とのふれあいの確保の方策について」（阿部宗広）などの研究論文を数多く記している。

134　斜面上に分散した登山道が形成される要因

小林昭裕／環境情報科学センター
1995 ／ 519 ーコ

第 8 回環境情報科学論文集の別刷り。登山者の踏みつけによる裸地化を調査した研究論文。調査地は大雪山白雲岳分岐から白雲岳避難小屋にいたる登山道で、登山者の選択ルートを実測したデータである。本来の登山道（逆 S 字状）からはずれた新たな踏み分けは、最短ルートに沿って分布することがわかり、裸地化が拡大、現在も進行中という。

135　大雪火山群の研究

㈶日本自然保護協会／㈶日本自然保護協会
1963 ／ 402 ーダ

大雪山は学術的に、ユーラシアと北米両大陸亜寒帯地域と比較研究する上で重要な区域に位置づけられ、日本自然保護協会が 1959 年から北大に調査を委託した。田村剛が自然保護、石川俊夫が地形と地質、舘脇操が植物、犬飼哲夫が動物、渡辺千尚が高山昆虫、そうそうたる学者が担当、執筆した。英文付き。

136　大雪山

北海道地下資源調査所／北海道開発庁
1966 ／ 455 ーホ

北海道総合開発の一環として、地下資源開発の基本調査であり、5 万分の 1 地質図幅と説明文から成る。大雪山の地層と岩石、火山の発達史、鉱床、温泉などについて 3 年がかりの野外調査をまとめた。

137　大雪山系自然生態系総合調査
大雪山系現存植生図

北海道生活環境部自然保護課／北海道生活環境部自然保護課
1981 ／ 462 ーホ

北海道が北大に調査を委託した 2 年がかりの大雪山系自然生態系総合調査の一環として、植生図概説と植生図（Ⅰ）（Ⅱ）を作成した。

138　大雪山国立公園　研究・文献集

大雪山国立公園連絡協議会／大雪山国立公園連絡協議会
2010 ～ 2013 ／ 519 ーダ

大雪山国立公園連絡協議会が膨大な数に上る研究資料をまとめ、ファイルに綴じたもの。国立公園編①②、鳥類編①②、植物編①②③④、昆虫編①②③④⑤⑥⑦、雪氷・気象編①、地質編①②③④、ほ乳類編。大雪山に多くの研究者が訪れ、広大な山で様々な研究を続け、発表していることが研究資料の分厚さからうかがえる。大雪山は自然の雄大さもさることながら、人がかかわる文化の面でも豊かな宝庫となっている。

139　大雪山昆虫誌

保田信紀／北海道自然史研究会
2014 ／ 486 ーヤ

昆虫の研究者らが大雪山で発見し、記録した昆虫をすべて書き留めた労作。著者は黒岳、白雲岳などを中心に大雪山に 800 回以上登った昆虫研究家で、羽が退化したダイセツタカネフキバッタなど新種発見も多い。

140　大雪山水系及び洪水の研究

中谷宇吉郎ほか／農業物理研究所
1950 ／ 452 ーナ

財団法人農業物理研究所が昭和 21 年から道内各地で調査、研究してきた報告書のうち、大雪山系の水資源に関する研究、忠別川の出水及び氾濫に関する研究、石狩川の洪水に関する研究を選んで 1 冊にまとめた。

141　大雪山積雪水量及び流出調査

編　経済安定本部資源調査会／北海道庁
1949 ／ 451 ーダ

調査を主導したのは雪と氷の科学者、随筆家としても著名な中谷宇吉郎である。実際に現地で調査したのは中谷の指導を受けた北大低温科学研究所員、菅谷重二

で、多くの写真と図表を用いて報告書にまとめた。調査は忠別川上流域から山稜に至る範囲で、積雪期から融雪期まで長期にわたった。この種の調査は日本で初めてで、雪の水資源としての知見を得ることができた。菅谷は後に菅谷水質資源研究所を設立した。

142　大雪山（特別調査報告書）
編　北海道教育委員会／北海道文化財保護協会
1965 ／ 402 ーダ
1984 年 7 月 6 日から 12 日まで実施された大雪山の動植物、昆虫、地質などの学術調査報告書である。総隊長は最高齢 82 歳の武田久吉をはじめ学者、専門家、それに協力員として営林局、北海道庁、地域町の関係者、北大探検部員、北大山岳部員、報道各社など、参加者は延べ 80 人に及ぶ。

143　大雪山の哺乳類に関する文献（1）
出羽寛／層雲峡博物館
1985 ／ 482 ーデ
大雪山の哺乳動物に関する研究報告について、1930 年代のナキウサギの発見を手始めに、北大ヒグマ研究グループの K 子ファミリーの行動観察まで、81 点の文献目録を挙げている。

144　大雪の蝶
田淵行男／朝日新聞社
1978 ／ 486 ータ
ウスバキチョウ、ダイセツタカネヒカゲ、アサヒヒョウモン、クモマベニヒカゲ、カラフトルリシジミ、大雪山の代表的な５つの蝶の生態写真集、解説書。チョウに関する優れた観察と見事なまでの写真、研究書として日本を代表する一冊、箱入り。一方､田淵行男のデビュー作｢高山蝶｣（1959 年、朋文堂）については完成するまでの苦闘、夫婦愛、家族愛がテレビドラマ化されるなど後世に名を残す貴重な本であり、東川町が寄贈を受けた鮫島惇一郎博士の蔵書に 1 冊入っていた。

145　十勝岳山彙の植物
舘脇操／旭川営林局
1950 ／ 472 ータ
十勝岳、富良野岳、上ホロカメットク、美瑛岳の樹木、草本の調査報告。十勝岳連峰の山々は地学的年代を異にし新噴火口、旧噴火口、泥流、湿原もあり、生態学的に見た方が興味深い。ハイマツは富良野岳に発達し、十勝岳は最も悪く、爆発の時期と斜面、沢の条件に支配されている。

146　十勝岳爆發概報
田中館秀三／大雪山調査会
1926 ／ 453 ータ
「大正一五年五月二四日。突如として起つた十勝岳の大爆發は泥流を流す事實に六里餘。途中の森林を薙倒し且つ數千の移住民が三〇餘年間辛苦をなめ拮据經營した約一〇〇〇町歩の美田と約五〇〇町歩の耕地とを瞬時の間に泥流の海と化し去つた」（序から引用）。北大助教授、田中館らが上富良野、美瑛の被災地に直ちに調査に入った。爆発の原因は多量の融雪水が火口付近地下の水道を流下し、火口管中を上昇した溶岩によって一気に水蒸気爆発を起こした。火口の沼にたまった融雪水、山の残雪、爆発に伴う豪雨などが破壊的泥流の元になった。荒井初一が会長を務めた「大雪山調査会」が爆発から 1 カ月後の 6 月 25 日に概報を発行した。

147　ヌタプカムシペとニセィカウシペ
村上啓司／北海道林務部報『林』1971 年 9 月
1971 ／ 291 ーム
著者はアイヌ語の山名の研究家である。ヌタプカムシペとニセィカウシペの山名解について、小泉秀雄、更科源蔵、知里真志保、山田秀三らの諸説を検討しながら、山田説を正答としている。すなわち『川の湾曲した中の地・を覆って・いつもいる・もの』と解く。ニセィカウシペは、知里真志保説をとって、『断崖絶壁・の上に・いつもいる・もの』と解する。

148　風災 1400 萬石
上川営林署／上川営林署
1955 ／ 654 ーフ
上川営林署の経営のしおり№Ⅲ。大雪山の洞爺丸台風被害を写真、図などで詳細に解説している。

149　北海道　地図で読む百年
編　平岡昭利／古今書院
2001 ／ 291 ーホ
全道の主要 27 地域について、地図を提示しながら紹介している。「開発志向保全志向の国立公園へ―大雪山國立公園」の項で、層雲峡地区、旭岳温泉地区、十勝三股地区について、旧新の 5 万分の 1

地形図を対比しながら説明している。旭岳ロープウェイは古い硫黄採掘索道がそのまま活用されたことがよく分かる。筆者は北海道教育大学・武田泉。

150　北海道中央高地の高山植物

舘脇操、鮫島惇一郎／北海道大学農学部附属植物園
1959／471 ー タ

大雪山は、高山植物の研究上、まことに注目すべきところであり、小泉秀雄以来の調査を総括したうえで、報告がまとめられた。

151　北海道の森林風害記録

北海道森林風害記録作成委員会／北方林業会
1959／654 ー ホ

昭和 29 年、5 月の暴風と 9 月の台風 15 号による林業被害と処理報告、保護施策をまとめた。大雪山は台風で大きなダメージを受けており、森林が復興してきたのはこのときに林業に携わった大勢の方々の力による。

152　利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策

小林昭裕／日本造園学会誌『ランドスケープ研究』60 ー 5 抜刷
1997／629 ー コ

調査は大雪山白雲岳野営指定地、赤岳第三雪渓、ひさご沼野営指定地、沼の原で行う。アンケート用紙を配布、帰宅後郵送という方式で回収した（一部は現地回収）。アンケートのデータ分析結果から、高山帯において利用者が重視する環境と活動を提供するには、利用規制計画、保護施設計画、保護規制計画を相補的に考えるべきであると考察する。

2－2 研究書（部分が大雪山）

153　荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書

播磨秀幸／私家版
2012／366 ー ハ

荒井建設株式会社（旭川）の創業者、荒井初一は層雲峡開発に尽力し、層雲閣を経営、「大雪山調査会」会長として大雪山を全国的な観光地へ飛躍させた功労者として知られる。層雲峡にあった第七師団転地療養所の建物を寄付し、上川から層雲峡までの道路開設の巨費を負担し、その功績を明記した記念碑がある。ところが陸軍大将の放談記に荒井の功績をゆがめるような記述があり、史料として使われることもある。著者は歴史調査が趣味の同社社員。豊富な資料を元に荒井の功績を正しく伝える一方、大将の名も放談記の書名も明かさず、あくまでも奥ゆかしい。書名は「荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書」ではあるが、層雲峡開発にまつわるエピソードを深く調査している。

154　石狩川水利総合開発計画調査報告（大雪ダム調査報告）

編　北海道開発庁／北海道開発庁
1964／517 ー イ

表題の通りであり、内容は専門的なので省略する。「大雪ダム計画平面図」を添付してある。この一帯は小泉秀雄が「奥山盆地」と称した。ダムは 1975 年に竣工、大雪湖と呼ばれる観光地となった。

155　一等三角点のすべて

編　多摩雪雄／新ハイキング社
1986／512 ー イ

登山者にはなじみの深い三角点について、目的や歴史、種類を詳しく解説している。一等から四等まであり、都道府県別では北海道が断然多く、一等三角点は 224 点、少ないのは大阪府でわずか 4 点しかない。大雪山系では、瓊多窟（ヌタック、旭岳）、富良牛山（トムラウシ山）、神女徳岳（カメットク岳、富良野岳）、無類山（武利岳）、音更山、烏辺珊山（ウペペサンケ山）がある。点名と山名の違いからも、まだ山の名も定まっていない頃を物語る。一等三角点の標石は重量が 90㎏、二等と三等の三角点標石は 64㎏もあり、道なき道を人力で担ぎ上げたのだから驚くほかはない。一等三角点研究会は、一等三角点百名山を選定した。

156　蝦夷古地図物語

梅木通徳／北海道新聞社
1974／291 ー ウ

著者は古地図の収集家、研究家である。近世以降の古地図を図示しながら歴史的に解説する。まだあいまいな北海道の形を見るだけでも大いに興味をそそる。大雪山のあたりもただ山の形を描いているだけだ。伊能忠敬、高橋景保、間宮林蔵、松浦武四郎らの作図力の高さに著者は驚嘆している。

157　エゾヒグマ　その生活をさぐる
北大ヒグマ研究グループ／汐文社
1983 ／ 489 －ホ
北大ヒグマ研究グループが調査研究を始めて 12 年めに発行された。最初に選んだ調査地が大雪山高根ケ原一帯で、糞や食痕などを調べ、1980 年には母グマと 2 頭の子グマのケイコファミリーの観察を続け「ケイコと名前を与えるまでに、我々は彼女に対して親しみを持って接した」などと書いている。調査地を小樽・朝里や根室標津、知床、北大天塩演習林などへと広げ、冬眠や知床でのサケ、マス捕食など生態を詳述、猟師の穴狩りなどを紹介している。

158　えぞまつ・とゞまつ
舘脇操／北海道林業会
1948 ／ 653 －タ
林業解説シリーズの 4。編集の加納一郎が著者・舘脇博士の人物像を「かたぶとりでせいはやや高いといえるだろう。どんな山のなかを歩くにもことかかぬ健康の持主で、口をひらけばものやさしい言葉にかぎりない情熱をのせ、めがねの奥には、いつも理知的な目が澄んでいる」と言い当てている。層雲峡奥の大学平の原生林は「ちょっとやそっとでは再び見られそうもない」と感嘆し、シロエゾマツ、アカミノエゾマツ、アオトドマツ、愛山渓付近や十勝岳吹上温泉付近の火山地系アカエゾマツ林など純粋にエゾ、トドの林学解説書。

159　金井弘夫著作集
著　金井弘夫、編　大場秀章／アボック社
2008 ／ 470 －カ
「植物・探険・書評」のサブタイトルがあり、本書はこれらの著作をまとめたもので、大雪山関連の記述がある。著者は植物学者、理学博士、国立科学博物館名誉館員。『ヒマラヤ地名索引』『新日本地名索引』『日本植物分類学文献目録』などの大著があり、吉川英治文化賞受賞。

160　**北の火山**
石川俊夫／楡書房
1956 ／ 453 －イ
全道各地の火山について写真と図で説明する。大雪山系は「層雲峡と天人峡」「大雪山」「然別火山群」「十勝岳」である。「噴火と災害」では、1926 年の十勝岳噴火の大惨事を記している。

161　原色蝶
渡辺康之、小田島護／家の光協会
1980 ／ 531 －ワ
日本で記録された蝶類は、およそ 230 種類で、その大部分はめったに一般の目に触れることがない。176 種類を生態写真で紹介している。

162　国立公園成立史の研究
村串仁三郎／法政大学出版局
2005 ／ 629 －ム
日本の国立公園制定史の考察を通じて、開発と自然保護の確執の歴史を解明し、国立公園がもっている法的な弱点がどのように形成されてきたかを明らかにする。巻末に 50 音順の人名索引、事項検索があり、「太田龍太郎」「大雪山」などがどのページに書いてあるか確認し、拾い読みができる。

163　国立公園の法と制度
加藤峰夫／古今書院
2008 ／ 629 －カ
日本の国立公園の特徴や公園地域の指定と管理、「地権者」の権利と義務、国立公園を利用する際の「ルール」などを解説。現在の課題と将来の方向性についても取り上げる。参考資料として、国立公園と国定公園一覧を掲載。

164　故・小泉秀雄先生の野帳（1）
編　横内文人／長野県植物研究会誌
2006 ／ 470 －コ
小泉秀雄の野帳は全 60 冊、秀雄夫人ミサオから横内斎に譲渡された。三男・文人がその野帳を筆録、『長野県植物研究誌』（年報）に掲載したものである。北海道の植物目録は省略されているが、調査地、日付、同行者などは記載されていて、調査活動の足跡がよくわかる。さすがに大雪山系の記録は多い。筆録は現在（10）まで、その後も続行中でやっと 1923 年まできた。全冊解読、筆録によって小泉の調査の全貌が明らかになると思われる。

165　自然景観の成り立ちを探る
編　小泉武栄、赤坂憲雄／玉川大学出版部
2013 ／ 450 －シ
自然地理学者と民俗学者の編者二人の対談。七人の学者がそれぞれの研究分野から自然を眺める。一般向きに書かれてい

て分かりやすい。大雪山関連は少ないが、「風穴を探る」（清水長正）は、東大雪西クマネシリ岳山中の風穴の紹介で、「十四の沢永久凍土」は上士幌町指定天然記念物。

166　自然保護と戦後日本の国立公園
村串仁三郎／時潮社
2011 ／ 629 －ム
著者の「国立公園成立史の研究」の続編。第 11 章に「大雪山国立公園内の層雲峡電源開発計画と反対運動」「大雪山国立公園内の硫黄鉱山開発計画と反対運動」がある。前者は大雪湖（大雪ダム）の電源開発計画の経過と、反対運動に対する「適切な補償」として「大雪山観光道路開削」が町側から提起されたことを詳述している。後者は御鉢平での計画だったが国立公園審議会がハナから申請を却下し認めなかった。

167　森林をみる心
編著　四手井綱英、林知己夫／共立出版
1984 ／ 650 －シ
「森林と分化」国際シンポジウムからの報告として 1 冊にまとめたもので、第 5 章「コタンの森から」は鈴木紘一（旭川）執筆、大雪山の森林も含めた論稿がある。

168　十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書
財団法人日本自然保護協会／財団法人日本自然保護協会
1982 ／ 462 －ト
環境省は、人の活動や開発で影響を受けていない地域を自然環境保全法に基づいて保護、観察、調査、研究している。調査した保全地域は、大雪山国立公園南端の原生林的景観が濃い部分で、ヌプントムラウシ川とトムラウシ川の合流点、沼ノ原山、六ッ沼山の三点を結ぶ三角形に囲まれた地域。地形・地質・土壌、植物、動物について調査した。

169　登山道の保全と管理（自然公園シリーズ 1）
渡辺悌二／古今書院
2008 ／ 629 －ワ
登山道荒廃の現状と登山道の維持管理に関する最新の成果をまとめた。登山道問題の背景と課題をはじめ、各種の調査・研究手法、維持管理のための工法、新しい維持管理の考え方とその実践などを解説する。写真は黒岳石室付近のガリー浸食、白雲岳避難小屋附近の深さ 1.5 mを超える浸食、ボランティアによる大雪山系の木道設置作業など、大雪山で撮ったものを多く引用している。

170　日本活火山総覧（第４版）
編　気象庁／気象庁
2013 ／ 53 －ニ
Ⅰ北海道・東北、Ⅱ関東・中部・伊豆・小笠原、Ⅲ中国・九州・沖縄・北方領土の 3 冊。DVD 付き。口絵に 1988 年 12 月 25 日の十勝岳噴火、火砕流が載っている。「常時観測火山」対象の大雪山や十勝岳の詳細を記載しているのをはじめ、気象庁がまとめた火山詳報。

171　日本の自然・北海道
編　小疇尚、福田正己、石城謙吉、酒井昭、佐久間敏雄、菊池勝弘／岩波書店
1994 ／ 450 －チ
地域別全 8 巻のうちの第 1 巻である。大雪山は、「今も生きる永久凍土―大雪山」で、学術的に詳しく説明している。氷河期の生き残り、エゾナキウサギとエゾマメヤナギも解説する。

172　日本の重要な植物群落　北海道版
環境庁／大蔵省印刷局
1980 ／ 471 －カ
緑の国勢調査ともいわれる第 2 回自然環境保全基礎調査の特定植物群落調査の報告書。大雪山高山植物群落など。

173　日本の山と高山植物
小泉武栄／平凡社
2009 ／ 454 －コ
平凡社新書。山域別ではなく現象別に章立てし、大雪山は代表的な山として各所に出てくる。日本アルプスや大雪山に高山植物がたくさんあることは、世界的な視野に立って考えると、大変不思議なことだと著者はいう。氷期、気候、高度、地質、地形、地理などが作用して日本の山を作り上げた。その観点から、山と高山植物の関係を理解して山を楽しむ本。「あなたはなぜ山に登るのですか」と聞き取り調査した結果、気分転換、ストレス解消、健康のため、登頂の達成感、百名山制覇（百名山病患者というらしい）などで優に 7 割を超えたそうで、著者はもっと自然観察の目を持って登山を楽しんでほしい、という思いをこめている。

174　日本の山はなぜ美しい
小泉武栄／古今書院
1993 ／ 454 －コ
副題に－山の自然学への招待－とあり、著者が「私の博士論文を随筆風に書き直した」。日本の山の特筆、自然景観の美しさを知ってほしいという思いから、全国の山を歩き、なかでも木曽駒ケ岳と白馬岳周辺は自然観察ルートマップを挿入して、分かり易く案内している。学術調査の旅、論文作成の苦労話、かかわった人たちのことも加わって興味深い。大雪山では「小泉岳の永久凍土を調べた…小泉岳という山の嘗めと私の名前がよく似ているので、変に思った人もいたようだ」とも書いている。

175　日本風景論
志賀重昂／文武堂
1948 ／ 291 －シ
風景について学問的に考察、論じた日本では最初の本。地理学から観た日本の風景だけではなく、文学、生活、歴史などあらゆる分野から風景を考える。中でも「登山の気風を興作すべし」は当時の山岳界に大きな影響を与えた。

176　日本風景論
志賀重昂／岩波書店
1995 ／ 291 －シ
文庫版。

177　日本名勝地誌　第９編 北海道之部
松原岩五郎／博文館
1899 ／ 291 －マ
ヌタクカムシュペと呼ばれていた山に、大雪山と名付けたのが松原岩五郎で、この本はまさに歴史的な一冊。108 ページにだいせつざん、109 ページにたいせつざんと振り仮名が二通りあり、今もだいか？たいか？濁るのか濁らないのか？論議の種になる。鳥取県西部、現在の淀江町（よどえちょう）で生まれ育った岩五郎が、ふるさとの山、大山によく似ている、雪に覆われた「大山」という意味で「大雪山」と名付けたと伝えられている。

178　北海道の自然保護
その歴史と思想
俵浩三／北海道大学図書刊行会
1979 ／ 519 －タ
北海道の自然保護を歴史を追って詳細に書いた一冊。国立公園の展開の項では、大雪山が当初、候補地となっていなかったものを、道庁が独自に「北海道ニ於ケル国立公園候補地調査概要」をまとめた際、大雪山の景観が付記されたことなど興味深い史実を書いている。

179　北海道の自然保護　その歴史と思想
俵浩三／北海道大学図書刊行会
1990 ／ 519 －タ
「自然をみる目」から書き起こし、「産業・観光開発優先から自然保護優先へ」まで著者の思いが貫かれ、本書の第 1 刷で国立公園協会が創設した第 1 回田村賞を受賞している名著。米国でホント、ウソの話題となった大雪山国立公園の「樹霊碑」のエピソードや、大雪山が国立公園となるまでの歴史的な論争などを紹介している。1979 年第 1 刷の増補版。

180　北海道・阿寒・大雪山国立地区観光診断報告書
日本観光協会／北海道
1962 ／ 689 －ホ
北海道が日本観光協会に委託した報告書。大雪山国立公園の課題は、山岳地帯の全貌が一般観光客に知られていないことであり、縦貫観光道路の必要性、ロープウェーの魅力と必要性を説き、天人峡の両岸の絶壁の上の台地にエレベーター等の昇降施設を設けて台地の開発をすべきと提案している。

181　北海道教育大学 大雪山自然教育研究施設研究報告
北海道教育大学大雪山自然教育研究施設／北海道教育大学大雪山自然教育研究施設
1962 ～／ 405 －ホ
旭岳温泉にある北海道教育大学自然教育研究施設を拠点に教員、研究者、学生らが調査、研究活動を続け、1962 年 3 月に「研究報告」を創刊以来、これまでに 49 号を発行している。年 1 回、400 部を刷り、寄贈、配布する。（219 ～ 224 ページ　参照）

182　北海道高山植物図譜　附菌類
小泉秀雄／私家版
1918 ／ 471 －コ
「大雪山の父」といわれる小泉秀雄自描の着色図譜で、旭川中学校教諭時代に作った和綴じ本。第一・顕花植物部、第二・隠花植物（菌類ノ外高山産）部・甲－菌蕈類、乙－地衣類・蘚苔類・羊歯類をもっ

て構成する。合わせて 219 種の植物を図示する。現物は小金井の小泉家が所有し、東川町にはそのコピーがある。

183　北海道地名一覧

栃木義正／私家版
1986 ／ 291 ー ト

地名研究家・栃木義正は前著『北海道地名索引』をベースに本書を著した。特徴とするところは、5 万分の 1 地形図の位置と地名の由来、出典を明記したところにある。ただし山や川などの自然地名は割愛、市町村名を含む集落地名を 50 音順に配列してある。一例をあげると、「東川」は、東川町 = 東・川の意訳か（山田秀三）。そのほか黒松内町、苫前町、新冠町、釧路市、函館市にも東川がある。「旭」「朝日」「旭町」「朝日町」がいかに多いかも一目瞭然にわかる。町名も「ちょう」と「まち」と、呼び方が違うことも記してある。

184　北海道ニ於ケル國立公園候補地調査概要

北海道廳拓殖部／北海道廳拓殖部
1931 ／ 629 ー ホ

序に「内務省ニ於テ本道ノ國立公園候補地トシテ選定セル阿寒、登別、大沼ノ三景勝地」とあり、別項に「大雪山ハ交通機関不備ナリシ爲洽ク世人に知ラレサリシカ（中略）國立公園候補地タル資質充分ナルト認メラルルヲ以テ前記阿寒、登別、大沼ノ三候補地ニ加ヘテ（中略）概要ヲ附記スル」とある。つまり、大雪山は国の選定から漏れており、道庁が大雪山を付記した。選定経過が分かる歴史的な調査報告書。

185　北海道の火山

高橋正樹、小林哲夫／築地書館
1998 ／ 453 ー ホ

火山の地形と構造を知るのも山の見方が変わる。十勝火山群の登山コース・地図があり、「チャレンジして損はありません」。

186　北海道の活火山

勝井義雄ら共著／北海道新聞社
2007 ／ 453 ー ホ

道内の活火山の噴火暦、特徴、今後の注意が詳しく記されている。美瑛の丘は十勝岳大規模噴火の火砕流跡、層雲峡や天人峡の柱状節理も噴火による。

187　北海道の地震と津波

笠原稔、鏡味洋史、笹谷努、谷岡勇市郎／北海道新聞社
2012 ／ 453 ー カ

書名から大雪山と関係ない一冊に思われるが、十勝岳の爆発地震がある。火砕流、火砕サージをシャンパンのコルク栓にたとえて説明するなど分かり易い。

188　北海道の自然と生物 1 ～ 10

代表編集員　西島浩／榧書店
1989 ～ 1996 ／ 405 ー ニ

創刊号に、俵浩三が「国立公園の保護と利用の原点を探る」として、大雪山国立公園をさまざまな角度から検証している。第 10 号で終刊となった。第 4 号欠。

189　北海道のスキーづくり

佐藤徹雄／市立名寄図書館
1958 ／ 784 ー サ

名寄叢書の第 4 巻。著者は高校教諭であり、スキー研究家である。スキーの発祥に始まり、北海道のスキー発達史、スキーづくりの歴史にまで及ぶ。レルヒ中佐と旭川第 7 師団、1913 年（大正 2 年）には早くも旭川中学の生徒もスキーを始めたこと、旭川にはかつて、スキー製作工場が 10 軒もあったことなどを調べ、記述している。北海道のスキー場と索道設備表では、ロープウェイ、リフトなどの設備を 5 類に分けて表示。大雪山スキー場、層雲峡スキー場などは「普通」閉鎖式搬器（扉を有する箱型、人及び物を運送する）と呼ぶ。一般的なリフトは「乙」椅子式搬器（外部に開放された座席で構成された搬器）という。

190　北海道本島高山帯植物の分類学的類別研究

舘脇操／札幌農林学会報
1938 ／ 471 ー タ

1934 年発行の札幌農林学会報に載せた緒論に「近時北海道に於ける高山植物の研究勃興せるに依り、研究資料の一端にもと、茲に本文を草する」とある。シダから始め「むらさきかうらいめしだ：中井博士が大雪山々麓地帯に採集し、1930 年天然記念物報告植物之部第十二輯十一頁に於て発表せられたもの」など、大雪山や中央高地での標本原採集が多い。1936 年に第 2 報、1938 年に第 3 報をまとめた。

191　北海道・緑の環境史

俵浩三／北海道大学出版会
2008 ／ 519 －タ

本の帯に「長らく北海道自然保護協会会長を務めた著者が、自らの体験を踏まえ、北海道の環境保護の歩みをまとめた、次世代に託すバトン。渾身のライフワーク！」とある。愛別村長・太田龍太郎の「霊山碧水」など大雪山国立公園に関する記述もあるが、北海道全域の森林資源の利用と管理、優れた自然環境の保全、「民唱官随」で前進する自然保護など広範に調べ記述している。巻末の引用・参考文献は膨大である。

192　水と私たち

編集委員　俵浩三、鮫島惇一郎、成瀬廉二、八木健三／社団法人北海道自然保護協会
1989 ／ 498 －ホ

一般向け自然保護読本の第二弾。３章９話から成る。石狩川を大雪山系の水源まで溯ると、大雪溶結凝灰岩の見事な柱状節理や天人峡の羽衣の滝に行きつくこと。人口密度の高い地域に豊富な雪が降るのは世界中を見渡しても日本の他になく、天然資源の少ない日本だが、雪による水資源だけは比較的豊富なことなどを解説している。

193　緑の文化史

俵浩三／北海道大学図書刊行会
1991 ／ 518 －タ

副題に「自然と人間のかかわりを考える」とある。人間は自然なしには生きられないと説く筆者が、ペリーの黒船と植物ウオッチング、コロンブスの贈物（植物）、霧島で伐採された東大寺の柱など、古今東西の緑の文化史を書いた。国立公園の項で霊山碧水の国立公園化を進言した太田龍太郎を紹介。土地の私有化を抑え公共性を優先する、いわば自然保護重視の『大雪山型』と国立公園の一つのパターンを定義している。

194　森と私たち

編集委員　俵浩三、辻井達一／社団法人北海道自然保護協会
1988 ／ 464 －ホ

道自然保護協会の八木健三会長があとがきに『小学生向きの「自然とわたしたち」、中学生向きの「自然を読む」、高校生向きの「自然を考える」につづく自然保護読本として、社会人を対象とした「森と私たち」を発行する』と書いている。森と樹木について 13 話。鮫島惇一郎が大雪山の地形、地学的条件の多様性が高山植物群落の多様性につながっているなどと、森のなりたちの章に書いている。

195　山歩きの自然学

小泉武栄／山と渓谷社
1998 ／ 454 －コ

日本の山 50 座の謎を解く―という副題がついている。カラー写真もたくさんあり、見開き全面の写真は見ごたえがある。50 山のうち北海道の山も多いが、大雪山系では、「永久凍土が広がる北極圏の飛び地―大雪山（旭岳）」「植物の垂直分布を逆転させた風穴―東ヌプカウシ山」がある。

196　山と書物／続・山と書物

小林義正／築地書館
1963 ／ 786 －コ

著者は山岳図書研究家であり収集家である。江戸時代から現代まで、国内外の古書、限定本を収集した。本書は写真図版も多く、山岳書誌研究書としては画期的な名著である。ただ大雪山の本としては、『大雪山　登山法及登山案内』（小泉秀雄）、『大雪山及石狩川上流探険開発史』（河野常吉）のみである。

197　山と私たち

編集委員　今村朋信、鮫島惇一郎／社団法人北海道自然保護協会
1992 ／ 462 －ホ

自然保護読本の第３弾「身近な自然」（1990 年発行）に続く第４弾が山。勝井義雄が「火山と湖」を書き、大雪山と姿見の池などを解説。高澤光雄「北海道の登山史」、清水敏一「北の山の名著を訪ねて」、村上啓司「北海道の山の名（アイヌ名を主として）」など 13 話。

198　山の自然学

小泉武栄／岩波書店
1998 ／ 454 －コ

岩波新書で、帯に「山歩きはもっともっと楽しめる」とある。カラー口絵、写真、地図、高山植物のカットも適所に挿入されていて親しみやすい。北から南へ特徴的な山について記しているが、大雪山関係では、「氷河時代の植物群―礼文島・東ヌプカウシヌプリ」「火山と永久凍土―大雪山」の項を設けて記述している。

199　山の資料
登山ハンドブックシリーズ６
編　山岳研究会／ベースボール・マガジン社
1978 ／ 786 －サ
近代登山における最初の本「日本風景論」が出版されたのは明治 27 年で、それからの代表的な登山関係本の紹介と海外の本、さらに、日本と海外の登山史年表、登山クラブをまとめている。ここで紹介している「日本風景論」、大島亮吉の「山―研究と随想」などは東川町も保管している。

200　山を読む
小疇尚／岩波書店
1991 ／ 454 －コ
著者は登山をよくする自然地理学・地形学の専門家。シリーズ自然景観の読み方全９冊のなかの１冊。日本の山はそれぞれ独特の顔を持っている。鋭いピーク、のしかかる岩壁、切り裂かれた深い谷、なだらかな高原のお花畑、穏やかな裏山など、山が見せるさまざまな表情を読んで、山の個性が生み出されてきた由来を考える本。大雪山は永久凍土、構造土などの代表例として説明している。

201　利用者の行動と体験
（自然公園シリーズ２）
小林昭裕、愛甲哲也／古今書院
2008 ／ 629 －コ
国立公園や自然公園の計画、管理において、利用者の行動や意識から問題解決を目指す基本的な考え方、具体的な方法、取り組みについて幅広く紹介している。「山のトイレ問題の研究と解決への取り組み」を愛甲哲也が提起している。主要な研究地が大雪山でもあり、引用例や写真にも大雪山関連が多い。

202　レンジャーの先駆者（パイオニア）たち
財団法人自然公園財団／財団法人自然公園財団
2003 ／ 629 －レ
国立公園管理員制度発足 50 周年記念に作られ、サブタイトル「わが国の黎明期国立公園レンジャーの軌跡」とある。大雪山国立公園の初代勇駒別管理員は二橋愛次郎で昭和 48 年着任、「クリーン大雪運動」を根付かせた。層雲峡駐在は東川より 20 年早い昭和 29 年、富永有が着任。旭岳を初巡視したとき突然、子熊に遭遇、山小屋に逃げ込んだことなど、全国各地の国立公園レンジャーらが回顧を書いている。

実録
登山記録、遭難記録、遭難報告書類、ドキュメンタリー、ノンフィクション

３－１ 実録（全てが大雪山）

203　旭岳
北海道学芸大学函館分校山岳部／北海道学芸大学函館分校遭難対策委員会
1963 ／ 786 －ア
昭和 37 年 12 月 30 日から 38 年 1 月 1 日に至る間に 10 名が犠牲になった旭岳遭難の捜索報告書。遺族、山岳部員らによってまとめられた。山での遭難がいかに過酷かを伝える貴重な報告書。

204　イトナンリルゥ　山情報
大雪山　2001 年　総集編
高木直子、渡辺裕美子、中村直弘、岩本恭子／層雲峡ビジターセンター
2001 ／ 291 －イ
層雲峡ビジターセンターの担当者が実際に山に登って、６月から９月までの「山情報」を分担して手書きで発信してきたものを、総集編としてまとめた。黒岳、お鉢平、旭岳、赤岳、白雲岳、緑岳の順にまとめ、他に登山者に人気の沼ノ原～五色ケ原コース、高原温泉沼めぐりコースの概要など。現場の状況の一つの記録であり、手書きなのでルート沿いの花や鳥、リスや蛇がほのぼのとしたタッチで描かれ、山を愛するスタッフの人柄がにじみ出ていて、心和む記録集になっている。アイヌ語のイトナンリルゥは、高いところを通る道の意味。

205　いのちの代償
川嶋康男／ポプラ社
2009 ／ 787 －カ
「凍れるいのち」を文庫化した。遭難事故の全貌を軸に構成を組み替え、巻末に生き残ったリーダー、野呂幸司が「最善を尽くして人生を全うせよ」のエッセイを寄せている。

206　大きな自然　大雪山
林明輝／小学館
2008 ／ 748 －オ
巻末の「大雪山での挑戦」に林明輝（りんめいき）は「テクニックだけでは写し取ることのできな

い大きくて厳しい風景と向き合いたい。体力と気力の限界への挑戦」と書いている。

207　上ホロの空遠く　高橋こずえ追悼の本
畠山豊、神原悦子、沢田睦代、城英利、長瀬久雄、西川陽子／旭川勤労者山岳会
1990 ／ 289 ー タ
上ホロカメットク山で 1988 年 11 月、雪崩に巻き込まれ亡くなった高橋こずえ（上川町出身）を偲び、58 ページすべてが追悼の記。大雪山をくまなく登り、数々の山行でリーダーも務めた登山家・高橋こずえ、仲間に敬愛されていたことが分かる一冊。

208　検証　士幌高原道路と時のアセス
編　北海道新聞社／北海道新聞社
2000 ／ 519 ー ケ
本の帯に「道路か自然保護か、揺れた 30 年」とあるように、大雪山国立公園に道路を通そうとしたものの、道庁の「時のアセス」で公共事業見直しに至る詳細を記述した一冊。

209　凍（しば）れるいのち
川嶋康男／柏艪舎
2006 ／ 786 ー カ
昭和 37 年 12 月、北海道学芸大学函館分校山岳部のパーティー 11 名は大雪山縦走を成し遂げる寸前に旭岳で遭難、部員 10 名が死亡。帰還したのはリーダーただひとり、45 年間の沈黙を破り、著者の聞き取りに遭難事故の全貌を語った。

210　大正 15 年十勝岳大爆発記録写真集
上富良野町郷土館／上富良野町
1980 ／ 369 ー ト
生々しい被災現場、泥流に埋まった家屋や犠牲者、多くの救援隊、捜索の状況など十勝岳爆発災害写真展で展示された 150 点を収めている。本の中に大正 15 年 5 月 26 日付の貴重な北海タイムス紙が保存されている。

211　大雪山観光道路
上川町／上川町
1959 ／ 291 ー ダ
銀泉台まで行くバス道路が開通したことを喜ぶ上川町発行の 19 ページの冊子。当時の町長、野田晴男の「老人、子供の登れる大雪山へ」という思いが冒頭に載っている。

212　大雪山山行印象記
川村耕造／川村澄
1998 ／ 291 ー カ
著者は四日市市の大病院の理事長であったが 1993 年、60 歳で急逝した。10 年後に遺稿が発見され、それをもとに当時の写真を加えて妻・澄が小冊子にした。本書は 1988 年 8 月の大雪山登山記である。

213　大雪山の動物記
桑原康彰／東京読売サービス
1996 ／ 482 ー ク
第二部「大雪山の動物・体験記」に旭岳温泉奥地で銀色の毛をしたヒグマ、熊の沢では金色の毛をしたヒグマ、「世にも珍しいクマを獲る」体験記（古川良男）が載っている。

214　大雪山のナキウサギ裁判
編　大雪山のナキウサギ裁判を支援する会／緑風出版
1997 ／ 519 ー ダ
表紙裏の要約に、「大雪山国立公園は、日本で数少ない原生的自然が残り、氷河期の生き残りといわれるナキウサギの日本最大の生息地である。そこがいま、無用な高原道路計画によって危機に瀕している」と書いてある。生態系の保護、生物多様性の保護を訴える一冊。

215　大雪山のヒグマ
小田島護／山と渓谷社
1982 ／ 489 ー オ
アイヌが「神々が遊ぶ庭」カムイミンタラと名づけた通り、大雪山は太古より多くの生命を育む野生の王国である。著者らが K 子の愛称で呼んだ母グマとその子グマを通して、愛情あふれるクマの生態と、雄大な大雪山の四季を生き生きと伝える。

216　大雪山花の道
エゾコザクラに逢いたくて
駒井千恵子／栃の葉書房
2005 ／ 291 ー コ
著者は、大雪山に初めて登ったときにエゾコザクラと出会い、可憐でつつましやかな花の小道が楽しくて、その後も通いつめた。高山植物の花を観るための登山ルートとスポットを紹介している。

217　大雪山ヒグマ物語
ヒグマとの共存の道を探る
小田島護／創隆社ジュニア選書 9
1991 ／ 489 －オ
著者と学生らが高根ヶ原などで観察を続けたヒグマの親子、最初に発見した近くにＫ点と呼ぶ観察地があったことから母グマの愛称をＫ子とした。写真、図解を豊富に挿入している。Ｋ子のとりことなる一冊。

218　追憶
大雪山で大砲を撃った兵の鎮魂譜
石原二三朗／石原二三朗
1991 ／ 916 －イ
昭和 17 年 8 月、北部軍砲兵幹部教育隊の大演習が大雪山系で繰り広げられた。戦線の拡大から南方大陸ジャングル地帯の進攻を想定した過酷な訓練で、旭川の師団から行軍を始め、軍馬に百キロに余る砲具、弾薬を駄載して層雲峡から樹木の伐開、岩石除去、道路の拡幅、修築をしつつ黒岳へ登り、砲撃訓練を繰り返し、旭岳まで縦走。勇駒別温泉に下山後も夜を徹して歩き続け、師団に帰着するまで 5 日間にわたる「壮絶な迄の山岳険難地突破演習」（越澤三郎隊長回顧）だった。兵士たちの思い出の記であり、迫撃砲を撃つシーンなど大雪山中演習の数多くの写真が収められている。

219　天上を翔る川
松本司／渡辺出版
2011 ／ 748 －マ
石狩川源流をとらえた風景写真群に、脳梗塞を克服した著者が詩と書き下ろしのエッセーを合わせて、自らの魂の軌跡として構成した。

220　天人峡砂防ダム
旭川土木現業所／旭川土木現業所
1963 ／ 517 －テ
天人峡の忠別川とクワウンナイ沢の分岐上流にあるＶ字渓谷に造られたアーチダムの詳細な記録。昭和 22 年のカサリン台風で忠別川が氾濫、東川や下流域の旭川に被害が広がった。23 年から大々的な砂防調査が始まり、道内初の砂防工事が忠別川で実施され、清流ダムなどが完成。一連の砂防ダム工事で最大規模となった天人峡砂防ダムを中心に工法、技術などの記録である。

221　トムラウシ山遭難はなぜ起きたか
羽根田治ら共編／山と渓谷社
2010 ／ 786 －ト
2009 年 7 月、18 人のツアー登山のうち 8 人が死亡したトムラウシ遭難を関係者の証言集、気象の検証、低体温症や運動生理学の面から、それぞれの専門家が分析、低体温症と事故の教訓としてまとめた。

222　トムラウシ山遭難はなぜ起きたか
羽根田治ら共編／ヤマケイ文庫
2012 ／ 786 －ト
文庫本。巻末に「中高年登山者と低体温症」の解説を載せた。

223　なぜ排除するのか
長縄三郎／共同文化社
2003 ／ 689 －ナ
層雲峡のロープウェイ会社（りんゆう観光）と環境省とのあつれきをまとめたレポート。発端は環境省主導で進められた温泉商店街の再整備事業で、商店街末端の国道寄りに公共駐車場を造成し、ロープウェイ駅舎そばの駐車場を縮小する案が打ち出された。それに対してりんゆう観光が猛反発。ロープウェイ利用客の利便性と、商店街の 300m の坂道を高齢者や子供に歩かせるのは酷である、というのである。著者はその経緯をルポし、現状と今後の観光に問題提起している。

224　風倒　風倒木処理終了記念
上川営林署、上川町／上川営林署、上川町
1959 ／ 655 －フ
昭和 34 年 9 月 26 日に風倒木処理終了記念式典が行われ、その日に合わせて編集、発行された 20 ページの冊子。非売品。

225　フクロウ
BIRDER 編集部／文一総合出版
2007 ／ 488 －フ
アイヌ民族にとってのコタンクルカムイ（村の守り神）であった鳥シマフクロウ、シロフクロウは数を減らしている。大雪山系に生息するシロフクロウはナキウサギを捕食する。生態系を変える人間が食物連鎖を破壊し、守り神の数を減らしている。

226　冬山
速水潔／北海道新聞社
1980 ／ 786 －ハ
冬山が臨場感あふれる文章で綴られている。雪崩による事故現場で遺体の回収作業、凄惨な現場の雰囲気が伝わってくる。著者自身も雪崩で危ない目に遭っている。冬山を目指す人の必読書。「氷中に咲く花」の項で白雲荘、工藤虎男ら勇駒別とゆかりの人物が登場する。

227　北海道中央高地積雪期登山抄
佐々保雄／北海道林業會　別刷
1934 ／ 786 －サ
積雪期の旭岳登頂は 1921 年 3 月、北大山岳部の加納一郎らが試登するも悪天候で引き返し翌年 1 月、加納、板倉勝宣らが初めて成功する。先人が困難を克服して白銀に輝く大雪山系の頂きを極めた 1919 年から 1933 年までの足跡を詳しくまとめた。北大理学部助教授、佐々保雄が大雪山国立公園選定の昭和９年に「北海道林業會報」に寄稿し、別刷を残した。

228　野生のヒグマ：母グマＫ子の記録
小田島護／中西出版
1988 ／ 489 －オ
大雪山の広大な原生林に生きるヒグマＫ子の愛と感動のドラマ。クマに対するイメージが変わる一冊。

229　霊山碧水
太田龍太郎／植村外三郎
1934 ／ 237 －オ
太田龍太郎は明治 43 年秋、石狩川上流を探検し、「霊山碧水」の題で北海タイムスに 5 回連載した。同年初冬の北見地方踏査日記、翌年初冬に敢行した上川から十勝へ山越えする前代未聞の冒険記「北海道の奥の院探検」（北海タイムス連載）をまとめ、有名な「石狩川上流霊域保護國立公園経営の件」も収めた古典的な一冊。

３－２ 実録（部分が大雪山）

230　アイヌ語地名で旅する北海道
北道邦彦／朝日新聞出版
2008 ／ 291 －キ
大雪山は和名の山が多い。筆者は「アイヌには登山の趣味はなかった。山は神聖なものであり、頂上は踏むということは考えられないことだった。山は通路として使う川の水源にそびえる、敬うべきものだった」と解説する。

231　アイヌの世界
瀬川拓郎／講談社選書メチエ
2011 ／ 382 －セ
著者は旭川市博物館職員。第 8 章アイヌモシリ一万年の景観史の中で、大雪山は上川盆地のどこからでも見えるランドマークであり、熊も多く授けてくれる猟場だったので、祈りの対象（チノミシリ）となり、上位の者が祈ったなどと紹介している。

232　井手賁夫随筆集
その一　私の山・旅・友
井手賁夫／朝日出版
1983 ／ 914 －イ
ドイツ文学者の著者の随筆をまとめた。「大雪山の広大な高原や湿原を埋めて咲く花の豊富さと種類とは、世界に誇り得る大観である」「ユコマンベツや層雲峡からの登りよりも、愛山渓の登りが一番好きだ」など、大雪山の記述が多く、旭岳ヒグマの遭遇もある。

233　石笛：佐々木典夫君追悼誌
北海道教育大学函館分校山の会／北海道教育大学函館分校山の会
1973 ／ 289 －イ
昭和 38 年 1 月の教育大学函館分校山岳部の旭岳遭難に、留年してまで、仲間の為に捜索にあたったのが佐々木典夫。2 年後、横津岳で遭難、後輩をかばうようにして山に死んだ。彼を慕う人々が 7 回忌の節目に追悼誌を発行。悲しくて胸が痛くなる一冊。

234　印刷の道 100 年
山藤印刷 100 年史編纂室／山藤印刷株式会社
1999 ／ 749 －イ
山藤印刷の歴史は 1996 年、山藤敬助「山藤活版所」設立に始まる。以来 100 年、北海道文化の担い手として発展を続け、同社の印刷物はそのまま北海道文化史というべきである。本書は集大成とする箱入豪華本で、第 2 部「伝えて、残す」には 90 ページのカラー写真があり、膨大な山藤の印刷物を掲示しており、ひときわ目立つのが『ヌタツク』の 2 冊。『新北海道史』、北大関係の本など公的な印刷物も多い。

235　海にも雪があった
井上直一／私家版
1992 ／ 289 ーイ
著者は北大で茅誠司、中谷宇吉郎に師事した北大水産学部漁業学科初代教授。潜水探測機「くろしお号」の開発でも知られる。中谷が十勝岳麓で雪を観測していときは応援者として参加。ニセコの航空機結氷防止研究施設が終戦後、中谷によって農業物理研究所に替わったときはそこの狩太（現・ニセコ町）支部長を勤め、昭和 22 年の忠別川洪水被害を調査した時に中谷を補佐して活躍した。「くろしお号」で初潜水した中谷が「海にも雪がある」と言ったことが後にマリンスノーと呼ばれるようになった。井上の自分史ではあるものの、中谷の一面も良く分かる。

236　新版
ガイドブックにない　北海道の山々
八谷和彦／北海道新聞社出版局
2006 ／ 291 ーハ
道内の標高 1,000m 以上の全山登頂を達成した著者が 80 の山を選び「どんな山、登頂ルート、登山記録から」を書いた。大雪山は後旭岳、熊ケ岳、小旭岳、凡忠別岳、シビナイ岳、前トムラウシ山など。

237　風と岩の音　田所一義君追悼集
編　阿部智一ほか／田所芙実子
1997 ／ 289 ータ
田所は北峰岳朋会会員、詩的であり思索の人、絵も描く。大雪山系の記事が随所に見られる。岳友との岩と氷雪の登山も多く、かつ酒も好んだ。一方、単独行者としても知られていたのである。1993 年 5 月、単独で日高カムイエクウチカウシ山に登山中遭難。41 歳、夫人、1 男 1 女を残して。本書は田所の遺稿、手記、スケッチとともに、故人を偲ぶ追悼文をまとめた。巻頭の長女の言葉が重い。

238　神々の遊ぶ庭　北の自然は今
編　北海道自然保護協会／築地書館
1987 ／ 519 ーカ
北海道の自然について自然保護と開発の面で検証する一冊。寺島一男が「神々が遊ぶ庭（カムイミンタラ）はいま」の題で、大雪縦貫道路と住民運動を書いている。

239　気軽に北の山
百々瀬満／文芸社
2001 ／ 291 ーモ
山に登るつど、山行記録を書いてきた著者が 450 ページ余の分厚い本にした。大雪山は旭岳から当麻岳への日帰り登山、沼の原山往復、赤岳から登って白雲岳で一泊、北鎮岳、桂月岳までの登山記、冬の黒岳など、表題の如く、気軽に登って淡々と書き残している。

240　北国の動物たち４　エゾシカの森
永田洋平／偕成社
1980 ／ 480 ーナ
表題の「エゾシカの森」のほか 6 編の野生動物物語が収められており、「軍犬リュー」編は昭和 19 年、旭川に司令部をもつ北部軍が大雪山で軍事訓練を行った実話。著者自身が軍犬を育てた軍人。戦後、著者はリューと共に弟子屈の原野を開拓、動物作家として執筆を続けた。

241　北の渓谷
編　丹征昭／あうる舎
1974 ／ 291 ーキ
渓谷の沢登り、遡行紀行の名作を集めたアンソロジー。伊藤秀五郎が「北海道の夏の川」で「川によっては、峡谷をなして通過の困難な個所もないわけではない。十勝川の函や、忠別川、日高山脈の中ノ川などはその例である」と書いている。伊藤が遡行困難といった忠別川に挑んだ石橋恭一郎の「忠別川遡行」、天人峡のクゥウンナイから入渓し、美しい滝の瀬十三丁を経てトムラウシ山に登った望月達夫の「トムラウシ紀行」など 27 編。

242　北の自然を守る
知床、千歳川そして幌延
八木健三／北海道大学図書刊行会
1995 ／ 519 ーヤ
1964 年に設立された北海道自然保護協会の 30 年間の活動をまとめた。協会の最初の大きな山場は 1971 年から取り組んだ大雪縦貫道路反対運動で、「大雪の自然を守る会」も札幌、旭川、十勝に組織され、1973 年に道路計画は取り下げられた。その後、日高横断道路、知床森林伐採、千歳川放水路計画、幌延放射性廃棄物施設、富良野・大雪リゾート開発構想などへの取り組み、運動の理念などを詳述している。

243　北の火の山
小池省二／朝日ソノラマ
1995 ／ 453 ーコ
著者は朝日新聞記者で旭川支局長も勤めた。在職中から同紙北海道版に駒ケ岳、有珠山、十勝岳の噴火などを連載していた。阪神大震災を機に防災への決意を込め、連載に加筆、補正して出版。十勝岳の稿は約 200 万年前の火山群形成から 1926 年の泥流被害、1988 年のクリスマス噴火、観測態勢や防災対策など。

244　続　北の火の山
小池省二／朝日ソノラマ
1998 ／ 453 ーコ
続編で大雪山を取り上げ、旭岳地獄谷の活発な噴気活動、旭岳温泉へ向かう道道沿いの巨大な溶岩「ガマ岩」、天人峡の柱状節理を火山噴火の視点で書いている。他に東大雪の秘境火山「丸山」など。

245　北の森の植物たち
鮫島惇一郎／朝日新聞社
1991 ／ 470 ーサ
植物研究の著者が北国に住んで、自然の優しさ、壊れやすさ、恐ろしさを、心をこめて語る。エイレンソウ物語で「蟻が種子を運ぶ」ことは研究者ならではの眼力。キバナシャクナゲの一話で銀杏ケ原について、「その草原にイワイチョウが群生していること、秋の日にイチョウと同じように黄色やオレンジ色に草原が彩られる」「呼び名には何か夢がある」、その名前を「黄金ケ原」といつ、だれが、どのようにして変えたのかと、少し怒ってみせる。恩師、舘脇操の「汎針広混交林帯」なども I 章「緑の島」で書いている。

246　北の山旅
丹征昭／あうる舎
1973 ／ 291 ータ
巻頭の「山と森林の旅」は東大雪のニペソツ山行で、山頂からの眺めを「十勝連峰、オプタテシケ、トムラウシ、大雪山と続く山波が心を惹き」と書いている。「その冬の十勝岳」など山紀行と随想 21 編。カバー挿画は坂本直行。限定 1,000 部発行。

247　北の山と本　その登山史的考察
高澤光雄／日本山書の会
1992 ／ 786 ータ
後篇に「北海道登山史年表」（1871 ～ 1991）、「本邦山岳団体の刊行せる部・会報についての誌名目録　北海道の部」（50 音順）、「北海道関係山書目録」（1868 ～ 1988）を発行年順に記載。本編では清水敏一の「北大山岳部『時報』、北大山の会『会報』戦前編の解題」など九編。

248　北の山の栄光と悲劇
滝本幸夫／岳書房
1982 ／ 291 ータ
北海道の主要な山の初登や遭難の記録。大雪山関係は第五章「中央高地・そこに人間ドラマが…」として安政年間の松田市太郎の石狩川流域探検から北大スキー部、山岳部の大雪山登山などを書き、第六章「吹雪の大雪山に結ぶ心のザイル」で北海道学芸大学函館分校パーティーの旭岳で 10 人死亡の遭難を詳述。巻末に道内を中心にした登山史（明治元年～昭和 56 年）年表。

249　草と樹
鮫島惇一郎／北海道新聞社
1980 ／ 472 ーサ
あとがきに、「草と樹への讃歌」として書いたとあるように、植物をいとおしみ、守る優しさが全編からあふれてくる。山野を歩きまわったときの失敗談や人との触れ合いを、草花に託して書いている。花の名前をしつこく尋ねる同伴者に一つ一つ教えながら大雪山を登って行くとき、相手はなかなか覚えず、ヨツバシオガマを「ヨツバオカシ！」と言ったりする。黒岳石室での怪談話でトイレに行けなくなった人が、とうとうやらかしたことを暴露するワタスゲの一話などに著者の人柄がにじむ。

250　原野から見た山
坂本直行／茗渓堂
1974 ／ 291 ーサ
菓子の六花亭が著者の美術館を持ち、包装紙に著者の草花の絵を使っているので、お菓子から著者を知った人もいるはず。黒岳石室の小屋番、大久保と愛犬「般若の五郎」の逸話など、スケッチを交えた飾り気のない紀行文。

251　広葉樹に惚れて五十年
高橋丑太郎／第一印刷出版部
1984 ／ 650 ータ
著者は創業百年超えの『昭和木材』二代目社長で北海道の木材業界を代表した一人。北海道林務部の広報誌「林」に請わ

れて「北海道広葉樹に夢を託して」を昭和56年11月～58年4月まで連載し、これに加筆した自分史で、樹木と木材業界を広く語っている。ことに大雪山の原生林をなぎ倒した昭和29年の洞爺丸台風について、木材屋として風倒木処理の奮戦ぶりと業界にもたらした功罪を書いている。洞爺丸台風が荒れ狂った9月27日は著者の忘れがたい誕生日でもある。

252　最暗黒の東京
松原岩五郎／岩波文庫
1980／368－マ
大雪山の名付け親で知られる松原岩五郎が書いたノンフィクション。日本が最初の資本主義恐慌を経験した明治中期、生活困窮者の社会に潜入して書いた。巻末の解説（立花雄一）に大雪山命名のいきさつが書かれていて、むしろ、この解説があるおかげで大雪山命名の経過が世の中に知られるようになった。

253　札幌グランドホテルの50年
阿部要介／三井観光開発株式会社
1985／689－ア
同ホテルが開業したのは1934年、本書の小見出しにあるように阿寒、大雪山国立公園指定の年であった。北海道庁商工課は1936年度予算に開拓使以来初めて「観光費」の費目を作って700円を計上…。北海道景勝地協会は、前年まで1千円だった予算を一挙に2千5百円に増やし、国立公園と温泉の紹介パンフ、大雪山と利尻の絵はがきを大量に作り…。札幌鉄道局も前年度の2倍にあたる2万円の宣伝費を組み、阿寒と大雪山国立公園のリーフレット3万部…。札幌市役所でも観光係を設置、札幌観光協会発足…。1936年は札幌（北海道）の観光元年であったと記述する。同年6月19日は北海道が皆既日食観測の適地だったので内外の学者が来道、宿泊、会食、会議に同ホテルを活用した。英国ストラットン教授を中心に池田北海道庁長官、高岡北大総長、中谷宇吉郎、茅誠司らの記念撮影写真がある。

254　山岳遭難記1
春日俊吉／朋文堂
1964／786－カ
著者は山岳遭難についての著書が多く、全6冊のうちの第1冊。そのなかの1編「大雪山・三の沼樹間の椿事」は、1953年3月21日、沼の平から愛山渓に向けて滑降中に雪崩が発生、6人死亡、3人重傷、6人負傷という大遭難になってしまった。全6冊のうち大雪山系の遭難記事は本件のみである。

255　自然の博物誌　＜山＞
式正英／日本放送出版協会
1981／786－シ
山の表情、山のすがた、山の自然と人の3章から構成されている。著者は、「山は心のふるさと」として、山の自然、景観、人との関わり、登山の歴史などの観点から山を語る。「山のお花畑」では大雪山を北アルプス白馬岳、南アルプス北岳とともに、高山植物の宝庫としている。

256　森林復興の軌跡
洞爺丸台風から40年
よみがえった森林記念事業実行委員会事務局／
1995／654－シ
巻頭の写真は洞爺丸台風の惨状、大雪山の森林被害。風倒木処理、森林施業の詳細、座談会を収録。大雪山のほか樽前山麓、北見、函館など全道の被害と復旧も。

257　スキー場はもういらない
編著　藤原信／緑風出版
1994／519－フ
美瑛富士に持ち上がったジャパンヘルシーゾーンのスキー場開発計画が立ち消えになっていく経過など、道内のスキー場開発と自然保護を検証する一冊。

258　大雪山のふもとから
ある山村の四季と暮らし
渡辺崇彦／農山漁村文化協会ルーラルブックス
2006／382－ダ
小学校6年生の目線で白滝村の生活を記している。たわいも無い毎日の生活だが、便利な今とは違って何をするにも努力と工夫の連続。北見峠に駅逓があったことなど、開拓史も分かる。

259　大雪山の四季　精霊の大地から
塩谷秀和／実業之日本社
1998／291－シ
著者は、大雪山の麓で暮らしたいと東川に移住（1979年）し、ネイチャーガイドとして活躍する。精霊の大地で起きていること、育まれる命などを49のタイトルで紹介。「森を育てるものたち」では、

エゾリスがドングリやクルミの実をそこら中に埋めて隠し、やがて芽をふく。「カエルとサンショウウオ」「樹の精霊モモンガ」、一話が見開きページに収まっていて、どこから読んでも面白い。

260　愉しき山脈
高澤光雄／北海道出版企画センター
2012 ／ 290 ー タ
クヴウンナイ川遡行の「遭難寸前の大雪山」という思い出や、高校 3 年の旭岳登山では天人峡温泉の佐藤門治に助けられ、勇駒別で工藤虎男、速水潔らと知り合うなど、さまざまな山仲間との出会いを書いている。

261　地球大百科　生きている森 7
クマの王国
生きている森編集委員会／ぎょうせい
1989 ／ 650 ー チ
「地球大百科　生きている森」シリーズ（全 11 巻）の 7。ヒグマの生態、習性、人との関わりなどを、大雪山にすむ 6 歳のヒグマ「ウッデイ」を主人公に冒険物語として進める絵本。北海道大学ヒグマ研究グループの特別座談会「クマってすごいヤツだ」が巻末にある。

262　忠別川と共に生きて
忠別川ダムふるさと誌
忠別ダム記念誌刊行委員会／北海道開発局、旭川開発建部忠別ダム建設事務所
1987 ／ 517 ー チ
旭岳のふもと、美瑛町忠別と東川町野花南は、忠別ダム建設によって水没し、地域の歴史を終えた。気候も環境も厳しい山の麓での壮絶な開拓生活が書きつづられ、語られている。天人峡や勇駒別の入り口ともなっていて、温泉へ馬そりで荷物の運搬など、重要な拠点でもあった。

263　忠別川は秘めている
赤松勉／旭川冨貴堂
2006 ／ 289 ー ア
北海道開拓の実話。赤松家の人生のドラマが熱く響き、今の生活は先人の苦労と辛さから成り立っていることに心を打たれる。

264　遠い山近い山
望月達夫／茗渓堂
1968 ／ 786 ー モ
本書が北海道の山日記と思えるくらい北海道の山が多い。大雪山では「ウペペサンケヌプリ」と「トムラウシ紀行」の 2 編がある。トムラウシは北大山の会の橋本誠二らに誘われて、クワウンナイを遡った。1919 年、初めて滝の瀬十三丁を遡った小泉秀雄、翌年の大島亮吉のことも書いている。著者はイワナがたくさん釣れたと語っている（1963 年）。

265　登山歴程
児島勘次／私家版
1973 ／ 290 ー コ
布装箱入りの豪華本ながら、なぜか目次のない本である。非売品。著者は同志社大学山岳部出身、同書はこれまでに発表したものを 1 冊にまとめたものである。足跡は台湾の山、朝鮮白頭山、中国大興安嶺、ヒマラヤ・サイパル初登頂（隊長）に及ぶ。北千島の登山では、単独行の小泉秀雄と交流、語りあう。児島は大雪山など北海道の山にも登っている。

266　突兀七千有余尺
庁立旭川中学校校歌雑考
栃木義正／栃木義正
1994 ／ 376 ー ト
書籍名は「とつこつ・しちせんゆうよしゃく」と読み、北海道庁立上川中学校（現北海道旭川東高校）の校歌の歌い始めである。東高校歌は昭和 29 年に代わったので今は歌われることはないが年輩の OB らは誇らしげに歌い、札幌や函館の同窓会は「突こつ会」という。突兀は山が険しくそびえることで、大雪山を指し、明治時代の測量で標高は七一〇八尺だった。著者は卒業生であり、教師でもあり「北海道地名索引」などの著書がある郷土史研究家。難しい歌詞がなぜ出来たのかを作詞作曲・塩田弓吉から調べ、大雪山の山名の変遷、大雪山の読み方などへ論考を広げている。

267　ナナカマドの挽歌
秋庭ヤエ子／恒友出版
1979 ／ 289 ー ア
昭和 6 年生まれの著者の手記「赤い命」が話題になり、改題して出版され、副題に「地獄を見た母　愛と痛恨の手記」とある。大雪山麓の上川町天幕にあった冬山造材飯場で幼子を抱えて暮らした時期

があり、その『数カ月間は、文字どおり死闘の連続』で、『こだまは、「頑張るんだぞ！」 大雪山の峰々が私を励ましてくれているように聞こえるのです』と書いている。

268　日本山岳風土記　6 北海道の山々
編集代表　長尾宏也／宝文館
1960 ／ 291 ー二
大正時代から昭和 30 年代初期までに書き残された登山紀行 24 編を集めた。巻末の宿泊施設一覧にユコマンベツ山の家、仰岳荘、松仙園ヒュッテ、ヤンベタップ造材小屋など今はない施設の名もある。加納一郎の「北海道に於ける積雪期の登山」では、旭岳へ向かうときは美瑛忠別までは「出来れば馬橇（そり）に乗った方がよい」と書いてある。八木橋豊吉の「北海道中央高地から十勝川を下る」は、東川村新井牧場内に暮らす山案内人、高橋浅市とともに天人峡から旭岳、白雲岳、トムラウシ山を縦走して十勝川へ下りて新得まで歩く縦走記（初記載は大正 14 年の慶応大学山岳部年報「登高行」）。他に大島亮吉の「石狩岳より石狩川に沿うて」、速水潔の「大雪山讃歌」など。

269　日本の渓谷　’96
白山書房編集部／白山書房
1996 ／ 291 ー二
大雪山関係は天人峡から入るクワウンナイ川本流遡行記（岸川祐子）のみ。女性二人が滝の瀬十三丁を経てヒサゴ沼キャンプ場まで登る。

270　日本の山岳　登頂跡誌
編　松浦勇次、大西敏夫／松浦秀明
1993 ／ 786 ー二
「一等三角点　本点と其標高 1963 ～ 1993」という副題がついている。その間に大雪山にも登っているが、「登頂跡誌」一覧表には残念ながら割愛されている。松浦は本州以南に限定したのであった。82 歳の 1992 年 10 月、大峰山系南部の山へ 4 泊 5 日の予定で、単独入山したが消息不明となる。残した登山計画をもとに捜索を続けたが手がかりがなく、延べ 375 人の大捜索であったが、生存の見込みなしと判断、身内の申し入れで中止される。本書は松浦の出版予定の原稿であったが、図らずも遺稿集になってしまった。子息・松浦秀明が行方不明に至る経過、捜索活動の概要報告と謝辞を述べている。

271　氷河時代の置き手紙
丹治茂雄／あかね書房
1994 ／ 456 ー タ
大雪山の豊かな自然は氷河時代が残した〝置き手紙〟。手紙にはどんなことが書かれているのか。大雪山に登り、アラスカやカナダに旅して、自然の謎を研究していく。

272　北海道一般スキー八十年の歩み
栗林薫／広告の岩泉
1991 ／ 789 ー ク
布装箱入の立派な本。著者は北海道教育大学名誉教授、スキー連盟の役員として基礎スキーに関わってきた。1957 年 1 月、旭岳で遭難事故があり、同年 5 月に著者は遺体捜索隊長として出動、旭岳に向かう一隊の写真が巻頭のグラビアにある。1930 年、ハンネス・シュナイダーが十勝岳で妙技を披露したこと、1949 年、旭川の速水潔が戦争で片腕を失いながら義手で指導者検定に合格したこと、1957 年 3 月の指導者研修会は層雲峡を宿舎に大雪山赤岳中腹までツアーをしたことなどを語る。総じて議事録的な記述となり参加者、合格者の氏名などが大半である。

273　北海道自然 100 選紀行
編　朝日新聞北海道支社報道部／北海道大学図書刊行会
1987 ／ 291 ー ホ
朝日新聞の読者の投票に北海道自然 100 選を決めたところ、自薦他薦もあり、にぎやかになった。記者が取材し、1 カ所 4 ページ、うち写真 2 ページにまとめてある。大きな自然、小さな自然、有名無名いろいろ。20 の節に分けて 4 ～ 6 カ所を紹介している。大雪山は、「大雪の山沿いに」として、トムラウシ温泉周辺、白樺街道と白金温泉、旭岳温泉・天人峡周辺、層雲峡、十勝三股、然別湖の 6 カ所を取り上げた。

274　北海道　自然と人
編著　八木健三、辻井達一／築地書館
1985 ／ 402 ー ヤ
北海道自然保護協会で活躍しいる主要メンバーが共同執筆した。大雪山は地形的・植物的交差点に位置する、カムイミンタルの成立（北大農学部助教授・辻井達一）、など自然と人との交流が主題。

275　北海道探検記
本多勝一／集英社
1980 ／ 915 －ホ
著者が朝日新聞北海道支社に勤めていた 1959 年～ 1962 年に、秘境とよばれる所を歩いて旅の記録を紙面や雑誌に発表しており、それを一冊にまとめた集英社文庫。「雪の北海道」の項で白銀温泉や十勝岳噴火口そばの硫黄採掘小屋に泊まった回想があり、その 2 年半後、十勝岳大爆発で硫黄採掘小屋の作業員 16 名のうち 5 名が死亡した。

276　北海道中央分水嶺踏査記録
―宗谷岬から白神岬まで
編　高澤光雄／日本山岳会北海道支部
2006 ／ 786 －ホ
日本山岳会が創立百周年記念事業として日本列島中央分水嶺踏査計画を実施、このうち北海道支部が宗谷岬から白神岬まで 1,132km を踏査した記録。中央分水嶺とは、降った雨や雪が川となって日本海側に流れるか、太平洋側に流れるかの境で、日本の脊梁である。道内の踏査に参加した会員は 139 人。大雪山系も通り抜ける調査であり、20 万の 1 地勢図にルートを書き入れ、記録に回想を加えた。

277　北海道中央分水嶺踏査　余話
編　滝本幸夫／日本山岳会北海道支部
2007 ／ 786 －ホ
日本山岳会北海道支部が挑んだ中央分水嶺踏査の報告書とは別に、踏査に参加した会員の思い思いの寄稿をまとめた。積雪期の尾根を行く困難な踏査だっただけにヒヤリ、ハッとする回顧も多く、達成感がにじむ寄稿集になった。

278　北海道登山記録と研究
編　高澤光雄／札幌山の会
1995 ／ 786 －タ
札幌山の会が一つの頂上を目差し、尾根道や、沢を会員が一緒に登る「大雪山（夏山集中）沢の記録」、大雪山・石狩川源流探検史など。

279　北海道登山史年表
高澤光雄／北海道出版企画センター
2012 ／ 786 －タ
著者のライフワークともいえる登山史研究は、1972 年に第 1 版を発行してから改訂増補を続け、第 4 版になる。1871 年から 2012 年 3 月までの登山史年表。

280　北海道の環境を守るために
編　北海道警察本部生活安定部／北海道警察本部生活安定部
1999 ／ 519 －ホ
～環境犯罪防止に関する提言～の副題がある。「高山植物の盗掘問題」「稀少動物保護問題」「廃棄物問題」の部に分け、全編グラビア紙にカラー写真を添えている。大雪山の写真も多い。本書は各分野で活躍する人たちの提言集で、そのひとつ「大雪山監視員のアルバイトで学んだこと」（酪農学園大学・吉沼利晃）がある。盗掘の取り締まりを行う道警ヘリコプター「大雪」の写真を裏表紙に使っている。

281　北海道の自然 100 選
監修　朝日新聞社北海道支社／制作　㈱大宣
不詳／ 291 －ホ
「自然 100 選」のミニ版で、1 カ所 1 ページ、写真と地図を配してコンパクトにまとめたガイドブック。全道を 5 地域に分け、「大雪・日勝」の地域に大雪山 6 カ所が含まれている。北海道日東エージェンシー㈱が企画した。

282　北海道の自然　ヒグマ
犬飼哲夫、門崎允昭／北海道新聞社
1987 ／ 489 －イ
Ⅰクマの進化と分布、Ⅱヒグマの身体と生態、Ⅲアイヌ民族とヒグマ。昭和 24 年に起きた大雪山ヒグマ事件など人とヒグマの遭遇、アイヌ民族の伝統的な熊猟など、熊研究の第一人者が詳細に書いた一般読者向け解説書。

283　北海道の登山史探究
高澤光雄／北海道出版企画センター
2011 ／ 786 －タ
北海道の山岳記録を永年にわたり探究し、執筆を重ねてきた著者の思い入れ深い 16 編を選んで収録。江戸期から昭和まで、登山の足跡をたどる一冊。

284　道草山行ひとり旅
遠藤一郎／朝日新聞社
2000 ／ 291 －エ
著者は四季を通じて数多くの山に登っている。そのなかの登山記で、名の通り単独行が多い。大雪山系のみ挙げると「ヒグマの棲処を行く―表大雪・十勝岳縦走」「化雲岳のヒグマ」「旭岳元旦登頂」

「愛山渓倶楽部―大雪山麓の迎春」「イワナ釣りと滑滝のカウンナイ遡行」がある。著者の長男は北大山岳部員であったが1974年3月、知床で遭難した。

285　村井米子追悼集

編　日本山岳会婦人懇談会有志／日本山岳会婦人懇談会有志
1989／289－ム

村井米子は作家・料理研究家として著名な村井弦斎の長女。女人禁制であった立山に登り、女性第1号登頂者となったのをはじめ北アルプス槍穂高縦走女性第1号成功者。スキーもよくし、女性登山の先駆者である。日本山岳会名誉会員。1986年、85歳で急死したのを惜しんで、追悼文を寄稿、本書を発行した。そのうちのひとり千家哲麿（国立公園協会会長）が、1931年1月、十勝岳吹上温泉で初めて村井に会ったときの思い出を書いている。

286　新編・山　紀行と随想

大島亮吉／平凡社ライブラリー
2005／786－オ

昭和5年に岩波書店から刊行された「山研究と随想」や慶應義塾大学体育会山岳部の「登高行」などを底本にして、新たに構成した文庫本。文字表記を新字、新仮名に改めて読み易くした。「北海道の夏の山」を収録。

287　山　研究と随想

大島亮吉／岩波書店
1930／786－オ

大正、昭和初期に登山家として活躍した大島亮吉は昭和3年3月、前穂高で墜落死した。遺著として2年後にこの本が発行された。有名な「石狩岳より石狩川に沿ふて」も収められている。大正9年7月21日から31日までの登山記で、行程は旭川～美瑛駅～松山温泉～クヮウンナイ～トムラウシ～ヌタプヤムペツ～石狩川～石狩沢～石狩岳～ユーニイシカリ岳～ユーニイシカリ～ホロカイシカリ～大箱～層雲別温泉～留辺志部。

288　山　随想

大島亮吉／朋文堂（コマクサ叢書）
1958／291－オ

昭和5年に岩波書店から発行された「山研究と随想」の復刻版。研究的記述を割愛、随想だけを収録した。

289　山 ―随想―

大島亮吉／中央公論社
1978／786－オ

大島亮吉の50年忌に中公文庫として発行された。「石狩岳より石狩川に沿うて」「北海道の夏の山」「北見峠」を収録。

290　山道具が語る日本登山史

布川欣一／山と渓谷社
1991／786－ヌ

変わった視点からの登山史で、きわめて興味深い本である。古くは「立山曼荼羅」（信仰登山）に始まり、「播隆の遺品」（槍ヶ岳開山）に続いて「明治・大正・昭和の山岳書」の項がある。山岳書も山の道具のひとつには違いない。見開き全面の写真があり、『富士案内』『日本風景論』などとともに『大雪山　登山法及登山案内』（小泉秀雄著）が大きく映っている。「山内、門田第一号」の項では国産ピッケルの先駆者として札幌門田を記述する。「シュナイダーの愛用具」では“雪の王者”ハンネス・シュナイダーが1930年、十勝・吹上温泉でスキーの実技指導を行ったとある。

291　山と彷徨

丹征昭／工房あうる
1970／291－タ

天人峡から化雲岳の尾根を登って、初めてトムラウシ山へ行ったとき、ノドが焼けるような渇きとなった顛末を「小さな湿原」として書いている。ほかに大雪山への思いを寄せている点描多数。限定800部発行、巻末にナンバーが振ってあり、東川町保存は546番。

292　山と雪の日記

板倉勝宣／朋文堂（コマクサ叢書）
1958／291－イ

立山松尾峠で遭難した板倉の遺稿集である。板倉は学習院から北大に学び、北海道の山にも数々の足跡を残した。なかでも1912年1月の大雪山旭岳、同年3月の黒岳は、いずれも積雪期初登頂である。

293　山の仲間と五十年

編　高澤光雄／秀岳荘
2005／786－タ

北海道の山の店、秀岳荘が創業50年に発行した。温泉を発見したトムラウシ川上流の旅（山崎英雄）、大雪山縦貫道路と扇沼山（寺島一男）など。巻末に北海

道登山史年表。

294　山は命の母
山本進吾／白山書房
2008 ／ 291 ーヤ
副題が「夫婦で登った日本三百名山」。深田久弥の百名山を登っている知人に誘われたのが登山のきっかけで、頂上を極めた感動が家族共通の趣味となって三百名山を達成した。三百ともなれば、数々の困難があり、家族の絆の日記のようでもある。大雪山は 1998 年にトムラウシ山で「素晴らしい花の大群落」、2002 年に石狩岳、ニペソツ山で「ナキウサギと初めての出会い」など。

295　山ふたり
三輪敏広、三輪和恵／春風社
2011 ／ 291 ーミ
多発性骨髄腫と診断された著者と妻和恵の登山日記。北海道・東北・九州の登山。大雪山の登山も時間をかけての移動、ガイド内容も濃い。「山夫婦」って素晴らしい。

296　山への挑戦―登山用具は語る―
堀田弘司／岩波書店
1990 ／ 786 ーホ
岩波新書の 1 冊。山へのあくなき挑戦は、登山用具の開発とともにあったという視点から、登山用具の進化と変遷をたどりながら登山史を語る。札幌門田のピッケルとアイゼンは、北大山岳部員・和久田弘一の依頼によって作成され、和久田らは十勝連峰で試用して、大いに満足すべき結果であったという。なお和久田は『北大山岳部々報』第 4 号に、「ピッケルとアイゼンの材質について」の論考を寄せている。

297　よみがえった森林を未来へ託す
洞爺丸台風から 50 年
洞爺丸台風森林被害復興 50 周年記念事業実行委員会事務局／
2005 ／ 654 ーヨ
洞爺丸台風森林被害復興 50 周年に記念事業が実施され、記念誌が発行された。パネルディスカッション、高校新聞・放送コンクール審査結果などを載せている。

人物誌
人物伝、人物史、人物研究、追悼録など

4－1 人物誌（全てが大雪山）

298　大町桂月の大雪山
清水敏一／北海道出版企画センター
2010 ／ 786 ーシ
富士山に登つて、山嶽の高さを語れ。大雪山に登つて山嶽の大さを語れ。この名文で始まる「層雲峡より大雪山へ」の紀行によって、大雪山の雄大さを全国に広めた大町桂月。国民的文士・桂月のドラマチックな登山と彼の辿ったルートを追跡、再現し、検証。同行した人たち、関わった人たちの動向と人生を追い、その人物像に迫る。

299　知られざる大雪山の画家・村田丹下
清水敏一／北海道出版企画センター
2003 ／ 289 ーシ
大雪山を描いた画家、村田丹下の生涯を詳しく書いた一冊。大町桂月が層雲峡から登って天人峡へ縦走した際に同行したひとりでもあり、その時のスケッチを屏風絵に仕上げた。層雲峡開発の功労者・荒井初一との出会い、童謡作家・野口雨情と黒岳石室一泊なども分かる一冊。

300　層雲峡　大町桂月記念號
大雪山調査会／大雪山調査会
1952 ／ 910 ーオ
大町桂月が大雪山を黒岳から旭岳へ縦走したのは大正 10 年 8 月のことで、それから 30 周年に記念号を編集した。桂月が「中央公論」に発表した「層雲峡より大雪山へ」などによって層雲峡や大雪山が全国的に有名になった。記念号に紀行文を再録、子息、大町文衛が父の登山の時と同じ山案内人、成田嘉助の案内で大雪山に登った思い出を寄稿。彫刻家、加藤顕清、桂月の登山に同行した水姓吉藏らの寄稿、ゆかりの人たちの座談会など。

301　「大雪山国立公園」生みの親
太田龍太郎の生涯
笹川良江／北海道出版企画センター
2004 ／ 289 ーオ
石狩川上流霊域を国立公園経営とすべきと明治政府に訴えた愛別村長、太田龍太郎の孫である著者が、祖父の書いた「霊山碧水」を読み易い活字で復刊。年表や写真資料を多数収録。著者は祖父の愛し

た大雪山の近くで暮らしたいと、夫妻で東川町に移住した。

302　大雪山に生きた男
天野市太郎先生を偲んで
編　後藤憲太郎／高橋順
1995 ／ 289 ーア
天野市太郎は戦後まもない 1948 年に「北海の高峯　大雪山登山案内」を書いており、表題のようにまさに「大雪山に生きた男」でもある。教師、校長として旭川教育界に貢献し、大雪山は庭と言うくらいの経験者で、生徒と共に旭岳から何度も縦走した。三周忌の追悼文集の半分は天野の遺稿で埋め、教え子たちの追悼文には大雪山の思い出が多い。（82 ページ 388　参照）

303　大雪山の父・小泉秀雄
清水敏一／北海道テレビ放送
1996 ／ 281 ーシ
小泉秀雄の生涯とその業績について簡潔にまとめた。手軽に読める。HTB まめほん。

304　大雪山の父・小泉秀雄
清水敏一／北海道出版企画センター
2004 ／ 289 ーシ
小泉秀雄は大雪山研究のパイオニアとして知られ、小泉岳は彼の偉業を永遠に遺し、伝える山名。誕生 120 年、没後 60 年の年に小泉研究の第一人者である著者が山と植物一筋に駆け抜けた生涯を活写する。大雪山や植物にかける情熱と、研究の几帳面さ、真面目さがわかる。家族、人間関係も詳しく記されている。

305　大雪山わが山小泉秀雄
清水敏一／私家版
1982 ／ 289 ーシ
小泉秀雄の生涯も記されているが、主に小泉の研究分野の紹介。研究にかかわった著名人も大勢登場する。

306　続・大雪山わが山小泉秀雄
清水敏一／私家版
1984 ／ 290 ーシ
前書「大雪山わが山小泉秀雄」に載せきれなかった資料を中心に、関連のある人々の紹介、コメントなど。

307　大門金光・天人閣支配人の記録
大門金光／
1988 ／―
天人峡温泉『天人閣』の支配人を長く勤めた大門の自分史。『天人閣』社史のつもりで書いたようだが日の目をみなかった。筆文字の原稿を『㈱総合企画』社長、宗万忠に託し、宗万がワープロ打ちした A4 版 67 ページの実録。（詳細は 213 ～ 217 ページ）

４－２ 人物誌（部分が大雪山）

308　阿寒国立公園の三恩人
種市佐改／釧路観光連盟
1984 ／ 289 ータ
著者・種市は弟子屈町の郷土史家であり、その方面の著作も多い。三恩人の一人が日本国立公園の父といわれる田村剛であり、阿寒と大雪山が同時に国立公園に指定されたことから、田村の項にはその経緯を含めて大雪山をも記述している。田村は林学博士、造園学者である。著者は田村に会い指導、教示を受けた。余記すると、北大農学部・愛甲哲也准教授が 2014 年、日本造園学会田村剛賞を受賞している。

309　悪場を超えて―林和夫追悼―
林和夫追悼集実行委員会／林電工㈱
1984 ／ 289 ーハ
林和夫は北大山岳部で活躍した。愛称「リン」。林電工㈱設立、㈱キャラバンの社長、会長。「キャラバンシューズ」（開発者は佐藤久一朗）は画期的な軽登山靴で、夏山登山者やハイカーに広く愛用された。登山歴も長く 1985 年、北大山の会のバルンツェ遠征隊総隊長を務め、厳冬期ヒマラヤ 7,000 m級初登頂を果たした。1983 年、自動車事故で死去、67 歳。遺稿と岳界を中心とする各界からの追悼文をまとめ、420 ページの大冊。随所に大雪山系の登山もあり、山岳文献としての価値が高い。

310　旭川明治屋の百年
示村貞夫／㈱明治屋
1986 ／ 289 ーサ
副題に「佐藤音次・門治・正治三代の譜」とあるように、明治屋の創業から三代に亘る人物像を中心にした社史。二代目からは大雪の国立公園指定運動に貢献

し、「天人閣」の新築など旧松山温泉から天人峡温泉へと整備、発展させた功労者。国立公園指定のエピソードなどもある。

311　綾子・大雪に抱かれて
三浦文学道案内
道新旭川政経文化懇話会／北海道新聞社
1998 ／ 910 ーミ
副題が三浦文学道案内。三浦綾子・山田洋次監督との対談「希望・明日へ」。作品紹介欄の「泥流地帯」「自我の構図」「毒麦の季」などは大雪山が小説の背景にある。

312　板倉勝宣書簡集
編　安川茂雄／山岳展望の会
1965 ／ 289 ーイ
板倉勝宣は北大卒、北海道ゆかりの登山家であり、積雪期登山の先駆者である。1923 年 1 月、立山松尾峠で遭難、25 歳で死去。遺稿集『山と雪の日記』が刊行される。1922 年 1 月、大雪山旭岳の積雪期初登頂者。

313　江戸明治の百名山を行く
―登山の先駆者　松浦武四郎―
渡辺隆／北海道出版企画センター
2007 ／ 289 ーマ
著者はアイヌ語地名研究会、日本山書の会、松浦武四郎研究会の会員。北海道の名付け親、松浦武四郎の生い立ちから晩年までを書き、大雪山については『丁巳日誌』を読み解いて、忠別川を志比内辺りまで溯り、天人峡や羽衣の滝などは道案内のアイヌから聞いただけで、そこまではやってきていないなどと分析している。

314　おもひ出（思ひ出）
編　湊正雄／瀬戸晴子（私家版）
1940 ／ 289 ーセ
上ホロカメットクで雪崩遭難死した北大山岳部員、瀬戸三郎をしのぶ追悼記。母親をはじめ家族、友人、北大関係者らの熱意で約 500 ページの追悼集になった。

315　お雇い外国人―開拓
原田一典／鹿島出版会
1975 ／ 210 ーオ
北海道開発の構想のもとにお雇い外国人の業績を描いている。ライマンもその一人で、層雲峡にライマン滝の名を残す。1874 年 6 月 17 日、通訳、助手、人夫数十人をともなって札幌を出発、石狩川をさかのぼって大雪山系を越え、十勝川を下って 8 月 2 日、十勝海岸の大津に到着した。彼は地質、鉱物資源調査が目的であったが、単なる調査というよりも、探検あるいは冒険的な場合もあった。

316　回顧録　牛と夢
舘田外行／舘田芳郎
1990 ／ 289 ータ
著者・舘田の妻は荒井初一の三女であり、荒井家の事業にも深く関わってきた。本書は著者の自叙伝であり自分史であるが、そのなかには荒井一族に関する記述も多い。荒井寛三（初一の次男）らと愛山渓から永山岳、北鎮岳、黒岳を縦走して層雲峡に下山したこともある。荒井家と層雲峡開発の歴史資料といえる。書名の「牛」は著者が丑の年に生まれたから。

317　画家・相原求一朗の生涯
相原求一朗／求龍堂
2018 ／ 723 ーア
北海道の大地を多く描いた画家で、日記を基にした人生の物語。道内スケッチ旅行に旭岳もあり、「途中明るくなったが結局視界ゼロ、『姿見』のレストランで甘酒」などと書く。菓子の六花亭が十勝の中札内村に相原求一朗美術館を開館、「北の十名山」などを展示している。

318　北の山の夜明け
編　高澤光雄／日本山書の会
2002 ／ 786 ータ
日本山書の会の 40 周年記念に出版された。10 周年の「北の山と人」、30 周年の「北の山と本」に続く 3 冊め。明治以前の蝦夷地探検開拓史年表が慶長（1604 年）から始まっている。渡辺隆の「蝦夷地山名辞書　稿」は 186 ページにわたってアイヌ語系の山名 851 など、古文献の研究成果が詰まっている。田中恒寿の「黎明期の北海道山岳文学」は大町桂月、大島亮吉、伊藤秀五郎らの大雪山登山を振り返っている。

319　北へ…異色人物伝
北海道新聞社／北海道新聞社
2000 ／ 291 ーキ
北海道新聞日曜版 1・2 面に連載した 50 人を収録して 1 冊にまとめた。古今東西、各界異色の人物たちの、北海道に関わる知られざる一面を描いている。そのなか

の一人に、大雪山を探究した小泉秀雄を取り上げている。

320　郷土を拓いた人々
村上久吉／旭川市郷土博物館
1956 ／ 281 ーキ
「石北線設置層雲峡紹介の功労者愛別村長太田龍太郎」と「層雲峡開発に生涯を捧げた塩谷忠」を紹介している。出典資料は太田著『霊山碧水』と、『寒帯林』より塩谷著「大町桂月翁を想う」によるとしている。

321　自然を読む
社団法人北海道自然保護協会／社団法人北海道自然保護協会
1986 ／ 462 ーホ
風景の生い立ち、動物たちの信号、植物の語るものなどの５章を俵浩三、村野紀雄、辻井達一、藤田郁男が分担執筆した。大雪山、阿寒などの国立公園の主要な骨組みは火山であり、一見何でもないような石ころも良く調べると火山の生い立ちを知る情報が隠されていることを物理学者、寺田寅彦の随筆を紹介しながら解説。十勝岳で雪の結晶を研究した中谷宇吉郎の「雪は天から送られた手紙である」を紹介しながら、良く見て、自然から学ぶ大切さを教えている。

322　秀岳荘創業 50 周年記念
「山の素描」の執筆者たち
高澤光雄／私家版
2005 ／ 786 ーシ
1955 年創業の「金井テント製作所」を坂本直行の命名で「秀岳荘」と改め、1962 年に店の PR 誌「山の素描」を創刊、1976 年の 45 号まで続けた。15 年間に執筆者が 185 人。その中から加納一郎、犬飼哲夫、深田久弥、伊藤秀五郎ら 25 名の人物像紹介と、全巻の総目録。

323　昭和ひと桁生かされて八十四年
鎌倉春雄／私家版
2013 ／ 289 ーカ
著者は、大雪山の山案内人として名を残す成田嘉助の孫。嘉助じいちゃんと黒岳石室の周りで遊んでいるとき突然、「ハルオ、熊だぞ」とじいちゃんが叫ぶ。親子熊三頭が近くを歩いていた思い出の一コマ。旭川でお茶の「静香園」を営んできた著者の自叙伝であるが「成田嘉助物語」の項を起こし、嘉助のエピソードを書いている。

324　書簡集からみた宮部金吾
編　秋月俊幸／北海道大学出版会
2010 ／ 289 ーミ
宮部家から北大に遺品寄贈があり、北大農学部に遺されていた書簡と合せて約 800 人、3,233 通の書簡を北大図書館北方資料室で秋月俊幸らが発信者（差出人）、宛先別に整理し、簡単な内容と、ペン書き・毛筆別の備考も添えた。小泉秀雄が旭川町上川中学校教師時代に送った６通の封書、はがきがあり、「生徒 15 名を引率して大雪山に登り、約 150 種を採集。登攀は困難でしたが珍しい高山植物が多いので標本調整が終わったら送付します」「ヌタプカムウシュッペ山（旭岳）の植物は乾燥したらまとめて送ります」など興味深い。

325　瀬戸君　高田君　追悼録
編　湊正雄／有馬洋
1939 ／ 289 ーセ
昭和 13 年 12 月 27 日、北大山岳部９名が上ホロカメットクで雪崩に遭い、部員２人が死亡。瀬戸三郎、高田徳の２人の霊に捧げる追悼録。登山歴や書簡、日記などを紹介し、恩師、友人、家族らの寄稿、雪崩現場の考察など。

326　追悼　自然を愛した医師・寺島和光
横浜市立大学探査会、探検部ＯＢ／横浜市立大学探査会、探検部ＯＢ
2016 ／ 289 ーテ
寺島和光は横浜市立大学医学部を卒業した医師で、ボリビアの 6,008m のウトゥルンコ登頂目前で倒れた登山家でもある。在学中に同大探査会で活躍し 1962 年、寺島が隊長となって大雪山の扇ケ原学術調査を行った。生物、地理、商学の３班編成の総勢 17 名で７月 21 日から 30 日まで現地に入り、「想像していたよりも、もっとすばらしいところで、70 あまりを超える大小の湖沼群は、太古のままの神秘をたたえ」「蚊、ブヨ、それにヒグマというあまり有難くないものからも歓迎された」などと書いている。隊員の伊東芦一はキャンプ地の沼を「藤見沼と呼ばれていたが、我々の調査を記念して地元の人々が大学沼と改称してくれた」と書き留めている。

327　登山の先駆者たち
熊原政男／校倉書房
1963 ／ 786 ーク
著者のライフワーク、日本登山史研究の

一環となる本。北海道では松浦武四郎を取り上げ、石狩岳、蝦夷富士、豊似岳登山について記述している。石狩岳、羊蹄山ともども、今ではフィクションとされている。

328　中谷宇吉郎研究室
北大理学部教授室 N123
松枝大治、山崎敏晴／北海道大学総合博物館
2004 ／ 451 －ナ
中谷宇吉郎は大雪山などで雪結晶の観察に取り組んだ雪の科学者。中谷が使っていた北大理学部本館北棟のN 123 教授室を復元展示した際の展示目録などを 112 ページに収めた。教授室や研究成果をカラー写真と共に紹介、教授室所蔵の文献目録と雪結晶の写真目録、略年譜、著書目録などを収録した。CD 版もある。

329　中谷宇吉郎ゆかりの地
編　口野哲夫／中谷宇吉郎雪の科学館友の会
2000 ／ 291 －ナ
中谷博士のゆかりの地について、20 人余が執筆した。中谷らが雪の映画を撮影した勇駒別温泉（現・旭岳温泉）の「仰岳荘」や、中谷の薫陶を受けた吉田六郎が雪の結晶の撮影拠点にしていた「白雲荘」など。

330　中谷宇吉郎ゆかりの人
中谷宇吉郎雪の科学館友の会／中谷宇吉郎雪の科学館友の会
2009 ／ 289 －ナ
「中谷宇吉郎雪の科学館」が開設してから 3 年後に「友の会」が発足、会の 10 周年記念にゆかりの人を編集、発行した。幼友達から晩年の交流まで 72 人。

331　日本山岳文学史
瓜生卓造／東京新聞出版局
1979 ／ 910 －ウ
更級日記など平安時代の紀行文から書き起こし、西行、芭蕉らの旅、「北海道」の名付け親である松浦武四郎が石狩の源流を遡った「石狩日記」、大町桂月、徳富蘆花の 2 人の自然詩人、大島亮吉の足跡など、いにしえから現代までの山岳文学史。桂月のことを、「明治という時代背景を考えても、多分に右翼的である」と評するなど仔細に調べたうえでの人物評が面白い。

332　日本の岳人たち
斎藤一男／岩峰社出版部
2000 ／ 786 －サ
著者の知識と経験から得た登山家伝と言うべき本。「源流の山と人」の章では、川をさかのぼる初期の探険的登山を述べており、石狩川の節では松田市太郎、小泉秀雄、大町桂月らとあるが、そのほか間宮林蔵、近藤重蔵、最上徳内、松田伝十郎、松浦武四郎、ライマン、松本十郎、松原岩五郎、成田嘉助、大島亮吉の名が見える。

333　日高山脈の先蹤者　相川修遺稿集
編　高澤光雄／日本山岳会北海道支部
2003 ／ 786 －ア
相川修は札幌第二中学出身で、部報『ヌタツク』に寄稿している。北大医学部卒業、内科医。北大山岳部員として活躍、その後も終生登山を続けた。日本山岳会名誉会員。回想記には大雪山登山のことも出てくる。

334　百霊峰巡礼　第二集
立松和平／東京新聞出版局
2008 ／ 915 －タ
月刊誌「岳人」に連載した作家、立松和平の霊峰登山記。第二集は 26 番めから 50 番めまでの紹介で、大雪山（神々の遊ぶ庭）は 34 番めの登頂。立松が妻美千絵と共に上川町のガイド、佐藤文彦らの案内で初夏の黒岳に登った。姿を隠している大雪山の熊が本当の熊で、知床の観光熊とは違う、という佐藤の説明に、知床とゆかりの深い立松が少々反発を覚えながらも、アイヌ語でカムイミンタラ、神々の遊ぶ庭は自然が良く保たれていると書いている。

335　北大百年の百人
北海タイムス社／北海タイムス社
1976 ／ 281 －ホ
１人２ページ、写真入りでまとめてあり、北大出身者すなわち北海道の人物伝として活用できる本である。特に山や自然、大雪山に関係する人物を挙げておくと宮部金吾、志賀重昂、大野精七、中谷宇吉郎、舘脇操、坂本直行、石川俊夫、三浦雄一郎らである。

336　ほっかいどう先人探訪
読売新聞社北海道支社編集部／柏艪舎
2019 ／ 281 ーホ
読売新聞が北海道版で 2018 年に連載した「先人探訪」を単行本にした。松浦武四郎が北海道と名付けて 150 年の節目にあたっての連載企画で、大雪山を愛した旭川の作家、三浦綾子、大雪山の父と称される小泉秀雄、上川の屯田兵育ての親、永山武四郎、大雪山で雪を研究した中谷宇吉郎ら 53 人の物語。

337　北海道の登山史
安田治／北海道新聞社
2010 ／ 786 ーヤ
登山の黎明期から一般社会人への普及期までと、戦後から現代までの変遷の 2 つに分けて、北海道の近代登山史を概観するほか、近代登山史以前の状況、外国人による登山活動などを考察。登山史年表も収録。

338　続『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ／中西出版
2002 ／ 281 ーホ
毎週日曜日、北海道ゆかりの人物にスポットライトをあて、その人生ドラマを約 6,000 字の放送原稿にして、朗読のスタイルで 30 分間番組で放送した。それを本にまとめたもので、写真も挿入し 1 人約 10 ページの北海道人物伝というべき一冊。本書では、小泉秀雄を大雪山の山々を命名し、「大雪山の父」と呼ばれた植物学者として取りあげている。大雪山ゆかりの人物では他に前田真三、中谷宇吉郎がある。

339　続々『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ／中西出版
2003 ／ 281 ーホ
北海道の風土を描き続けた洋画家、相原求一朗を紹介、挿絵も相原の描いた北の十名山のひとつ「山麓紅染む旭岳」である。大雪山関係では他に坂本直行、高橋延清らを紹介している。

340　第五集『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ／中西出版
2004 ／ 281 ーホ
本書は「写実の鬼」で知られる大雪山の画家、村田丹下を取りあげている。大雪山ゆかりの人物は他に犬飼哲夫、宮部金吾がある。STV ラジオ「ほっかいどう百年物語」ラジオ番組制作スタッフの姓名も記載している。

341　松浦武四郎紀行集　下巻
編　吉田武三／冨山房
1979 ／ 915 ーマ
編者・吉田は武四郎研究の先駆者であり、原文を解読、ルビを付して現代人にも読みやすくし、武四郎全国の旅と探検紀行を上中下 3 巻にまとめた。布装箱入の立派な本で、下巻に大雪山ゆかりの「石狩日誌」「十勝日誌」を収録した。

342　森のひと　どろ亀さん
米村晃多郎／春秋社
1984 ／ 289 ータ
〈北の肖像〉シリーズの 1 冊。どろ亀さんといえば東大北海道演習林長を勤めた東大名誉教授の高橋延清のこと。「教壇に立たない、教授会には出ない、論文も書かない」三無教授の一代記。林内の最高峰・大麓山（1,460m）は、大雪山国立公園区域内であり、ハイマツもあればナキウサギも棲む。兄・高橋喜平は雪の研究家として著名で、本書発行時は兄弟ともに研究活動を続けていた。

343　山の思想史
三田博雄／岩波書店
1973 ／ 786 ーミ
岩波新書の一冊である。著者は登山思想に影響を与えた人物を論述する。北海道ゆかりの志賀重昂もその一人として取り上げ、代表作『日本風景論』には「ヌタプカウシペ　石狩国石狩河の源」「オプタテシケ　十勝、石狩の境界」などのほか、全国の山の記述がある。著者によれば志賀は札幌農学校在学中も、空知石狩近辺を歩いたくらいで、ほとんど足跡を残していない。登山技術も含めて、大半は文献による記述であると断じている。

344　雪と氷の科学者　中谷宇吉郎
東　晃／北海道大学図書刊行会
1997 ／ 289 ーナ
著者は宇吉郎門下生で、北大中谷研究室の最後の助教授。宇吉郎が大雪山で雪の結晶の観察を続けたこと、勇駒別温泉「仰岳荘」で雪の映画を撮ったこと、忠別川の洪水調査に取り組んだことなど、物理学者としての宇吉郎の生涯を掘り下げている。

案内書

登山案内、自然案内、観光案内、花案内、案内小冊子、案内ガイドブックなど

5－1 案内書（全てが大雪山）

345 歩こう！大雪山・旭岳の自然

東川エコツーリズム推進協議会／東川エコツーリズム推進協議会
2014 ／ 291 －ア

旭岳温泉、姿見の池周辺などを紹介するポケットサイズ（タテ約 19.5cm、ヨコ 10cm）のガイドブック。温泉周辺の探勝路マップ、クロスカントリーコースマップ、高山植物の写真紹介、野鳥を紹介するイラスト、エゾモモンガやナキウサギの動物紹介写真、山容の写真など、掌に乗るサイズながら情報が豊富に入っている。

346 ぐるり大雪

編　大雪山国立公園観光連盟／大雪山国立公園観光連盟事務局
1997 ／ 291 －グ

大雪・十勝連峰西方の 10 市町で結成する観光連盟のガイドブックである。A4 判 14 ページの小冊子に景観、温泉、飲食、アウトドア、イベントを紹介、A2 判の折り込み観光地図もある。

347 クロカンマップ２

編　澤田啓／白山書房
1997 ／ 784 －ク

表示板や道標の無い雪の野山をフィールドにするクロスカントリースキーには、地図を読む技術とルートを探す眼が必要となる。2 色刷り地図に、グレード別（初級、中級、上級）コース、日程などを入れたガイドブック。忠別川河畔林の天人峡温泉コース、旭岳温泉クロカンコース、ロープウェイ姿見駅から姿見池や中岳温泉ルートの解説を春菜秀則が執筆。十勝岳白銀荘から望岳台コースは中澤和博、十勝三股周辺は平康彦が執筆した。

348 国立公園大雪山

大雪山国立公園観光連盟／大雪山国立公園観光連盟、北海道観光連盟
1968 ／ 291 －コ

タテ約 11cm、ヨコ約 20.8cm、14 ページの携行型ガイドブック。大観連加盟の市町村のホテル、旅館をはじめ主な観光スポットを写真とイラスト入りで紹介している。

349 国立公園大雪山

不詳／不詳
不詳／ 291 －コ

四つ折りにするとタテ 18.5cm、ヨコ 11.5cm になる登山案内、宿泊案内パンフレット。勇駒別温泉（現・旭岳温泉）は林務署の「仰岳荘」と営林署の「白雲荘」があり、共に一泊 150 円。

350 KONOHA

吉田友吉／グランドホテル大雪
不詳／ 291 －コ

ホテルが発行した季刊紙のダイジェスト版。山のものしり博士、吉田友吉が語り部となって山中の露天風呂や姿見の池の深さを測ったエピソードなど、旭岳温泉周辺の魅力を紹介している。

351 すがたみのはなたち

大雪山自然学校／大雪山自然学校
2004 ／ 472 －ス

姿見の池、鏡池、すり鉢池、満月池を周回するコースに咲く花を 5 月下旬～ 6 月中旬、6 月中旬～ 7 月中旬などと旬ごとに紹介している。写真と実際の花を見比べながら山歩きが楽しめることから、ロープウェイ駅売店で好評の冊子。旭岳自然保護監視員の活動も紹介している。12.8cm、18.2cm、32 ページの手ごろな一冊。2004 年初版から 5 版まで発行している。

352 層雲峡案内―附大雪山登山案内

塩谷忠／大雪山調査会
1932 ／ 291 －ソ

層雲峡と大雪山を、折りたたみ横長の鳥瞰図にしている。正面に層雲閣が大きく座っているのも、いかにも大雪山調査会の出版物らしい。案内文には国立公園候補地とあり、大雪山、層雲峡の説明とともに、アクセス、温泉の効能や宿泊料、案内料なども記している。大町桂月の漢詩、与謝野鉄幹、晶子夫妻、馬場孤蝶の歌も載せている。

353 大雪山

編　小原弘也／旭川市役所
1952 ／ 291 －ダ

写真と詩人・岩本雷鳥の詩文で見る観光案内書。冬季オリンピックを大雪山で、という夢の鳥瞰図があり、裏表紙に川上

コヌサらアイヌの紹介がある。

354　大雪山

北海道教育委員会／北海道教育委員会
1965 ／ 709 ーホ

北海道教育委員会は昭和 33 年度から「北海道文化財シリーズ」を刊行、「天然記念物」編、「史跡、名勝」編、「アイヌ文化」編などに続く第 7 集が大雪山。大雪山地区特別調査隊が編成され、東川町からも参加している。あとがきを書いた担当課長、吉田佐吉は美瑛町白銀温泉にある「国立大雪青年の家」初代所長。

355　大雪山・旭岳の自然観察

㈳北海道自然保護協会／㈶日本自然保護協会
1983 ／ 462 ーダ

協力は北海道、東川町、前田一歩園財団、北海道自然保護協会によって作られた自然ガイドである。旭岳周辺に限定しており、山麓の天人峡、羽衣の滝、敷島の滝、旭岳温泉周辺、姿見の池周辺を、イラストや写真でわかりやすくガイドする。登山案内ではなく自然観察ガイドなので、山麓の森から高山の花へ、植物、動物、鳥、高山蝶のほか、地形や旭岳の誕生も解説する。

356　大雪山・旭岳の自然観察ガイドブック

旭岳ビジターセンター／東川町
1997 ／ 462 ータ

旭平周辺散策図、クロスカントリースキーコース、自然探勝路、旭岳温泉でのバードウォッチング、高山植物などを紹介している。

357　大雪山（エアリアマップ山と高原地図 41　旭川・層雲峡・東大雪・十勝連峰）

秋元笻男／昭文社
1978 ／ 291 ーア

地図の昭文社が水に強い FP 紙で地図をつくり、表面は大雪山国立公園とその周辺市町村、登山路などを入れた大判地図。裏面は「大雪山、トムラウシ、石狩岳」「十勝連峰」「ニペソツ山」の三域に分けた登山路地図。折りたたむとタテ 18cm、ヨコ 10cm。ほぼ同じサイズの 48 ページの案内書には、大雪山の魅力、勇駒別温泉（現・旭岳温泉）、天人峡温泉などを紹介している。

358　大雪山國立公園　昭和九年版

札幌鐵道局／札幌鐵道局
1934 ／ 291 ーサ

昭和 9 年 6 月 20 日の発行。はしがきに「大雪山を中心とする一帯は、今年七月國立公園に指定されることになっている」とあるので、国立公園指定直前に印刷された非売品ガイドブック。旭岳へは松山温泉（現・天人峡温泉）から登る。勇駒別温泉（現・旭岳温泉）はまだ、載っていない。松山温泉の宿泊料一泊二食（握弁当付き） 1 円 50 銭、自炊（布団付き）一泊 70 銭。

359　大雪山国立公園　愛山渓温泉

安足間観光協会／安足間観光協会
1955 ／ 291 ーダ

直井藤次郎ほか 2 名が明治 35 年、熊猟の途中に温泉を発見、大正 3 年に直井温泉として開湯する。小さな冊子ながら百田宗治の詩「安足間」、更科源藏の「大雪山付近の地名」、三好文夫の「愛山渓の四季」などが載っている。

360　大雪山国立公園旭岳・天人峡自然観察ガイド

監修　中谷泰治／大雪山国立公園旭岳温泉観光協会
不詳／ 402 ーダ

大雪山が国立公園指定から 50 年を迎えた 1981 年に大雪山自然観察講座が始まった。監修した中谷泰治の国立公園勇駒別在任期間は 1984 年 4 月から 1987 年 5 月までなので、その間に発行されたものか。全 34 ページ。イラストと分かり易い文章で探勝路、登山道、花、野生動物、森林分布などを解説。編著者名は載っていないが、講座の講師を務めた吉田友吉と思われる。

361　大雪山國立公園　概要と探勝

齊藤勝／北海道景勝地協會
1937 ／ 291 ーダ

昭和 12 年の大雪山探勝の手引き書。当時の宿賃、バス賃なども記載。ちなみに松山温泉（現・天人峡温泉）宿泊料は 1 円 50 銭。ユコマンベツ温泉（現・旭岳温泉）にいたっては「上志比内で忠別川を渡り新井牧場を経て地方費林の歩道を登る。温泉には造林小舎があるのみ」。

362　大雪山国立公園　自然観察ガイド
大雪山国立公園層雲峡管理事務所ほか／大雪山国立公園層雲峡管理事務所ほか
1985 ／ 462 ーダ
32 ページの持ちやすい厚紙のハンドブック。表紙は黒岳三山、裏表紙は黒岳石室のスケッチ。刊行には上川町、上川町自然科学研究会が関わっているので、すべて上川町からのガイドである。1・黒岳コース、2・赤岳コース、3・高原温泉コース、4・愛山渓コースについて、図示しながらコースガイドとともに、自然観察のポイントを挙げていて分かりやすい。お花畑、コマクサ、ナキウサギ、鳥類、ウスバキチョウなどを観察できるところや景観の解説、注意事項もある。黒岳山頂の北面には「危険!! 落ちると天国に行く」とある。

363　大雪山國立公園　シリーズ 14
国立公園協会／朋文堂
1954 ／ 291 ーダ
国立公園協会が「大雪山」についてガイドや注意をまとめた本。この時の国立公園はまだ 17 カ所しか認められていなかった。

364　大雪山国立公園層雲峡
企画構成　佐藤庫之介／上川町、層雲峡観光協会
1956 ／ 291 ーダ
層雲峡温泉に日赤分院や蓬莱橋があったころの写真をふんだんに使ったガイドブック。

365　大雪山国立公園　層雲峡の展望
山崎鋆一郎／層雲閣
1936 ／ 291 ーヤ
昭和初期の大雪山の姿が貴重な写真と美文調で紹介され、英文翻訳が各ページに併記されている。一温泉旅館が出版したとは思えないほど格調の高い編集、丁寧な製本、箱入り。

366　大雪山国立公園
大雪山の自然解説マニュアル
大雪山国立公園層雲峡管理官事務所／大雪山国立公園層雲峡旭岳地区ボランティアレンジャー運営協議会
1989 ／ 450 ータ
厚手の紙にプリントして、バインダーで綴じたもの。さまざまな分野について地元の研究者、ガイドらが書き、動物編は東川のネイチャーガイド、塩谷秀和が担当した。

367　大雪山国立公園天人峡自然観察ガイド
不詳／大雪山国立公園天人峡温泉観光協会
発行年不詳／ 402 ーダ
大雪山自然観察講座のガイドブック。タテ 18cm、ヨコ 13cm の携行サイズで、巻末のメモ欄を含め全 18 ページ。表紙に吉田友吉が講師になった観察会の写真。イラストに簡単な説明文を添えた天人峡周辺の自然案内書。

368　大雪山国立公園登山案内
環境庁／環境庁自然保護局大雪山国立公園監理員事務所
1984 ／ 291 ーダ
大雪山国立公園指定 50 周年記念に編集・発行された折りたたみガイド版。開いた全ページに大雪山系登山案内図を載せ、避難小屋、野営指定地、キャンプ場、公共交通機関を記載。自然保護憲章、東川町役場商工観光課（0166 － 82 － 2111）などの照会先、安全登山の心得、大雪山国立公園のあらまし、クリーン大雪運動、ヒグマの生態、動物・昆虫、高山植物、気候・気象、地形・地質を要約、掲載している。

369　大雪山國立公園
林業解説シリーズ 16
編　加納一郎／林業解説編集室
1949 ／ 650 ーダ
編集は加納一郎、筆者は農林省林業試験場札幌支場長、原田泰。「昭和 9 年 12 月に国立公園に指定されただけで今日までまだ公園としての手入れは何もなされていない」「山奥では過熟の老大木が自然にたおれるままになっていて、運び出そうにも道がない」ころの大雪山解説書。

370　大雪山自然ハンドブック
編著　成田新太郎／自由国民社
1994 ／ 450 ーダ
自由国民社のネーチャーシリーズの大雪山版で、上川町自然科学研究会のメンバーである成田新太郎、保田信紀、佐々木太一、中条良作、佐藤文彦、鈴木敏晴が文とイラストを担当した。大雪山の地形、気象、生物、登山史や保護活動などを書き、最後は「目で見る登山コース」と登山の心得などを詳述している。

371　大雪山　十勝岳・幌尻岳
山と高原地図３
佐藤文彦／昭文社
2015 ／ 291 －ダ
登山道や山中のキャンプ場の状況、山小屋、トイレ、高山植物群落の情報、悪天候時の注意ポイントなどの調査を継続し、最新情報を確実に入れた５万分の１地図と登山ガイドブックをセットにしている。大雪山は上川町の『風の便り工房』佐藤文彦代表、日高の山はノマドガイドチームがそれぞれ調査、執筆を分担した。

372　大雪山登山案内図
層雲峡観光協会／層雲峡観光協会
1969 ／ 291 －ダ
折りたたみの登山案内。開いた全ページが上川町役場監修の大雪山登山案内地図。大雪山のあらまし、四季、昆虫、動物、勇駒別温泉や天人峡温泉など登山基地、層雲峡博物館、山小屋、登山装備、旭川地方の地質と地形、構造土、日の出日の入りなどを記載。当時の実費頒布が百円。

373　大雪山登山案内圖
不詳／旭川市大雪調査会
1966 ／ 291 －ダ
タテ 16cm、ヨコ８cm の紙の袋に入った地図が２枚。１枚は大雪山登山路略図で、旭川を起点に鉄道、自動車道、馬車道などを引き、松山温泉からの入山と、塩谷温泉（層雲峡温泉）から入山を地図で示している。大雪山中の登山路は山名を入れ、現在と同じコースが多いが勇駒別、愛山渓、高原温泉、銀泉台は記述が無い。忠別渓駅逓所、層雲峡駅逓所を記入しているので時代考証のヒントにはなる。もう１枚は北鎮岳頂上からの展望図で円周に東西南北を入れ、天塩岳、利尻岳、雌阿寒岳などの見える方向と示している。

374　大雪山　登山法及登山案内
小泉秀雄／大雪山調査會
1926 ／ 291 －コ
文献書誌の研究家、清水敏一は「小泉秀雄の名を山岳界にとどめているものは、大雪山の研究とその著書『大雪山　登山法及登山案内』である。同書は北の山の本の中でも古典的名著として評価も高く、新書版の大きさながら本文 374 ページ、附録 39 ページ、そのほかに写真、図版 69 枚を挿入する大冊である」と絶賛している（『大雪山わが山小泉秀雄』から抜粋）。

375　大雪山の生いたち
国府谷盛明／上川町、層雲峡観光協会
1961 ／ 453 －コ
大雪山の火山としての形成過程を写真、図を元に詳しく説明している。物見遊山的な観光案内書の発行だけではなく、科学的な要素も大切にしたいという趣旨で上川町が発行した。

376　大雪山の自然観察ガイド
昆野安彦／山と渓谷社
2006 ／ 402 －コ
地図、植物、動物、星、火山、雪、気候、アクセスなどポイント別にガイドしている。大きさも手ごろ。「赤ちゃんコマクサを知ってるかい」などページごとのタイトルが優しい。「大雪山ちっちゃいものクラブ」でリス、ウサギ、オコジョを、「稜線の音楽会」でノゴマ、カヤクグリ、ルリビタキ、ビンズイ、ギンザンマシコを紹介。

377　大雪山　花の山旅①
梅沢俊／山と渓谷社
2000 ／ 291 －ウ
山と渓谷社の花の山旅シリーズのトップを飾ったのが梅沢俊の「大雪山」。著者は大雪山を花のギャラリーとたたえ、花の色別に白色系、黄色系、赤色系、紫色系の図鑑で 136 種を紹介。群落やお花畑を愛でながら進む登山コースを愛山渓から旭岳まで９コースを紹介、さらに大雪山の見ごろ別の花マップを登山地図上に記している。

378　大雪山を歩く
伊藤健次／山と渓谷社
1996 ／ 291 －イ
フルカラー特選ガイド②として発行された。マップ、花図鑑、生き物たち、さまざまなルートとプランニングの事例など、豊富に紹介している。

379　大雪探検ガイド
動・植物おもしろ図鑑
不詳／不詳
不詳／ 291 －ダ
B4 版を折りたたんで 9cm、12.5cm のポケットサイズにした旭岳温泉周辺のイラストマップ。動植物、探勝コースなどを紹介。

380　中部の夏山－大雪山及其附近
編　村上久吉／北海道中部保勝協會
1935 ／ 291 －チ
大雪山が国立公園に指定された翌年（昭和 10 年）に北海道中部保勝協会が非売品で発行した。協会は上川支庁内にあった。登山口としての松山温泉は一泊 1 円 50 銭、勇駒別は旭川森林事務所の小屋があり、別棟の温泉は無料などの時代。大雪山とは別扱いで十勝岳、石狩岳の紹介があり、吹上温泉は学生一泊 1 円 50 銭、「スキー及被服の乾燥室、写真現像室、娯楽室、電話」の設備がある。

381　十勝岳連峰の自然と野外活動
国立大雪青年の家／㈱須田製版
1990 ／ 486 －ト
国立大雪青年の家（美瑛町白金）は 1966 年に開設した。本書は職員 10 人が 4 年をかけて編集した。風景や動植物のカラー写真が多く、地図、イラスト案内図もあり、自然観察、ハイキング、登山のガイドブック。

382　特別天然記念物大雪山の花・大雪山国立公園大雪山の山
高橋秀雄／林野弘済会旭川支部
1989 ／ 341 －タ
登山の携帯用に出版されたコンパクトなサイズ（タテ約 18cm、ヨコ約 13cm、64 ページ）。地図、登山コース、高山植物や動物などをカラー写真と共に紹介している。

383　夏山ガイド②表大雪の山々
梅沢俊、菅原靖彦／北海道新聞社
2000 ／ 291 －ホ
表大雪のスポットごとに写真を満載、分かりやすく、サイズもコンパクトで夏山登山にベストな一冊。サイズもコンパクトなので、登山にも持って行ける。

384　夏山ガイド③
東・北大雪　十勝連峰の山々
梅沢俊、菅原靖彦／北海道新聞社
1995 ／ 291 －ホ
夏山ガイド②に続き、同じ編集で東・北大雪と十勝連峰を紹介している。

385　日本自然探検の旅・2
生物の大宝庫　大雪山
松岡達英／大日本図書
1997 ／ 462 －マ
著者の動植物の巧みな手書き画が写真とは違った温かみをにじませている。子供にもよくわかる解説文、大きめの活字。大雪山に生きる主要な動植物、昆虫、魚を探検気分で読み進められる。

386　パークボランティアのための大雪山自然解説マニュアル
編集委員長　関口隆嗣／大雪山国立公園パークボランティア連絡会
2009 ／ 450 －パ
パークボランティア連絡会創立 20 周年を機に、大雪山に対する会員の知識を高め、自然環境の保全意識の向上と啓発を目的に発行した。大雪山国立公園の歴史から大雪山の形成、気象、植物、昆虫、鳥類、ほ乳類などを写真、図版を入れて分かり易く解説している。

387　北海道の山　大雪山・十勝連峰
伊藤健次／山と渓谷社
2013 ／ 291 －イ
ヤマケイアルペンガイド 1。

388　北海の髙峯　大雪山登山案内
天野市太郎／日新社
1948 ／ 291 －ア
著者は旭川勤務が長かった教師。登山案内は地元ならではの体験に基づいた執筆で、戦前の東川村や松山温泉の様子が手に取るように分かる。村史にはない面白さを秘めている。（302 大雪山に生きた男　天野市太郎先生を偲んで　参照）

5－2 案内書（部分が大雪山）

389　旭川・大雪山
岩波書店編集部／岩波書店
1990 ／ 291 －ア
自然と地誌の記録シリーズ（全 12 冊）。「天人峡は忠別川上流の峡谷」という説明がついた写真には、非常に珍しい橋が写っている。

390　旭川・大雪山 1958　復刻ワイド版
岩波書店編集部／岩波書店
1958 ／ 291 －ア
岩波写真文庫版（約 18.2cm、約 12.5cm）をワイド版（約 21cm、約 14.5cm）で復刻した。

391　旭川を中心としたるスキー地
編　村上久吉／北海道中部保勝協会
1935 ／ 784 －ア
大雪山のスキーコースとして松山温泉（現・天人峡温泉）口より旭岳登山コース、勇駒別口より旭岳縦走コース、大雪山沼の平スロープなど９コースも紹介されているうえ、十勝岳、中央高地縦走、ニセイカウシュペ山、石狩岳、チトカニウシなど、写真も豊富に紹介している。今でこそバックカントリーと言われる深雪山スキーが昭和 10 年発行の 19cm、13cm、27 ページの冊子に既に詳しく載っている。

392　一等三角点全国ガイド
編　一等三角点研究会／ナカニシヤ出版
2011 ／ 291 －イ
一等三角点に愛着を持つ研究会グループが書いたガイドブックで大雪山周辺は旭岳、トムラウシ山、音更山、富良野岳、武利岳、ウペペサンケ山を紹介、すべてに一等三角点の標石の写真を添えてある。

393　一等三角点百名山
編　一等三角点研究会／山と渓谷社
1988 ／ 291 －イ
三角点は必ずしも山頂に限らないこと、点名と山名は一致しないことなど興味を引く。本書では全国の一等三角点 969 点から百の名山を選び、1 山 2 ページに写真、地図を配した紀行文調の案内記である。北海道から 10 山が選ばれ、大雪山系（カッコ内は点名）のみをあげると、旭岳（瓊多窟・ヌタック）、トムラウシ山（富良牛山・トムラウシヤマ）、富良野岳（神女徳岳・カムイメトクダケ）である。

394　駅から登れる山
編　国鉄山岳連盟／出版科学総合研究所
1983 ／ 291 －エ
さすが国鉄らしい企画のガイドブックである。駅からの地図、イラスト、写真、スケッチ、駅のスタンプ、乗車券などを散りばめてあり、楽しく読める。大雪山系では十勝岳、ニペソツ山、ウペペサンケ山がある。

395　輝く北海道
MAGNIFICENT HOKKAIDO
編　田島繁得／北海道観光連盟
1951 ／ 748 －カ
昭和 27 年 6 月に北海道で全日本観光連盟総会が開かれ、記念に観光写真集が刊行された。北海道観光連盟会長は知事・田中敏文で序文に「平和条約の発効によって再び国際社会に復帰した新生日本」などと書いている。随所に広告があり、日本航空は米国ダグラス社の 4 発エンジン DC-4「てんおう星」号、星のマークのビールはサッポロビール前身の「ニッポンビール」。天人峡羽衣の滝、大雪山の主峰旭岳、大雪山のお花畑、噴煙の手前にスキーヤーがいる十勝岳噴火口などモノクロ写真で紹介している。

396　上川盆地の自然　巡検テキスト
編　科学教育研究協議会旭川サークル／科学教育研究協議会旭川サークル
1974 ／ 450 －カ
理科、科学、生物の授業で先生は子どもたちに自然をどのように教えたら分かり易いのか。旭川市内の小中高の先生が大雪山などを歩き、郷土の自然についてテキストを作った。大雪山は中生代、深い海の底にあった。氷河期を生き抜いた大雪山の植物、火山の熱雲が羽衣の滝をつくったなど、興味深い現地での観察と学び方を約 50 項目にまとめた。

397　カラー北海道
編　栗谷川健一／山と渓谷社
1973 ／ 291 －カ
山渓カラーガイドシリーズの 1 冊で、山や自然を中心に写真と解説で紹介する。大雪山系では、「岩壁の層雲峡」「大雪山の動植物」「大雪連峰」「糠平湖と然別湖」「鳴動する十勝連峰」がある。執筆者は、舘脇操、楡金幸三、更科源蔵、石川俊夫、橋本誠二、辻井達一、俵浩三、市原有徳、鮫島惇一郎ら。

398　観光北海道
編　長谷川喜彦／北海道新聞社
1971 ／ 291 －カ
大雪山遠望、富良野盆地からの十勝連峰、層雲峡、天人峡など、見ごたえのある写真が多い。大雪山国立公園の案内では、表大雪、東大雪、十勝連峰、山中の湖や温泉などを案内する。バスの距離と時間、料金まである。天人峡へ旭川から 40 キロ、バス 1 時間 20 分、340 円。宿泊料は勇駒別温泉 1,700 ～ 3,500 円。層雲閣は 1,500 ～ 10,000 円など。

399　観光北海道じてん
編　田村健太朗、青木妙子、若林里江／㈱フィック
1996 ／ 291 ーカ
旭川の写真家が編集した観光案内ガイドで、「じてん」としているが事典らしくなく、写真、イラスト、地図を配し、おまつりイベントガイド、温泉ガイド、宿泊ガイド、アクセスガイド、全道 212 市町村のワンポイントガイドなど、いろいろな視点から観光の旅を楽しめる。巻末の大雪山国立公園内の山と滝の写真が素晴らしい。秘湯ウオッチング 6 温泉はすべて大雪山国立公園内である。

400　北の花名山ガイド
梅沢俊／北海道新聞社
2012 ／ 291 ーウ
植物写真家、梅沢俊が『花新聞ほっかいどう』に 2008 年 3 月から 2011 年 12 月まで連載した寄稿に、宿泊情報や開花時期などを加筆、カラー写真も増やした。花を楽しみながら行く登山ガイドブックで大雪山・旭岳から紹介が始まる。

401　北の山・記録と案内
滝本幸夫／岳書房
1983 ／ 291 ータ
34 山を案内しており、大雪山系は大雪山、北大雪、石狩岳、ニペソツ山、丸山、ウペペサンケ山、クマネシリ山塊、トムラウシ山、十勝連峰の 9 山である。単なるガイドブックではなく、登山の歴史や著者の登山記をまじえてエッセイ風に記述している。巻頭に故深田久弥夫人・志げ子の序がある。

402　空撮登山ガイド8
利尻・知床・大雪 10 コース
今村朋信、大森弘一郎／山と渓谷社
1983 ／ 291 ーク
空撮の山は分かり易い。ガイド内容も詳しく、登山コースをイメージし易い。

403　最新山のガイド―北海道の山と谷（改訂版）
編著　大内倫文、堀井克之／北海道撮影社
1981 ／ 291 ーホ
本書の特徴は、一般登山者から経験者まで、幅広くガイドしていること。それには無雪期、積雪期、バリエーションルート、沢登り、岩登り、スキー、アイゼン、雪氷壁ルートまで、難易度の表示記号をつけ、写真と概念図で案内する。大雪山系には多くのスペースをさいてさまざまなルートを案内している。黒岳沢、忠別川もある。

404　週刊続日本百名山
編　佐々木正紀／朝日新聞社
2002 ／ 291 ーシ
全 30 号のうち、23 号で「天塩岳、石狩岳、ニペソツ山」を取り上げ、空撮や花の写真などバラエティーに富んだ写真と解説文。「寄り道情報」として湯元協和温泉、旭川・男山の延命長寿の水、美瑛の美郷不動尊の名水などの紹介を挟んでいる。

405　諸国名山案内 [第 1 巻] 北海道
梅沢俊／山と渓谷社
1989 ／ 291 ーシ
高山植物などの撮影で知られた著者が 20 コースの登山ガイドを書いた。大雪山は望岳台 - 美瑛岳 - 十勝岳、黒岳 - 旭岳 - 旭岳温泉、沼ノ原 - 表大雪 - 愛山渓温泉、クウウンナイ川 - トムラウシ山など 6 コース。登山路と周辺の眺めを豊富な写真と共に分かり易く解説している。

406　女性のための百名山
坂倉登喜子／山と渓谷社
1990 ／ 291 ージ
著者は女性だけの山岳会「エーデルワイスクラブ」を結成、先頭に立って活躍した。黒岳から旭岳まで、2 日をかけたルートを「スケールの大きい花の群落を訪ねて」のタイトルで紹介している。

407　新北海道の民営温泉
小野寺淳子／北海道新聞社
2001 ／ 291 ーオ
道内の民営温泉からイチ押し 130 湯を厳選、目的別に 6 章に分けて紹介している。湯元湧駒荘（旭岳温泉）、然別峡かんの温泉、ホロカ温泉、湯元鹿の谷（幌加温泉）、湯元凌雲閣（十勝岳温泉）、大雪山白金観光ホテル（白金温泉）、天人閣とホテル敷島荘（天人峡温泉）など大雪山系の温泉も多数紹介している。

408　ステップアップ登山
宮下岳夫／北海道新聞社
2000 ／ 291 ーミ
副題に「目指せトムラウシ　藻岩山から始める」とあるように、山の初心者向け

に、道内 31 の山を紹介しながらアドバイスを満載したガイドブック。著者は日本山岳ガイド連盟技術員。誰と登る、日帰り登山、山小屋に泊まる、テントに泊まる、山で眠れない人へ、登山計画作り、山でのトイレ、よく効く薬など。

409　大雪山と阿寒

沼佐隆次／北海道庁景勝地協会
1935 ／ 291 －ヌ

筆者は内務省大手記者会新聞聯合社の記者。内務大臣、鉄道大臣、国立公園長（侯爵）、北海道長官らが序文を寄せている。阿寒と大雪山、二つの国立公園を取材するため、東京を汽車で出発、青函連絡船に乗り、さらに汽車で釧路へ、そして旭川へ。まず、この旅の行程地図から始まる。記者の目で確かめた旅日記でもあり、ガイドブック事始め的存在の書。

410　大雪山・十勝岳・知床・阿寒の山

昆野安彦、岡井　健／山と渓谷社
2006 ／ 291 －コ

ガイドブックと登山地図がひとつになったヤマケイＹＡＭＡＰシリーズの 19。山の標高と、山から山の所要時間、パノラマ写真、立体的な登山コース図など編集に一工夫され、一層分かり易くなった。

411　大雪山　北海道山の花図鑑

梅沢俊／北海道新聞社
1996 ／ 472 －ウ

著者は北海道をはじめ中国、ヒマラヤ方面の野生植物を中心に写真撮影を続けている。大雪山に生育する花の咲く植物とシダ植物（約 590 点）を収め、初心者向けに花の色別に引く図鑑。ハゴロモホトトギスを紹介している数少ない図鑑。

412　登山ガイド　1974 年版

旭川山岳会／道北地方山岳遭難防止対策協議会
1974 ／ 786 －ア

ポケット版のコンパクトな初心者向け小冊子。大雪山系、芦別岳、増毛山地、利尻山をガイドする。「安全登山の心得」に始まり、「楽しく登山をするために」などの項がある。概念図、鳥瞰図によるコースガイド、案内文、注意事項によって構成する。巻末に各登山口宿泊施設と料金、避難小屋、ロープウェイ（層雲峡、旭岳）の料金と時刻表、各登山口までのバス時刻表を載せている。重要な「山岳遭難の実態」では、1970 年から 4 年間の発生件数、遭難者数、原因別、職業別、年齢別、性別、居住別にグラフ化している。

413　登山ガイド　1986 年版

旭川山岳会／道北地方山岳遭難防止対策協議会
1986 ／ 786 －ア

基本的には 1974 年版（36 ページ）と同じだが、ガイド山域はピヤシリ山、函岳、天塩岳を加えたので、48 ページと分厚くなった。表紙はトムラウシのカラー写真。冬山を意識して「防ごう !! 冬山遭難を !」の項が加えられている。1986 年から 5 年間の遭難事故の実態を山系別に図示することで実態が分かりやすくなった。山域の広さ、登山者の多さから大雪山が圧倒的に多く 33 件 17 人を数える。

414　夏山登山教程

編　山岳会「クーラカンリ」／あいわプリント
2015 ／ 786 －ナ

北見地方を拠点にする山岳会「クーラカンリ」の会員 7 人（5 人は主婦）が書いた登山教本。初心者にも分かり易い内容で、登山技術研修会、対外協力など地域活動の章を設け解説しているのが異色。大雪山など道内の主な夏山登山コースを紹介、カラー写真が鮮明だ。

415　夏山への招待

編　後藤茂樹／㈱河出書房
1955 ／ 291 －コ

河出書房が新書判 80 ページ、定価 100 円の写真篇をシリーズ化し、夏山の誘いは 6 巻め。沢のぼり、高山植物、山小舎・キャンプなどを解説しながら、北海道の山は大雪山を紹介。雲井ケ原湿原のミズバショウが咲く池面に愛別岳、永山岳が映るモノクロ写真や姿見の池が印象的。

416　日本 200 名山を登る（上巻）

青柳栄次／昭文社
2001 ／ 291 －二

「どこでもアウトドア」シリーズの 200 名山版で、大雪山関係は石狩岳とニペソツ山の二山を紹介。石狩岳は入り組んだ沢と深い谷、切り立ったピラミダルな山頂は表大雪とは違った男性的な山容、ニペソツは道内屈指の鋭峰と紹介。糠平温泉、幌加温泉の紹介などきめ細かな情報を入れてある。

417　日本登山大系　1　北海道・東北の山
柏瀬祐之ほか／白水社
1997 ／ 291 －カ
豊富なルート図・概念図と詳細な解説を付した、バリエーション・ルート・ガイドの集大成。荒々しい未開の自然が残る北海道の山々と、生活のぬくもりや思いがけない明るさが漂う東北の山々を紹介している。

418　日本の湖沼と渓谷
今西錦司／ぎょうせい
1987 ／ 291 －ニ
全 12 巻のうち、第 1 巻が摩周・サロマ湖と日高の渓谷、第 2 巻が支笏・洞爺湖と層雲峡。山田秀三が層雲峡のアイヌ語地名を解説、前川光司が北の野生オショロコマのテーマで然別湖を書いている。

419　日本のロープウェイ・ゴンドラ全ガイド
中島信／千早書房
2010 ／ 536 －ナ
旭岳は、2000 年 6 月に現在のロープウェイになる。しかも、GARAVENTA の搬器でスイス製。国内唯一。

420　日本百名山　登山案内
川崎吉光／山と渓谷社
1999 ／ 291 －ニ
深田久弥の百名山を一冊に収録したガイドブック。大雪山は姿見駅から順に姿見の池、旭岳、間宮岳、中岳温泉、裾合平、姿見駅へ進むコースをカラー写真と地図を付けて紹介している。トムラウシは沼ノ原登山口から順に五色ケ原、化雲岳、ヒサゴ沼、トムラウシ、トムラウシ温泉のコース。十勝岳は望岳台から十勝岳避難小屋、十勝岳、鋸岳、美瑛岳、ポンピ沢、雲ノ平、望岳台のコース。

421　日本百名山・登山ガイド　上
山と渓谷山岳図書編集部／山と渓谷社
1993 ／ 291 －ニ
歩行時間、コースタイム、問い合わせ先電話番号、登山地図などを盛り込み、1 山のガイドを見開き 2 ページに収めている。黒岳から旭岳へ縦走する大雪山、トムラウシから天人峡に縦走するトムラウシ、十勝岳－この 3 編は札幌在住の写真家、梅沢俊が担当した。

422　日本百名山　登山ガイド決定版　上
伊藤健次ほか／山と渓谷社
2001 ／ 291 －ニ
モデルコース、交通、温泉、問い合わせ先電話番号などを盛り込んだガイドブック。大雪山のモデルコースは姿見駅→旭岳→間宮岳→北鎮岳→黒岳→層雲峡の縦走。要所要所の説明に地図と同じ番号を振ってあるので理解しやすい。トムラウシのモデルコースはトムラウシ温泉→トムラウシ山→化雲岳→天人峡温泉、十勝岳は望岳台からの日帰りコース。

423　日本百名山ビジュアル登山ガイド　上　北海道、東北、上信越、北アルプスの 50 山
朝日新聞社／朝日新聞社
2002 ／ 291 －ニ
百名山のガイド版、道内は黒岳から旭岳の 1 泊 2 日のコースガイドを掲載。

424　日本を登る　百名山（上巻）
青柳栄次／昭文社
2001 ／ 291 －ニ
「どこでもアウトドア」のロゴを入れたシリーズで、登山地図、標高差グラフ、アクセス、予算、温泉などの情報も入れて、ビジュアルで分かり易い。旭岳は札幌から JR、バス、ロープウエーなどの所要時間に加えて公共交通機関の予算 14,000 円、東京からは旭川空港経由を勧め、バスのサービス特典まで紹介、問い合わせ先が東川町商工観光課。山頂への登り下りだけでは物足りない登山者に間宮岳、中岳温泉分岐のコースも紹介している。大雪山は他にトムラウシ、十勝岳、ニペソツ山。山を知り尽くした佐藤文彦が執筆した。

425　花の百名山　登山ガイド
WALK　CORPORATION ／山と渓谷社
2002 ／ 291 －ハ
上巻は、北海道から北関東までの五十座の紹介。大雪山は伊藤健次が執筆。銀泉台→赤岳→小泉岳→白雲岳→緑岳→高原温泉の「ホソバウルップソウが見たい」というコースと、「エゾルリソウが見たい」という十勝岳温泉→富良野岳→上ホロカメットク山コースの 2 ルートを紹介している。

426　東川の山野草
東野勇、米田松栄、滝本堅三郎、横内勇、花本哲行、岡島博／東川植物観察の会
1993 ／ 472 －ヒ
副題に「郷（さと）の三味（さんみ）」とあるように、食べられる山野草 24 種、子どものころに食べた草 3 種、自生薬草 11 種、町内の毒草 12 種を紹介している。カラー写真は東川カメラクラブの会員が撮った。

427　百名山以外の名山 50
深田久弥／河出書房新社
1999 ／ 291 －フ
深田久弥の代表作「日本百名山」に掲載できなかった 50 山の登山記で、大雪山系は音更山、石狩岳、ニペソツ山を書いている。坂本直行を「岩乗（がんじょう）なからだつきとドッシリした風貌を見ていると、『老いしライン』」と書き、彼と帯広で食事の後、旧知の滝本幸夫ら道内山岳会員とニペソツ登山へ向かい、「ニペソツはスックと高く立ち、気品があり、豪壮で優美、天下の名峰たるに恥じない」と書いている。

428　冬山への招待
編　片山修三／㈱河出書房
1955 ／ 786 －カ
河出新書写真篇の 33 巻め。冬山登山の計画から用具、技術、気象、遭難対策などを記載。北海道の山は大雪山、十勝岳、利尻岳などを紹介。十勝岳は「二千米級の数座によって構成され、荒けずりの彫刻に似た俊嶺は樹海を抜くことまさに千米、峨々として氷雪に輝く山容は北アルプスにも比較される」とある。

429　北海道安全な登山
日下哉／北海道新聞社
2011 ／ 291 －ク
高校山岳部などで長年の指導経験を有する著者が安全な登山、山の自然を守る、ルールを守るなど基本的な登山のノウハウを記した。道内百名山の地形図、ルート断面図付き解説もある。「第Ⅵ章 北海道の山々とその特徴」で大雪山、十勝岳、トムラウシ山を解説している。

430　北海道温泉地案内
編　齊藤勝／北海道景勝地協会
1937 ／ 291 －ホ
道内 98 カ所の温泉地を紹介、グラビアに吹上温泉・白銀荘などの写真。ユコマンベツ温泉（現・旭岳温泉）は「人煙全く途絶えた原始境にあり、宿なし、旭川森林事務所の造林小屋を利用して宿泊し、別棟の入浴場にて自由に入浴し得る」。松山温泉（現・天人峡温泉）は忠別川右岸に木造温泉宿の写真があり、「松山多米蔵氏が明治 40 年に簡易浴場を開設し、大雪館と二軒、名産は山女魚で、尺余の銀鱗波間に躍る」、層雲峡温泉は「旅館は層雲閣温泉、蓬莱閣、登仙閣、國沢温泉」の 4 軒。愛山渓温泉は「この温泉からの登山コースは昭和 7 年より開かれ、婦女子にも容易に旭岳石室まで達し得る」。吹上温泉は「スキー地として世界的に有名である」と書き、旅館は吹上温泉旅館、上富良野村営ヒュッテ勝嶽荘、営林区署監視小舎白銀荘、土産物として温泉羊羹、白樺細工、十勝岳（菓子）がある。

431　北海道隠れ湯 28 選
エムジーコーポレーション／エムジーコーポレーション
2006 ／ 291 －ホ
大雪山関係ではかんの温泉、然別湖ネイチャーセンター、糠平温泉旅館中村屋、旭岳温泉湯元湧駒荘、層雲峡花ものがたりを紹介。コラムに大雪旭岳源水が載っている。

432　北海道　沢登りガイド
岩村和彦／北海道新聞社
2015 ／ 291 －イ
沢登りについて著者は「自然条件による困難さや、想定外の出来事に遭遇する機会が多い。気軽に取り組むには難易度が高い」と初めに書いている。大雪山系では天人峡温泉近くのクワウンナイ川からトムラウシ山へ、ポンクワウンナイ川から小化雲岳へ遡行するルートなどを紹介している。

433　北海道主要山岳登路概況
南條康夫／北海道山岳會
1926 ／ 291 －ホ
大雪山の項は（ヌタプカムウシペ火山彙）とかっこ書きがあり、旭川から一番列車で美瑛駅に行き、8 里（約 32km）歩いて松山温泉（現・天人峡温泉）で一泊、翌朝 5 時出発して旭岳を目指すと紹介している。他に十勝岳など道内 15 座の登山路。

434　北海道登山口情報 350
編　全国登山口調査会／北海道新聞社
2014 ／ 291 ーホ
北海道の登山口を網羅したガイドブック。登山口へのアクセス方法や周辺の駐車場、トイレ、自販機、立ち寄り湯、携帯電話の通話状況などを写真入りで収録している。登山口は、50 順になっているが大雪山系、十勝連峰でも調べることができる。

435　北海道トレッキングサポート BOOK
編　小川寛之／ネコ・パブリッシング
2017 ／ 291 ーホ
道内のトレッキングコース紹介のうち大雪山は 1 泊 2 日の旭岳・黒岳周回縦走、2 泊 3 日の黒岳・トムラウシ山縦走、日帰りの十勝岳、美瑛岳。旭岳から黒岳はゆったりとおおらかな山の連なりと、雪渓の白、灌木の緑、空の青が織りなす色の美しさを前にして「奇跡的だ」と立ちすくんでしまうと書き、標高差、歩行時間と距離、高山植物、道具、テント場や避難小屋など必要な情報を盛り込んでいる。

436　北海道ネイチャーツアーガイド
北海道のエコツーリズムを考える会／山と渓谷社
2000 ／ 291 ーホ
登山ガイドはもちろん、野鳥観察、花の観察、動物と遇えそうな場所、カヌー・カヤック、スキーで歩く、子供も参加出来る場所など細かく記載。

437　北海道の山岳（登山案内）
田中三晴／晴林堂
1931 ／ 595 ーサ
道内の山に関する先駆け的な登山案内書。登山道も整備されていない昭和初期のガイドブックながら今も楽しく読める。大雪山彙として旭岳など 11 山、石狩山脈としてニペソツ山など 21 山、十勝山脈として上ホロカメットク山など 12 山、峠や沼周辺も含め、夏の登山、冬の登山を紹介している。巻末に 50 音順の山名、所要日数、最寄駅をまとめた一覧表と、案内組合が載っている。ちなみに松山温泉口（天人峡温泉）の案内人は島田彦市、代田義雄の 2 名。

438　北海道の自然公園
北海道自然公園協会／北海道自然公園協会
1968 ／ 629 ーホ
道内の自然公園の姿を紹介するパンフレット。自然公園の歴史、国立・国定・道立の違い、利用計画、保護管理、レンジャーやビジターセンターを解説。大雪山国立公園については「この公園の良さを味わうには登山をするのが最適」などと紹介している。

439　北海道の自然美を訪ねて
俵浩三／山と渓谷社
1969 ／ 219 ータ
アルパインガイド 30 として編集・発行。著者の横顔として「山と自然が好きで造園を専攻し卒業後直ちに厚生省国立公園部に飛び込んだキッスイの山男。中部山岳レンジャー、支笏洞爺国立公園、北海道林務部林政課に転じ、現在は公園担当の係長さんである」。著者が道庁係長だった時に書いたガイドブックで、天人峡温泉宿の電話番号が三ケタのころ。

440　北海道の自然をあるく
編　北海道新聞社販売促進部／北海道新聞社
1992 ／ 291 ーホ
北海道新聞の 60 ページの PR 小冊子で、自然の楽しみ方を紹介している。「十勝・大雪の自然をあるく」は金山湖、嵐山ビジターセンターを案内、大雪山ではネイチャーガイド・塩谷秀和のトークがある。

441　北海道の自然を美しく撮る 55SPOT ガイド
大橋弘一／エムジー・コーポレーション
2006 ／ 291 ーオ
著者は野鳥専門の写真家。選りすぐった道内 55 カ所の自然の魅力を撮影適期、お勧めの花や鳥を作例写真と撮影データを添えて紹介。大雪山は旭岳、天人峡、黒岳の 3 カ所。天人峡は羽衣の滝の新緑と紅葉の季節がお勧め。旭岳は、ロープウェイ駅舎裏手のエゾノリュウキンカ大群落や、終点駅眼前に広がるハイマツ帯でカヤクグリ、ノゴマ、ホシガラス、ギンザンマシコなど高山の鳥が撮影ポイント。

442　北海道の湿原
編著　辻井達一、岡田操、高田雅之／北海道新聞社
2007／452 ーツ
北海道新聞科学面に 2005 年 4 月から翌年 3 月まで連載された「北海道の湿原」に湿原の気象、鳥などを加筆して単行本化。大雪山系は「旭岳や当麻岳、トムラウシ山などの周辺に散らばる無数の湿原の多くが標高 1,400 メートルの等高線の周辺に分布している」とし、原始ケ原、沼ノ原、沼ノ平などを詳述している。

443　北海道の湿原
編　辻井達一、渡辺祐三／北海道大学図書刊行会
1982／468 ーホ
湿原写真集のような本で釧路湿原、霧多布、風連湖を取り上げているが、そのほかに主な湿原として、大雪山系の沼の平、沼の原、原始ヶ原、浮島湿原などを挙げている。

444　北海道の湿原と植物
編　辻井達一、橘ヒサ子／前田一歩園財団
2002／471 ーホ
湿原植物を色別、小さな花、シダなどに分けて 416 点紹介、写真は梅沢俊、解説を高橋英樹。第Ⅱ部は 51 カ所の湿原紹介で、写真は岡田操、冨士田裕子、解説を辻井達一、橘ヒサ子が担当。大雪山関係は天人ケ原湿原、羽衣の滝上部にある瓢箪沼湿原、沼ノ平湿原、原始ケ原湿原など。山地高層湿原の成り立ち、植生、保全問題を解説している。

445　北海道の山
一原有徳／山と渓谷社
1960／291 ーイ
半世紀前に発行されたガイドブックという重みを含んで読むのも楽しい。「勇駒別温泉までは、途中志比内までバスがあり、ここから 12 キロ馬ソリの便があるが、積雪状態であてにならぬし、数人でラッセルしても一日行程で困難な場合もある」。

446　北海道の山
俵浩三、今村朋信／山と渓谷社
1976／291 ータ
アルパインガイド・シリーズの 23。大雪山、十勝の山、東大雪の山などのコースガイドを集めた登山案内書。一般向、中級向、熟達者向の難度等級を★マークで付けている。

447　北海道の山と谷㊦
北海道の山と谷再刊委員会／北海道撮影社
1999／291 ーホ
岩、沢、冬山、フリークライミング、層雲峡氷瀑群、大雪山縦走など、ハイグレードな登山を目指す人を対象にした一冊。

448　北海道の山々
新版・空撮登山ガイド 1
梅沢俊、瀬尾央／山と渓谷社
1995／291 ーク
全 13 巻のうち第 1 巻が北海道の山。立体的で俯瞰するような空撮写真によって、広大な大雪山を通る登山路であっても分かり易くとらえることができる。道内 10 コースのうち大雪山関係は「旭岳温泉から旭岳、御鉢平、北鎮岳」「十勝岳温泉から富良野岳、十勝岳」など 4 ルートを紹介。

449　北海道秘境の旅　カラーアルバム
北海道撮影社／北海道撮影社
不詳／291 ーホ
大雪山はスケールの大きな御鉢平のカラー写真を見開きページに据えて、新緑の旭岳、コマクサ、ナキウサギ、ウスバキチョウなど。主な年中行事欄に北海タイムスが主催していた「層雲峡峡谷火まつり」（8 月下旬）も載る。

450　北海道秘湯・名湯・露天ぶろ：北の秘湯
北海タイムス社／北海タイムス社
1986／291 ーホ
『北の秘湯』のタイトルで北海タイムス朝刊に連載された記事を一冊にまとめた。秘湯ブームのきっかけとなった本。中岳温泉、吹上温泉など大雪山系の温泉多数。

451　北海道百名山
梅沢俊、伊藤健次／山と渓谷社
1993／291 ーウ
標高や三角点にとらわれず、全道各地から著者が選んだ百名山のガイドブックである。案内する大雪山、十勝連峰の山を掲載順に挙げておく。忠別岳、トムラウシ山、白雲岳、小泉岳、武華山、赤岳、北鎮岳、愛別岳、黒岳、旭岳、武利岳、平山、ニセイカウシュペ山、富良野

岳、上ホロカメットク山、十勝岳、美瑛岳、東ヌプカウシヌプリ、オプタテシケ山、西クマネシリ岳、ウペペサンケ山、ニペソツ山、ユニ石狩岳、音更山、石狩岳の25山である。

452　北海道・ファミリー登山
菅原靖彦／北海タイムス社
1985／786－ス
名の通りファミリーで登山を楽しむためのガイドブック。登山用語、基礎知識から始まり、後半でやさしい山から高山へ、実践登山コースの案内がある。大雪山系では「大雪山赤岳銀泉台コース」「富良野岳、上ホロカメットクへ」「黒岳から北鎮岳、北海岳へ」がある。

453　北海道無料100秘湯ガイドブック
表正彦／名古文庫
1997／290－オ
紹介してある秘湯が今もあるかどうか、知られていない湯の紹介。旭岳の「天女の湯」はロープウェイが新しくなり、天女ヶ原駅が無くなったので手入れはされていない状態。「吹の湯」も同様。湯温35度の「ピラの湯」も手入れはされていない。

454　北海道名所旧蹟
千葉萬葉／小島大盛堂書店
1925／291－チ
大正末に発行されたガイドブックのような内容の文庫版。文語体で詩歌を添えて名所旧跡を紹介している。鉄道沿線に沿って案内は進み、函館本線・旭川市に大雪山、釧路沿線にオプタテシケ硫黄山（十勝岳）の記事がある。宗谷沿線にも大雪山の項がある。ただ『日本名勝地誌』（松原岩五郎）の類似表現があり、著者は大雪山を探勝することなく参考資料に基づいたようである。

455　北海道野鳥観察地ガイド
大橋弘一／北海道新聞社
2010／488－オ
表紙に「道内野鳥観察の主要スポット74カ所が詳細マップ＋豊富な写真で丸わかり！」とうたっている。第2章「道北」で大雪山旭岳、黒岳、浮島峠をとりあげ、旭岳は「最も手軽に高山性の鳥を満喫できる山」で、喉元に赤い丸が付いたノゴマをはじめノビタキ、ホシガラス、鈴の音のようなさえずりのカヤクグリを紹介している。

456　北海道　雪山ガイド（増補新版）
北海道の山メーリングリスト／北海道新聞社
2011／291－ホ
大雪・十勝の山関係は、山スキーのメッカとして賑わったことのあるチトカニウシ山をはじめ安足間岳、白滝天狗山、パウダースノーの聖地三段山、前十勝、富良野岳の六山を紹介している。

457　山の自然教室
小泉武栄／岩波書店
2003／454－コ
岩波ジュニア新書。ジュニア向けにやさしく、山の自然観察を楽しむことを願って書かれた。低山の高尾山から始まり、高山の北アルプス白馬岳、南アルプス北岳までを、分かりやすく読み解く。大雪山は事例的に随所に出てくる。著者は大雪山も入れたかったが、紙数の制限で割愛せざるをえなかったという。

458　山登りのお役立ちガイド
監修　北海道山岳連盟／NTTドコモ
2010／786－ヤ
「登ってみよう、道内12の山々」のガイドブック。黒岳、十勝岳、ニセイカウシュッペ山、ニペソツ山など。NTTらしく山に関する連絡先の電話番号をしっかり入れ、活用すると便利なケータイのGPS機能、方位磁石アプリなどを紹介している。

459　雪山登山ルート
西田省三／山と渓谷社
2014／291－ニ
国内の代表的な冬山60ルートを山岳写真家である著者が取材し、グレード、特徴を付記した。北海道は大雪山・旭岳と利尻山の二山で、旭岳はパウダースノーに輝く北海道の最高峰、天候判断の難しい山と紹介している。「視界不良時下山コースに注意」など地図のルート上に赤文字で記入がある。

460　利尻礼文・知床・大雪植物手帳
村田正博／JTBパブリッシング
2007／472－ム
大人の遠足ブックとうたった高山植物の手帳サイズ図鑑。約300種の花を色から、名前から、科別から検索できる。

461　わが心の上川
Kamikawa On My Mind
上川町役場企画総務課企画グループ／上川町
2014 ／ 211 ーカ
上川町が明治 28 年の入植から 120 年を迎えた 2014 年に制作した町勢要覧。写真を多用したビジュアルな編集で、「神々の大地」から始まり、32 ページのおよそ半分が大雪山とその魅力の紹介となっている。

図録類
写真集、画集、図集、画文集、各種図録など

6－1 図録類（全てが大雪山）

462　市根井孝悦写真集　大雪山
市根井孝悦／山と渓谷社
1988 ／ 748 ーイ
「雲上の天狗岳と前天狗岳」の写真は、神ではなく、仙人がいるような一枚。神秘的でさえある。

463　一般道々旭川－大雪山－層雲峡線計画
旭川土木現業所／－
不詳／ 514 ーイ
地図。銀泉台から赤岳を経て旭岳へと抜ける道路建設計画ルート図を記入している。

464　かわいいナキウサギ
文・写真　鈴木欣司、写真　長谷川和良／大日本図書
1995 ／ 489 ースー
十勝岳などで撮影したナキウサギに、子どもが読みやすい物語風説明文を付けた写真絵本。糞（ふん）を食べる習性や、巣穴に葉っぱを蓄えるシーンが四季を通して描かれ、花をくわえたナキウサギの姿があいらしい。写真の長谷川和良は北海タイムス旭川報道部カメラマン、北海道報道写真展で協会賞、優秀賞受賞など活躍した。

465　きらきら
文　谷川俊太郎、写真　吉田六郎、企画構成　吉田覚／アリス館
2008 ／ 911 ータ
写真家、記録映画・科学映画監督、カメラマンとして活躍した吉田六郎が旭岳温泉の雪洞に顕微鏡撮影装置をセットして、画期的な「1 光源 2 色照明法」で雪の結晶を撮り続けた。没後、長男・覚が膨大な写真から選択して、詩人、谷川が詩を書いた美しい雪結晶の写真絵本。六郎の長男・覚が谷川の詩に曲をつけて歌とピアノ演奏を吹き込んだ CD ブックもある。

466　輜重兵第七大隊
大雪山縦断行軍寫眞帖
不詳／不詳
1929 ／ 396 ーシ
1929 年 8 月 11 日から 20 日にかけて 10 日間の大雪山縦断行軍記録である。将校准士官 22 名、下士 160 名、馬匹 38 頭、車両 20 両。患者 1 名還送、軍馬 1 頭が犠牲になった。終了後、慰労の宴を開き、「大雪山踏破ノ軍歌」を歌ったと記されている。10 節からなる歌詞と譜もあるが、1 節のみを紹介する。「昭和四年夏半ば ／ 輜重兵第七大隊は ／ 大雪山系縦断の ／ 壮図を今や決行す ／ ソレ越せ大雪山」。

467　写真集　大雪山　中央高地の自然
北海道撮影社／北海道撮影社
1973 ／ 291 ーホ
まさしく大雪山、大判の迫力ある写真集。限定 1,000 部発行。本にはナンバーが入っていて、東川町保存の一冊は№ 0652。地形、地質、温泉、昆虫、植物など印象深い写真が続き、後半は研究者の解説、随想、厳冬期の縦走記録など。

468　層雲峡 一万年の記憶 久野剛男写真集
久野剛男／出版芸術社
2004 ／ 748 ーヒ
山岳の写真は「初冬の朝陽山」「しばれる黒岳」などわずかで、ほとんどが峡谷に限った風景。そそり立つ岩壁、峡谷の紅葉、岩に根を張る幼木など。

469　層雲峡の景観　額面写真六枚組
不詳／不詳
1938 年以前／―
立派なケース入りで、大きさは 28cm、23cm、モノクロながら鮮明な写真が 6 枚入っている。額面写真六枚組の表記の通り額に入れて部屋の壁面を飾るもの。大函、小函、神削壁、天城岩、銀河の滝、流星の滝の 6 点。

470　大雪形象
山本康雄／共同文化社
2017 ／ 748 －ヤ
大雪山は変化に富んだ神秘的で魅力的な表情を見せてくれる。季節の移り変わりや天候、時刻によって千変万化する一瞬を、小型飛行機を使って空からのアングルで撮影している。赤茶色と青が対比する「新雪の十勝岳」、茜色の「ベールを纏う旭岳」など大胆な構図と鮮やかな色彩に圧倒される。

471　大雪山
奥田實／山と渓谷社
1992 ／ 748 －オ
山渓山岳写真選集―10 として企画された。東川町に移り住んだ写真家、奥田實の思いが巻末『撮影を終えて』に載っている。四季折々の大雪山を見事にとらえた写真に撮影データを加え、大雪山を楽しむベスト・コースも紹介している。

472　大雪山
佐藤孝夫／私家版
1988 ／ 748 －サ
―神々の庭から―という副題が付いた写真集。16 年間で大雪山系登山が 65 回、その集大成といえる写真が 54 点。特にトムラウシ山とその周辺が多いのは、著者の好みを表わしているのかも知れない。巻末の写真説明は、小エッセイになっていて、著者の登山の一端をうかがうことができる。

473　大雪山　旭岳　鈴木良策　写真集
鈴木良策／東方出版
1994 ／ 748 －ス
旭岳の四季折々の姿と植物、すべて生きているという迫力を感じる。写真家ならではのアングルが目の奥に焼き付く。劇作家、田中澄江が序文「旭岳周辺」を寄せている。

474　大雪山絵画コンクール受賞作品集
編　大雪山絵画コンクール実行委員会／大雪山絵画コンクール実行委員会
2002 ／ 723 －ダ
絵画コンクールは大雪山の魅力を広く発信することを目的に上川支庁が主催した。小学生の部、中学生の部に分かれ、大賞各 1 点、優秀賞各 3 点、佳作各 10 点、美しいカラー写真で紹介している。児童、生徒の視点、感覚で描いた自由な発想の絵が面白く、応募者の大雪山に寄せるメッセージに心を引かれる。

475　大雪山 四季の彩り
市根井孝悦写真集
市根井孝悦／山と渓谷社
2006 ／ 402 －コ
四季の山肌、高山植物、綺麗という表現ではなく、凄いに変わる写真集。ヌタクカムウシュペ・神々が遊ぶ庭そのもの。

476　大雪残象
後藤昌美／京都書院
1987 ／ 748 －ゴ
写真家となって初めて出した写真集。大雪山のさまざまな山並みを魅力的なアングルで撮影、見る者がその場にいるかのような錯覚にとらわれる。作家、三浦綾子が「序にかえて」を寄せている。

477　大雪山・層雲峡　写真帳
塩谷忠／大雪山調査会
1933 ／ 291 －ダ
横型紐とじのアルバム形式である。大雪山調査会は同類の写真帳を何種類も発行しているが、これは村田丹下の原色の絵で表紙を飾っている。モノクロ写真は表大雪から石狩岳、トムラウシ、沼の原、ニセイカウシュッペ、然別湖、層雲峡、羽衣の滝、敷島の滝、幣の滝など広範囲に及ぶ。写真には小泉秀雄も出てくる。巻末に高山植物、高山蝶の写真もある。

478　大雪山と丘の四季
高橋秀雄／総北海
1998 ／ 748 －タ
カメラを手にして 50 年、大雪山を撮り続け、1975 ～ 94 年の 20 年間欠かさずカレンダーを制作し続けた著者の集大成。雄大な山容、動植物の豊かさ、麗しの丘の広がりなどを見事に捉えている。

479　大雪山のお花畑
奥田實／山と渓谷社
1987 ／ 472 －オ
あとがきに、「高山植物を大きな自然の一部として捉え直してみた、大雪山は私にとって道場でもある」と記している。高山植物の群生、アングルが素晴らしい。撮影日も記入してある。

480　大雪山の動物たち
久保敬親／新日本出版社
1980 ／ 482 －ク
写真絵本。エゾリス、エゾライチョウ、クマゲラ、エゾシカ、キタキツネ、高山植物、ウスバキチョウ、ギンザンマシコ、エゾユキウサギ、エゾシマリス、エゾオコジョ、エゾヒグマ、エゾナキウサギ、ホシガラス。

481　大雪山の花
奥田實／山と渓谷社
1987 ／ 472 －オ
「大雪山のお花畑」の新装グラフ版。山小屋データを入れた。

482　大雪山 母なる大地 市根井孝悦写真集
市根井孝悦／山と渓谷社
2000 ／ 748 －イ
2 月上旬に、富良野岳樹林で撮影した見事なモンスター樹氷など 67 点。見ていくうちにワクワクしてくる写真集。

483　大雪　志賀芳彦写真集
志賀芳彦／日輪社
1973 ／ 748 －シ
著者のあとがき（抜粋）「おさめた 90 点の作品は、私が自らの自然観を訂正して再出発したときからのもので」「大雪の初冬から晩秋までの四季の移り変わりや夜明けから夕暮れへの刻々の翳りなど原始風土にひそむ魅力の原像をひたすら探し求めて取材した約 15,000 点の中から選んだ心触作品」。限定版。

484　ナキウサギ　神々の庭に遊ぶ
丹治茂雄、千葉圭介写真集／講談社
1993 ／ 489 －タ
ナキウサギが大好きな二人の写真家がトムラウシ山で観察、撮影を続け、氷河時代から命を繋いできたかわいいナキウサギの生態を写真で伝える一冊。

485　日本の大自然 1 大雪山国立公園
森田敏隆／毎日新聞社
1993 ／ 629 －モ
大雪山国立公園の写真集に立松和平が序文を書き、後半の国立公園物語 [大雪山] で歴史、動物の生態、沼、道路などを詳述している。

486　日本の名峰 2 大雪・石狩・十勝
市根井孝悦／山と渓谷社
1985 ／ 291 －イ
冬山が印象的な写真集、紅葉の写真も目に焼き付く。後半がグラフィック・ガイド。旭岳－黒岳、沼ノ原－トムラウシ山などコース別に 6 ルートを載せている。

487　ブラボー！大雪山
大塚友記憲／新評論
2018 ／ 748 －オ
大雪山のネイチャーガイドであり、写真家である著者が約 15 年間撮りためた中から、春から冬へ順に四季折々の写真を選りすぐった。一般的な写真集と異なるのは撮影時のこだわり、場所、時間などの説明を作品ごとに記したことで、写真家の手の内を明かしながら大雪山の魅力を伝えている。星空の下の羽衣の滝、ニペソツに降る星など夜景が印象的。 1 羽でも撮影チャンスが難しいギンザンマシコが 4 羽、冠雪のウラジロナナカマドにとまったところを写すなどシャッターチャンスを逃さない。

488　Freedom　―大雪の動物たち―
千葉圭介／青菁社
1997 ／ 748 －チ
大雪山の動物写真集。エゾナキウサギ、ヒグマ、キタキツネ、シロフクロウ、シマリス、エゾシカ、エゾユキウサギ、エゾリス、エゾオコジョ、エゾクロテンの豊かな表情をとらえ、ほのぼのとして、ユーモラスな表情が多い。

489　北海アルプス冩真帖
塩谷忠／大雪山調査會
1928 ／ 291 －ホ
小泉秀雄植物調査隊一行、黒岳山頂の荒井初一、松村博士昆虫採集一行、建築中の第七師團療養所など、歴史的な貴重な写真ばかり。

490　北海道大雪山　大雪山国立公園指定 50 周年記念写真集
大雪山国立公園 50 年記念事業推進協議会／ 50 年記念事業推進協議会
1984 ／ 291 －ホ
50 周年に基づき近隣の町長のコメント、それまでの歴史的写真と解説と風景写真があり、大雪山の歴史を知る一冊。

491　北海道の自然④　大雪の四季
成松岳人／淡交社
1988 ／ 748 －ナ
四季を通してさまざまな表情の大雪山、高山植物、動物、ギンザンマシコ、火口雪山、夕日に染まる山肌など、作品 76 点。

492　北海道　花の大地
奥田實／山と渓谷社
1989 ／ 748 －オ
大雪山の高山植物ばかりではなく、北海道全域の植物が写真集となっている。見慣れた花でも写真家のレンズから見た群生は見とれるほど美しい。

493　北海道リスとナキウサギの季節
佐野高太郎／かもがわ出版
2006 ／ 489 －サ
大雪山に生息する代表的な動物エゾリス、ナキウサギなどの生態、行動を四季を通じて撮影した。天敵のクロテン、キタキツネ、オコジョなども活写している。佐野高太郎は英国 BBC ワイルドライフ写真賞に入賞しており、この本も全ページに英文も載せている。巻末に市川利美がエゾナキウサギ、川道美枝子がエゾリスとシマリスを書いている。

494　名峰シリーズ　大雪山
写真　志賀芳彦／山と渓谷社
1976 ／ 748 －シ
写真は芳賀芳彦、執筆は丹征昭、今村朋信、高沢光雄。

495　[雪] の結晶
小林禎作、古川義純／雪の美術館
1991 ／ 451 －ユ
巻頭に「美しい雪の結晶の降る天女ケ原」「氷紋（旭岳）」のカラー写真があり、「日本一美しい大雪山系の雪」を紹介している。雪の結晶写真は勇駒別(現･旭岳温泉)の雪洞で撮影された。旭川の「雪の美術館」で展示、紹介されている雪の結晶の図録であり、雪の研究の歴史や雪の出来るまでなどを解説している。

496　雪の結晶
吉田六郎／平凡社
2001 ／ 748 －ヨ
旭岳温泉の雪洞で吉田六郎が撮影した雪の結晶写真集。ブルー地を背景に結晶が鮮やかだ。切り取ると絵はがきにもなるポストカードブック。

６－２ 図録類（部分が大雪山）

497　アサヒグラフ臨時増刊 國立公園號
星野辰男／朝日新聞社
1932 ／ 050 －ア
『天公何ぞ獨り大雪の一山に厚きや、アイヌが呼んだヌタク・カム・ジュペは、高台原・神・集会所を意味する』こうした見出し、説明文がある。

498　足立源一郎スケッチ帖　日本の山旅
足立源一郎／茗渓堂
1970 ／ 723 －ア
日本全国の山のスケッチ。やさしい線で色も淡く、ほのぼのする感じで味わい深い。大雪山関係は、雲井ケ原、三ノ沼より旭岳、沼ノ平より旭岳、北鎮岳より旭岳、朝陽山より大雪山、冬の吹上温泉、泥流より前十勝岳など 9 点。

499　アルプスの自然　お花畑
監修　佐竹義輔／山と渓谷社刊
1973 ／ 432 －サ
お花畑とは「森林限界以上の高山帯に発達する高山植物の草原で、強い日射、はげしい温度変化、強風と積雪のきびしい環境条件の下で、6 ～ 9 月の短い期間に開花、結実するところ」。大雪山、白馬岳、尾瀬など代表的なお花畑と高山植物を前田真三、市根井孝悦、永田芳雄らのカラー写真で紹介。大雪山は旭岳姿見の池付近のエゾツガザクラの大群落、白雲岳のクモマユキノシタ、エゾコザクラ、北海岳のキバナシオガマ、雲ノ平のイワイチョウの紅葉など 14 点。大雪山の山旅ガイドを写真家、市根井孝悦が執筆している。

500　美しい日本 1　北海道 / 東北
編　井上靖、河北倫明／ぎょうせい
1988 ／ 720 －イ
風景画全集。中村研一が描いた「大雪山」は、夏の終わりの寂しい日々にスケッチした作品。足立源一郎の「愛別岳・比布岳」、大本靖の版画「沼の原」。

501　エゾナキウサギ
ナキウサギふぁんくらぶ写真集
写真集「エゾナキウサギ」編集委員会／共同文化社
2017 ／ 489 －エ
ナキウサギふぁんくらぶの会員らが撮った愛くるしいナキウサギの写真集でありながら、餌となる植物を集めたり、極寒

の大雪山でたくましく越冬する貴重な観察記録である。氷河期から今に命を繋いできた生態を「ナキウサギのプロフィール」として紹介しているほか、世界のナキウサギの研究、保護活動をしているアンドリュー・スミスのエッセーなど。

502　エゾヒグマ　残された聖域
久保敬親／山と渓谷社
1999 ／ 748 ーク
ヒグマのダイナミックな写真集。凶暴さは感じられない。むしろ可愛い。クマと共存する為に考えてほしいと思う、自然を残すことが出来るのも人間だから。

503　生誕 140 年　大町桂月
編　高知県文学館／高知県文学館
2009 ／ 289 ーオ
高知県文学館が開催した「大町桂月～酒と旅と自然を愛した文人展」図録である。人と文学の解説に次いで、桂月の文学碑を高知県（生誕地）9 基、青森県（終焉地）42 基、全国 33 基（合計 84 基）を、それぞれ写真と碑文、碑の説明をしている。北海道にも 6 基あり、大雪山の層雲峡と天人峡の碑も紹介しているが、天人峡温泉はなぜか天女温泉と誤表記されている。

504　カムイの詩がきこえる　北ぐにの山々
岩橋崇至／月刊さつき研究社
1983 ／ 748 ーイ
北海道全域の山の写真。雄大で、力強い。大雪山は春 15 点、夏 26 点、秋 27 点、冬 11 点。

505　カムイの森
水越武／北海道新聞社
1996 ／ 748 ーミ
写真集の帯に「世界の森を撮り続ける写真家の著者が鋭いカメラアイで捉えた北の森の写真シンフォニー」とあり、カバー写真が「大雪山　美しい雲海が広がった朝」、扉写真も「大雪山　吹雪の中の落日」。写真は 79 点。大雪山関係は「クワウンナイ川上流の森林」「十勝三股　早朝の樹海」など 18 点。

506　カムイの山　北海道の名峰たち
市根井孝悦／山と渓谷社
2003 ／ 748 ーイ
あとがきにかえてに「北海道に生まれ、いつの日か、北海道の山全域を表現したい」とあるように大雪、利尻、知床、芦別、日高、札幌周辺の名峰を収めた。大雪山は残雪の夕映えや壮大な花畑、赤いじゅうたんを敷き詰めたような紅葉、厳冬の旭岳など 18 枚。

507　カラー日本の山々
山と渓谷社／山と渓谷社
1967 ／ 291 ーハ
旭岳を本多勝一が辛口で書き、初っ端から「たいして魅力のある山ではない」、最後は、「来ることは二度とあるまい」。石狩岳を丸山尚敏、上ホロカメットク山を速水潔、十勝岳を坂本直行が担当している。

508　キタキツネとの出会い
久保敬親／新日本出版社
1983 ／ 489 ーク
写真絵本。大雪山で出会ったキタキツネを著者は「コン」と呼ぶことにし、長く観察を続け、コンが子ぎつねに授乳するシーンなどを撮った。コンと 10 年間の感動ドラマ。

509　画文集　北ぐにの花暦
鮫島惇一郎／社団法人北方林業会
2008 ／ 470 ーサ
著者が得意とする植物画 110 枚に軽妙な短文を添えた花の絵本。それぞれの花に、おふくろや恩師との思い出、大雪山の山小屋でアルバイトをしていたころの椿事などが秘められている。永山岳で初めて見た、ツンと澄ましたコマクサ、親方先生こと舘脇操から描いてきてほしいと頼まれた小泉岳のリシリリンドウ、腹を空かせた人を救出に走った北鎮岳の思い出と重なるイワギキョウ、平ケ岳へ登るハイマツ帯でヒグマとにらみ合ったときのヨツバシオガマなど、大雪山の花とエピソードが 6 点。原画は滝川市美術自然史館が収蔵している。

510　北の雪稜
編　若林修二／北海道撮影社
1975 ／ 748 ーワ
「編集にあたって」で若林は「道内の幾多の山、あらゆるコースに若き血潮の踏み跡を残してきた。写真集はいわば、私たちの山に賭けた青春の軌跡の集大成」と書いている。私たちとは若林、梅沢俊、菅原靖彦、中村喜吉、三輪裕佶、安田成男の六人。荒々しい冬山の写真が大部分を占めるが急斜面をスキーで登る仲間、冬山キャンプの寛ぎなどが混じる。巻末

に「北海道の 50 名山」を写真と共に紹介している。

511　北の大地に生きて
高知県立坂本龍馬記念館／高知県立坂本龍馬記念館
2006 ／ 723 －サ
副題に「反骨の農民画家　坂本直行作品集」とある。直行が坂本龍馬の系列であることから高知県立坂本龍馬記念館が「おかえり！直行（ちょっこう）さん」という展覧会を開き、作品を図録にした。龍馬直筆の書簡も載せ、「小弟はヱゾに渡らんとせし頃より、新国を開き候」と蝦夷地へ渡って開拓するのがを夢と書いてあり、興味深い。直行が十勝の開拓に入り、日高山脈などを描いたが大雪山とそこに咲く花の絵も多く描いた。

512　北を飛ぶ
朝日新聞北海道支社報道部／中西出版㈱
1996 ／ 291 －キ
カメラマンと記者が空から見て記事にしたシリーズ「北を飛ぶ」。掲載した 70 編のなかから、山、湖、湿原などの自然を中心に、38 編を抜粋して 1 冊にまとめた本。「神々の遊ぶ庭…大雪山系」「現代の遺跡…士幌高原道路」「あこがれの山…トムラウシ山」がある。

513　切手の中の北海道
北林利仁／北海道新聞社
1995 ／ 693 －キ
著者は切手を通して、北海道を理解し、郷土を愛する一助になればとの思いで本書を著した。美しいカラー写真で、丁寧にやさしく説明している。大雪山の切手も 2 銭時代から始まっていて種類も多い。高山植物シリーズ、自然保護シリーズなどを加えると、山の切手もかなりの数になる。

514　牙王 1 ～ 3
石川球太／大都社
1984 ／ 726 －イ
戸川幸夫の「牙王物語」を漫画化した。
（103 ページ 575、122 ページ 732　参照）

515　近代洋画に見る日本の名山
編　藤井敏明／朝日新聞社
1985 ／ 051 －ア
アサヒグラフの増刊美術特集で、北から南へ、70 点の名山が描かれている。ただし富士山の絵は 5 点あり、別格扱いになっている。北海道の山は 7 点、大雪山は、田辺三重松「照りかげる裏大雪」（1970 年、札幌市蔵）がある。具体的な解説はないが、東大雪連山を遠望する絵である。

516　空撮　日本の名峰
大森弘一郎／山と渓谷社
1987 ／ 291 －ク
自家用機を操縦して、空から撮ったパノラマ写真による奥行きのある鳥瞰図集。高度 2,800m から旭岳の向こうに北海、凌雲、北鎮、鋸、比布、安足間の山頂が並び、遥かにニセイカウシュッペが控える。裾合平が広い。高根ヶ原は、下方に大雪高原温泉が写り、樹海が深い。

517　桑原宏画集　画業 60 年・傘寿記念
桑原宏／光陽出版社
1989 ／ 723 －ク
「わが心の故郷北海道」の風景を多く描き、大雪山関連はエゾ、トドの原生林を描いた「北の森」をはじめ「然別湖畔」「厳冬越冬小屋」「裏大雪遠望」「吹雪の森」「十勝岳山頂附近」「雪解けの頃」など。自然保護活動にも協力した画家。

518　小泉秀雄植物図集
編　清水敏一／小泉秀雄植物図集刊行会
1995 ／ 470 －コ
小泉秀雄没後 50 年記念に編集、発行された。繊細な植物図集は色あせることなく感動を呼ぶ。小泉を慕う研究者らの随想、関係者の追憶、回想、小泉の論文一覧、年表などを収録。箱入り。

519　『河野齢蔵』
生誕 150 周年記念特別展図録
編　松本市立博物館／松本市立博物館
2015 ／ 289 －コ
河野齢蔵は初期の高山植物研究家として著名である。その他に山岳写真家、教育者、画家、歌人としての貌もある。齢蔵はまた大雪山初期の登山者の一人であり、兄は北海道史研究家の河野常吉である。齢蔵の遺した膨大な文献資料は、ようやくその一部が明らかとなり、特別展が開催された。齢蔵の建てた長野県松本市の河野家は、オウム真理教・松本サリン事件の現場にもなった。

520　国立公園大雪山阿寒洞爺勝景大観
高本曉堂／―
不詳／ 721 ―タ
正絹四方金特装折本・帙（ちつ）入りの画帖である。見開き全面の絵が 14 点。画家・高本曉堂直筆の絵で、単彩、淡彩あり、すべて山の絵である。うち大雪山 7 点、いずれも山麓からではなく、山中や山頂から描いたもので、彼自身登山家であり、数少ない山岳画家であったことがわかる。画名、時季、落款はあるが、年の明記がない。

521　山稜の四季
全日本山岳写真協会／山と渓谷社
1992 ／ 748 ―フ
1946 年、日本山岳写真協会が発足、1997 年に全日本山岳写真協会と改称、創立 45 年記念に会員の作品を集めて「山稜の四季」を発行した。159 点のうち大雪山は小林肇「噴煙上げる旭岳」、猪俣義信「初冠雪 / 雲ノ平から北鎮岳」、川上孝江「大雪の紅葉」、山田正三「秋彩 / 大雪高原」、徳田正太郎「厳冬の旭岳」、良方正邦「キタキツネ」の 6 点。作家・田中澄江が四季それぞれの山を書き添え、「初冠雪」には秋の裾合平や姿見の池の美しさを書いている。

522　山嶺抒情　画文集
橋本広／私家版
1967 ／ 290 ―ハ
著者は富山県の高校教諭、全国の山を歩いて絵を描く。北海道の山旅は 1966 年の夏休みのもので、テントを担いで 20 日間歩いた。まずは北海道の最高峰、大雪山旭岳に登り、次いで十勝岳に立つ。利尻、雌阿寒、羅臼、樽前、ニセコの山々に登る。それぞれに絵と文がある。このようにして全国の山を歩き、ヒマラヤ一人旅（シェルパ､ポーターは雇う）もした。それらの山旅がこの 1 冊に凝縮されている。

523　シマフクロウの聲がきこえる。
田中博／共同文化社
2016 ／ 748 ―タ
1990 年夏、ヤマセミを撮ろうと然別川支流に入ってテント泊した朝、森を震わせるシマフクロウの聲に驚き、以来 26 年間、大雪山、十勝、知床などの山々でシマフクロウを撮り続けた。卵、幼鳥の成長、雪にたたずむ姿など厳しい自然環境に生き抜くシマフクロウの眼光が鋭い。

524　シマリスの四季
久保敬親／新日本出版社
1984 ／ 489 ―ク
写真絵本。登場するシマリスは正確にはエゾシマリスという種で、国内では北海道だけに生息している。冬は地下の巣穴で冬眠するが時折、目を覚まして秋に貯蔵した草の種や木の実を食べて春を待つ。

525　写真で綴る　ミズバショウ日記
鮫島惇一郎／北方林業会
2005 ／ 479 ―サ
著者が東京から札幌へ移ってきて、おふくろと一緒に見たヘビノマクラ（ミズバショウ）から始まる。大雪山ではヤンベタップ沢のミズバショウたちの盛大な歓迎を受ける。写真と共に人柄がにじむエッセー集。

526　図説日本の山：自然が素晴らしい山 50 選
編　小泉武栄／朝倉書店
2012 ／ 521 ―コ
副題「自然が素晴らしい山 50 選」とあり、道内は利尻山、大雪山、トムラウシ山、十勝岳、暑寒別岳、幌尻岳・トッタベツ岳を紹介。

527　雪原の足あと
坂本直行／茗渓堂
1965 ／ 723 ―サ
登山家であり画家である坂本直行の画文集。「アルプ」「北海道の山」「山と高原」「紅」などへの寄稿を中心にまとめている。坂本といえば十勝に繋がり、日高山脈の絵が多いが、トムラウシ、石狩岳、十勝連峰、然別湖など大雪山系も入っていて、絵と文ともども楽しめる。

528　空から見る日本の山々
岡部一彦／報知新聞社
1961 ／ 291 ―ソ
読売新聞社写真部と機報部のチームワーク、カメラマンと操縦士が呼吸を合わせて撮った山岳写真。大雪山、十勝岳など。

529　大地の鼓動　志賀芳彦写真集成
志賀芳彦／ダイコロ
2017 ／ 748 ―シ
大雪山の空撮で知られる写真家、志賀芳彦が第一部・大雪、第二部・凍てる海、第三部・原野の三部作を撮り、「自然は生きている。ただただ美しいばかり

の風景ではなく、美を超越した何かがそこにあった」という感覚で写真集名を「大地の鼓動」にした。志賀は 1987 年に開港したダイコロ愛別飛行場の場長でもあり、子息・洋がセスナ機操縦士となって〝親子鷹〟で空からの傑作を数多く遺した。大雪は空撮の他にサムホール撮影も加えた 42 枚で、大雪山の圧倒的な大パノラマと、太陽の傾きに沿って刻々と変貌する造形の美をとらえている。海はふるさとのオホーツク、原野は釧路湿原やサロベツ原野など。

530　旅ゆけば　阿寒湖物語

石川球太／電子書籍版「eBook Japan」
―／ 726 －イ

漫画家、石川球太が戸川幸夫原作「牙王物語」を漫画化するまでのエピソードをインターネットのウエブ漫画に描いた。大雪山中で生まれた野生犬「キバ」、クマに襲われて崖から飛び込んだのが羽衣の滝、大雪山を縦横無尽に駆けるキバのイメージを掴もうと石川は天人峡温泉にやって来る。旭岳で遭難寸前に助けられ、次に向かった阿寒湖畔でアイヌの彫刻家、砂澤ビッキらと交流。十勝岳大爆発を雌阿寒岳山頂から眺めているとき、怒涛の噴煙に「キバ」が疾走する姿が浮かんできた。（122 ページ 732　参照）

531　地図の風景…北海道編Ⅰ道南・道央

堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明／㈱そしえて
1979 ／ 450 －チ

そしえて文庫・地図の風景シリーズ全 20 巻のなかの 1 冊。本書は立体空中写真と地図とエッセイで綴る新日本風土記である。口絵に大雪山のステレオ空中写真がある。「男神と女神のパレード…大雪山と十勝岳」は、地図、写真、エッセイによって、その意味を納得させる。

532　地図の風景　北海道編Ⅱ道東・道北

堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明／そしえて
1980 ／ 291 －チ

そしえて文庫シリーズの 1 冊で、表紙カバーは然別湖の空中写真。写真と地図とエッセイで風景を語るのが狙いで、ステレオ空中写真がたくさんあり、立体視（実体験）できることが本書の特長である。大雪山では「鬱々と深く暗い神々の半円劇場（東大雪）」、「奥山にひそむ高原・円頂丘群に抱かれた湖（北見富士・雄柏山・然別湖）」がある。

533　寅彦と宇吉郎の絵画展

中谷宇吉郎雪の科学館／かが PAP 財団
2000 ／ 709 －ト

中谷宇吉郎の生誕百年記念に、ふるさと加賀市が宇吉郎の恩師、寺田寅彦と宇吉郎の絵画展を開いた。その時の図版と作品解説。宇吉郎は療養のあとは油彩画よりも墨絵を多く描くようになり、大雪山で観測してきた雪の結晶も「雪華図説」「雪華之図」の墨絵になった。

534　中谷宇吉郎の森羅万象帖

福岡伸一、神田健三、中谷芙二子／ LIXIL 出版
2013 ／ 289 －ナ

LIXIL ギャラリーで開催された「中谷宇吉郎の森羅万象帖」展と同時に刊行された。恩師・寺田寅彦との出会い、海軍飛行船爆破墜落の原因を探った実験物理学、雪の結晶の撮影、低温研究室での人工雪研究、科学映画の先駆者、大雪山の積雪量を計ったことなど、中谷宇吉郎の随筆を道しるべに、写真をふんだんに使って業績を紹介している。

535　日本国立公園（全４巻）

監修　井上靖、写真　森田敏隆／毎日新聞社
1985 ～ 1986 ／ 291 －モ

本書の特長は B4 判、国立公園の写真集としては最大級の大判であること、見開きの写真は B3 判になる。北から南へ順を追っていて、大雪山国立公園は第 1 巻にある。各巻末に解説、案内記事があり、大雪山とともに日本の国立公園を通観できる。発行後に名称の変更や地域の追加もあり、現在とは一致していない。

536　日本の山河

緑川洋一／矢来書院
1975 ／ 748 －ミ

緑川は歯科医でありながら「光の魔術師」と呼ばれた写真家。タテ 37cm、ヨコ 26.5cm、厚さ 3cm の大判の写真集に大雪山は勇駒別の「大雪山原生林」1 枚。雪が原生林の下草を隠し、雪面から靄（もや）が絶えず立ち上るうっそうとした風景。添えられた紀行文「老樹の国」は串田孫一。緑川の写真、串田の文で東京新聞などに連載された。

537　日本の山河　水墨の詩
緑川洋一／東方出版
1997 ／ 748 －ミ
水墨の詩とあるようにモノクロームの写真が 88 枚。このうち大雪山関係は 4 枚。緑川が「南国育ちの私にとって神秘的とさえ思える山容が印象に残った」という純白のトムラウシ、「森の精でも出てきそうな」大雪原生林、十勝岳雪中噴煙、厳冬の十勝中腹。

538　日本の滝①　東日本 661 滝
北中康文／山と渓谷社
2004 ／ 291 －キ
東日本の滝 661 カ所を美しい写真で紹介。大雪山系は流星・銀河の滝、羽衣の滝、敷島の滝、白銀不動の滝、白髭の滝、トムラウシ山の霧吹の滝、上ホロ川の秘奥の滝。

539　ニッポンの滝 100 選
北中康文／学研パブリッシング
2012 ／ 291 －キ
著者が選んだ 100 の滝のトップに羽衣の滝の紹介が載り、「ニッポン人なら必見の名瀑 10 選」のひとつ。大雪山系は他に白銀温泉の白髭の滝、層雲峡の流星・銀河の滝。

540　日本の天然記念物
監修　加藤睦奥雄、沼田眞、渡部景隆、畑正憲／講談社
1995 ／ 462 －ニ
1,101 ページもの分厚い保存版で、冒頭の 14 ページを特別天然記念物「大雪山」の紹介に充てている。個体としてはウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネヒカゲなど大雪山の代表的なチョウを紹介している。北海道関係は他に、クマゲラ、エゾシマフクロウ、オオワシ、オジロワシ、タンチョウ、北海道犬。カバーのカラー写真はコマクサ。

541　日本の名山　四季の山容を探る
編　奥村芳太郎／毎日新聞社
1971 ／ 291 －ニ
巻頭のグラビアページを新雪の旭岳空撮、紅葉の高原温泉など大雪山の四季折々の美しい 9 枚の写真で紹介。本文でもモノクロームの写真をふんだんに使い、キャプション（写真説明）が国立公園と山の紹介記事を兼ねている。

542　日本の名山　北海道編
監修　鈴木修、編　足立朗ほか／郷土出版社
1999 ／ 720 －キ
画集『日本の名山』は大きさ、質感、重量感、どれをとっても名山画集として第一級の作りである。全 6 巻のうちの第 1 巻が北海道編で、70 の作品を収めている。大雪山系は 16 点。大判変形の画面は見ごたえがあり、なかでも見開き全面の「十勝岳」（横山操）は迫力十分、作品解説にも曰く因縁があって、より興味をそそられる。以下 16 作品の画家名のみを挙げると田辺三重松、中村研一、坂本直行、小堀進、高橋北修、大本靖、岩橋英遠、吉田清志、足立源一郎、横山操、相原求一朗の 11 人（4 人は複数点）。巻末に画家解説、作品解説がある。

543　日本の山
著　槇有恒ほか　編　高橋清見／毎日新聞社
1978 ／ 748 －ニ
タテ 37cm、ヨコ 26.5cm、厚さ 3cm の大判山岳写真集。道内は 23 枚、そのうち大雪山関係は志賀芳彦が空撮した「新雪の大雪山群」など 11 枚。大雪山を撮った写真家は志賀、平澤實、白籏史朗、オサ・コーゾー、川崎研。

544　日本の山 100
川口邦雄／講談社
1984 ／ 291 －カ
講談社現代文庫の 1 冊。著者は山岳写真家であり、高山、低山を問わず、独断で百山を選び、写真とスケッチで紹介する。「大雪山／十勝岳」をひとまとめにしている。

545　日本百名山スケッチ紀行
若松直／日本文学館
2003 ／ 291 －ワ
電気技術者として勤め上げ、定年を機に深田久弥の「百名山」完登をめざしスケッチ紀行を始めた。大雪山は 2000 年 7 月、旭岳は前日が激しい雷雨、霧雨をついて登った山頂は風雨でスケッチが出来ない。十勝岳、トムラウシも悪天、スケッチは十勝岳山頂の石碑だけに終わった。車中泊しながら足かけ 4 年、読みごたえのある百名山紀行が出来上がった。

546　日本列島
濱谷浩／平凡社
1964 ／ 748 ーハ
著名な写真家・濱谷浩のカラー写真集である。全国 111 点の写真を収録、解説は地理学者・辻村太郎と撮影者・濱谷浩。火山、海、高山、河川、湖沼、湿原、石灰岩台地、樹氷、原生林、最高峰に分けて各写真画像を解説する。北海道は 26 点、うち大雪山 2 点（原生林）、十勝岳 3 点（火山と原生林）、すべて濱谷独自の視点からとらえた映像である。

547　花風景　北海道
梅沢俊／北海道大学図書刊行会
1988 ／ 472 ーウ
著者が道内各地で花の撮影をしているときに「足で見つけた私のお花畑」と言う群生を 1 冊にした。大雪山系は中岳から裾合平へ向かう途中のエゾノリュウキンカ、雪渓跡のエゾコザクラ、五色ケ原のホソバウルップソウやエゾノハクサンイチゲ、高根ケ原のエゾハハコヨモギの群生など。

548　貼り絵に託した　四季
鮫島和子／エコ・ネットワーク
2010 ／ 726 ーサ
貼り絵の作品 56 点。大雪山関係も多く、「夕映えの旭岳」、北海岳で見た「クモイリンドウ」、小泉岳の「リシリリンドウ」、冬の「旭岳」、吹上温泉付近から眺めた「美瑛富士と美瑛岳」、十勝岳旧噴火口からの「峰」、三段山からの「十勝の山々」。色使い、立体感が素晴らしい。

549　遙かなる山　Ⅰ～Ⅴ
閑良屋会／ BeeBooks、旅人工房
1993 ～／ 748 ーヒ
山岳写真家、内田良平の写真教室「ヒマラヤ・カメラトレッキング」に参加して意気投合した仲間が 1979 年、閑良屋会を結成。結成 15 周年に写真記念誌Ⅰを出し、以後 5 年ごとに編集してⅤ号になる。深川市の会員、佐藤武史がⅠに「噴煙舞う旭岳」、Ⅱに「花咲く旭平」、Ⅲに「新雪の十勝岳」、Ⅳに「雲棚引く旭岳」などを載せた。

550　power of light
中西敏貴／㈱桜花出版
2014 ／ 748 ーナ
日本の写真文化をファッションやアニメ、音楽と同じように世界に届けたい、その想いからスタートした「日本の写真文化を海外へプロジェクト」。№ 1 ～№ 9 まである。№ 8 は、大雪山麓の風景をアジアを中心に台湾、香港、中国、韓国、ヨーロッパに向けて制作された。

551　光の彩
中西敏貴／青菁社
2012 ／ 749 ーナ
美瑛、富良野の地や大雪山を 20 年以上撮影し続けてきた著者が、真摯に自然と向き合い、光を探し、追いかけ、そして巡り会った「光の彩」をまとめた写真集。

552　日高の山名について
写真集『日高山脈』別刷
村上啓司／北海道撮影社
1979 ／ 291 ーム
村上啓司はアイヌ地名（山名）研究家である。大雪山の奥座敷といえばトムラウシ山が知られているが、トムラウシと付く山はトムラウシ川の源頭の日高にも 2 山あり、北日高は 1,477m、中日高は 1,278m、いずれもトムラウシ山である。村上はトムラウシの意味は不明という。ただ、トムラウシには各者各説がある。

553　百名山の自然学　東日本篇
編　清水長正／古今書院
2002 ／ 454 ーヒ
深田久弥の「日本百名山」を自然考察しようという編集方針で、大雪山は高橋伸幸が「日本のツンドラ地域」と解説し、トムラウシは水野一晴が「広大なお花畑の魅力」、十勝岳は岩崎正吾が「おそるべき火山泥流」として紹介している。

554　百名山パノラマ案内
白山書房編集部／白山書房
1999 ／ 291 ーヒ
深田久弥の「日本百名山」から眺める山並みをコンピューター・グラフィックスでパノラマ画像に仕上げた。通常の視程（見える距離）はせいぜい 100km だが、パノラマ図では最大で 300km 先まで掲載、国土地理院の標高を記載している。雌阿寒岳からの展望では十勝岳、ニペソツ山が分かり、北海道のほぼ真ん中にある大雪山からのパノラマには遥か羊蹄山の位置まで示している。あの山は何という山だろうと調べる「山座同定」に役立つ一冊。

555　ふるさとの富士 200 名山
写真・文　吉野晴朗／東方出版
1996 ／ 746 －ヨ
富士山と呼ばれる山を別名、本名含めて北から南へ、200 富士山を選んだ写真文集である。北海道は 13 富士、大雪山系では「美瑛富士」があり、白金温泉付近から撮影したシンボリックな写真が載っている。全国には別称、愛称ではないれっきとした「富士山」という山がいくつかあることも分かる。

556　北海道森林植物　写真図譜（Ⅰ．草本篇）
監修　舘脇操　編集　中野正彦、吹上芳雄、千廣俊幸／北海道林務部
1954 ／ 470 －ホ
北海道の森林計画などを担当する技術職員らに、森林植物分類上の知識を持たせることを狙いにした携行本。天人峡に自生する花「ハゴロモホトトギオス」の命名者、舘脇操が監修、その標本を採集した吹上芳雄、千廣俊幸が編集している。

557　北海道森林植物　写真図譜（Ⅱ．木本篇）
監修　舘脇操　編集　中野正彦、中村幸雄、吹上芳雄、三角亨、鮫島惇一郎／森林植物同好会
1955 ／ 470 －ホ
北海道の森林を形作る喬木、その下層に生育する潅木の写真図説。

558　北海道の文化財
北海道教育委員会／北海道新聞社
1978 ／ 709 －ホ
道内にある国と北海道指定の文化財（国指定 93 件、道指定 114 件）をカラー写真と図版で紹介している。大雪山関係は、国の特別天然記念物の大雪山と北海道指定名勝、羽衣の滝。

559　北海道の森林
北海道／北海道
1999 ／ 653 －ホ
A1 判の厚手折り込み地図で、表紙は三国峠から望む大樹海と東大雪の山々の展望写真。大地図は国有林、大学演習林、道有林、一般民有林に色分けされ、国立公園、国定公園、道立自然公園区域も表示し、自然がひと目で分かる。JR、主要道路、市町村界、空港、道民の森、森林管理局・署、道有林管理センター・林務署なども記入している。

560　画集　北海道の山
北海道新聞社／北海道新聞社
2001 ／ 720 －ホ
著名な画家 33 人の 60 作品を収録しており、大判で北海道の山の画集としては出色のものである。大雪山系は 11 作品で、画家の名を挙げておくと木田金次郎、高橋北修、吉田清志、相原求一郎、坂本直行、田辺三重松、岩橋英遠、国松登。

561　北海道　花の散歩道
梅沢俊／北海タイムス社
1982 ／ 472 －ウ
第 1 編はイワイチョウからヨツバヒヨドリまで 50 音順に 82 の花を「道ばたの顔なじみたち」として紹介。第 2 編「花の散歩道ガイド」の大雪山系は「黒岳と桂月岳」「赤岳と白雲岳」「沼の原と五色原」の 3 コースを高山植物を中心に紹介している。

562　北海道　花の散歩道　（改訂版　続）
梅沢俊／北海タイムス社
1992 ／ 472 －ウ
前著の不足を補う形で 2 年後に続編が編まれ、10 年後に改訂版が発行された。大雪山系は「富良野岳と上ホロカメットク山」「沼の平と裾合平」で、裾合分岐からロープウェイ姿見駅までの間で見られるエゾオヤマリンドウ、ミヤマバイケイソウなどを紹介している。

563　北方林業表紙写真集
鮫島惇一郎／北方林業会
1999 ／ 748 －サ
『北方林業』創刊 50 周年記念に発行された。同誌の創刊から表紙写真は一貫して著者の写真を使い、裏表紙に写真に思いを寄せる文章を載せてきた。約 500 点の中から選び、一冊にした。

564　北方林業表紙写真集
鮫島惇一郎／北方林業会
2008 ／ 748 －サ
『北方林業』創刊 60 周年記念に発行された。

565　北方林業表紙写真集
鮫島惇一郎／北方林業会
2013 ／ 748 －サ
『北方林業』創刊 65 年の点描として発行された。

566　北方林業表紙写真集
鮫島惇一郎／鮫島惇一郎
－／748－サ
『北方林業』の印刷会社が表紙の写真集を作り、著者に送ったもの。4文字のタイトルを付けた。刷った製本部数は極めて少ないと思われる。1963～1969『春夏秋冬』、1970～1976『四季折々』、1977～1983『東西南北』、1984～1990『大地の詩』、1991～1997『風の便り』、1998～2004『山河礼賛』。

567　山とお花畑２
田辺和雄／高陽書院
1961／471－タ
全３巻のうちの第２巻が、「尾瀬・上信越・東北・北海道」編である。副題に―原色写真でみるお花畑―とあるように、当時としては画期的、華麗な原色（天然色、カラー）の山とお花畑の写真と解説、深田久弥の紀行随筆、著者の「植物探索旅行の日誌から」がある。北海道は大雪山をはじめ、夕張、アポイ、知床など。著者は大雪山北方の平山が、「ごく最近エゾルリソウそのほかの高山植物の宝庫であることが発見された」と記している。

568　雪と氷の大研究
片平孝／PHP研究所
2011／451－カ
子ども向けに「雪の赤ちゃん」「氷も結晶からできている」など写真と文で分かりやすく解説している。旭岳温泉駐車場のトイレの屋根に積もった冠雪の写真は印象的。中谷宇吉郎雪の科学館館・神田健三館長が監修した。

569　雪の結晶　岩波写真文庫７
岩波書店編集部／岩波書店
1950／451－ユ
中谷宇吉郎と高弟、花島政人が監修し、写真は岩波映画製作所。雪の研究は十勝岳麓の「白銀荘」で始まり、北大の低温科学研究所で人工雪の研究へと進み、旭岳温泉の「仰岳荘」「白雲荘」の雪洞で雪結晶の写真撮影や映画製作が行われた。人工雪の研究は、十勝岳麓の洞穴に出来た霜結晶からヒントを得た、と興味深い記述もある。

570　吉積長春遺作展　図録
編　真鍋光男ほか／知床博物館協力会
1979／721－ヨ
吉積は日本画家。旭川在住中に大町桂月一行と層雲峡から大雪山に登頂した。桂月の紀行文に吉積の名がある。彼はその後、斜里に移住したので図録には知床の山や海、斜里岳の絵が多い。だが圧巻は「大雪」（絹本彩色６曲押絵張）で、層雲峡や桂月一行の登山の情景が描かれ（1933年制作）見ごたえがある。

571　わが心の山
山岳写真集団／角川書店
1968／748－ワ
「エーデルワイス写真集」とあるように、山岳写真集団団員の写真集で、写真の間に作家や登山家の文がはさんである。団員の１人、横山宏が「秋色　大雪山」３点の写真を寄せている。

文学書
小説、紀行文、エッセイ、詩集、歌集、句集、詞華集、アンソロジーなど

７－１ 文学書（全てが大雪山）

572　神さまたちの遊ぶ庭
宮下奈都／光文社
2015／914－ミ
作家、宮下奈都が夫の「トムラウシで暮らしたい」という唐突な誘いにのって３人の子どもたちの山村留学を１年間続けた。日記風のお母さん奮闘記録で「小説宝石」に連載。小学４年生の娘の友達から「しんとくちょうぐったり」（新得町屈足）で手紙が届くエピソードなど、カムイミンタラの大自然に抱かれた一家のわくわく、どきどきの毎日が面白い。

573　カムイミンダル
小野寺与吉／フロンティア同人会
1995／911－オ
箱入り、詩集。大雪山の麓、愛別町愛山で育った著者は、師範学校卒業後に教師となるが、辞めて芦別炭砿炭砿夫となって地底を体験、教職に復帰し、詩人としては郷土の山・大雪山を愛し、多くの詩を残した。

574　樹と雪と甲虫と
木野工／光風社書店
1972 ／ 271 －キ
旭川出身の作家、木野工が洞爺丸台風になぎ倒された風倒木を素材に、野望の果てに夢を失っていく青年実業家を描いた小説。

575　牙王物語（上）（下）
戸川幸夫／角川書店
1957 ～ 1958 ／ 913 －ト
戸川幸夫が毎日新聞夕刊に連載した「山のキバ王」の単行本。新聞連載中に「牙王物語」と改題して上巻が出来、新聞連載が完結した翌年、下巻が発行された。大雪山中で生まれた「キバ」（オオカミと犬の混血）と東川の牧場の娘「早苗」の波乱万丈の物語。大雪山の原生林をなぎ倒した洞爺丸台風（1954 年）がクライマックスになる。

576　牙王物語 上・下
戸川幸夫／国土社
1980 ／ 913 －ト
著者は動物文学を確立させたひとり。主人公は、北海道犬とサーカス団を脱走したヨーロッパオオカミの混血「キバ」。大雪山中で生まれ育った野生狼犬は、羽衣の滝で溺死寸前のところを東川の女学生、早苗に救われ、愛犬として成長してゆくが、やがて大雪山の暴れ熊「片目のゴン」との死闘を繰り広げる。本を開くと「物語の舞台　大雪山連峰周辺地図」がどんと載っている。

577　牙王物語　新装合本
戸川幸夫／新評論
2018 ／ 913 －ト
「国土社」の児童書「牙王物語」上下 2 巻を「新評論」が 60 年ぶりに新装合本した。挿し絵も変わり、動物の図鑑、絵本で活躍する田中豊美。松山温泉（現・天人峡温泉）や羽衣の滝、忠別川上流の牧場などが重要な場面として設定されているものの肝心の東川村（当時）の記載が国土社版にはなかったため、新たに「東川村」を随所に書き入れ、大雪山と東川が物語の主要な舞台であることを鮮明にした。大雪山国立公園の略図も改め、主人公の野生犬「キバ」が駆け巡ったすべての山を入れた詳細山岳図とした。著者の次女で認定 NPO 法人トラ・ゾウ保護基金理事長、戸川久美が解説「つまずいても強く生きる」を書いている。（202 ～ 205 ページ　参照）

578　クマネシリ紀行
早川禎治／私家版
1968 ／ 786 －ハ
クマネシリ山塊の夏冬を通じた登山紀行で、巻末に登山史も付記してある。著者の登山ルートは積雪期初登頂であろうし、クマネシリ山塊の登山研究としても貴重な資料となる。

579　層雲峡温泉小唄
菊谷清蔵／私家版
1928 ／ 767 －キ
「附大雪山層雲峡忠別渓案内」の副題がある。文庫版の小冊子だが、口絵写真も広告ページも多い。はしがきによると菊谷は黒岳石室の番人をふた夏務めており、その間のつれづれに作った唄、登山客の作った唄をまとめて本にしたという。表題の『層雲峡温泉小唄』もそのひとつで、いうならば歌詞集である。大雪山案内の表登山口は松山温泉、裏登山口は層雲峡温泉としている。

580　詩文集　層雲峡四季
編　菊池モト／北の女性社
1947 ／ 911 －キ
大町桂月の漢詩、与謝野寛・晶子、斎藤茂吉、馬場孤蝶らの短歌、高浜虚子の句、野口雨情の層雲峡小唄、大町桂月の「層雲峡より大雪山へ」などを収録している。

581　大雪山牙と顎の殺人
本岡類／光文社
1986 ／ 377 －オ
旭岳でヒグマに食われた女性、オーストラリアでサメに食われた女性、離れた場所での事故死が実は同じ男の殺人事件という突拍子もない推理小説。

582　大雪山殺人事件
梓林太郎／実業之日本社ジョイ・ノベルス
2007 ／ 913 －ア
事件の発端は、旭岳で登山者が熊に襲われたことだった。解剖の結果、殺人の可能性が出てきた。容疑者は被害者と一緒に登山をしていた婚約者だが彼には鉄壁のアリバイがあった。その壁に北海道警の刑事たちが立ち向かう。

583　大雪山讃歌
高澤光雄／北海道出版企画センター
2015 ／ 291 ータ
大雪山国立公園指定 80 周年の節目に、山岳雑誌などに寄稿してきた大雪山系への登山紀行などを一冊にまとめた。歴史的に貴重な写真を使って「写真で見る探検・登山・保護への歩み」を巻頭に置き、著者がライフワークとする登山史など大雪山の歴史を振り返っている。

584　大雪山粗描
三好文夫／旭川豆本の会
1976 ／ー
限定 500 部の豆本。

585　大雪山とトムラウシ
前川整洋／白山書房
2002 ／ 291 ーマ
山岳紀行作家、詩人である著者が日記を付けるように書き綴った登山記。旭岳～黒岳～トムラウシの縦走を「絵巻物の中を歩いているような縦走路だった」と振り返り、詩、俳句を織り交ぜて書き進めている。

586　大雪山の森番
西野辰吉／農山漁村文化協会
1999 ／ 913 ーニ
物語の主人公は小学 6 年、藤本芳樹。父は森を守る営林署職員。台風でズタズタにこわれた森林をつくりなおす仕事に従事していたが、なかなかうまくいかない（表紙裏から一部抜粋）。著者は、大雪山の台風被害からの復興が困難を極め、人工造林作業に心血を注いだ現場の苦労を後世に伝えようと、この物語を書いた。藤本少年が図書館から借りてきて読む本「カネランと小熊」も、著者が書いた児童文学。

587　大雪山発殺人物語
辻真先／徳間書房
1989 ／ 913 ーツ
著者はトラベルミステリー、ベビー・ディテクティブシリーズを得意としているようで、糠平や旭川が舞台の本編も赤ちゃんが力を出す。幌加温泉の今はなくなった川沿い露天風呂の写真が挿入されている。

588　戸川幸夫動物文学全集 3
戸川幸夫／冬樹社
1965 ／ 913 ート
戸川幸夫の動物文学を集めた全 6 巻と別巻構成で、第 3 巻には「牙王物語」だけを収録している。徳川夢声が「シートン動物記と並び、著者の深い愛情と生物学的探究心とが全編にあふれている」と評している。

589　秘境層雲峡　仙境の思い出
原田豊／私家版
1982 頃／ 289 ーハ
菓子職人の原田が入峡したのは 1927 年で、その目的は日本百景に入選した新名所、層雲峡の土産菓子を作ることであった。本書は入峡から 10 年ほどの出来事を、エピソード風に短歌を交えながら語る回想記。成田嘉助を案内人にして十勝岳まで縦走したことや遭難救助、怪談話もある。

590　分水嶺
笹本稜平／祥伝社
2014 ／ 913 ーサ
大雪山中の幻のオオカミ探しに人生を賭けた男は殺人罪で服役、仮釈放中の身。この男に同行して冬の大雪山に登る山岳写真家。東大雪の音更山、石狩岳、ニペの耳、シュナイダーコースなどを主な舞台に描く本格山岳小説で、帯広警察署の刑事もからむミステリー仕立て。本の帯に「彼らの真摯な魂が触れ合うとき、奇跡が起こった」とあり、引き込まれる。

591　峰の記憶
渡辺淳一／文芸春秋
1978 ／ 913 ーワ
大雪山系を貫く縦貫道建設に携わる北海道開発局の現場所長、29 歳の若き技官が主人公。工事を進めながら自然保護への思いも徐々に強くなっていくが、機材を吊り上げていたヘリコプターが墜落、工事は中断、現場所長を解任される。大雪縦貫道を題材にした小説。

7－2 文学書（部分が大雪山）

592　青い棘
三浦綾子／学習研究社
1982 ／ 913 ーミ
小説の中に、大雪山や白銀温泉などの風

景が随所に登場し、最後の章は『殉難碑』。東川町の墓地にある中国人殉難烈士の墓が小説の重要なポイントになっている。

593　旭川・大雪　白い殺人者
梓林太郎／実業之日本社
2015 ／ 913 －ア
山岳ミステリーを得意とする作家の近作。東京の私立探偵、小仏太郎シリーズの 8 作目で、東京調布にある館の謎めいた人物の周辺から殺人事件が起きる。最初の殺人現場が層雲峡の流星の滝付近。探偵は旭川、上川、比布、美瑛、札幌などを調べ犯人に迫って行く。

594　あるサラリーマンの山
芳村宗雄／白山書房
1997 ／ 786 －ヨ
仕事と家庭の合間に、置かれている状況などの分析をしながら登山を楽しむ方法を明かしている。著者は札幌在住、サラリーマン 40 年にわたる山記録で、大雪山へは高度経済成長期、結婚したての頃に訪れている。上ホロカメットクでキツネにザックを狙われたコラム欄や「石狩岳から化雲岳」「黒岳から旭岳」などの「思い出の山」で構成している。

595　ある偃松の独白
中村清太郎／朋文堂
1960 ／ 291 －ナ
朋文堂のコマクサ叢書のなかの一冊。著者は登山家であり画家、初期の登山に足跡を残し日本山岳会名誉会員。「大雪山あれこれ」の一編があり、大雪山に 1 カ月ほど篭って周辺を歩いて絵を描いている。本書にも数枚の絵を挿入している。鮫島惇一郎が大雪山の案内役で同行した。

596　怒りの標的
城山三郎／文芸春秋
1978 ／ 561 －シ
文庫には表題の「怒りの標的」など 9 編が収められており、そのうちの「石北峠」が層雲峡温泉の旅館で働く順子の物語。初冬の温泉宿は客が減り、従業員も休みを取って宿を離れるが順子は残り、バスで人気のない石北峠へ向かう。その夜、宿では泊り客に異変が起きる。

597　イグアノドンの唄
中谷宇吉郎／文藝春秋新社
1952 ／ 404 －ナ
中谷宇吉郎の随筆集。最初の「冬の華」が 1938 年に発行された後、「続冬の華」「第三冬の華」などと続き、イグアノドンの唄は「第十冬の華」となっている。大雪山関係の随筆として「大雪山二題（大雪山の雪、大雪山の夜）」「大雪山の積雪量調査」「雪は資源である」を収録。

598　石狩川紀行　北海道文明史をさぐる
西野辰吉／日本放送出版協会
1975 ／ 210 －ニ
大雪山を源とする石狩川を視点に、開拓とアイヌ民族との関係、稲作、畑作がどのように進められたか、工業の発展による川の汚染などを、紀行の形で書き進めている。

599　岩に立つ
三浦綾子／講談社
1979 ／ 913 －ミ
三浦夫妻の家を建てた棟梁からの聞き取りを小説にした。棟梁は大雪山のふもと、旭川市米飯で育ったので、いやでも大雪山が目に入る。全編語り口で進む異色の小説で、大雪山を語るところが印象深い。

600　オークブリッジ邸の笑わない貴婦人
太田紫織／新潮文庫
2015 ／ 913 －オ
著者はインターネット上の投稿コミュニティサイトで人気になった札幌出身の作家。19 世紀の英国文学を翻訳していた婦人が晩年、英国風お屋敷を東川町内に再現し、ヒロイン相川鈴佳がメイドとしてお仕えする奇想天外なストーリー。文中に「綺麗……」「今日は晴れているので、旭岳も見えますね。まだ雪を被っていますが、大雪山連峰の最高峰です」と大雪山が描かれる。19 世紀ファッションと英国料理をふんだんに織り込んだ物語が時々、東川町の現実に戻り、道の駅や郷土館などが登場する。大雪山と言うよりも東川町がかかわる物語として紹介する。

601　大島亮吉全集　全５巻
編　本郷常幸、安川茂雄／あかね書房
1969 ～ 1970 ／ 918 －オ
大島が慶応大学山岳部で活躍していた 1920 年 7 月、天人峡からクワウンナイを遡ってトムラウシへ登り、さらに石狩

岳へと縦走する「石狩岳より石狩川に沿うて」は、山岳紀行文学の名著となっている。1巻が紀行、2巻が随想、詩、3巻は西欧のアルピニストを紹介した先縦者、4巻は研究、翻訳、5巻は大島亮吉研究。

602　重い神々の下僕
三好文夫／潮出版社
1974／366 ーミ
著者は旭川を代表する作家のひとりで、アイヌ文化を愛し、山を愛し、愛山渓で亡くなった。潮出版の「重い神々の下僕」には表題の短編を含め4編が収められていて、その中の「山に消える」が大雪山を舞台にする一遍。山を知り尽くしているアイヌ青年ウパロについて冬山に入った民芸舎経営の小柳が遭難する。その後も電話にかかってくる小柳の声におびえたウパロもまた、大雪山に消えてゆくストーリー。ギクリとする結末が待っている。

603　歌集『古代幻想』
豊田千恵／みみずく書房
1982／911 ート
古代幻想とは邪馬台国の女王・卑弥呼のこと。著者は旭川出身、札幌在住の薬剤師で歌人。山と旅を好み全国各地を歩いた。大雪山にも登り、たくさんの歌を詠んでいる。そのひとつ、小泉岳の構造土を「永久凍土の潜む小泉平に意志もちしごと石動きたり幾万年を」（永久凍土＝ツンドラ、小泉平＝タイラと読む）と詠んだ。著者は小泉秀雄の教え子だが、小泉が教え子や家族にも大雪山のことはいっさい語らなかったため、師の山とは知らずに登っていた。

604　北紀行　風の恋歌
伊藤徹秀／麦秋社
1995／291 ーイ
著者は学生時代に山岳専門雑誌「岳人」で年間の紀行賞を受けている。道内各地の紀行34編。沼に瞬間的に映った流れ星の光などが印象的な「大雪山の夏径」をはじめ、「然別峡の緑葉」「大雪高原沼の淡い雲」「十勝山麓の深い雪」「トムラウシの狭い径」など。

605　北国の花
舘脇操／柏葉書院
1947／472 ータ
北海道の山を歩いて30年、舘脇博士が植物を主題に読み物風にまとめた。大雪山は「原始的区域は国立公園中の王座を占め、旭、北鎮、比布、愛別、永山、黒岳等を主峰とし数座の側火山を従え、針葉樹林が深々と夫等の山懐を埋め、豪快なる渓谷を有している」「既に老年期に入りつつある平ケ岳（高根ケ原）及び小泉岳、中年期にある黒岳、北鎮岳、白雲岳、当に壮年期にある旭岳等」「その山上に日本でも屈指の大規模な御花畑を形成している」「大雪山の植物を世に紹介したのは京大の小泉源一教授及び令弟の小泉秀雄氏で、大正五年が恐らくその研究調査の初記録であろう」などと書いている。

606　北の植物
戸塚新太郎／原始林社
1977／472 ート
著者は歌人であり小樽山岳会名誉会長、小樽山草会会長。短歌雑誌に連載した植物随筆を、著者の没後、長男・守夫によってまとめられた。著者は全道の山を歩いており、大雪山のこともたびたび出てくる。巻頭に著者作、伊藤整・書の短歌がある。装幀とカットは著者の甥、行動展の小山内重名。

607　北の林
原田康子／新潮社
1974／913 ーハ
物語は、理々子が石北峠を越えた大雪山中で大量の睡眠薬を呑み、通りかかったトラックの若者に助けられるところから始まる。

608　北の山
伊藤秀五郎／梓書房
1935／291 ーイ
著者は詩人であり、生物学者、北海道の山に大きな足跡を残した。山の名著として大きな影響を与えた一書である。なかでも「静観的とは」は、登行と思索という登山観を表わした随想論考として、広く愛読された。大雪山関係では、「北海道の山と高原」「北海道の夏の川」「石狩岳とニペソツ山」がある。装幀、挿画は坂本直行。

609　北の山 続篇
伊藤秀五郎／茗渓堂
1976／291 ーイ
登山紀行から登山史、自然保護、著者の人柄がにじむ一冊。大雪山登山史、スキー登山史など、北大在学中に「山とスキー」

の編集に参画した著者でなければ書けない思い出の記が詰まっている。

610　北の山・南の山　研究・随筆・紀行
吉澤一郎／三省堂
1942 ／ 786 －ヨ
吉澤一郎（1903 ～ 1998 年）は日本山岳会副会長を務めた登山家。「真の登山者とは、山に登り、山の書を読み、常に山を考えている人」と序に書く。紀行編に「冬の愛山渓温泉」がある。昭和 15 年正月のスキー旅行だが、上野駅を発ってから安足間駅に着くまでが当時は一苦労、その先が深夜の馬そりで 3 時間、やっと温泉にたどり着く。天候に恵まれなかったがそれでも「北海道最高の山、旭岳に日帰りが楽だし」「硼酸（ほうさん）の様な軽い粉雪」「全くスキーのパラダイス」と永久に忘れ得ぬ印象を書いている。

611　桑原武夫紀行文集　1
桑原武夫／河出書房
1968 ／ 915 －ク
著者は仏文学者であり登山家。紀行文集は全 3 巻で、第 1 巻に「北海道断想」（『文学界』1951 年 9 月号）の 1 編がある。講演のため 29 年ぶり 2 度目の来道となり、札幌から北見、網走、阿寒、斜里、釧路などを巡ったときの断想で、辛口の批評もある。京大山岳部時代に初めて来道し、大雪山や阿寒の山に登っているが、そのころは登山が目的で都会を観察するという気もなかったという。

612　桂月全集 別巻
大町桂月／日本図書センター
1980 ／ 930 －オ
大町桂月の名文によって大雪山は広く知られるようになった。北海道紀行の大部分は、全集の別巻に収められている。「北海道山水の大観」は「北海道の形を譬へて魚とすれば魚也。鳥とすれば鳥なり」で始まる。数ページ進んで、「層雲峡より大雪山へ」は、有名な一節、「富士山に登つて、山嶽の高さを語れ。大雪山に登つて、山嶽の大さを語れ」で始まる。日記編には、天人峡羽衣の滝に感動して吟じた漢詩など、東川町にとって大切な部分が収められている。

613　現代紀行文学全集　山岳編（上）
監修　川端康成、佐藤春夫、志賀直哉／修道社
1958 ／ 915 －ゲ
上下巻を併せて北から南へ登山家を中心に学者、文学者などの登山記、山の紀行文を集めた。大雪山関係は、「北海道の夏の山」（大島亮吉）、「大雪山紀行」（中西悟堂）がある。「三股高原」（加納一郎）は上高地と三股の比較図があって興味を引く。三股は石狩岳、ニペソツ岳、クマネシリ岳の登山基地である。

614　寂しき遊戯
著　大橋うめ、編　遠藤一郎／私家版
2009 ／ 911 －オ
『山恋う母娘』と対になる大橋うめの歌集で、両書を収める立派な箱付き、上製本、カバーは坂本直行の花の絵である。書名は歌の一首からとった。難解な個所には編者の注、解説があってわかりやすい。1,200 首の歌から 1 首だけあげておく、「旭岳登りしことも今思へば夢のごとくに思はゆるかも」。（680 山恋う母娘参照）

615　山岳遍歴
深田久弥／番町書房
1967 ／ 786 －フ
愉しき山行の章に「トムラウシ」がある。北大山岳部 3 人をシェルパ役に十勝川上流の野天温泉からトムラウシに登り、ヒサゴ池でテント泊して天人峡温泉へ下る。「柱状節理のすばらしい断崖に、美しい長い滝がかかっていた。羽衣の滝という。上から下へ落ちるまで、途中に滝壺が九つも数えられるような、長大な滝であった。おそらく日本一かもしれない」。天人峡温泉の宿に泥まみれの格好でゾロゾロ入ったとき、玄関先に居並んだ女中さんたちに「唖然とした表情があった」と結んでいる。

616　山頂の憩い
深田久弥／新潮社
1971 ／ 291 －フ
百名山後の登山紀行集であり、深田はこの原稿を渡した 3 日後、山梨県茅ヶ岳で急逝、期せずして遺稿集になってしまった。あとがきは夫人・志げ子である。大雪山系では、「ニペソツ山」と「音更山と石狩岳」の 2 編がある。

617　山野巡歴
横内斎／信濃路
1980 ／ 472 －ヨ
―信州の植物と私―という副題がある。著者は教育者、植物研究家で、小泉秀雄を恩師として、各地の山に同行している。その１編の「石狩川源流でサケ三尾」は、小泉、成田嘉助、塩谷忠らとの大雪山山行記である。成田らが源流で目の下２尺もあるサケを、３匹引っかけてきて、山中で焼いたり、刺身にしたりして、たらふく食べた。ほかにも興味ある話はたくさんある。

618　自我の構図
三浦綾子／光文社
1972 ／ 913 －ミ
物語は、旭川に暮らす国語の教師が趣味の領域を超え、絵を書いているが為に才能・嫉妬などから、同僚の美術担当教師との間に葛藤が生まれる。まっすぐな道を天人峡へ向かう車のシーンから小説は始まり、羽衣の滝が物語の重要な設定となっている。ＮＨＫ銀河テレビ小説となり、昭和 49 年７月末から８月初めにかけて東川で撮影が行われた。主演は大空真弓、日下武史。「郷土史　ふるさと東川　Ⅲ」の 363 ページにその時の記述がある。

619　自然探訪（1）北海道・東北を歩く
監修　開高健／講談社
1982 ／ 462 －シ
監修の作家、開高健は戦後の北海道緊急開拓を素材に「ロビンソンの末裔」を発表した。それを振り返って「取材のために私はその大雪山のふもとの開拓村へ、春、夏、秋、冬と、それぞれ一ケ月ずつ行って滞在したことがあります。そして、村の生活の厳しさに度肝をぬかれました」と書いている。ナチュラリスト、足田輝一が「大雪山の麓を歩く」をイラストや写真を織り交ぜながら書いている。元北海タイムス写真部長、河野利明や部員、貴戸敏勝らが写真協力している。

620　樹海　夢、森に降りつむ
高橋延清／世界文化社
1999 ／ 650 －タ
樹海といえば富士山や大雪山を連想するだろうが、ここでは東大北海道演習林のこと。演習林は十勝岳の南西方（富良野市）に位置し、最高峰は大麓山（1,460m）、大きな意味で大雪山につながる本といえる。著者は元演習林長であり東大名誉教授、「どろ亀さん」の愛称で知られる。「林分施業法」を確立し、実践した学者。随所に挿入されたグラビア写真がすばらしい、撮影者は写真家・水越武。

621　造材飯場
宮之内一平／北方公論社
1958 ／ 913 －ミ
著者は 1926 年、東川尋常小学校を卒業した東川ゆかりの作家。「造材飯場」は大雪山麓の造材が盛んな町（石北線Ａ駅、仮に上田町と呼ぼうと書いてある）を舞台に、厳しい冬山の造林作業現場で事故やストライキが仕組まれ、ミカド飲食店の女性が絡む人情物語。「サンデー毎日」の大衆文芸佳作（1955 年）となった著者の代表作。この本には、東川が舞台と推量できる短編「冬の山」など 16 編を収録。

622　草木図誌
鶴田知也／東京書籍
1979 ／ 470 －ツ
『画文草木帖』の続編で、前書にはなかったカラー写生図 12 点がある。両書ともに北海道で馴染みの草木が多い。著者は戦中から戦後の一時期を北海道で暮らしたゆかりの作家である。

623　草木寸景
横内斎／「横内斎著作集」刊行会
1986 ／ 472 －ヨ
『草木漫筆』に続く２冊目の著作集で小泉秀雄の名が頻繁に見られる。「故小泉秀雄先生」「恩師小泉秀雄先生」「当時の松本女子師範学校教諭小泉秀雄先生」「恩師故小泉秀雄教授」などの表現から、横内がいかに小泉に心酔していたかがわかる。北海道に関わる記述もある。

624　画文草木帖
鶴田知也／東京書籍
1978 ／ 470 －ツ
著者は『コシャマイン記』で芥川賞を受賞、一時期、八雲町に在住したことがあり、『北方の道』など北海道を題材にした作品も多い。作家活動の一方で山野の草木を好んで写生した。国立公園内を歩いていて道路脇の刈り草のなかから４～５本の野草を拾ったことで監視員に捕まる。罰金は徴収されなかったが野草は没収され、厳重な補導を受けて釈放された

という。本書は写生図とそれにまつわる随筆を添えた画文集。

625　草木漫筆
横内斎／銀河書房
1985 ／ 472 －ヨ
横内斎は長野県四賀村（現・松本市）出身の植物学者。横内は昭和初期、松本に在住していた小泉秀雄に連れられて大雪山に登ったことがある。本書は横内の没後、子息 4 人が諸会誌に寄せた父・斎の植物紀行随筆を選んでまとめた。特に大雪山はないが各所に小泉秀雄の名が見える。

626　太古の原野に夢見て
石川啄木ら 30 名／作品社
1986 ／ 915 －ニ
日本随筆紀行全 24 巻のなかの 1 冊である。冒頭に「雪中行―小樽より釧路まで」（石川啄木）があるので、啄木が著者代表になってしまった。三浦綾子、小熊秀雄、戸川幸夫、金田一京助など 30 人の紀行を収載している。大雪山系では、「大雪山紀行」（中西悟堂）、「十勝岳」（深田久弥）、「北海道の熊の話・抄」（伊藤秀五郎）がある。

627　大雪山　日本の名山０１
編　串田孫一、今井通子、今福龍太／博品社
1998 ／ 291 －ク
大雪山に関する著名な紀行文、エッセー、随筆、漢詩、和歌などを集めた一冊。大町桂月「層雲峡より大雪山へ」、大島亮吉「クヴウンナイを溯って」、坂本直行「般若の五郎」、中谷宇吉郎「大雪山二題」、三浦綾子「大雪山に想う」、渡辺康之「大雪山には氷河地形がないか」、今井道子「大雪山の色」など 32 編。巻末に執筆者のプロフィールも。

628　大雪・層雲峡殺人事件
梓林太郎／光文社
1997 ／ 913 －ア
梓林太郎が書いた 70 冊目の本で、北アルプス南部山岳救助隊員、紫門一鬼が活躍するシリーズもの。層雲峡の小函付近で落石に見せかけた殺人事件が起こり、紫門が穂高で知り合った男が容疑者として浮かぶ。その後も、容疑者と旧知の山男が谷川岳で、さらに女性がガス中毒で次々と変死、紫門が真犯人を追う。

629　太陽はいつも雲の上に
三浦綾子、光世／主婦の友社
1974 ／ 914 －ミ
三浦夫妻が人生の悩み、迷いに触れて、支える思い、聖書の言葉などを夫妻で掛け合いのように進めるエッセイ集。表紙の絵に小浜亀角の大雪山を使っていると思われる。

630　ただ今、八合目
―北の絶境・東大雪日記
山崎治／平原書房
1984 ／ 291 －ヤ
著者は音更町在住の詩人で、平原書房を主宰。20 代後半から登山を始め、以来 10 年間の山紀行である。住地からも東大雪の山を中心にまとめてある。書名の八合目は、10 年近く山を歩いたが、素人の山好きで、登山内容は七、八合目止まりから名づけた。

631　単独行
九糸郎／クライアント
1997 ／ 291 －イ
九糸郎とは版画家・一原有徳の俳号である。本書は戦前の山・11 山、戦後の山・10 山に分けて、俳句、回想、版画、スケッチ、写真でつづる紀行集で、表題の通り、いずれも単独行だった。武利岳は戦前の 1938 年 3 月、スキーでニセイチャロマップ岳西の山稜を越え、3 日間で登頂した。オプタテシケ山登山は戦後の 1958 年 3 月、白金温泉から吹雪のなかを日帰りしている。

632　小さな頂
一原有徳／茗溪堂
1974 ／ 291 －イ
著者は登山家であり画家、俳人でもあり、四季を問わず、多くの山に足跡を残した。本書にはたくさんの挿絵、概念図もあるが、装幀ともどもすべて自作。大雪山系の山のみを挙げると武利岳、十勝岳、ニセイカウシュペ山、石狩岳、旭岳、富良野岳、トムラウシ、オプタテシケ山、愛別岳、凌雲岳、上ホロカメットク山。

633　小さな頂【戦前の山】
一原有徳／不詳
不詳／ 291 －イ
戦前に登った 29 山を俳句、回想、版画、スケッチ、写真でつづる 19 ページの小冊子である。ニセイカウシュペ山は

1941 年 4 月、小樽スキー連盟の仲間 4 人で登頂した。

634　地宴
八匠衆一／作品社
1981 ／ 913 ーハ
著者は旭川出身の作家。主人公が育ったところが「大雪山の山に囲まれた、静かな美しい村」。物語は札幌を舞台に展開していくが故郷のことも時折登場する。本の帯に「北国の冬を背景に愛の煉獄を描き出す珠玉の長編小説」とある。

635　泥火山
田中長三郎／芸林発行所
1958 ／ 911 ータ
田中長三郎は名寄の弁護士であり歌人。本書は布装、箱入の特装愛蔵本の立派な歌集である。登山愛好家だけに山や自然を詠んだ歌も多く、大雪山には9回も登って歌を詠んでいる。羊蹄山、甲斐駒、伊吹、富士の歌もある。名寄に 30 余年在住したが故郷の三重県に転居、古希を期して念願の歌集を刊行した。田中は名寄におもむき歌友らの出版祝賀会に出席して名古屋への帰途、搭乗した全日空機が利島沖で墜落、全員死亡、結果的に遺稿歌集となってしまった。大雪山登山を詠んだ歌のなかから 1 首だけ挙げておく。1937 年 8 月、2 人の子を連れて登った、「晴れてをらば高根にかげもうつるべし底べ砂すく姿見の池」。

636　泥流地帯
三浦綾子／新潮社
1977 ／ 913 ーミ
北海道新聞日曜版に昭和 51 年 1 月 4 日から 9 月 12 日まで連載され、昭和 52 年 3 月に新潮社から発行された単行本。大正 15 年 5 月、十勝岳噴火、家も学校も恋も泥流が一気に押し流す。当時の生活が読み手の心に響き、懸命に生きる兄弟を通して人生の試練とは何か、天災と人を描いた。

637　泥流地帯
三浦綾子／新潮社
2009 ／ 913 ーミ
文庫版。

638　続　泥流地帯
三浦綾子／新潮社
1979 ／ 913 ーミ
十勝岳噴火の泥流で惨憺たる苦境に立つ開拓農家を描いた『泥流地帯』の続編。苦難はなお続き、重ねて一家に襲いかかる。

639　寺田寅彦の追想
中谷宇吉郎／甲文社
1947 ／ 289 ーテ
著者が 1922 年、東京帝国大学理学部物理学科に入学、物理実験の指導を受けた寺田寅彦について、「断片的に先生の人間の片鱗を手当たり次第に描いた」一冊。寺田は物理学者であり、随筆家であり、絵も描く才人だった。中谷が学生のころから物心両面で世話になり薫陶を受けた。大雪山で雪を研究した中谷の系譜を、敬愛した恩師との交流を通じて知ることが出来る。

640　天から送られた手紙
中谷宇吉郎雪の科学館館長、神田健三／プロセスアート
1999 ／ 451 ーナ
最初のページに旭岳の写真が載っている。説明文は「美しい雪の結晶が降る北海道、大雪山のふもと」「湿気の少なくなった空気が北海道中央部の山々にきて再び雪になるときには、きれいな結晶になります」と書いている。吉田六郎が旭岳温泉で撮影した雪の結晶の写真 30 枚を、大判で 1 ページずつに収めている。

641　十勝泥流
佐藤喜一／玄文社
1946 ／ 913 ーサ
著者は旭川で活躍した文学者。短編「十勝泥流」は、少年と水車小屋守の少女がザリガニ採り遊びから淡い、切ない思いが芽生えていくものの、十勝岳爆発の泥流で少女は行方不明となる。成人してもなお少女の面影を求めていく一遍。

642　毒麦の季
三浦綾子／光文社
1978 ／ 913 ーミ
ターちゃん、小学生の達夫の両親は、愛人問題で離婚状態になっていたが、層雲峡で行われる火祭りを見に行ったときに、取り返しのつかない事故が起きてしまう。昭和 46 年、「小説宝石」に発表した「毒

麦の季」など５編を収録して発刊。

643　登高者

著　大島亮吉、編　安川茂雄／三笠書房
1965 ／ 786 －オ

「平原の上に聳ゆる山」の一編を収録する。1924 年、西ヌプカウシヌプリに登った時の紀行で、『山とスキー』41 号に掲載された一文である。慶大山岳部部報『登高者』に所載の「北海道の夏の山」にも西ヌプカウシヌプリは、登山行程のなかで記述されている。

644　中谷宇吉郎集

編　樋口敬二、池内了／岩波書店
2000 ～ 2001 ／ 408 －ナ

北大で中谷に師事した樋口敬二らが編集した全８巻の全集。大雪山関係を選ぶと、１巻Ｉが「雪の話」から始まり、「雪の十勝」「粉雪」など十勝岳中腹の山林監視人ヒュッテで研究していたころの回想随筆で「十勝岳の思い出は皆なつかしいことばかりである。冬の深山の晴れた雪の朝位美しいものも少ないであろう」などと書いている。２巻も人工雪を作るなど大半が雪の研究で占められ、解説のページで樋口が「戦後における天然雪の研究は、1950 年２月、大雪山旭岳の山麓にある仰岳荘で天然雪の映画を撮影することで始まり、私も学生の身であったが炊事係としてそれに参加した」と書いている。３巻は前半が雷だが、後半に「雪後記」で十勝岳へ馬橇で向かう随想と、雪結晶が生長するシーンを低温研究室で撮影したり、十勝岳で降って来る新雪を撮った「映画を作る話」。５巻は、忠別川上流域の大雪山に降り積もった雪は資源であると説き、積雪量を測った話など「大雪山二題」「雪は資源である」の随筆を収録。８巻は、北海タイムス「タイムス論壇」に 1953 年に寄稿したものを「北国の春」として収録、巻末の年譜と著書目録（大森和彦編）によって、中谷の生涯が良く分かる。

645　中谷宇吉郎随筆集

編　樋口敬二／岩波文庫
1988 ／ 914 －ナ

雪の研究で世界的に知られる中谷宇吉郎は随筆の名手でもあった。研究助手時代のエピソード、研究材料、家族の話など 40 編。雪の観察を続けた十勝岳「白銀荘」とそこの主、Ｏ老夫婦との交流を書いた「雪の十勝」など。

646　中谷宇吉郎随筆選集第２巻

編　岡　潔、茅誠司、藤岡由夫／朝日新聞社
1966 ／ 404 －ナ

全３巻。２巻には、大雪山での研究とゆかりの深い「雪三題」「大雪山二題」「雪は資源である」などを収録。本に挿しいれた「月報」に、日本で最初にノーベル賞を受賞した湯川秀樹の寄稿「中谷さんと私の短歌」があり、湯川が札幌で肺炎に倒れた時、中谷宅で療養したこと、中谷の絵に湯川が短歌を添えたことなど逸話を明かしている。

647　中谷宇吉郎　雪の物語

中谷宇吉郎雪の科学館／中谷宇吉郎雪の科学館
1994 ／ 289 －ナ

石川県加賀市に中谷宇吉郎雪の科学館がある。館のガイドブック、テキストブックとして作られた。物語「中谷宇吉郎」、物語「雪の科学館」、追想「宇吉郎」の３章構成。

648　句集　日本百名山

栗田希代子／東京四季出版
1998 ／ 911 －ク

北海道出身の俳人。深田久弥が選んだ日本百名山に登って俳句を作ろうと思い立ち、昭和 59 年から 12 年間で完登。句集は大雪山の「炎帝も遊ぶカムイの庭の山」から始まる。ほかに「夏草もためらいがちの旭岳」「山霊のひしひし迫る登山かな」、トムラウシ山の「岩の角つかむその先雲の峰」など。

649　日本百名山

深田久弥／新潮社
1964 ／ 291 －フ

山に関する本として代表的な一冊。昭和 39 年に新潮社から発行された箱入り初版本。百名山に大雪山、十勝岳、トムラウシが入っている。著者は山の品格、山の歴史、個性ある山を重んじた。「私が旭岳の頂上に立った日は絶好の秋晴れで、大雪・十勝・石狩の連山はもちろん指呼のうちにあり、遠く、阿寒・知床や、天塩や、夕張や、増毛や、北海道の主な山をほとんど眺めることが出来た」と幸運を喜んでいる。

650　日本百名山
深田久弥／新潮社
1991 ／ 291 －フ
文庫版。

651　残された山　杖の頂
一原有徳／クライアント
2000 ／ 911 －イ
著者は登山家であり版画家、俳人（号・九糸郎）としても著名である。本書は版画、スケッチ、写真、山の仲間たち、俳句で表現する山岳誌で、大雪山系は西クマネシリ岳、ヌタクカムウシュペ山（桂月岳、熊ヶ岳）、美瑛岳、旭岳（金庫岩）、平山がある。

652　果て遠き丘
三浦綾子／集英社
1977 ／ 913 －ミ
離婚した父と母のもとで姉、妹がそれぞれ分かれて育ち、父には子連れの後妻がいるという二組の家族を中心に、妹は、姉や義姉の幸せをことごとく壊していく愛憎物語。義姉と男性が結ばれるのが旭岳を目の前に、姿見の池周辺を散策した後、勇駒別温泉（現・旭岳温泉）の宿となっている。

653　花の百名山
田中澄江／文芸春秋
1980 ／ 477 －タ
作家の登山記。登山をしながら山と、その山の花について思いを語る。登山図・花のカット付き。大雪山はイワウメ。勇駒別の宿に泊まり、姿見の池から旭岳に登って黒岳へ縦走。熊岳から北鎮岳の緩やかな斜面で見た構造土に感嘆し、「礫の自然の模様に沿って、薄黄いろのイワウメの花が、その文様なりに群生し、そのまま着物の模様のように見える」と書いている。ほかに富良野岳とハクサンイチゲ、十勝岳とイワブクロ、沼の平とサンカヨウなど。

654　新・花の百名山
田中澄江／文芸春秋
1995 ／ 477 －タ
八十歳を超えてなお全国の山に登り続け花の命を愛する著者が、15 年ぶりに選び直した百峰と花の随筆集。前作と同様に、山と花のセットで、黒岳はジンヨウキスミレ、小泉岳はチョウノスケソウを書いている。

655　被写体
宮之内一平／旭川出版社
1981 ／ 914 －ミ
東川尋常小学校を卒業した東川町ゆかりの作家、宮之内の随筆集。作家たちとの交流や自身の創作と短歌のこと、アイヌの才媛、知里幸恵のことのほか、東川神社境内の千本桜見物の時に見た喧嘩を「血桜組」として書いている。

656　ひとりぼっちの日本百名山
佐古清隆／山と渓谷社
1988 ／ 291 －サ
登った山をつないで日本横断するなど風変わりな目的で登り続け、移動にバスや列車など主に公共交通機関を利用する。旭岳登山の場合は、千歳空港着の後、振内に移動して幌尻岳登頂、次に白銀温泉へ移動して十勝岳登頂、さらに東川町に移動して旭岳から黒岳へ縦走後、旭川空港から帰京。その間 4 泊 5 日、交通費 88,010 円、歩程 27 時間。登山中の出会いなどを書き留めている。

657　百名山　山頂（いただき）はいつも仲間と
西岡健二／日本機関紙出版センター
1998 ／ 291 －ニ
深田久弥の「日本百名山」を 25 年かけて踏破した。旭岳には 2 回登り、99 座めとなった十勝岳は家族 4 人で挑戦、トムラウシは山仲間 5 人と登るなど、山頂にはいつも仲間と一緒に立っていた。和気あいあい、くすっと笑える登山記。

658　糞尿譚
火野葦平／新潮社
1948 ／ 913 －ヒ
文庫には表題の「糞尿譚」など 8 編が入っており、その中の「谷の宿」が層雲峡を舞台に、バスガイドの魅力に惹きつけられた旅人の物語。

659　歌集『米寿碌碌』
遠藤一郎／私家版
2012 ／ 911 －エ
著者は登山家、80 歳を過ぎて短歌を始め、小さな歌集を出した。歌は折々の心境を詠むもので日記のようだが、やはり登山や山に関わる歌が多く「仰ぎ見る山」と「回想の山」がある。大雪山の歌もまた多く、冒頭と掉尾を飾っている。

660　ぺたぬぅ　９号
編　ぺたぬぅ発行委員会／ぺたぬぅ発行委員会
2008／905 －ペ
旭川の文芸同人誌『ぺたぬぅ』９号に、「旭川実業界の巨星　荒井初一の生涯」（今井勝人）が載った。実業家であり、層雲峡の開発に大きく貢献した荒井初一の人物伝である。筆者・今井勝人は元高校教諭、古文書研究家でもある。なお同号、冒頭の詩「惚れろってことは莫迦だってこと」（じゅうきち）は、大雪山そのものを詠んだ詩である。

661　北海道繪本
文　更科源蔵、版画　松見八百造／さるるん書房
1978／914 －サ
好評３部作、いずれも大半のページに単色木版画の挿画があり、個性的で素朴、かつ、ぜいたくな本でもある。暮らしや自然、山やナキウサギ、クマもあり、楽しめる。

662　続・北海道繪本
文　更科源蔵、版画　大本靖／さるるん書房
1976／914 －サ

663　北海道・東北ふるさと大歳時記
編　角川文化振興財団（代表・加藤楸邨）／角川書店
1992／911 －フ
地方別の大歳時記で、季語編と地名編があり、全国全７巻のうちの第１巻。地区別に旭川、上川、大雪山、富良野、然別湖、狩勝峠など数百句、大雪山の項だけでも 81 句、ほかに旭岳７句、羽衣の滝３句などを収載する。季語編を加えると大雪山系の句は数えきれない。例示すると「厳父とす大雪山の照りかすみ」臼田亜郎、「狐吊りて駅亭寒し山十勝」河東碧悟桐、「神神の座のはるかなるケルン積む」（深谷雄大）など。大雪山、十勝岳、羽衣の滝の見事な写真もある。

664　北海道の碑
東延江／北海道新聞社
1989／910 －ア
北海道の文学碑巡り記である。大雪山国立公園地域の文学碑は層雲峡の大町桂月と野口雨情、十勝岳中腹に道路をふさぐように九条武子の歌碑が建っている。もう一つ大雪山にゆかりの碑として愛別町安足間神社境内の百田宗治の詩碑「アンタロマに来よという　大雪山を見に来よという　埋もれに来よという」を紹介している。

665　北海道の植物
舘脇操／舘脇操記念出版会
1964／470 －タ
読売新聞に連載された「北海道の植物」に「車窓の展望」を加筆したものを、舘脇操記念出版会が 62 ページの冊子にした。「トドマツが北の方からやってきて、渡島半島でピッタリとまり、津軽海峡を渡っていない」など北海道の植物分布を分かりやすく書き、大雪山関係は紅葉、珍奇な高山植物などが随所に登場する。挿入のイラスト地図は鮫島惇一郎が描いた。

666　北海道の旅
串田孫一／平凡社
1997／915 －ク
平凡社ライブラリーのなかの１冊。本書は 1962 年５月 15 日、山靴をはき、ピッケルを持って旅立ち、連絡船に乗り、北海道を周遊、６月１日に北海道を離れるまでの旅の記録である。列車やバスを乗り継いでの旅であった。登山は白金温泉から十勝岳のほか、斜里岳、礼文岳に登っている。大雪山は車窓からかいま見ただけで登れなかった。著者の描く山のスケッチ多く挿入あり。

667　北海道の山と雪　加納一郎著作集３
加納一郎／教育社
1986／291 －カ
著者は北大スキー部を創設、厳冬期の旭岳初登頂に成功したことで知られているが、樋口敬二が解説で『氷と雪』の著者であることを主眼に研究者としての一面を紹介している。本文での「ヌタクカムシュペのスキー登山」は 1922 年１月、５人での挑戦で、山頂は「風は強い。寒さに頬も凍らんばかり、発音も意のままにならぬ」などと描写している。

668　北海道の山々―山の風土とその紀行
編　宝文館出版／宝文館出版
1968／291 －ホ
全６巻のうちの北海道編。登山家のみならず、文人、学者の文も集めたアンソロジーで、大雪山関連の寄稿者のみを挙げると加納一郎、川田順、大島亮吉、本郷

常幸、八木橋豊吉、速水潔、舘脇操、伊藤秀五郎らである。

669　北海道文学散歩　道北編
編　木原直彦／立風書房
1983 ／ 910 ーキ
「大雪山・層雲峡」の項があり、この地に関わる作家、詩人とその作品をたどる。百田宗治、真崎晋吾（菊池一雄）、佐藤喜一、開高健、宮之内一平、八匠衆一、大町桂月、太田龍太郎、塩谷忠、小泉秀雄、更科源蔵、野口雨情、小熊秀雄、与謝野寛・晶子、火野葦平、城山三郎、瓜生卓造、船山馨、原田康子、木野工、三好文夫、渡辺淳一らを紹介している。

670　北海道文学百景
編　北海道文学館／共同文化社
1987 ／ 910 ーホ
１景２ページで写真と文学を綴る。大雪山関係を掲載順に紹介する。「層雲峡」では、木野工『樹と雪と甲虫と』の１節、詩歌では、松本五百子、三上省吾、飯田蛇笏、福田蓼汀、西倉保太郎。「大雪山」は戸川幸夫『牙王物語』、詩歌は、宮柊二、金坂吉晃、石田雨圃子、遠藤梧逸、入江好之。「十勝岳」は、佐藤喜一『十勝泥流』、詩歌は、西川青濤、江口源四郎、長谷川零餘子、大塚千々二、加藤愛夫。ちなみに「旭川」は、三浦綾子『氷点』、大雪山、十勝岳を描写する。

671　北海道　山歩き花めぐり
梅沢俊／北海道新聞社
2001 ／ 291 ーウ
北海道新聞に 1999 年春から約２年間、91 回連載した後、文と写真を補足して出版。花の写真家として知られるが、登山家としての山行記の趣が濃く、赤岳は「日本の山岳、自然写真の草分けである故田淵行男先生の高山蝶生態写真撮影のお供として７年間通った」、眼下の雲までを背景に咲く花の数々に「私の植物写真家としての出発点なのである」。オプタテシケ山は大学４年の時に撮った夕日に染まる山々、ほかに白水川、沼ノ原、クワウンナイ川、上富良野岳など大雪山系の紹介が多い。

672　北方植物の旅
舘脇操／朝日新聞社
1971 年／ 472 ータ
シベリア鉄道、千島、内蒙古、中国、スカンジナビア、アリューシャン列島、アラスカなどの旅行記で、植物だけではなく、むしろ各地で出会う人々の暮らしぶりを優しいまなざしで書き綴っている。後半で「北海道の植物界」に触れており、「従来となえられていた温帯から亜寒帯に接する一部には、特殊な移行帯（タテワキア）のあることが明らかとなった」と舘脇の国際的な学説に触れている。

673　北方の植物
舘脇操／アルス文化叢書
1944 ／ 472 ータ
戦時下に発行されたので、北海道だけでなく樺太、千島の植物を含めて紹介している。タテ 18.5cm、ヨコ 13cm、100 ページ余の薄い本だが、ほぼ半分を植物写真で埋め、舘脇博士が汽車旅の車窓から眺める形式で書き進む。大雪山は旭川駅や富良野駅、新得駅などからの記述で、「壮大なる山嶺の間には廣潤なる台地と、雄厳なる火山群と、豪快なる峡谷を有し、瀑布、雪渓、御花畑、温泉等がモザイク様に織り込まれている」と絶賛。

674　町医者の記―おじさんのハンドバッグ
大山正信／私家版
1991 ／ 914 ーオ
書名でわかるようにおじさんは医師で、発行時は山陽国策パルプ㈱旭川工場診療所長。登山愛好家であり、乗馬、俳句、スケッチ、こけし収集など、多趣味の人である。各誌に寄稿したエッセイをまとめたものだが、「天野市太郎先生との出会い」「高山病への挑戦」「大雪山と私」など、大雪山に関わるエッセイは多い。旭川在住の人であり、郷土史の資料にもなる本である。

675　みちのくの人形たち
深沢七郎／中央公論社
1981 ／ 158 ーフ
文庫には表題の「みちのくの人形たち」など７編がおさめられており、そのうちの「和人のユーカラ」が大雪山を舞台にする。「大雪山は決して恐ろしい山ではない」という書き出しだが、奇妙で不思議な遭遇、幽霊タンポポの名を教えてくれた大男のアイヌのような人との出会いが展開されていく。

676　明治の山旅
武田久吉／創文社
1971 ／ 291 ータ
著者は明治 16（1883）年生まれの植物

学者であり、日本山岳会創設者の１人である。本書は明治時代に各地の山野を踏破した自伝的紀行随筆で、後半の「北海道内の採集旅行」は、明治 42（1909）年の旅日記。旭川に宿泊後、釧路に向かう車窓から大雪山を眺めたらしい。「東方には大雪山彙の山々が雄然と扣【ひか】え、忠別川を渡って東南に向かえば、オニシモツケは花をつけ、林地にはカシワが多い。辺別に近づくに従い、遥かにトムラウシュ【ママ】を望む」と書いている。

677　野獣撮影

戸川幸夫／山と渓谷社
1973 ／ 480 ー ト

動物文学の第一人者、戸川幸夫が野生動物を撮影する旅紀行。インド象の襲撃、アフリカ象との対決、野獣界の忍者ヒョウなどは外国での冒険。国内では知床やオホーツク海の厳しい冬を紹介し、大雪山ではヒグマとの遭遇、白雲岳避難小屋のシマリス夫婦などを書いている。

678　詩集　山

井田清／山と雪の会
1931 ／ 911 ー イ

井田は初期の北大山岳部員として、大雪山や日高の山に意欲的な登山をした。1930 年、北大農学部畜産学科を卒業。詩集は東京・陵楓山房版となっているので、井田は東京に勤めていたものと思われる。武者小路実篤が序の詩を贈っている。詩のなかに山名があるわけではないが、その一節に〝夕張　十勝　大雪その峰々に若い情熱の灯をとぼして、深い歓喜にあたゝめられた俺ではあったが……〟とある。

679　山愛の記

村井米子／読売新聞社
1976 ／ 914 ー ム

著者 60 年に及ぶ山旅と自然保護へのかかわり、人とのふれあいを描いたエッセイ集。大雪山関係は、「十勝岳のある正月」（1929 年）、「花と雪田の大雪山」（1954 年）の２編で、いずれも回想記である。

680　山恋う母娘

編著　遠藤一郎／私家版
2009 ／ 289 ー オ

「母娘」とは編著者の義母・大橋うめ、妻・遠藤淑子のことで、本書は母娘の伝記であり、追悼集、遺稿集でもある。大雪山登山は 1936 年８月、うめ、淑子と弟・秀郎の３人が案内人を頼んで層雲峡から入山、黒岳石室泊、旭岳に縦走し松山温泉泊という２泊３日の山旅であった。登山記は函館中学１年の秀郎が書いている。うめはその後、回想の歌を詠んだ。1944 年、うめ、淑子の２人は、再び前回と同じく大雪山を縦走、案内人も同じ成田嘉助であった。義母の詩歌、随想、淑子の文も収録する。（107 ページ 614　参照）

681　山旅歌集

渡辺公平ほか／社会思想社
1966 ／ 767 ー ヤ

北海道の山の歌の定番は「山の四季」（北大山岳部歌）といわれる。4 番まであり、四季それぞれ北海道の山を詠みこんでいるが、3 番の秋に「山は紅葉にいろどられ ／ 頂高く空澄みぬ ／ 新雪輝く山々は ／ いずれも親しき友達よ ／ いざ行こうわが友よ ／ ニセイカウシュペにトムラウシに ／ 北の山の沢の焚火に語ろうよ」と、大雪山系の山を詠んでいる。ほかに十勝岳のスケッチに寄せて春スキーの楽しさを語り、石北峠では写真で大雪山の展望のすばらしさを説く。

682　山旅記

山川力／紫紅会
1976 ／ 914 ー ヤ

著者は 1912 年、岩見沢市生まれ。北海道新聞社論説主幹、監査役を経て顧問、日本山岳会会員。本書は〈紅〉〈北海道新聞社社報〉〈北方農業〉〈北方文芸〉〈北の山脈〉などの寄稿を含めて１冊にまとめた。紫紅会は岩田醸造のＰＲ誌〈紅〉の発行所。〈紅〉は小さな随筆誌として、全国的に愛読された。「トムラウシから天人峡へ」は、２度とも雨にたたられ、さんざんな山行きであったなど、山の記録も多い。装丁を〈紅〉ゆかりの画家らが担当、小型変形の瀟洒な作り。

683　山旅句　エッセイ集

高澤光雄／北海道出版企画センター
2013 ／ 914 ー タ

全国俳誌「道」の創始者、北光星から「好きなように随筆を書いて」と依頼され、著者が 1999 年 10 月号から「山旅句」を連載し、2013 年に 160 回を超えた。連載原稿に手を加え、未発表も含め百篇を選んで１冊にした。ヒマラヤやブータンの山旅、作家や芸術家との交流、企画した作家展のことなどバラエティーに富む。トムラウシ山遭難を顧みる、川嶋康

男著『凍れるいのち』を読んで、三浦綾子没後十年企画展など大雪山含みは 6 編。

684　山談花語
栃内吉彦／青山出版社
1943 ／ 914 ー ト
著者（1893-1976）は北大卒、農学博士、北大植物園の宮部金吾、伊藤誠哉に継ぐ三代目園長。新聞、雑誌に書いてきた随筆 39 話を初めて本にまとめ 3,000 部発行。序に代えてが母への手紙風になっている。「北海道の頽雪」は石狩岳から下る途中に大規模な底雪崩の跡を見た話、「北海道の山登り」は大雪山の一般の登攀が容易になった半面、山岳を愛する人々にとって登山的興味が薄らいだと書いている。「カムイビランジ」の一話には、大雪山のてっぺんに、数十町歩に亘る広大な高山植物園を設けたいという伊藤誠哉博士の案に基づいて高距千八百 m のだだっ広い山頂を調査したことを明かしている。他に十勝岳でのスキー、「愛山渓春秋」など。

685　山とその花
鮫島惇一郎／林業試験場北海道支場
1983 ／ 472 ー サ
著者が北海道林務部の広報誌「林」に 1961 年から 1983 年まで寄稿した 108 話を合本した。一話の表題は全て花の名前。大雪山での珍事、出会いなども多く、その時々に印象に残った花を脇役にしてエピソードを語り継ぐ。ヨツバシオガマは、愛山渓でアルバイトの手伝いをさせられていた時に永山岳で霧に巻かれ、遭難寸前になった高校時代の叱られた思い出。チングルマは、裾合平で砲兵の演習で切られた矮性潅木を見て、ここは最高の植物群生地なのに…と想う。友人や先輩との山での会話はおかしく、ユーモア短編ともいえる。

686　山の旅　大正・昭和篇
編　近藤信行／岩波書店
2003 ／ 786 ー ヤ
作家、学者、登山家ら多彩な人物の山旅紀行を収録した岩波文庫の一冊。なかに大町桂月「層雲峡から大雪山へ」がある。解説者・近藤は、作家、紀行文家のなかでも晩年まで歩き続けたのは桂月であり、文体は美文調だが、近代の山の文学に独特の位置を占めると説く。

687　山とともに在り
山川力／えぞまつ豆本の会
1981 ／ 914 ー ヤ
豆本には並製本、上製本、特装本など、判型も含めていろいろあるが、本書は「えぞまつ豆本」第 13 巻、限定 500 部の上製本である。17 編の山随筆のうち大雪山関係は「ニセイカウシュペ」「正しくはニセイカウシペ」「大雪山をはしごに乗って下山した」の 3 編。表紙と扉の裏に香川軍男のいも版がある。

688　山のあなたの空遠く
西信博／クライアント
1994 ／ 914 ー ニ
著者は精神科医で、北大山岳部出身の登山家でもある。書名はカール・ブッセの詩から採った。一原有徳の版画を入れた上製本、山の写真もある。『北海道医報』そのほか医学関連誌に掲載したエッセイ、コラム、小論文を 1 冊に収録した。4 部構成の第 1 部が山の文で、中学 1 年のとき、父に連れられて層雲峡から黒岳に登ったのが登山の始まりだという。

689　山のあなたの空遠く　Ⅱ
西信博／クライアント
2000 ／ 914 ー ニ
装本は前著と同じだが本書は 3 部構成になっている。第 1 部は同じく山、北の山の先駆者・伊藤秀五郎、秀岳荘の金井五郎らにふれ、海外の観光の山もある。全編を通じて山に関する記事が各所に見られるのは登山家であるゆえんであろう。

690　山のあなたの空遠くⅢ
西信博／オー・プラン
2008 ／ 914 ー ニ
装本は前 2 著と同じでも本書は 4 部構成になった。第 1 部は山。海外の山のほか「エゾヒグマの DNA」「北海道の硫黄鉱山」など。第 2 部は、「山で会った花」として山の花の写真を集め、大雪山で撮った花が多い。「中谷宇吉郎と武見太郎」も興味深い記事で、日本医師会会長として権力を振るった武見は、中谷の主治医であった。

691　山の画帖
茨木猪之吉／朋文堂
1959 ／ 291 ー イ
朋文堂コマクサ叢書のなかの一冊。著者は画家であり登山家、1944 年、北アル

プス穂高岳で行方不明となる。本書のなかに「北海道の旅」があり、ニペソツ山を眺め、扇が原、東西ヌプカウシ、然別湖、山田温泉、糠平を歩いている。残雪のウペペサンケ山が印象に残ったようだ。

692　山の詩歌　登山全書随想編３
編　藤木九三、川崎隆章／河出書房新社
1956 ／ 786 ー ト
詩人、歌人の山を詠んだ詩歌を収録したものである。尾上柴舟の「大雪山」を詠んだ短歌が取りあげられている。尾上は歌人のみならず書家としても著名である。

693　山の風物誌 登山全書随想編２
編　藤木九三、川崎隆章／河出書房
1956 ／ 786 ー ト
「北海道羆の生態」（清水大典）の 1 編があり、大雪山で登山者が襲われた事件を一例に挙げている。

694　山わたる風
伊藤健次／柏艪舎
2006 ／ 748 ー イ
朝日新聞北海道版夕刊に連載された「山わたる風」から抜粋、再構成した。大雪山、知床などを歩いて出会った命たち（花、虫、鳥、魚、動物）を記録した写真とエッセー。

695　雪
中谷宇吉郎／岩波文庫
1994 ／ 451 ー ナ
天然雪の研究から始まり、十勝岳での雪の結晶の観測、やがて世界に先駆けて人工雪の実験に成功していく。研究者のための執筆ではなく、一般の人に雪を知ってもらうために書いた。

696　雪は天からの手紙
中谷宇吉郎エッセイ集
編　池内了／岩波少年文庫
2002 ／ 404 ー ナ
中谷宇吉郎の随想を岩波少年文庫に収録。漢字に振り仮名を付け、塩一升の記述には（一升は約 1.8 リットル）などと挿入し、読み易く、理解し易くしてある。

697　雪晴風（ゆきはらし）
斎藤信義／朔出版
2018 ／ 911 ー サ
雪晴風は雪や吹雪がやんだ後、からりと晴れていながら強く吹く風のことで北方季語。著者は旭川で「俳句寺子屋」を主宰し、第 4 句集「雪晴風」で北海道新聞俳句本賞を受賞した。巻頭句「明け方の天女が原の淑気かな」は、雪博士・中谷宇吉郎が旭岳ふもとに日本一美しい雪が降るといったことによるもので、「雪を詠わずして何のための北国俳句か」という俳人の強い思い。「山巓（さんてん）の無垢なる白さ雪はらし」「はなだいろに暮るる冠雪旭岳」「うつすらと昼の月ある雪晴風」「春吹雪大雪山を塗り潰したる」など、句は全て 13 文字に収める。第 3 句集「氷塵」は北海道俳句協会賞（鮫島賞）受賞。

698　夜の傾斜
船山馨／河出書房新社
1961 ／ 165 ー フ
山とは一見無縁の企業小説だが、ラストに、主人公の麻生康子と矢代七郎が愛別岳で猛吹雪に巻かれて壮絶な凍死を迎える。

699　流域紀行
朝日新聞社／朝日新聞社
1973 ／ 915 ー リ
朝日新聞・学芸欄に昭和 47 年 7 月 12 日から 12 月 19 日まで連載されたものに、各筆者が加筆、訂正して一冊の本となった。石狩川を執筆したのは作家、吉村昭。石狩町から取材を始め、月形の樺戸監獄に寄り、工事中の大雪ダムを見て高原温泉に入る。旅の締めくくりは遡上する鮭を見たくて千歳市へ。「羆嵐」「赤い人」「破獄」など著者の代表作が思い浮かぶ。

700　流域をたどる歴史　第一巻
編　豊田武ほか／ぎょうせい
1979 ／ 291 ー リ
河口から源流へ、流域という視点から語る文化史、風土記というべきシリーズで全 7 巻、布装箱入の上製本。そのうちの北海道編は石狩川と十勝川を取りあげている。源流部の項目を挙げると「神居古潭―伝説と遺跡」（内田実）、「層雲峡と源流」（君尹彦）、「大雪山国立公園」（内田実）、十勝川では「十勝日誌に現れたアイヌ」（高倉新一郎）、「十勝のダム建設」（棚瀬善一）、「伝説の古戦場」（棚瀬善一）など。

701　六十歳からの日本三百名山
田中三郎／東京新聞出版局
1992 ／ 786 ー タ
著者は 60 歳になってから本格的な山登りを始め、三百名山登頂を達成した。大町桂月が「天上の神苑なり」と書いた大雪山には 65 歳で登り、旭岳から黒岳へ縦走。67 歳のニペソツ山登山では幌加温泉旅館主にイワナ釣りに誘われ、余りの大漁に度肝を抜かれた。80 歳で武利岳から武華山を縦走、表大雪や北大雪の広闊な展望を楽しんだ。

702　ロビンソンの末裔
開高健／角川書店
1964 ／ 913 ー カ
物語は、東京空襲が激しくなったころ、北海道の入植募集に応募して大混乱の上野駅を出発、青函連絡船内で終戦の玉音放送を聞き、その後、旭川奥地の開拓で辛酸をなめた移住者たちの苦闘を描いている。大雪山の麓が小説の村となっている。東旭川米飯に「東京部落」といわれた名残がある。

703　ロビンソンの末裔
開高健／新潮社
1960 ／ 913 ー カ
新潮文庫版。

704　わが山、源流へのあこがれ
早川禎治／北の野帳社
2006 ／ 786 ー ハ
限定 100 部の私家版。クマネシリ山塊、十勝川源流行、日高の山と谷、東アフリカの山、ヒマラヤとガンジス源流、風の回廊ムスタンなど、1966 年から 2005 年までの 40 年間にわたる山旅を集約した。大雪山へ登るのは石狩川の水系から入るのが一般的だが、その裏側が気になるということで、著者は登山仲間三人でニペソツ山のさらに西の陰になる十勝川源流地帯のトノカリウシュペツ川をつめてオプタテシケを目指したが、なぜか美瑛岳山頂に出てしまうという痛快な山旅など。

705　私の中の深田久弥
「日本百名山」以降の北の山紀行
滝本幸夫／柏艪舎
2015 ／ 291 ー タ
深田久弥の「日本百名山」にニペソツ山は入っていない。それならばと、著者が結成した帯広エーデルワイス山岳会五周年記念事業に深田をニペソツへ招いたのが初めての出会い。深田に心酔する著者の登山紀行でありながら深田の道内登山歴も渾然一体となって分かる一冊。

706　私のラバさん　酋長の娘
安細和彦／駱駝舎
2017 ／ 913 ー ア
著者は元外交官で、2015 年春、マーシャル諸島共和国日本大使の任務を最後に退官。「マーシャルの対日観光促進を考える会」を立ち上げ、本作品の元となる映画脚本を作り、さらに小説化した。プロローグに「大雪山の麓に広がる稲作地帯であり、北の風土に見合った木工家具や手工芸品を生産している〝ある町〟」とあるが、モデルになったのは東川町。大雪山麓の〝ある町〟に暮らす祖母と孫がマーシャル諸島の慰霊巡拝団に参加して、運命的な出会いを体験をする物語。月刊誌「北方ジャーナル」に 2016 年 1 月号から連載した後、単行本にした。

707　私はいつでも山に登りたい
田中澄江／大和書房
1997 ／ 914 ー タ
「婦人公論」に発表した「女四十九歳北アルプスを歩く」を単行本にする際、大雪山を書き加え、最終章に「女だけで行った大雪山」を載せた。女ばかり 13 人の旭岳－黒岳縦走はヒグマが心配だったが、国立公園の管理員 2 名や東川町役場職員ら男性陣の応援で何事もなく無事完登。旭岳は何べんでも登りたい、「せめて大雪山に羆たちが殖（ふ）え、人間に少しは自然への謙虚な姿勢をとるきっかけとなることを願っておく」で、結んでいる。

紙誌、部会報
新聞、雑誌、部報、会報、機関誌などの定期刊行物

8－1 新聞

708　旭岳通信
旭岳ファンクラブ／旭岳ファンクラブ
2003 ～ 2014 ／
旭岳ファンクラブの会報。（191 ページ参照）

709　懐郷
福田和民ら写真集編集委員会／大須賀羊一、大雪山山の村村長
1998 ／ 786 －カ
愛山渓新聞社・大雪山山の村通算 40 周年記念誌。愛山渓温泉を根城に大雪山登山を楽しむ仲間たちの一人、三好文夫が昭和 32 年 12 月、謄写版を背負ってきて愛山渓新聞を刷り始め、10 周年のころに仲間が増えて新聞社には入りきれないことから「大雪山山の村」として“独立”、村長、議長を選出していた。それから 40 周年を迎えた記念誌で、名誉村民、歴代村長、議長の紹介や活動を振り返る写真、新聞記事、村民の横顔、物故者エピソードなど。

710　変わりゆく大雪
編　北海道新聞／北海道新聞社
2004 ／ 070 －カ
国立公園指定 70 年の 9 回連載記事である。ロープウエイの功罪、トイレ問題、自然破壊、環境保全と観光の両立について、今後の課題についてなど。コピー。

711　厳冬のカムイミンタラ
寺島一男／あさひかわ新聞連載
2006 ～ 2008 ／ 786 －テ
「あさひかわ新聞」に 45 回連載。旭川勤労者山岳会 10 周年記念事業として、厳冬期の石北峠～富良野岳縦走が実行され、４名が未踏ルートに挑んだ 20 日間の克明な登山記。コピー。

712　大規模林道
寺島一男／あさひかわ新聞連載
2010 ～ 2011 ／ 519 －テ
「北の自然保護」第 3 章として北海道の大規模林業開発計画を書いた。北海道開発庁が出した計画、それに対する反対運動など経過を克明に描いている。

713　大雪山 100 年
北海道新聞／北海道新聞
1999 ／ 291 －ダ
「大雪山 100 年　その魅力と歴史を訪ねて」を 1999 年 10 月 27 日から 11 月 17 日まで 7 回連載した。コピー。

714　大雪山と人と
西原義弘／北海タイムス連載
1983 ～ 1984 ／ 289 －ニ
大雪山国立公園 50 周年の前年から大雪山にかかわった人たちに焦点を当てた連載を始め、2 年間にわたって 46 回続けた。スクラップブック。

715　大雪の父小泉秀雄の足跡
山村晋／北海道新聞社
2018 ／ 289 －コ
北海道新聞ローカル面で 2018 年 5 月 15 日から 26 日まで 10 回連載。小泉秀雄が上川中学校（現・旭川東高校）教諭のころ、苦心の末に大雪火山彙模型を完成させて北海道博覧会銀杯を得るが、病身の妻を亡くし幼子二人が残されたなど、東川町大雪山アーカイブスが保有する資料を中心に、植物研究に打ち込んだ小泉を紹介している。山村記者は連載のほか「小泉標本　宝の山」「小泉資料が東川町文化財に」など小泉の遺した資料を書いている。

716　大雪縦貫道
寺島一男／あさひかわ新聞連載
2008 ～ 2009 ／ 519 －テ
新聞連載は「北の自然保護」として企画され、第 1 章として大雪縦貫道を取り上げ、東川町側から清水町側へ抜ける通称大雪縦貫道計画と、それに対する反対運動の取り組みを 25 回連載した。

717　大雪てくてく体験記
旭工生・旭岳わらじ行
北海タイムス旭川報道部／北海タイムス連載
1986 ／ 786 －ダ
旭川工業高校電気科 2 年生 41 人が、明治 40 年に旧上川中（現旭川東高）が敢行した旭岳登山を再現した登山記。装備はわらじ、ござなど。5 回の連載。コピー。

718　「天からの手紙」をたどって
奈良山雅俊／朝日新聞社
2018 ／ 289 －ナ
朝日新聞夕刊に 2018 年 4 月 9 日付から 4 月 17 日付の間、奈良山雅俊記者が担当して 7 回連載。中谷宇吉郎の周辺の人たちにスポットを当てながらエピソードを紹介している。初めての人工雪はウサギの毛先ではなく、ラシャをほぐした毛先に出来た。宇吉郎の弟、治宇二郎が「独創者の喜び」を同人誌「跫音」に発表して芥川龍之介に激賞されたが、幻となっていた「跫音」を江別市職員、山崎敏晴が金沢の古書店で見つけた、など。

719　北海タイムス（昭和７年10月９日付）
北海タイムス／北海タイムス
1932／－
大雪山と阿寒が国立公園に指定される２年前に発行された紙面。大見出し「國立公園候補地　選に入つた本道の二名勝」「天下の奇勝地　大雪山の偉観」、裏表ともに特集記事と写真。

720　緑資源機構の林道整備事業をめぐる記事
北海道新聞／北海道新聞
2007／651－ミ
新聞記事スクラップコピー。

８－２ 雑誌

721　旭川春秋
編　桧山修／旭川春秋
1983／291－ア
旭川の月刊タウン誌『旭川春秋』1983年１月号には広告欄も含めて大雪山の写真がたくさんある。「旭川春秋ホット情報」に３編の大雪山関連記事がある。当時の旭川周辺の状況がわかり、きわめて興味深い。

722　アルプ
アルプ編集委員／創文社
1958～1983／910－ア
創文社の久保井理津男社長が串田孫一、尾崎喜八らに文芸的な山の雑誌を作りたいと呼びかけて創刊され、従来のガイドブックや登攀記録とは違う月刊誌として愛読者が増え、多い時には13,000部、平均して4,000千部を下回らなかった。A5判、平均70ページ前後の「アルプ」に多くのアルピニストが心酔した。山の芸術誌として時代の役割を果たし得たとして300号で終刊となった。清水敏一が「大雪山文献書誌　第２巻」で、アルプ掲載の大雪山関係を次のようにまとめている。数字はバックナンバー。下村兼史「大雪山のヒグマ」（27）「大雪山の小兵ども」（31）、坂本直行「吹雪の結婚行進曲」（35）「ウロオシベ山」（159）「ルーチン峠」（176）、石一郎「十勝の雪」（47）「北海道の山旅」（64）「十勝岳回想」（200）「北の山」（292）、河田楨「はるかなる旅情」（53）、五十嵐謙「十勝岳とニセコアンヌプリ」（60）、鮫島惇一郎「石狩の旅」（68）、相川修「冬山礼賛」（72）、望月達夫「トムラウシ紀行」（77）「ウペペサンケヌプリ」（80）、大野樫「北海道の森」（98）、若林修二「きたぐにの森」（98）、武田久吉「大雪山を行く」（111）「北海道の山名と地名小記」（163）、丹征昭「エゾフクロウの森」（128）「風の歌う日」（162）「ランプ」（164）「山小屋への愛」（165）「エゾコザクラの咲く夏」（199）「十勝三股への旅」（219）「山草記」（257）、伊藤徹秀「大雪山の夏径」（138）「十勝岳初雪」（286）、田中澄江「山を慕う」（151）、一原有徳「富良野岳」（167）「北国の風」（184）、田代沼太郎「危機にたつ大雪山」（171）、大沢洋三「大雪山と層雲峡」（186）、田淵行男「山と私」（190）、原真「冬の十勝岳」（200）、川崎精雄「ウペペサンケヌプリ」（200）、熊谷樫「登れなかった十勝岳」（290）。

723　岩と雪　60号
編　池田常道／山と渓谷社
1978／786－イ
登山、岩登りの専門隔月刊誌。60号で北の山登攀考を特集した。今村朋信「北海道の登山・再考」、保田成男「現代北海道山岳事情」、小林年「冬山登攀者へのアドバイス」、高澤光雄「北海道登山小史」、小樽山岳会が氷壁を完登した「銀河ノ滝から赤岳」など。

724　ガーデンライフ　1972年７月号
編　島村宣弘／誠文堂新光社
1972／471－ガ
人の心に花のタネをまく雑誌と謳った月刊誌。昭和47年７月号は、「美しき自然のシンフォニー　大雪山高山植物」を特集している。グラビアに緑岳付近のエゾハハコヨモギの大群落、北海沢源頭のエゾコザクラ群落など。寄稿は鮫島惇一郎「大雪山の高山植物」、中条良作「大雪山の高山植物を守ろう」、舘脇操「大雪山の原始林」、原秀雄「大雪山の植物あれこれ」、加納一郎「緑の王座」、豊国秀雄「大雪山に魅せられて」、更科源蔵「アイヌと高山植物」、小田島護「大雪山と私」、群境介「大雪山系絵地図」など。

725　岳人
編　辰野勇／㈱ネイチュアエンタープライズ
2014／786－ガ
京都大学山岳部の有志が1947年に創刊した登山専門雑誌で、その後、中日新聞社が引き継ぎ、約800号、67年の歴史を誇る月刊誌。2014年９月号からアウ

トドア・スポーツ用品販売のモンベルグループが引き継いだ。東川町の中心街にモンベル大雪ひがしかわ店があり、忠別湖で「ＳＥＡ　ＴＯ　ＳＵＭＭＩＴ」を主催している。表紙を従来の山旅写真から、編集長の辰野勇（モンベル代表）が愛してやまない山の版画家、畦地梅太郎（1902 ～ 1999 年）の作品に替えた。東川の写真家、奥田實の「森と、樹と、輝きと」、東川の獣医師、写真家、エッセイスト、竹田津実の「北のいきものがたり」の連載が始まった。

726　岳人　№817

編　辰野勇／ネイチュアエンタープライズ

2015 ／ 786 ー ガ

2015 年 7 月号で「山岳トレイルを行く」を特集。この中で、東川町エコツーリズム協議会職員、大塚友記憲が「大雪山旭岳から十勝岳へ」を担当。花と動物たちが迎えてくれる神々の遊ぶ庭（カムイミンタラ）6 泊 7 日の縦走を写真と文で紹介している。

727　カムイミンタラ

編　カムイミンタラ編集室／りんゆう観光

1984 ～ 2004 ／ 291 ー キ

りんゆう観光㈱の隔月刊 PR 誌で、「みなさまの心を結ぶ北海道の風土・文化誌」として発行した。16 ページの小冊子ながら大雪山ともども文化に大きな貢献をした。20 年間 120 号をもって終刊する。全道を対象にしているが、全号を通じて何らかの意味で大雪山に関わると思ってもいいだろう。創刊号は黒岳の標高年 1984 年に始まった。

728　季刊「銀花」 第 118 号

編　鯛　嘉行／文化出版局

1999 ／ 623 ー キ

「大雪山の父・小泉秀雄の足跡　未完の植物圖譜」を特集している（53 ページ～ 80 ページ）。高根ヶ原やエゾイチゲ、新聞紙に挟んだ植物標本などを、美しいカラー写真と文章で紹介。清水敏一が「羆の跋扈する山へ　小泉秀雄と大雪山をめぐる」、金井弘夫が「植物学者、小泉秀雄」をそれぞれ寄稿。

729　季刊　山の本

簑浦登美雄／白山書房

2019 ／ 786 ー ヤ

1992 年に創刊した山歩きの季刊雑誌。近刊№ 107（2019 年春）に京極紘一が「大雪連峰　小さな頂、小旭岳」を寄稿。道内の 1,500 m以上の山は全て登り尽くしたと思っていた筆者が 5 万図に小旭岳 1,654 mを見つけ、東川町大雪山アーカイブス専門員、清水敏一から〝大雪山の父〟小泉秀雄が命名した由来を聞き、残雪期に登った。たどり着くと「かわいそうなくらい小さな頂」で、物足りないので頭上に聳える道内最高峰旭岳へとさらに登った。読み方にも触れ「ポン」（アイヌ語の小さい）でも「しょう」でもなく「こあさひだけ」と書く。

730　北の話

編　八重樫實／凍原社

1980 ／ 291 ー キ

北海道を旅する手帖「北の話」は 1963 年に創刊、隔月発刊の道内情報誌として 1997 年 12 月の 202 号まで続いた。作家の寄稿が多く、文芸色が強かった。大雪山に度々登った動物作家、戸川幸夫が「北海道に本当の自然公園を作りたい」（34 号、190 号再掲）を寄稿し、その候補地の首位に大雪山国立公園を挙げている。戸川は「新民話　羆物語」（175 号）を大雪山のヒグマから書き始めたが第六話（180 号）で病に倒れ、未完となった。斉藤俊夫が「大雪山への誘い」で紹介している「北の話」に載った大雪山は次の通り（数字は号数）。深田久弥「石狩川の源頭」（32）、瓜生卓造「雨の黒岳」（39）、原田康子「雨の大雪」（40）、戸川幸夫「懐かしき大雪の仲間たち」（68）、三好文夫「或る冬山行き」（76、189 再掲）「山の雪」（83）、生田直親「虹を見なかった旭岳」（79）、宮田泰「トムラウシ山」（79）、佐藤喜一「残雪の勇駒別行」（84）、佐々木逸郎「遙かなるトムラウシ」（86）、伊沢照夫「無精者の山」（94）、乳井洋一「石狩岳キジ撃ちの記」（100）、相神達夫「東大雪山行記」（105）、八重樫実「二つの山行記―東大雪縦走と利尻山」（135）、津田瑤子「花の山ある記―トムラウシ山・ニペソツ山」（141）、冬木薫「大雪山の滝」（159 9、吉田道夫「一山なんぼ？」（168）。他に、三浦綾子「小説『泥流地帯』を回顧して」（188）など。

731　北の山脈

編　村本輝夫／北海道撮影社
1971 ～ 1980 ／ 786 －ヤ

北海道の山の季刊雑誌として創刊され、10 年間で 40 号まで続け、終刊となった。表紙は全て山の写真を使い、大雪山が 11 回で最も多く、次いで東大雪、十勝などが各 5 回で、大雪山国立公園で 22 回、過半数を占める。2 号で大雪山特集を組み、井手賁夫「大雪山をめぐる施設と自然保護」、小川巌「大雪山のヒグマ調査から」、旭川山岳会などの「夏の大雪山塊」、石川俊夫「地質調査の歴史」、渡辺定元「大雪山の高山植物」、福田和民「魔の有毒温泉」、そして速水潔が「大雪山のアクシデント」で遭難を書いている。6 号で東大雪山を特集し、芳賀良一「裏大雪からの告発―ある観光道路開発」、沼倉展「大雪山のカール地形」、鮫島惇一郎「沼の原・五色ケ原の植物」、鮫島和子「トムラウシ山」など。東大雪の山々は 39 号でも特編され、大西芳広「オッパイ山」、長谷川信美「東大雪の山々と人々との出会い」など 5 編。大雪山関係の寄稿や報告は毎号のように掲載されており、それを調べた清水敏一は著書「大雪山文献書誌　第 4 巻」で約 150 編に上ると紹介している。

732　牙王（少年マガジン収録）

石川球太／講談社
1965 ～ 1966 ／ 726 －イ

戸川幸夫原作の「牙王物語」を漫画化し、「週刊少年マガジン」誌上で 1965 年 5 月 9 日号から連載開始、1966 年 3 月 27 日号で完結を迎えた。狼犬「キバ」が広大な大雪山を駆け巡り、凶暴なヒグマ「片目のゴン」と対決していくストーリーで、野生の「キバ」が唯一慕っている東川村の牧場主の娘、早苗が荒れ狂う洞爺丸台風の天人峡温泉で悲劇を迎える。

733　グラフ旭川

渡辺真知子／グラフ旭川
1979 ～／ 050 －グ

旭川の月刊誌。大雪と石狩の自然を守る会代表、寺島一男が「北の自然・人」を長期連載中。

734　Coyote　№ 57

編　新井敏記／スイッチ・パブリッシング
2015 ／ 290 －コ

2015 年 11 月発行の 57 号に「自然を求めて　大雪山国立公園・旭岳、トムラウシ」が載った。文と写真は赤坂友昭。旭岳日帰りトレッキング、坂本直行に魅かれたトムラウシ山行、ネイチャーガイド・中川伸也に聞く大雪山の魅力、旭岳ビジターセンターや大雪旭岳源水公園の紹介など。

735　ザ・ラストフロンティア

スキージャーナル／スキージャーナル
2016 ／ 784 －ザ

月刊スキージャーナル 2016 年 1 月号の特別付録「The　Last　Frontier」に東川町で SEA（スポーツ国際交流員）として 2014 年から一年間活躍したノルウェー人、トリグバ・ベンディクセン・マルクセットが挑んだグランドトラバース（大縦走）を特集した。彼は 2015 年 4 月 28 日、十勝岳連峰から大雪山旭岳麓までスキーで踏破した。2 時 20 分十勝岳温泉から入って十勝岳、美瑛岳、オプタテシケ、トムラウシ、ヒサゴ沼、忠別岳を経て旭岳山頂を極めたのが 19 時、一気に下って旭岳温泉がゴール。67.7km、トータル標高差 5,300m の冬山を 17 時間で滑りきった。この記録は破られることはないだろう。スキー王国ノルウエーの若者が大雪山で伝説となった。

736　JR 北海道車内誌
THE JR Hokkaido　318 号

編　幅口堅二／北海道ジェイ・アール・エージェンシー
2014 ／ 051 －ジ

2014 年 8 月号に「神々の庭に遊んだ明治男子―大雪山探検時代と小泉秀雄」（筆者・北室かず子）の特集記事がある。今昔の写真も多く、大雪山探検史と小泉秀雄を紹介する。

737　週刊金曜日№ 382

黒川宣之／金曜日
1993 ／ 050 －シ

俵浩三が「なぜ建設に固執する？　日高横断道路」を 68 ～ 71 ページに書いている。

738　週刊・日本百名山　全 50 冊

編　郡司武／朝日新聞社
2001 ／ 291 －シ

写真と解説、案内、紀行でつづる百名山である。北海道は第 32 号「利尻岳・阿寒岳」、第 33 号「大雪山・トムラウシ・十勝岳」、第 34 号「斜里岳・羅臼岳」、第 35 号「後志羊蹄山・幌尻岳」がある。

739　SKI&SKI　報知グラフ別冊 '75 ①
編　黒田隆二／報知新聞社
1974 ／ 784 ース
巻頭グラビに「十勝－オプタテシケ・ビッグチャレンジツアー」が 17 ページにわたって組まれ、最初の折り畳み大判の一枚はオプタテシケ山斜面を一気に滑る前田光彦、斜面の光と影のコントラストが美しい。他に美瑛富士の夜明けの滑降、美瑛の岩峰の間を抜けるシーンなど感動的な大雪山山岳スキーで占めている。撮影は木村之与。望岳台にあった十勝岳銀座コースで行われた第 10 回サンフラワーズ・スキー大会が 5 ページを使って紹介され、名誉大会長、三笠宮寛仁殿下のスラローム連続写真もある。スキー場紹介では大雪山旭岳スキー場、大雪山黒岳スキー場など。

740　SKI 特集　報知グラフ '74 第 2 集
編　八巻明彦／報知新聞社
1973 ／ 784 ース
1970 年代がスキー全盛だったのではないかと思わせる特集号で、モデルのスキーヤーとカメラマンが組んだ写真を満載している。十勝岳滑降はプロスキーヤー、前田光彦（カムイスキーリンクス支配人）の鮮やかな滑りを写真家、大塚大がとらえた 4 枚。旭岳で行われた第 1 回プロスキー・トーナメントのカラー写真 6 枚もあり、写真説明は「大雪山をバックに開脚ビーバー」「空中散歩」など。

741　skier '75　別冊山と渓谷
編　菅井康司／山と渓谷社
1974 ／ 784 ース
特集「北海道－比布岳の粉雪を滑る」が 8 ページにわたって載った。プロスキーヤー、前田光彦と写真家、佐藤憲悦がピウケナイ川源頭に約 1 週間キャンプして晴天を待ち、厳冬の比布岳（2206m）を山頂から滑った。圧倒的な雪山の広がりの点景となってシュプールを刻む前田、バックカントリーと言う表現が無かった 40 年も前に大雪山を縦横に滑っていた。

742　大雪山系の詩人・作家群（『月刊道北』連載）
佐藤喜一／月刊道北
1982 ～ 1984 ／ 910 ーダ
稚内市を拠点にする月刊誌『月刊道北』に旭川の郷土史家、佐藤喜一が「大雪山系の詩人、作家群」というタイトルで詩人編を 7 編、作家編を 12 編に亘って昭和 56 年 9 月号から 19 回連載した。旭川で活躍した詩人、作家が大半を占めるもののタイトルを「大雪山系の…」としたところに著者の思い入れがうかがえる。詩人、鈴木政輝らが発刊した「大雪山系」と言う詩誌が創刊号のみで終わってしまったこと、あるいは、愛山渓温泉とその入り口に当たる愛別町安足間地区で戦後、目覚ましい文芸活動が起こったことに由来するのかもしれない。徳富蘆花、野口雨情、井上靖、三浦綾子ら良く知られた作家から埋もれた詩人まで丹念に拾い、120 余人を紹介している。大雪山を詩歌、小説の題材にした数多くの文学が詩人、作家群を通して読み取れる。

743　大雪山の自然と世界遺産
寺島一男／太陽
1984 ／ 450 ーテ
月刊クォリティ姉妹誌「うおんつ」vol.46 に掲載。大雪山を世界遺産へ登録しようという運動を継続している大雪と石狩の自然を守る会。なぜ世界遺産か、を書いている。

744　大雪山の父・小泉秀雄の生涯
清水敏一／『北海公論』6 月号
1983 ／ 289 ーコ
大雪山小泉岳に名を残す小泉秀雄の生涯と業績を略記した 1 編である。当時、健在であった秀雄夫人・ミサオの写真（東京都小金井市の小泉邸・二階の客間）も掲示する。

745　旅（'65 北海道特集）
編　矢吹勝二／日本交通公社
1965 ／ 291 ータ
日本交通公社（現 JTB）が編集、発行していた月刊誌で、通巻 39 巻めの 65 年 7 月号で北海道を特集した。作家、倉橋由美子の「はじめて見た層雲峡から阿寒への道」、旭川出身の二人の作家、木野工が「北海道のイメージを決定させた文学」、三浦綾子が「アイヌの娘の本当の気持」を寄稿している。編集後記に「アイヌにしても、もの珍しい気持ちで接する時代は終るべきで、三浦綾子氏に特にお願いして、アイヌの娘の気持を同性の立場から書いて頂いた」とある。

746　天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギスの行方（『北方林業』掲載）
新田紀敏／社団法人北方林業会
2006 ／ 650 －ホ
上川支庁林務課、新田紀敏が「天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギスの行方」を『北方林業』2006 年 12 月号に寄稿している。そもそもは、同誌表紙の写真と文を担当している鮫島惇一郎が 2005 年 11 月号に天人峡の柱状節理の写真を載せ、黄色い花を付けるハゴロモホトトギスは幻となってしまったのでしょうかと書いたことから、新田が地元にいる責任と感じて調査し直した。その結果、三十三曲がり登山道付近に 712 株、羽衣の滝へ向かう遊歩道付近に 148 株、羽衣橋上流左岸急斜面に 100 株以上を確認、「幻となっていなかったと結論したい」と結んでいる。

747　十勝岳硫黄山の噴火原因と現状
田中館秀三／東京地学協会　別刷
1926 ／ 453 －タ
田中館は『十勝岳爆発概報』（大雪山調査会）を発表しているが、同時期に『地学雑誌』にも寄稿している。10 ページの別刷で、6 月 24 日稿、7 月 3 日受理とある。同年 9 月号（451 号）に掲載された。

748　ナキウサギつうしん
ナキウサギふぁんくらぶ／ナキウサギふぁんくらぶ
1995 ～／ 489 －ナ
大雪山系などに棲息するナキウサギを絶滅の危機から守ろうと 1995 年、約 120 人の女性が「ふぁんくらぶ」を結成。物言えぬナキウサギのメッセンジャーとなって自然環境の保護を訴えていこうと会員誌を年 3 回発行。2014 年 10 月で 72 号となり、メッセンジャーは 3,000 人を超えた。ナキウサギの写真展の活動予定、ナキウサギの調査報告などを発信している。

749　日本岳連史
高橋定昌／出版科学総合研究所
1982 ／ 786 －タ
副題に「山岳集団 50 年の歩み」とある。大雪山関連のみ紹介する。1954 年 7 月、第 9 回北海道国民体育大会が開催され、登山部門は大雪山を会場とし、北海道山岳連盟と日本山岳会によって運営された。それとは別に全日本登山大会が全日本山岳連盟のみで運営され、第 2 回は 1958 年 3 月、十勝連峰で開催。第 6 回は 1962 年 2 月、ニペソツ山、ウペペサンケ山で開催、いずれもスキー、ピッケル、アイゼンを用いている。

750　日本百名山地図帳
山と渓谷社／山と渓谷社
2005 ／ 291 －ニ
山と渓谷社創立 75 周年記念に別冊（通巻 452 号）として発行された。大雪山、トムラウシ、十勝岳の登山地図に交通機関と所要時間を入れたアクセス情報、縦走のコースタイム、大雪山の地名に関するコラム記事など。「いで湯」に旭岳温泉をはじめ愛山渓、大雪高原、トムラウシ、十勝岳、幌加、然別峡菅野などが入っている。「皇太子さまが登られた山」「信仰の山と巡礼」など 30 のテーマ地図で日本の山岳事情がわかる一冊。

751　ヌプカ創刊号
編　佐藤圭樹／ウィルダネス
2000 ／ 050 －ヌ
「北海道発。おもしろ・不思議探究マガジン」の創刊で『大雪山　山旅へのいざない』を特集した。第 1 部、広さにおどろく。花に酔う。ベストシーズンのトレッキング紀行。第 2 部、大雪山ネイチャーガイド塩谷秀和へのインタビューと、今昔調べとして山々の名にみる歴史を辿って。

752　ハイカー
編　山と渓谷社／山と渓谷社
1967 ／ 786 －ハ
月刊雑誌『ハイカー』1967 年 7 月号は、「ワイド特集・北海道」を載せた。大雪山の記事も多く、グラビアに大雪山、羽衣の滝あり。大田正豁「大雪山縦断・勇駒別温泉～層雲峡」、一原有徳「高山植物の宝庫・トムラウシ山」、俵浩三「山と湖と岬」などがある。

753　ビスターリ　５号
ビスターリ編集部／山と渓谷社
1990 ／ 051 －ビ
ビスターリとはネパール語で「ゆっくり、ゆるやかに」という意味。中高年のための楽しくゆたかな山歩き季刊誌で、文・渡辺一枝、写真・梅沢俊「大雪山花紀行」が載った。『ビスターリ』は 1989 年に創刊、1995 年 27 号で休刊した。

754　ヒニスム　10
ヒニスム編集室／アクシス
2018 ／ 740 －ヒ
10 年ぶりに復刊したフォトアートマガジン。東川町大雪山アーカイブスが保管する小泉秀雄の「動物植物画帳」の中から 10 ページ（見開き）を選び掲載。小泉は一度使われた和紙に池の魚、鹿やイノシシ、野鳥、頭巾の美人画など思いつくままに描いて綴じ本にした。「しなやかな観察力なのか生まれつきの絵心なのか、小泉のまっすぐな筆」と紹介している。

755　faura
㈲ナチュラリー／㈲ナチュラリー
2003 ～／ 405 －フ
創刊号で編集長、大橋弘一が巻頭言として「北海道の自然を撮る写真家たちがそれぞれの自信作を提供し力を合わせて作る雑誌」「北海道の自然の姿をありのままに全国に紹介したい」と明記している。この季刊誌がとらえる 12 の要素は蟲、魚、禽、獣、草、木、苔、菌、山、水、風、月で、科学的な概念よりも博物学的、文芸的な要素が強い観念的な分類になっている。創刊号から後藤昌美が「景・北海道」を続けており、厳寒の大雪山系（2 号）、紅葉・大雪（9 号）、雪の造形（14 号）、三国峠の秋（17 号）、残雪の大雪山系（19 号）、花の高層湿原（20 号）、トムラウシ 7 月（28 号）、旭岳・冬（30 号）、「紅葉最前線」大雪・銀泉台（33 号）と続く。層雲峡に大雪山写真ミュージアムがオープンした際に、市根井孝悦の大雪山・春夏編（35 号）、秋冬編（37 号）を掲載した。大雪山麓の町・東川町にカワイイ系動物を見られるキトウシ森林公園があると紹介（45 号）。写真家が 12 の要素の自然について自信作を毎号出しているので、渓流や滝、高山植物、鳥、雲海などさまざまな写真の中に大雪山で撮ったものが数多く入っている。

756　雑誌『風土』創刊号
編　伊藤徹秀／北創社
1967 ／ 051 －フ
登山、旅、自然賛歌を謳歌する雑誌。編者・伊藤自身も登山をするので、S 岳（札幌岳）登山記がある。主要スキー場の案内では十勝岳、富良野岳の山スキー、十勝岳マンモススキー場（白金温泉）を紹介している。編集後記に執筆者の紹介と、社員募集（編集部員、営業部員各々若干名）があるが、その後の発行状況は不明。

757　武侠世界増刊　山嶽踏破號
編　針重敬喜／武侠世界社
1922 ／ 786 －ブ
「武侠世界」は明治時代の冒険小説作家、押川春浪が創刊した登山、スポーツ、冒険の雑誌。山岳踏破の臨時増刊号には参謀本部測量技師、中島摧が「濃霧に襲はれた石狩岳の六日」を寄稿している。この石狩岳遭難記は「北海道第一の高峯と呼ばれる、原名『ヌタツクヌプリ』通称石狩岳と言うのを測量に赴いた時の事」と書いてあり、現在の石狩岳ではなく、旭岳の三角点測量の際の騒ぎで、隣の山の測量に入った技手ら三名が霧に 5 日間閉じ込められ、アイヌに助けられながら遭難死寸前に救助された話。

758　平原の手帖　13 号
編　千葉章仁／平原書房
1983 ／ 051 －ヘ
特集「十勝の伝説」に大雪山や然別などにまつわる伝説の数編を寄せている。編者は登山愛好家で、編集追録にトムラウシ山とウペペサンケ山に登ったことをコメントしている。

759　北海道の山
清水一行／清水孔版印刷所
1959 ～ 1962 ／ 051 －ホ
北海道初の商業的山岳雑誌であったが 16 号をもって廃刊となる。その間、発行所はたびたび名称変更されているが、いずれも同じなので第 1 号の名称とした。全号の大半にわたって大雪山系の記事がある。4 号は特集「中央高地」、9 号は特集「夏の中央高地案内」「一月の十勝岳遭難救助報告」がある。

760　北方風物　第一輯
編　更科源蔵／北日本社
1946 ～ 1947 ／ 051 －ホ
月刊随筆雑誌全 15 冊の合本。敗戦直後であり紙質も印刷もよくないが、挿画を配した瀟洒な雑誌である。執筆者は各界著名人が名を連ねる。北海道の宮部金吾、中谷宇吉郎、坂本直行、舘脇操らのほか、柳田国男、高村光太郎、牧野富太郎、斎藤茂吉、土井晩翠など多彩。登山家として知られる川田楨が大雪山に触れている。

761　POPEYE　第 38 巻第 2 号
編　木下孝浩／マガジンハウス
2013 ／ 051 ーポ
2013 年 2 月号の表紙に「シティボーイのためのスキー特集。ポートランド、旭岳、立山からスキーのたしなみまで」とある。この中で「スキーが楽しめる町。旭岳へつながる最後の町、東川町」を特集。カラー写真とイラスト、キャプションのような簡単明瞭な短文で人、味、アウトドア、アートなど東川町の魅力をつづっている。

762　名峰百景（決定版　自然の心）家庭画報編
編　今西錦司ら／世界文化社
1980 ／ 291 ーメ
世界文化社が家庭画報編の決定版シリーズとして出版した大型本（タテ約 36.5cm、ヨコ約 26cm、300 ページ）。大雪山国立公園の山のカラーグラフは前田真三、志賀芳彦らの写真を 13 枚使い、釧路の作家、更科源蔵が大雪山にまつわるアイヌ伝説を書き、札幌在住の日本山岳会会員、高澤光雄が北海道の山を解説している。全国の名峰を紹介する名鑑。

763　モーリー　№ 27　大雪山に氷河が懸かったら
財団法人北海道新聞野生生物基金／北海道新聞社事業局出版センター
2012 ／ 462 ーモ
№ 27 は、特集「大雪山に氷河が懸かったら」。モーリー編集長らの鼎談をはじめ、高山植物フォトストーリー、「大雪山のツガザクラ属」「高山昆虫の生い立ち」「大雪ロングトレイルへの想い」など。

764　山と渓谷　№ 527
編　原康夫／山と渓谷社
1981 ／ 786 ーヤ
1981 年 6 月号（通巻 527 号）で「いま北の山へ [大雪]」を 69 ページから 133 ページまで特集した。カラー写真と読み物で「愛山渓 - 黒岳 － 旭岳」「クワウンナイ川 - トムラウシ山 - 高根ヶ原」など 3 つの縦走コースを紹介しているほか、「データ・バンク [大雪]」で交通手段、山小屋、キャンプ地、撮影ポイントなど盛りだくさんの内容。旭川山岳会が 9 つのルートを紹介している。

765　山と渓谷　№ 709
編　山口章／山と渓谷社
1994 ／ 786 ーヤ
1994 年 8 月号（通巻 709 号）で特別企画「北の大地、大雪山国立公園 60 周年記念」が組まれた。高澤光雄の「写真で見る探検・登山・保護の歩み」、板垣亮平の「大雪山で『氷河時代の置手紙』を探し続ける丹治茂雄」など。

766　山と渓谷　総索引 1 － 379 号
能勢信二、丹羽素雄／山と渓谷社
1970 ／ 051 ーヤ
山岳専門誌「山と渓谷」の昭和 5 年創刊から 40 年を経た 379 号までの掲載総索引。「案内・記録・紀行」編は地域別になっていて「北海道地方」を見ると大雪山の登山、スキーなどの寄稿がひと目で分かる。他に「遭難」「連載記事」「随筆・その他」など 16 の項目別になっている。

767　山とスキー
加納一郎　ほか／山とスキーの会
不詳／ 786 ーヤ
「山とスキー」は北大スキー部のＯＢと部員が「札幌山とスキーの会」をつくり、月刊誌として 1921（大正 10）年に創刊した日本初の山岳雑誌。中野誠一、加納一郎、板倉勝宣、板橋敬一らが活躍、慶応大学山岳部の大島亮吉も数多く寄稿した。日本のスキー普及と冬季登山のけん引役を担った。9 年間で 100 号（昭和 5 年 8 月）を出して廃刊。その後「山と雪」と改題したが 10 号で終わった。高澤光雄（札幌在住）が「山とスキー」27 冊、「山と雪」6 冊を東川町に寄贈した。通巻揃いではないが、板橋敬一の「冬の十勝岳」（37 号）、旭岳の初スキー登山を記録した加納一郎の「北海道スキー登山史」（40 号）、伊藤秀五郎の「三月の黒岳登山小屋日記」（49 号）など。

768　山とスキー　第 2 年合本
編　赤松勲／山とスキーの会
1923 ／ 786 ーヤ
創刊から 2 年目を迎え、第 16 号から 26 号までの合本。立山連峰松尾峠で凍死した板倉勝宣の最期を同行者だった槇有恒が詳細に報告している。板倉は厳冬期の旭岳初登頂など大雪山とゆかりが深い登山家。

769　山の素描

編　山口透／秀岳荘

1962 ～ 1976 ／ 914 －ヤ

年３回の発行で通算 15 年、45 号をもって終刊した山の随筆誌。スポーツ用品店秀岳荘のＰＲ誌だが、宣伝らしいものはゼロ、1 号 12 ページ、執筆者は 4 ～ 5 人。条件は 1 人 1 編に限ること、道内の在住者は山と自然を、道外者は北海道の山と自然をテーマとすることであった。道内外の執筆者は延べ 185 人。大雪山関係の執筆作品は 28 編ある。

770　林業技術

鮫島惇一郎ほか／日本林業技術協会

1968 ～／ 650 －リ

日本林業技術協会は 1921 年に興林会として発足、90 年以上の歴史を経て現在は一般社団法人日本森林技術協会。森林を利活用する技術を主体にした月刊誌で、東川町が保管するのは 8 冊。鮫島惇一郎が寄稿した「夏の大雪山」（1968 年 8 月号）、同誌のコラム「山・森林・人」に鮫島が寄稿した「ユニ石狩越え」（1980 年 7 月号）、「十勝岳」（1981 年 1 月号）、「大雪山」（1981 年 10 月号）、ユニ石狩越えは恩師、舘脇操とコバコシャジンをめぐる回想など。旭川営林支局、中村博の「洞爺丸台風被害跡地の現況と今後の施業」（1980 年 10 月号）。

771　ワイルドビュー

編　井上功夫／双葉社

1978 ／ 786 －ワ

1977 年 12 月に創刊したアウトドア、アドベンチャーの隔月雑誌だが、4 冊めとなった翌年 6 月号で休刊、短命に終わった。最終号を飾ったのが「豪華カラー大特集・大雪山連峰」。巻頭に大雪山自然観察ルート詳細地図があり、「ヒグマ行動経路、要注意」「シマリス多し」「この一帯、両側お花畑」、あるいは高山チョウを種類別に観察できるポイントを書き入れ、エリアを点線で囲んで示している。グラビアは夏の旭岳など。読み物は小田島護、木村盛武のヒグマ、渡辺康之のウスバキチョウ、岡田武稔の幻の白い花のオヤマノエンドウなど。

772　月刊　わが北海道　３－８

編　河原昌春／東京文化センター北海道 PR センター

1973 ／ 051 －ワ

３－８は第３巻第８号の意。本号で旭川を特集、「鬼気迫る大雪の自然―縦貫道路予定のコース登破記―」が写真と地図を含めて 9 ページの大きな記述がある。他に旧旭川中学 OB の座談会に層雲峡や大雪山の話題がある。「激動の五年―旭中の思い出」（木野工）もあるが大雪山に触れていない。

８－３ 部会報

773　アイヌ語地名研究　16

アイヌ語地名研究会／アイヌ語地名研究会

2013 ／ 291 －ア

秋山秀俊が「東大雪山系のアイヌ語地名、特に東大雪を中心にして」を寄稿している。

774　ある高校山岳部小史

編　福島正秋／福島律子

1999 ／ 786 －ア

ある高校とは、岩見沢西高等学校のことで、教諭の福島正秋は山岳部顧問として指導し登山にも引率した。福島は 1950 年から 81 年までの山岳部の活動について部報をもとに編集、自費出版しようとしていたが 81 歳で急逝。山岳部 OB（土佐功）たちが引き継いで出版した。坂本直行「春の十勝岳」の絵が表紙を飾る。大雪山系の登山記録や写真も満載である。福島の名は『北大山岳部々報』5 号、6 号に見える。

775　アルピニスト　第８号

編　岡本陸人／あかね書房

1969 ／ 051 －ア

あかね書房は一時期、山岳図書を盛んに出版した。「アルピニスト」は同書房の PR 誌であり、第 8 号で大島亮吉を特集、加納一郎が「大島と板倉」という小文を書いている。加納は『山とスキー』を編集、大島、板倉ともによく送稿してくれた。この二人が申しあわせたように、立山の雪、穂高の岩に遭難、相ついで早逝したことは、かえすがえすも、くちおしいかぎり…と追懐する。加納、大島、板倉ともに北海道ゆかりの登山家である。あかね書房は『大島亮吉全集』全 5 巻を発行している。

776　生きる　1988 年 1 月号
㈱ホツマ／安田火災海上保険㈱
1998 ／ 051 －イ
安田火災の PR 誌（20cm、27cm）全グラビア紙カラー写真 72 ページの豪華版。特集が【山】だけに全ページ山一色、取り上げた山もテーマも執筆者も実に多彩で、エベレストもあれば、マッターホルン、アンデス、富士山、槍ヶ岳もある。文・玉手英夫、写真・岩合光昭の「ケモノだって平地に住みたいんだ」は、ナキウサギもウスバキチョウもダイセツタカネヒカゲも、氷河期が過ぎてからの気候の温暖化に伴い、いきどころを失って、大雪山のような寒冷な高山地帯に生き残ったのであり、日本アルプスのライチョウも同じく氷河時代の生き残りであるという。

777　薄雪草　創立 10 周年記念
編　高澤光雄ほか／札幌山の会
1978 ／ 786 －ウ
札幌山の会は 1968 年創立、記念登山は富良野岳であった。10 年の歩みのなかで、会の山行、個人山行、エッセイを含めて、大雪山、十勝連峰の記録が多い。

778　薄雪草Ⅱ　創立 20 周年記念
編　秋元筇男ほか／札幌山の会
1988 ／ 786 －ウ
記念誌の構成は 10 周年記念誌に従ったとある。社会人山岳会記念誌としては珍しい箱入り本。大雪山ではバリエーションルートを含む 10 コースからの集中登山。ニセイカウシュッペ、8 ルートよりの集中登山、そのほか個人山行、エッセイに大雪山の記録がある。海外登山の記録もある。

779　えぞ　1
編　渡辺文仁ほか／えぞ山岳会
1969 ／ 786 －エ
えぞ山岳会（札幌）は 1962 年創立。本書は 1962 ～ 1964 年の活動実績をまとめたグラビア写真入り、タイプ印刷の創刊年報である。記録集に旭岳、クワウンナイ沢、ニペソツ山の報告あり。山行録に大雪山系の登山が多くみられる。発行の遅れは原稿の集まらないこと、校正に煩わされること、休日は山へ行きたいことなどが理由である。

780　えぞ山岳会三十周年記念誌
編　今村朋信ほか／えぞ山岳会
1993 ／ 786 －エ
時代の進化とともに会報も変化する。海外登山の記録も増した。マッターホルン北壁もあれば大雪山花見山行もある。山岳写真、山のスケッチもある。30 年の歴史のなかには病死、遭難死も 14 人を数える。立派な会報だが今後は、社会人山岳会としては作成が難しい時代になった。

781　大町桂月翁を想う（『寒帯林』掲載）
塩谷忠／旭川営林局
1951 － 1952 ／ 289 －オ
塩谷は大町桂月を塩谷温泉（現・層雲峡温泉）に勧誘し、層雲峡探勝の後、桂月らと共に黒岳沢を遡行して黒岳に登った。桂月一行は山頂で塩谷と別れ、さらに旭岳まで縦走した。塩谷はこの初めての大雪山縦走を成功させた立役者である。それだけに桂月への追慕の念はひとしおのものがあり、旭川営林局発行の機関誌『寒帯林』に寄稿、14 回にわたって桂月翁の縦走経緯と思いを連綿とつづる。ほかに「故大町桂月先生の霊に告ぐ」（1954 年）もある。

782　帯広畜産大学　山岳部　部報第 2 号
門崎充昭ら編集委員／帯広畜産大学山岳部
1963 ／ 786 －オ
合宿の記録、60 年春・石狩岳、61 年冬・十勝岳、62 年春・石狩岳、62 年冬・大雪山など。

783　開校五十年史　北海道旭川東高等学校
編　記念事業協賛会／北海道旭川東高等学校
1955 ／ 376 －ホ
大雪山を望む同校の歴史は大雪山とともにある。1911 年（明治 44 年）東宮殿下（のちの大正天皇）行啓時に、小泉秀雄教諭が同年旭岳で採取した高山植物の腊葉 10 数枚を展示したこと。1913 年、小泉秀雄の主唱で中庭に学校植物園を設置、大雪山と石狩川を表徴する花壇、有毒植物、繊維植物、食用植物、園芸植物、高山植物などを植え付けた。1922 年、摂政宮（のちの昭和天皇）台臨時には、高山植物、小泉制作の大雪山模型を出品したこと。この大雪山模型は、その前の 1918 年、北海道大博覧会に出品、銀杯（2 等賞）を得たものである。そのほか大雪

山探検登山、山岳部の活動など、大雪山に関わる記事は多い。

784　会誌　Bulletin　1 ～ 20
北海道自然保護協会／北海道自然保護協会
1966 ～／ 519 －ブ
北海道自然保護協会の会誌。創刊号巻頭は東条猛猪の「自然保護」、氏は北海道拓殖銀行の頭取を長く勤め、同協会発足当初の代表だった。会報が会員の連絡を目的にしているのに対し会誌はまとまった論説や報告文の掲載を目的にしている。俵浩三が東川町に全号を寄贈した。

785　会報　創立二〇周年記念特別号
編　安田成男／札幌山岳会
1973 ／ 786 －サ
札幌山岳会は先鋭的な登山活動を続けてきた。本書は 6 部構成で 20 年の足跡をたどった記録である。なかでも 1967 年のマッキンリーは、道内初の社会人山岳会による海外遠征であり、詳細な報告がある。中央高地、大雪山系の登山も多く収録されている。『山と渓谷』誌会報賞を受賞。

786　会報「NC」　1 ～ 44
北海道自然保護協会／北海道自然保護協会
1965 ～／ 519 －エ
北海道自然保護協会は昭和 39 年 12 月 1 日、発起人会及び設立総会を開き、発足した。会報は昭和 40 年 5 月から発行。58 年 9 月発行の 44 号まで全号を俵浩三が東川町に寄贈した。

787　会報「NC」自然・環境・人　45 ～ 90
北海道自然保護協会／北海道自然保護協会
1984 ～／ 520 －エ
会報の題字、表紙、体裁をがらりと変えた。俵浩三が東川町に全号、まとめて寄贈した。

788　学友会雑誌　第 1 号
編　上川中学校学友会／上川中学校学友会
1907 ／ 376 －ガ
中に 2 編の大雪山旭岳の登山があり第 5 学年・小林安序が「山と水」、第 4 学年・新里文八郎が「大雪山探険旅行記」を書いた。1907 年 7 月の登山であり、大雪山初期の登山や学校登山の史料としても評価されている。

789　学友会雑誌　第 13 号
編　旭川中学校学友会／旭川中学校学友会
1918 ／ 376 －ガ
特別会員、小泉秀雄が 「我が旭中の大雪山」を寄稿した号として知られている。小泉が大雪山調査研究概要を記述しており、表現は学術論文的である。参考文献として『山岳』に寄稿した「北海道中央高地の地学的研究」などの自著を挙げている。

790　上川町の自然　第 20 集
上川町自然科学研究会会員／上川町自然科学研究会
2008 ／ 462 －カ
成田新太郎を中心にした上川町自然科学研究会が発行してきた会誌。第 20 集で一区切りとし、保田信紀の「成田先生を偲んで」など追悼記、第 11 号以降の総目次など。

791　カムイミンタラ　VOL.31
編集長　細川広子／大雪と石狩の自然を守る会
2012 ／ 405 －カ
「大雪と石狩の自然を守る会」の創立 40 周年記念特集号「大雪山と石狩川と」。俵浩三、鮫島惇一郎らゲスト 18 人のメッセージ、活動年表、主催している講座「ひぐま大学」の報告など。

792　カムイミンタラ　創立 20 周年記念号
大雪と石狩の自然を守る会／大雪と石狩の自然を守る会
1994 ／ 450 －カ
会の創立 20 周年として 12 号、13 号合併号を発行。第 I 部ひぐま大学紀要、第 II 部守る会のあゆみ。

793　北の岳友とともに　北海道山岳連盟 60 周年記念誌
編集委員長　神山健／北海道山岳連盟
2012 ／ 786 －キ
連盟の専門委員会（指導、普及、自然保護、遭難対策など）の活動軌跡、加盟する各地の山岳会から「一会一山…思い入れの山」として寄稿を募り、編集した。

794　北の自然　合本№.41 ～№.61

北海道自然保護連合／北海道自然保護連合

2018 ／ 519 －キ

北海道自然保護連合通信の 1989 年 7 月発行№.41 から 1999 年 2 月発行№.61 までの合本。大雪山国立公園のオーバーユースと「うんこ」問題、士幌高原道路建設反対「大雪山のナキウサギ裁判」など。

795　北の自然　合本№.62 ～№.78

北海道自然保護連合／北海道自然保護連合

2018 ／ 519 －キ

北海道自然保護連合通信の 1999 年 8 月発行№.62 から 2007 年 2 月発行№.78 までの合本。特集「士幌高原道路中止」、大雪山国立公園など山のトイレ問題、大規模林道など。

796　北の峰々とともに
道岳連 50 年のあゆみ

編集委員長　阿地政美／北海道山岳連盟

2002 ／ 786 －キ

1952 年創立の北海道山岳連盟の半世紀を迎えた記念誌。巻末に連盟年表、歴代役員、各地区の山岳会、指導員の一覧がある。1954 年に国体（登山部門）が大雪山で開催されたなどの歴史に加えて、加盟する各地区の活動を寄稿で紹介している。

797　記念―創立拾五年

編　大野精七／北海道帝国大学文武会スキー部

1926 ／ 784 －キ

北大スキー部は 1911（明治 45）年創立、日本のスキーの最先端を歩んできた。記念誌は、日本のスキー黎明期の歴史的記録でもある。海外文献の訳文、英独仏スイスなど海外スキー専門家の寄稿も多い。当時のスキーは滑走用具である一方、登山用具でもあり、いうならば滑走派と登山派が混在していた。本書発行と同時に北大山岳部の創立となり、登山派とスキー派の訣別記念誌となった。「オプタケシケ山脈よりトムラウシ山彙へ」（山口健児）は、1926 年 5 月 17 日から 21 日まで、十勝岳からトムラウシ山へ、ゾンメルシー（夏スキー）、アイゼンなどで縦走、松山温泉に下山した。十勝岳大噴火（5 月 25 日、死者 144 人）直前の登山である。大雪山関係は他に 1912 年 1 月、板倉、加納らのユコマンベツから旭岳登山、同年 3 月、層雲峡からの黒岳登山はスキーを用いた積雪期初登山。

798　京都山岳　六十周年記念号

編　京都山岳会／京都山岳会

1985 ／ 786 －キ

松浦勇次「登渉跡誌」に山歴 50 余年の登山一覧表があり、1979 年に松浦岳、北海岳、小泉岳、北鎮岳、中岳、間宮岳、旭岳、荒井岳、松田岳、北海岳、黒岳を 2 泊 3 日で縦走した。同年、300 山を記念して伊勢の有地山にも登頂。山名はアルジヤマだが「渓々斎」の号を持つ書家でもある松浦は、無理にユウジサンと読むことにしたという凝りようである。ほかに「北の山と人と」（清水敏一）があり、大雪山にある人名のつく山について、その人物の略歴と業績を紹介している。小泉秀雄（小泉岳）については、生没年その他調査中とある。

799　熊笹　11 号

編　井内俊之／札幌西高山岳部

1969 ／ 051 －ク

札幌西高の前身は札幌二中であり、部報『ヌタツク』があるが、部報名を『熊笹』に変えて、手作り感あふれるささやかな部報にした。寸法はタテ 20cm、ヨコ 18cm の変形袋とじ。部員が手分けをしてガリ切り、謄写印刷である。写真そのものを貼付しているのが微笑ましい。『東大雪遠征報告』は十勝三股から石狩岳、五色ヶ原、忠別岳、高原温泉の 4 日コース、部員 7 人、教諭 2 人同行。大雪山へ挑むのは当時としては遠征であり、OB 会員の住所、大学、勤務先まで明記しているところにも時代がうかがえる。

800　熊笹　12 号

編　富田祐志／札幌西高山岳部

1970 ／ 051 －ク

前 11 号と同じ作りだが寸法はタテ 19cm ヨコ 18cm。奥付に札西山岳部所属印刷所、山岳部著作権問題審議会などの遊び心が見られる。部員 7 人に教諭 2 人が同行した「大雪山系遠征報告書」があり、天人峡クワウンナイからトムラウシ、白雲岳、黒岳、層雲峡のコースを 5 日間で縦走した。

801　熊笹　13 号

編　佐藤康幸／札幌西高山岳部

1971 ／ 051 －ク

寸法はタテ 18cm、ヨコ 18cm の正方形

である。チョウノスケソウの着色スケッチ画が入っている。「華麗なる大雪遠征」はトムラウシ温泉からトムラウシ、忠別岳、高原温泉に下山、部員3人、教諭1人という少ない山行であった。なお『熊笹』は1953年に創刊。山岳部は現在も活動している。

802　群落　旭川西高等学校生物部創部60周年記念誌

編　旭川生物同好会／旭川生物同好会
2010／376－グ

旭川西高生物部60年の活動をまとめたもので、写真も多く活発な行動実績が一望できる。第1期1950年の調査地は大雪山黒岳、「高度・気圧が人体に及ぼす影響（高山病の研究）」であった。それには層雲峡日赤分院の医師・大山正信が江口健二ら部員とともに登山、検査実験をしている。調査地は大雪山のほか、全道各地に及び、その成果によって数々の表彰を受けている。

803　慶応義塾山岳会北海道旅行（大登会叢書第3号）

上野三郎／大登会
1975／786－ケ

大登会は慶大山岳部OBで結成している。上野らの北海道旅行は1919年8月、羊蹄山、雌阿寒岳、大雪山に登頂した。「大雪火山群登行」の1編に詳しい。案内役は成田嘉助。最高峰北鎮岳、近藤岳などの記述が見られる。大島亮吉らのトムラウシ、石狩岳登頂がその翌年であることを思うと、慶大山岳部としては初の北海道行と思われる。

804　國立公園　通巻729号

編　熊谷洋一／自然公園財団
2014／629－コ

国立公園80周年記念特集Ⅱで、東川町駐在初代レンジャー、二橋愛次郎が「大雪山国立公園『カムイミンタラ』と呼ばれる地」を寄稿した。二橋が駐在したのは昭和47年から52年で、大雪山縦貫道が論議を呼び、環境庁長官が着工に「待った」をかけた。ごみ持ち帰りから「クリーン大雪運運動」も始まった。トイレ問題と登山道の荒廃への対応にもふれ、永遠のカムイミンタラ（神々の庭＝天上の神苑）であるように、と願っている。

805　山岳　第十二年第一號

編　高頭　仁兵衛／日本山岳會事務所
1918／786－サ

大正7年新春に発行された。「高山植物の研究」など12編。

806　山書趣味（1～10巻）

編　高澤光雄／金沢山岳文庫
1997／291－サ

「日本山書の会」の道内会員が地区報として1992年に創刊した。第3号で大雪山特集を組み、編著者の高澤光雄が巻頭に「大雪山の魅力」を書き、「大雪山文献書誌」の著者、清水敏一が「大雪山あれこれ」、斉藤俊夫が「北の話」に掲載された大雪山関係の寄稿を詳細に書いている。10巻を発行した段階で合本を、箱入りで限定50部つくった。

807　樹海の中の赤い屋根

編　白樺荘同窓会事務局／白樺荘同窓会事務局
1998／786－ジ

「1997白樺荘同窓会記念誌」の副題が付けられている。1997年7月、旭岳温泉の白樺荘で開催された大雪山愛好家たちの集い（ミニコンサート、宴会、旭岳登山など）の記録。大雪山を通じた長年にわたる山仲間たちの強い思いが伝わってくる。

808　聳嶺　第五号

編　坂井久光／一等三角点研究会
1978／786－シ

一等三角点研究会の会報で年1回発行する。会員の三角点登山記が中心で巻末に「会員登頂一等三角点一覧表」があり、旭岳、トムラウシの記録がある。他に同会顧問・今西錦司の日本1000山登頂を祝う記事など。

809　聳嶺　第九号

編　坂井久光／一等三角点研究会
1982／786－シ

清水敏一著『大雪山わが山　小泉秀雄』（阿部恒夫）を紹介する記事があるほか、同会副会長・松浦勇次が古希を記念して登った自分の姓の山、大雪山松浦岳（緑岳）の紹介文がある。

810　**聳嶺　第十号**

編　坂井久光／一等三角点研究会
1983 ／ 786 ーシ

創立十周年の特輯号で、「トムラウシ山」（菊田貞明）、「北海道の一等三角点巡峰」（坂井久光）がある。坂井は音江山、和寒山、天塩岳、富良野岳に登頂した。

811　**創立五十周年記念誌**

旭川山岳会創立五十周年記念事業実行委員会／旭川山岳会
1985 ／ 786 ーア

本書は全編大雪山の記録といっても過言ではない。大雪山登山紀行のほか「大雪山小史」「大雪山登山行程表（折り込み）」もある。速水潔を会長とする同会は、登山大会の運営、遭難対策、自然保護対策など、公的な事業も多い。本書でも旭川市長を含む、道内外組織団体の長が祝辞を述べており、半ば公的な出版物でもある。

812　**大規模林道の「中止」に寄せて**

俵　浩三／北海道自然保護協会
2011 ／ 520 ータ

道路の見直しを求めた自然保護運動の半世紀。北海道自然保護協会の「北海道の自然」第 49 号別冊。

813　**大雪山概観**

犬飼哲夫／日本生物地理学会　別刷
1935 ／ 462 ーダ

大雪山の地形・地質、気候、交通・施設、探検史、生物相など、写真、図表を用いて概略を記述する小冊子である。大雪山上で発見された石器の写真もある。

814　**大雪山の自然をまもろう　№1**

〝大雪の自然を守る会〟準備会／〝大雪の自然を守る会〟準備会
1971 ／ 519 ーダ

道道忠別清水線（大雪山縦貫道路）建設計画が持ち上がったことから「みんなの力で縦貫道路建設を阻みましょう」「大雪山の自然をまもるために立ちあがりましょう」と 1971 年 8 月、準備会が発足、11 月には二つ折り 8 ページのパンフレットを発行した。世話人は主婦、学生、公務員、商店主、会社員ら 8 人、協力者として伊藤秀五郎、坂本直行、鮫島惇一郎、辻井達一、橋本誠二が名を連ね、伊藤は「山に就て」を寄稿、坂本は山のスケッチ画を描き、それぞれ表紙を飾った。「大雪山は北海道の自然の象徴ともいえる存在であり、大雪山がまもられるかどうかは、今後、北海道だけでなく広く日本の自然保護全体に、大きな影響を与える」と編集後記にある。

815　**大雪山の自然をまもろう　№2 ～№4**

大雪の自然を守る会／大雪の自然を守る会
1972 ／ 519 ーダ

表紙のタイトル、構成は 1 号と同じで、伊藤秀五郎の寄稿、坂本直行のスケッチ。活動報告は「昭和 46 年 11 月 28 日、地元町長（新得、東川、美瑛）と会の代表がテレビ討論」「47 年 5 月 20 日、東川町へ道路建設反対の要望書提出、話し合い」など反対運動を記録。現地調査から審議会の経過、旭川や十勝に大雪の自然を守る会が結成されていくなどの報告も。3、4 号は 1973 年の発行。

816　**大雪山への誘い**

編　高澤光雄／山と森の散歩道実行委員会　代表　新妻徹
1997 ／ 291 ータ

「大雪山への誘い　山の愉しみと地図・登山情報展」が 1997 年 4 月 12 日～ 18 日、丸善・札幌南一条店で開催されたときの記念冊子。清水敏一「大雪山をめぐる人々」、高澤光雄「大雪山探検・登山・保護への歩み」、速水潔「大雪山、名称の変遷」、斎藤俊夫「『北の話』に書かれた大雪山」など、24 ページに情報が詰まっている。

817　**Dynamic Daisetsu.**

大雪山・山守隊／大雪山・山守隊
2018 ／ 786 ーダ

大雪山・山守隊の活動や登山道に関する情報誌で、創刊年の 2018 年は 3 号まで発行した。表紙写真は 1 号が復旧の下見で原始ケ原滝コースの渡渉、2 号が「たまには山に恩返し in 黒岳」の際に崩れ落ちそうになっていた植物を数人がかりで運ぶ移植作業、3 号はピウケナイ沢でチェーンブロックを使って飛び石設置作業。大雪山の登山道修復作業を多くの写真で紹介している半面、大雪山の荒れ方、すさまじい崩壊の現実までもが生々しく伝わってくる。

818　翼の王国　通巻 511 号
翼の王国編集部／ ANA
2012 ／ 051 ーツ
ANA（全日本空輸）の機内誌。2012 年 1 月号で「天から送られた手紙　～雪に魅せられた人」を特集した。表題の人は雪博士・中谷宇吉郎のことで、雪の結晶などを研究した吹上温泉や旭岳温泉での博士のエピソード、現在の大雪山山岳スキーの醍醐味を 30 ページに亘って紹介している。

819　日本山岳會　會報（一～一〇〇）復刻版
日本山岳會／日本山岳會
1975 ／ 786 ーニ
昭和 5 年 10 月発行の日本山岳会会報 1 号から同 15 年 12 月の 100 号までの復刻版。昭和初期の山の会報だけに大雪山の記述は少ない。「北海道より」「北海道の山」「北海道の旅」などの会員通信に直井温泉（現愛山峡温泉）や厳冬期の旭岳登山など簡単な報告がある。

820　日本山岳会北海道支部 50 年のあゆみ
編　長谷川雄介／日本山岳会北海道支部
2015 ／ 786 ーニ
北海道支部は 1949 年 3 月に創立されたが事情があって活動を停止したままブランクが続き、1969 年 7 月に活動を再開、それから 50 年を迎えた記念誌。巻頭に写真家、水越武の「厳冬の旭岳」と寄稿「大雪山に寄せて」があり、50 年のあゆみ、事業のあゆみ、自然保護の取り組み、遭難事故と対策、年表などで構成している。保田信紀「大雪山の高山蝶」、編集委員会「上ホロカメットク山雪崩遭難事故」など。

821　日本山岳機関誌　山岳復刻版　第 1 年～第 10 年
日本山岳会／アテネ書房
2001 ／ 786 ーサ
「山岳」の第 1 年から第 10 年まで、箱入り保存版で復刻された。日本山岳会が結成された明治 39 年を第 1 年として、機関誌「山岳」は年間 1 号、2 号、3 号まで発行された。第 4 年第 3 号（明治 42 年 11 月）に上川中学校の北海道大雪山登攀記（小樽新聞）が載った。第 8 年第 1 号（大正 2 年 4 月）に大平晟の「ヌタプカムシュペ山」が載った。当時の東川村から旭岳への登山記で、村の様子が興味深く書かれている。第 11 年第 3 号（大正 6 年 9 月）に小泉秀雄が「大雪山登山記」を書いている。

822　山岳　総目次（創刊号～第 1 号～第 33 号）
アテネ書房編集部／アテネ書房
2001 ／ 786 ーサ
日本山岳会の機関誌「山岳」の創刊（1906 年）から 1916 年までの第 1 期全 11 巻の総目録。

823　日本の高山蝶について
塚本珪一／『平安高校』紀要 21 号
1977 ／ 486 ーツ
―その文献について―の副題がある通り、各種の資料から高山蝶の文献を紹介している。北海道の高山蝶については、なかでも河野広道「大雪山の蝶類」が詳しいとあり、他に小泉秀雄、犬飼哲男、松村松年、江崎悌三、内田登一、河野齢蔵らの名が見える。1950 年、白畑孝太郎「北海道大雪山の珍蝶発見」という当時の新聞記事（『新昆虫』3 ― 12）も文献として紹介している。

824　ヌタツク　1 号
編　大戸昌雄／札幌第二中学山岳旅行部
1929 ／ 051 ーヌ
誌名は大雪山ヌタクカムウシュペから命名された。活版印刷のフランス装、写真、図版も多く、内容も充実、中学校（現・高校）の水準をはるかに超える立派な部報である。これには現役部員よりも、坂本直行ら OB たちの主導によるものである。札幌周辺の山のほか、誌名の通り大雪山系の登山記録も多い。北アルプスの縦走記もある。

825　ヌタツク　2 号
編　吉村重文／札幌第二中学山岳旅行部
1930 ／ 051 ーヌ
創刊号の好評を得て、さらに分厚い第 2 号を発行した。大学山岳部報レベルの会報である。登山も高度化し大雪山系の記録もあるが、積雪期の登山、沢登り、南アルプス、台湾の山もある。惜しくも 2 号で廃刊してしまったが、あまりに立派過ぎて、あとが続かなかったと見るべきだろう。

826　ヌタック　（第２次）１～６号
ヌタック会／ヌタック会
1935 ～ 1938 ／ 051 －ヌ
ヌタック会は札幌第二中学山岳旅行部現役会員と OB 会員によって組織する。「会報」という名称で、タブロイド判８～16 ページの小冊、4 年間にわたって断続的に発行された。大雪山の記録は少ない。

827　ヌタプカムシペ
大雪と石狩の自然を守る会／大雪と石狩の自然を守る会
1982 ～ 2009 ／ 519 －ヌ
収録誌第 1 集、第 2 集、第 3 集、第 4 集。守る会が定期的に発行してきたニュースの収録版。

828　ヌプリ　創刊号
編　竹内武夫／北海道山岳会
1924 ／ 786 －ヌ
北海道山岳会は官公庁の主導で 1923 年に設立され、登山会開催、登山道開削、石室設置などに取り組んだ。結成翌年の 1 月 1 日に「ヌプリ」が創刊され、「北海道の山の雑誌として、寛濶（かんかつ：おおらかなさま）な、そして地方色を含めた字句を求めた末に得たのがこのヌプリである」とヌプリの弁がある。「霊峰十勝岳登山」の写真記、「北海道上川支部踏破の大雪山」の写真 2 枚には、旭岳の噴煙と姿見の池、旭岳絶頂の登山隊員が写っている。

829　ヌプリ　十勝岳爆發號
編　竹内武夫／北海道山岳会
1926 ／ 369 －ヌ
４号は大正 15 年 6 月の十勝岳噴火後の 7 月に、稀有の惨事を広く伝えることが山岳会の役目として発行されたので、十勝岳爆発特集となった。写真も爆発、泥流、流木処理、線路付近の惨状、寄稿もすべて十勝岳爆発関係。

830　ヌプリ　北海道山岳紀行号
編　竹内武夫／北海道山岳会
1926 ／ 786 －ヌ
３号は黒岳石室前の夏期大学会員記念写真、冬の大雪山。夏期大学を機に大雪山へ（西部生）の寄稿など。

831　ヌプリ　北海道山岳写真号
編　竹内武夫／北海道山岳会
1924 ／ 786 －ヌ
ヌプリはアイヌ語の山の意。第 2 号で大雪山などの写真を特集。懸賞当選写真、大雪山の歌、夏期大学の寄稿など。

832　ヌプンケシ
田丸誠／北見市市史編さん室
2012 ／ 304 －ヌ
ヌプンケシは北見市の市史編さん室が歴史の広報として定期的に発行、ネットでも読むことが出来るようにした。2012 年 11 月 15 日発行号から 2013 年 4 月 30 日発行まで 15 回、『大町桂月の北海道旅行』を特集連載。大町桂月の略歴、桂月が与謝野晶子の詩「君死にたまふこと勿れ」を非難したこと、大雪山の登山記など興味深く連載した。

833　のぼるべ　創刊号
編　堀井克之ほか／酪農学園大学体育会山岳部
1970 ／ 051 －ノ
1967 年 1 月、十勝美瑛岳ポンピエイ沢を登山中、雪崩により 4 人が遭難死。詳しい報告と追悼文がある。大学山岳部らしく、研究、論壇、運営の章もある。山行には大雪山系の記録も多い。

834　ひぐま通信
北大ヒグマ研究グループ／北大ヒグマ研究グループ
1971 ／ 489 －ホ
北大ヒグマ研究グループは 1970 年春、北大農学部応用動物学教室の大学院生、学生 10 人で発足し、最初の調査地に大雪山五色ケ原、高根ケ原を選んで 7 月から 8 月にかけて入山した。1971 年 3 月、「ヒグマ通信」発刊の主旨めいたもの（B5 版 3 ページ）を出して 4 月、創刊号（B5 版 11 ページ）を発刊した。発刊に当たって「北海道においてはヒグマに多大の関心が持たれながらも、科学的な調査・研究はほとんどなされていない。研究する側の問題であり、指導官庁の怠慢でもあるとの認識から、まず我々がヒグマに取り組む姿勢をはっきり示し、知り得た事柄を公にすることによって、クマ研究の起爆剤になればと考えたからである」。初期の印刷は設計図コピーなどに重宝がられた青焼きで、1975 年ごろまで続き、その間、白雲岳周辺ヒグマ調査報告、大雪山系ヒグマ生態調査報告、大雪山夏グマ報告などが載る。1977 年代から B5 版、1994 年代から A4 版サイズで製本化された。

835　ヒグマ　gen.3
編　山本牧／ヒグマの会
2018／489－ヒ
1979年に設立したヒグマの会のニュースレター。主催するフォーラム記録や全国のクマ情報を掲載。のぼりべつクマ牧場が1975年に創刊した広報誌「ヒグマ」の題字（橋本宇外筆）を続けている。事務局がクマ牧場に置かれ、広報編集委員に会の役員が入り、実質的にヒグマの会報を兼ねていたためで、その後1997年にニュースレターは独立。第1世代をクマ牧場版（編集は前田菜穂子）、第2世代をコピー機での自主製作版、2018年からのカラー印刷版を第3世代（gen.3）とする。

836　部報　第２号
編　服部勝宗／日本製鋼所室蘭製作所、文化体育会山岳部
1976／786－二
大手企業の職域山岳部ならではの部報で、会社も社員の福利厚生上から部活動を奨励したようだ。北海道山岳連盟にも加盟している。部員名簿には生年月日、血液型、所属部署、住所、自宅電話番号もある。部報は1969年から1975年まで7年間の山行記録で、日高山脈の山、地元周辺の山が中心だが、大雪山系の山も見られる。

837　部報　第３号
編　服部勝宗／日本製鋼所室蘭製作所、文化体育会山岳部
1982／786－二
巻頭言は山岳部長だが、役職が品質監査室長とはいかにも職域山岳部らしい。写真概念図、ルート図も多く、内容も充実した分厚い部報である。1976年から1981年まで6年間の山行記録で、技術的に高度な登攀も多い。山域別に分けられ、大雪山の章があり、積雪期登山が中心である。夏の忠別川遡行では、水量が多くそれぞれ救命具をつけて泳いだとある。

838　部報　第４号
編　服部勝宗／日本製鋼所室蘭製作所、文化体育会山岳部
1995／786－二
これまでの縦書きから横書きに、和暦から西暦に、巻頭グラビアをカラー写真に、部報の体裁を変えた。1982年から1993年まで12年間の山行記録であり、大雪山の章では積雪期のバリエーションルートを中心に充実した山行が多い。「イランでの登山」は1年半の長期出張中、現地のイラン人たちと2千から4千m級の山々に登っている。

839　碧水　Vol.3
旭川勤労者山岳会創立10周年記念誌編集委員会／旭川勤労者山岳会
1979／786－ア
旭川勤労者山岳会の会報。10周年記念特別号には座談会「10年のゆみ」、10年の活動日誌、自然保護活動への取り組み、資料として山行一覧などを掲載、通称「労山」の活動が分かる一冊。会員らの随想、寄稿では大雪山の登山記が多い。

840　北大山岳部五十周年記念誌
編　朝比奈英三／北大山の会
1979／786－ホ
北大山岳部は1926年に創立。50年記念誌らしく回想記、座談会、各部報から代表的な登山記録の再掲、大雪山から日高へ、さらには海外の山へと続く登山の指向、随筆、年表などで構成されている。北大山岳部の歴史はすなわち北海道登山史でもあり、それを凝縮したような内容であり登山文献としても貴重。大雪山関連の記録も多く、「冬の石狩岳」（伊藤秀五郎、和辻広樹）、「一月の石狩連峯」（徳永正雄）、「忠別川溯行」（石橋恭一郎）、「大雪山十日の物語り」（矢野実）、「冬期十勝岳・大雪山縦走」（木崎甲子郎）などがある。

841　北大山岳部々報１
編　伊藤秀五郎／札幌市北海道帝國大學文武會山岳部
1928／786－ホ
北大山岳部は北海道の登山史に大きな役割を果たしている。1928年に部報1が発行されたときは発行所が北海道帝国大学文武會山岳部となっている。目次の次の地図が『北海道中央高地概略図』で、部員が挑戦したスキー登路、夏季登路を示している。和辻廣樹、伊藤秀五郎、坂本直行らそうそうたるメンバーが登山記を寄せている。

842　北大山岳部々報２
編　須藤宣之助／北海道帝国大学文武会山岳部
1929／786－ホ
大雪山関係は河合克己「石狩川を遡り

て音更川を下る」、山縣浩「十勝岳―十勝川―ニペソツ岳」、ほかに伊藤秀五郎、徳永芳雄らの記録がある。当時は人夫を雇って長期登山をしていた。

843　北大山岳部々報３
編　江楮三郎／北海道帝国大学文武会山岳部
1931 ／ 786 －ホ
佐藤友吉「五月のニペソツ山から松山温泉まで」は 11 日間に亘って人夫を雇い、スキー、テントの長期登山記。８月のニペソツ山からトムラウシ山も、10 日間の登山であった。ほかにも大雪山関係の登山記録は多い。

844　北大山岳部々報４
編　徳永正雄／北海道帝国大学文武会山岳部
1933 ／ 786 －ホ
巻頭に地図、写真、スケッチ入りの「積雪期の大雪山彙」（佐々保雄、村山林治郎）があり、大雪山登山の総決算的な論稿になっている。山岳部も夏山から残雪期、厳冬期へ、大雪山から周辺の未知の山へ、そして日高へと活動の場が移ってゆく過程にあった。ほかに積雪期のクマネシリ、ウペペサンケ、ニペソツ、武利岳の登山記録がある。

845　北大山岳部々報５
編　照井孝太郎／北海道帝国大学文武会山岳部
1935 ／ 786 －ホ
巻頭に「一月の石狩連峰」（徳永正雄）の登山記と考察がある。写真、概念図、天候・気温表を添付し、文末には登山史も記している。ほかに冬のトムラウシ、３月の石狩川がある。

846　北大山岳部々報６
編　葛西晴雄／北海道帝国大学文武会山岳部
1938 ／ 786 －ホ
石橋恭一郎「忠別川溯行」、中村粂夫「音更川溯行」がある。もはや日高の記録が圧倒的に多くなり、大雪山系登山開拓の終わりを思わせる。

847　北大山岳部々報７
編　橋本誠二／北海道帝国大学文武会山岳部
1941 ／ 786 －ホ
1938 年 12 月、上ホロカメットクで雪崩のため２名遭難、1940 年１月には日高で雪崩に遭い８名遭難の大惨事が続いた。そのため本号は遭難報告と追悼号のようになってしまった。通例の広告もいっさい掲載されていない。おりしも太平洋戦争直前であり、部報も戦中から戦後へ長い空白が始まる。

848　北大山岳部々報８
編　橋本正人／北海道大学体育会山岳部
1959 ／ 786 －ホ
冬の十勝岳、大雪山縦走（1951 年 12 月～ 1952 年１月）報告記など。

849　北大山岳部々報９号
三浦章司ら４編集委員／北海道大学体育会山岳部
1963 ／ 786 －ホ
北大山岳部は毎年 12 月に十勝岳合宿を続けていた。それに対する部員の疑問、不満を含めて論談、いわゆる十勝岳合宿について、など。

850　北大山岳部々報 12 号
部報 12 号編集委員会／北海道大学体育会山岳部
1985 ／ 786 －ホ
昭和 47 年度～ 57 年度の山行記録、座談会、海外記録など。

851　北大山の会　会報
編　北大山の会／北大山の会
1938 － 1949 ／ 786 －ホ
当初は東京在住の北大山岳部 OB 有志が集まり「こくわ会」と称していたが、発展拡大して『北大山岳部　時報』として刊行。その後の変遷を経て『北大山の会会報』となったので、ここではその名称を用いることにした。要するに公的な『北大山岳部々報』ではなく、内部的な刊行物である。活動報告、会員名簿、会員消息のほか、論考、随筆、登山記録、遭難、後半には出征、戦没という痛ましい記事もある。1 ～ 22 号までの合本で、大雪山の記録はかなり多い。

852　北海道医報創刊 1000 号記念写真集
編　西信博／北海道医師会
2002 ／ 490 －ホ
『北海道医報』901 号～ 1000 号の表紙写真集である。100 点の写真は風景や建物、動植物など様々で、高山植物も含め

て大雪山、十勝連峰の写真が多く、それぞれに写真説明が付いている。

853　北海道山岳
発行人　新妻徹／日本山岳会北海道支部
1999 ／ 786 －ホ
日本山岳会北海道支部の 30 周年記念誌。新妻徹が 30 年の歩みと歴代支部長の紹介を書き、「大雪山層雲峡四つの氷瀑登攀」（三和裕佶）、「高嶺への夢を追い続けて　北海道 1,500m 以上の山すべてに登頂」（京極紘一）など。

854　北海道の自然
第 1 号～第 50 号総目次
北海道自然保護協会／北海道自然保護協会
2012 ／ 519 －タ
会誌発行 50 号の節目に創刊からの目次を網羅、会誌に掲載した内容が一目で分かる。大雪山に関する記述も非常に多い。

855　北海道の自然 21 ～ 51
北海道自然保護協会／北海道自然保護協会
1982 ～／ 519 －ホ
会誌 Bulletin 改題。俵浩三が東川町に全号をまとめて寄贈した。

856　北方野草　第 14 号
編　高野英二／北方野草会
1996 ／ 470 －ホ
山野草の培養、繁殖を研究し、自然保護に取り組んでいる北方野草会の会報。14 号に札幌の会員、吉野博吉が「幻の花ハゴロモホトトギスに再会して」を寄稿している。この花は天人峡に自生する固有種で、北大教授、舘脇操が羽衣の滝に因んで命名した。

857　北方林業　2014 年 5 月号
北方林業会編集員会／一般財団法人北方林業会
2014 ／ 650 －ホ
通巻 781 号で、表紙写真は、鮫島惇一郎が撮ったキトウシからの眺望。田植え前の田んぼの水鏡に空が映っている。鮫島は「崖の上に立って展開する情景を眼にしたとき、なぜか戦慄にも似た驚きを隠すことができなかった」と書いている。東川町の田園風景が表紙になっているので大雪山文献書誌集に記録した。

858　松浦竹四郎の山岳画（『林』に掲載）
村上啓司／北海道林務部
1973 － 1974 ／ 291 －ム
北海道林務部報『林』の 1973 年 10 月号から 1974 年 8 月号に 10 回連載したものを 1 冊にまとめた。『十勝日誌の中央高地描写図』と『中央高地描写図の山名解』の 2 部に分け、武四郎の山岳図をもとに現在の山座を同定、アイヌ山名の解釈について山岳図や地形図、模式図を掲示して詳しく記述している。

859　緑資源幹線林道は「中止」の正念場を迎えた
俵浩三／北海道自然保護協会
2008 ／ 521 －タ
「北海道の自然」第 46 号別刷り。

860　緑資源幹線林道・無駄な公共事業が自然を破壊
俵浩三／北海道自然保護協会
2006 ／ 522 －タ
副題に「知事は事業の必要性と効果を説明できなかった」とある。「北海道の自然」第 44 号別冊。

861　野帳
編　早川禎治／山岳同人、北の野帳社
1972 ～ 1975 ／ 786 －ヤ
本書は 1 号から 33 号までの合本で全 408 ページになる。同人誌形式だが、ガリ切謄写版、発送まですべて早川であり、事実上は手作りの個人誌といえる。大雪山系の記録には「憧れのオプタテシケ山」（田中たか子）、「トナカリウシュペツ川より美瑛岳へ」（早川）、「クマネシリ岳とコロコロ沢」（田村昌文）、「オプタテシケ西壁」（早川）がある。33 号で休刊したのは、主宰・早川が青年海外協力隊の一員としてバングラデシュに赴くため。

862　続・野帳
編　淡川舜平／北の野帳社
1977 － 1980 ／ 051 －ヤ
北の野帳社主宰・早川禎治が不在の間、淡川舜平がガリ切（謄写版）をし「続・野帳」として続刊。本書は 1 ～ 7 号全 232 ページ、別冊 3 号 30 ページの合本である。本文は淡川、高澤光雄が中心で、早川も現地ベンガル（バングラデシュ）から送稿した。大雪山は「秋の沼ノ平」（片平卓男）、「正月の永山岳・愛別岳・当麻岳」（高澤光雄）がある。終刊は早川禎治が

帰国したため。

863　第二次　野帳
編　早川禎治／山岳同人北の野帳社
1985 － 1996 ／ 051 －ヤ
早川は引き続いて「第二次　野帳」を刊行する。100冊分を合本にして1,177ページにも及ぶ大冊となったため、二分冊にした。松田保・裕子（後志羊蹄工房）の版画を貼付して美しい。大雪山関係は6編ある。

864　山　復刻版全６巻
編　石原巖／出版科学総合研究所
1980 ／ 786 －ヤ
梓書房が誌名を公募した「山」は、昭和８年12月暮れに印刷して９年１月１日に創刊号が発行された。巻頭に『山』は極く寛いだ爐邊叢談誌であると打ち出している通り、登山家をはじめ山に関心を持つ人たちの随筆文芸月刊誌だった。３年間で30号を出したところで短命に終わった。目次から大雪山関係を拾うと、今西錦司「北海道の冬を訪ねて」ではニセイカムシウペ山行きで雪橋（ブリッジ）を踏み外している。三上次男「ヌタクカムシュッペの想ひ出」は旧制旭川中学時代の旭岳登山記。羽衣の滝近くの絶壁を苦しみながら這い登ったことなど初期の旭岳登山が忍ばれる。中谷宇吉郎の良く知られた随筆「雪の十勝」は第２巻第12号に載っている。同じ号で金田一京助が「北海山名譚」を寄稿。アイヌはオプタテシケを大雪山の中で最も高い山であり、かつ、荘厳神聖なる山と崇め、オプタテシケのウポポ（神歌）まで紹介している。

865　山脈越えて　創立五十周年記念誌
編　札幌山岳会／札幌山岳会
2002 ／ 786 －ヤ
札幌山岳会50年の足跡を５部構成でたどる。第２部「風雪」は道内を中心とする国内の山、第３部「飛翔」は海外の山である。利尻山のバリエーションルートの登攀、厳冬期日高山脈全山縦走、知床全山縦走など、困難な登山の記録が多い。中央高地では厳冬期大雪～十勝全山縦走11日間、ニペソツ山東壁登攀、忠別川左股ルート遡行などがある。

866　山行手帖
おいらく山岳会30周年記念号
編　おいらく山岳会／おいらく山岳会
1988 ／ 786 －オ
おいらく山岳会は1958年創立、名の通り中高年登山愛好者を対象にした山岳会で、40歳以上でなければ入会できない。独自の組織運営で会員は増加の一途をたどり、一時は3,000人にも達した。1988年まで30年間の山行は約１万回、東京近郊の史跡巡りから低山ハイク、中高山の縦走登山、海外各地のトレッキングもある。北海道大雪山の山旅も記録されている。同会は今も600人の会員がおり活動を続けている。

その他

小冊子、パンフレット類、絵はがき類、複写物、大雪山文献とはいえないが関連づけられるもの

９－１ その他

867　一般道道士幌然別湖線道路計画の概要
北海道土木部／北海道土木部
1994 ／ 514 －イ
環境への影響の程度が大幅に少ない計画路線として北海道がまとめた道路計画概要。

868　御絵葉書
層雲閣／層雲閣
不詳／―
二つ折りカバーの表紙は吊り橋の上に仰ぐ黒岳と桂月岳の図柄である。写真絵はがきが２種類２枚入り。１枚は客室と浴場、もう１枚は層雲閣全景と大函、いずれもモノトーンである。温泉旅館・層雲閣のPR用絵はがきであるが、電話　層雲閣一番・二番と付していることにも興味を引く。

869　御繪葉書
不詳／層雲閣
不詳／－
二つ折りカバーに入った写真絵はがき２種類４枚。「流星の滝」「小函」の景勝を淡いモノトーンで背景に入れ、温泉旅館層雲閣の貴賓室、桂の湯を濃い印刷で浮き出している。カバーに新作民謡「層雲峡小唄」の一節を入れてある。

870　観光の層雲峡
不詳／不詳
不詳／ 291 －カ
袋付き着色カバーの絵はがき。表紙には、大雪山国立公園・霊泉と風光美の仙境のサブタイトルがある。モノトーン 7 枚入り。それぞれ 2 行の案内文があり、霊山碧水峡の名も付している。探勝路を歩く和装洋装の観光客の姿もある。新旧漢字が混じっていることから、戦後発行のものと思われる。

871　銀嶺輝く大雪国立公園の景観
不詳／ TAISHO PHOTO
不詳／－
大雪山で山スキーを楽しむ挿絵を 2 色カラーで刷った袋に、絵はがきが 8 枚組。厳冬期の旭岳、オプタテシケ、愛別岳、十勝岳三段スロープから望む富良野岳などのセピア調の写真。深い雪に埋もれた吹上温泉が唯一の建物の写真。

872　小泉秀雄展　大雪山の父　そして旭川
旭川市博物館／旭川市博物館
1999 ／ 289 －コ
旭川市博物館が平成 11 年度企画展として小泉秀雄展を 8 月から 9 月にかけて開催した際の案内冊子。旧制旭川中学校（現在の北海道旭川東高校）教諭として 1911 年から 9 年間在職、その間に大雪山をはじめ道内各地で植物を採集、大雪山の山名を定めた小泉の功績を紹介し、愛用品など展示品の解説。

873　国定公園シリーズ 1 ～ 15
国立公園 編／明文堂
1955 ～ 1964 ／ 292 －コ
1 琵琶湖、2 山陰海岸、3 足摺、4 伊豆七島、5 錦江湾、6 天草、7 若狭湾、8 佐渡弥彦、9 玄海、10 石鎚、11 日南海岸、12 邪馬日田　英彦山、13 網走、14 三河湾、15 金剛・生駒

874　國立公園候補地　大雪山風景
札幌鐵道局／不詳
不詳／－
大雪山を国立公園の候補地として紹介している貴重な写真絵はがき。 6 枚組のうちの 5 枚。羽衣の瀧（大雪山麓松山温泉附近にあり）、大雪山旭岳（海抜二千二百九十米）などの説明が付いていて、旭岳は噴気孔から、もうもうたる噴煙が盛んに上がっている。

875　国立公園大雪山層雲峡
大雪山調査会／不詳
不詳／－
建築間もない「層雲閣」や第七師団旭川衛戍病院分院など、層雲峡の開湯間もないころの歴史的に貴重な写真絵はがきが 9 枚。

876　国立公園大雪山層雲峡
日本名所圖繪社／層雲閣
1933 ／－
大雪山が国立公園に指定されたのが 1934 年 12 月 4 日で、その一年前の 1933 年 5 月に手回し良く「国立公園大雪山」とうたって温泉旅館「層雲閣」が発行した。切手を貼るところに「書簡圖繪」とあり、中に手紙を書く通信欄もある。タテ 16cm、ヨコ 10cm の二つ折り表紙の中に、金子常光（鳥瞰図画家、吉田初三郎の弟子）が描いた鳥瞰図（幅 40.5cm）を 5 つに折りたたんで貼り付けてある。鳥瞰図は石狩川にぐるりと囲まれた大雪山の構図で、中央奥に旭岳がそびえ、手前中心部には永山岳、愛別岳、凌雲岳を配置している。鳥瞰図の裏面は写真と説明文で主な山、温泉、「大雪山の唄」（天人閣の創設者、佐藤門治作詞）を紹介している。松山温泉（現・天人峡温泉）は「一大瀑布羽衣ノ滝、敷島滝などあり、其の壮大且つ美麗なる点に於いて天下無敵」とある。

877　国立公園大雪山大観
不詳／北海道中部保勝協会
不詳／－
モノクロの写真絵はがき 5 枚。層雲峡温泉の渓流に架かる「望岳橋」、雲を呼ぶ北鎮岳、「奇しき天工」として黒岳招岩の奇岩など。「霊峰大雪山頂上」の朱印が全てに押してある。

878　国立公園大雪山風光集
不詳／大正写真工芸所（TAISYO PHOTO）
不詳／－
袋入り 16 枚セットの絵はがき。モノクロのセピア調写真で、説明文には英文も附記されている。「憧れの聖峰」の説明は「大雪山の盟主旭岳は二二九〇メートルの高峰にして颯爽たる勇姿と耀やく残雪は其名を恥かしめぬ」。宛て名書き面に「一分の時間も活かせ國のために」など戦時中の啓発文を入れてある。旭岳は他に「白銀の霊峰」「姿見の池」「沼の平より旭岳」など。

879　坂本直行　國立公園大雪山
画　坂本直行／北方林業會
不詳／－
二つ折りカバーの裏面に、「高根ケ原より旭岳（2,290 m）、五月の十勝岳（2,077 m）、十勝三股高原からピリペツ岳（1,602 m）、オプタテシケよりトムラウシ岳（2,141 m）の遠望」と、坂本直行が描いた 4 枚のスケッチ画の解説がある。彩色はない。カバーを開くと、手書きの大雪山地図があり、建物は白銀荘一つのみ。

880　山岳美に輝く　大雪山の景勝
不詳／大正写真工芸所（TAISYO PHOTO）
不詳／－
袋入りカラー 8 枚セットの絵はがき。細かい模様が刻まれた特殊な紙を使っているため、カラー写真なのか、彩色画なのか、判然としない。残雪の旭岳、北鎮岳、黒岳、旭岳と、もうもうたる噴気を映す姿見の池など。説明文に英訳を付記している。

881　士幌高原道路問題参考資料
北海道自然保護協会／北海道自然保護協会
1999 ／－
士幌高原道路中止報告全道集会（1999 年 4 月 14 日）の資料。

882　書簡圖繪　国立公園　層雲峡
不詳／印刷　名古屋塩町　澤田昭文社
不詳／－
タテ 15cm、ヨコ 45cm の細長い紙に層雲峡を中心に据えた鳥瞰図を描き、裏面に景勝地の写真、層雲閣の案内などを入れている。紙を三回折りたたむとヨコ約 9 cm の書簡となる作り。鳥瞰図はまるで山火事のような派手な色で紅葉を描いている。

883　世界に誇る大雪山を後世へ
俵浩三／
1997 ／ 519 －タ
先人はどのように大雪山の自然を守ってきたか。「大雪山のナキウサギ裁判・生物多様性を問う」の一編として書いた資料。

884　層雲峡（総天然色）
不詳／層雲閣
不詳／－
「長江名河、石狩川の水源地の層雲峡は雄渾壮大、清幻幽邃の一大峡谷」などと美文調の層雲峡の解説文と、探勝コースのイラストマップを付けた袋入り 8 枚セットの絵はがき。層雲閣の女性風呂「桂の湯」の写真には「アイヌ盛の頃天然痘はやり彼等は神罰として怖れ死人続出その時誰言うとなく層雲別の山奥に有る神様の裾から湧出る不思議な湯こそ救世主であると喧伝され皆競て入湯全治した」と伝説の紹介がある。

885　層雲峡の唄　峡のかほり
不詳／層雲閣
不詳／－
ブック型に切ったタテ 15cm（短い部分は 13cm）ヨコ 9 cm の変形案内書兼はがき。切手を貼る欄に「通信文ヲ認メタルトキハ三銭切手、認メザルトキハ二銭切手」とある。ヨコ幅約 44cm の長めの紙を五つ折りにし、そこには「層雲峡へ車窓の展望」のドライブ周辺マップをイラストで書き、途中の「天狗ノ引キ臼岩」は野口雨情が命名したもの。この岩の名は定着しなかった。「層雲峡の唄」「大雪山の唄」の歌詞入り。層雲閣の宿泊料は二食付き 3 円～ 6 円。貸別荘（八畳一室、四畳半一室、浴場、自炊場付）5 人まで 5 円。

886　層雲峡八趣
不詳／ YAMADASI KAIGAKENKYUKAI
不詳／－
層雲峡をモノクロ写真で紹介する絵はがき 7 枚（本来は 8 枚組）。石狩川の真ん中に蓬莱岩があり、岩に乗る形で蓬莱橋が架かり、対岸に層雲閣が写っている一枚など、層雲峡開湯間もないころがしのばれる。通信欄にデザインを入れ、一工夫あるのが特徴。

887　第 37 回全日本登山体育大会開催要項「大雪山　カムイミンタラの集い」
第 37 回全日本登山体育大会実行委員会
1998 ／ 786 －ダ
1998 年 7 月 10 日から 12 日まで上川町、層雲峡温泉、大雪山で開催された第 37 回大会の要項。副題が「大雪山カムイミンタラの集い」。主管する北海道山岳連盟の阿地政美会長あいさつ、高原温泉緑岳など 4 登山コースの紹介など。

888　大規模林道はいりません
大雪と石狩の自然を守る会ほか／大規模林道問題北海道ネットワーク
2008 ／ 519 ーダ
ヒグマ、クマゲラ、エゾモモンガ、エゾサンショウウオ、ニホンザリガニ、ナキウサギなど森の豊かな生態系を写真で紹介しながら大規模林道を問うカラー冊子。

889　大雪山国立公園
不詳／ UNIONPOSTALE UNIVERSELLE
不詳／ー
雪化粧の旭岳、新緑の羽衣の滝、残雪と高山植物の花などモノクロ写真 7 枚の絵はがき。

890　大雪山国立公園層雲峡名勝繒葉書
不詳／層雲閣
不詳／ー
袋入りの絵はがき 2 枚。イワヒゲのモノクロ写真をバックにカラー写真「流星の滝」「銀河の滝」を入れ、「仰ぎみる銀河の瀧は岩しぶき　氷るがまゝに細りてありき」（新島善直）の和歌をいれた凝った作り。大函、小函の写真には野口雨情が作った「大函小函」を載せているが、雨情の唄とは趣が違う替え歌になっている。

891　大雪山国立公園でまたも画策される自然破壊道路
八木健三／株式会社金曜日
1996 ／ 519 ーヤ
原生自然とナキウサギを追い詰めた横路道政（八木健三）、大雪山の不思議な自然を守れ（佐藤謙）など。週刊金曜日（№146）のコピー。

892　大雪山国立公園の代表的渓谷美　勝仙峡の所々
不詳／大正写真工芸所
不詳／ー
忠別川上流の峡谷美を小泉秀雄が「勝仙峡」と名付けたが、その名前で天人峡を宣伝するモノクロ写真はがき 8 枚組。羽衣の滝には大町桂月が詠んだ漢詩を添えている。敷島の滝、天人ケ沼、姿見の池、旭岳などの名勝の他、今はない東川尋常高等小学校の木造校舎の全景が一枚入っている。当時の児童数は現在よりもはるかに多く、校庭に 30 列ほど、ずらりと整列して印象深い一枚になっている。

893　大雪山国立公園北部登山地図
東川エコツーリズム推進協議会／北海道地図㈱
2014 ／ー
2 万 5 千分の 1 地形図。登山者に利用してもらい易いようにポケットサイズに折りたたんである。山楽舎 BEAR・佐久間弘、風の便り工房・佐藤文彦の協力で磁北線やコースタイム、避難小屋、トイレ情報なども入れた。

894　大雪山登山案内
不詳／層雲峡観光協会
1966 ／ー
広げるとタテ 1 m 55cm、ヨコ 75cm の大きな大雪山の登山地図で、折りたたんでタテ 26.5cm、ヨコ 12.5 ｃｍの携行版にしている。地図の裏面に大雪山国立公園のあらまし、地質と地形、構造土、高山植物、動物、昆虫、登山基地、山小屋などを紹介している。

895　大雪山登山案内図　スキーコース付
編　あさひ出版社／あさひ出版社
不詳／ 291 ーダ
タテ約 76cm、ヨコ約 52cm の大雪山登山案内山岳図を横四つ折り縦四つ折りにした携行版（タテ 19.5cm、ヨコ 13.5cm）。大雪山のほか、十勝岳・美瑛岳案内図もある。書いてあることは大雪山の解説、登山案内、高山植物図、大雪山連峰鳥瞰図、赤い線でコースを示したスキー登山案内図、層雲峡、天人峡の鳥瞰案内図など。広告に「勇駒別　大雪山・山の家」がある。

896　大雪山（登山地図）
監修　旭川山岳会／北海道地図㈱
1985 ／ 291 ーダ
ケース入りの 2 万 5 千分の 1 の登山地図に、「大雪山への誘い」というガイドブックがついていて写真もたくさんある。地図も詳しく見やすく、これ以上の登山地図はないだろう。その後も新しい地図が発行されている。

897　大雪山と層雲峡
編　其水堂／其水堂
1926 年以降／ 291 ーダ
ヨコ二つ折り、タテ六つ折り、畳んだ状態の一部が表紙になっていて、「北海の霊峰・附鹽谷温泉案内」のサブタイトルがある。小泉秀雄の記述に基づいて、北

海道の山、北海道中央高地の解説と登山案内、層雲峡と塩谷温泉の案内がある。文中に馬場孤蝶、大町桂月、尾崎咢堂（行雄）の詩歌挿入あり。黒岳からトムラウシ、十勝岳に至る大縦走路が本年完成したとある。

898　大雪山の唄
不詳／大正写真工芸所（TAISYO PHOTO）
不詳／－
和服美人を描いたカラーイラストの袋に入った8枚組絵はがき。大雪山の山岳写真や姿見の池、イワウメなどのモノクロ写真を上部に置き、下三分の二くらいのところに縦書きで「大雪山の唄」を入れ、イラストを添えている。唄は中山晋平作曲、新北秋作詩、イラストには○の中に新エ郎とある。姿見の池とセットになった唄は「姿見の池　萬年雪もヨ（アラショ）解けた思ひの秘めたる思ひの　水鏡水鏡」。他に「雲の表に頂き見せてョ（アラショ）空へ連る　凛と連る　大雪山ョ大雪山ョ」。すべての唄の末尾には、「山はお山よドンドと胸は燃えて火を噴く男意気」と付いている。

899　大雪山博物メモ
監修　高澤光雄、編集　広坂光則／日本山岳会北海道支部
2002／402－ダ
日本山岳会自然保護全国集会が2002年7月12日～14日、大雪山で開催された際の参加者資料。タテ21cm、ヨコ15cm、全39ページ。大雪山の概説、地理、火山の生成、登山と観光の歩み、動植物、自然保護概要、主要登山コース地図など。

900　たいせつノート
編　高澤光雄／平野明
1988／786－タ
日本山岳会北海道支部20周年の1988年7月17日に行われた「大雪の集い」の豆本。旭岳、裾合平周辺の高山植物や大雪山固有種の紹介、一等三角点測量方位図、山名の由来、登山小史、山の歌など収録。

901　大雪の山やま
編　安田治／寺島一男
1976／786－ダ
1976年、日本勤労者山岳連盟主催、第10回全国登山祭典の栞。全46ページ。国府谷盛明「大雪山の地質と生いたち」、鮫島惇一郎「大雪山の高山植物」、親と子の登山などタイプ別に記念登山コースを紹介している。

902　十勝嶽大観
佐藤翠陽／札幌、佐藤翠陽
不詳／－
二つ折りカバーに、写真絵はがき4枚。カバーの写真は、馬橇2台にお客が乗って、吹上温泉へ雪野原を行く風景。説明文として、交通は夏、自動車で片道50分、一人1円、冬は馬橇で片道4時間、一人80銭、宿泊は吹上温泉、勝岳荘、白銀荘の3軒。絵はがきは三段スロープのスキー滑降、樹氷、雪の博士・中谷宇吉郎が雪の結晶を観察する基地にしていた白銀荘など。

903　十勝岳連峰・トムラウシ山（登山地図）
監修　旭川山岳会／旭川山岳会
1994／291－ト
ケース入りの2万5千分の1の登山地図に、「十勝岳連峰への誘い」というガイドブックがついていて写真もたくさんある。『大雪山』よりさらに進化させた登山地図である。山地は標高が変わったり、林道が伸びたり、がけ崩れで廃道になったり、登山道も歩かなければ廃れてしまうなど、常に変化している。地図もガイドブックも最新情報ではないことを心得て登山しなければならない。

904　ナキウサギと考える大雪山の自然
大雪と石狩の自然を守る会／大規模林道問題北海道ネットワークの集い北海道集会実行委員会
1996／519－ナ
大規模林道問題全国ネットワークの集い北海道集会開催時の予稿集・資料集。副題は「大規模林道と地域のあした」。収録されている記念講演は大阪市立大学助教授、川道武男「ナキウサギは語る」。

905　日本百景層雲峡繪葉書
不詳／大雪山調査会
不詳／－
二つ折りカバーに、層雲峡温泉や峡谷美、滝を写したモノクロ写真絵はがきを16枚入れて、1組になっている。印刷は「東京渋谷・第一グラビア印刷」。層雲峡温泉をまだ塩谷温泉と呼んでいたころに完成した「層雲閣」の全景、蓬莱橋、新築間もない蓬莱閣と温泉入浴建物、第七師団旭川衛戍病院分院と九十九の滝、小奈美橋、今では忘れ去られた橋や建物など

貴重な写真が含まれる。

906　東大雪　～四季の採光～
不詳／フォトライブラリー「大地の讃美」
不詳／－
纐纈政由の「東大雪　四季の彩光」の文を入れ、カラー写真 10 枚組絵はがき。十勝三股のルピナス、三国峠の高い橋げたになった国道、秀峰ニペソツ山など。

907　冬山の北海道　銀嶺を行く
不詳／北海道絵葉書倶楽部
不詳／－
北海道絵葉書倶楽部が発行した第二集で、何枚のセットだったか分からないが東川町には十勝岳のモノクロ写真絵はがき 3 枚がある。「銀嶺征服」はリュックを背負ったスキーヤーが十勝岳の斜面を鮮やかに滑っている構図。「静かに霽（ルビは）れし空に刻む玲瓏たる聖峰の処女雪に早くも印せられる二條の白線！」

908　北海アルプス　大雪山旭岳勝景（はがきセット）
不詳／上川郡忠別川上流天人峡松山温泉場
不詳／－
薄い紙袋入り、写真絵はがき 11 枚。羽衣の滝の写真がないので、それを入れると 12 枚組だったのだろうか。忠別川沿いにそそり立つ屏風岩、七福岩、流木で橋台のやぐらを組んだ珍しい鑛泉橋、川岸より一段高いところに建つ松山温泉場、水量豊かな敷島の瀧、周りの壁に石を積み、屋根にも石が乗る旭岳の石室、姿見の池、旭岳地獄谷の噴火口、山頂からの眺めなど。すべてに「旭嶽　登山記念松山温泉」の丸スタンプが押してある。

909　北海アルプス　大雪山繪葉書
画　村田丹下／大雪山調査会
1927 ／－
夕焼け空にオオワシがはばたくイラストを刷った、二つ折り袋に入れた村田丹下の「北海道大雪山洋画展覧会」の絵はがき 7 枚。いずれにも「大雪山登山記念、黒岳石室、3.8.23」の円スタンプが押してあり、昭和 3 年 8 月 23 日の登山記念と特定できる。

910　北海アルプス　大雪山繪葉書
不詳／大雪山調査会
不詳／－
二つ折りカバーは黒岳の招き岩のスケッチで、ブルーを基調にした 2 色刷り。中の絵はがき 16 枚組はモノクロ写真。山並の写真が大半を占めているなか、19 人の登山者が凌雲岳、北鎮岳をバックに座って握り飯を食べている一枚が目を引く。登山者のうち女性が 7 人、着物姿が 1 人いる。帽子を飛ばされないようにあご紐を付けている。傍らには長い金剛杖。他に「化雲岳頂上ヨリ十勝岳ノ爆発ヲ見ル」には、遠景の十勝岳山頂から黒い煙が噴き上げ、たなびいている瞬間をとらえている。

911　北海道層雲峡
不詳／不詳
不詳／－
モノクロ写真の絵はがきが 5 枚。「神工鬼斧の妙を極めた」小函、大函の絶景のほかに、「峡谷に光る神仙橋」がある。真新しい木材でトラスを組んだ幾何学模様の橋げたが美しく、史料的に興味深い一枚。

912　北海道大規模林業圏開発
北海道林務部／北海道林務部
1974 ／ 650 －ダ
北海道林務部がまとめた昭和 48 年度実施計画策定調査報告書。コピー。

913　北海道大雪山洋画展覧会
画　村田丹下／大雪山調査会
不詳／－
大雪山調査会主催、丸ビル美術クラブ後援で画家、村田丹下の「北海道大雪山洋画展覧会」が 1927 年秋、東京で開かれた。そのとき、丹下の原画絵はがきが 16 枚セットで発売された。丹下は実際に山に登ってスケッチした画家なので、北鎮岳から荒井岳方面の遠望、雲ノ平のお花畑、旭岳の紅葉などを鮮やかに描いている。

914　北海道の風景
写真　岡田紅陽／北海道景勝地協会
不詳／－
大雪山国立公園第 3 輯（しゅう）として制作した袋入り、モノクロ写真絵はがき。残雪が縞模様を作る旭岳、噴煙を上げる十勝岳、然別湖など、5 枚。

915　北海道の誇り絶勝層雲峡
吉田初三郎／旭川商工会議所
不詳／－
絵はがきの画家と印刷所が「北海道開発大博覧会」の絵はがきと同じことから、同時代に発行されたものか。商工会議所の重鎮、荒井初一は層雲峡開発の功労者でもある。絵はがきは１枚で、荒井が建てた層雲閣と石狩川にかかる蓬莱橋、バックに雪の黒岳と柱状節理の奇岩を組み合わせた構図。

916　北海道百番附
編　矢谷重芳／富貴堂書房
1918／291－ヤ
大正７年発行の北海道早わかり番付。名所の横綱は大沼公園と神居古潭、大雪山は入っていない。山岳の横綱はトランウシ山とホロシリ山。旭岳は別格扱いの取締。民間政治家の項に愛別村長、太田龍太郎が前頭で記載されている。コピー。

917　北海の秀峰　国立公園大雪山の驚異
不詳／北海道絵葉書倶楽部
不詳／－
大雪山の冬山スキーのモノクロ写真絵はがきが８枚、折りたたみのカバー付き。広大な雪景色、雲海、夕焼けを浴びる花の台尾根など、カラーでないのが惜しいが、好天に恵まれた山スキーの醍醐味が伝わって来る。

918　北海の霊峯　大雪山と層雲峡
附塩谷温泉案内
不詳／不詳
不詳／291－ホ
タテ25cm、ヨコ53cmの長い紙をタテに１回、ヨコに３回折って、掌に乗る小さなサイズ（タテ12.5cm、ヨコ9.5cm）に畳んだ案内書。印刷、製作の年月日、発行者、著者を特定する記述がない。「北海道中央高地、大雪山と登山案内」の記述は小泉秀雄が担当したか、あるいは小泉の著書を下地にしたと思われる。層雲峡温泉の表現は一切なく、塩谷温泉の紹介となっており、「塩谷温泉層雲閣」の写真は建築足場のやぐら組みが写っている。1927年に開かれた「大雪山夏期大学」の講師を務めた馬場孤蝶が詠んだ和歌や句も載せている。国立公園の文字がないので1934年以前の製作と思われるが、史料として興味深い。

919　松浦武四郎・蝦夷地登山の実像
俵浩三／国立公園№435、436
1986／289－タ
幕末期の偉大な北方探検家の足跡、紀行、日誌を検証し、分かり易く解説している。コピー冊子。

920　森林【もり】への招待
㈶北海道森林整備公社／㈶北海道森林整備公社
1985以降／291－モ
森に親しみながら、自然に接して、新鮮な喜びや感動を共有するためのパンフである。国立公園、国定公園、道立自然公園、自然休養林、21世紀の森、緑のふるさとに区分し、指定日と番号をふり、北海道図に番号で位置を示す。大雪山とその周辺では、「大雪山国立公園」「富良野芦別道立自然公園」「嵐山・神居自然休養林」「白金自然休養林」「然別自然休養林」「トムラウシ自然休養林」「21世紀の森（旭川市）」がある。その後の指定増加や組織名称、所管者も改変されている。

921　雪の王者　大雪山は招く
不詳／愛山渓温泉
1937／－
12．4．3と12．4．5の日付スタンプが押してあるので、昭和12年の絵はがきと推量する。スタンプは旭川森林事業所・安足間登山口と、愛山渓温泉の２種類。愛山渓から入山する冬山のモノクロ写真８枚組。山頂を極め、雲海上で三人がポーズをとっていたり、急峻な鋸岳を目指すシーンや永山岳三角点断崖絶壁を行く厳しいシーンがあり、花の台尾根でシーデボーなど、人物を配して山スキーの醍醐味を紹介している。

９－２ その他

922　旭岳たすかるマップ
東川町／東川町大雪山国立公園保護協会
2018／－
旭岳での山岳遭難事故を減らそうと旭川東警察署が協力して制作したA4版の地図で、外国人向けに英語を併記した。東署山岳遭難救助隊が登山道沿いの分岐やポイントごとに「P1」から「P14」の標識を立て、２万５千分の１登山地図にその番号を入れて、その地点の標高、経緯度、別のポイントへの方向を記入して

いる。遭難原因になり易い道迷い、脱水、低体温症の防止策を記入している。

923　医と福祉の道のり
編　パック宣研／医療法人　社団主体会
1990 ／ 498 －イ
主体会 20 周年史であり、大雪山に関わる本ではないが理事長・川村耕造は大の山好き人間であり、わざわざ登山の項を設けて川村自身が書いている。彼が特にこだわったのは 56 歳の誕生日（1 月 3 日）に六甲全山縦走 56km で、56 歳、56km の一致から今後の事業を賭けて参加、踏破に成功した。彼の登山一覧表によると、1988 年は 63 回登山をしていて、大雪山に登頂ののち羊蹄山、樽前山、風不死岳、恵庭岳に登っている。

924　命　今を重ねて　エッセー集
宮崎二三子／私家版
2015 ／ 914 －ミ
著者は女性の国際奉仕団体ゾンタクラブ旭川に所属、池坊華道と表千家茶道の師匠として活躍した。エッセーに「曇りのち晴れ」の一文があり、旭岳の噴煙をバックに野点の準備をする写真が添えてある。旭岳裾野で緋毛氈（ひもうせん）を敷き、野点を開いたのは後にも先にもこれ一回きりだろう。カラー写真付きで北海道新聞一面上段に記事も載ったらしい。著者は楽しみにしていたエッセー集の刷り上がりを確認してまもなく逝去。担当した旭川の第一印刷㈱にとっても最後の印刷・製本となり、廃業した。

925　美しの山水
不詳／日本食堂車協會
不詳／－
北海道線第 2 輯（しゅう）として大雪山、層雲峡、十勝岳など 5 枚セット絵はがきで食堂車協会が販売したうちの 3 枚。両岸に柱状節理が聳え立ち、間を石狩川が流れる層雲峡と、冬の十勝岳などのモノクロのセピア調写真。

926　おおはくちょうのそら
手島圭三郎／福武書店
1983 ／ E
ニューヨークタイムスが選ぶ世界の絵本ベストテン入り。

927　きたきつねのゆめ
手島圭三郎／福武書店
1985 ／ E
ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞。

928　北の草花散歩　じぶんの植物図鑑
編　塩田惇／総北海
2001 ／ 470 －シ
旭川帰化植物研究会が作った図鑑。道端の花を花の色で黄色、白、赤、紫などに分けて、各ページに観察日記を書く仕掛けになっている。

929　北の草花散歩　野山編
じぶんの植物図鑑
編　塩田惇／総北海
2006 ／ 470 －シ
じぶんの植物図鑑の野山編。

930　くまげらのもり
手島圭三郎／福武書店
1984 ／ E
クマゲラの 3 羽のヒナが巣立つまでの物語。

931　クマにあったらどうするか
姉崎等／木楽舎
2002 ／ 384 －ア
著者は大正 12 年、北海道生まれ、アイヌ民族最後のクマ撃ち猟師。65 年にも及ぶ狩猟人生の体験談が本になった。

932　桂月全集 第 1 巻 美文韻文
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 918 －オ
明治、大正にわたって活躍した文人、大町桂月は、大雪山を名文によって全国に紹介した人物として知られている。執筆量は膨大で、桂月の全集を並べると両手を広げても足りないくらいの長さになる。第 1 巻は美文、韻文の紹介。

933　桂月全集 第 2 巻 紀行 1
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 919 －オ
桂月は全国を旅し、紀行文を書き、各地で講演会を開いている。第 2 巻は紀行文を集め、北は十和田湖まで。

934　桂月全集 第３巻 紀行２
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 920 －オ
桂月は山をよく歩き、文人の登山の先駆者。第３巻は箱根、富士、吉野山など。

935　桂月全集 第４巻 史伝１
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 921 －オ
桂月の歴史観が表れ、神武天皇から始まる史伝。天照大神、日本武尊、戦国武将など。

936　桂月全集 第５巻 史伝２
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 922 －オ
源氏と平氏から始まり、中国の李白にもふれる史伝。羽衣の滝に感動した桂月が漢詩を作り、滝近くで朗々と吟じたと推測されるが、元になっているのは李白の詩「望盧山瀑布」。

937　桂月全集 第６巻 史伝３
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 923 －オ
仏教伝来など日本文明史から始まり、大半の記述を四十七士で占めている。

938　桂月全集 第７巻 史伝４
大町桂月／桂月全集刊行会
1923 ／ 924 －オ
白楽天、伯爵後藤象二郎、ハンニバルの史伝。

939　桂月全集 第８巻 評論随筆
大町桂月／桂月全集刊行会
1922 ／ 925 －オ
文学と国家、日本国民の気質、山と日本人などの評論集、随筆集。

940　桂月全集 第９巻 修養１
大町桂月／桂月全集刊行会
1923 ／ 926 －オ
道徳、青年時代、偉人論など修養を説く。明治の気骨。

941　桂月全集 第10巻 修養２
大町桂月／桂月全集刊行会
1923 ／ 927 －オ
論語を読む者に告ぐ、論語俗解など。

942　桂月全集 第11巻 修養３
大町桂月／桂月全集刊行会
1923 ／ 928 －オ
我は日本男児なり、大和魂など。

943　桂月全集 第12巻
詩歌、俳句、書簡、雑篇
大町桂月／桂月全集刊行会
1923 ／ 929 －オ
横山健堂は序文で「酒仙が醒めてゐるのは、彼（桂月）から見れば酒仙の堕落である。桂月の生命は文章である。文章は酒である。酒なければ桂月生くといへども、死したるに同じ」と書いている。

944　蕨影
郭城孟、黄俊溢、高美芳／台湾、行政院農業委員会林務局東勢林區管理處
2010 ／ 472 －ケ
台湾にある「大雪山」の植物図鑑「大雪山国家森林遊楽區蕨類植物解説手冊」。

945　自然にやさしい観光デザイン
俵浩三／
2009 ／ 689 －タ
俵浩三　札幌市立大学講義資料

946　自然観察会の参考資料
俵浩三／
1993 ／ 407 －シ
木の成長クイズなど、コピー２ページ、資料。

947　「自然を見る目」の原点
俵浩三／
2009 ／ 471 －ウ
俵浩三　札幌市立大学講義資料

948　しまふくろうのみずうみ
手島圭三郎／福武書店
1982 ／ E
紋別出身の版画家、絵本作家。「しまふくろうのみずうみ」は絵本にっぽん賞を受賞した。

949　森林を生かした野外教育
飯田稔／全国林業改良普及協会
1992 ／ 786 －イ
キャンプ、登山など子供たちを対象にした豊かな森林での野外教育の本。

950　大雪山

姚正得、廖煥彰／台湾、行政院農業委員会林務局東勢林區管理處
2009 ／ 488 ーダ

台湾に「大雪山」という山がある。雪も降る。そこの鳥類図鑑「国家森林遊楽區鳥類導覧」。

951　大雪山系

編集発行人　下村保太郎／北海道詩人クラブ
1953 ／ 911 ーダ

冊子名が「大雪山系」なので紹介するが、中身は詩集。創刊について詩人、鈴木政輝が「詩の発表の場として十分すぎるものとおもう（中略）大雪山系を徒に死火山とならしめないやうにしようぢゃないか」と説いているが、創刊号で終わった。余談だが鈴木は茶人でもあり、旭岳麓で噴煙を間近に野点を開いた。その時の詩が「萬年雪に水ようかん姿見池畔野だては紅紫萬朶のお花畠忘れざらめや」。

952　中国名詩鑑賞辞典

山田勝美／角川書店
1979 ／ 921 ーセ

166 ページに唐李白の有名な「廬山の瀑布を望む」の解説と読みが載っている。大町桂月が羽衣の滝を前にして、李白のこの句を念頭に漢詩を吟じたと思われる。

953　ナチュラリストのための登山教室テキスト

編　寺島一男／大雪と石狩の自然を守る会
1987 ／ 786 ーテ

登山に必要なテキスト。イラスト、短文、極めて分かり易く、それでいて、132 項目にもわたる丁寧な入門書、ポケットサイズ。

954　ひぐまのあき

手島圭三郎／福武書店
1986 ／ E

ヒグマの親子が川でサケを獲り、小熊は、星のように輝く大きな魚を夢に見る。

955　北海道石狩國上川郡明細圖

青柳鶴治／上川図書館
1901 ／ 291 ーア

1894 年、忠別原野の殖民地区画選定測量が行われ、1895 年、香川、富山、愛知、福島などから団体入植が入って東川の開拓が始まった。「上川郡明細図」は忠別原野測量の 6 年後の 1900 年に作られた。開拓 5 年目の地図のため、東川村は碁盤の目に線引きされ、朱色の公共用地 5 カ所があるだけ。旭岳はヌタカムウシユベとあり、ほかにキトウシ山、忠別川はチユプベツ。旭川の 4 条通から東川へ基線道路がまっすぐ通っていて、旭川には師団用地、旧土人開墾給与地、遊郭地、農事試作場、測候所などがある。周辺に永山兵村、旭川兵村がある。地図は保管していた東川寺から東川町に寄贈された。

956　北海道開発大博覧会

吉田初三郎／京都祇園観光社
不詳／ー

第 1 輯（しゅう）に飛田周山の彩色画「大雪山黒岳」絵はがき、第 2 輯（しゅう）は望月春江が描いたスズランの彩色画の袋と、田中咄哉州の彩色画「層雲峡」。緑の木立の中を釣竿を担いだ菅笠の男が一人行く姿を描いている。第 1 、第 2 輯（しゅう）とも、何枚組だったのかは不明。

957　北海道地図

不詳／札幌、三田印刷所
291 ーホ

戦前に作られた北海道地図。縮尺 120 万分 1、タテ 43.5cm、ヨコ 57cm。旭川から追分で分かれて東川と旭山公園へ行く私設軌道線（旭川電気軌道）が記入されている。大雪山系は旭岳、十勝岳、石狩岳があり、巛記号は然別湖付近にあるだけ。国後島からシュムシュ島まで根室支庁之内とあるほか、函館網走千島線や小樽樺太東西廻線などの航路があり、空知や釧路管内などに多くの重要鉱山（炭鉱）と、釧路ー雄別などの私設鉄道線（炭鉱鉄道）が詳しく載っていて、戦前の北海道の位置付けがうかがえる。

958　北海道の風光

不詳／札幌鐵道局
不詳／ー

北海道開発大博覧会は 1950 年 7 月から 8 月にかけて 40 日間、旭川市内常磐公園で開かれた。絵はがきはその年か前年の発行か。当時、鳥瞰図画家として著名だった吉田初三郎が旭川が分かるように、180cm、90cm を 8 枚連ねた大きな鳥瞰図を描いた。吉田は記念絵はがきも描き、会場「鳥瞰図」には遠景に大雪山があり、「大雪山と御花畑」「旭橋と大雪山」の 3 枚が残っている。

959　北海道の緑資源幹線林道
緑資源機構／独立行政法人緑資源機構北海道地方建設部
2004 ／ 656 ーホ
緑資源機構の業務、幹線林道事業などを紹介する冊子。コピー。

9－3 その他

960　大いなる霊峰　大雪山　秋
NHK 北海道ビジョン／ NHK ソフトウェア
2000 ／ 291 ーレ
NHK の番組「さわやか自然百景」のセレクション 4「大いなる霊峰」のビデオで、「大雪山　秋」「富士山　夏」「晩秋　富士山」「鳥取　大山の四季」の 4 本。大雪山の秋は、日本一早く紅葉が見られる旭岳をはじめ、原生林の鮮やかな紅葉を映し出し、山に暮らす希少な小動物たちが冬支度に忙しい姿を紹介している。

961　思い出　ヌタプ　Nutap Memorial
とむらヒロ＆みの白雲／ロッジヌタプカウシペ
2004 ／音楽 CD
大雪山が大好きな二人の大学教授が作詞・作曲、演奏、歌、ジャケットの写真、デザイン、すべてが二人のオリジナル。「裾合のうた」「ヌタプ音頭」「ヌタプの子守歌」「遥かなりトムラウシ」など 15 曲。ペンネーム「みの白雲」が東大教授（環境学）味埜（みの）俊、ペンネーム「とむらヒロ」が岩手大農学部教授、広田純一。合作のときは「とむら白雲」を使う。才能がうらやましい。

962　音楽劇ヌタック・カウシュペ
作曲　伊福部昭／日本コロムビア
2015 ／ 775 ーオ
釧路出身で北大農学部卒の作曲家、伊福部は「ゴジラ」の映画音楽で知られる一方、雪博士、中谷宇吉郎の科学映画『霜の花』の音楽も担当した。伊福部らの作曲は最近見直され、コロンビアが「戦後作曲家発掘集成」（CD8 枚組）を製作、その中で伊福部が HBC 北海道放送ラジオ番組で 1953 年 11 月 28 日に発表した音楽劇「ヌタック・カムシュペ」を収録している。アイヌ語のタイトルは大雪山のこと。麓の村のアイヌと、敵対するアイヌが争い、敵方の若者が捕えられるが、平和を強く願う村の娘が若者を解き、二人で旭岳へ逃げるが追っ手の矢に倒れる悲劇。30 分の音楽劇の出演は劇団七曜会、演奏は東京室内管弦楽団。

963　国立公園大雪山
製作　大雪山国立公園、東川村開発期成会／後援　東川村観光協会、天人峡温泉株式会社、道北乗合自動車株式会社、旭川電気軌道株式会社／監督　園田規矩／企画　金野昌祐／撮影　飛弾野数右衛門／タイトル　森下滋
不詳／映画 DVD
1950（昭和 25）年頃に撮影したと思われる観光映画。大雪山国立公園の表玄関として旭川駅が初めに紹介される。駅前から「天人峡行」のボンネットバスが出発。また、旭川 4 条駅から電車「1001」号が出るシーンも映る。東川村から天人峡へ向かう途中に江卸発電所などが映り、険しい念仏峠では乗客がバスを降りて歩く珍しいシーンがある。天人峡の柱状節理、羽衣の滝、瓢箪沼、勇駒別温泉の仰岳荘、白雲荘、旭岳ふもとの散策、夫婦沼など昔の温泉や名所が次々と映し出される。無声映画を DVD で保存。

964　大雪山の四季
HIT 企画／ HIT 企画
2001 ／ 748 ーダ
30cm の定規。定規の裏と表に、大雪山の四季の写真、東川町方向から眺めた連峰の写真に山名と標高を書き入れてある。

965　大雪山の四季
高橋秀雄、後藤昌美／総北海
1976 ～／ 727 ーゴ
1976 年から毎年欠かさず制作されてきた大雪山の写真カレンダー、2016 年版で 41 冊目になる。旭川営林局広報担当職員、高橋秀雄が作り、林野弘済会が販売、旭川の印刷会社「総北海」が印刷・制作していた。高橋が 20 冊を節目に大雪山の撮影を終え、代わって写真家・後藤昌美が撮影した大雪山の写真を使い、「総北海」が作り続けている。（218 ページ　参照）

966　大雪山の勇者　牙王（ビデオ）
原作　戸川幸夫／ポニー
1978 ／ 778 ーダ
戸川幸夫原作「牙王物語」をアニメ化、フジテレビ系列で 1978 年 9 月 23 日、秋分の日特集番組として放送した。大雪

山と東川村を主な舞台に繰り広げられる犬「タキ」と牧場の娘、早苗の物語。原作では早苗が台風荒れ狂う天人峡温泉で凶暴な熊「片目のゴン」に襲われ、タキが敵討ちをするのだが、アニメではこの展開が全く違う。地名がセリフで入るが『東川』ではなく、大雪山と離れた実在の町名になっているのも原作と異なる。VHS は 60 分。

967　大雪山　雪が育む神秘の高原

NHK ／ NHK エンタープライズ
2011 ／ 291 ーダ

NHK 旭川放送局のディレクター、小林夏生が大雪山に降り積もる膨大な雪を主役に、雪から始まる命の育みを番組にしたいと発想、旭川放送局の撮影チームが厳冬期に入山して 60 日間、札幌放送局の撮影チームが 70 日間、大雪山にこもって撮った貴重な映像。猛烈なブリザード、晴れ間に現れたサンピラー現象、雪が解け始めると一斉に咲き競う広大なお花畑、雪渓の母子グマ 3 頭のシーンは子グマがまるで相撲をとるような愛らしい仕草が続き、副題の「雪が育む神秘の高原」を見事に映し出していく。カラー映像 89 分の DVD。

968　ナキウサギの世界

編　栃内信男／ナキウサギふぁんくらぶ
1997 ／ 489 ーナ

氷河期の生き残りといわれるナキウサギの生態を DVD にした。撮影地は然別湖近くの風穴のある地帯と十勝岳周辺。雄と雌で鳴き声が違う、葉を蓄えて越冬食料にする、タンパク質補給で糞を食べる、道路開発や車の排気ガスで存亡の危機にあるなど、子供でもわかる目線で作られている。南修治の「ナキウサギの歌」も効果的。大阪市立大学生物学教室、川道武男が協力、（財）北海道新聞野生生物基金の助成を受けた作品。

969　ヌタプへようこそ
welcome to NUTAP

とむら白雲／ロッジヌタプカウシペ
不詳／音楽 CD

大雪山が大好きな二人の大学教授が旭岳温泉ロッジ・ヌタプカウシペで作詞、作曲して、楽器も演奏しながら歌う音楽会を楽しんでいる。「森よ目覚めよ」「ここは大雪」「ヌタプへ行こうの歌」など 14 曲すべてが大雪山の讃歌である。

970　深田久弥物語
山ありて、わが人生は楽し

深田久弥山の文化館／深田久弥山の文化館
2014 ／ 289 ーフ

『日本百名山』の著で知られる深田久弥の「百の頂に百の喜びがある」という山にかけた想いを映像化した。深田が茅ヶ岳登頂中に亡くなった 1971 年 3 月 21 日から始まり、小学校高学年のときの初めての富士写ヶ岳登山で足が強いとほめられ、「生まれつき山が好きという者はいない。何かの動機で病みつきになる」。ふるさとの山・白山やヒマラヤの研究など、山を愛し、山と人のように接し、山との対話を続けた深田を忍ぶ。約 20 分、カラー映像。

971　北海道中央高地の地学的研究附図

小泉秀雄／ー
1918 ／ー

「大雪山の父」と称される小泉秀雄が庁立旭川中学校（現・旭川東高校）在職中に大雪山を調査し、山並みをスケッチしながら、当時はまだ山名がなかったことから小泉が山名を考え記入していった。スケッチは小泉自身が手作りしたと思われるアルバムに張って残した。アルバムには、小泉が名付けた『勝仙峡』（現・天人峡）の写真と写真絵はがきも貼ってある。なお、スケッチ画は全てデジタル化、DVD に収録している。（210 ～ 212 ページ　参照）

972　山の幸

製作　石原木材合資会社／後援　旭川林務署、東川村／企画　木村重太郎／撮影　飛弾野数右衛門
不詳／映画 DVD

東川村は 1936（昭和 11）年に撮影機を購入、「東川ニュース」や映画を作り、村民の娯楽として映画会を開いていた。「山の幸」は、1955 年頃に製作。字幕に「北海道の三大美林の一つである大雪山麓に於ける『山の幸』開発に挑む逞しい冬山造材」とある。深い雪の中の造材飯場が映り、大勢の作業員が冬山に入って行く。巨木を大きな窓ノコで切り、マサカリをたたき込み、人力で切り倒す。丸太を束にした上にまたがって雪の斜面を滑り降りる人間バチや馬のバチバチの迫力ある映像が印象に残る。無声映画を DVD で保存。

973　山は呼ぶ

製作　旭川電気軌道株式会社／後援　東川村観光協会、旭岳温泉勇駒荘／企画　中屋義長／撮影　飛弾野数右衛門
不詳／映画 DVD

1955（昭和 30）年頃の撮影で、当時としては珍しいカラー映像。旭川駅から始まり、旭橋、護国神社など旭川市内の様子が続き、東川村までの電車が映る。志比内からでこぼこ道をバスが進み、旭岳がくっきり見える。柱状節理、天人峡温泉宿の遠景、当時は温泉街に遊具や売店もあった。羽衣の滝、水量豊富な敷島の滝、勇駒別温泉の湯の沼、天女ケ原などが続き、女性や子供が交じった東川村の人たちがキバナシャクナゲ、イワウメなどが咲く姿見の池周辺の散策を楽しんでいる映像が印象的。無声映画を DVD で保存。

974　「雪の結晶」　たのしい科学　物性

岩波映像／岩波映像
452 ー タ

岩波映画製作所が作った「雪の結晶」など 7 本の科学映画を岩波映像が「たのしい科学　物性」として DVD に復元した。雪博士、中谷宇吉郎が 1949 年、中谷研究室プロダクションを設立、1950 年に岩波映画製作所に改めた。同じ 1950 年、「岩波写真文庫」が創刊され、写真文庫の写真を岩波映画製作所が担当することが多く、この年に発行された岩波写真文庫 7「雪の結晶」は監修・中谷宇吉郎、花島政人、写真・岩波映画製作所。映画の内容が写真文庫とほぼ同じなので、同じ時期に同じメンバーに写真家、吉田六郎らが加わって制作されたと思われるが、監督や撮影者の名前のテロップはない。しかし、映画の中に旭岳ふもとの仰岳荘前に掘った雪洞や、顕微鏡で雪の結晶を観察する中谷博士が登場する。約 13 分のモノクロ。他に「窓の霜」「氷の観察」、花島が出演している「もののきっかけ」など。

インデックス

著者・編者名（50 音順）

アイヌ語地名研究会
アイヌ語地名研究　16 ……127

相原求一朗
画家・相原求一朗の生涯 …… 74

青柳栄次
日本 200 名山を登る（上巻）…… 85
日本を登る　百名山（上巻）…… 86

青柳鶴治
北海道石狩國上川郡明細圖 ……147

赤松勲
山とスキー　第 2 年合本 ……126

赤松勉
忠別川は秘めている …… 68

秋月俊幸
書簡集からみた宮部金吾 …… 75

秋庭隆
日本地名大百科 …… 46

秋庭ヤエ子
ナナカマドの挽歌 …… 68

秋元笻男
大雪山（エアリアマップ山と高原地図 41　旭川・層雲峡・東大雪・十勝連峰）…… 79

秋元笻男ほか
薄雪草Ⅱ　創立 20 周年記念 ……128

旭川勤労者山岳会創立 10 周年記念誌編集委員会
碧水　Vol.3 ……135

旭川山岳会創立五十周年記念事業実行委員会
創立五十周年記念誌 ……132

監修　旭川山岳会
大雪山（登山地図）……141
十勝岳連峰・トムラウシ山（登山地図）……142

旭川山岳会
登山ガイド　1974 年版 …… 85
登山ガイド　1986 年版 …… 85

旭川市博物館
小泉秀雄展　大雪山の父そして旭川 ……139

旭川生物同好会
群落　旭川西高等学校生物部創部 60 周年記念誌 ……131

旭川中学校学友会
学友会雑誌　第 13 号 ……129

製作　旭川電気軌道株式会社
山は呼ぶ ……150

旭川土木現業所
一般道々旭川－大雪山－層雲峡線計画 …… 91
天人峡砂防ダム …… 63

あさひ出版社
大雪山登山案内図　スキーコース付…141

朝日新聞社
日本百名山ビジュアル登山ガイド上 北海道、東北、上信越、北アルプスの 50 山 …… 86
流域紀行 ……117

監修　朝日新聞社北海道支社
北海道の自然 100 選 …… 70

朝日新聞北海道支社報道部
北を飛ぶ …… 96
北海道自然 100 選紀行 …… 69

旭岳ビジターセンター
大雪山・旭岳の自然観察ガイドブック… 79

旭岳ファンクラブ
旭岳通信 ……118

朝比奈英三
北大山岳部五十周年記念誌 ……135

梓林太郎
旭川・大雪　白い殺人者 ……105
大雪山殺人事件 ……103
大雪・層雲峡殺人事件 ……109

東　晃
雪と氷の科学者　中谷宇吉郎 …… 77

東延江
北海道の碑 ……113

足立源一郎
足立源一郎スケッチ帖 日本の山旅‥ 94

阿地政美
北の峰々とともに　道岳連 50 年のあゆみ ……130

アテネ書房編集部
山岳　総目次（創刊号～第 1 号～第 33 号）……133

姉崎等
クマにあったらどうするか ……145

阿部泰三
熊に関する百訓 …… 42

阿部智一ほか
風と岩の音　田所一義君追悼集 …… 65

阿部要介
札幌グランドホテルの 50 年 …… 67

天野市太郎
北海の高峯　大雪山登山案内 …… 82

荒井魏
日本三百名山 …… 45

新井敏記
Coyote　№ 57 ……122

アルプ編集委員
アルプ ……120

淡川舜平
続・野帳 ……137

安細和彦
私のラバさん　酋長の娘 ……118

安足間観光協会
大雪山国立公園　愛山渓温泉 …… 79

飯田稔
森林を生かした野外教育 ……146

井内俊之
熊笹　11 号 ……130

生きている森編集委員会
地球大百科　生きている森 7　クマの王国 …… 68

池内了
雪は天からの手紙　中谷宇吉郎エッセイ集 ……117

監修　池田末則、編著　村石利夫
日本山岳ルーツ大辞典 …… 45

池田常道
岩と雪　60 号 ……120

石狩川開発建設部
石狩川 100 話　石狩川治水 100 年の歴史をたどる …… 40

石狩川源流原生林総合調査団
石狩川源流原生林総合調査報告 1952-54 …… 51

石川球太
牙王（少年マガジン収録）……122
牙王 1～3 …… 96
旅ゆけば　阿寒湖物語 …… 98

石川啄木ら 30 名
太古の原野に夢見て ……109

石川俊夫
北の火山 …… 56

石原巖
山　復刻版全 6 巻 ……138

石原二三朗
追憶　大雪山で大砲を撃った兵の鎮魂譜 …… 63

製作　石原木材合資会社
山の幸 ……149

磯部精一
北海道地名解 …… 48

井田清
詩集　山 ……115

板倉勝宣
山と雪の日記 …… 71

市根井孝悦
市根井孝悦写真集　大雪山 …… 91
カムイの山　北海道の名峰たち …… 95
大雪山 四季の彩り　市根井孝悦写真集 …… 92
大雪山 母なる大地 市根井孝悦写真集 …… 93
日本の名峰 2 大雪・石狩・十勝 …… 93

一原有徳
小さな頂 ……109
小さな頂【戦前の山】……109
残された山　杖の頂 ……112
北海道の山 …… 89

一等三角点研究会
一等三角点百名山 …… 83
一等三角点全国ガイド …… 83

井手賁夫
井手賁夫随筆集　その一　私の山・旅・友 …… 64

井出孫六
日本百名峠 …… 47
伊藤健次
大雪山を歩く …… 81
日本百名山　登山ガイド決定版　上 …… 86
北海道の山　大雪山・十勝連峰 …… 82
山わたる風 …… 117
伊藤浩司
北海道の高山植物と山草 …… 48
伊藤徹秀
北紀行　風の恋歌 …… 106
雑誌『風土』創刊号 …… 125
伊藤秀五郎
北の山 …… 106
北の山 続篇 …… 106
北大山岳部々報 1 …… 135
犬飼哲夫
大雪山概観（日本生物地理学会誌・別刷） …… 132
犬飼哲夫、門崎允昭
北海道の自然　ヒグマ …… 70
井上功夫
ワイルドビュー …… 127
井上直一
海にも雪があった …… 65
井上靖、河北倫明
美しい日本 1　北海道 / 東北 …… 94
監修　井上靖、写真　森田敏隆
日本国立公園（全4巻） …… 98
茨木猪之吉
山の画帖 …… 116
作曲　伊福部昭
音楽劇ヌタック・カウシュペ …… 148
今西錦司
日本の湖沼と渓谷 …… 86
今西錦司ら
名峰百景（決定版　自然の心）家庭画報編 …… 126
今村朋信
えぞ山岳会三十周年記念誌 …… 128
今村朋信、鮫島惇一郎
山と私たち …… 60
今村朋信・大森弘一郎
空撮登山ガイド8　利尻・知床・大雪 10 コース …… 84
著　岩科小一郎、編　藤本一美
山ことば辞典 …… 50
岩波映像
「雪の結晶」 たのしい科学　物性 …… 150
岩波書店編集部
旭川・大雪山 …… 82
旭川・大雪山 1958　復刻ワイド版 …… 82
雪の結晶　岩波写真文庫 7 …… 102
岩橋崇至
カムイの詩がきこえる　北ぐにの山々 …… 95
岩間正夫
世界山岳百科事典 …… 44
岩村和彦
北海道　沢登りガイド …… 87
上野三郎
慶応義塾山岳会北海道旅行（大登会叢書第 3 号） …… 131
ウッドペッカー Vol.2 1985 編集委員会
ウッドペッカー vol.2 …… 38
梅木通徳
蝦夷古地図物語 …… 55
梅沢俊
北の花名山ガイド …… 84
諸国名山案内 [第1巻] 北海道 …… 84
大雪山　花の山旅① …… 81
大雪山　北海道山の花図鑑 …… 85
花風景　北海道 …… 100
「新版」北海道の高山植物 …… 48
北海道　花の散歩道 …… 101
北海道　花の散歩道（改訂版　続） …… 101
北海道　山歩き花めぐり …… 114
野外見分け図鑑　北海道の高山植物 …… 49
梅沢俊、伊藤健次
北海道百名山 …… 89
梅沢俊・菅原靖彦
夏山ガイド②表大雪の山々 …… 82
夏山ガイド③　東・北大雪　十勝連峰の山々 …… 82
梅沢俊、瀬尾央
北海道の山々 新版・空撮登山ガイド 1 …… 89
瓜生卓造
日本山岳文学史 …… 76
STV ラジオ
続『ほっかいどう百年物語』 …… 77
続々『ほっかいどう百年物語』 …… 77
第五集『ほっかいどう百年物語』 …… 77
HIT 企画
大雪山の四季 …… 148
NHK
大雪山　雪が育む神秘の高原 …… 149
NHK 北海道本部
北海道地名誌 …… 48
NHK 北海道ビジョン
大いなる霊峰　大雪山　秋 …… 148
江嵜三郎
北大山岳部々報3 …… 136
エムジーコーポレーション
北海道隠れ湯 28 選 …… 87
遠藤一郎
歌集『米寿碌碌』 …… 112
道草山行ひとり旅 …… 70
山恋う母娘 …… 115
おいらく山岳会
山行手帖　おいらく山岳会 30 周年記念号 …… 138
大内倫文、堀井克之
最新山のガイド―北海道の山と谷（改訂版） …… 84
相賀徹夫
山　生きている大地 …… 50
大島亮吉
新編・山　紀行と随想 …… 71
山　研究と随想 …… 71
山　随想 …… 71
山 ―随想― …… 71
著　大島亮吉、編　安川茂雄
登高者 …… 111
太田紫織
オークブリッジ邸の笑わない貴婦人 …… 105
太田龍太郎
霊山碧水 …… 64
大塚友記憲
大雪山 ―神々の遊ぶ庭（カムイミンタラ）を読む …… 38
ブラボー！大雪山 …… 93
大戸昌雄
ヌタック　1 号 …… 133
大野精七
記念―創立拾五年 …… 130
著　大橋うめ、編　遠藤一郎
寂しき遊戯 …… 107
大橋弘一
北海道の自然を美しく撮る 55SPOT ガイド …… 88
北海道野鳥観察地ガイド …… 90
大町桂月
桂月全集 第 1 巻 美文韻文 …… 145
桂月全集 第 2 巻 紀行 1 …… 145
桂月全集 第 3 巻 紀行 2 …… 146
桂月全集 第 4 巻 史伝 1 …… 146
桂月全集 第 5 巻 史伝 2 …… 146
桂月全集 第 6 巻 史伝 3 …… 146
桂月全集 第 7 巻 史伝 4 …… 146
桂月全集 第 8 巻 評論随筆 …… 146
桂月全集 第 9 巻 修養 1 …… 146
桂月全集 第 10 巻 修養 2 …… 146
桂月全集 第 11 巻 修養 3 …… 146
桂月全集 第 12 巻　詩歌、俳句、書簡、雑篇 …… 146
桂月全集 別巻 …… 107
大室幹雄
志賀重昂『日本風景論』精読 …… 44
大森弘一郎
空撮　日本の名峰 …… 96
大山正信
町医者の記―おじさんのハンドバッグ …… 114
岡　潔、茅誠司、藤岡由夫
中谷宇吉郎随筆選集第 2 巻 …… 111
写真　岡田紅陽
北海道の風景 …… 143

岡部一彦
空から見る日本の山々 …… 97
岡本陸人
アルピニスト　第８号 ……127
小川寛之
北海道トレッキングサポート BOOK … 88
奥田實
大雪山 …… 92
大雪山のお花畑 …… 92
大雪山の花 …… 93
北海道　花の大地 …… 94
奥村芳太郎
日本の名山　四季の山容を探る …… 99
小田島護
原色野生哺乳動物 …… 43
大雪山のヒグマ …… 62
大雪山ヒグマ物語　ヒグマとの共存の道を探る …… 63
北海道の野生動物 …… 49
野生のヒグマ : 母グマ K 子の記録 … 64
小野寺淳子
新北海道の民営温泉 …… 84
小野寺与吉
カムイミンダル ……102
小原弘也
大雪山 …… 78
表正彦
北海道無料 100 秘湯ガイドブック … 90
監修　開高健
自然探訪（1）北海道・東北を歩く …108
開高健
ロビンソンの末裔 ……118
ロビンソンの末裔（文庫本）……118
科学教育研究協議会
旭川サークル編
上川盆地の自然　巡検テキスト …… 83
郭城孟、黄俊溢、高美芳
蕨影 ……146
岳人編集部
岳人事典 …… 41
葛西晴雄
北大山岳部々報6 ……136
笠原稔、鏡味洋史、
笹谷努、谷岡勇市郎
北海道の地震と津波 …… 59
柏瀬祐之
日本登山大系 1 北海道・東北の山 … 86
春日俊吉
山岳遭難記1 …… 67
片平孝
雪と氷の大研究 ……102
片山修三
冬山への招待 …… 87
勝井義雄 ら共著
北海道の活火山 …… 59
加納一郎
山とスキー ……126
加藤峰夫
国立公園の法と制度 …… 56
監修　加藤睦奥雄、沼田眞、
渡部景隆、畑正憲
日本の天然記念物 …… 99
「角川日本地名大辞典」
編纂委員会
角川日本地名大辞典　北海道・上巻地名編 …… 41
角川日本地名大辞典　北海道・下巻総説・地誌編・資料編 …… 41
角川文化振興財団
（代表・加藤楸邨）
北海道・東北ふるさと大歳時記 ……113
門崎充昭ら編集委員
帯広畜産大学　山岳部　部報第２号 ‥128
著　金井弘夫、編　大場秀章
金井弘夫著作集 …… 56
加納一郎
大雪山國立公園　林業解説シリーズ 16 ‥ 80
北海道の山と雪　加納一郎著作集 3 ‥113
蒲谷鶴彦
日本野鳥紀行 …… 47
鎌倉春雄
昭和ひと桁生かされて八十四年 …… 75
鎌田明徳
イララエカッチ 02 …… 41
上川営林署
風災 1400 萬石 …… 54
上川営林署・上川町
風倒　風倒木処理終了記念 …… 63
上川支庁
上川の概況 …… 42
上川支庁・上川中部広域市
町村圏振興協議会
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第１～第３話編 …… 40
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第４～第６話編 …… 40
上川中学校学友会
学友会雑誌　第１号 ……129
上川町
大雪山観光道路 …… 62
上川町自然科学研究会会員
上川町の自然　第 20 集 ……129
上川町社会科郷土読本編集
委員会
かみかわ　小学校社会科副読本 …… 41
上川町役場企画総務課企画
グループ
わが心の上川　Kamikawa On My Mind …… 91
上川町立上川中学校　理科
グループ
かみかわ = 生物編 = …… 41
かみかわ = 地学編 = …… 42
かみかわ = 野外観察編 = …… 42
上士幌町ひがし大雪博物館
上士幌町ひがし大雪博物館研究報告 ‥ 52
上富良野町郷土館
大正 15 年十勝岳大爆発記録写真集 ‥ 62
神山健
北の岳友とともに　北海道山岳連盟 60 周年記念誌 ……129
カムイミンタラ編集室
カムイミンタラ ……121
川口邦雄
日本の山 100 …… 99
川崎隆章
山岳事典 …… 44
登山講座　第５巻 …… 45
川崎吉光
日本百名山　登山案内 …… 86
川嶋康男
いのちの代償 …… 61
凍（しば）れるいのち …… 62
監修　川端康成、佐藤春夫、
志賀直哉
現代紀行文学全集　山岳編（上）…107
河原昌春
月刊　わが北海道　３－８ ……127
監修　川道武男
ナキウサギの声が聞きたい …… 40
川道武男
日本動物大百科 …… 46
川村耕造
大雪山山行印象記 …… 62
環境省
日本の国立公園　１～６ …… 46
環境庁
大雪山国立公園登山案内 …… 80
日本の重要な植物群落　北海道版 ‥ 57
監修・環境庁自然保護局国
立公園課、編集・財団法人
国立公園協会
国立公園図鑑 …… 43
菊池モト
詩文集　層雲峡四季 ……103
菊谷清蔵
層雲峡温泉小唄 ……103
気象庁
日本活火山総覧（第4版）…… 57
其水堂
大雪山と層雲峡 ……141
北中康文
日本の滝①　東日本 661 滝 …… 99
ニッポンの滝 100 選 …… 99
北林利仁
切手の中の北海道 …… 96
北道邦彦
アイヌ語地名で旅する北海道 …… 64

記念事業協賛会
開校五十年史　北海道旭川東高等学校 …… 128
木下孝浩
POPEYE　第38巻第2号 …… 126
木野工
樹と雪と甲虫と …… 103
木原直彦
北海道文学散歩　道北編 …… 114
九糸郎
単独行 …… 109
京都山岳会
京都山岳　六十周年記念号 …… 130
山岳会「クーラカンリ」
夏山登山教程 …… 85
日下哉
北海道安全な登山 …… 87
串田孫一
北海道の旅 …… 113
串田孫一、今井通子、今福龍太
大雪山　日本の名山01 …… 109
口野哲夫
中谷宇吉郎ゆかりの地 …… 76
工藤岳
大雪山のお花畑が語ること …… 38
久保敬親
エゾヒグマ　残された聖域 …… 95
キタキツネとの出会い …… 95
シマリスの四季 …… 97
大雪山の動物たち …… 93
熊谷洋一
國立公園　通巻729号 …… 131
熊原政男
登山の先駆者たち …… 75
栗田希代子
句集　日本百名山 …… 111
栗林薫
北海道一般スキー八十年の歩み …… 69
栗谷川健一
カラー北海道 …… 83
黒川宣之
週刊金曜日№382 …… 122
黒田隆二
SKI&SKI　報知グラフ別冊'75① …… 123
桑原武夫
桑原武夫紀行文集　1 …… 107
桑原宏
桑原宏画集　画業60年・傘寿記念 …… 96
桑原康彰
大雪山の動物記 …… 62
郡司武
週刊・日本百名山　全50冊 …… 122
経済安定本部資源調査会
大雪山積雪水量及び流出調査 …… 53
小疇尚
山を読む …… 61
小疇尚、福田正己、石城謙吉、酒井昭、佐久間敏雄、菊池勝弘
日本の自然・北海道 …… 57
小池省二
北の火の山 …… 66
続　北の火の山 …… 66
小泉武栄
図説日本の山：自然が素晴らしい山50選 …… 97
日本の山と高山植物 …… 57
日本の山はなぜ美しい …… 58
山歩きの自然学 …… 60
山の自然学 …… 60
山の自然教室 …… 90
小泉武栄、赤坂憲雄
自然景観の成り立ちを探る …… 56
小泉秀雄
山岳　第拾貳年第二・三號 …… 52
大雪山　登山法及登山案内 …… 81
北海道高山植物図譜　附菌類 …… 58
北海道中央高地の地学的研究附図 …… 149
高知県文学館
生誕140年　大町桂月 …… 95
高知県立坂本龍馬記念館
北の大地に生きて …… 96
河野常吉
大雪山及石狩川上流探検開発史 …… 38
河野廣道
北方昆虫記 …… 49
国府谷盛明
大雪山の生いたち …… 81
国鉄山岳連盟
駅から登れる山 …… 83
国立公園
国定公園シリーズ1～15 …… 139
国立公園シリーズ1～23 …… 43
国立公園協会
大雪山國立公園　シリーズ14 …… 80
国立大雪青年の家
十勝岳連峰の自然と野外活動 …… 82
児島勘次
登山歴程 …… 68
後藤憲太郎
大雪山に生きた男　天野市太郎先生を偲んで …… 73
後藤茂樹
夏山への招待 …… 85
後藤昌美
大雪残象 …… 92
小林昭裕
高山帯における登山道やその踏みつけによる被害への対応 …… 52
山岳性自然公園における利用者の意識構造に関する研究 …… 52
自然公園における野外レクリエーションに伴う過剰利用に処するための方策 …… 53
斜面上に分散した登山道が形成される要因 …… 53
利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策 …… 55
小林昭裕、愛甲哲也
利用者の行動と体験（自然公園シリーズ2） …… 61
小林禎作、古川義純
[雪]の結晶 …… 94
小林實
十勝の森林鉄道 …… 45
小林義正
山と書物／続・山と書物 …… 60
駒井千恵子
大雪山花の道　エゾコザクラに逢いたくて …… 62
近藤信行
山の旅　大正・昭和篇 …… 116
昆野安彦
大雪山の自然2高山植物 …… 39
大雪山の自然3動物 昆虫 …… 39
大雪山の自然観察ガイド …… 81
昆野安彦・岡井　健
大雪山・十勝岳・知床・阿寒の山 …… 85
財団法人自然公園財団
レンジャーの先駆（パイオニア）者たち …… 61
財団法人日本自然保護協会
十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書 …… 57
斎藤一男
日本の岳人たち …… 76
日本の名山を考える …… 47
斎藤浪子
金沢山岳文庫　北海道山岳文献目録 …… 41
斎藤信義
雪晴風 …… 117
齊藤勝
大雪山國立公園　概要と探勝 …… 79
北海道温泉地案内 …… 87
坂井久光
聳嶺　第五号 …… 131
聳嶺　第九号 …… 131
聳嶺　第十号 …… 132
坂倉登喜子
女性のための百名山 …… 84
坂本直行
原野から見た山 …… 66
坂本直行　國立公園大雪山 …… 140
雪原の足あと …… 97
桜井徳太郎
歴史の山100選 …… 50
佐古清隆
ひとりぼっちの日本百名山 …… 112
笹川良江
「大雪山国立公園」生みの親　太田龍太郎の生涯 …… 72

佐々木正紀
週刊続日本百名山 …… 84
笹本稜平
分水嶺 ……104
佐々保雄
北海道中央高地積雪期登山抄 …… 64
監修　佐竹義輔
アルプスの自然　お花畑 …… 94
札幌学院大学人文学部
北海道と環境保護 …… 48
札幌山岳会
山脈越えて　創立五十周年記念誌 …138
札幌市教育委員会社会教育課
札幌・大正の青春 …… 43
札幌鐵道局
國立公園候補地　大雪山風景 ……139
大雪山國立公園　昭和九年版 …… 79
佐藤喜一
大雪山系の詩人・作家群（『月刊道北』連載）……123
十勝泥流 ……110
企画構成　佐藤庫之介
大雪山国立公園層雲峡 …… 80
佐藤翠陽
十勝嶽大観 ……142
佐藤清吉
大雪山のキノコ　新版 …… 38
佐藤孝夫
大雪山 …… 92
佐藤徹雄
北海道のスキーづくり …… 59
佐藤文彦
大雪山　十勝岳・幌尻岳　山と高原地図３ …… 81
佐藤康幸
熊笹　13号 ……130
佐藤圭樹
ヌプカ創刊号 ……124
佐野高太郎
北海道リスとナキウサギの季節 …… 94
鮫島和子
貼り絵に託した　四季 ……100
鮫島惇一郎
エンレイソウ …… 52
画文集　北ぐにの花暦 …… 95
北の森の植物たち …… 66
草と樹 …… 66
写真で綴る　ミズバショウ日記 …… 97
北方林業表紙写真集（1999）……101
北方林業表紙写真集（2008）……101
北方林業表紙写真集（2013）……101
北方林業表紙写真集 ……102
山とその花 ……116
更科源蔵
北方風物　第一輯 ……125
更科源蔵・安藤美紀夫
日本の伝説 17（北海道の伝説） …… 46
文　更科源蔵、版画　大本靖
続・北海道繪本 ……113
文　更科源蔵、版画　松見八百造
北海道繪本 ……113
更科源蔵、渡辺茂
北海道の伝説 …… 49
澤田啓
クロカンマップ２ …… 78
山岳研究会
山の資料　登山ハンドブックシリーズ６ …… 61
山岳写真集団
わが心の山 ……102
塩田惇
北の草花散歩　じぶんの植物図鑑…145
北の草花散歩　野山編　じぶんの植物図鑑 ……145
塩谷忠
大町桂月翁を想う（『寒帯林』掲載）‥128
層雲峡案内―附大雪山登山案内 …… 78
大雪山・層雲峡　写真帳 …… 92
北海アルプス寫真帖 …… 93
塩谷秀和
大雪山の四季　精霊の大地から …… 67
志賀重昂
日本風景論 …… 58
日本風景論（文庫本）…… 58
志賀芳彦
大雪　志賀芳彦写真集 …… 93
大地の鼓動　志賀芳彦写真集成 …… 97
志賀芳彦・写真
名峰シリーズ　大雪山 …… 94
式正英
自然の博物誌　＜山＞ …… 67
四手井綱英、林知己夫
森林をみる心 …… 57
島村宣弘
ガーデンライフ　1972年７月号 ……120
清水一行
北海道の山 ……125
清水長正
百名山の自然学　東日本篇 ……100
清水敏一
大町桂月の大雪山 …… 72
小泉秀雄植物図集 …… 96
知られざる大雪山の画家・村田丹下… 72
大雪山の父　小泉秀雄 …… 45
大雪山の父・小泉秀雄の生涯 ……123
大雪山の父・小泉秀雄（まめほん）…… 73
大雪山の父・小泉秀雄 …… 73
大雪山文献書誌 第１巻 …… 39
大雪山文献書誌 第２巻 …… 39
大雪山文献書誌 第３巻 …… 39
大雪山文献書誌 第４巻 …… 39
大雪山わが山小泉秀雄 …… 73
続・大雪山わが山小泉秀雄 …… 73
示村貞夫
旭川明治屋の百年 …… 73
下村保太郎
大雪山系 ……147
写真集「エゾナキウサギ」編集委員会
エゾナキウサギ　ナキウサギふぁんくらぶ写真集 …… 94
編者　写真文化首都「写真の町」東川町、執筆　清水敏一、西原義弘・写真　大塚友記憲
大雪山 ―神々の遊ぶ庭（カムイミンタラ）を読む …… 38
庄子康
ＲＯＳ　～新たな自然公園管理に向けて～ …… 51
白樺荘同窓会事務局
樹海の中の赤い屋根 ……131
城山三郎
怒りの標的 ……105
人文社観光と旅編集部
郷土資料事典―北海道・観光と旅 … 42
菅井康司
skier '75　別冊山と渓谷 ……123
菅原靖彦
北海道・ファミリー登山 …… 90
スキージャーナル
ザ・ラストフロンティア ……122
監修　鈴木修、編　足立朗ほか
日本の名山　北海道編 …… 99
文・写真・鈴木欣司
写真・長谷川和良
かわいいナキウサギ …… 91
鈴木良策
大雪山　旭岳　鈴木良策　写真集 ‥ 92
須藤宣之助
北大山岳部々報２ ……135
瀬川拓郎
アイヌの世界 …… 64
関口隆嗣
パークボランティアのための大雪山自然解説マニュアル …… 82
関根幸次、中庄谷直、岩崎元郎
日本百名谷 …… 47
全国自然保護連合
自然保護事典［山と森林］ …… 44
全国登山口調査会
北海道登山口情報350 …… 88
全日本山岳写真協会
山稜の四季 …… 97
第37回全日本登山体育大会実行委員会
第37回全日本登山体育大会開催要項「大雪山　カムイミンタラの集い」 ……140

層雲閣
御絵葉書 …… 138

層雲峡観光協会
大雪山登山案内図 …… 81
大雪山のあゆみ …… 38

第一アートセンター
日本の名山 1　大雪・日高と北海道の名山 …… 47

大雪山絵画コンクール実行委員会
大雪山絵画コンクール受賞作品集 … 92

製作　大雪山国立公園、東川村開発期成会
国立公園大雪山 …… 148

大雪山国立公園 50 年記念事業推進協議会
北海道大雪山　大雪山国立公園指定 50 周年記念写真集 …… 93

大雪山国立公園観光連盟
ぐるり大雪 …… 78
国立公園大雪山 …… 78

大雪山国立公園層雲峡管理事務所
大雪山国立公園　自然観察ガイド … 80

大雪山国立公園層雲峡管理官事務所
大雪山国立公園　大雪山の自然解説マニュアル …… 80

大雪山国立公園連絡協議会
大雪山国立公園　研究・文献集 …… 53

大雪山自然学校
すがたみのはなたち …… 78

大雪山自然観察講座を記録する会
ウッドペッカー vol.1 …… 38
ウッドペッカー vol.3 …… 38

大雪山調査会
国立公園大雪山層雲峡 …… 139
層雲峡　大町桂月記念號 …… 72

大雪山のナキウサギ裁判を支援する会
大雪山のナキウサギ裁判 …… 62

大雪山・山守隊
Dynamic Daisetsu. …… 132

大雪と石狩の自然を守る会
カムイミンタラ　創立２０周年記念号 ‥ 129
大規模林道はいりません …… 141
ナキウサギと考える大雪山の自然 … 142
ヌタプカムシペ …… 134

〝大雪の自然を守る会〟準備会
大雪山の自然をまもろう　№ 1 …… 132

大雪の自然を守る会
大雪山の自然をまもろう　№ 2 ～№ 4 ‥ 132

編　第二アートセンター、監修　近藤信行
山・やま事典 …… 50

大門金光
大門金光・天人閣支配人の記録 …… 73

鯛　嘉行
季刊「銀花」 第 118 号 …… 121

高木直子、渡辺裕美子、中村直弘、岩本恭子
イトナンリルゥ　山情報　大雪山 2001 年　総集編 …… 61

高倉新一郎
北海道史の歴史 …… 48

高澤光雄
薄雪草　創立 10 周年記念 …… 128
北の山と本　その登山史的考察 …… 66
敬山愛林 秀岳荘創業 50 周年記念誌 ‥ 43
山書趣味（1 ～ 10 巻） …… 131
秀岳荘創業 50 周年記念「山の素描」の執筆者たち …… 75
大雪山讃歌 …… 104
大雪山への誘い …… 132
たいせつノート …… 142
愉しき山脈 …… 68
日高山脈の先蹤者　相川修遺稿集 ‥ 76
北海道中央分水嶺踏査記録　―宗谷岬から白神岬まで …… 70
北海道登山記録と研究 …… 70
北海道登山史年表 …… 70
北海道の登山史探究 …… 70
山旅句　エッセイ集 …… 115
山の仲間と五十年 …… 71
北の山の夜明け …… 74

監修・高澤光雄、編集・広坂光則
大雪山博物メモ …… 142

高田勝、叶内拓哉
野鳥の羽ハンドブック …… 49

高頭式
復刻版　日本山嶽志 …… 45

高頭　仁兵衛
山岳　第十二年第一號 …… 131

高野英二
北方野草　第 14 号 …… 137

高橋丑太郎
広葉樹に惚れて五十年 …… 66

高橋定昌
日本岳連史 …… 124

高橋延清
樹海　夢、森に降りつむ …… 108

高橋秀雄
大雪山と丘の四季 …… 92
特別天然記念物大雪山の花・大雪山国立公園大雪山の山 …… 82

高橋秀雄・後藤昌美
大雪山の四季 …… 148

高橋正樹・小林哲夫
北海道の火山 …… 59

高本曉堂
国立公園大雪山阿寒洞爺勝景大観 ‥ 97

滝本幸夫
北の山・記録と案内 …… 84
北の山の栄光と悲劇 …… 66
北海道中央分水嶺踏査　余話 …… 70
私の中の深田久弥 「日本百名山」以降の北の山紀行 …… 118

竹内武夫
ヌプリ　創刊号 …… 134
ヌプリ　十勝岳爆發號 …… 134
ヌプリ　北海道山岳紀行号 …… 134
ヌプリ　北海道山岳写真号 …… 134

武内正
日本山名総覧 …… 45

武田久吉
高山植物の話 …… 43
明治の山旅 …… 114

田島繁得
輝く北海道 MAGNIFICENT HOKKAIDO …… 83

辰野勇
岳人 …… 120
岳人　№ 817 …… 121

舘田外行
回顧録　牛と夢 …… 74

立松和平
百霊峰巡礼　第二集 …… 76

舘脇操
石狩川上流高原温泉の植物 …… 51
石狩川上流のことども …… 51
えぞまつ・とゞまつ …… 56
観光の泣きどころ …… 52
北国の花 …… 106
大雪山の植物 …… 39
道博高山植物館と植物園 …… 40
十勝岳山彙の植物 …… 54
北海道の植物 …… 113
北海道本島高山帯植物の分類学的類別研究 …… 59
北方植物の旅 …… 114
北方の植物 …… 114

舘脇操・鮫島惇一郎
北海道中央高地の高山植物 …… 55

監修・舘脇操　編集・中野正彦、吹上芳雄、千廣俊幸
北海道森林植物　写真図譜（Ⅰ．草本篇） …… 101

監修・舘脇操　編集・中野正彦、中村幸雄、吹上芳雄、三角亨、鮫島惇一郎
北海道森林植物　写真図譜（Ⅱ．木本篇） …… 101

田中三郎
六十歳からの日本三百名山 …… 118

田中澄江
花の百名山 …… 112
新・花の百名山 …… 112
私はいつでも山に登りたい …… 118

田中正大
日本の自然公園 自然保護と風景保護 ‥ 46

田中館秀三
十勝岳硫黄山の噴火原因と現状（地学雑誌　451 号別刷） …… 124
十勝岳爆發概報 …… 54

田中長三郎
泥火山 ……110
田中博
シマフクロウの聲がきこえる。…… 97
田中三晴
北海道の山岳（登山案内）…… 88
田辺和雄
山とお花畑2 ……102
文・谷川俊太郎、写真・吉田六郎、企画構成・吉田覚
きらきら …… 91
種市佐改
阿寒国立公園の三恩人 …… 73
田淵行男
大雪の蝶 …… 54
多摩雪雄
一等三角点のすべて …… 55
田丸誠
ヌプンケシ ……134
田村健太朗、青木妙子、若林里江
観光北海道じてん …… 84
俵浩三
自然にやさしい観光デザイン ……146
自然観察会の参考資料 ……146
「自然を見る目」の原点 ……146
世界に誇る大雪山を後世へ ……140
大規模林道の「中止」に寄せて ……132
北海道・緑の環境史 …… 60
松浦武四郎・蝦夷地登山の実像 ……144
緑資源幹線林道は「中止」の正念場を迎えた ……137
緑資源幹線林道・無駄な公共事業が自然を破壊 ……137
北海道自然保護小史 …… 48
北海道の自然美を訪ねて …… 88
北海道の自然保護　その歴史と思想（1979） …… 58
北海道の自然保護　その歴史と思想（増補版）…… 58
緑の文化史 …… 60
俵浩三・今村朋信
北海道の山 …… 89
俵浩三、鮫島惇一郎、成瀬廉二、八木健三
水と私たち …… 60
俵浩三、辻井達一
森と私たち …… 60
丹治茂雄
氷河時代の置き手紙 …… 69
丹治茂雄・千葉圭介 写真集
ナキウサギ　神々の庭に遊ぶ …… 93
丹征昭
北の渓谷 …… 65
北の山旅 …… 66
山と彷徨 …… 71
千葉章仁
平原の手帖　13号 ……125
千葉圭介
Freedom　―大雪の動物たち― …… 93
千葉達朗
活火山・活断層 …… 41
千葉萬葉
北海道名所旧蹟 …… 90
忠別ダム記念誌刊行委員会
忠別川と共に生きて　忠別川ダムふるさと誌 …… 68
塚本珪一
日本の高山蝶について ……133
辻井達一、岡田操、高田雅之
北海道の湿原 …… 89
辻井達一、橘ヒサ子
北海道の湿原と植物 …… 89
辻井達一、渡辺祐三
北海道の湿原 …… 89
辻真先
大雪山発殺人物語 ……104
都竹一衛（謄写）
大雪山の洗礼　四十年前の黒岳石室宿泊名簿 …… 39
翼の王国編集部
翼の王国　通巻511号 ……133
鶴田知也
草木図誌 ……108
画文草木帖 ……108
手島圭三郎
おおはくちょうのそら ……145
きたきつねのゆめ ……145
くまげらのもり ……145
しまふくろうのみずうみ ……146
ひぐまのあき ……147
寺島一男
厳冬のカムイミンタラ ……119
大規模林道 ……119
大雪山の自然と世界遺産 ……123
大雪縦貫道 ……119
ナチュラリストのための登山教室テキスト ……147
照井孝太郎
北大山岳部々報5 ……136
出羽寛
大雪山の哺乳類に関する文献（1）… 54
道新旭川政経文化懇話会
綾子・大雪に抱かれて　三浦文学道案内 …… 74
道新スポーツ
北海道の百名山 …… 49
東野勇、米田松栄、滝本堅三郎、横内勇、花本哲行、岡島博
東川の山野草 …… 87
洞爺丸台風森林被害復興50周年記念事業実行委員会事務局
よみがえった森林を未来へ託す　洞爺丸台風から50年 …… 72
戸川幸夫
牙王物語（上）（下）……103
牙王物語 上・下 ……103
牙王物語　新装合本 ……103
戸川幸夫動物文学全集3 ……104
野獣撮影 ……115
原作　戸川幸夫
大雪山の勇者　牙王（ビデオ）……148
徳永正雄
北大山岳部々報4 ……136
徳久球雄
コンサイス日本山名事典（修正版）… 43
山を読む事典 …… 50
編集・徳久球雄、石井光造、竹内正
三省堂日本山名事典 …… 44
栃内信男
ナキウサギの世界 ……149
栃内吉彦
山談花語 ……116
栃木義正
突兀七千有余尺　庁立旭川中学校校歌雑考 …… 68
北海道　集落地名地理 …… 48
北海道地名一覧 …… 59
北海道の地名索引 …… 49
戸塚新太郎
北の植物 ……106
富田祐志
熊笹　12号 ……130
とむら白雲
ヌタプへようこそ　welcome to NUTAP ……149
とむらヒロ＆みの白雲
思い出　ヌタプ　Nutap Memorial …148
豊国秀夫
日本の高山植物 …… 46
豊田武ほか
流域をたどる歴史　第一巻 ……117
豊田千恵
歌集『古代幻想』……106
長尾宏也
日本山岳風土記　6 北海道の山々 … 69
中島信
日本のロープウェイ・ゴンドラ　全ガイド …… 86
監修　中谷泰治
大雪山国立公園旭岳・天人峡自然観察ガイド …… 79
永田洋平
北国の動物たち4　エゾシカの森 … 65
永田芳男
大雪山の花 …… 39
長縄三郎
なぜ排除するのか …… 63

中西敏貴
power of light …… 100
光の彩 …… 100
中村清太郎
ある偃松の独白 …… 105
中谷宇吉郎
イグアノドンの唄 …… 105
大雪山水系及び洪水の研究 …… 53
寺田寅彦の追想 …… 110
雪 …… 117
中谷宇吉郎雪の科学館
寅彦と宇吉郎の絵画展 …… 98
中谷宇吉郎　雪の物語 …… 111
中谷宇吉郎雪の科学館館長、神田健三
天から送られた手紙 …… 110
中谷宇吉郎雪の科学館友の会
中谷宇吉郎ゆかりの人 …… 76
ナキウサギふぁんくらぶ
ナキウサギつうしん …… 124
奈良山雅俊
「天からの手紙」をたどって …… 119
成田新太郎
上川町内のアイヌ語地名解、上川町の川の名・沢の名 …… 42
大雪山自然ハンドブック …… 80
成松岳人
北海道の自然④　大雪の四季 …… 94
南條初五郎
山岳講座　第8巻 …… 44
南條康夫
北海道主要山岳登路概況 …… 87
新妻徹
北海道山岳 …… 137
西岡健二
百名山　山頂(いただき)はいつも仲間と …… 112
西島浩
北海道の自然と生物1～10 …… 59
西田省三
雪山登山ルート …… 90
西野辰吉
石狩川紀行　北海道文明史をさぐる …… 105
大雪山の森番 …… 104
西信博
北海道医報創刊1000号記念写真集 …… 136
山のあなたの空遠く …… 116
山のあなたの空遠くⅡ …… 116
山のあなたの空遠くⅢ …… 116
西原義弘
大雪山 ―神々の遊ぶ庭(カムイミンタラ)を読む …… 38
大雪山と人と …… 119
新田紀敏
天人峡三十三曲がり附近のハゴロモホトトギスの行方(『北方林業』掲載) …… 124
日本観光協会
北海道・阿寒・大雪山国立地区観光診断報告書 …… 58
日本山岳会
新日本山岳誌 …… 44
日本山岳會　會報(一～一〇〇)復刻版 …… 133
日本山岳機関誌　山岳復刻版　第1年～第10年 …… 133
日本山岳会婦人懇談会有志
村井米子追悼集 …… 71
㈶日本自然保護協会
大雪火山群の研究 …… 53
日本名所圖繪社
国立公園大雪山層雲峡 …… 139
日本林業技術協会
石狩川源流森林総合調査報告書 …… 51
ヌタック会
ヌタック（第2次）1～6号 …… 134
布川欣一
山道具が語る日本登山史 …… 71
沼佐隆次
大雪山と阿寒 …… 85
能勢信二、丹羽素雄
山と渓谷　総索引1－379号 …… 126
野呂一夫ほか
大雪の高山植物 …… 40
BIRDER 編集部
決定版　日本の探鳥地　北海道篇 …… 43
フクロウ …… 63
白山書房編集部
日本の渓谷 '96 …… 69
百名山パノラマ案内 …… 100
橋本誠二
北大山岳部々報7 …… 136
橋本広
山嶺抒情　画文集 …… 97
橋本正人
北大山岳部々報8 …… 136
長谷川雄介
日本山岳会北海道支部50年のあゆみ …… 133
長谷川喜彦
観光北海道 …… 83
畠山豊、神原悦子、沢田睦代、城英利、長瀬久雄、西川陽子
上ホロの空遠く　高橋こずえ追悼の本 …… 62
八谷和彦
新版　ガイドブックにない　北海道の山々 …… 65
パック宣研
医と福祉の道のり …… 145
八匠衆一
地宴 …… 110
服部勝宗
部報　第2号 …… 135
部報　第3号 …… 135
部報　第4号 …… 135
羽根田治 ら共編
トムラウシ山遭難はなぜ起きたか …… 63
トムラウシ山遭難はなぜ起きたか（文庫本） …… 63
幅口堅二
JR北海道車内誌 THE JR Hokkaido　318号 …… 122
濱谷浩
日本列島 …… 100
早川禎治
クマネシリ紀行 …… 103
野帳 …… 137
第二次　野帳 …… 138
わが山、源流へのあこがれ …… 118
林和夫追悼集実行委員会
悪場を超えて―林和夫追悼― …… 73
林弥栄
日本の樹木 …… 46
速水潔
冬山 …… 64
原田一典
お雇い外国人―開拓 …… 74
原田康子
北の林 …… 106
原田豊
秘境層雲峡　仙境の思い出 …… 104
原康夫
山と渓谷　№527 …… 126
針重敬喜
武侠世界増刊　山嶽踏破號 …… 125
播磨秀幸
荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書 …… 55
東　晃
雪と氷の科学者　中谷宇吉郎 …… 77
東川エコツーリズム推進協議会
歩こう！大雪山・旭岳の自然 …… 78
大雪山国立公園北部登山地図 …… 141
東川町
旭岳たすかるマップ …… 144
大雪山 ―神々の遊ぶ庭(カムイミンタラ)を読む …… 38
編　樋口敬二
中谷宇吉郎随筆集 …… 111
樋口敬二、池内了
中谷宇吉郎集 …… 111
久野剛男
層雲峡 一万年の記憶 久野剛男写真集 …… 91
ビスターリ編集部
ビスターリ　5号 …… 124
ヒニスム編集室
ヒニスム　10 …… 125
火野葦平
糞尿譚 …… 112
閑良屋会
遙かなる山　Ⅰ～Ⅴ …… 100

桧山修
旭川春秋 ……120
平岡昭利
北海道　地図で読む百年 …… 54
深沢七郎
みちのくの人形たち ……114
深田久弥
山岳遍歴 ……107
山頂の憩い ……107
日本百名山 ……111
日本百名山（文庫本）……112
百名山以外の名山 50 …… 87
深田久弥山の文化館
深田久弥物語　山ありて、わが人生は楽し ……149
深田クラブ
日本　200　名山 …… 45
福岡伸一、神田健三、中谷芙二子
中谷宇吉郎の森羅万象帖 …… 98
福島正秋
ある高校山岳部小史 ……127
福田和民ら写真集編集委員会
懐郷 ……119
藤井敏明
近代洋画に見る日本の名山 …… 96
藤木九三、川崎隆章
山の詩歌　登山全書随想編3 ……117
山の風物誌 登山全書随想編2 ……117
藤原信
スキー場はもういらない …… 67
船山馨
夜の傾斜 ……117
部報 12 号編集委員会
北大山岳部々報 12 号 ……136
ぺたぬぅ発行委員会
ぺたぬぅ　9 号 ……113
宝文館出版
北海道の山々―山の風土とその紀行 ‥113
北大山岳館運営委員会
北大山岳館　蔵書ガイド …… 47
北大ヒグマ研究グループ
エゾヒグマ　その生活をさぐる …… 56
ひぐま通信 ……134
北大山の会
北大山の会　会報 ……136
星野辰男
アサヒグラフ臨時増刊 國立公園號 … 94
細川広子
カムイミンタラ　VOL.31 ……129
北海タイムス社
大雪てくてく体験記　旭工生・旭岳わらじ行 ……119
北大百年の百人 …… 76
北海タイムス（昭和7年10月9日付）…120
北海道秘湯・名湯・露天ぶろ：北の秘湯 …… 89
北海道
北海道の森林 ……101
北海道 NHK 情報ネットワーク
NHK ふるさとデータブック …… 41
北海道開発庁
石狩川水利総合開発計画調査報告（大雪ダム調査報告）…… 55
北海道学芸大学函館分校山岳部
旭岳 …… 61
北海道教育委員会
大雪山 …… 79
大雪山（特別調査報告書）…… 54
北海道の文化財 ……101
北海道教育大学大雪山自然教育研究施設
北海道教育大学 大雪山自然教育研究施設研究報告 …… 58
北海道教育大学函館分校山の会
石笛：佐々木典夫君追悼誌 …… 64
北海道警察本部生活安定部
北海道の環境を守るために …… 70
北海道撮影社
写真集　大雪山　中央高地の自然… 91
北海道秘境の旅　カラーアルバム … 89
監修　北海道山岳連盟
山登りのお役立ちガイド …… 90
北海道自然公園協会
北海道の自然公園 …… 88
北海道自然保護協会（社団法人北海道自然保護協会）
会誌　Bulletin　1～20 ……129
会報「NC」　1～44 ……129
会報「NC」自然･環境･人 45～90 …129
神々の遊ぶ庭　北の自然は今 …… 65
自然を読む …… 75
士幌高原道路問題参考資料 ……140
大雪山・旭岳の自然観察 …… 79
北海道の自然
第 1 号～第 50 号総目次 ……137
北海道の自然 21～51 ……137
山と私たち ～北海道自然保護協会～ ‥ 50
北海道自然保護連合
北の自然　合本№ 41～№ 61 ……130
北の自然　合本№ 62～№ 78 ……130
北海道新聞社
変わりゆく大雪 ……119
北へ…異色人物伝 …… 74
検証　士幌高原道路と時のアセス … 62
再発見　ふるさと北海道 …… 43
大雪山 100 年 ……119
大雪山物語 …… 40
画集　北海道の山 ……101
緑資源機構の林道整備事業をめぐる記事 ……120
北海道新聞社販売促進部
北海道の自然をあるく …… 88
財団法人北海道新聞野生生物基金
モーリー NO27　大雪山に氷河が懸かったら ……126
㈶北海道森林整備公社
森林【もり】への招待 ……144
北海道森林風害記録作成委員会
北海道の森林風害記録 …… 55
北海道生活環境部自然保護課
大雪山系自然生態系総合調査　大雪山系現存植生図 …… 53
北海道総合開発委員会事務局
北海道山村経済の実態　上川郡上川町の調査報告 …… 48
北海道地下資源調査所
旭岳 …… 51
大雪山 …… 53
北海道地方資料センター
北海道の地名 …… 49
北海道廳拓殖部
北海道ニ於ケル國立公園候補地調査概要 …… 59
北海道土木部
一般道道士幌然別湖線道路計画の概要 ……138
北海道の山メーリングリスト
北海道　雪山ガイド（増補新版）… 90
北海道の山と谷再刊委員会
北海道の山と谷㊦ …… 89
北海道のエコツーリズムを考える会
北海道ネイチャーツアーガイド …… 88
北海道文学館
北海道文学百景 ……114
北海道、北海道新聞社、NHK 札幌放送局
北海道まちづくり 100 選 …… 49
北海道林務部
北海道大規模林業圏開発 ……143
堀田弘司
山への挑戦―登山用具は語る― … 72
北方林業会編集員会
北方林業　2014 年 5 月号 ……137
㈱ホツマ
生きる　1988 年 1 月号 ……128
堀井克之
のぼるべ　創刊号 ……134
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明
地図の風景…北海道編Ⅰ道南・道央 ‥ 98
地図の風景　北海道編Ⅱ道東・道北 ‥ 98
本郷常幸、安川茂雄
大島亮吉全集　全 5 巻 ……105
本多勝一
北海道探検記 …… 70

前川整洋
大雪山とトムラウシ …… 104

著　槇有恒ほか　編　高橋清見
日本の山 …… 99

著　松浦武四郎、訳　丸山道子
石狩日誌 …… 40

著　松浦武四郎、訳　丸山道子
十勝日誌 …… 45

松浦勇次、大西敏夫
日本の山岳　登頂跡誌 …… 69

松枝大治、山崎敏晴
中谷宇吉郎研究室　北大理学部教授室 N123 …… 76

松岡達英
日本自然探検の旅・2　生物の大宝庫　大雪山 …… 82

松原岩五郎
最暗黒の東京 …… 67
日本名勝地誌　第9編 北海道之部 …… 58

松本市立博物館
『河野齢蔵』生誕 150 周年記念特別展図録 …… 96

松本司
天上を翔る川 …… 63

真鍋光男
吉積長春遺作展　図録 …… 102

三浦綾子
青い棘 …… 104
岩に立つ …… 105
自我の構図 …… 108
泥流地帯 …… 110
泥流地帯（文庫本）…… 110
続　泥流地帯 …… 110
毒麦の季 …… 110
果て遠き丘 …… 112

三浦綾子・光世
太陽はいつも雲の上に …… 109

三浦章司 ら 4 編集委員
北大山岳部々報 9 号 …… 136

水越武
カムイの森 …… 95

三田博雄
山の思想史 …… 77

緑川洋一
日本の山河 …… 98
日本の山河　水墨の詩 …… 99

緑資源機構
北海道の緑資源幹線林道 …… 148

湊正雄
おもひ出（思ひ出）…… 74
瀬戸君　高田君　追悼録 …… 75

簑浦登美雄
季刊　山の本 …… 121

宮崎二三子
命　今を重ねて　エッセー集 …… 145

宮下岳夫
ステップアップ登山 …… 84

宮下奈都
神さまたちの遊ぶ庭 …… 102

宮島寛
森林王国の復活 …… 44

宮之内一平
造材飯場 …… 108
被写体 …… 112

宮部金吾
高山植物園新設設計書 …… 52

三好文夫
重い神々の下僕 …… 106
大雪山粗描 …… 104

三輪敏広・三輪和恵
山ふたり …… 72

村井米子
山愛の記 …… 115

村上久吉
旭川を中心としたるスキー地 …… 83
郷土を拓いた人々 …… 75
中部の夏山―大雪山及其附近 …… 82

村上啓司
ヌタプカムシペとニセィカウシペ …… 54
日高の山名について　写真集『日高山脈』別刷 …… 100
松浦竹四郎の山岳画（『林』に掲載）…… 137

村串仁三郎
自然保護と戦後日本の国立公園 …… 57
国立公園成立史の研究 …… 56

村田丹下
北海アルプス　大雪山繪葉書 …… 143
北海道大雪山洋画展覧会 …… 143

村田正博
利尻礼文・知床・大雪植物手帳 …… 90

村本輝夫
北の山脈 …… 122

茗溪堂
山の本販売目録 …… 50

望月達夫
遠い山近い山 …… 68

本岡類
大雪山牙と顎の殺人 …… 103

百々瀬満
気軽に北の山 …… 65

森田敏隆
日本の大自然 1 大雪山国立公園 …… 93

八重樫實
北の話 …… 121

八木健三
北の自然を守る　知床、千歳川そして幌延 …… 65
大雪山国立公園でまたも画策される　自然破壊道路 …… 141

八木健三、辻井達一
北海道　自然と人 …… 69

安川茂雄
板倉勝宣書簡集 …… 74

安田治
大雪の山やま …… 142
北海道の登山史 …… 77

安田成男
会報　創立二〇周年記念特別号 …… 129

保田信紀
上川町の自然　生物目録集 …… 42
大雪山昆虫誌 …… 53

矢谷重芳
北海道百番附 …… 144

矢吹勝二
旅（'65 北海道特集）…… 123

山川力
山旅記 …… 115
山とともに在り …… 116

八巻明彦
SKI 特集　報知グラフ '74 第 2 集 …… 123

山口章
山と渓谷　№709 …… 126

山口和男
ＲＯＳ　利用者の多様性に応じた自然公園管理のあり方に関する調査研究報告書（その2）…… 51

山口透
山の素描 …… 127

山崎治
ただ今、八合目　―北の絶境・東大雪日記 …… 109

山崎鋆一郎
大雪山国立公園　層雲峡の展望 …… 80

山田勝美
中国名詩鑑賞辞典 …… 147

山田恵一
大雪山の花 …… 39

山と渓谷山岳図書編集部
日本百名山・登山ガイド　上 …… 86

山と渓谷社
カラー日本の山々 …… 95
日本の山 …… 47
日本の山（山渓カラー名鑑）…… 47
日本百名山地図帳 …… 124
ハイカー …… 124

山根対助
北海道から　第 3 号 …… 47

山藤印刷 100 年史編纂室
印刷の道 100 年 …… 64

山村晋
大雪の父小泉秀雄の足跡 …… 119

山本三生
日本地理大系 10　北海道・樺太編 …… 46

山本進吾
山は命の母 …… 72

山本牧
ヒグマ　gen.3 ……135
山本康雄
大雪形象 …… 92
㈲ナチュラリー
faura ……125
姚正得、廖煥彰
大雪山 ……147
横内斎
山野巡歴 ……108
草木寸景 ……108
草木漫筆 ……109
横内文人
故・小泉秀雄先生の野帳（1） …… 56
横浜市立大学探査会・探検部ＯＢ
追悼　自然を愛した医師・寺島和光 ‥ 75
吉澤一郎
北の山・南の山　研究・随筆・紀行 ‥107
吉田武三
松浦武四郎紀行集　下巻 …… 77
吉田東伍
増補　大日本地名辞書　第八巻 …… 44
吉田友吉
KONOHA …… 78
中央高地　登山詳述年表稿 …… 40
中央高地登山詳述年表稿　出典準拠［増補］ …… 40
吉田友吉の嵐山百科 …… 50
吉田初三郎
北海道開発大博覧会 ……147
北海道の誇り絶勝層雲峡 ……144
吉田六郎
雪の結晶 …… 94
吉野晴朗
ふるさとの富士 200 名山 ……101
吉村重文
ヌタツク　2 号 ……133
芳村宗雄
あるサラリーマンの山 ……105
米村晃多郎
森のひと　どろ亀さん …… 77
読売新聞社北海道支社編集部
ほっかいどう先人探訪 …… 77
よみがえった森林記念事業実行委員会事務局
森林復興の軌跡 洞爺丸台風から 40 年 …… 67
林明輝
大きな自然　大雪山 …… 61
WALK　CORPORATION
花の百名山　登山ガイド …… 86
若林修二
北の雪稜 …… 95
若松直
日本百名山スケッチ紀行 …… 99
渡辺公平
山旅歌集 ……115
渡辺淳一
峰の記憶 ……104
渡辺隆
江戸明治の百名山を行く
―登山の先駆者　松浦武四郎― …… 74
山の履歴簿　第 2 巻 …… 50
渡辺崇彦
大雪山のふもとから　ある山村の四季と暮らし …… 67
渡辺悌二
登山道の保全と管理（自然公園シリーズ 1） …… 57
渡辺光、中野尊正、山口恵一郎、式正英
日本地名大辞典・北海道 …… 46
渡辺文仁
えぞ　1 ……128
渡辺真知子
グラフ旭川 ……122
渡辺康之
ウスバキチョウ …… 51
高山蝶 …… 52
渡辺康之、小田島護
原色蝶 …… 56

著作名（50 音順）

ＲＯＳ　～新たな自然公園管理に向けて～
庄子康 …… 51
ＲＯＳ　利用者の多様性に応じた自然公園管理のあり方に関する調査研究報告書（その２）
山口和男 …… 51
アイヌ語地名研究　16
アイヌ語地名研究会 ……127
アイヌ語地名で旅する北海道
北道邦彦 …… 64
アイヌの世界
瀬川拓郎 …… 64
青い棘
三浦綾子 ……104
阿寒国立公園の三恩人
種市佐改 …… 73
悪場を超えて―林和夫追悼―
林和夫追悼集実行委員会 …… 73
旭川春秋
桧山修 ……120
旭川・大雪山
岩波書店編集部 …… 82
旭川・大雪山 1958 復刻ワイド版
岩波書店編集部 …… 82
旭川・大雪　白い殺人者
梓林太郎 ……105
旭川明治屋の百年
示村貞夫 …… 73
旭川を中心としたるスキー地
村上久吉 …… 83
アサヒグラフ臨時増刊 國立公園號
星野辰男 …… 94
旭岳
北海道学芸大学函館分校山岳部 …… 61
旭岳
北海道地下資源調査所 …… 51
旭岳たすかるマップ
東川町 ……144
旭岳通信
旭岳ファンクラブ ……118
足立源一郎スケッチ帖 日本の山旅
足立源一郎 …… 94
綾子・大雪に抱かれて 三浦文学道案内
道新旭川政経文化懇話会 …… 74
荒井組慰霊碑建立の歴史調査報告書
播磨秀幸 …… 55
ある高校山岳部小史
福島正秋 ……127

歩こう！大雪山・旭岳の自然
東川エコツーリズム推進協議会 …… 78

あるサラリーマンの山
芳村宗雄 …… 105

ある偃松の独白
中村清太郎 …… 105

アルピニスト　第８号
岡本陸人 …… 127

アルプ
アルプ編集委員 …… 120

アルプスの自然　お花畑
佐竹義輔 …… 94

怒りの標的
城山三郎 …… 105

生きる　1988 年 1 月号
㈱ホツマ …… 128

イグアノドンの唄
中谷宇吉郎 …… 105

石狩川 100 話　石狩川治水 100 年の歴史をたどる
石狩川開発建設部 …… 40

石狩川紀行
北海道文明史をさぐる
西野辰吉 …… 105

石狩川源流原生林総合調査報告　1952-54
石狩川源流原生林総合調査団 …… 51

石狩川源流森林総合調査報告書
日本林業技術協会 …… 51

石狩川上流高原温泉の植物
舘脇操 …… 51

石狩川上流のことども
舘脇操 …… 51

石狩川水利総合開発計画調査報告（大雪ダム調査報告）
北海道開発庁 …… 55

石狩日誌
著　松浦武四郎、訳　丸山道子 …… 40

板倉勝宣書簡集
安川茂雄 …… 74

市根井孝悦写真集　大雪山
市根井孝悦 …… 91

一等三角点全国ガイド
一等三角点研究会 …… 83

一等三角点のすべて
多摩雪雄 …… 55

一等三角点百名山
一等三角点研究会 …… 83

一般道々旭川ー大雪山ー層雲峡線計画
旭川土木現業所 …… 91

一般道道士幌然別湖線道路計画の概要
北海道土木部 …… 138

井手賁夫随筆集　その一
私の山・旅・友
井手賁夫 …… 64

イトナンリルゥ　山情報
大雪山　2001 年　総集編
高木直子、渡辺裕美子、中村直弘、岩本恭子 …… 61

医と福祉の道のり
パック宣研 …… 145

命　今を重ねて　エッセー集
宮崎二三子 …… 145

いのちの代償
川嶋康男 …… 61

イララエカッチ 02
鎌田明徳 …… 41

岩と雪　60 号
池田常道 …… 120

岩に立つ
三浦綾子 …… 105

石笛：佐々木典夫君追悼誌
北海道教育大学函館分校山の会 …… 64

印刷の道 100 年
山藤印刷 100 年史編纂室 …… 64

ウスバキチョウ
渡辺康之 …… 51

薄雪草　創立 10 周年記念
高澤光雄ほか …… 128

薄雪草Ⅱ　創立 20 周年記念
秋元笻男ほか …… 128

美しい日本１　北海道 / 東北
井上靖、河北倫明 …… 94

ウッドペッカー vol.1
大雪山自然観察講座を記録する会 …… 38

ウッドペッカー vol.2
ウッドペッカー Vol.2 1985 編集委員会 …… 38

ウッドペッカー vol.3
大雪山自然観察講座を記録する会 …… 38

海にも雪があった
井上直一 …… 65

美しの山水
不詳 …… 145

駅から登れる山
国鉄山岳連盟 …… 83

えぞ　1
渡辺文仁ほか …… 128

蝦夷古地図物語
梅木通徳 …… 55

えぞ山岳会三十周年記念誌
今村朋信ほか …… 128

エゾナキウサギ　ナキウサギ
ふぁんくらぶ写真集
写真集「エゾナキウサギ」編集委員会 …… 94

エゾヒグマ
その生活をさぐる
北大ヒグマ研究グループ …… 56

エゾヒグマ　残された聖域
久保敬親 …… 95

えぞまつ・とゞまつ
舘脇操 …… 56

江戸明治の百名山を行く
―登山の先駆者　松浦武四郎―
渡辺隆 …… 74

NHK ふるさとデータブック
北海道 NHK 情報ネットワーク …… 41

エンレイソウ
鮫島惇一郎 …… 52

御絵葉書
層雲閣 …… 138

御繪葉書
不詳 …… 138

大いなる霊峰　大雪山　秋
NHK 北海道ビジョン …… 148

大きな自然　大雪山
林明輝 …… 61

オークブリッジ邸の笑わない貴婦人
太田紫織 …… 105

大島亮吉全集　全５巻
本郷常幸、安川茂雄 …… 105

おおはくちょうのそら
手島圭三郎 …… 145

大町桂月翁を想う
（『寒帯林』掲載）
塩谷忠 …… 128

生誕 140 年　大町桂月
高知県文学館 …… 95

大町桂月の大雪山
清水敏一 …… 72

帯広畜産大学　山岳部
部報第２号
門崎充昭ら編集委員 …… 128

重い神々の下僕
三好文夫 …… 106

おもひ出（思ひ出）
編集　湊正雄 …… 74

思い出　ヌタプ
Nutap Memorial
とむらヒロ&みの白雲 …… 148

お雇い外国人―開拓
原田一典 …… 74

音楽劇ヌタック・カウシュペ
作曲　伊福部昭 …… 148

ガーデンライフ
1972 年 7 月号
島村宣弘 …… 120

懐郷
福田和民ら写真集編集委員会 …… 119

開校五十年史
北海道旭川東高等学校
記念事業協賛会 ……128
回顧録　牛と夢
舘田外行 …… 74
会誌　Bulletin　1 ～ 20
北海道自然保護協会 ……129
新版　ガイドブックにない
北海道の山々
八谷和彦 …… 65
会報
創立二〇周年記念特別号
安田成男 ……129
会報「NC」 1 ～ 44
北海道自然保護協会 ……129
会報「NC」自然・環境・人
45 ～ 90
北海道自然保護協会 ……129
画家・相原求一朗の生涯
相原求一朗 …… 74
輝く北海道
MAGNIFICENT HOKKAIDO
田島繁得 …… 83
岳人
辰野勇 ……120
岳人　№817
辰野勇 ……121
岳人事典
岳人編集部 …… 41
学友会雑誌　第 1 号
上川中学校学友会 ……129
学友会雑誌　第 13 号
旭川中学校学友会 ……129
歌集『古代幻想』
豊田千恵 ……106
風と岩の音
田所一義君追悼集
阿部智一ほか …… 65
活火山・活断層
千葉達朗 …… 41
角川日本地名大辞典
北海道・上巻地名編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 ‥ 41
角川日本地名大辞典　北海
道・下巻総説・地誌編・資料編
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 ‥ 41
金井弘夫著作集
著　金井弘夫、編　大場秀章 …… 56
金沢山岳文庫
北海道山岳文献目録
斎藤浪子 …… 41
神々の遊ぶ庭　北の自然は今
北海道自然保護協会編 …… 65
かみかわ　小学校社会科副
読本
上川町社会科郷土読本編集委員会 ‥ 41
かみかわ = 生物編 =
上川町立上川中学校　理科グループ‥ 41
かみかわ = 地学編 =
上川町立上川中学校　理科グループ‥ 42
かみかわ = 野外観察編 =
上川町立上川中学校　理科グループ‥ 42
上川町内のアイヌ語地名解、
上川町の川の名・沢の名
成田新太郎 …… 42
上川町の自然　生物目録集
保田信紀 …… 42
上川町の自然　第 20 集
上川町自然科学研究会会員 ……129
上川の概況
上川支庁 …… 42
上川盆地の自然　巡検テキスト
科学教育研究協議会旭川サークル… 83
神さまたちの遊ぶ庭
宮下奈都 ……102
上士幌町ひがし大雪博物館
研究報告
上士幌町ひがし大雪博物館 …… 52
上ホロの空遠く
高橋こずえ追悼の本
畠山豊、神原悦子、沢田睦代、
城英利、長瀬久雄、西川陽子 …… 62
カムイの詩がきこえる
北ぐにの山々
岩橋崇至 …… 95
カムイの森
水越武 …… 95
カムイの山　北海道の名峰たち
市根井孝悦 …… 95
カムイミンタラ
カムイミンタラ編集室 ……121
カムイミンタラ　VOL.31
細川広子 ……129
カムイミンタラ
創立 20 周年記念号
大雪と石狩の自然を守る会 ……129
カムイミンダル
小野寺与吉 ……102
カラー日本の山々
山と渓谷社 …… 95
カラー北海道
栗谷川健一 …… 83
かわいいナキウサギ
文・写真・鈴木欣司
写真・長谷川和良 …… 91
変わりゆく大雪
北海道新聞 ……119
観光の層雲峡
不詳 ……139
観光の泣きどころ
舘脇操 …… 52
観光北海道
長谷川喜彦 …… 83
観光北海道じてん
田村健太朗、青木妙子、若林里江… 84
気軽に北の山
百々瀬満 …… 65
季刊「銀花」 第 118 号
鯛　嘉行 ……121
季刊　山の本
簑浦登美雄 ……121
北紀行　風の恋歌
伊藤徹秀 ……106
キタキツネとの出会い
久保敬親 …… 95
きたきつねのゆめ
手島圭三郎 ……145
北国の動物たち 4
エゾシカの森
永田洋平 …… 65
北国の花
舘脇操 ……106
画文集　北ぐにの花暦
鮫島惇一郎 …… 95
北の岳友とともに　北海道
山岳連盟 60 周年記念誌
神山健 ……129
北の火山
石川俊夫 …… 56
北の草花散歩
じぶんの植物図鑑
塩田惇 ……145
北の草花散歩　野山編
じぶんの植物図鑑
塩田惇 ……145
北の渓谷
丹征昭 …… 65
北の自然
合本№41 ～№61
北海道自然保護連合 ……130
北の自然
合本№62 ～№78
北海道自然保護連合 ……130
北の自然を守る
知床、千歳川そして幌延
八木健三 …… 65
北の植物
戸塚新太郎 ……106
北の雪稜
若林修二 …… 95
北の大地に生きて
高知県立坂本龍馬記念館 …… 96
北の話
八重樫實 ……121
北の花名山ガイド
梅沢俊 …… 84

北の林
原田康子 …… 106
北の火の山
小池省二 …… 66
続　北の火の山
小池省二 …… 66
北の峰々とともに
道岳連 50 年のあゆみ
阿地政美 …… 130
北の森の植物たち
鮫島惇一郎 …… 66
北の山
伊藤秀五郎 …… 106
北の山 続篇
伊藤秀五郎 …… 106
北の山・記録と案内
滝本幸夫 …… 84
北の山旅
丹征昭 …… 66
北の山と本
その登山史的考察
高澤光雄 …… 66
北の山脈
村本輝夫 …… 122
北の山の栄光と悲劇
滝本幸夫 …… 66
北の山の夜明け
高澤光雄 …… 74
北の山・南の山
研究・随筆・紀行
吉澤一郎 …… 107
北へ…異色人物伝
北海道新聞社 …… 74
北を飛ぶ
朝日新聞北海道支社報道部 …… 96
切手の中の北海道
北林利仁 …… 96
樹と雪と甲虫と
木野工 …… 103
記念―創立拾五年
大野精七 …… 130
牙王（少年マガジン収録）
石川球太 …… 122
牙王 1 ～ 3
石川球太 …… 96
牙王物語（上）（下）
戸川幸夫 …… 103
牙王物語 上・下
戸川幸夫 …… 103
牙王物語　新装合本
戸川幸夫 …… 103
京都山岳　六十周年記念号
京都山岳会 …… 130
郷土資料事典
―北海道・観光と旅
人文社観光と旅編集部 …… 42
郷土を拓いた人々
村上久吉 …… 75
きらきら
文・谷川俊太郎、写真・吉田六郎、企画構成・吉田覚 …… 91
近代洋画に見る日本の名山
藤井敏明 …… 96
銀嶺輝く大雪国立公園の景観
不詳 …… 139
空撮登山ガイド 8
利尻・知床・大雪 10 コース
今村朋信・大森弘一郎 …… 84
空撮　日本の名峰
大森弘一郎 …… 96
草と樹
鮫島惇一郎 …… 66
くまげらのもり
手島圭三郎 …… 145
熊笹　11 号
井内俊之 …… 130
熊笹　12 号
富田祐志 …… 130
熊笹　13 号
佐藤康幸 …… 130
クマにあったらどうするか
姉崎等 …… 145
熊に関する百訓
阿部泰三 …… 42
クマネシリ紀行
早川禎治 …… 103
グラフ旭川
渡辺真知子 …… 122
ぐるり大雪
大雪山国立公園観光連盟 …… 78
クロカンマップ 2
澤田啓 …… 78
桑原武夫紀行文集　1
桑原武夫 …… 107
桑原宏画集
画業 60 年・傘寿記念
桑原宏 …… 96
群落　旭川西高等学校生物
部創部 60 周年記念誌
旭川生物同好会 …… 131
慶応義塾山岳会北海道旅行
（大登会叢書第 3 号）
上野三郎 …… 131
桂月全集 第 1 巻 美文韻文
大町桂月 …… 145
桂月全集 第 2 巻 紀行 1
大町桂月 …… 145
桂月全集 第 3 巻 紀行 2
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 4 巻 史伝 1
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 5 巻 史伝 2
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 6 巻 史伝 3
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 7 巻 史伝 4
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 8 巻 評論随筆
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 9 巻 修養 1
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 10 巻 修養 2
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 11 巻 修養 3
大町桂月 …… 146
桂月全集 第 12 巻
詩歌、俳句、書簡、雑篇
大町桂月 …… 146
桂月全集 別巻
大町桂月 …… 107
敬山愛林
秀岳荘創業 50 周年記念誌
高澤光雄 …… 43
蕨影
郭城孟、黄俊溢、高美芳 …… 146
決定版　日本の探鳥地
北海道篇
BIRDER 編集部 …… 43
検証　士幌高原道路と時の
アセス
北海道新聞社編 …… 62
原色蝶
渡辺康之、小田島護 …… 56
原色野生哺乳動物
小田島護 …… 43
現代紀行文学全集
山岳編（上）
監修　川端康成、佐藤春夫、志賀直哉 …… 107
厳冬のカムイミンタラ
寺島一男 …… 119
原野から見た山
坂本直行 …… 66
小泉秀雄植物図集
清水敏一 …… 96
小泉秀雄展
大雪山の父　そして旭川
旭川市博物館 …… 139
高山植物園新設設計書
宮部金吾 …… 52
高山植物の話
武田久吉 …… 43
高山帯における登山道やその
踏みつけによる被害への対応
小林昭裕 …… 52

高山蝶
渡辺康之 …… 52
『河野齢蔵』生誕 150 周年記念特別展図録
松本市立博物館 …… 96
広葉樹に惚れて五十年
高橋丑太郎 …… 66
国定公園シリーズ 1 ～ 15
国立公園 ……139
國立公園　通巻 729 号
熊谷洋一 ……131
國立公園候補地　大雪山風景
札幌鐵道局 ……139
国立公園シリーズ 1 ～ 23
国立公園 …… 43
国立公園図鑑
監修・環境庁自然保護局国立公園課、編集・財団法人国立公園協会 … 43
国立公園成立史の研究
村串仁三郎 …… 56
国立公園大雪山
製作　大雪山国立公園、東川村開発期成会／後援　東川村観光協会、天人峡温泉株式会社、道北乗合自動車株式会社、旭川電気軌道株式会社／監督　園田規矩／企画　金野昌祐／撮影　飛彈野数右衛門／タイトル　森下滋 ……148
国立公園大雪山
大雪山国立公園観光連盟 …… 78
国立公園大雪山
不詳 …… 78
国立公園大雪山阿寒洞爺勝景大観
高本曉堂 …… 97
国立公園大雪山層雲峡
大雪山調査会 ……139
国立公園大雪山層雲峡
日本名所圖繪社 ……139
国立公園大雪山大観
不詳 ……139
国立公園大雪山風光集
不詳 ……139
国立公園の法と制度
加藤峰夫 …… 56
故・小泉秀雄先生の野帳 (1)
横内文人 …… 56
KONOHA
吉田友吉 …… 78
Coyote　№ 57
新井敏記 ……122
コンサイス日本山名事典（修正版）
徳久球雄 …… 43
最暗黒の東京
松原岩五郎 …… 67
最新山のガイド―北海道の山と谷（改訂版）
大内倫文、堀井克之 …… 84
再発見　ふるさと北海道
北海道新聞社 …… 43
坂本直行　國立公園大雪山
画　坂本直行 ……140
札幌グランドホテルの 50 年
阿部要介 …… 67
札幌・大正の青春
札幌市教育委員会社会教育課 …… 43
寂しき遊戯
著　大橋うめ、編　遠藤一郎 ……107
ザ・ラストフロンティア
スキージャーナル ……122
山岳講座　第 8 巻
南條初五郎 …… 44
山岳事典
川崎隆章 …… 44
山岳性自然公園における利用者の意識構造に関する研究
小林昭裕 …… 52
山岳遭難記 1
春日俊吉 …… 67
山岳　総目次（創刊号～第 1 号～第 33 号）
アテネ書房編集部 ……133
山岳　第十二年第一號
高頭　仁兵衛 ……131
山岳　第拾貳年第二・三號
小泉秀雄 …… 52
山岳美に輝く　大雪山の景勝
不詳 ……140
山岳遍歴
深田久弥 ……107
山書趣味（1 ～ 10 巻）
高澤光雄 ……131
三省堂日本山名事典
徳久球雄、石井光造、竹内正 …… 44
山頂の憩い
深田久弥 ……107
山野巡歴
横内斎 ……108
山稜の四季
全日本山岳写真協会 …… 97
山嶺抒情　画文集
橋本広 …… 97
JR 北海道車内誌 THE JR Hokkaido 318 号
幅口堅二 ……122
志賀重昂『日本風景論』精読
大室幹雄 …… 44
自我の構図
三浦綾子 ……108
自然にやさしい観光デザイン
俵浩三 ……146
自然観察会の参考資料
俵浩三 ……146
自然景観の成り立ちを探る
小泉武栄、赤坂憲雄 …… 56
自然公園における野外レクリエーションに伴う過剰利用に処するための方策
小林昭裕 …… 53
自然探訪（1）北海道・東北を歩く
監修　開高健 ……108
自然の博物誌　＜山＞
式正英 …… 67
自然保護事典［山と森林］
全国自然保護連合 …… 44
自然保護と戦後日本の国立公園
村串仁三郎 …… 57
「自然を見る目」の原点
俵浩三 ……146
自然を読む
社団法人北海道自然保護協会 …… 75
輜重兵第七大隊 大雪山縦断行軍寫眞帖
不詳 …… 91
凍（しば）れるいのち
川嶋康男 …… 62
士幌高原道路問題参考資料
北海道自然保護協会 ……140
シマフクロウの聲がきこえる。
田中博 …… 97
しまふくろうのみずうみ
手島圭三郎 ……146
シマリスの四季
久保敬親 …… 97
写真集 大雪山　中央高地の自然
北海道撮影社 …… 91
写真で綴る　ミズバショウ日記
鮫島惇一郎 …… 97
斜面上に分散した登山道が形成される要因
小林昭裕 …… 53
秀岳荘創業 50 周年記念「山の素描」の執筆者たち
高澤光雄 …… 75
週刊金曜日№ 382
黒川宣之 ……122
週刊続日本百名山
佐々木正紀 …… 84
週刊・日本百名山　全 50 冊
郡司武 ……122
樹海の中の赤い屋根
白樺荘同窓会事務局 ……131

樹海　夢、森に降りつむ
高橋延清 …… 108
聳嶺　第五号
坂井久光 …… 131
聳嶺　第九号
坂井久光 …… 131
聳嶺　第十号
坂井久光 …… 132
昭和ひと桁生かされて八十四年
鎌倉春雄 …… 75
書簡集からみた宮部金吾
秋月俊幸 …… 75
書簡圖繪　国立公園　層雲峡
不詳 …… 140
諸国名山案内 [第1巻] 北海道
梅沢俊 …… 84
女性のための百名山
坂倉登喜子 …… 84
知られざる大雪山の画家・村田丹下
清水敏一 …… 72
新日本山岳誌
日本山岳会 …… 44
新北海道の民営温泉
小野寺淳子 …… 84
森林王国の復活
宮島寛 …… 44
森林復興の軌跡
洞爺丸台風から 40 年
よみがえった森林記念事業実行委員会事務局 …… 67
森林を生かした野外教育
飯田稔 …… 146
森林をみる心
四手井綱英、林知己夫 …… 57
すがたみのはなたち
大雪山自然学校 …… 78
スキー場はもういらない
藤原信 …… 67
SKI&SKI
報知グラフ別冊 '75 ①
黒田隆二 …… 123
SKI 特集　報知グラフ '74
第 2 集
八巻明彦 …… 123
skier '75　別冊山と渓谷
菅井康司 …… 123
図説日本の山：
自然が素晴らしい山 50 選
小泉武栄 …… 97
ステップアップ登山
宮下岳夫 …… 84
世界山岳百科事典
岩間正夫 …… 44
世界に誇る大雪山を後世へ
俵浩三 …… 140
雪原の足あと
坂本直行 …… 97
瀬戸君　高田君　追悼録
編修　湊正雄 …… 75
層雲峡案内―附大雪山登山案内
塩谷忠 …… 78
層雲峡 一万年の記憶
久野剛男写真集
久野剛男 …… 91
層雲峡　大町桂月記念號
大雪山調査会 …… 72
層雲峡温泉小唄
菊谷清蔵 …… 103
詩文集　層雲峡四季
菊池モト …… 103
層雲峡（総天然色）
不詳 …… 140
層雲峡の唄　峡のかほり
不詳 …… 140
層雲峡の景観
額面写真六枚組
不詳 …… 91
層雲峡八趣
不詳 …… 140
造材飯場
宮之内一平 …… 108
草木図誌
鶴田知也 …… 108
草木寸景
横内斎 …… 108
画文草木帖
鶴田知也 …… 108
草木漫筆
横内斎 …… 109
創立五十周年記念誌
旭川山岳会創立五十周年記念事業実行委員会 …… 132
空から見る日本の山々
岡部一彦 …… 97
第 37 回全日本登山体育大会開催要項「大雪山　カムイミンタラの集い」
第 37 回全日本登山体育大会実行委員会 …… 140
大規模林道
寺島一男 …… 119
大規模林道の「中止」に寄せて
俵　浩三 …… 132
大規模林道はいりません
大雪と石狩の自然を守る会など …… 141
太古の原野に夢見て
石川啄木ら 30 名 …… 109
大正 15 年十勝岳大爆発記録写真集
上富良野町郷土館 …… 62
大雪火山群の研究
㈶日本自然保護協会 …… 53
大雪形象
山本康雄 …… 92
大雪山
奥田實 …… 92
大雪山
小原弘也 …… 78
大雪山
佐藤孝夫 …… 92
大雪山
北海道教育委員会 …… 79
大雪山
北海道地下資源調査所 …… 53
大雪山
姚正得、廖煥彰 …… 147
大雪山 100 年
北海道新聞 …… 119
大雪山　旭岳
鈴木良策　写真集
鈴木良策 …… 92
大雪山・旭岳の自然観察
㈳北海道自然保護協会 …… 79
大雪山・旭岳の自然観察ガイドブック
旭岳ビジターセンター …… 79
大雪山（エアリアマップ山と高原地図 41　旭川・層雲峡・東大雪・十勝連峰）
秋元筇男 …… 79
大雪山及石狩川上流探検開発史
河野常吉 …… 38
大雪山絵画コンクール受賞作品集
大雪山絵画コンクール実行委員会 …… 92
大雪山概観
（日本生物地理学会誌・別刷）
犬飼哲夫 …… 132
大雪山 ―神々の遊ぶ庭（カムイミンタラ）を読む
編者　写真文化首都「写真の町」東川町、執筆　清水敏一、西原義弘、写真　大塚友記憲 …… 38
大雪山観光道路
上川町 …… 62
大雪山牙と顎の殺人
本岡類 …… 103
大雪山系
下村保太郎 …… 147
大雪山系自然生態系総合調査　大雪山系現存植生図
北海道生活環境部自然保護課 …… 53
大雪山系の詩人・作家群
（『月刊道北』連載）
佐藤喜一 …… 123
大雪山国立公園
不詳 …… 141

大雪山國立公園　昭和九年版
札幌鐵道局 …… 79
大雪山国立公園　愛山渓温泉
安足間観光協会 …… 79
大雪山国立公園旭岳・天人峡自然観察ガイド
監修　中谷泰治 …… 79
「大雪山国立公園」生みの親 太田龍太郎の生涯
笹川良江 …… 72
大雪山國立公園　概要と探勝
齊藤勝 …… 79
大雪山国立公園　研究・文献集
大雪山国立公園連絡協議会 …… 53
大雪山国立公園 自然観察ガイド
大雪山国立公園層雲峡管理事務所 ほか …… 80
大雪山國立公園　シリーズ 14
国立公園協会 …… 80
大雪山国立公園層雲峡
企画構成　佐藤庫之介 …… 80
大雪山国立公園 層雲峡の展望
山崎鋆一郎 …… 80
大雪山国立公園層雲峡名勝繪葉書
不詳 …… 141
大雪山国立公園　大雪山の自然解説マニュアル
大雪山国立公園層雲峡管理官事務所… 80
大雪山国立公園でまたも画策される自然破壊道路
八木健三 …… 141
大雪山国立公園天人峡自然観察ガイド
不詳 …… 80
大雪山国立公園登山案内
環境庁 …… 80
大雪山国立公園の代表的渓谷美　勝仙峡の所々
不詳 …… 141
大雪山国立公園北部登山地図
東川エコツーリズム推進協議会 …… 141
大雪山國立公園 林業解説シリーズ 16
加納一郎 …… 80
大雪山昆虫誌
保田信紀 …… 53
大雪山殺人事件
梓林太郎 …… 103
大雪山讃歌
高澤光雄 …… 104
大雪山山行印象記
川村耕造 …… 62
大雪山 四季の彩り 市根井孝悦写真集
市根井孝悦 …… 92
大雪山自然ハンドブック
成田新太郎 …… 80
大雪残象
後藤昌美 …… 92
大雪山水系及び洪水の研究
中谷宇吉郎 他 …… 53
大雪山積雪水量及び流出調査
経済安定本部資源調査会 …… 53
大雪山・層雲峡　写真帳
塩谷忠 …… 92
大雪山粗描
三好文夫 …… 104
大雪山と阿寒
沼佐隆次 …… 85
大雪山と丘の四季
高橋秀雄 …… 92
大雪山　十勝岳・幌尻岳 山と高原地図 3
佐藤文彦 …… 81
大雪山・十勝岳・知床・阿寒の山
昆野安彦・岡井　健 …… 85
大雪山（特別調査報告書）
北海道教育委員会 …… 54
大雪山登山案内
不詳 …… 141
大雪山登山案内図
層雲峡観光協会 …… 81
大雪山登山案内圖
不詳 …… 81
大雪山登山案内図 スキーコース付
あさひ出版社 …… 141
大雪山（登山地図）
監修　旭川山岳会 …… 141
大雪山　登山法及登山案内
小泉秀雄 …… 81
大雪山と層雲峡
其水堂 …… 141
大雪山とトムラウシ
前川整洋 …… 104
大雪山と人と
西原義弘 …… 119
大雪山に生きた男 天野市太郎先生を偲んで
後藤憲太郎 …… 73
大雪山　日本の名山 01
編串田孫一、今井通子、今福龍太 … 109
大雪山のあゆみ
層雲峡観光協会 …… 38
大雪山の唄
不詳 …… 142
大雪山の生いたち
国府谷盛明 …… 81
大雪山のお花畑
奥田實 …… 92
大雪山のお花畑が語ること
工藤岳 …… 38
大雪山のキノコ　新版
佐藤清吉 …… 38
大雪山の四季
高橋秀雄、後藤昌美 …… 148
大雪山の四季
HIT 企画 …… 148
大雪山の四季 精霊の大地から
塩谷秀和 …… 67
大雪山の自然 2 高山植物
昆野安彦 …… 39
大雪山の自然 3 動物 昆虫
昆野安彦 …… 39
大雪山の自然観察ガイド
昆野安彦 …… 81
大雪山の自然と世界遺産
寺島一男 …… 123
大雪山の自然をまもろう　No.1
〝大雪の自然を守る会、準備会 …… 132
大雪山の自然をまもろう No.2 ～No.4
大雪の自然を守る会 …… 132
大雪山の植物
舘脇操 …… 39
大雪山の洗礼　四十年前の黒岳石室宿泊名簿
都竹一衛（謄写） …… 39
大雪山の父　小泉秀雄
清水敏一 …… 45
大雪山の父・小泉秀雄の生涯
清水敏一 …… 123
大雪山の父・小泉秀雄
清水敏一 …… 73
大雪山の父・小泉秀雄
清水敏一 …… 73
大雪の父小泉秀雄の足跡
山村晋 …… 119
大雪山の動物記
桑原康彰 …… 62
大雪山の動物たち
久保敬親 …… 93
大雪山のナキウサギ裁判
大雪山のナキウサギ裁判を支援する会 …… 62
大雪山の花
奥田實 …… 93
大雪山の花
永田芳男 …… 39
大雪山の花
山田恵一 …… 39

大雪山のヒグマ
小田島護 …… 62
大雪山のふもとから
ある山村の四季と暮らし
渡辺崇彦 …… 67
大雪山の哺乳類に関する文
献（1）
出羽寛 …… 54
大雪山の森番
西野辰吉 …… 104
大雪山の勇者　牙王（ビデオ）
原作　戸川幸夫 …… 148
大雪山博物メモ
監修・高澤光雄、編集広坂光則 …… 142
大雪山発殺人物語
辻真先 …… 104
大雪山花の道
エゾコザクラに逢いたくて
駒井千恵子 …… 62
大雪山　花の山旅①
梅沢俊 …… 81
大雪山 母なる大地
市根井孝悦写真集
市根井孝悦 …… 93
大雪山ヒグマ物語
ヒグマとの共存の道を探る
小田島護 …… 63
大雪山文献書誌 第１巻
清水敏一 …… 39
大雪山文献書誌 第２巻
清水敏一 …… 39
大雪山文献書誌 第３巻
清水敏一 …… 39
大雪山文献書誌 第４巻
清水敏一 …… 39
大雪山への誘い
高澤光雄 …… 132
大雪山　北海道山の花図鑑
梅沢俊 …… 85
大雪山物語
北海道新聞社 …… 40
大雪山　雪が育む神秘の高原
NHK …… 149
大雪山わが山小泉秀雄
清水敏一 …… 73
続・大雪山わが山小泉秀雄
清水敏一 …… 73
大雪山を歩く
伊藤健次 …… 81
大雪　志賀芳彦写真集
志賀芳彦 …… 93
大雪縦貫道
寺島一男 …… 119
大雪・層雲峡殺人事件
梓林太郎 …… 109
大雪探検ガイド
動・植物おもしろ図鑑
不詳 …… 81
大雪てくてく体験記
旭工生・旭岳わらじ行
北海タイムス社 …… 119
たいせつノート
高澤光雄 …… 142
大雪の高山植物
野呂一夫 他 …… 40
大雪の蝶
田淵行男 …… 54
大雪の山やま
安田治 …… 142
大地の鼓動
志賀芳彦写真集成
志賀芳彦 …… 97
Dynamic Daisetsu.
大雪山・山守隊 …… 132
増補　大日本地名辞書　第八巻
吉田東伍 …… 44
大門金光・天人閣支配人の
記録
大門金光 …… 73
太陽はいつも雲の上に
三浦綾子・光世 …… 109
ただ今、八合目
―北の絶境・東大雪日記
山崎治 …… 109
愉しき山脈
高澤光雄 …… 68
旅（'65 北海道特集）
矢吹勝二 …… 123
旅ゆけば　阿寒湖物語
石川球太 …… 98
単独行
九糸郎 …… 109
小さな頂
一原有徳 …… 109
小さな頂【戦前の山】
一原有徳 …… 109
地宴
八匠衆一 …… 110
地球大百科　生きている森７
クマの王国
生きている森編集委員会 …… 68
地図の風景…北海道編Ⅰ
道南・道央
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明 …… 98
地図の風景…北海道編Ⅱ
道東・道北
堀淳一、山口恵一郎、籠瀬良明 …… 98
中央高地　登山詳述年表稿
吉田友吉 …… 40
中央高地登山詳述年表稿
出典準拠［増補］
吉田友吉 …… 40
中国名詩鑑賞辞典
山田勝美 …… 147
中部の夏山–大雪山及其附近
村上久吉 …… 82
忠別川と共に生きて
忠別川ダムふるさと誌
忠別ダム記念誌刊行委員会 …… 68
忠別川は秘めている
赤松勉 …… 68
追憶　大雪山で大砲を撃っ
た兵の鎮魂譜
石原二三朗 …… 63
追悼　自然を愛した医師・
寺島和光
横浜市立大学探査会・探検部ＯＢ …… 75
翼の王国　通巻 511 号
翼の王国編集部 …… 133
泥火山
田中長三郎 …… 110
泥流地帯
三浦綾子 …… 110
泥流地帯（文庫本）
三浦綾子 …… 110
続　泥流地帯
三浦綾子 …… 110
寺田寅彦の追想
中谷宇吉郎 …… 110
天から送られた手紙
中谷宇吉郎雪の科学館館長、
神田健三 …… 110
「天からの手紙」をたどって
奈良山雅俊 …… 119
天上を翔る川
松本司 …… 63
天人峡砂防ダム
旭川土木現業所 …… 63
天人峡三十三曲がり附近の
ハゴロモホトトギスの行方
（『北方林業』掲載）
新田紀敏 …… 124
道博高山植物館と植物園
舘脇操 …… 40
遠い山近い山
望月達夫 …… 68
十勝川源流部原生自然環境
保全地域調査報告書
財団法人日本自然保護協会 …… 57
十勝岳硫黄山の噴火原因と現
状（地学雑誌　451 号別刷）
田中館秀三 …… 124
十勝岳山彙の植物
舘脇操 …… 54

十勝嶽大観
佐藤翠陽 ……142
十勝岳爆發概報
田中館秀三 …… 54
十勝岳連峰・トムラウシ山（登山地図）
監修　旭川山岳会 ……142
十勝岳連峰の自然と野外活動
国立大雪青年の家 …… 82
十勝泥流
佐藤喜一 ……110
十勝日誌
著　松浦武四郎、訳　丸山道子 …… 45
十勝の森林鉄道
小林實 …… 45
戸川幸夫動物文学全集３
戸川幸夫 ……104
特別天然記念物大雪山の花・大雪山国立公園大雪山の山
高橋秀雄 …… 82
毒麦の季
三浦綾子 ……110
登高者
著　大島亮吉、編　安川茂雄 ……111
登山ガイド　1974 年版
旭川山岳会 …… 85
登山ガイド　1986 年版
旭川山岳会 …… 85
登山講座　第５巻
川崎隆章 …… 45
登山道の保全と管理（自然公園シリーズ 1）
渡辺悌二 …… 57
登山の先駆者たち
熊原政男 …… 75
登山歴程
児島勘次 …… 68
突兀七千有余尺
庁立旭川中学校校歌雑考
栃木義正 …… 68
トムラウシ山遭難はなぜ起きたか
羽根田治 ら共編 …… 63
トムラウシ山遭難はなぜ起きたか（文庫本）
羽根田治 ら共編 …… 63
寅彦と宇吉郎の絵画展
中谷宇吉郎雪の科学館 …… 98
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第１～第３話編
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会 …… 40
ドラマチック大雪　大雪山の魅力を語る　第４～第６話編
上川支庁・上川中部広域市町村圏振興協議会 …… 40
中谷宇吉郎研究室
北大理学部教授室 N123
松枝大治、山崎敏晴 …… 76
中谷宇吉郎集
編　樋口敬二、池内了 ……111
中谷宇吉郎随筆集
編　樋口敬二 ……111
中谷宇吉郎随筆選集第２巻
編　岡　潔、茅誠司、藤岡由夫……111
中谷宇吉郎の森羅万象帖
福岡伸一、神田健三、中谷芙二子… 98
中谷宇吉郎ゆかりの地
口野哲夫 …… 76
中谷宇吉郎ゆかりの人
中谷宇吉郎雪の科学館友の会 …… 76
中谷宇吉郎　雪の物語
中谷宇吉郎雪の科学館 ……111
ナキウサギ　神々の庭に遊ぶ
丹治茂雄・千葉圭介 写真集 …… 93
ナキウサギつうしん
ナキウサギふぁんくらぶ ……124
ナキウサギと考える大雪山の自然
大雪と石狩の自然を守る会 ……142
ナキウサギの声が聞きたい
監修　川道武男 …… 40
ナキウサギの世界
栃内信男 ……149
なぜ排除するのか
長縄三郎 …… 63
ナチュラリストのための登山教室　テキスト
寺島一男 ……147
夏山ガイド②表大雪の山々
梅沢俊・菅原靖彦 …… 82
夏山ガイド③　東・北大雪十勝連峰の山々
梅沢俊・菅原靖彦 …… 82
夏山登山教程
山岳会「クーラカンリ」 …… 85
夏山への招待
後藤茂樹 …… 85
ナナカマドの挽歌
秋庭ヤエ子 …… 68
日本　200　名山
深田クラブ …… 45
日本 200 名山を登る（上巻）
青柳栄次 …… 85
日本岳連史
高橋定昌 ……124
日本活火山総覧（第４版）
気象庁 …… 57
日本国立公園（全４巻）
監修　井上靖、写真　森田敏隆 …… 98
日本山岳會　會報（一～一〇〇）　復刻版
日本山岳會 ……133
日本山岳会北海道支部 50 年のあゆみ
長谷川雄介 ……133
日本山岳機関誌　山岳復刻版 第１年～第 10 年
日本山岳会 ……133
復刻版　日本山嶽志
高頭式 …… 45
日本山岳風土記 6 北海道の山々
長尾宏也 …… 69
日本山岳文学史
瓜生卓造 …… 76
日本山岳ルーツ大辞典
監修　池田末則、編著　村石利夫… 45
日本三百名山
荒井魏 …… 45
日本山名総覧
武内正 …… 45
日本自然探検の旅・2 生物の大宝庫　大雪山
松岡達英 …… 82
日本地名大辞典・北海道
渡辺光、中野尊正、山口恵一郎、式正英 …… 46
日本地名大百科
秋庭隆 …… 46
日本地理大系 10 北海道・樺太編
山本三生 …… 46
日本動物大百科
川道武男 …… 46
日本登山大系 1 北海道・東北の山
柏瀬祐之 他 …… 86
日本の岳人たち
斎藤一男 …… 76
日本の渓谷 ’96
白山書房編集部 …… 69
日本の高山植物
豊国秀夫 …… 46
日本の高山蝶について
塚本珪一 ……133
日本の国立公園　１～６
環境省 …… 46
日本の湖沼と渓谷
今西錦司 …… 86
日本の山河
緑川洋一 …… 98
日本の山河　水墨の詩
緑川洋一 …… 99
日本の山岳　登頂跡誌
松浦勇次、大西敏夫 …… 69

日本の自然公園 自然保護と風景保護
田中正大 …… 46

日本の自然・北海道
小疇尚、福田正己、石城謙吉、酒井昭、佐久間敏雄、菊池勝弘 …… 57

日本の重要な植物群落 北海道版
環境庁 …… 57

日本の樹木
林弥栄 …… 46

日本の大自然 1 大雪山国立公園
森田敏隆 …… 93

日本の滝① 東日本 661 滝
北中康文 …… 99

ニッポンの滝 100 選
北中康文 …… 99

日本の伝説 17（北海道の伝説）
更科源蔵・安藤美紀夫 …… 46

日本の天然記念物
監修 加藤睦奥雄、沼田眞、渡部景隆、畑正憲 …… 99

日本の名山 1 大雪・日高と北海道の名山
第一アートセンター …… 47

日本の名山 四季の山容を探る
奥村芳太郎 …… 99

日本の名山 北海道編
監修 鈴木修、編 足立朗ほか …… 99

日本の名山を考える
斎藤一男 …… 47

日本の名峰 2 大雪・石狩・十勝
市根井孝悦 …… 93

日本の山
著 槇有恒ほか 編 高橋清見 …… 99

日本の山
山と渓谷社 …… 47

日本の山（山渓カラー名鑑）
山と渓谷社 …… 47

日本の山 100
川口邦雄 …… 99

日本の山と高山植物
小泉武栄 …… 57

日本の山はなぜ美しい
小泉武栄 …… 58

日本のロープウェイ・ゴンドラ 全ガイド
中島信 …… 86

日本百名谷
関根幸次、中庄谷直、岩崎元郎 …… 47

句集 日本百名山
栗田希代子 …… 111

日本百名山
深田久弥 …… 111

日本百名山（文庫本）
深田久弥 …… 112

日本百名山スケッチ紀行
若松直 …… 99

日本百名山地図帳
山と渓谷社 …… 124

日本百名山 登山案内
川崎吉光 …… 86

日本百名山・登山ガイド 上
山と渓谷山岳図書編集部 …… 86

日本百名山 登山ガイド決定版 上
伊藤健次ほか …… 86

日本百名山ビジュアル登山ガイド 上 北海道、東北、上信越、北アルプスの 50 山
朝日新聞社 …… 86

日本百名峠
井出孫六 …… 47

日本百景層雲峡繪葉書
不詳 …… 142

日本風景論
志賀重昂 …… 58

日本風景論（文庫本）
志賀重昂 …… 58

日本名勝地誌 第９編 北海道之部
松原岩五郎 …… 58

日本野鳥紀行
蒲谷鶴彦 …… 47

日本列島
濱谷浩 …… 100

日本を登る 百名山（上巻）
青柳栄次 …… 86

ヌタツク 1 号
大戸昌雄 …… 133

ヌタツク 2 号
吉村重文 …… 133

ヌタック（第２次）1～6 号
ヌタック会 …… 134

ヌタプカムシペ
大雪と石狩の自然を守る会 …… 134

ヌタプカムシペとニセィカウシペ
村上啓司 …… 54

ヌタプへようこそ welcome to NUTAP
とむら白雲 …… 149

ヌプカ創刊号
佐藤圭樹 …… 124

ヌプリ 創刊号
竹内武夫 …… 134

ヌプリ 十勝岳爆發號
竹内武夫 …… 134

ヌプリ 北海道山岳紀行号
竹内武夫 …… 134

ヌプリ 北海道山岳写真号
竹内武夫 …… 134

ヌプンケシ
田丸誠 …… 134

残された山 杖の頂
一原有徳 …… 112

のぼるべ 創刊号
堀井克之ほか …… 134

パークボランティアのための大雪山自然解説マニュアル
関口隆嗣 …… 82

ハイカー
山と渓谷社 …… 124

果て遠き丘
三浦綾子 …… 112

花の百名山
田中澄江 …… 112

新・花の百名山
田中澄江 …… 112

花の百名山 登山ガイド
WALK CORPORATION …… 86

花風景 北海道
梅沢俊 …… 100

貼り絵に託した 四季
鮫島和子 …… 100

遙かなる山 Ⅰ～Ⅴ
閑良屋会 …… 100

power of light
中西敏貴 …… 100

東川の山野草
東野勇、米田松栄、滝本堅三郎、横内勇、花本哲行、岡島博 …… 87

東大雪 ～四季の採光～
不詳 …… 143

光の彩
中西敏貴 …… 100

秘境層雲峡 仙境の思い出
原田豊 …… 104

ヒグマ gen.3
山本牧 …… 135

ひぐま通信
北大ヒグマ研究グループ …… 134

ひぐまのあき
手島圭三郎 …… 147

被写体
宮之内一平 …… 112

ビスターリ 5 号
ビスターリ編集部 …… 124

日高山脈の先蹤者 相川修遺稿集
高澤光雄 …… 76

日高の山名について 写真集『日高山脈』別刷
村上啓司 …… 100

ひとりぼっちの日本百名山
佐古清隆 …… 112

ヒニスム　10
ヒニスム編集室 ……125
百名山以外の名山 50
深田久弥 …… 87
百名山　山頂(いただき)はいつも仲間と
西岡健二 ……112
百名山の自然学　東日本篇
清水長正 ……100
百名山パノラマ案内
白山書房編集部 ……100
百霊峰巡礼　第二集
立松和平 …… 76
氷河時代の置き手紙
丹治茂雄 …… 69
faura
㈲ナチュラリー ……125
風災 1400 萬石
上川営林署 …… 54
雑誌『風土』創刊号
伊藤徹秀 ……125
風倒　風倒木処理終了記念
上川営林署・上川町 …… 63
深田久弥物語　山ありて、
わが人生は楽し
深田久弥山の文化館 ……149
武侠世界増刊　山嶽踏破號
針重敬喜 ……125
フクロウ
BIRDER 編集部 …… 63
部報　第 2 号
服部勝宗 ……135
部報　第 3 号
服部勝宗 ……135
部報　第 4 号
服部勝宗 ……135
冬山
速水潔 …… 64
冬山の北海道　銀嶺を行く
不詳 ……143
冬山への招待
片山修三 …… 87
ブラボー！大雪山
大塚友記憲 …… 93
Freedom
―大雪の動物たち―
千葉圭介 …… 93
ふるさとの富士 200 名山
写真・文　吉野晴朗 ……101
分水嶺
笹本稜平 ……104
糞尿譚
火野葦平 ……112
平原の手帖　13 号
千葉章仁 ……125
歌集『米寿碌碌』
遠藤一郎 ……112
碧水　Vol.3
旭川勤労者山岳会創立 10 周年記
念誌編集委員会 ……135
ぺたぬぅ　9 号
ぺたぬぅ発行委員会 ……113
北大山岳館　蔵書ガイド
北大山岳館運営委員会 …… 47
北大山岳部五十周年記念誌
朝比奈英三 ……135
北大山岳部々報 1
伊藤秀五郎 ……135
北大山岳部々報 2
須藤宣之助 ……135
北大山岳部々報 3
江幡三郎 ……136
北大山岳部々報 4
徳永正雄 ……136
北大山岳部々報 5
照井孝太郎 ……136
北大山岳部々報 6
葛西晴雄 ……136
北大山岳部々報 7
橋本誠二 ……136
北大山岳部々報 8
橋本正人 ……136
北大山岳部々報 9 号
三浦章司ら 4 編集委員 ……136
北大山岳部々報 12 号
部報 12 号編集委員会 ……136
北大百年の百人
北海タイムス社 …… 76
北大山の会　会報
北大山の会 ……136
北海アルプス寫真帖
塩谷忠 …… 93
北海アルプス　大雪山旭岳
勝景　（はがきセット）
不詳 ……143
北海アルプス　大雪山繪葉書
画　村田丹下 ……143
北海アルプス　大雪山繪葉書
不詳 ……143
北海タイムス
（昭和 7 年 10 月 9 日付）
北海タイムス ……120
北海道・阿寒・大雪山国立
地区観光診断報告書
日本観光協会 …… 58
北海道安全な登山
日下哉 …… 87
北海道石狩國上川郡明細圖
青柳鶴治 ……147
北海道一般スキー八十年の
歩み
栗林薫 …… 69
北海道医報創刊 1000 号記
念写真集
西信博 ……136
北海道繪本
文　更科源蔵、版画　松見八百造 ‥113
続・北海道繪本
文　更科源蔵、版画　大本靖 ……113
北海道温泉地案内
齋藤勝 …… 87
北海道開発大博覧会
吉田初三郎 ……147
北海道隠れ湯 28 選
エムジーコーポレーション …… 87
北海道から　第 3 号
山根対助 …… 47
北海道教育大学 大雪山自然
教育研究施設研究報告
北海道教育大学大雪山自然教育研
究施設 …… 58
北海道高山植物図譜　附菌類
小泉秀雄 …… 58
北海道　沢登りガイド
岩村和彦 …… 87
北海道山岳
発行人　新妻徹 ……137
北海道山村経済の実態
上川郡上川町の調査報告
北海道総合開発委員会事務局 …… 48
北海道自然 100 選紀行
朝日新聞北海道支社報道部 …… 69
北海道　自然と人
八木健三、辻井達一 …… 69
北海道自然保護小史
俵浩三 …… 48
北海道史の歴史
高倉新一郎 …… 48
北海道　集落地名地理
栃木義正 …… 48
北海道主要山岳登路概況
南條康夫 …… 87
北海道森林植物　写真図譜
（Ⅰ．草本篇）
監修　舘脇操　編集　中野正彦、
吹上芳雄、千廣俊幸 ……101
北海道森林植物　写真図譜
（Ⅱ．木本篇）
監修　舘脇操　編集　中野正彦、
中村幸雄、吹上芳雄、三角亨、鮫
島惇一郎 ……101
ほっかいどう先人探訪
読売新聞社北海道支社編集部 …… 77
北海道層雲峡
不詳 ……143

北海道大規模林業圏開発
北海道林務部 …… 143

北海道大雪山　大雪山国立公園指定 50 周年記念写真集
大雪山国立公園 50 年記念事業推進協議会 …… 93

北海道大雪山洋画展覧会
画　村田丹下 …… 143

北海道探検記
本多勝一 …… 70

北海道地図
不詳 …… 147

北海道　地図で読む百年
平岡昭利 …… 54

北海道地名一覧
栃木義正 …… 59

北海道地名解
磯部精一 …… 48

北海道地名誌
NHK 北海道本部 …… 48

北海道中央高地積雪期登山抄
佐々保雄 …… 64

北海道中央高地の高山植物
舘脇操・鮫島惇一郎 …… 55

北海道中央高地の地学的研究附図
小泉秀雄 …… 149

北海道中央分水嶺踏査記録
―宗谷岬から白神岬まで
高澤光雄 …… 70

北海道中央分水嶺踏査　余話
滝本幸夫 …… 70

北海道・東北ふるさと大歳時記
角川文化振興財団（代表・加藤楸邨）‥ 113

北海道と環境保護
札幌学院大学人文学部 …… 48

北海道登山記録と研究
高澤光雄 …… 70

北海道登山口情報 350
全国登山口調査会 …… 88

北海道登山史年表
高澤光雄 …… 70

北海道トレッキングサポートBOOK
小川寛之 …… 88

北海道ニ於ケル國立公園候補地調査概要
北海道廳拓殖部 …… 59

北海道ネイチャーツアーガイド
北海道のエコツーリズムを考える会‥ 88

北海道の碑
東延江 …… 113

北海道の火山
高橋正樹・小林哲夫 …… 59

北海道の活火山
勝井義雄 ら共著 …… 59

北海道の環境を守るために
北海道警察本部生活安定部 …… 70

「新版」北海道の高山植物
梅沢俊 …… 48

北海道の高山植物と山草
伊藤浩司 …… 48

北海道の山岳（登山案内）
田中三晴 …… 88

北海道の地震と津波
笠原稔、鏡味洋史、笹谷努、谷岡勇市郎 …… 59

北海道の自然 100 選
監修　朝日新聞社北海道支社 …… 70

北海道の自然
第 1 号～第 50 号総目次
北海道自然保護協会 …… 137

北海道の自然 21 ～ 51
北海道自然保護協会 …… 137

北海道の自然④　大雪の四季
成松岳人 …… 94

北海道の自然公園
北海道自然公園協会 …… 88

北海道の自然と生物 1 ～ 10
西島浩 …… 59

北海道の自然　ヒグマ
犬飼哲夫、門崎允昭 …… 70

北海道の自然美を訪ねて
俵浩三 …… 88

北海道の自然保護　その歴史と思想（1979）
俵浩三 …… 58

北海道の自然保護　その歴史と思想（増補版）
俵浩三 …… 58

北海道の自然をあるく
北海道新聞社販売促進部 …… 88

北海道の自然を美しく撮る 55SPOT ガイド
大橋弘一 …… 88

北海道の湿原
辻井達一、岡田操、高田雅之 …… 89

北海道の湿原
辻井達一、渡辺祐三 …… 89

北海道の湿原と植物
辻井達一、橘ヒサ子 …… 89

北海道の植物
舘脇操 …… 113

北海道の森林風害記録
北海道森林風害記録作成委員会 … 55

北海道のスキーづくり
佐藤徹雄 …… 59

北海道の旅
串田孫一 …… 113

北海道の地名
北海道地方資料センター …… 49

北海道の地名索引
栃木義正 …… 49

北海道の伝説
更科源蔵、渡辺茂 …… 49

北海道の登山史
安田治 …… 77

北海道の登山史探究
高澤光雄 …… 70

北海道の百名山
道新スポーツ編 …… 49

北海道の風景
写真　岡田紅陽 …… 143

北海道の風光
不詳 …… 147

北海道の文化財
北海道教育委員会 …… 101

北海道の誇り絶勝層雲峡
吉田初三郎 …… 144

北海道の緑資源幹線林道
緑資源機構 …… 148

北海道の森林
北海道 …… 101

北海道の野生動物
小田島護 …… 49

北海道の山
一原有徳 …… 89

北海道の山
清水一行 …… 125

北海道の山
俵浩三・今村朋信 …… 89

画集　北海道の山
北海道新聞社 …… 101

北海道の山　大雪山・十勝連峰
伊藤健次 …… 82

北海道の山と谷㊦
北海道の山と谷再刊委員会 …… 89

北海道の山と雪　加納一郎著作集 3
加納一郎 …… 113

北海道の山々 新版・空撮登山ガイド 1
梅沢俊、瀬尾央 …… 89

北海道の山々―山の風土とその紀行
宝文館出版 …… 113

北海道　花の散歩道
梅沢俊 …… 101

北海道　花の散歩道（改訂版　続）
梅沢俊 …… 101

北海道　花の大地
奥田實 …… 94

北海道秘境の旅
カラーアルバム
北海道撮影社 …… 89

北海道秘湯・名湯・露天ぶろ：北の秘湯
北海タイムス社 …… 89
続『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ …… 77
続々『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ …… 77
第五集『ほっかいどう百年物語』
STV ラジオ …… 77
北海道百番附
矢谷重芳 ……144
北海道百名山
梅沢俊、伊藤健次 …… 89
北海道・ファミリー登山
菅原靖彦 …… 90
北海道文学散歩　道北編
木原直彦 ……114
北海道文学百景
北海道文学館 ……114
北海道本島高山帯植物の分類学的類別研究
舘脇操 …… 59
北海道まちづくり 100 選
北海道、北海道新聞社、NHK 札幌放送局 …… 49
北海道・緑の環境史
俵浩三 …… 60
北海道無料 100 秘湯ガイドブック
表正彦 …… 90
北海道名所旧蹟
千葉萬葉 …… 90
北海道野鳥観察地ガイド
大橋弘一 …… 90
北海道　山歩き花めぐり
梅沢俊 ……114
北海道　雪山ガイド（増補新版）
北海道の山メーリングリスト …… 90
北海道リスとナキウサギの季節
佐野高太郎 …… 94
北海の髙峯　大雪山登山案内
天野市太郎 …… 82
北海の秀峰　国立公園大雪山の驚異
不詳 ……144
北海の霊峯　大雪山と層雲峡　附塩谷温泉案内
不詳 ……144
北方昆虫記
河野廣道 …… 49
北方植物の旅
舘脇操 ……114
北方の植物
舘脇操 ……114
北方風物　第一輯
更科源蔵 ……125
北方野草　第 14 号
高野英二 ……137
北方林業　2014 年 5 月号
北方林業会編集員会 ……137
北方林業表紙写真集（1999）
鮫島惇一郎 ……101
北方林業表紙写真集（2008）
鮫島惇一郎 ……101
北方林業表紙写真集（2013）
鮫島惇一郎 ……101
北方林業表紙写真集
鮫島惇一郎 ……102
POPEYE　第 38 巻第 2 号
木下孝浩 ……126
町医者の記―おじさんのハンドバッグ
大山正信 ……114
松浦武四郎・蝦夷地登山の実像
俵浩三 ……144
松浦武四郎紀行集　下巻
吉田武三 …… 77
松浦竹四郎の山岳画（『林』に掲載）
村上啓司 ……137
水と私たち
俵浩三、鮫島惇一郎、成瀬廉二、八木健三 …… 60
道草山行ひとり旅
遠藤一郎 …… 70
みちのくの人形たち
深沢七郎 ……114
緑資源幹線林道は「中止」の正念場を迎えた
俵浩三 ……137
緑資源幹線林道・無駄な公共事業が自然を破壊
俵浩三 ……137
緑資源機構の林道整備事業をめぐる記事
北海道新聞 ……120
緑の文化史
俵浩三 …… 60
峰の記憶
渡辺淳一 ……104
村井米子追悼集
日本山岳会婦人懇談会有志 …… 71
明治の山旅
武田久吉 ……114
名峰シリーズ　大雪山
志賀芳彦・写真 …… 94
名峰百景（決定版　自然の心）家庭画報編
今西錦司ら ……126
モーリー NO27
大雪山に氷河が懸かったら
財団法人北海道新聞野生生物基金 ‥126
森と私たち
俵浩三、辻井達一 …… 60
森のひと　どろ亀さん
米村晃多郎 …… 77
森林【もり】への招待
㈶北海道森林整備公社 ……144
野外見分け図鑑
北海道の高山植物
梅沢俊 …… 49
野獣撮影
戸川幸夫 ……115
野生のヒグマ：母グマ K 子の記録
小田島護 …… 64
野帳
早川禎治 ……137
続・野帳
淡川舜平 ……137
第二次　野帳
早川禎治 ……138
野鳥の羽ハンドブック
高田勝、叶内拓哉 …… 49
詩集　山
井田清 ……115
山　復刻版全 6 巻
石原巖 ……138
山愛の記
村井米子 ……115
山歩きの自然学
小泉武栄 …… 60
山　生きている大地
相賀徹夫 …… 50
新編・山　紀行と随想
大島亮吉 …… 71
山　研究と随想
大島亮吉 …… 71
山恋う母娘
遠藤一郎 ……115
山ことば辞典
著　岩科小一郎、編　藤本一美 …… 50
山　随想
大島亮吉 …… 71
山 ―随想―
大島亮吉 …… 71
山旅歌集
渡辺公平ほか ……115
山旅記
山川力 ……115
山旅句　エッセイ集
高澤光雄 ……115
山談花語
栃内吉彦 ……116

山道具が語る日本登山史
布川欣一 …… 71
山とお花畑２
田辺和雄 …… 102
山と渓谷　№527
原康夫 …… 126
山と渓谷　№709
山口章 …… 126
山と渓谷　総索引 1–379 号
能勢信二、丹羽素雄 …… 126
山と書物／続・山と書物
小林義正 …… 60
山とスキー
加納一郎ほか …… 126
山とスキー　第２年合本
赤松勲 …… 126
山とその花
鮫島惇一郎 …… 116
山と旅　大正・昭和編
近藤信行 …… 116
山とともに在り
山川力 …… 116
山と彷徨
丹征昭 …… 71
山と雪の日記
板倉勝宣 …… 71
山と私たち
今村朋信、鮫島惇一郎 …… 60
山と私たち
～北海道自然保護協会～
㈳北海道自然保護協会 …… 50
山脈越えて
創立五十周年記念誌
札幌山岳会 …… 138
山のあなたの空遠く
西信博 …… 116
山のあなたの空遠く Ⅱ
西信博 …… 116
山のあなたの空遠く Ⅲ
西信博 …… 116
山の画帖
茨木猪之吉 …… 116
山の幸
製作　石原木材合資会社／後援　旭川林務署、東川村／企画　木村重太郎／撮影　飛彈野数右衛門 …… 149
山の詩歌　登山全書随想編３
藤木九三、川崎隆章 …… 117
山の自然学
小泉武栄 …… 60
山の自然教室
小泉武栄 …… 90
山の思想史
三田博雄 …… 77
山の資料
登山ハンドブックシリーズ６
山岳研究会 …… 61
山の素描
山口透 …… 127
山の旅　大正・昭和篇
近藤信行 …… 116
山の仲間と五十年
高澤光雄 …… 71
山の風物誌 登山全書随想編２
藤木九三、川崎隆章 …… 117
山登りのお役立ちガイド
北海道山岳連盟 …… 90
山の本販売目録
茗溪堂 …… 50
山の履歴簿　第２巻
渡辺隆 …… 50
山は命の母
山本進吾 …… 72
山は呼ぶ
製作　旭川電気軌道株式会社／後援　東川村観光協会、旭岳温泉勇駒荘／企画　中屋義長／撮影　飛彈野数右衛門 …… 150
山ふたり
三輪敏広・三輪和恵 …… 72
山への挑戦―登山用具は語る―
堀田弘司 …… 72
山・やま事典
第二アートセンター、監修　近藤信行 …… 50
山行手帖　おいらく山岳会
30 周年記念号
おいらく山岳会 …… 138
山わたる風
伊藤健次 …… 117
山を読む
小疇尚 …… 61
山を読む事典
徳久球雄 …… 50
雪
中谷宇吉郎 …… 117
雪と氷の科学者　中谷宇吉郎
東　晃 …… 77
雪と氷の大研究
片平孝 …… 102
雪の王者　大雪山は招く
不詳 …… 144
雪の結晶　岩波写真文庫７
岩波書店編集部 …… 102
[雪] の結晶
小林禎作、古川義純 …… 94
雪の結晶
吉田六郎 …… 94
「雪の結晶」　たのしい科学
物性
岩波映像 …… 150
雪は天からの手紙
中谷宇吉郎エッセイ集
池内了 …… 117
雪晴風（ゆきはらし）
斎藤信義 …… 117
雪山登山ルート
西田省三 …… 90
吉積長春遺作展　図録
真鍋光男ほか …… 102
吉田友吉の嵐山百科
吉田友吉 …… 50
よみがえった森林を未来へ託す　洞爺丸台風から 50 年
洞爺丸台風森林被害復興 50 周年記念事業実行委員会事務局 …… 72
夜の傾斜
船山馨 …… 117
利尻礼文・知床・大雪植物手帳
村田正博 …… 90
流域紀行
朝日新聞社 …… 117
流域をたどる歴史　第一巻
豊田武ほか …… 117
利用者の行動と体験
（自然公園シリーズ 2）
小林昭裕、愛甲哲也 …… 61
利用者の利用体験に対する態度に基づく自然公園の管理方策
小林昭裕 …… 55
林業技術
鮫島惇一郎ほか …… 127
霊山碧水
太田龍太郎 …… 64
歴史の山 100 選
桜井徳太郎 …… 50
レンジャーの先駆者（パイオニア）たち
財団法人自然公園財団 …… 61
六十歳からの日本三百名山
田中三郎 …… 118
ロビンソンの末裔
開高健 …… 118
ロビンソンの末裔（文庫本）
開高健 …… 118
ワイルドビュー
井上功夫 …… 127
わが心の上川
Kamikawa On My Mind
上川町役場企画総務課企画グループ… 91
わが心の山
山岳写真集団 …… 102

月刊　わが北海道　3–8
河原昌春 ……127
わが山、源流へのあこがれ
早川禎治 ……118
私の中の深田久弥 「日本百名山」以降の北の山紀行
滝本幸夫 ……118
私のラバさん　酋長の娘
安細和彦 ……118
私はいつでも山に登りたい
田中澄江 ……118

文献書誌の読み方について

本に関する基本的な情報は、①著者、編集者②発行者（社）③発行年④本の分類番号⑤内容の要約文（要約文中の人名敬称は略しました）ーを基本としました。分類番号は、日本図書館協会が採用する「日本十進分類法（NDC）」です。図書や資料を収集、管理するときの基本的な分類番号で、図書の貸し出しや、目的の本を探すときに図書館の書棚のどこにあるかが分かり易くなります。分類番号を付ける作業にあたっては東川町文化レクリエーション課「ほんの森」のスタッフに協力いただきました。

インデックスは著者・編者名と、著作名（図書名、資料名）の二通りから検索できるようにしました。

なお、大雪山に関する本の収集の充実は継続していきますので、ご意見、情報を東川町へお寄せください。

人が来るほどに美しくなる山へ
大雪山・山守隊の発足

岡　崎　哲　三

経歴

札幌生まれ、三角山と積丹の海で育ち自然を学ぶ。
1995 年　大雪山で働き始め黒岳石室やヒグマ情報センターなどに勤務。
2004 年　故福留脩文氏に出会い「近自然工法」を学び技術を深める。
2011 年　合同会社「北海道山岳整備」を立ち上げ登山道整備専門の技術者として活動。
現在、大雪山、斜里岳、北アルプス、高尾山、小笠原諸島、徳島剣山など日本各地で近自然工法による登山道整備を指導、整備を行なう。
2018 年　一般社団法人「大雪山・山守隊」を立ち上げ、山と人を繋げる活動を行なっている。

＜荒廃の止まらない大雪山の管理の現状＞

大雪山の雄大な景色ではなく、圧倒的な花畑でもなく、道脇の崩れた場所に、小さく芽吹いた植物を見て涙が出るほど感動したことはあるでしょうか。

大雪山の登山道は 300km以上あると言われます。言わずと知れた北海道を代表する山岳地であり、観光地でもあります。これら登山道を含む国立公園の管理は主に行政によって行われてきました。ですが現在、大雪山の維持管理は資金、技術、人材共に足りず、様々な問題が起きています。

施工したヤシネットの隙間から伸びているエゾコザクラ

最大の問題である登山道の荒廃は、侵食が加速し続け、もはや荒廃の速度が管理の速度を圧倒し、やってもやっても悪くなるのを止められない状況に来ています。

登山道侵食は登山者が歩くことにより植物が踏まれ裸地化していくことから始まります。その場所に今度は降雨や雪解けによる水が流れ始めます。裸地化した土壌は登山者に踏まれることで土が少しずつ削れ、流水で流れてしまいます。だんだんと深く削られた道は周辺の水を集める水路と化してしまい、豪雨時には驚くほどの水量になり、水の力が土壌を削り始めます。こうなると登山者が歩かなくても侵食は止まらない状況になります。さらに削られた登山道の法面は秋や春の霜柱により少しずつ土壌が浮き、降雨で流され、道幅はだんだんと広がります。深く削られた

深く侵食された登山道。登山者は道脇を歩きさらに侵食が進む（左）
登山道を中心に植物群が崩れ、なくなっている（右）

道は歩きにくく危険なこともあり、登山者は新たな植物帯を歩き始め、登山道は複線化し、また侵食を繰り返します。

これらは本来、侵食が起きないように管理されるはずですが、こうした侵食はあまりにも広範囲に起きているため、資金や人材がない現状では、直すべき個所は登山者にとって危険な場所や非常に大きな侵食が起きた個所に限定されてしまいます。大きな侵食につながる小さな要因は対処されず、放置された小さな要因はすぐに大きな侵食が起きる原因になってしまいます。問題が起きないような予防の対処は出来ず、対応が後手になっているのが現状の管理です。

また施工する時にも、自然の変化に対応した技術が足りず、侵食原因に対応していない施工をすることもあり、施工直後に崩れてしまう場所も多々ありました。

何よりも、これだけの荒廃が起きていることを知らない管理者や関係者も多く、問題意識の共有さえ難しいことすらありました。

様々に苦しい要因がある経済状況では、行政は山岳管理にお金を使うことは少なくなり、大規模に直すことはもちろん、毎年の小さな積み重ねさえしにくい状況となっています。山を管理するはずの関係者も、崩れが起きることに慣れてしまい「崩れることが普通だ」という感覚を持つ人もいます。実は大雪山の管理は、このままでは荒廃が止められないほど手詰まりの状態になっています。

毎年起きる大規模な崩落。昨年まであったはずの登山道脇の花が無くなっている。とにかく歩きにくいぬかるみや段差が高くなった場所。ボロボロの木道や階段が放置され、歩けない状態になっている。もはやだれの目にも登山道の荒廃が明らかになっています。

崩れが放置されている木道

＜山守隊の始まりと方針＞

ですが、その状況が深まるにつれ、大雪山を登る一般の登山者に一つの感情が強くなっていくのを感じていました。それは「このままでいいのか？」「なんとかしなければいけないのではないか！」という憂いを持った「守る人」の気持ちでした。自分が知る20年前にはほとんどなかった感情が今は多くの登山者が共有する気持ちになっています。

登山者が自ら「山を守りたい」という思いが強くなっている

大雪山・山守隊は、「山を守る」という気持ちを正しい形にし、継続した維持管理により自然と人間が共存していくことを目的に設立しました。

自然との共存には、お金があることや保全の技術を高めるだけではうまく

いきません。自然の成り立ちを知り、侵食の知識を持ち、技術はもちろん、広い視野とアイデアが必要です。また、これらが一過性のものではなく、培われていくような風土や文化を深めることが重要になると思っています。

計画性のある保全がしっかりと行なわれるには、確かな自然観察から原因を考え、対応した技術を持ち、それを行使できる労力と資金がなければなりません。自然を観る目は一朝一夕では培われず、観ることができる人を育てるには時間がかかります。高い施工技術はワンシーズン施工しても身に付くものではありません。地元の山を知る人が継続的に施工できる状況を作り、記録し、試行錯誤できる環境が必要になります。ですが、その環境が作られるには「大雪山は大切なものだ」「守らなければならないものだ」という地元の方々の風土がなければサポート体制が作られず、一過性のものになってしまいます。

整備の専門家や行政関係者とともに、様々な登山道整備を行なう登山者

大雪山には数多くの観光客や登山者が来てくれます。咲き乱れるお花畑、迫力ある紅葉、歩いても歩いても人に会わない広さも大雪山の魅力として宣伝されており、ここ数年で海外の方々の割合も大幅に増えました。ですが同時に、ボロボロになっても放置されている木道や階段、侵食され幅が数メートルに広がった登山道、崩れゆく登山道脇の植物群、管理が不足している登山道も世界中にしっかりと見られています。地元として北海道民としてとても恥ずべきことと感じています。

大雪山・山守隊は大雪山の地元として出来ることの幅を広げ、行政と協力し、研究者に協力を仰ぎながら、地域の方々が大雪山を自ら守ることができるシステムを作っていきたいと思っています。それができた時、大雪山の魅力は風景や地形だけでなく、地域が一丸となって山を守るという山岳管理システムこそが、地元として誇れるものになると確信しています。

＜管理の考え方「近自然工法」とは＞

ですがこれほど大規模に侵食された登山道を直せるのでしょうか。背の高さより深く削れた場所や、数メートルも広がってしまった道を元の地形に戻すのはほぼ不可能です。ですが、この場所も植物が育ち生態系が成り立っていく環境にすることは可能だと思っています。

自然の中で地形変化を観察すると、流水で深く削られた場所や川になっている場所などに、かつて大規模な侵食が起きていた痕跡を見ることができます。そしてどんなに深い侵食でも植物が育ち、生態系が出来ている場所が多くあることがわかります。元の地形に戻すことは無理でも、何かの「きっかけ」さえあれば自然は復元し、生態系を作り、侵食されにくい場所になっていきます。この侵食を止めるきっかけを作り、生態系を復元させる考え方を「近自然工法」と呼びます。

近自然工法の理念は「生態系の底辺が住める環境を復元させる」というものです。そうすれ

ばおのずと生態系は出来上がっていくと言います。不思議なことに、この工法がうまくいった場所では侵食が止まり、植物が芽吹き、もはやそこに侵食が起きていたことさえわからないほど自然に馴染んでいきます。また、育った植物が土壌を捉え、水に流されにくくなり、侵食が起きにくい場所になるため、施工物が驚くほど長く保ちます。

山岳地域における生態系の底辺とは植物であり、それが育つための土壌だと考えます。侵食で土壌が崩れるならば、崩れた土壌を溜めてそこに植物が育つ場所を作ればよい。崩れた登山道を直す方法はあるのです。

同じ資材でも施工方法を変えて様子を見ることも。自然に合う方法を模索している（写真・上）

施工したヤシネットから芽を伸ばし始めたチングルマ（写真・下左右）

現状での登山道整備は「歩きにくくなった場所を歩きやすくする作業」や「崩れないように徹底的に固めてしまう作業」が多く行なわれていますが、これからは「自然が復元していく」作業をしなければならないと考えています。それには非常に難しい技術と理論が必要です。自然はどう変化していくのだろう。人はどう使っていくのだろう。風景にあったものになるだろうか。知識だけでなく、想像力や感性が必要になります。

難しいけれど正しい施工が出来た時、そこには復元が起きてきます。崩れが無くなり、草花が育ち始め、風景が変化していきます。それを見た時の心情は登山の喜びとは違うものがあります。手をかけたものが育っていく喜び。風景の変化は心情の変化に通じ、崩れた道脇に芽吹いた植物を見て、数十年後の蘇った生態系を想像できたとき、小さな希望と大きな感動が湧いてきます。

「来年はどうなっているだろう」「土が溜まっているだろうか」「芽は出るだろうか…」

一度手をかけると次の年もきっと行きたくなります。ピークハントや風景を見に行くだけではなく、施工した場所を見に行き、手をかけることが楽しみの一つになります。

近自然工法の理念は「生態系の底辺が住める環境を復元させる」こと。生態系の底辺を担うものが活躍できる場があれば生態系は出来ていく。これを人の社会に当てはめた時、大雪山を底辺で支えているのは誰でしょうか。それは行政でもなく、山岳関係者でもなく、大雪山を好んで来てくれる多くの登山者や地元の人々だと思っています。この底辺で大雪山を支える人が活躍できる状態を作れば、おのずと風土や文化が作られていくのではないでしょうか。大雪山・山守隊はしっかりとした管理の方向性と、活躍の場ができる「きっかけ」を作り、登山者や地元の方々と山岳管理をつないでいきたいと思っています。

登山道を守るためには何をするべきか　〈 ～計画を立てる～ 〉

皆さんは登山道整備と言えば何を思い浮かべるでしょうか。ゴミ拾いでしょうか。ロープ張りや草刈りでしょうか。今求められている登山道管理はこれだけではありません。

「大雪山」と一言で言いますが、実は管理する機関が多々あります。行政である環境省、林野庁、北海道、大雪山を取り巻く1市9町の自治体。これらの機関はそれぞれの場所を管理していますが、大雪山全体での情報共有は出来ていないのが現状です。

ほぼ9割の登山道は行政が管理していますが、行政の管理官は2～3年ごとに異動してしまいます。大雪山は広く、3年あってもすべての登山道を歩くことすらできませんし、雪解け時期と紅葉期では登山道の状態は大きく違います。崩れが起きていたとしても以前の状態を知らない場合が多く、どのくらいの変化があったのか正確にはわかりません。

「どこがどれだけ崩れているのか」この状況だけでも理解できている人は少なく、記録もほとんど無いのです。

崩れの状態は？　今すぐに手を付けるべき場所は？　誰がやるの？　いつ？　どういう方法で？　整備の計画を立てようにも、個別も全体もわからない状況では立てようがなく、ひどい崩れが起きた時だけ直すという後手に回った対応しかしていないのが現状の管理です。

維持管理というシステムが機能するには長期的な計画が必要です。計画を立てるには現状把握ができていなくてはなりません。お金がない、技術が足りない、労力がないなど悩む前に、どういう状況かを知ることがとても大事なのです。

大雪山は素晴らしい山岳地域ですが、山の荒廃や崩れが放置されている現状を知ると「観光でもっと人を呼ぼう」とは簡単には思えません。高山植物が咲き誇る時期も素晴らしい紅葉時期も、現場で登山者と話すといつも「標識の文字がすり減って全く読めなかった」「この崩れた木道はいつ直すの？」「こんなにぬかるみがひどい道は初めてだ！」。コースによっては全体の3～4割になっている外国人への対応はほぼ出来ていません。維持管理に関わる者として、北海道民としてとても恥ずべき状態だと感じています。

文字がすり減ってほとんど見えなくなっている標識（左）
近年、外国人の登山者は大幅に増加し、今後も増加すると思われる（右）

では誰がこの状況を把握することができるのでしょうか。大雪山は広く、登山道は冒頭に書いたように300km以上あると言われています。この先、行政の予算が数倍になるとはとても思えません。大雪山・山守隊は行政や自治体だけでなく、民間がもっと管理にかかわり長期的な計画を管理者とともに作っていけるようにしたいと考えています。

今期、山守隊は行政を含む山岳関係者にアクションカメラやドローンを使った動画ベースの登山道記録を提案し、情報収集をしています。収集した情報はサーバーに管理され、いつでも共有できる状態にして行動しています。

山岳関係者で情報を収集し、登山者には崩れた個所などの情報を提供してもらうことで、過去の情報と比較し「いつ崩れたのか」「どのくらい崩れたのか」「緊急性はあるのか」などが判断でき、計画を立てる手段の一つとなるはずです。全体を見て部分を考えることが、管理計画の基本です。地元民だからこそできる手段があるはずです。

ドローンやアクションカムで登山道を調査・記録する

＜大きな課題　～資金はどうするのか～＞

観光立国北海道などと呼ばれることもありますが、行政の山岳地域における管理予算は年々減少しています。観光客やインバウンド取り込みに関わる「山を利用するための予算」は増えることもありますが、維持管理など「美しい風景を残すための予算」は減っているのが現状です。利用を増やすけれど管理は減らすでは矛盾しています。利用が増えれば山岳へのダメージも増えます。これらをしっかりとバランスさせるのが真のエコツーリズムだと考えています。

木道を設置するため、企業や登山者からの募金により購入した木材を運搬する

山守隊ではこの現状を様々な分野の方に発信していますが、反響は大きく、民間企業や個人から資金や労力の提供を提案されることが多くなりました。現在、これらの提案を正しく活用するため、行政や研究者と協力し、効果的な方法を継続して行ない、現状の「やってもやっても崩れが増える管理」から「やればよくなっていく管理」にしていけるよう動き始めました。

様々な資材も使用し、負担少なく植物が復元するような施工を行なっている

これからは利用者負担の検討も必要

理想は「人が来るほどに美しくなる山」だと思っています。もちろん、山にはそれぞれのキャパシティがあるので、ただ利用を増やせば良いというものではありませんが、利用者が来ることで保全の力が増やせるシステムは可能だと考えています。

行政などの管理者資金だけでなく、利用者や民間からの資金はこれからの保全に大きな力となっていきます。

＜大雪山に守られて、大雪山を守っていく＞

道具を駆使し大石を動かす。
飛び石を組んで歩行路を確保する山守隊員

おそらく、荒廃が止められていない大雪山の登山道は、これからもう少し悪くなっていくと思います。ですが今、復元への「きっかけ」を作ることができれば、数十年後には生態系が出来上がり侵食など無かったようになっているかもしれません。長期的な視野を持ち、継続して活動し続けられるのは、大雪山の麓に住む私たちだと思っています。文化を深め大雪山への想いを持つことは何よりも大事なことだと思っています。

自然保護とは何でしょうか。管理し、保護すると言いますが、人間ができるのは人間の管理であり、大きな自然を管理するなど本来はおこがましいのかもしれません。

また、大雪山を保護すると言いますが、もし大雪山がなければ、今ここに町があり、私たちが住んでいるでしょうか。

大雪山があるから雪があり、川があり、肥沃な土壌があり、農業が発展し、町が出来、私たちが生活しているのだと思います。大雪山に守られているのは私たちなのです。

今まで様々な地域で地元の方々と共に登山道整備をする機会を頂きました。「近自然工法」の考え方で施工し、復元が始まったとき、地域の方々の「郷土愛」が深まるのを感じます。施工した方々は単なる労力の提供者ではなく、地域の自然を理解し、利用してくれる人を想って行動するようになります。大雪山という美しい自然を利用するだけでなく、郷土愛を深め、地域の自然を発信し、守っていく、という真のエコツーリズムが生まれてきます。

これらの活動を提唱し、参加できることに感謝し、楽しみや喜びを与え、生活に欠くことができない大雪山へ少しでも恩返しできるように、アイデアをもって行動していこうと思います。

登山道整備イベントに参加してくれた 70 名の方々

▌大雪山国立公園パークボランティア連絡会

国立公園パークボランティアは、国立公園の適正な保護と利用の推進に寄与するボランティア活動を行う団体で、環境省が設置している。全国の 34 の国立公園のうち 25 の国立公園の 37 地区（平成 29 年 6 月現在）において、各地区の特性に応じた活動実施計画に沿って様々な活動を行っている。

北海道の屋根といわれる大雪山は、特異な生態系、山岳景観、地質構造に至るまで、その自然価値が高く評価され、北海道が世界に誇る自然学術遺産です。陸域で我が国最大の面積を有する大雪山国立公園には自然保護官事務所が上川町、東川町、上士幌町の 3 か所にあり、自然保護官（レンジャー）、自然保護官補佐（アクティブ・レンジャー）らが活躍している。

大雪山国立公園パークボランティアの発足時をふりかえると、昭和 63 年から設立へ向けた準備が始まり、同年 10 月に層雲峡住民センターでボランティアレンジャー養成研修会が開かれた。その時の講師は俵浩三、佐々木太一、塩谷秀和、保田信紀、磯清志、志賀義彦、成田新太郎の7氏（「パークボランティア 20 年の歩み」から）。

そして、元号が昭和から平成に変わった 4 月、「大雪山国立公園層雲峡・旭岳地区ボランティアレンジャー連絡会」が発足した。一方で、東大雪・十勝連峰地区ボランティアレンジャーも平成 4 年 3 月に組織されたが、平成 5 年にそれぞれ解散式を行ったうえでその二つを併合した「大雪山国立公園パークボランティア連絡会」となり、大雪山国立公園全地区をカバーする新たなスタートを切った。

新組織となって会報発行に着手し、パークボランティア便り「大雪山」の創刊号（5月発行）に次のような記述がある。

「念願の大雪山国立公園全域のボランティアレンジャーとなり、名称も新たに『大雪山国立公園パークボランティア』と一新し、新たな決意で出発することになったのです。総勢 81 人となり、日本最大の国立公園のボランティアレンジャーにふさわしい大所帯になり、会員のみなさん、その責任に身の引き締まる思いをしていることと存じます」。意気込みが強く感じられる一文だ。

環境省自然保護官事務所と連携するパークボランティアは、発足当初から高山蝶保護パトロール、ヒグマパトロール、クリーン大雪清掃パトロールなど山のパトロールを主な活動としていた。経験を積み重ねる度に活動枠は広がり、貴重な自然を守るために登山道の維持管理、野営地・避難小屋等の清掃や貴重な動植物の保護活動、利用者への自然解説活動、登山マナーの啓発、携帯トイレブースの保守管理パトロール、外来種防除、植生復元モニタリングなど、その奉仕活動は多岐にわたってきた。主に 5 月から 10 月の間に 40 回から 50 回の行事を実施している。

外来種防除では、大雪山国立公園内の然別湖においてウ

チダザリガニが繁殖しており、捕獲（防除）調査を実施している。ウチダザリガニは1930年代、食用としてアメリカから摩周湖に移入され、その後、道内各地に持ち出され繁殖域を拡大してきたと考えられている。在来種であるニホンザリガニに対する捕食やザリガニペストの感染による致死の危険性が高いことなどから、ニホンザリガニや他の在来生物への影響が懸念されている。

ヨーロッパ原産の外来種セイヨウオオマルハナバチも野外に定着している。もともとは温室トマトの花粉媒介昆虫として我が国へ移入されたもの。在来種に比べて舌が短く、花弁の脇に穴をあけて、蜜を集める。花の雌雄生殖器官に触れることなく蜜を採取する（つまり花粉がハチの体につくことがない）ため、本来はハチなど昆虫類に送受粉を依存する野生植物の繁殖が阻害される悪影響が懸念される。セイヨウオオマルハナバチの増加と大雪山に分布域を拡大することを阻止しなければならないことから、大雪山の高山帯における飛来を監視し、セイヨウオオマルハナバチの駆除にも力を入れている。

近年、地球温暖化の影響で、大型台風の発生などによる大規模な土砂災害等が頻発するようになった。大雪山国立公園内においても例外ではなく、踏圧や雪解け水による侵食、複線化、腐朽した施設など、登山道の荒廃が問題となっている。大雪山国立公園の登山道の総延長は300Kmもあると言われており、国立公園の歩道事業者だけで、それぞれの登山道を維持管理していくことは困難になりつつある。

これに対して平成21年度から、多様な山岳関係者などの協働により、登山道の維持管理をする枠組み作りが模索されている。パークボランティア連絡会も講師を招いて登山道保全技術セミナーを開き、保全技術の向上に取り組んできた。今後も、大雪山国立公園で進められてきた協働型による登山道の維持管理の取り組みを核に、国立公園の管理運営体制を確立していくうえでの一翼となる活動を推進していく。

パークボランティアは新たな知識を学ぶため養成講座や研修会を定期的に開いているほか、「パークボランティアのための大雪山自然解説マニュアル」を編集、発行してきた。平成30年、創立30周年の記念行事の

一環として 2009 年当会発行の「大雪山自然解説マニュアル」の増補改訂版を発行しており、その内容は 1 章「大雪山の形成」から気象、昆虫、鳥類、ほ乳類、植物、花、8 章「資料編」まで、170 ページ余にわたって興味深い大雪山研究の集大成を載せている。

目次から抜粋すると「旭岳の誕生」「世界的にも稀な強風地帯」「氷河時代の落とし子（ウスバキチョウ）」「鳥たちの住宅選び」「大雪山とアイヌ語」など、様々なテーマで大雪山を解説している。

マニュアルの編集、発行のほか会報「パークボランティア便り　大雪山」は通巻 100 号を超えて続き、記念誌も「パークボランティア 10 年の歩み　大雪山」（平成 13 年 5 月発行）「パークボランティア 20 年の歩み　大雪山」（平成 22 年 3 月発行）の 2 冊を編集してきた。

平成 30 年 9 月には 5 年ぶりに新規会員の募集を行い、30 名の募集に対し 60 名を超える応募があった。11 月に新規会員対象の養成研修会を開催、受講修了した 36 名の新入会員を迎えて総勢 124 名となった。陸域で我が国最大の山岳公園にふさわしい体制を整え、これからも貴重な自然の宝庫を守るための活動を続けていく。

（参考）

■大雪山国立公園パークボランティア連絡会 facebook

パークボランティアの活動は facebook で発信しています（https://www.facebook.com から「大雪山国立公園パークボランティア連絡会」で検索してください。）

■大雪山国立公園パークボランティア運営協議会

「大雪山国立公園パークボランティア連絡会」の活動は、大雪山国立公園関係自治体、観光協会、事業者から成る「大雪山国立公園パークボランティア運営協議会」から、支援をいただいています。

構成団体：北海道上川総合振興局環境生活課、十勝総合振興局環境生活課、富良野市、上川町、東川町、美瑛町、上富良野町、南富良野町、士幌町、上士幌町、鹿追町、新得町、上士幌町観光協会、鹿追町観光協会、新得町観光協会、富良野市観光協会、（一社）層雲峡観光協会、（社）ひがしかわ観光協会、（一社）美瑛町観光協会、かみふらの十勝岳観光協会、南富良野まちづくり観光協会、士幌町観光協会、株式会社りんゆう観光層雲峡事業所、ワカサリゾート株式会社、日本製紙旭川サポート株式会社 など

事 務 局：環境省上川自然保護官事務所（TEL：01658-2-2574）
東川自然保護官事務所（TEL:0166-82-2527）
上士幌自然保護官事務所（TEL:01564-2-3337）

■大雪山国立公園ホームページ

http://www.daisetsuzan.or.jp/（大雪山国立公園連絡協議会）
http://www.env.go.jp/park/daisetsu/index.html（環境省）

旭岳ビジターセンターと旭岳の四季

姿見石室4月

姿見石室６月

ヒグマの足跡

珍しい木の発見

旭岳周辺の大地は、約一年の半分、雪に覆われています。例年、暦の上で春を迎えるころ、積雪はもっとも深くなります。しかし、一日の長さが伸び、雪も締まっていく春は、スキーやスノーシューが使いやすく、無雪期には草木等でさえぎられて見えなかったものが観察しやすい時期になります。

ゴールデンウィークのころには動植物の動きも始まり、「大雪山」を深く知るには最適の時期といえるでしょう。

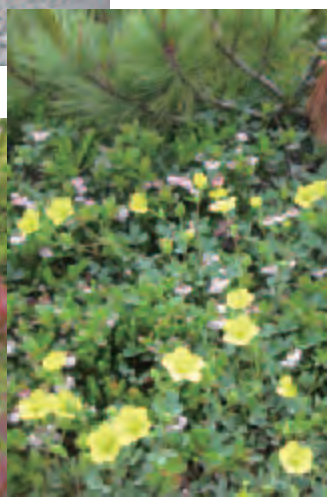
残雪の多い「裾合平」などは月末でもまだ数mの雪が覆う雪原ですが、夏山シーズンにむけ「山の祭り」が開かれる６月は、まず旭岳温泉で、ついで姿見で、つぎつぎ開花していき、野鳥の種類も日を追って増加します。

登山や自然、宿泊、交通などさまざまな情報を求める問い合わせが多い、賑やかな時期を迎えます。

７月、観光や登山がひとつのピークを迎えます。姿見がもっとも見栄えする花を揃える上中旬、多くの登山者が訪れます。しかし夏の短い山では、花がピークを迎えると同時に早くも秋の気配が漂います。

白鳥の雪渓

ギンザンマシコ



８月は花も鳥も秋の様相です。湿地の蚊もトンボの群によって下旬に

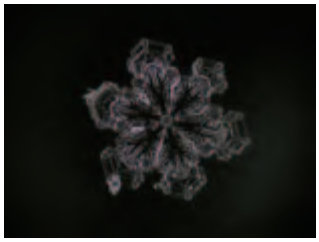
チングルマの紅葉　姿見

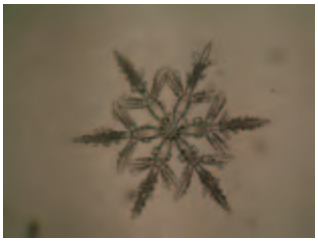
向け急速に減っていき、気の早い草木は葉に色づきが見られます。

9月の紅葉は多くの人を引き付けます。月初めから紅葉のピークを探る電話が急速に増えていきます。例年、秋分の日前後の好天日、旭岳は年間最多の人出を迎えます。

高山帯から雪が下るに従い、訪れる人は減りますが11月中旬からにかけての約1カ月、色鮮やかなウェアのノルディックスキー選手たちで賑わいます。

厳冬期は近年、外国人スキーヤーが大変増え、パウダースノーを楽しんでいきますが、世界的に有名な軽い雪は、美しく整った結晶構造の賜物といえるでしょう。





旭岳ビジターセンター

〒071-1472　上川郡東川町勇駒別
電話 /FAX：0166-97-2153

2014年3月に発行した『大雪山から育まれる文献書誌集』に掲載したものを再掲しました。

▌旭岳ビジターセンター

環境省の旭岳ビジターセンター完成
豪雪にすっぽり、でも大丈夫、カマクラのように

環境省の新しい旭岳ビジターセンターが 2018 年 11 月に完成した。展示、内装工事を進め、内部の諸設備が整う 2019 年 6 月 15 日、山のまつり「ヌプリコロカムイノミ」に開館する。

建物は木造一部鉄骨造り平屋建て、高さ 10.8 m、延べ床面積 648.8㎡。木材については大雪山地域に自生している植生を考慮して、外壁にはカラマツ横羽目板、構造材にはカラマツ集成材、床材にはシラカバのフローリングを採用した。

環境省の新しい旭岳ビジターセンター

敷地が湿地であることと、隣接する駐車場との高低差を解消するため高床形式にした。長い冬期間は周辺の積雪が 3 mを超えるため、腰折れ屋根を採用して屋根の高さを抑え、雪のカマクラ状態になっても差し支えないような屋根形状にしている。ひさし部分を伸ばした雁木フィールドハウスにし、屋根からの落雪がうず高く積もっても外壁に直接触れないように工夫がしてあるので、ひさしの下はカラマツ壁と雪壁に囲まれた通路のようになる。

建物の中に入ると、「樹状構造」を採用しているので、柱が樹木の幹で、天井の梁が幹から伸びた枝のように見え、樹木で覆われた雰囲気がある。

中央部に広さ 56.7㎡のレクチャールームがある。両サイドの壁を開けたり閉めたり、融通が効く構造で、ときにはレクチャールームとなり、ときには壁が展示パネルに代わり、全面開放すると展示室と一体感を醸し出せるなど、フレキシブル性を持たせたのが特長。

他に展示室・休憩コーナー（273.4㎡）、多目的ルーム（38.9㎡）、事務室（43.7㎡）、倉庫（38.9㎡）が整っている。

旭岳温泉地区の課題として、「今、どこで、何が楽しめるのか」など、利用者の知りたい情報の発信が弱いことが挙げられており、新ビジターセンターではリアルタイム情報の発信を強化する。ロープウェイ運休時に代替となる場所やプログラムが少なく、地区全体の休憩スペースの不足も課題であったことから、エコーツアーや体験プログラムの情報提供、活動支援、休憩スペースとくつろぎ空間の創出にも努め、楽しみ方の選択肢の増加と、満足度の向上を目指していく。

これまでの旭岳ビジターセンターは昭和 57 年から北海道と東川町とで運営してきたが、建物が老朽化してきたうえ、町が取り組んでいるエコツーリズム推進の動きに対応が出来なくなってきたため、環境省が新設することになり、管理運営も環境省と東川町が共同で行う。

旭岳ビジターセンター

〒071-1472　上川郡東川町勇駒別
電話 /FAX：0166-97-2153
【HP】http:www.welcome-higashikawa.jp/info/?c=16
【e-mail】visitor.center@town.higashikawa.hokkaido.jp
資料提供：環境省北海道地方環境事務所　東川自然保護官事務所

▌環境省　東川自然保護官事務所

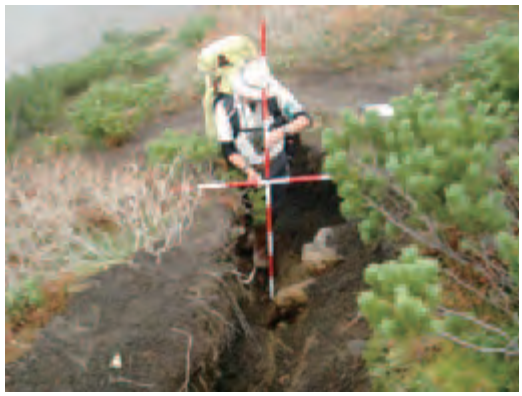
許認可の指導の様子

東川自然保護官事務所は大雪山国立公園の東川町から南富良野町までの範囲を担当し、元々は勇駒別駐在の国立公園管理員として昭和４７年から配置されました。平成６年に事務所名称が変更され、現在は自然保護官（レンジャー）とアクティブレンジャーの二人体制で業務を行っています。

国立公園は日本を代表する優れた自然の風景地であり、その風景地を守るために各種開発行為との事前調整を行うことが主な業務です。具体的には自然の風景や動植物の保護を目的として様々な行為が規制されていることから、それらの行為に対して、許可や認可の審査を行っています。

一方で、国立公園を利用するための施設の整備も重要な業務です。登山道や公衆トイレ、宿泊施設などです。許可された行為が実際に申請のとおりに行われているか確認したり、野生動物の保護、外来種の防除、登山道の荒廃状況把握、利用者指導など適切に公園を利用出来ているか、など確認するため現地へ行くこともあります。

行政関係者や地域の皆さんに協力して頂き、日々の業務ができています。


登山道調査の様子

登山道の維持管理の様子

環境省 北海道地方環境事務所　東川自然保護官事務所

〒071-1423　上川郡東川町東町１丁目１３番１５号
TEL:0166-82-2527　FAX:0166-82-5086
【北海道地方環境事務所】http://hokkaido.env.go.jp/
【アクティブレンジャー日記】http://hokkaido.env.go.jp/blog/

■ NPO 法人大雪山自然学校

散策レクチャー（旭岳ロープウェイ駅にて）

大雪山国立公園との関わりがまだまだ浅い私たちにとって、古き日の大雪山を知ることのできる『大雪山から育まれる文献書誌集』は貴重な存在です。この目録によって蓄積された文献に触れられることをとてもうれしく思っております。

さて私たち大雪山自然学校は旭岳自然保護監視員の業務を通して、大雪山に関わっています。雪の残る6月から雪に覆われる11月まで毎日、姿見の池園地に通っていますが、時折数十年ぶりに旭岳を訪れた方とお話しする機会があります。ロープウェイが整備される以前のお話や、園地内に散策路が無かった頃のお話など、私たちはいつも貴重なお話を伺うばかりです。そんなお話を伺う度に、昔から愛されている大雪山や旭岳の歴史を感じます。

散策路補修

6月のある日、いつものように散策路上の残雪にステップを切る作業をしていると、旭岳温泉の登山道から二人組の男性が登ってきました。そのお二人は私たちの作業を見ると、背負っていたスコップを取り出して作業を手伝ってくださいました。「自分たちの歩く道だから、手伝うんだよ」との言葉が忘れられません。散策路や登山道を登山者自身が整備することは私たちの目標だったからです。

大雪山そして旭岳の登山道、姿見の池園地の散策路は山が好きな人に支えられています。その方たちは私たちがお手伝いする前からずっと山を支えてきました。私たちはそれをできる限り引き継ぎ、どのように利用してもらうことが良いのかを考え続けながら活動をしています。ロープウェイの降車に合わせて実施する3分間の散策レクチャーや毎週四カ国語で発行する旭岳ネイチャーレター、毎日更新するインターネットを使った情報発信はそんな思いから生まれました。

また、清掃活動や登山道の補修などの環境保全活動を通した人材育成活動「大雪山環境保全プログラム」を開始しました。活動にご賛同いただいた皆様の寄付によって運営されています。大雪山国立公園内での活動では、東川町大雪山国立公園保護協会の協力を受けて実施しています。

山への愛情、自ら守る意識、伝える熱意、山で仕事をしていると大雪山で受け継がれている伝統を肌で感じます。そんな伝統のお手伝いをこれからも続けたいと考えています。

NPO 法人大雪山自然学校

〒071-1404　上川郡東川町西4号北46番地
TEL:0166-82-6500　FAX:0166-82-6500
【e-mail】desk@daisetsu.or.jp
【HP】http://daisetsu.or.jp/
■大雪山国立公園旭岳姿見の池エリアの最新情報■
https://blog.goo.ne.jp/2291yamaiku

▌旭岳ファンクラブ

「旭岳ファンクラブ」は、旭岳の適正利用や、利用環境の整備を目的に、旭岳周辺で活動する山関係者によって、2003年春に発足しました。それと同時に、会報である『旭岳通信』も、創刊号が同年6月25日に発行されました。

ファンクラブ発足当時の旭岳周辺は、いまとはずいぶんようすが違っていました。1990年代の「百名山ブーム」によって、百名山のひとつである大雪山の最高峰・旭岳には、夏になると大挙して登山者が押し寄せていました。ロープウェイの駐車場には大型バスがズラリと並び、ひとつのグループが40名にもなる登山ツアーが、山頂をめざして数珠つなぎになる光景があたりまえだったのです。

とうぜんのように登山道は荒廃し、周辺には用を足すための踏みあとが出来、茂みの中にはティッシュペーパーの花が咲く――というありさまで、原始的な自然環境をウリにしている大雪山にはあってはならない光景があちこちで見られました。

外来種学習会

この状況に心を痛めていた山関係者が、現状を多くの人に知ってもらい、少しでも環境保全の助けになれないだろうか、と思って立ち上げたのが「旭岳ファンクラブ」であり、情報発信ツールとして創刊したのが『旭岳通信』でした。

その後、会の活動は、「山の祭り」での劇や、山について学ぶ学習会、登山道の荒廃状況を見るツアーなど、幅をひろげて現在に至っています。

山の祭り劇

『旭岳通信』については、巻頭特集と連載記事という二本立てでこれまでやってきましたが、執筆協力者の減少により、現在の紙面を維持していくには厳しい環境になってきており、いつまで続けられるのかわからないというのが現状です。

旭岳ファンクラブ

〒071-1407　上川郡東川町西七号北37　山樂舎BEAR気付

佐久間　弘（さくま　ひろし）旭岳ファンクラブ代表

1962年新潟県生まれ。高校時代に登った白馬岳がきっかけで山にハマる。企業社会への疑問から大学卒業後、穂高の山小屋へ入るが仙人にはなれず、アルバイトでためた資金で26歳のときアフリカへ。2年にわたり各地を旅歩く。帰国後は、雑誌編集者・山小屋従業員・大工・漁師などを経て、山岳ガイドに。1995年より東川町在住。2001年に「大雪の“いま”を楽しみ、“明日”を考える山楽登山ガイド」山樂舎BEARを立ち上げ、現在まで代表を務める。

2014年３月に発行した『大雪山から育まれる文献書誌集』に掲載したものを再掲しました。
旭岳ファンクラブは当初の役割を終えたとして2015年２月20日開催の年次総会で解散を決議、『旭岳通信』も2014年冬号（12月８日発行）に総目次を載せて終刊となりました。

大雪と石狩の自然を守る会
（だいせつ　いしかり）

Nature Conservation Society of Mt.Daisetsu and the Ishikari

【会の概要】

設　立：1972 年旭川大雪の自然を守る会として発足
　　1980 年大雪と石狩の自然を守る会に改称
憲　章：石狩川憲章（1975 年）・大雪山憲章（1981 年）
役　員：代表・寺島一男、事務局長・渡辺辰夫、
　　役員総数 31 名
会　員：230 名（2014 年 3 月現在）
事務所：〒 070-0822 旭川市旭岡 1 丁目

【活動の目的】

大雪山国立公園・石狩川・道北一帯を主なフィールドに、自然保護活動、調査研究活動、自然保護教育活動、自然保護思想の普及及び啓発活動、自然保護団体の設立及び連携活動、行政との協働及び行政に対する提言活動などを行う。

【主な活動内容】（2014 年 3 月現在）

1．自然保護活動

①大雪縦貫道路問題（1971-1973 年）②表大雪循環道路問題（1972-1974）③大雪山国立公園内林道問題（1973-1975）④大規模林業圏開発問題（1973-2009）⑤石狩川水銀汚染問題（1975-1976）⑥日高横断道路問題（1979-2003）⑦大雪山国立公園パトロール活動（1980- 継続中）⑧石狩川上流野生サケ回復活動（1984- 継続中）⑨知床国有林伐採問題（1986-1987）⑩大雪山士幌高原道路問題（1987-2001）⑪大雪山リゾート開発問題（1990-2000）⑫大雪山世界遺産登録活動（2001- 継続中）⑬外来種セイヨウ防除活動（2005- 継続中）⑭大雪山国立公園森林伐採問題（2006- 継続中）⑮白水沢地熱開発問題（2012 年 - 継続中）

2．自然保護団体の設立活動

北海道自然保護団体連合ほか 16 団体の設立及び設立に参加

3．調査研究活動

美瑛富士山麓クマゲラ・ナキウサギ生息調査ほか、大雪山・石狩川の自然環境調査 9 件

4．自然保護教育活動

①大雪山講座「ひぐま大学」（1981- 継続中）②自然学園「グリーンフォーラム旭川」（1975- 継続中）③市民例会「ちゃらんけ」（1995- 継続中）④大雪山フォーラム（1997- 継続中）

5．講演活動

①学校教育（13 回）②公民館・博物館講座（26 回）③公共機関主催行事（26 回）④民間団体主催行事（62 回）

6．広報活動

①機関誌「ヌタプカムシペ」（年 4 回 150 号）②会誌「カムイミンタラ」（年 1 回 33 号）

7．表彰

①北海道社会貢献賞（2001 年）②自然環境功労者環境大臣表彰（2006 年）③旭川市開村 120 周年記念表彰（2010）④前田一歩園ジュニア自然環境賞（2010 年）

▌あさひかわジオパークの会

ジオフォーラム in2014「カムイの大地ジオパーク構想」

大雪山と旭川市、東川町、東神楽町

あさひかわジオパークの会は旭川市に住む自然・地質愛好家が集い、神居古潭や大雪山・十勝岳を含む地域をジオパークに認定してもらうことを目的に平成 24 年 12 月に結成されました。発足当初は 6 名の会員でしたが、平成 27 年 2 月現在では会員数は 45 名を超えるまでになりました。

ジオパーク（大地をベースにした自然や歴史・産業など魅力ある地域）には、地域の地質遺産を保全し、教育・防災や観光に活用して、地域を持続的に活性化していくねらいがあります。現在（2015 年）、日本には 36 の地域のジオパーク（７つの世界ジオパーク、北海道には５つのジオパーク）がネットワークをつくり、年々拡大しています。

大雪山は小さな火山体が集まってできた円錐台の形をなし、北海道の屋根にあたります。約３万年前には大噴火が起こって火砕流が噴出し、河川を厚く埋めました。その時にできた柱状節理が岩壁となって長く続く層雲峡や天人峡はジオサイトとしてすばらしい景観をつくり、大きな価値があります。大雪山は北の野生動物が育まれる豊かな森と水の源であり、大河・石狩川を生ずるところです。東川町はまさに大雪山に磨かれた水と豊かな田畑がある火山の恵みを受けた町と言えます。

あさひかわジオパークの会は貴重なジオサイトを有する旭川周辺地域のジオパーク認定に向けた活動を行っている住民団体です。ジオツアーや自然観察会、自然調査、交流会・学習会などジオパーク構想の活動を通して、地域住民が地域のジオ・風土を正しく楽しく学び、体験して、地域のことを発信し語れるようにしたいと願っています。大雪山の価値を地元住民が再認識する“カムイの大地と火山が織りなす水と森の風土”のジオパーク構想をかかげ、ジオパーク認定に向けて貢献していきたいと思います。

現地観察会（神居古潭峡谷）

火山のおもしろ実験（フィール旭川）

旭川ジオパークの会

〒 070-8621　北海道旭川市北門町 9　北海道教育大学旭川校・地学教室気付
【電子メール】asahikawa.geopark@gmail.com　【ホームページ】http://asahikawageopark.web.fc2.com

一般社団法人 ひがしかわ観光協会

山の祭り

観光協会は昭和30年5月24日に「東川町観光協会」として設立され東川町の観光振興を図って参りましたが平成23年4月1日付けで「一般社団法人　ひがしかわ観光協会」として法人化しその運営体制を見直し現在に至ります。

東川町の観光資源は古くから天人峡・旭岳地区を中心に、これまで長年、主な事業として1年を通じて登山者の安全を祈願するために旭岳温泉地区にて山の祭り「ヌプリコロカムイノミ」を開催し温泉街の宿泊客や登山客とともにアイヌの儀式を楽しんだり、天人峡地区の温泉施設の湯めぐりパスポートやイベント限定の山賊鍋などの特色あるメニューを用意して地区一帯で楽しめる滝まつりの実施など各地元温泉街の会員との協力体制の下で両温泉地の魅力をどのような手法で広め、どうやって誘客を推進していくかを目的として活動してきました。

クロスカントリースキー

しかし、経済環境や時代の変遷によりこれらのイベントも近年、一部は未実施となったり「大雪旭岳 SEA TO SUMMIT」のようなスポーツ環境イベントが加わる、あるいは旭岳温泉地区では1年を通じて誘客が図れるよう、冬期の地域の特色を活かしたクロスカントリースキーコースの整備による社会人・大学等の合宿の受入れを早くから実施するなど事業内容も単なるイベントの実施から多様な誘客施策の実施へと様変わりしてきています。

また、近年では、道の駅ひがしかわ「道草館」が道の駅として指定された平成16年から東川町の市街地への入込が飛躍的に伸び、飲食・カフェなど東川町の「地下水」や暮らしやすさを背景とした店舗が徐々に増えこれらを目的に来町するお客様、東アジアを中心とした外国人観光客が旭川空港直行便の創設や東川町の外国人日本語研修生受入れにより増加傾向にあるなど、従来の天人峡・旭岳地区に加え東川町市街地周辺も観光ポイントとして中心的な位置づけを占めるようになり周遊パターンに変化が見受けられるようになりました。

こうした変化はあるものの変わらないものは北海道のシンボルでもある「旭岳」、「羽衣の滝」などの雄大な自然の存在であり、多くのお客様に来ていただくためにＰＲを行うと同時にこうした自然環境を保護しなければならないというバランス感覚を保ちつつ当協会の目的を成し遂げるために関係機関等と連携して観光振興に今後も努めてまいります。

一般社団法人ひがしかわ観光協会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目1-15　TEL：0166-82-3761　FAX：0166-82-4764
【ホームページ】http://www.welcome-higashikawa.jp
【facebook】https://www.facebook.com/Higashikawatourismassociation

ナキウサギふぁんくらぶ

大雪山のチチッ・チュ・カムイ

チングルマの紅葉の中で　撮影者：中村千尋さん

アイヌ文化の研究者である藤村久和さんによると、旭川地方や十勝地方のアイヌの人々はエゾナキウサギのことを“チチッ・チュ・カムイ”と呼んでいました。「チチッと鳴く神様」という意味です。大雪山系のすそ野に住んでいるアイヌの人々は、秋、山ぶどうを採るために山に入るときや、神様にお願いして違う土地に行くために山越えをするときに、ナキウサギを見たり声を聞いたりしていました。けれどもそこは神々がすむところです。アイヌの人々はなるべく足を踏み入れないようにしていたそうです。アイヌの人々が北海道の山と川と海の自然のめぐみを大切に暮らしていたころ、エゾナキウサギは人知れず山奥の岩場で生命を謳歌（おうか）していたのです。

けれども、今は、人々がナキウサギの棲む山奥にも道路を作ったり、森林を伐採したり、リゾート開発をしたりしています。このため、生息地の破壊や分断の問題が道内の各地で起こっているのです。氷河期からの生き残りであるエゾナキウサギは、寒冷な気候に適応し、山のきれいな空気でなければ肺にカビが生えて死んでしまいます。また、岩がごろごろと積み重なったガレ場を棲みかとし、岩のすきまで子育てをし、冬のための食料である植物を岩の下に保存します。乾燥した植物は、腐りにくく栄養価が高いので、ナキウサギはこれを食べて長い冬を過ごすのです。このように、きれいな空気のガレ場はエゾナキウサギの生存に不可欠です。

ナキウサギ写真展

しかし、開発によってガレ場は減少しつつあります。そもそも分布の面積が狭く、生息基盤が脆弱なナキウサギですが、近年個体数が減少していることもあって、2012 年に環境省の準絶滅危惧に選定されました。エゾナキウサギを絶滅させないためには、今ある生息地をそのまま保全していくことが必要です。

北海道にしか生息していない“チチッ・チュ・カムイ”が、ある日、気がついたら絶滅して山からいなくなっていたなどということがないように、貴重な遺産として未来に残す活動を今後も続けたいと思っています。

ナキウサギふぁんくらぶ

1995 年、大雪山国立公園の特別保護地域に計画された「士幌高原道路」の建設からナキウサギを守るために活動をスタートしました。会員は全国に 3099 名（2015 年 2 月現在）。ナキウサギを愛する心のある人はだれでも会員資格があり、ナキウサギの想いを伝えるメッセンジャーになります。生息調査や行政への要望活動などのほか、学術的にも文化的にも貴重なナキウサギが国の天然記念物に指定されるための署名活動も行っています。

〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 11 丁目加森ビル 6F　㈳北海道自然保護協会内
TEL：011-281-3348　FAX：011-281-3383
【ホームページ】http://www.pikafan.com/fanclub/
【電子メール】fanclub@vmail.plala.or.jp

■山のトイレを考える会

「山のトイレを考える会」は、北海道の山岳地での登山者の排泄と処理、山岳トイレの整備といった課題に取り組むために2000年に、登山者、山岳会、山岳ガイド、研究者などで結成した市民団体です。発端となったのは、大雪山のトムラウシ山南沼などで、使用済みの紙や屎尿が散乱し、用を足す場所を求めて高山帯の植物が踏みつけられて道ができている状況が報告されたことでした。

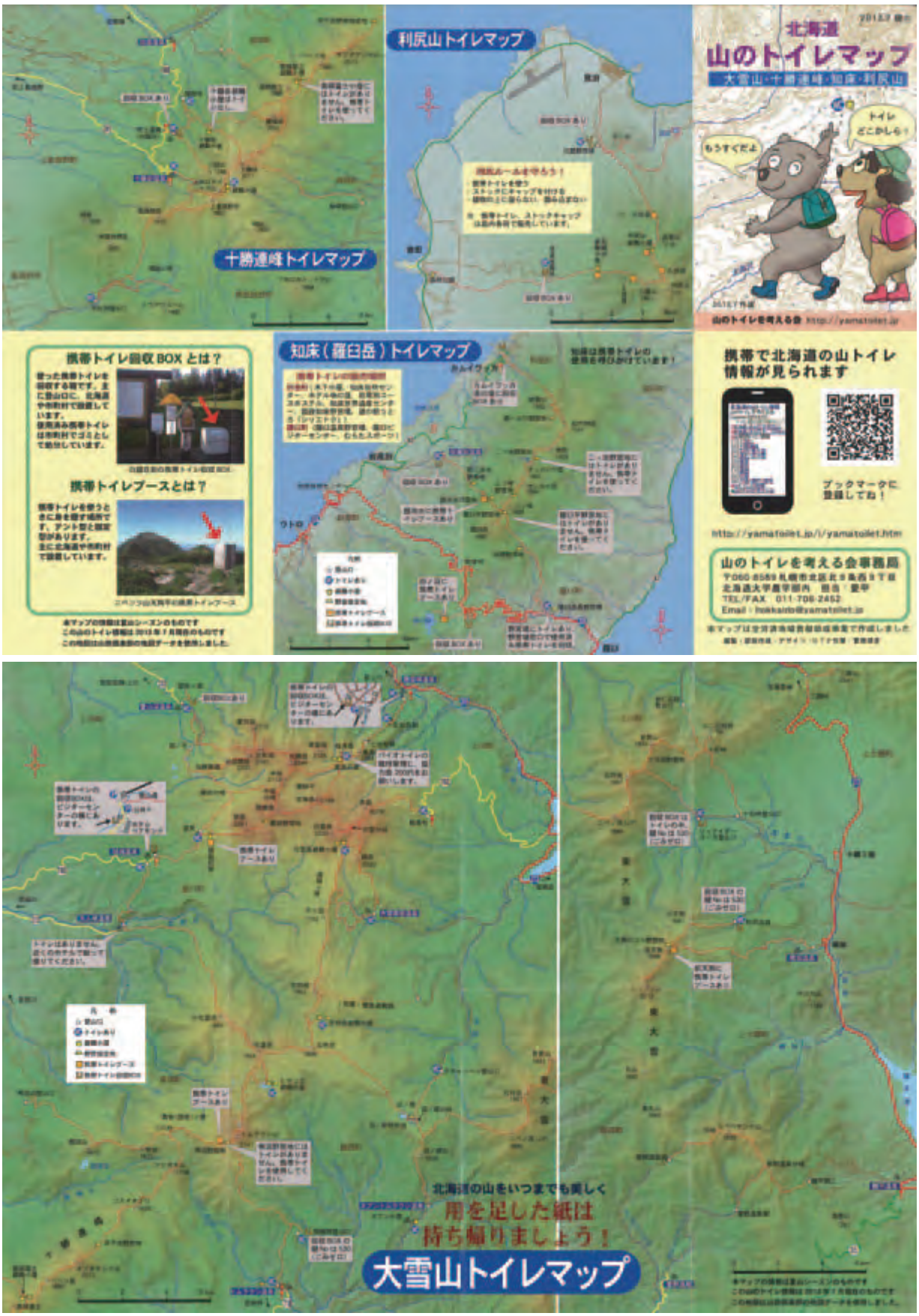
山のトイレデー（旭岳）

大雪山をはじめ北海道の山は、登山口が林道の終点などでトイレのない場所が多く、山小屋は避難小屋が主体で、トイレが設置されていない場所もあります。主要160山のうち、登山口にトイレがあるのは76箇所、53箇所にはトイレがありません。山中では、15箇所にトイレがあり、4箇所はルート上の避難小屋にありますが、141箇所ではまったくトイレがないのです。旭岳ロープウェーの姿見駅に処理水を循環させるトイレが設置されたり、黒岳石室にコンポスト式のバイオトイレが設置されたり、トムラウシ山やニペソツ山などでは携帯トイレの使用が推奨されるなど対策は進みつつあります。しかし、まだトイレのない避難小屋や野営地も多く、いまだに紙や屎尿が散乱している状況です。

美瑛富士清掃登山

当会では、そのような問題に対応するために、北海道以外の事例の収集や勉強をし、関係機関に対策の検討をお願いしています。もっとも力を入れているのは、登山者の方々への情報提供と啓発活動です。山に入る前にはトイレに行こう！、できるだけトイレで用を足そう！、トイレにゴミを捨てないで！、使用済みの紙は必ず持ち帰ろう！、携帯トイレも使ってみよう！を、様々な機会にお願いをしています。トイレのある場所を知っていただくための「北海道山のトイレマップ」の作成・配布、ホームページでの情報提供、年に1回の関係者が集まり議論するフォーラムの開催、9月の第一日曜日を主に行う啓発キャンペーン「山のトイレデー」などを実施しています。北海道の山がいつまでも美しくあり、次の世代も登山を楽しむために、活動へのご協力とご参加をお願いいたします。

くみ取り作業のようす（黒岳）



山のトイレを考える会

〒060-8589　札幌市北区北９条西９丁目　北海道大学農学部内　愛甲
電話 / FAX：011-706-2452
【ホームページ】http://www.yamatoilet.jp　　【電子メール】hokkaido@yamatoilet.jp

高山のコウモリ

出　羽　　寛

経歴

オサラッペ・コウモリ研究所 代表

1943 年　旭川で生まれる。
　　神楽岡の森で昆虫採集、忠別川で魚釣りに夢中になる。
1982 年　旭川東高等学校卒業。
1989 年　横浜市立大学文理学部生物学科卒業。
　　探検部で東北、北海道の山歩き、フィリピンパラワン島探検等の活動。
1977 年　北海道大学大学院農業生物学科博士課程単位取得退学。
1979 年　旭川へ戻り、旭川大学経済学部に 30 年間勤める。専門は動物生態学。
2009 年　旭川大学定年退職　旭川大学名誉教授。
　　オサラッペ・コウモリ研究所を作り現在までコウモリ、野ネズミの調査活動。
1987 年から現在まで、嵐山ビジターセンター、突哨山と身近な自然を考える会の活動を継続している。

大雪山系など北海道の高山にもコウモリは生息しているのだろうか。

2018 年 7 月に完成したばかりの東川町複合交流施設「せんとぴゅあⅡ」の大雪山アーカイブス・コーナーで担当者と話している時、大雪山の高地で見つかったコウモリを話題にしたことから高山のコウモリについて書いてほしい、と頼まれた。

そのコウモリはキタクビワコウモリ *Eptescus nilssonii* という種で、2011 年 6 月 25 日、標高 1600 mの旭岳姿見平のハイマツ帯で傷ついた状態で見つかった（写真１）。写真を送ってくれたのは野鳥の調査研究をしている磯清志さんで、コウモリも野鳥も捕獲にカスミ網を使うことから互いに情報を交換することにしていた。

写真１　大雪山系姿見平（1600m）で見つかったキタクビワコウモリ（写真提供 磯清志さん）。

現在、日本全体では 35 種（他に 2 種絶滅）、北海道には 19 種のコウモリの生息が知られている。ところで、コウモリというと洞窟というイメージが強いが、実は森林に棲む種が最も多

写真 2　ヒメホオヒゲコウモリ。低地の広葉樹林から亜高山帯の針葉樹林で多く捕獲される。地面に下りて水を飲む。

く、実際には昼間のねぐらにするのは洞窟よりも樹洞や枯れ木の樹皮下、葉の茂みなどをねぐらにしている種が多い。

また、人家やアパート、納屋の天井裏、農業用水路隧道など人工物を結構ねぐらに利用していることは北海道ではあまり知られていない。そのため、旭川地方には 12 種のコウモリがいて市街地にもいるというと、「エ！　ホントウ？」と驚く人が多く、ほとんどの人はコウモリを見たことがないようだ。

本題に戻ると、コウモリ類は熱帯のような暖かい地域で多様な種が進化した動物だ。そのことからすると、気温が低く、高木林の無い森林限界を超えた高山帯や北極圏、南極圏に近い高緯度地方の厳しい環境に生息するコウモリはいるのだろうか。資料を調べてみると、高山帯でのコウモリ調査はほとんど無く、亜高山帯までの報告が幾つかあるのが現状だ。

1973 年に名著「原生林のコウモリ」（学研）を書いた遠藤公男さん（花巻在住）は 1971 年 7 月下旬、日高山脈幌尻岳（2052m）の標高 1600m 付近、ダケカンバが茂る水場の近くで 3 頭（オス）のキタクビワコウモリを捕獲している。その前年 1970 年 7 月下旬、ペテガリ岳（1736m）の亜高山帯（1100 ～ 1200 m）でミヤマハンノキ、ナナカマド林内の小沢を飛ぶ小型コウモリを 2 頭（オス）捕獲している。

このコウモリについて遠藤さんは本州産のシナノホオヒゲコウモリ *Myotis hosonoi* に酷似した種としているが（遠藤 1977）、現在のヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi*（写真 2）と思われる。姿見平のキタクビワコウモリは森林限界を超えたハイマツ帯、日高の例は森林限界に近い亜高山帯針葉樹林上部のダケカンバ、ミヤマハンノキ等の広葉樹林である。この 2 例が北海道では最も標高が高い位置での報告と思われる。

標高 1000m 以下では東川愛山渓でヒメホオヒゲコウモリ（900m、今泉 1958）、十勝川源流部でヒメホオヒゲコウモリ（950m、阿部他 1982）、糠平周辺でヒメホオヒゲコウモリ、コテングコウモリ *Murina ussriensis*（900m、河合 2000、写真 3）、十勝三ツ股でヒメホオヒゲコウモリ、ウスリホオヒゲコウモリ *Myotis gracilis*、カグヤコウモリ *M.frater*（写真 4）、ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis*（860m、出羽ほか 2005、写真 5）等があり、これらは全て亜高山帯の針葉樹林帯での報告である。

写真 3　枯葉をねぐらにしたコテングコウモリ。雪中で冬眠する論文が出た。（Hirakawa & Nagasaka 2018）

本州の例では、南アルプス赤石山脈でヒメホオヒゲコウモリ（1740 ～ 2060m、佐藤顕義他 2011）、静岡県北部南アルプスでクビワコウモリ *E.japonensis*、

モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi*（この2種は北海道にはいない）、ウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis*、ヒメホオヒゲコウモリ、コテングコウモリ（1701～2500m、佐藤他 2012）、岐阜県御岳山麓の1710m付近でキクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*、コキクガシラコウモリ *R.cornutus*、モリアブラコウモリ、ウサギコウモリ、ヒナコウモリ、カグヤコウモリ、ヒメホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ *M.nattereri*、コテングコウモリの9種類も捕獲されている（山本 2015）。

写真4　エサをくわえたカグヤコウモリ。低地から亜高山帯の針葉樹林まで生息する。

私自身も2004年8月4日、秩父農工高等学校の町田和彦先生と奥秩父十文字峠の小屋（標高1983m）をねぐらにしていたクビワコウモリとヒナコウモリを捕獲したことがある。

写真5　ヒナコウモリ森林でも捕獲されるが、人家や納屋の屋根裏などで繁殖集団が見つかることが多い。

これら本州での例は全て亜高山帯の針葉樹林での捕獲調査である。本州中部では1700～2500 m付近までが亜高山帯針葉樹林、その上部が高山帯となるが（佐藤他 2012）、それに比べて北海道大雪山系の亜高山帯の針葉樹林、高山帯は800～900mほど標高が低くなる。

以上のことから高山のコウモリについて以下のように整理できる。

1．北海道、本州に共通してコウモリ類が普通に確認（捕獲）されているのは亜高山帯の針葉樹林かダケカンバ、ナナカマド等の上部広葉樹林までである。

2．北海道、本州の亜高山帯の針葉樹林で捕獲される種はキタクビワコウモリ（北海道）、クビワコウモリ等（本州）、両地域の共通種はヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、ヒナコウモリ、コテングコウモリである。これらの種は北海道では低地から普通に分布しているが、標高差による生息状況の違い等についての調査は行われていない。本州では他にウサギコウモリ（北海道にも普通に生息）等がある。

3．森林限界を超えた高山帯（ハイマツ帯も含め）での確認例は上記の大雪山系のキタクビワコウモリ（1600m、ハイマツ帯）だけで、日高山脈のキタクビワコウモリ（1600m、30m上部はハイマツ帯）の捕獲が高山帯に近い。

4．以上のことから亜高山帯の針葉樹林か上部広葉樹林までがコウモリ類の通常の生息環境と思われる。

しかし、高山帯での調査が行われていない状況下でコウモリ類は高山帯で行動していないと考えて良いのだろうか。

大雪山系姿見平で見つかったキタクビワコウモリはなぜ高山帯を飛んでいたのだろうか。夏期、亜高山帯から高山帯ではカやブヨ、ガ類等が大量に発生することがある。昆虫食で大食漢のコウモリが餌を求めて高山帯にまで飛翔することは容易に考えられる。また、岩の割れ目などを冬眠

場所に使う可能性もあるのではないか。超音波自動録音装置を利用した季節毎のコウモリの音声記録調査等を行うことによって、高山帯でのコウモリ類の飛翔行動等の実態を探ることができるのではないかと考えている。

視点を変えて、高山帯と同じような厳しい環境の北極圏にもコウモリは生息しているのだろうか。北極圏は北緯 63 度 33 分以北の地域で草本類や蘚類、地衣類のツンドラ地帯が代表で高山帯と同じような環境である。気温が低いため高木の生育は難しいが、北極圏にもカバ林等が分布する地域もある。

2009 年に出版されたヨーロッパのコウモリ類についての詳細な図鑑（Dietz　et al. 2009）によると、スカンジナビア半島でキタクビワコウモリが北緯 70 度、ウスリホオヒゲコウモリが北緯 65 度の北極圏まで、ドーベントンコウモリ *Myotis doventonii*（北海道のドーベントンコウモリ *Myotis petax* は最近まで同種とされていた）が北緯 63 度まで、ヒメヒナコウモリ *Vespertilio murinus* が北緯 60 度まで分布し、ドーベントンコウモリを除き、3 種はいずれも北海道と共通種である。ウサギコウモリ *Plecotus auritus* が北緯 63 度～ 64 度まで分布している（日本のウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis* は最近まで同種とされていた）。他にも北緯 60 度付近まで分布する数種類のコウモリ（日本には生息しない）がいる。

こうしてみると、北海道とヨーロッパに共通して最も高山帯付近や北極圏付近にまで進出している代表的な種はヒナコウモリ科のキタクビワコウモリである。また日本で亜高山帯の針葉樹林や森林限界付近にまで最も多く捕獲される種はヒメホオヒゲコウモリである。さらに、クビワコウモリ（本州）とコテングコウモリ（日本全域を含め極東にのみ分布）、ウスリホオヒゲコウモリ、ドーベントンコウモリ、ヒメヒナコウモリなどこれまでに示したコウモリは全てヒナコウモリ科の種である。

ヒナコウモリ科のコウモリは、全世界で知られている約 1300 種のコウモリの内 407 種（約 36%）と最も多く、南極、北極を除く世界に広く生息域を広げ、その中から高山帯や北極圏付近にまで進出する種が出てきたと考えられる。

引用文献

阿部永・前田喜四雄・川辺百樹（1982）環境省委託十勝川源流部原生自然環境保全地域調査報告書.

今泉吉典（1058）日本産ホオヒゲコウモリ類について．　哺乳動物学雑誌 Vol.1（5）：80-83.

遠藤公男（1977）北海道の高山のコウモリ 2 種 . 哺乳動物学雑誌 Vol.7（2）：118-119.

河合久仁子（2000）糠平周辺におけるコウモリ相 . 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告　Vol.22：1-4.

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正（2011）南アルプス地域におけるヒメホオヒゲコウモリの分布とねぐら利用 . 森林野生動物研究会誌　Vol.36:1-7.

佐藤顕義・勝田節子・三宅隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・佐々木彰央・ 藤井直紀・鳥居晴巳（2012）静岡県中西部のコウモリ類 .　東海自然誌（静岡県自然史研究報告）Vol.5:51-68.

出羽寛・赤坂卓美・河合久仁子・近藤憲久・佐々木尚子・佐藤正彦・平川浩文・ 福井大（2005）十勝三股のコウモリ類 . 上士幌町ひがし大雪博物館研究報 Vol.27：21-26.

Christian Dietz,Otto Von Helversen Dietmar Nill(2009). BATS of BRITAIN,EUROPE&NORTHWEST AFRICA. A&C Black Publishers Ltd. London. Pp.400.

Hirakawa,H. & Nagasaka,Y.(2018) Evidence for Ussurian tube-nosed bats(Murina ussuriensis) haibernating in snow. Scientific Rerort,8:12047.1-8.

山本輝正（2015）　御嶽山麓周辺のコウモリ相　森林野生動物研究会誌 . Vol.40:21-28.

戸川幸夫著『牙王物語』を読む

岩　田　好　宏

経歴
1936 年東京生まれ、83 歳。1958 年 3 月東京教育大学（現在の筑波大学の前身）理学部動物学科卒業。1958 年から 1996 年まで千葉県の公立高等学校の教諭。以後千葉経済大学附属高等学校など私立高等学校、立教大学、千葉大学などの大学の非常勤講師。2008 年 3 月教職から退く。
現在、千葉県生物学会会員、子どもと自然学会顧問、人間学研究所所長、総合人間学会理事。
著書:『生物学教育入門』（新生出版、1979 年刊）、『オス・メスから男・女への歴史』（新生出版、1980 年刊）、『植物観察学入門―校庭の植物誌』（新生出版、1998 年刊）、『人間らしさの起原と歴史』（ベレ出版、2008 年刊）、『植物誌入門―生態と保護』（緑風出版、2010 年刊）、『環境教育とは何か』（緑風出版、2013 年刊）。
編著:『野生生物保全事典』（緑風出版、2009 年刊）、『子どもと自然大事典』（ルック、2011 年刊）など。

□□ 1 □□

かつて小説家の安岡章太郎は、河合雅雄さんがカイウサギについて書かれたものを読んで、“これはウサギの私小説である”と評した。生物学者としてはこれ以上の評価はないのではないか、とその言に接した時思った。それ以来、自分の植物についての報告や、学習指導の実践記録をこのように書いてみたいと思ったが、書くどころか、そこまで植物の生活や子どもの学習をとらえることができずに終わった。

ウサギの私小説といっても、むろんウサギは、小説を書けない。「私小説」とは、書き手本人の生活、思想をそのとおりに描いて小説にするというものである。岩波書店の『広辞苑』第 4 版（1991 年）は、「わたくししょうせつ」の項で、“小説の一体で、作者自身が自己の生活体験を叙しながら、その間の心境を披瀝してゆく作品”と語釈している。私小説家の中には、書くために自分の生活を変えたという人もいる。安岡章太郎のことばは、正確にいえば、“ウサギが私小説を書いたように、ウサギになりきってその生活をみごとに描いた”という意味だったと思う。

□□ 2 □□

戸川幸夫さんの『牙王物語』の最新版（2018 年 11 月、新評論刊）を読んで、このようなことを思い出したのは、これが河合雅雄さんのものとは対局にある、まさに「物語」でありながら、動物の姿を同じくありありと描いたものであったからである。これは事実を記録したのではなく、戸川さんの世界観を描いたものである。それを読んで、“かつての北海道中央山岳地帯とそこに生活する生物と人々は、まちがいなくこういうものであったのではないか”と強く感じた。

『牙王物語』（2018 年、新評論刊）

文芸や芸術の世界には、「リアリズム」という 1 つの考え方がある。これは、事実を描くものではないが、事実としてあったかのように、あるいはそれよりももっと真実に迫って表現する考え方と理解している。Se くんという絵画制作を本職に近いものにしている、私の木更津高校勤務時代の教え子がいるが、彼が長いこと所属していた絵

画会は、「実在派」という名であった。毎年その会の展覧会に行って見ているが、キャンバスに描かれたものは、実際の風景や女性を写実したものではなく、かすかにそれらしいものを感じながらも、色彩もかたちも実際のものとは大きくちがっていた。だが、実際のもののもっとも大事なところを具体的に表現していると思った。もう一人の、教職に就きながら長く写真制作に取り組んできた教え子のＳくんは、現実をそのとおり写しとるということをしながら、それは街やそこに住む人たちの生活の一部、一瞬を写しとっていながら、その本質を具体的に描こうとしている。所属する「視点」という写真家団体の毎年上野の展覧会で入選している。

□□ 3 □□

本の名にある「牙王」とは、‘牙のある王’という意味だと思うが、具体的には、「レッド・デヴィル」とよばれる、雌のヨーロッパ狼と、半ば野生化した雄犬「テツ」を両親とする、作者自身によって「キバ」とよばれた動物のことである。物語は、これら３頭と、「片目のゴン」とよばれる、常習的に人を襲うヒグマに、アイヌの若い猟師の本間ヨシト、日高早苗という若い女性の２人に、ヨシトの父である本間カネト、早苗の父で日高牧場主日高養一郎など人間群を加えて展開されている。レッド・デヴィルがサーカス団から逃げて原生林に移住したところから始まり、早苗が片目のゴンに襲われて死に、キバがそのヒグマを倒して原生林に戻るところで終わる。

戸川さんの「牙王物語」は創作であり、ところどころに擬人的な表現もみられるが、きわめて現実味のある作品である。レッド・デヴィルと名付けられた、雌のヨーロッパ狼と、タキ、あるいはキバと呼ばれたその子を主人公にした物語である。戸川さんがこの小説の中で描いたものの中で第１に注目したのは、野生生物の「野生」とはどのような状態をいうのか、読む私たちに再考を迫るかのように、きびしく問いかけている。

第２のことは、人間と野生生物との間には、事実としては助け合いなどなく、きびしい対立がある。しかしそうでありながら、共存しなければならないということである。そのための知恵と努力は、人間にとって義務であるということである。そのことによって、他者を他者の理において存在することを認容することになり、人間は、人間になる。それは、野生生物を人間世界の中に連れ込んでその野生性をゆがめ、人間世界の拡大のために野生世界を破壊しているのは人間だからである。第３は、野生世界や生物をめぐって人間どうしの対立があるということである。そしてこの対立こそ、野生世界との共存を難しくしているということである。

「羽衣の滝」の前で
（本文 290 ページ挿絵、田中豊美・画）

□□ 4 □□

そして第４に、これが重要な特徴であるが、大雪山系とその周辺の自然を現実味をもって描いたことである。それは、動物を描く場合に必須のことである。動物はどのような世界の中で生活するかによってちがった様相を示す。しかしそれに止まることなく、これらの動物とかかわる人間の生活を加え、それらが生活している原生林を中心として北海道中央部の山岳地帯とそれに接する人間世界を合わせた世界全体を表わしている。以

前講談社版（1979 年版）を読んだ時に、その描写力に圧倒されて、描かれている世界がどのような生物と人間から成り立っているか、抜き出して表にしてみたことがある。

戸川幸夫著『牙王物語』（1979年、講談社刊）にみられる生物名と人名

章名	主動物	直接かかわる動物	哺乳類	その他の脊椎動物	その他の動物	植物	場面	主動物と直接かかわる人	その他の人
自由を求めて			ヒグマ、キタキツネ、、エゾシカ、エゾイタチ、エゾテン、エゾノウサギ、ナキウサギ、シマリス、	イヌワシ、クマタカ、ワシミミズク、タカ、エゾライチョウ、ホシガラス		ハイマツ、エゾマツ、トドマツ、エゾイタヤ、ダケカンバ、シラカバ、フナ、ドロノキ	原生林からなる北海道中央山岳地帯		
	ヨーロッパオオカミ(レッド・デヴィル、めす)	ライオン(ネロ)、セパード(犬、エレン)犬（エス公、ポケ）	インドゾウ				サーカス小屋	せむしの猛獣訓練士、峰公、飼育係の爺さんマキ親方	サーカス団の団員、観客
		耳の立った犬（おす）				エジマツ、トドマツ	原生林からなる北海道中央山岳地帯		
魂の芽生え	レッド・デヴィル	おすのイヌ（テツ、アイヌ犬とカラフト犬の子、その5ひきの子ども(キバ（おす）とその他）	エゾノウサギ、ノネズミ、エゾシカ、（エゾオオカミ）、ライチョウ	エゾライチョウ	エゾハルゼミ	トドマツ、エゾマツ、ダケカンバ、コケ、エゾネマガリザサ、シダ	原生林からなる北海道中央山岳地帯	本間カネト(テツの飼い主、猟師)、ヨシト(カネトの息子）	
知るということ	キバ	テツ、赤耳（おすの子）、クロ(おすの子）、レッド・デヴィル	エゾイタチ、イタチ、ノネズミ、エゾノウサギ	ワシミミズク	ニイニイゼミ、エゾゼミ、コエゾゼミ、アブラゼミ、アサヒヒヨウモンチョウ、アブ、ブヨ、ヤブカ、	トラノオシダ、ソウウンナズナ、エゾマツ、トドマツ、シラネワラビ、ゴンゲンスゲ、コケ類、アカエゾマツ、ドロノキ	原生林からなる北海道中央山岳地帯		
片目のゴン	テツ、レッド・デヴィル、5匹の子ども		（ナキウサギ）、（ヒグマ）、（エゾオオカミ）、（ニホンオオカミ（ヤマイヌ））	（エゾサンショウウオ）		ミヤマリンドウ、ウルップソウ、イワギキョウ、コマクサ、エゾコザクラソウ、ミヤマシオガマギク、コケモモ、ユキワリコザクラ、チングルマ、マルバギシギシ、ミヤマキンポウゲ、イワオトギリソウ、キバナシャクナゲ、クモマミグサ、ハクサンイチゲ、イワタデ、イワウメ、ウメバチソウ、ハイマツ	原生林からなる北海道中央山岳地帯	島野新太郎先生、ヨシト、小島龍子先生、日高早苗、山下久子、小室陽子高校の女生徒）、（カネト）。（権爺）	（猟師）
生と死の法則	キバ、妹	レッド・デヴィル、ほかの3匹の子ども、キタキツネ、片目のゴン(ヒグマ)	（エゾノウサギ）、（エゾリス）	ホシガラス、エゾライチョウ、イヌワシ	ダイセツタカネヒカゲ、クモマベニヒカゲ、ダイセツオサムシ、オオカメテントウムシ、アシブトハナカミキリ、	ハイマツ、エゾマツ、トドマツ、エゾイタヤ、タケカンバ、シラカバ、フナ、ドロノキ、ブドウヅル	原生林からなる北海道中央山岳地帯		
新しい世界	テツ、キバ	片目のゴン					原生林からなる北海道中央山岳地帯	ヨシト、日高早苗	島野新太郎先生、小島龍子先生、山下久子、小室陽子

それをみて、物語るにあたって事実を緻密に観察し調べて基礎づくりしたことがわかった。その表は 4 頁にわたるものとなったが、そのうちの第 1 頁のものを、上に紹介した。戸川さんが描きたかったことは、この北海道の山岳地帯ではなかったのではないかとさえ思った。

□□ 5 □□

今度「新評論」から刊行されたものは、これまでとまったくちがうものになった。文章が小学生向きに大きく変えられた。内容はこれまでとほぼ同じであるが、文体に大きなちがいが出た。田中豊美さんの挿絵が加わった。そのため、読み比べてみたところ、私の印象は大きくちがうものになった。それによって別の物語ではないかと思うほどであった。しかし子どもたちにはずっと理解しやすいものになった。これまで刊行されていたものの子ども版とみれば、この改定は、成功したのではないかと思う。これまでのものでは、子どもは読みにくい。できれば、これを読み終えたあと、これまでのものを読んでほしい。

早苗と再会したキバ
（本文 218 ページ挿絵、田中豊美・画）

これは、学校の授業の副教材としても利用できる。ただし‘文章で表現された芸術’という意味の「文芸」の本としてあつかってほしい。どう読むかは子どもにまかせ、それぞれの子どもがちがった読み方をし、ちがった解釈をし、ちがった理解をし、ちがった感想をもてば、1 つの成功である。深く、ゆたかに描いた作品ほど、人々によって異なる印象を与えるからであ

る。それらを発表しあって、読み間違いを訂正し、同じ本を読みながら、ちがった理解のしかたをし、ちがった感想をもったということがわかれば、大成功である。みんながちがうものに興味、関心をもちながら戸川さんが描いた世界に人間的なよろこびを味わうことになれば、大きな学習をしたことになる。決して文章学の学習指導のような、「171 ページに、“キバは、この連中に見覚えがありました。”と書いてありますが、“この連中”といっているのは何でしょうか。文の中から探してみましょう。」というような質問をしないでほしい（ただし子どもから、文中の語についての質問があったら、ていねいに解答してほしい）。

□□ 6 □□

戸川幸夫さんは、1912 年佐賀県に生まれ、2004 年５月東京で亡くなられた動物作家である。数々の動物、人と動物とのかかわり、自然に関する物語、記録を残した。野生のネコであるイリオモテヤマネコが地元の人にしか知られていなかったのが、多くの人に知られるようになったのも、研究者の協力を得て学術的に明らかにされたことも、戸川さんによることで、その功績はよく知られている。

戸川さんは、旧制の山形高等学校（現在の山形大学の前身）理科に入学したものの中退。1937 年に現在の毎日新聞社の前身にあたる東京日日新聞社に入社。太平洋戦争中は海軍報道班員として南方に派遣された。戦後は、新聞記者として活動しながら小説を書き始め、1955 年に小説『高安犬物語』で直木賞を受賞し、新聞社を辞めて作家活動と自然の見直しに専念された。

２人のお子さんは、野生生物の保護に尽力されており、第２女の久美さんは、「認定 NPO 法人トラ・ゾウ保護基金」の理事長をされており、この本の解説を書かれている。

この本の前身は、1956 年 12 月から「毎日新聞」に連載された小説『山のキバ王』で、351 回の連載が終わったあとまとめて単行本として出版された。すでに述べたが、次の「編集部からのお断り」のように、文章が改定されている（（　　）内の略は岩田による）。現在読むべき物語となっています。

“とはいえ、時代が違うために、分かりづらい言葉や旧名称が登場したりもします。そこで、著作権者（中略）の了解を得て、今回の新装合本版では、本文中に（　　）において補足をさせていただいたほか、…（中略）また、現在では不適切と思われる表現に関しては修正を加えたほか、漢字表記を現代のルールに則って統一したことをお断わりしておきます。”

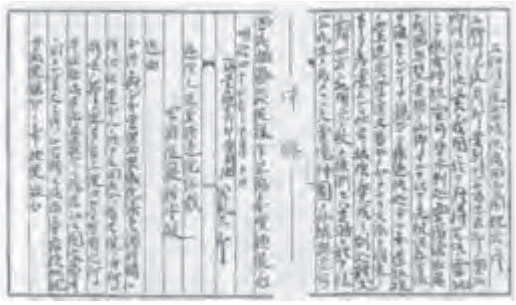
東川に移住した笹川良江さんの貴重な資料

祖父、太田龍太郎の大雪山国立公園建白書など

太田龍太郎（笹川良江所蔵）

大雪山国立公園に貢献した人として、明治時代に霊山碧水を国立公園として保護すべきと、時の大臣に建白した愛別村長、太田龍太郎（りょうたろう）を真っ先に挙げる人が多い。太田の直孫、笹川良江さんは、祖父が守った大雪山の麓に暮らしたいと東川町に移住した。

太田は文久3年、熊本藩士の長男として生まれ、安場保和（後に男爵）に実子の如く育てられた。安場が明治30年に北海道庁長官となったことから太田も北海道庁に勤め、以後、北海道で活躍することになる。笹川さんが大雪山国立公園70周年の年に出版した「大雪山国立公園生みの親、太田龍太郎の生涯」にこれらのことを詳述している。



後藤新平総裁に送った嘆願書の控え（笹川良江所蔵）

旭川から北見や十勝へ抜ける道路開削、鉄道敷設が国にとって重要なことであると太田は思い立ち、うっそうたる原生林に覆われていた奥地を探検してルートを構想した。霊山碧水と命名したところが現在の層雲峡で、開発目当ての民間資本が入ることを怖れた太田は明治44年、「石狩川上流霊域保護国立公園経営の件」を友人の逓信大臣兼鉄道院総裁、後藤新平に建白した。国立公園という認識がなかったころで太田には先見の明があった。

鉄道敷設では、後藤の伊豆熱海の静養先で北海道地図に赤ペンで鉄道敷設のポイントを示したところ快諾となり、鉄道院技師らが愛別に特派された。この調査にも太田は同行し、「北海道の奥の院探検」を書き残し、これは命がけの大冒険物語でもある。

笹川さんは、国立公園建白書の控えを保管（しずか）しているのをはじめ、この国立公園経営のことは本道選出の衆議院議員、浅羽靖とも相談して進めている旨が付記されており、その裏付けとなる浅羽代議士と太田が交わした書簡を祖父の遺品から探し当てた。

後藤大臣に説明した際に使った北海道地図もあり、上質の和紙に、鉄道敷設ルートや村名などを書き入れた、鉄道史資料としてお宝級の資料といえる。奥地を探検したときの写真など、東川町には笹川さんが保管する大雪山国立公園生みの親の資料が多く存在している。

――― 笹川良江さんの談話を聴いて

笹川良江さん（太田龍太郎研究家）
電話（0166）73－5268
携帯 090－2259－3053

No. 636 P110 泥流地帯・続泥流地帯

三浦綾子／新潮社

開拓者らがやっと生活できるようになった明治末からのストーリー。父が造材現場で事故死の後、母は出稼ぎに都会へ出て、家には祖父母と幼い子供たちが残された。貧しくとも誠実に、懸命に暮らしていた一家だが、悲劇は大正15年5月24日に起きる。十勝岳が大爆発、残雪を溶かした泥流が上富良野を容赦なく襲い、家も畑も学校も、何もかもすべてを呑みこみ、押し潰した。家族のむごたらしい死。生き残った拓一、耕作の悲しみは深く、「まじめに生きていても、馬鹿臭いようなもんだな」と悲嘆にくれる弟を、兄は…。

「続泥流地帯」は、生き残った者たちにその後、苦難が次々と襲う。硫黄を含んだ泥流で田畑の復興は絶望的ななか、村長や拓一らが未来の為に頑張り続ける。悲しい思いを抱えながら少しずつ前進するが、それを阻む人も現れる。

No. 301 P72 太田龍太郎の生涯

笹川良江／北海道出版企画センター

龍太郎は文久3年（1863）10月8日、熊本藩士の長男として生まれる。4歳の時に父が暗殺され、13歳から同藩の安場和男に実子のように育てられ、学問を積む。安場家に同居していた後藤新平（後の逓信大臣）と竹馬の友となる。明治30年、師父・安場和男男爵が北海道庁長官となり、龍太郎も北海道庁へ出向、同43年に愛別村長を拝命する。未開の石狩川源流部に分け入り、紀行文「霊山碧水」を新聞連載したことから層雲峡が世間に知られるきっかけとなった。同時に、この地は国家の事業として経営すべきと国立公園の必要性をいち早く後藤大臣に訴えた。

龍太郎の孫である著者が「霊山碧水」にふりがなや常用漢字を入れて読み易くし、併せて波乱万丈の祖父の生きざまを年表、写真、資料を豊富に入れて大雪山国立公園70周年に出版した。

No. 209 P62 凍（しば）れるいのち

川嶋康男／柏艪舎

北海道学芸大学函館分校山岳部の11名が大雪山の冬山縦走に初めて挑み、大晦日に目標とした旭岳山頂付近にたどり着くがその夜、猛烈なブリザードに襲われた。壮絶な彷徨の末、旭岳温泉に生還したのは野呂幸司リーダー一人だけ。昭和38年1月1日、その日から遭難死した10名の長い捜索が始まった。

野呂さんは両足先の肉が溶け落ち、切断。ハンディキャップを負いながら10人の魂とともに生き抜こうと活躍中。著者がインタビューと遭難報告書等の検証によってまとめたノンフィクション。10名を慰霊する「愛の鐘」が姿見の池の台地に建つ。

No. 892 P141 大雪山国立公園の代表的渓谷美　勝仙峡の所々

編：不詳／発行：大正写真工芸所

No. 908 P143 北海アルプス　大雪山旭岳勝景

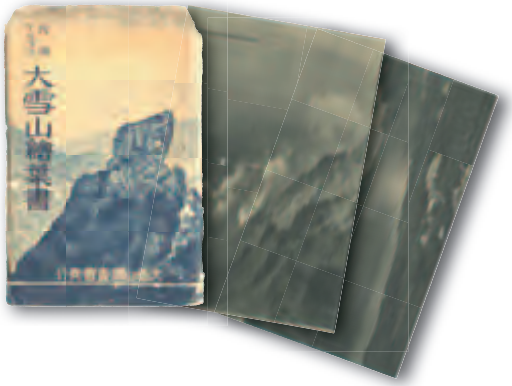
編：不詳／発行：松山温泉場

No. 909 P143 北海アルプス　大雪山繪葉書

画：村田丹下／発行：大雪山調査会／発行年：1927 年

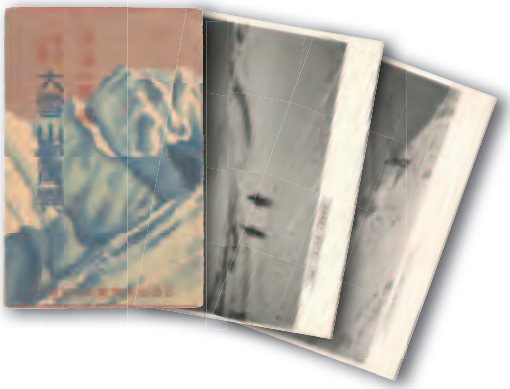
No. 910 P143 北海アルプス　大雪山繪葉書

編：不詳／発行：大雪山調査会



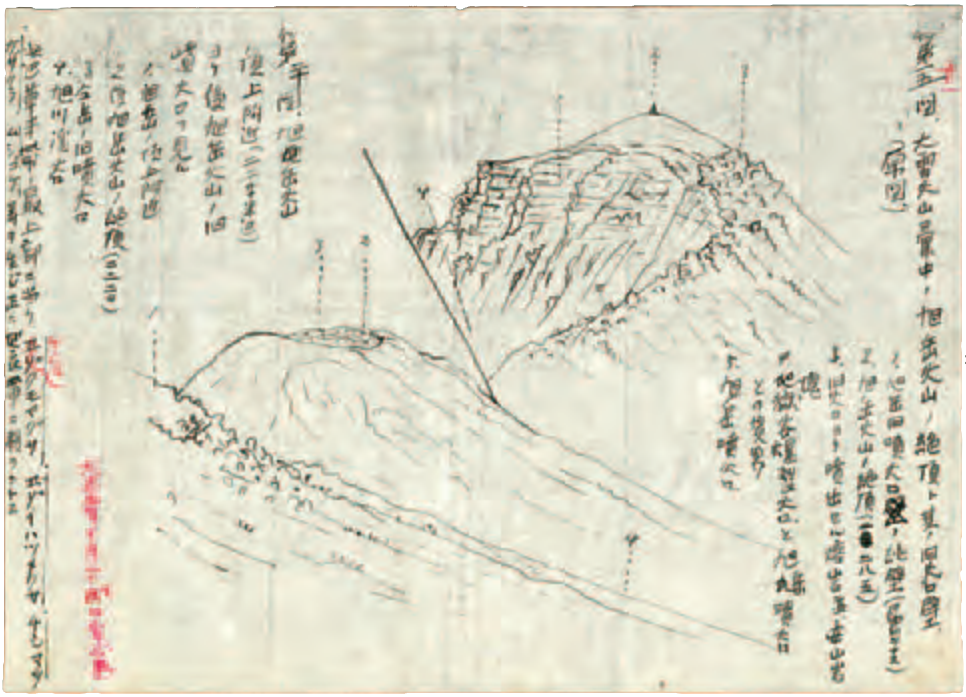
No. 917 P144 北海の秀峰 国立公園大雪山の驚異

編：不詳／発行：北海道絵葉書倶楽部



小泉秀雄の貴重な手書き資料集

タテ 28cm、ヨコ 38cm のアルバム形式で、表と裏の表紙に布張り厚紙を使い、中はレントゲン用紙を包んでいたような黒紙を下地に使って総ページ数は 51 枚、紐で綴じている。



小泉秀雄の旭岳山頂と後旭岳山頂のスケッチ（タテ 11.9cm、ヨコ 16.5cm を 75%に縮小して掲載）

世の中に一冊だけの文献

北海道中央高地の地學的研究附圖
名付けた山々のスケッチ 56 枚

「北海道中央高地の地學的研究附圖」は、大雪山の峰々にまだ名前が付いていなかったころに小泉秀雄が大雪山に何度も入って調査し、山並をスケッチしながら一つひとつの峰に山名を付けた研究の付図で、大正七年六月下旬に旭川中学校博物研究室（現・北海道旭川東高校）で、小泉によってまとめられた。

小泉はこの年、大雪山での研究結果を日本山岳会に寄稿しており、機関誌『山岳』に掲載が決まっていた。『山岳』は会員の寄稿や登山情報などをたくさん集めて編集されていたが、小泉の寄稿は内容が深いうえに膨大な記述量だったため、第 2 号と第 3 号を合併したうえ、さらに小泉以外の寄稿は一切載せない、いわば、特集号の体裁になった。『山岳』がひとりの原稿で埋められ、二冊分をまとめた合本で発行されたのは後にも先にも小泉のこの一回きりである。

特別扱いされながらも小泉にしてみれば、地図やスケッチをたくさん載せて、よりビジュアルな編集を望んでいたに違いない。しかし、掲載を期待していた手書きの地図や山並みのスケッチはあまりにも点数が多過ぎたため、掲載は見送られた。つまり、スケッチのほとんど全てがボツになって送り返されてきたらしい。

研究附圖に小泉が書いた序があるので、一部現代表記にして紹介する。

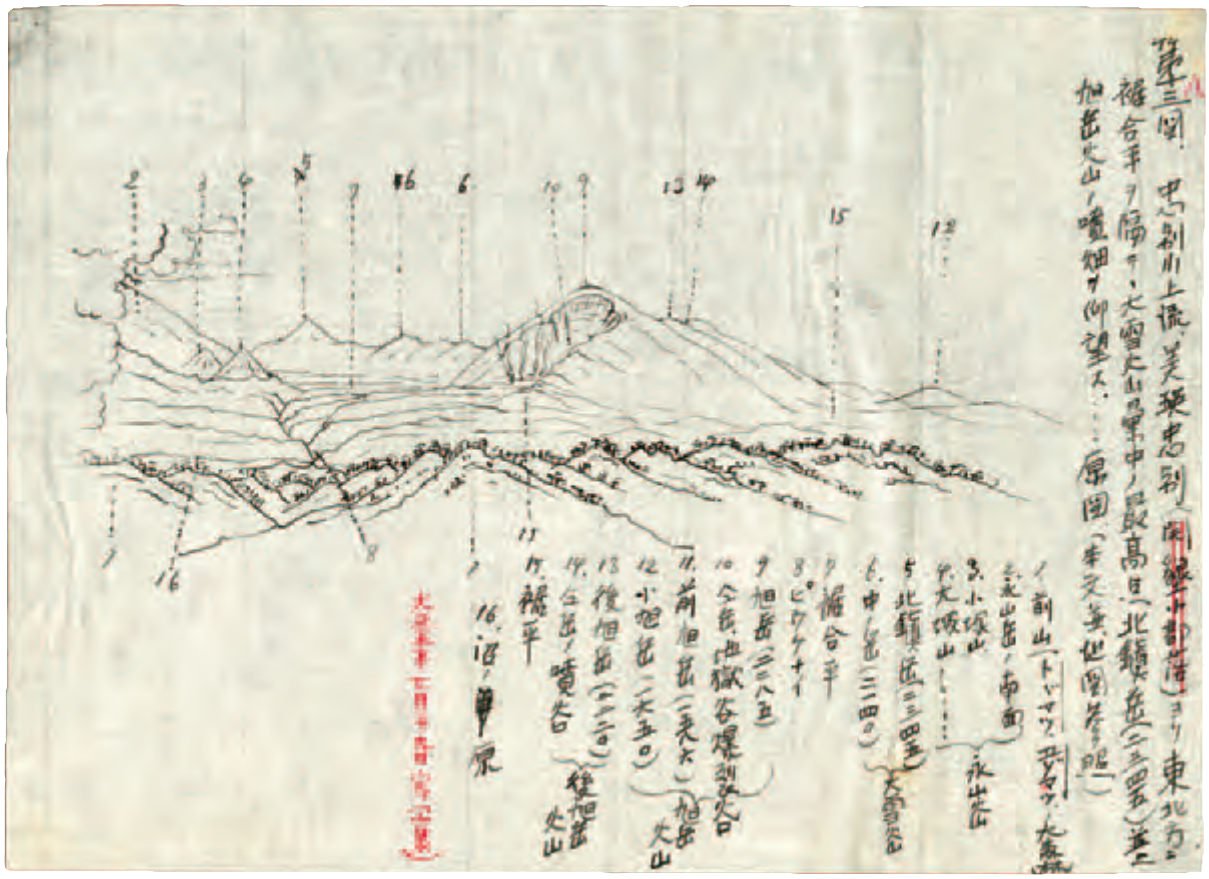
「余は渡道以来年々職務上自己の研究の必要と生来の趣味とにより北海道の山野を跋渉し、地理、地質、植物、動物、岩石、鉱物など自然界の研究に努めしが、年々その結果を記述せし原稿はこれを纏めて『北海道中央高地の地学的研究、附北海道地体構造概論』と題して日本山岳会より本年七月中に出版することとなれるは余の喜ぶ所なり。而して、該研究中には、地図、地形図、写真など合計百数十枚あれども山岳会の都合により、地図を除きて他の図版は全て（原文は「凡て」）のその挿入を許さざる事情あるをもって余はこれらを集めて一冊とし『北海道中央高地の地学的研究附図』となせしもの即ち本書なり。」

つまり、日本山岳会は小泉が手書きした精緻な地図や地形のスケッチ、写真を使わなかったけれども、これらは、大雪山を解説する小泉の原稿にはなくてはならないものであり、返されてきたスケッチや写真だけを集めて特別に一冊、自分で作った、というわけである。東川町が保存するアルバム形式のこの一冊は、小泉の思いがこもった、世の中にこれしかない貴重な文献といえる。

手書きの地図は第一図、第二図の 2 枚、山名を書き入れた山並みスケッチは第三図から第五十八図まで 56 枚もある。下地の黒紙に 1、2 枚ずつ貼り付けて 28 ページになる。最も大きな地図は縦 20㌢×横 28㌢の「北海中央高地（北海アルプス）地方地形詳図」で、説明文に縮尺六十万分ノ一とある。大雪山の主要山名、標高などのほか郡、町村名や郡境を詳細に記入し、赤ペンで鉄道や噴火口を書き入れ、川筋を紫色で記入している。小泉の文字は読みやすいが虫眼鏡で見なければならないような極細文字もある。

山並みスケッチの中で興味深いことは、北鎮岳（二三四五米）が旭岳火山（二二八五米）より

高いことで、小泉は第十三八図の説明に「大雪火山彙中ノ最高点北鎮岳」と明記している。当時、出回っていた地図による間違いと思われるが、このため、日本山岳会の機関誌『山岳』に載った『北海道中央高地の地学的研究』でも北海道の最高峰を北鎮岳としている。（下図原寸は 119㎜ × 165㎜）



『大雪山調査會』が大正十五年に発行した小泉秀雄著『大雪山登山法及登山案内』では、旭岳が北海道最高峰の二二九〇、北鎮岳が二二四六に改められている。ちなみに『大雪山登山法及登山案内』も 409 ページ、厚さが 3㌢にもなる膨大な情報量の大作である。

図譜の後半の黒い下地 23 枚には写真と絵はがきが貼ってある。26 枚の写真は、上川土木派出所所員、多田純二氏ほか数名が撮影したものを、同派出所の好意で小泉が複写した。霊山碧水峡（現・層雲峡）の雄滝、雌滝（銀河、流星の滝）、小函、大函などがあり、勝仙峡（現・天人峡）の写真は羽衣の滝、大滝（敷島の滝）など。

絵はがきは『旭屋書店』と『東川村某店』の製作販売に係るもの（序から）で、19 枚のすべてが忠別川上流と天人峡の写真はがき。松山温泉、ヤマベ魚淵、羽衣の夫婦瀧、七福岩などで、中に『東川大雪山　登山記念　大正　年　月　日』の紫色のスタンプを押した未使用の 3 枚があり、貴重な史料でもある。

天人閣支配人40年、大門金光の幻の原稿

大門 金光

明治 45（1912）年、美瑛町原野 15 線南 2 番地生まれ。庁立永山農業学校（現・旭川農業高校）卒業。美瑛村美沢小学校と東川村青年学校で教壇に立った後、教職を辞して東川村農業会技術員となり、応召。戦後、農協参事などを経て昭和 25 年、「天人閣」に支配人として迎えられ、昭和 63 年 6 月に退任するまでの間、東川観光協会副会長、天人峡観光協会会長、天人峡勇駒別温泉旅館組合長、日本観光旅館連盟旭川支部副支部長などを歴任、知事から北海道観光功労者表彰受賞（昭和 61 年）。平成 10（1998）年死去。

天人峡温泉の老舗『天人閣』支配人を約 40 年間勤めた故大門金光が書き残した原稿がある。表題は無いが内容は「自分史」である。あるいは「天人閣史」を書くつもりだったのかもしれない。それを示唆するのが平成 7 年 5 月、入院中に思い出すままに書いた「天人峡温泉株式会社と私」の一文であり、その末尾に「詳細に記入の天人峡の歴史を見てください」とある。大門がいう「詳細に記入の天人峡の歴史」がおそらくこの原稿ではないだろうか。

大門の手書き原稿をワープロ打ちした旭川市内の企画・印刷会社『総合企画』代表取締役会長、宗万忠さんによると「天人峡温泉を下りた大門さんは旭川市 1 条通 5 丁目の本社（明治屋）に通って書いていた。自宅で書くこともあり、それぞれで書いた原稿を綴じることもなく、ばらばらのまま渡されたので、順序が良く分からないままワープロで打った。達筆が過ぎて判読できない漢字が混じっていた」と振り返る。

ランプ生活の温泉に電気を引いたこと、西部劇の幌馬車のようなトラックを走らせたこと、馬橇（そり）と氷橋で難儀したこと、熱帯産の魚・ティラピアを飼ったきっかけ。原稿を埋もれたままにするには惜しい。抜粋して紹介する。

昭和十八年八月、自家発電所完成

毎日のランプ生活、それに戦時中にて灯油も配給となり客室の灯火は午後九時で消灯、夜間は廊下と脱衣室と浴場のみの状態であった。当時、佐藤門治社長の父、佐藤音次が時々温泉にこられてランプの生活で、かつ九時で消灯するなんぞしておる状態では客が減る一方だ、門治は如何にも山の温泉らしくてこの方が良いと言っているが私が発電にかかる費用を全部負担するからあなた（注釈：大門金光は昭和十七年夏からアルバイトで帳場を手伝っていた）の力で発電所を造ってほしい、使用料金は灯油の料金だけ支払ってくれれば良いとのこと。さっそく札幌の北海水力電気会社を訪問し電気機具及び工事一切を請け負ってもらうことにして土木建築工事関係は当方でやることにして早速土木工事にかかる。

昭和 28 年頃の天人閣本館。切妻破風（はふ）や窓枠を白、板壁をセピア色に塗装した。吊り橋の欄干は垂木（たるき）と 8 番鉄線で出来ていたので上下左右に揺れた

大雪館の上流三十㍍の地点にライオン岩と名づけられている大きな岩石があり、この岩の高さを起点にして忠別川右岸上流に木樋を取り付け（長さ八十㍍、幅九十㌢、深さ三十㌢）、岩の横に水槽（一・五㍍×一・五㍍×三㍍）を取り付け、この中にタービンを入れ、その水槽に並べて小屋を建て、五キロワットの発電機と配電盤を据え付け発電設備は完成した。これに対して私と助手、鈴木孝雄（東十号の青年）と二人で約一カ月かかったもので、完成は本当にうれしかった。

二十数個のランプを毎朝、ランプ置き場に集めホヤの清掃、灯油の補給、芯の形を整え、夕方各カ所に配置するのが女中の仕事で中々の苦労であっただけに、いよいよ通電して電灯がついたときには従業員は飛び上がって喜んだものだ。この発電を提唱してくれた佐藤音治は昭和二十三年十一月十二日逝去、享年八十四歳であった。

電線を妻の父、江卸発電所所長に頼み込む

せっかく造った発電施設だが昭和 22 年 8 月 15 日の局地的集中豪雨で流失して、またランプの生活であった。神楽営林署に払い下げを願っていた電柱六十本は用意出来たものの、電線は配給にて一般販売のものは高価で手が出ない。たまたま江卸発電所所長、齋木繁は大門金光の妻の父であり、相談したところ、無籍の線があるのでこれを全部つなげば間に合うんだろうから、旭川の日本発送電（株）の支店長に陳情しては、とのことにて出旭しお願いしたところ後日返答するからとのこと。

江卸発電所建設工事現場で学徒動員の小樽工業高校生と一緒に写る齋木繁（前列右端）と娘、静江（同左端）、静江は後に大門の妻となる。（昭和 20 年）

江卸発電所からＯＫの返答をいただき電線を確保した折から、清流橋上流にて本道初の砂防堰堤工事が旭川の荒井組により着工したものの電気導入に困っていると聞かされ、荒井組と交渉の結果、電柱電線を提供し配線工事は組にて施工してもらうことにして十月十五日完成。江卸発電所熊の沢取水口の電柱を分岐点として自家用受電の許可を頂きやっと文化生活ができるようになった。

幌馬車のような GMC が目を引く

昭和二十七年十二月末まで羽衣荘建築中、貨物自動車にて運搬していたので全輪駆動の GMC（アメリカの払い下げ車）なら毎日の運行により雪を踏み固めて行けば除雪なしでも運行出来るだろうとの考えから、東川村市街地にて土建業を営む中川徳之進所有の GMC に金成運転手付きにて借り上げ、乗用車として利用するのでテントを張り、かつ、暖房ストーブも取り付け、特別許可をいただいて運行を開始した。アメリカ映画に出てくる幌馬車に似て、旭川市内を走ると振り返り見る人が多かった。

一月いっぱいは何とか運行したが積雪が多くなるにつれ雪道を広く踏み固めることは出来ず、轍どうりに走らなければならず、轍から外れると車の腹がつかえて動かなくなるので、前側に付いているワイヤーを延ばして電柱、または立ち木などにしばりつけて堅い轍に車を上げては走る。

また、轍から外れるとワイヤーで引っ張るというふうに繰り返し繰り返し走ったが、これにはへこたれて二月四日にて断念し急きょ、馬橇(そり)に切り換えた。

厳冬期の川に入って氷の橋づくり

清流橋から天人峡間は道幅が狭く片側は忠別川となっているので積雪によりだんだん川側に道路がずって行く。人力での除雪は容易ではなくなるので氷橋を架け、左岸に移り、三百㍍ほど上流にてまたも氷橋をかけて道路に出て天人橋を渡るように仮道を付けなければならなかった。この時期に川に入って作業することは大変な事であったが支配人がするより他になく、女子従業員には全員出てもらって橋げたに乗せる小枝集めとその上に雪を乗せて水を掛けることを二、三日繰り返して氷橋が出来上がった。誰一人苦情を言う者もなく立派な仮道が出来た。

馬橇(そり)の悲喜こもごも

定期馬橇をお願いすると言ってもなかなか容易ではない。昭和二十五年の最初の年は長年、東川から志比内の定期をやられた清水宅を訪れ、見当をつけてもらって何軒かを訪ね歩いて三日もかかってやっとお願いが出来て一安心。馬の寝藁(わら)から飼料を持って温泉まで来てもらい三月末まで働いてもらうのである。ある年には、馬追いの若い衆が急に下りきりで帰って来ない。翌日の客のことがあるので夜、忠別までスキーで出かけ、しゃにむに臨時に頼みおき、翌日に常雇者を探し歩いた。ときには三月三十一日、切り上げの帰り道、天人橋の下手でズボズボぬかる雪道で馬の足を折ってしまい、東川まで獣医さんを頼みに行き、やっと葬ったこともあった。

美瑛町忠別、武重商店まで定期馬橇があったので十二月初旬から三月下旬までの四カ月で四万五千円にて馬橇を頼み、天人峡温泉に掘立にて倉庫兼馬小屋を建設し、農家の方々が湯治客を馬橇で送ってこられるので馬が二頭泊まれるようにした。馬橇を運行させると言っても当社の馬が一日一往復するだけであったので朝、馬が出かける時に前夜吹雪いておった時には馬の先になって道を開けないと馬の腹までつかえるところが何カ所かあり、熊の沢までの三kmは常に人力で除雪しなければならず、雑役の老人畠山と大門支配人の冬の大仕事であった。

馬は登り一辺倒の道を帰ってくるので汗でビッショリ。馬小屋に入れてから二人で馬の手入れや餌をやり、約一時間はかかる。熊の沢除雪をしながらの帰りで疲れてはいるが馬をこのままにしておけば風邪をひき、翌日の仕事に支障があるのでこれまた冬中の仕事であった。

定期馬橇の中継所として武重商店を利用させてもらったが馬橇から降りた客たちは茶の間を我が物顔で占領し、武重さんの孫たちは寒い座敷に追いやられているのを見る度におじいちゃん、おばあちゃんの温かい心に感激させられた。

玄関横に設けた売店の様子

この頃（注釈：昭和 30 年代前半）は日帰りの団体客が増加してきて玄関横の売店も売れ行きが年々伸びて来た。大阪商人の薦めにより販売した女のヌードを書き入れたタオルが売れて、何回も追加注文をした。菓子の名物として羽衣飴十㌢×十五㌢くらいの大きさで厚さは五㍉くらいのもの。飴色の飴に、白い飴にて羽衣の滝をかたどったもので、東旭川高木商店の製品であった。

また、旭川の竹林菓子店にて製造の蕗（フキ）は長さ五十㌢くらいの蕗五本を四つ折りにて包装したもので、他の製品に比して良く販売された。

夜は第一別館コーヒーショップホールにて電気蓄音機によるレコードの音声と共にバーに早変わりして、飲み物も売れたしダンスも盛んであった。

天人峡遊園地釣り堀について

昭和二十九年四月、松井竹夫（当時、東川村土建業佐々木組の帳場として勤務）は天人峡温泉の名物として虹鱒（ニジマス）の養殖を企画し、天津岩下の平地に孵化養殖場を開設した。千歳孵化場より卵一万粒の払い下げを受け、孵化をさせ第一養殖池（二〇〇平方㍍）にて飼育を始めた。三十年九月には第一養殖池の下手に第二、第三の池を完成し、この年には五万粒の払い下げを受けた。

三十一年、水族館と称して第一養殖池の南側平地に一㍍角の三面コンクリート製、前面にはガラスを入れ、十二個の水槽を並べ、道内における淡水魚十四種を飼育、観覧に供し、ブランコ、回旋塔、遊働円木などの施設をなし、第一養殖池の虹鱒が十五～二十㌢の大きさになったので釣り堀を始めたのである。この年には卵十万粒の払い下げを受けた。十一月に松井竹夫個人経営であったが天人峡温泉㈱に合併す。

魔法瓶にティラピアを入れて東京から運ぶ

人気の露天風呂は、ティラピアを飼っていた温泉池だった

三十二年九月二十八日、農林省水産庁淡水区水産研究所に食用熱帯魚ティラピァモザンピカの払い下げを受けるべく上京したが、この魚はタイから台湾に、それから日本に入れたもので寒い北海道には無理であるとて相手にされなかったが、再三の懇請に根負けして一㌢くらいの稚魚を持参の魔法瓶に五百匹を入れ、途中、国鉄の何カ所かの駅でぬるま湯を追加し無事、天人峡に着き、大浴場の川側に温泉の池を造り（現在の露天風呂）ここに放ったのである。

三十三年五月、産卵発見。以後十二の生簀（いけす）を造り飼育を始めたのである。産卵稚魚の飼育はまず雄魚が池の底に直径五十㌢、深さ二十㌢のくらいの穴を掘り、雌を誘導して来ると雄は穴の周りを警戒して泳ぎ回り、雌が七十から五〇〇粒（親の大きさにより粒数に差がある）の卵を穴の中に産み落とす。雄は直ぐ受精し、終わると雄は卵を口の中に入れて口中にて孵化し、稚魚になると穴の中に吐き出して育てる。しかし、共食いの習性があるから他の魚が近づくと雄は稚魚を口中に吸い込み、外敵がおらなくなると吐き出して穴の中で遊ばせる。

二十日ぐらいすると稚魚は穴から出て群れをなし自由に泳ぎ回るようになると完全に他人となり親は次の産卵を始める。稚魚は三カ月位にて親となり、まずは最初七十粒位を産卵するが繁殖力は物凄いものである。

しかしながら湯量に限度があるので七㌢から八㌢くらいになると唐揚げし、大きいものは刺身、洗いにして食膳を飾り、味は淡泊で珍しいとて天人峡名物として大好評であった。このことを知っ

た農林省淡水区研究所所の島津副所長が来泉し詳細なる資料をまとめて帰るなど、新聞、テレビなどもニュースに取り上げてくれたので一躍有名になった。

三十六年、勇駒別湯沼（2700平方㍍）にて大量生産したいとて神楽営林署、金尾署長の許しを得て放魚してみたところ成育が良好。即ち養殖の商品化には鯉は三年、かつ年一回の産卵、虹鱒も出荷までには二年はかかる。その点、テイラピァは年十回以上の産卵、半年で商品化されるので企業として計画を樹立、湯沼下手の湿地帯を五㌶ほどの借地を願い出たが営林局で認めてもらえずとの署からの返事にて直接局長に社長と共に陳情したが残念ながら断念す。

三十七年八月の集中豪雨の際、天津岩上の崩落により立木、土砂など一度に流出して来たものが第一養殖池に入り、池の水を全部押し出したので魚は忠別川に流され、池は立木や土砂ですっかり埋められてしまった。後日、営林署で遊園地、釣り堀などとしては今後の危険を加味し返地せよとのことにて原形に復し、返地を為（な）し、勇駒別湯沼も許可ならず、残念ながら養殖部門は中止のやむなきにいたり、松井竹夫責任者は大きな希望を失われ退職、旭川にて独立開店した（有）旭川淡水魚と活魚の卸小売ペットショップ松井は繁盛の一途をたどっている。

熊撃ち名人を伴って奥天人峡の探検

温泉郷より忠別川を溯ること約5㎞の地点には忠別川と白雲川の合流点があり、この地までの景観は日本屈指のものであると昭和二十六年、電源開発公社調査隊長から聞かされていた。その後、忠別川の水は発電に利用され地中引水にて温度の低下が問題になり、この調査を東川、東旭川、東神楽三町と土地改良区により行われた際、この地の絶景が知られていた。

天人峡開発の話しが出ると奥天人峡が話題に取り上げられ遂に八月七日、探検隊は東川村役場前を午前五時出発、中川課長、木村重太郎観光協会副会長、協会役員の村議と職員二名の顔ぶれで途中、美瑛忠別の熊撃ちの名人佐藤与之助の同行を願い、天人峡から誰も同行せんとはとお叱りを受け（支配人は足を悪くしておったので同道は皆さんにご迷惑を掛けるからと思っていた）歩けなくなったらおぶってやるからとてご一緒させてもらった。

川伝いでは三カ所、川を渡らなければならぬところがあるのでトムラウシ登山道を登り第一公園から左に折れて川伝いの山の中笹薮を漕いで歩いた。もう合流点に近付いただろうと川側まで行って見ると百㍍近い崖だ。またしばらく歩いて覗いて見ると相変わらず崖の上、やっと雨水のチョロチョロ流れている小さな沢にたどり着き、これを下って行くと合流点だった。

素晴らしい景観。今までの疲れは吹き飛んでしまう。合流点の両側は切り立った大岩壁、水は青くどんよりと流れ、合流点を出ると岩を噛む轟々（ごうごう）たる流れ。付近を見ると湯華の固まったような地形もあり、ただただ凄い、凄いの連発。

その後、神楽営林署に出向き合流点までの笹刈り道路を付けてもらいたいと願った結果、予算がないので五万円ほど応援してくれれば何とかしようとのこと、協会も予算がなく、村費支出を頼んだがこれもダメ、奥天人峡は今も眠っている。

受け継がれて41年　カレンダー「大雪山の四季」

―――　営林支局、高橋秀雄さんから写真家、後藤昌美さんへ　―――

『大雪山の四季』カレンダー13作目に
15作まで目標と高橋さん

旭川営林支局の広報担当として林野弘済会の発行するカレンダー「大雪山の四季」が、来年で十三作目を迎えることになった。旭川営林支局の高橋秀雄さんが撮影した写真を使い、「総北海」が印刷、林野弘済会が同五十年暮れに発行した。記事には「初めは林野の“身内”に約三千五百部が配られていたが、連作するうちに評判を呼び、今では一万五千部印刷しても品切れになるほど」とある。

高橋さんはカレンダーづくりを20年間続け、記事にあるように一万部以上も出ていた年もあったが、「総北海」には現在、高橋さんのカレンダーは一枚も残っていない。社屋移転の際に倉庫を整理したこともあって、探しても無い。カレンダーは月日、曜日、祝日などを確認し、予定を立てるときに便利な実用品であって、その月が終われば用済みの一枚はめくられて、たいていは捨てられる。「大雪山の四季」には変化に富んだ四季折々の美しい写真が使われていたが、高橋さんの写真がどんな大雪山だったのか、今となっては確認のすべがなく幻の作品となってしまった。

平成7年から引き継いだ後藤さんは捨てられる運命のカレンダーを『はかないものと思ったことはない。日めくりのような暦もあれば、写真や絵を楽しむカレンダーもある。「大雪山の四季」は山が好きな人たちが出来上がるのを待っているカレンダーで、見るたびに山に登りたいと思ってくれるものじゃないだろうか』という。

生まれ育ったのがオホーツク海に面した枝幸町、『登るような山はなかった』。旭川の印刷会社にカメラマンとして入社、仕事で山開きの行事を撮ったりするうちに大雪山登山に目覚め、休日にしか登れないサラリーマンをやめて写真家として独立。処女作は「大雪山残象」（1987年、京都書院）。山仲間の佐藤文彦さん（上川町「風の便り工房」主宰）の紹介で作家、三浦綾子が「序にかえて」を巻頭に寄せた。

写真家、後藤昌美さんと、カレンダー「大雪山の四季」

三十代までは大雪山での撮影に夢中だったがやがて撮影は知床、摩周湖、阿寒、釧路湿原などへ広がり、さらに海を渡って北方四島の国後島や択捉島へ。その後火山王国のカムチャツカ半島では火柱を上げて噴火する最高峰のクリチェフスカヤなど手付かずの大自然を延べ200日間かけて取材、撮影は国境を越えて北へ北へと広がっていた。それでも「大雪山の四季」の撮影で大雪山へは必ず年数回登る。『撮影のために登っているというのではなく、登って自然に見とれているわけで、出来ることなら撮影をしないで登っていたい』と言うのが本音。大雪山がひきつける魅力はそのようなところにあるのだろうか。

最近になって腰を痛め、高橋先輩が山に登れなくなってバトンタッチした心境が分かりかけてきたが『ストレッチを欠かさずやっているので…』、大雪山の撮影はこれからも続くに違いない。

半世紀を超える研究、学習の歴史

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設

大雪山は学芸大学（現・教育大学）の教官や学生たちにとって夏山登山、冬山スキー訓練、自然科学の学問的研究の場として長く活用されており昭和 28 年ころから、大自然の中に、自分たちで自由に使える研究基地がほしいという機運が生まれてきた。旭川分校後援会（佐藤門治会長）が寄付を募り、建設資金 158 万円を積み立てて昭和 35 年 10 月、「北海道学芸大学大雪山科学研究所」が完成した。道有地を借り、「勇駒別温泉郷の中でも、とくに泉質の優れた温泉が豊富に得られる地点である」（研究報告第 26 号別冊・沿革から）。国立公園の中に、かけ流しの露天ぶろ付き研究施設があるのは「日本広しと言えども我が大学だけだ」と胸を張る教官が多かった。

昭和 45 年、「大雪山自然教育研究施設」と名称を改め、旭川分校の所管となった。昭和 55・56 年ころ、国の行政改革と大学の緊縮財政計画の中で廃止の危機に直面したが、大雪山の雄大な自然の中で教育者を育てる環境が評価されるなど関係者の努力が実って昭和 62 年、カラマツ材を基調とする瀟洒な建物に改築された。木造地下 1 階、地上 2 階建て、272㎡。研修室 2 部屋、和室、研究実験室、資料室、食堂などがあり、宿泊人数は 14 人。利用者は開設当初から「自分自身で生活する」のが信条で、自炊となっている。

大雪山自然教育研究施設

教員・学生の合宿、ゼミなどの利用に加え、一般にも開放されており、スキー合宿や自然学習、野外観察実習などに活用できる。

半世紀を超えた施設にはさまざまな想いが詰まっている。開設間もない昭和 37 年 6 月 29 日、十勝岳大噴火の時、「稜線の中腹から絶えまなく立ち登る噴煙は西風に流されてあたかも劇場の大緞帳のように見え、その中ほどでは火山灰の摩擦で生ずる雷が、稲妻を伴って鳴りひびいておりました」（施設研究報告第 21 号：当時の施設長、桜井兼市）姿見の池から連続写真を撮りまくったとある。その年の大晦日、函館分校山岳部の 11 名が旭岳で遭難、施設は正月返上で救難本部となった。

大学の研究施設であることから膨大な研究論文が積み上げられてきた。昭和 37 年創刊の「大雪山自然教育研究施設研究所報告」は第 49 号を数え、植物学、動物学、気象学、地球物理学、地質学、生化学、体育学など研究論文は多彩である。

平成 8 年 4 月から Web page が開設され、研究報告の全号の目次情報、第 30 号以降の研究報告全文をデータベース化したのでインターネットで検索が出来、PDF 書類として高解像でプリントも可能になった。

◆ 利用（宿泊を含め）の問い合わせ、申し込み

北海道教育大学事務局旭川校室財務グループ

〒 070-8621　旭川市北門町 9　電話 0166(59)1214　ファックス 0166(59)1220

E-mail：asa-zaimu@j.hokkyodai.ac.jp.

大雪山自然教育研究施設 Web page　http：//taisetsu.asa.hokkyodai.ac.jp/

北海道学芸大学大雪山科学研究所報告
（北海道学芸大学大雪山科学研究所）

第一巻　第一号（昭和 37 年 3 月）

大雪山彙のフロラ（註釈 1）の研究　Ⅰ 白雲岳及びその附近の植物小誌	稲垣貫一・豊国秀夫
大雪山の気象（Ⅰ）特に降雨を中心とした	桜井兼市
湧駒別に於いて飼育されるテイラピアモサンビーカの生態、特に食性について	小林弘・牧幸男
大雪山のヤブカ Ochlerotatus　亜属 2 種	佐藤正三
大雪火山周縁の堆積層及び変成岩の花粉分析学的研究	井口休夫
湧駒別課外活動スキー訓練・セミナーにおける疲労について	須見芳紀
湧駒別温泉附近の地温（予報）	諸橋清一
大雪山旭岳ユコマンベツ沢水系のプラナリア（註釈2）の調査概要	山田達也・丹治寿雄

（註釈 1）フロラ：植物相のこと。（註釈 2）プラナリア：細切れにしてもそれぞれの個体から再生する動物。繊毛運動で渦を作るのでウズムシと呼ばれる。水質変化の指標生物。

第二巻　第一号（昭和 38 年 3 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅱ	稲垣貫一・豊国秀夫
大雪山彙のフロラの研究　Ⅲ	稲垣貫一・豊国秀夫 松永圭朔・斎藤孝志
大雪山の気象　（Ⅱ）	桜井兼市
湧駒別温泉の地温について	諸橋清一
大雪山系ひさご沼及び姿見の池における蚊類の吸血活動に関する生態学的研究	佐藤正三・沢田勇
大雪山科学研究所周辺の基本地図の作製	岡本次郎・小杉健三・今井敏信

第三号（昭和 39 年 3 月）

大雪山植物雑記（その 2）	稲垣貫一・豊国秀夫
大雪山彙のフロラの研究　Ⅳ	稲垣貫一・豊国秀夫・野坂志朗
大雪山彙のフロラの研究　Ⅴ	稲垣貫一・豊国秀夫・成田静雄
大雪山牛朱別川及び安足間川水系の淡水産プラナリア	山田達也・丹治寿雄
大雪山の気象　（Ⅲ）	桜井兼市
大雪山天女ケ原泥炭地について	岡本次郎・小杉健三・今井敏信
スキー・ワックス（パラフィン）の効果について	安井孝司

第四号（昭和 40 年 12 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅵ	稲垣貫一・豊国秀夫 松永圭朔・滝薫・土肥芳明
大雪山石狩川水系の淡水産プラナリアの生態調査報告	山田達也

北海道教育大学大雪山科学研究所報告
（北海道教育大学大雪山科学研究所）

第五号（昭和 41 年 12 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅶ	稲垣貫一・豊国秀夫・浅利栄吉 永井延和・笠原義幸・小田島奉子
大雪山系高原温泉付近の蚊	佐藤正三・建脇宏安
大雪火山周縁の堆積物の花粉分析学的研究第二報	井口休夫・百町智美

第六号（昭和 42 年 12 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅷ	稲垣貫一・豊国秀夫 清尾徹・鶴舎博
大雪山系銀泉台付近の蚊	佐藤正三・建脇宏安
大雪火山周縁の堆積物の花粉分析学的研究　白川褐炭の花粉分析	井口休夫・猪又洋明 尾崎忠顕

第七～八号（昭和 44 年 6 月）

大雪山彙のフロラの研究　Ⅸ 赤岳及びその近接地域植物小誌	稲垣貫一・豊国秀夫 武隈幸平
大雪山彙のフロラの研究　Ⅹ 大雪山高山帯産シャクナゲ科植物誌（1）	稲垣貫一・豊国秀夫
十勝岳火山群富良野岳の特記すべき植物について	稲垣貫一・豊国秀夫 山下進
大雪山系愛山渓付近の蚊	佐藤正三・建脇宏安・富田征・横浜拓哉 北海道教育大学旭川分校生物学教室
ドライアイス法による大雪山系の蚊類の活動性の研究	佐藤正三・本間武・前鼻尚樹・北海道教育大学旭川分校生物学教室
大雪山牛朱別川、忠別川及び石狩川水系の淡水産プラナリア	柳田欣作・北海道教育大学旭川分校生物学教室

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設報告
（北海道教育大学大雪山自然教育研究施設）

第九号（昭和 49 年 12 月）

大雪山系東大雪の蚊	佐藤正三・建脇宏安・富田征
大雪山オサラッペ川水系の淡水棲プラナリア	柳田欣作

第十号（昭和 50 年 10 月）

道北地方における蚊類幼虫の生態学的研究 1. 蚊類幼虫の棲息水域について	佐藤正三・市原俊尋 竹内光日出・井戸尚貴
道北地方における蚊類幼虫の生態学的研究 2. 蚊類幼虫の群集構造について	佐藤正三・市原俊尋 竹内光日出・井戸尚貴
大雪山江丹別川水系の淡水棲プラナリア	柳田欣作
大雪山地域の地形分類（Ⅰ）	小杉健三
大正時代の大雪山での気象観測	桜井兼市

北海道教育大学大雪山自然教育研究施設研究報告
（北海道教育大学大雪山自然教育研究施設）

第 11 号（昭和 51 年 10 月）

大雪山北部の高山植物群落（1） 大気温度、土壌温度、土壌酸度、及びハイマツ―コケモモ群集の循環変化	伊藤浩司・西川恒彦
北日本産キンバイソウ属植物の花の形質変異	西川恒彦

第 12 号（昭和 52 年 10 月）

大雪山北部の高山植物群落（2） 植物群落の分類	伊藤浩司・西川恒彦
大雪山系白水沢の動物調査	佐藤正三・石川信夫 建脇宏安・富田征

第 13 号（昭和 53 年 10 月）

キタヤブカ Aedes(Ochlerotatus)hexodontus とチシマヤブカ Aedes(Ochlerotatus)Punctor の形質変異について	佐藤正三・神田英治・斉藤涼子 藤原和子・中村千賀子
北海道産植物の染色体数（1）	西川恒彦

第 14 号（昭和 54 年 10 月）

浜佐呂間産チシマヤブカ Aedes(Ochlerotatus)punctor の形質変異について	佐藤正三・源川久美子
北海道産植物の染色体数（2）	西川恒彦
完新世の気候変動と大雪の古沼堆積物（予報）	平一弘
極地域の雪・氷晶の構造（抄録）	桜井兼市・オータケ・タケシ

第 15 号（昭和 55 年 10 月）

北海道の森林植生概要（Ⅰ）	伊藤浩司
北海道産植物の染色体数（4）	西川恒彦
無意根山大蛇ケ原湿原の植生 北海道高地湿原の研究（Ⅲ）	橘ヒサ子・佐藤謙・伊藤浩司
穂別産キタヤブカ Aedes(Ochlerotatus) hexodontus の形質変異について	佐藤正三・伏見純子

第 1 － 15 号（昭和 56 年 9 月）
北海道教育大学自然教育研究施設研究報告総目次 第1−15号
（1962-1980）

第 16 号（昭和 56 年 10 月）

北海道大沼公園付近産 Aedes(Ochlerotatus) punctor Subgroup の蚊の形質変異について	佐藤正三・伏見純子 佐々木邦子
大雪山系勇駒別及び姿見付近の鳥類調査	佐藤正三・石川信夫
大雪山天女ケ原の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅳ）	橘ヒサ子・佐藤謙
北海道産植物の染色体数（5） タイセツタカネニガナ（新称）	西川恒彦
大雪周辺の第 4 系（1）	平一弘

第 17 号（昭和 57 年 12 月）

ティラピア・モザンビカ背筋筋原線維の構造蛋白質	浅川哲弥
北海道産植物の染色体数（6）	西川恒彦
松山湿原の植生 北海道高地湿原の研究（Ⅴ）	橘ヒサ子
天人峡瓢箪沼の湿原植生（予報）	橘ヒサ子・佐藤謙

第 18 号（昭和 58 年 12 月）

大雪山系沼の原の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅵ）	橘ヒサ子・佐藤謙
大雪山系の第 4 紀（2）	平一弘
旭川周辺の大気中の固体粒子の観測（1）	桜井兼市・大野伸仁・川尻智洋・西山優・茂垣之弘

第 19 号（昭和 59 年 12 月）

ティラピア背筋ミオシンの ATPase 活性	浅川哲弥・中野孝幸
大雪山系沼の平の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅶ）	橘ヒサ子・小川泰弘・佐藤謙
大雪山系の第 4 紀（3）	平一弘
施設だより　施設の経過と現況について	今村源吉

第 20 号（昭和 60 年 12 月）

大雪山系原始ケ原の湿原植生 北海道高地湿原の研究（Ⅷ）	橘ヒサ子・佐藤謙
松山湿原におけるアカエゾマツ林の構造	橘ヒサ子・花田英世・粥川昇・矢野浩司
旭川周辺の大気中の固体粒子の観測（2）	桜井兼市
施設だより　施設の意義と将来	今村源吉

第 21 号（昭和 61 年 12 月）

ティラピア背筋ミオシンの ATPase 活性　2	浅川哲弥・織田幸恵 吉田忍
ザリガニアルギニンキナーゼの調製とその性質	矢沢洋一・安部公子 鯨岡みのぶ
暑寒別岳雨竜沼湿原の植生	橘ヒサ子・佐藤秀之
ジオイド（註釈 3）の変形と火山活動	平一弘
施設だより　旧研究室の思い出	桜井兼市
施設だより　山での生活から	三浦浩

（註釈 3）ジオイド：測地学の用語。海面の平均値に近い面で標高の基準となる。

第 22 号（昭和 62 年 12 月）

完新世火山活動とジオイドの変形	平一弘
ザリガニアルギニンキナーゼの性質	矢沢洋一・山本弓子・武田理恵
冬期旭川での Heat island の構造	桜井兼市
走査電子顕微鏡によるミズゴケ類の枝葉の観察	橘ヒサ子・木村一枝
施設だより　ソクラテスの庭	上岡宏

第 23 号（昭和 63 年 12 月）

廻転による地殻変動とジオイドの変形	平一弘
雌阿寒火山降下軽石スコリア層の発見と不均質マグマの混合過程	和田恵治・日野智明 春藤大雅
ティラピア背筋アクチンの精製	浅川哲弥・藤坂浩美
日本ザリガニアルギニンキナーゼの酵素的性質	矢沢洋一・畠佐和子 熊崎ゆかり
登山者の踏みつけによる浮島湿原の植生と土壌環境の変化	橘ヒサ子・高梨智之 尾崎雄一
施設だより　障害児と自然	古川宇一
施設だより　釧路分校の野外実習について	神田房行

第 24 号（平成元年 12 月）

黄砂粒子の氷晶化能力	桜井兼市
極地方における氷床の発達と北部西太平洋における地球内部物質の移動の特性	平一弘
雌阿寒火山阿寒富士玄武岩の岩石学ソレアイト・マグマの 2 段階混合	和田恵治
差スペクトル法による日本ザリガニアルギニンキナーゼの酵素的性質の検討	矢沢洋一・粟屋博美 辻村るり子
踏みつけによる大雪山系天人が原湿原の植生の変化	橘ヒサ子・林大輔 斎藤員郎
施設だより　インタフェースとしての研究施設	横田正義

第 25 号（平成 2 年 12 月）

第 4 紀における弧状列島の隆起とジオイドの変形	平一弘
雌阿寒岳における不均質マグマのフラクタル構造	和田恵治
ティラピア背筋トロポミオシンの精製	浅川哲弥
大正期の北海道の土地利用の復原	氷見山幸夫・綿木尚弘
施設だより　チシマクモマグサ再会	石和貞男
施設だより　旭岳における植物の垂直分布　野外生物学実習記録から	橘ヒサ子

第 26 号　開設 30 周年記念号（平成 3 年 9 月）

自然と教育	平一弘
ティラピア背筋トロポミオシンの性質	浅川哲弥・西嶋ゆかり
ニホンザリガニ尾筋の筋肉蛋白質の調製とその性質	矢沢洋一・後藤志のぶ
大雪山系旭岳地域における車道及び観光施設周辺の裸地に侵入した植物について	橘ヒサ子・坂下千佳 竹内健
大雪山、旭岳の地質と岩石	大沼靖治・和田恵治
明治後期―大正前期の土地利用の復原	氷山見幸夫・岩上恵・井上笑子
1998 年オリンピック冬季大会旭川開催の影響に関する研究　―旭川市内教育系学生の意識を中心として	三浦裕・長屋昭義

第 26 号　開設 30 周年記念別冊（平成 3 年 9 月）

要覧・研究報告総目次・施設だより 1、沿革　2、略年表　3、歴代役職員　4、平成 3 年度職員、運営委員会及び研究員の研究題目　5、刊行物　6、施設概要　7、施設利用状況　8、研究用機器・図書　9、使用料及び実費負担金、10、温泉分析書　11、施設案内	
総目次　第 1-26 号	
施設だより　座談会（奥田五郎・東尚巳・櫻井兼市・橘ヒサ子）	
30 周年に想う	今村源吉
開設 30 周年にあたって	櫻井兼市
開設 30 周年を祝う	蒲　雅夫
これからの大雪山自然教育研究施設	平一弘
大雪山自然教育研究施設の将来に向けて	本間謙二
野外活動施設としての今後の役割	速水修
山小屋白昼夢	奥野亮輔
エゾシカのこと	伊藤健雄
勇駒別の思い出	関太郎
旭岳における雪結晶の観測	遊馬芳雄
大雪山科学研究所の思い出	角地敏弘
自然と教育と施設	沢出宗利
研究所時代の思い出	三浦浩
大雪山での思い出	富樫護
旭岳と高山植物	大森誠志
旭岳登山の思い出	竹内健

第 27 号（平成 4 年 12 月）

日本近海における完新世海洋変動	平一弘
大雪山熊ケ岳の縞状溶岩	和田恵治
ミヤマサワアザミの染色体数	西川恒彦
旭岳におけるクロスカントリースキーの事例報告（そのⅠ）スキー滑走中の心拍数	古川善夫・杉山喜一
旭岳におけるクロスカントリースキーの事例報告（そのⅡ）交互滑走における運動学的技術特性に着目して	杉山喜一・古川善夫
パパインによるティラピアミオシンの限定分解	浅川哲弥
ヤツメウナギ骨格筋クレアチンキナーゼの 2 種類のアイソフォーム	矢沢洋一・中島由美子 曾我知美・宇都宮澄子

第 28 号（平成 5 年 12 月）

大正期～現代の北海道の土地利用変化	氷見山幸夫・太田伸裕
大雪山旭岳における森林群落の植物季節学的研究	北川道生・橘ヒサ子
本州産キンバイソウ属植物 2 種の染色体数	西川恒彦
旭岳地獄谷火口における火山噴出物の層序	和田恵治
旭川での酸性雪の観測	櫻井兼市
日本海における完新世海洋変動	平一弘・K. A. ルタエンコ
ザリガニアルギニンキナーゼのcDNAクローニングとその生化学的性質	矢沢洋一・上堂地美佳 横田京子・中村俊
施設だより　大雪山自然教育研究施設の恵まれた立地条件	山下晃

第 29 号（平成 6 年 12 月）

明治・大正～現代の東北地方の土地利用変化	氷見山幸夫・本松宏章
キモトリプシンによるティラピア背筋ミオシンＳ１の調整とその酵素的性質	浅川哲弥・小泉千絵
北海道北部の新第三紀火山岩類のＫ - Ａｒ年代と主成分化学組成	後藤芳彦・中川光弘・和田恵治・鈴木邦輝・氏家敏文
施設だより　人と知的風土	平一弘
施設だより　北海道教育大学大雪山自然教育研究施設の今後の活動について	浅川哲弥

第 30 号（平成 7 年 12 月）

大雪山黒岳溶岩の斜長石の化学組成	和田恵治
天塩川流域におけるカヌー・クラブの実践北海道カナディアンクラブを中心に	前田和司
1930 年代の中国東北部の土地利用	氷見山幸夫・伊藤啓之 菊地隆明・本間寿豪
高速液体クロマトグラフィーによるティラピアミオシン軽鎖の分離	浅川哲弥・坂本真奈美
スキー授業の学習内容に関する基礎的研究一般スキーヤーの安全意識にみる体育倫理的視点の必要性	三浦裕・舘山さおり
ハイパーカードによるスタック「大雪山の自然」	浅川哲弥
東アジアにおける 1 ～ 2 万年前の黒潮の変動	平一弘
北海道産変形菌追加	山本幸憲・西川恒彦

第 31 号（平成 9 年 3 月）

大雪山自然教育研究施設ホームページの作成	浅川哲弥
1980 年頃の中国東北部の土地利用	氷見山幸夫・藤沢雅樹・宮腰唯導
アルペンスキーの安全意識に関する基礎的研究教員養成系課程の学部学生を対象として	三浦裕・伊藤徳之 甲斐美也子
カワヤツメ血清成分の検討	矢沢洋一
東アジアにおける 1 ～ 2 万年前の黒潮の変動（2）	平一弘
留萌で採取された混合粒子の形態	辰口一俊・櫻井兼市
中峰の平の湿原植生（予報）	橘ヒサ子

第 32 号（平成 10 年 3 月）

大雪山系天人が原湿原におけるアカエゾマツ林の構造	橘ヒサ子・濱田陽・林大輔
中国華北平原南部における 20 世紀前期の土地利用の復原	氷見山幸夫・鈴木聡美・早川亜友巳
ティラピア背筋アクトミオシンのDTNB 処理に及ぼす諸条件の効果	相沢直美・浅川哲弥
ニセコ山地神仙沼湿原の植生	橘ヒサ子
雌阿寒岳の岩石の化学組成 ―マグマの多様性	和田恵治・池上宏樹 稲葉千秋
石狩川下流域（江別市周辺）におけるカワヤツメ漁獲量の年次推移	矢沢洋一
1,000 年頃の北太平洋の気候変動の意味	平一弘
施設だより　旭岳ロープウェイの改修	氷見山幸夫

第 33 号（平成 11 年 3 月）

Properties of Tropomyosin from Tilapia,Tilapia nilotica,Dorsal Muscle 2-Comparison of Tilapia Tropomyosin with Rabbit Skeletal Tropomyosin	Tomokazu OKANO and Tetsuya Asakawa
1910 年頃～ 1980 年頃の中国華北平原南部の土地利用	氷見山幸夫・岩本清海 渡辺絵美
大雪山旭岳に侵入した低地植物の種子発芽特性	竹内健・橘ヒサ子
カワヤツメ血漿タンパク質の分離とその性質	矢沢洋一・田浦知子・大平愛子 広瀬季恵・上堂地美佳・山本克博
施設だより　大雪山自然教育研究施設　Web page の改訂計画について	浅川哲弥

施設だより　大雪山自然教育研究施設見学会参加体験記 自然は教室であり先生でもある	川邊淳子

第 34 号（平成 12 年 3 月）

雄阿寒火山混合玄武岩質安山岩から推定される浅部珪長質マグマ溜りと深部苦鉄質マグマ溜り	和田恵治
中国土地利用・被覆変化情報ベースの開発	氷見山幸夫・村田久美 谷藤陽子・佐藤太一
1999 年 2 月に勇駒別で観測された黄砂粒子	濱谷武司・櫻井兼市
施設だより　大雪山旭岳の植物観察記	林一六
施設だより 「施設見学会」に参加して	相馬一彦

第 35 号（平成 13 年 3 月）

カワヤツメヘモグロビンの生化学的研究	北村裕美・中山亨 毎田徹夫・矢沢洋一
旭岳の表層にみられる広域火山灰の化学組成とその給源火山の特定	和田恵治・中村瑞恵 奥野充
雨竜沼湿原木道周辺荒廃地の微地形と植生	橘ヒサ子・高橋勝 佐藤雅俊・佐々木純一
グリセリン存在下のミオシンＡＴＰ ase 活性	田代和孝・立田真弓 浅川哲弥
中国吉林省中部・東部地域の土地利用と諸条件	氷見山幸夫
施設だより　2000 年施設見学の記	大塚美栄子

第 36 号（平成 14 年 3 月）

1900 年頃以降サロベツ湿原の土地利用・被覆変化	周進・橘ヒサ子
中国吉林省における湿地の現状と利用	周進・橘ヒサ子
ティラピア背筋ミオシン軽鎖の単離とその性質	熊谷香織・浅川哲弥
北海道西海岸で採取されたエーロゾル粒子の特性	濱谷武司・櫻井兼市
On Aerosol Particles and Solid Particles in the Snow Crystal Observed in Kiruna,Sweden	Ken-ichi SAKURAI,Yoshifumi YASUDA Masahiro KAJIKAWA,Katsuhiro KIKUCHI
カワヤツメヘモグロビンⅠの三次元構造の解明とそのヒトヘモグロビン三次元構造との比較検討	上堂地美佳・姚閔・田中勲 中山亨・矢沢洋一
日本における 1980 年以降の観光開発動向	氷見山幸夫・熊谷潤一 角地禄崇、白川博順
中国土地利用・土地被覆変化研究のための地区単位	佐藤太一・氷見山幸夫
画像処理ソフトを用いた 100 万分 1 中国土地利用図の分析手法の開発	氷見山幸夫・中野宏香 神野宙史
中国東北部の LUCC 研究における満州 5 万分 1 図の利用	氷見山幸夫・森下祐作 荒井拓之介

第 37 号（平成 15 年 3 月）

施設だより　大雪山自然教育研究施設の利活用の推進に向けて Message from the Institute	氷見山幸夫
研究施設等の紹介シリーズ 大雪山自然教育研究施設	氷見山幸夫
研究施設等の紹介シリーズ 大雪山自然教育研究施設（Ⅱ）	氷見山幸夫
自然の教育	平一弘
洪河国家級自然保護区と釧路湿原国立公園における植生と保護区配置の比較	佐藤雅俊・橘ヒサ子・周進 張柏
北海道勇払湿原の土地利用・被覆変化	周進・橘ヒサ子
DID 統計から見た 1960 年以降の日本の都市化	氷見山幸夫・森下祐作
カワヤツメ骨格筋蛋白質の調製とその性質	矢沢洋一
ＥＰＭＡによる黒曜石ガラスの主成分化学組成 ー遺跡出土黒曜石の産地特定：常呂川河口遺跡の例	和田恵治・向井正幸 武田修

第 38 号（平成 16 年 3 月）

第 4 紀後半の構造運動と気候変動	平一弘
サロベツ湿原で見いだされた樽前山 1739 年噴火火山灰（Ｔａ - ａ）	佐藤夕紀・和田恵治 橘ヒサ子
カワヤツメミオグロビンの生化学的研究	矢沢洋一・中山亨・毎田徹夫
ティラピア背筋アクチンの性質 2	高井映里・菅田宏幸・浅川哲弥
釧路湿原とその周辺地域における 1920 年頃以降の土地利用・被覆変化	橘ヒサ子・鈴木一歌 星亜紀子・周進
日本における 1980 年以降の農地転用の動向	氷見山幸夫・新谷奈美 高橋賢市
日本における都市の拡大の動向とメカニズムおよびその影響	氷見山幸夫
書評 「知られざる大雪山の画家・村田丹下ー北海道から東京、故郷岩手へ、その足跡を溯る」	武田　泉
施設だより　学生とともに歩く大雪山「自然環境実習」	和田恵治
施設だより　北海道地理学会・東北地理学会 2003 年度合同秋季学術大会巡検Ⅱ「大雪山旭岳の自然と観光」に参加して	佐藤淳

第 39 号（平成 17 年 3 月）

大雪火山、御鉢平カルデラおよび旭岳の岩石記載と岩石の化学組成	佐藤鋭一・和田恵治 中川光弘
ティラピアミオシンの限定分解による S1 の調製	浅川哲弥
円口類（カワヤツメ・メクラウナギ）血漿タンパク質の性質と脊椎動物における進化	矢沢洋一・高木尚
上川盆地における 1898 年以降の土地利用・土地被覆変化	橘ヒサ子・松澤基 諏訪由樹・周進
5 万分の 1 地形図でみる新潟県の 20 世紀末の土地利用	氷見山幸夫・氷見山清子
わが国における 1980 年以降の利用目的別土地取引の動向	氷見山幸夫・浅川直希
日本と中国における土地利用と農村の持続可能性の地域間比較	氷見山幸夫
書評　大雪山国立公園 70 周年記念出版から小泉秀雄・太田龍太郎の生涯を探る	武田泉

第 40 号（平成 18 年 3 月）

知床半島羅臼湖周辺湿原の植生	橘ヒサ子
利尻富士町役場遺跡から出土した黒曜石石器の原産地 EPMA による黒曜石の主成分化学組成	和田恵治・渋谷亮太 山谷文人・向井正幸
大雪山小泉岳の雪田における気温および地表面・積雪表面温度の観測	宮本昌幸・武田泉
北海道の変形菌Ⅱ - 大雪山旭岳産好雪性変形菌	矢島由佳・西川恒彦 山本幸憲
1970 年以降の新潟県の農業的土地利用の変化	氷見山幸夫・氷見山清子
わが国における 1980 年度以降の土地区画整理事業の動向	氷見山幸夫・荒木聡
2 万 5 千分 1 地形図で見る 2000 年頃の福岡県の土地利用	氷見山幸夫・中村紀子

第 41 号（平成 19 年 3 月）

ティラピア背筋トロポニンの調製とサブユニットの単離	阿部卓・浅川哲弥
わが国における 1980 年度以降のほ場整備事業の動向	氷見山幸夫・菊地裕太
中国東北部における 1930 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・畠山拓 森下祐作

大雪山の雪田における凝灰岩ブロックの破砕	宮本昌幸
ヤツメウナギ体内の必須脂肪酸と血中β-リポタンパク質含有量の季節変化	矢沢洋一
根釧台地、別海町中春別露頭で同定された大雪山・御鉢平カルデラ起源の広域火山灰	和田恵治・石崎直人 佐藤鋭一

第 42 号（平成 20 年 3 月）

ティラピア背筋トロポニン成分の性質	阿部卓・浅川哲弥
北海道における 1975 年度以降の農用地造成事業の動向	氷見山幸夫・岩城千佳子 新保竹司
台湾における 1925 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・後藤友紀
2 万 5 千分 1 地形図で見る 2000 年頃の群馬県の土地利用	氷見山幸夫・本田達也
旭川市近郊の嵐山にみられるカシワとミズナラの種間雑種の変異	中原俊一・西川恒彦
オオバヨモギ北海道に産す	西川恒彦・並川寛司・中安義麿 松本美由喜・山本恵・宇野美和子 板垣大助・沖中深雪・尾野政明

第 43 号（平成 21 年 3 月）

積丹岬産カシワとミズナラの種間雑種の形態変異	中原俊一・西川恒彦
旭川市近郊および大雪山旭岳産変形菌リスト	矢島由佳・西川恒彦 山本幸憲
中国広西チワン族自治区および海南省における 1930 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・石黒正基
2 万 5 千分 1 地形図で見る 2000 年頃の京都府の土地利用	氷見山幸夫・足立和政
わが国における 1980 年度以降の都市開発事業の動向	氷見山幸夫・塩崎大輔
中国天津市・河北省における 1930 年頃以降の都市化	氷見山幸夫・畠山拓
上富良野町民へのアンケート調査にみる十勝岳火山防災に対する住民意識	内田あゆ美・和田恵治
カワヤツメアルブミンの分子構造	矢沢洋一・高木尚・古泉幸子

第 44 号（平成 22 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 1 ―大函の御鉢平カルデラ噴出物	佐藤鋭一・和田恵治
後期旧石器時代、旭川市共栄 7 遺跡の剥片石器とその石材原産地	中谷良弘・和田恵治
旭川市内における石狩川の水質調査に関する教材化	山本裕太・大鹿聖公
カワヤツメ及びホッキガイ筋肉中の成分含有量の季節変化	矢沢洋一
1980 年代後期以降の旭川近郊の農地利用変化	氷見山幸夫・阿部正和
わが国における 1980 年度以降の都市開発の動向	氷見山幸夫・小田桐千恵
わが国における 1980 年度以降の林地開発の動向	氷見山幸夫・山下祐太
中国東北平原南部における 1930 年頃以降の土地利用変化	氷見山幸夫・土岐友哉 林七夕乃

第 45 号（平成 23 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 2　―天人峡の御鉢平カルデラ噴出物　　御鉢平カルデラから流出した 2 種類の火砕流の噴出順序	佐藤鋭一・和田恵治
大雪山原生林保護林における亜寒帯針葉樹林の林分構造	並川寛司
白滝ジオパークの黒曜石 - 白滝黒曜石流紋岩溶岩群の地質解説	和田恵治
中国黒龍江省南東部における 1980 年代と 2010 年頃の土地利用	氷見山幸夫・白鳥佑一 樋口奨
ロシア沿海地方ウラジオストクーハンカ湖付近の 1980 年頃以降の土地利用変化	氷見山幸夫・家入麻友美
農業振興地域における 1980 年度以降の農地転用の動向	氷見山幸夫・大瀬秀策
書評　「大町桂月の大雪山―登山の検証とその同行者たち」清水敏一（著）　北海道出版企画センター（2010 年 04 月刊行）	武田泉
書評　「トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか」山と渓谷社　羽根田治、飯田肇、金田正樹、山本正嘉著	武田泉

第 46 号（平成 24 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 3 2 種類の苦鉄質包有物を含む黒岳の溶岩	佐藤鋭一・和田恵治
粘り気の違う溶岩の形態を示す学習教材―重曹を使った火山噴火のアナログ実験	佐藤鋭一・長部伸城・須藤穂波 齊藤丈朗・佐々木惇基・和田恵治
インドネシア西ジャワ州の 1990 年代以降の土地利用・土地被覆変化	氷見山幸夫・前田亮・北海道教育大学旭川校地理学教室
中国黒龍江省西部における 1980 年代以降の土地利用変化	氷見山幸夫・葛西雅人 矢部寛
地形図で見る大阪府の土地利用、その変化と災害危険性	氷見山幸夫・武井智裕
書評　「十勝の森林鉄道―森とともに生きた幻の鉄路を捜（さが）して」小林實著　春陽堂書店・サッポロ堂書店発行、301 頁、2200 円、2012 年 1 月	武田泉

第 47 号（平成 25 年 3 月）

大雪山、旭岳の地質見学案内	佐藤鋭一・和田恵治
地形図で見る千葉県の土地利用、その変化と災害危険性	氷見山幸夫・高松開
地形図で見る愛知県の土地利用変化と災害危険性	氷見山幸夫・輪島聖也
タイ中部地方の 1950 年代以降の土地利用・土地被覆変化と水害	氷見山幸夫・藤間迪宏
書評　「自然保護と戦後日本の国立公園　一続『国立公園成立史の研究』」　村串仁三郎著　時潮社　6000 円　2011 年発行	武田泉

第 48 号（平成 26 年 3 月）

大雪火山噴出物の露頭紹介 4 忠別川沿いに露出する御鉢平カルデラ起源の火砕流堆積物	佐藤鋭一・和田恵治
フィリピン共和国中部ルソン平野および周辺地域の 1950 年代以降の土地利用変化	氷見山幸夫・阿部和輝
地形図で見る福井県の土地利用変化と災害危険性	氷見山幸夫・佐々木唯衣
土地利用動向調査の活用と展望	氷見山幸夫・高瀬慧
書評　「検証　層雲峡は、いま―観光活性化策『プラン 65』から 10 年」　長縄三郎著　共同文化社、258 p、2013 年発行	武田泉

第 49 号（平成 27 年 3 月）

大雪山の地質紹介Ｗｅｂサイトの公開	佐藤鋭一・中岡礼奈・和田恵治
1985 年頃～ 2010 年頃のインドラジャスタン州における土地利用変化	氷見山幸夫・五十嵐勇輔
中国東部平原地域における 1980 年代以降の土地利用変化	氷見山幸夫・大野翼 中井優太郎
書評　「ドキュメント御嶽山大噴火」山と渓谷社編、237 p　2014 年発行	武田泉

宮部金吾博士の大雪山高山植物園構想

── 大正14年、便せん7枚にペン書き ──

俵浩三さん 90余年ぶりに偶然発見

北海道大学黎明期に植物研究の草分けとなった宮部金吾博士が書き上げた大雪山の「高山植物園新設設計書」が北海道自然保護協会元会長、俵浩三さんによって 90 余年ぶりに発見された。便せん７枚にペンで縦書きされた直筆で、一時は不要な書類として扱われる不運にあったが俵さんによって破棄は免れ、現在は北大植物園内にある「宮部金吾記念館」が貴重な資料として保管している。発見の経緯から大雪山の高山植物園構想について俵さんに特別寄稿をいただいた。

俵（たわら）　浩三（ひろみ）

1930 年、東京出身。千葉大学園芸学部卒業。1953 ～ 1983 年の間、厚生省国立公園部、北海道林務部、北海道生活環境部に勤め、1983 ～ 2001 年、専修大学北海道短期大学教授（造園学）。1984 ～ 2008 年、（社）北海道自然保護協会理事、1994 ～ 2004 年、同会長。著書に「牧野植物図鑑の謎」「緑の文化史ー自然と人間のかかわりを考える」「北海道の自然保護ーその歴史と思想」「北海道・緑の環境史」など。

新発見の宮部金吾「大雪山・高山植物園新設設計書」と、その後の自然保護政策

1 札幌農学校２期生の三羽烏

宮部金吾（1860 ～ 1951）は、内村鑑三（1861 ～ 1930・教育者・宗教家）、新渡戸稲造 （1862 ～ 1933・教育者・国際連盟事務次長）とともに、札幌農学校２期卒業の英才トリオといわれる一人で、明治中期から昭和初年まで札幌農学校教授～北海道大学教授として、北海道の近代植物学を生み、育てた、著名な植物学者である。

宮部金吾 「北大百年の百人」（北海タイムス社刊）から

2 貴重な資料と偶然の巡り合い

いまから 30 年ほど前、私は専修大学北海道短期大学（2013 年閉校）に勤め、造園林学科で造園学を担当していた。同じ学科で林学担当の渡辺啓吾先生は、北大農学部名誉教授・今田敬一先生の娘婿だったが、今田先生が亡くなられた後のある日、「北大の今田名誉教授室を空ける必要が生じたので、片付けを手伝って欲しい」といわれ、同道して手伝った。それは、名誉教授室に残されていた物品や書籍を、①北大の備品や図書、②今田家の私物、③不用な資料など（希望者に頒布）、④廃棄処分する物、に仕分けする作業だった。

今田先生は森林美学の大家なので、私としては作業に興味があったが、③の不用な資料の中に今田先生の論文別刷りも混じっていたので、数編の別刷りをいただいた。また無記名の封筒があったので、何気なく中を確かめると、数枚の便箋に書かれた「高山植物園新設設計書」が入っていた。今田先生はこのような仕事にも関与されていたのだと思いながら、私がいただいた。

家に帰ってから眺めると、どうも今田先生の筆跡ではないらしい。ひょっとすると宮部金吾先生の筆跡かも知れない、「伝記」を参照すればヒントが得られるだろうと思ったが、当時は「伝記」を所持していなかったので、いずれ調べてみようと思いながら、本の間に挟んで仕舞いこんだ。ところがその当時は多忙をきわめ、次々と新しい仕事に取り組んだので、いつしか忘れ去られてしまった。

現在の私は高齢化したので、少しずつ身辺整理をしているが、最近、押入れに山積みとなった蔵書の下の方に挟まって、「高山植物園新設設計書」が出てきた。もしこれが宮部先生の自筆原稿であれば大変な貴重品だから、私が私蔵（死蔵）すべきでなく、北大植物園内の「宮部金吾記念館」に収納すべきと思い、私は宮部金吾博士記念出版会『宮部金吾』（岩波書店、1953）などを読んでみた。

すると4で後記するように、これは宮部先生が書いたと判断できる合理的な根拠があるため、**北大植物園の宮部金吾記念館に筆跡鑑定を依頼した。その結果、宮部金吾自筆のものと判断され、今後は同記念館の資料として保存・活用されることになった。**

私としては、まったく偶然の機会に文化財的な価値のある資料と巡り合え、その命を永らえさせることができたことを嬉しく思っている。しかし同時に、約30年もの間、忘れ去ってしまったことを深く反省している。

3 「高山植物園新設設計書」内容の要点

この設計書は、通常の便箋7枚に達筆のペン字で書かれたもので、かなり古色を帯びているが（写真1）、その要点は次のようなもので、高山植物園の「新設設計書」というよりも、むしろ「新設の必要性」を強調した内容となっている。

（写真1） 発見された「高山植物園新設設計書」

① 所在地・地域・建物

・所在地は「石狩国上川郡　大雪山及び層雲別」である。

・地域は「山頂高山帯」で「赤石川より東北、白雲岳、小泉岳（俗称）、赤岳、烏帽子岳を含む一帯」となっている（当時は地形図が未整備で、山名も不確定だったので区域が判然としないが、現在の旭岳も含む“大雪山頂一帯”の広大な地域が想定されたと思われる）。それに加えて「黒岳山麓の層雲別（石狩川岸）」に２千坪の植物園。

・建物は「山頂に石室、山麓に高山植物実験所」となっている。

② 高山植物園設立理由書

・高山植物の研究は、分類学的研究はもちろん重要であるが、近年は実験的研究が進んでいる。それはフランスの植物学者・ボンニューによって開拓されたもので、同じ植物をパリの平地と、モンブラン、ピレネーの高山帯に植栽して、変化を研究（例えばタンポポを高山帯に植えると、全体が小型化するが、地下部は相対的に長大・肥大化）、1887 年以降、数回の論文を発表している。

・その研究結果に刺激され、近年は各国で高山植物研究への関心が高まり、フランス、ドイツ、オーストリア、スイス、アメリカが競って研究を行い、高山植物の特異な形態の成因や生理、遺伝、さらに気象や紫外線など平地と異なる環境条件との関係などの究明が進みつつあり、とくにスイスではその研究がアルプ寒地農業の振興に寄与している。

・これらの研究が進展する理由は、各国の大学などが山岳地帯に高山植物園と実験施設を設け、実地に即した実験や観察を可能としているからにほかならない。

・日本でも、東京大学はすでに日光に高山植物園を設け、東北大学は八甲田山に、京都大学は伯耆大山に、高山植物園を企図している。

・とくに北海道は寒地農業の振興にも関係が深いので、高山植物研究が重要である。前記の大雪山地域は、交通の便が改善されつつあるばかりでなく、広大な環境は岩礫、砂礫、草原、湿地、池塘など変化に富み、高山植物の種類と生態が日本一といえるほど豊富・多様なので、研究の最適地である。そのため大雪山調査会は、山頂一帯を天然記念物として永く保存すべきと建議している。

・したがって**前記地域一帯は、天然記念物として現状をそのまま保存するばかりでなく、更に進んで高山植物の研究に資するため、高山植物園、研究施設を設けるべきである。**

4 「高山植物園新設設計書」は、いつ、どうして執筆されたのか

私はこの資料を再発見したのを機会に、前記した『宮部金吾』と、５で紹介する小泉秀雄『大雪山・登山法及登山案内』（大雪山調査会、1926）を熟読してみた。

その結果、『宮部金吾』の p.237 ～ 240 には大正 14（1925）年７月、北海道山岳会と大雪山調査会の共催により大雪山・層雲峡で「夏期大学」が開催され、そこに講師として出席した宮部先生が「高山植物と高山植物園」の講義を行い、翌日は層雲峡～黒岳～大雪山頂一帯を歩き、山頂でも「お花畑」の実地講義を行ったことが記述されている。

また『大雪山・登山法及登山案内』の口絵第８図（写真２）には「雲ノ平石室に於ける大雪山

夏期大学一行中の登山者」という集合写真が掲載され、「中央、金剛杖を握られるは同会講師・宮部金吾先生」との説明があり、宮部先生が大正 14(1925)年に大雪山へ登ったことが確認できた。

（写真２）『大雪山・登山法及登山案内』口絵第８図

さらに同書の巻末付録には、小泉秀雄が原稿を書き、大雪山調査会の名前で公表した「寒地（高山）植物保護区域設定請願書」と「寒地（高山）植物園設置請願書」があり、その設置目論見書には、「植物園の設計及び寒地植物の培養栽植の方法は理学博士宮部金吾氏に委嘱、指導を乞うものとする」との記述がある。

以上のことから「高山植物園新設設計書」は、大正 14 年の「夏期大学」に際して、宮部先生が執筆した資料であることが明らかとなった。ただし、ここで小さな疑問が生じた。それは『宮部金吾』には「大正 14 年７月」とあるのに、前記した黒岳山頂の集合写真の説明では「大正 14 年８月」と、夏期大学の開催月が食い違うのである。

これを確認するには、夏期大学を主催した北海道山岳会の機関誌「ヌプリ」を参照する必要がある。そのため東川町が所蔵する「ヌプリ第３号」（1926）を調べたら、「８月」が正しく、『宮部金吾』の「７月」は誤りであることが分かった。

さらに「ヌプリ第３号」の夏期大学関連記事のひとつに、受講生の松崎勉による「夏期大学日誌」が掲載され、８月 17 日の部分に次のように記されていた。「宮部博士は“高山植物園設置の目的”と題し、諸外国の高山植物の実況ならびに日本の最近に於ける傾向（東北大学の八甲田山植物園設置計画の如き）を説術したる後、研究所設置に便益ある塩谷温泉が本道一の高山である大雪山の山麓にあることから、最も好適地であることを称揚し、大雪山調査会の高山植物園設置の計画に非常の賛意を表した。」

この日誌により、３で前記した「高山植物園新設設計書」の内容は、夏期大学の講義内容と一致していることがいっそう明白となった。

5 北海道山岳会と大雪山調査会

ここで大雪山の夏期大学を共催した、北海道山岳会と大雪山調査会について紹介しよう。

５－（１）北海道山岳会

大正 10(1921)年から 12(1923)年まで在任した宮尾舜治・北海道庁長官は、学術的な調査を尊重しながら、合理的な行政を推進したことで有名な後藤新平（医師で内務省衛生局長、内務大臣、外務大臣、東京市長など歴任）から信頼される、有能な行政官だった。

当時の北海道農業は地力減退などで低迷していた。宮尾長官は自らの欧米視察の経験から北欧の有畜農業に着目し、道庁職員を欧州に派遣して調査させるとともに、デンマークから模範農家を招いて実地経営に当たらせ、また連作障害を避けるため輪作の一助として甜菜栽培を奨励するなど、旧来の北海道農業を抜本的に改善することに努めた。さらに宮尾長官は農業試験場・工業試験場の整備充実や、耐寒建築の奨励などにも力を入れた。

その宮尾長官は山が好きだったので、多くの青年男女に「登山の機会を与え、よく天然自然に親しんで心身を鍛錬し、以て将来健全有為の人」となることを期待しながら、**「北海道の山岳と自然を研究するとともに、登山者および一般旅行者の便宜を図ること」を目的とする、官製の北海道山岳会を大正 12(1923)年に設立した。**

宮尾長官は自ら総裁を務めると同時に、南鷹次郎・北大農学部長に副総裁を委嘱し、佐藤昌介・北大総長を相談役に迎え、宮部金吾、新島善直（林学)、八田三郎（動物学)、松村松年（昆虫学)、田中館秀三（地質学）などにも相談役や評議員を委嘱、多くの北大関係者から好意的な協力が得られる体制を築いた。実際の運営を担う幹事役には、当時はまだ観光課が存在しなかったので、道庁の道路課長、林務課長、建築課長などが当たる他、北大教員などの名前も見られた。

北海道山岳会がとくに重視したのは大雪山だった。先ず初年度は大雪山の旭岳と黒岳で登山路改修や石室の建設を行い、翌年これを完成させた。また支庁ごとに支部を設け、一般の人を対象に、例えば恵庭岳（本部)、樽前山（本部)、後方羊蹄山（後志)、有珠山（室蘭)、十勝岳（上川)、旭岳（上川)、然別湖（十勝)、雄阿寒岳（釧路）などで登山・ハイキングを楽しむ行事を実施、さらに毎年、場所を変えながら夏期大学または林間学校を開催、冬季はスキー大会を実施するなど、活発に活動した。

ところが大正 12 年秋に関東大震災が発生し甚大な被害を被ったため、政府は急いで「帝都復興院」を新設し、後藤新平を総裁とした。すると後藤総裁は信頼していた宮尾舜治が帝都復興院副総裁となってくれるよう要請したため、北海道山岳会の生みの親、宮尾長官は惜しまれつつ北海道を去ってしまった。

宮尾長官の後任長官は、北海道山岳会に消極的だったらしい。北海道山岳会の機関誌「ヌプリ第３号」(1926）の「役員月旦」という欄には、次のように記されている。「(常任幹事の）遠山さんは恰も家が左前になってから所帯を引き受けた相続人のようなものだ。補助金が一萬円などという山岳会の黄金時代は昔のこと。今では地方費の緊縮とやらで三百円に減らされているが、それでもこの相続人はよく貧苦に耐えて、貧乏所帯をやり繰っている。」

このようにして北海道山岳会は資金が先細りとなり、各幹事は寄付金集めに奔走せざるを得なくなるなど、山岳会の活動が鈍化し、昭和初年には影が薄くなってしまった。

５－（２）大雪山調査会

大正中期まで、登山対象地としての大雪山は未知の世界だった。その大雪山を最初に世間へ知らせたのは、明治 44(1911)年から大正９(1920)年まで上川中学校（現旭川東高校）の博物（地学・植物）の教師だった小泉秀雄である。当時はまだ５万分１「地形図」がなく、不正確な 20 万分１概略図があるだけで、多くの山は山名が未確定だった。したがって小泉は旭川に在職中、たいへんな苦労を重ねながら、ほとんど人跡未踏の大雪山地域を７回にわたり広範に踏査し、火山地形や高山植物の種類や分布を研究、その結果を日本山岳会の機関誌「山岳」に、「大雪山登山記」(1917)、「北海道中央高地の地学的研究」(1918）として発表した。(「山岳」(1918）は大雪山だけの特別号で東川町の所蔵文献にある)

この報告文は登山愛好者に注目された。例えば著名な登山家・大島亮吉は大正９(1920)年、小泉の足跡を追うように松山温泉（天人峡）～トムラウシ山～石狩岳～層雲峡を歩き、「石狩岳よ

り石狩川に沿うて」をまとめた。（大島『山―研究と随想』（1930）に所収、東川町の所蔵文献にある）

また名文の旅行記を多く残した大町桂月は大正10(1921)年、小泉の足跡に触発されて大雪山に登り、「富士山に登って山岳の高さを語れ、大雪山に登って、山岳の大さを語れ」「大雪山は実に天上の神苑なり」と称えた。（大町「層雲峡より大雪山へ」として大正12年の中央公論に発表、『桂月全集　別巻』（写真3）『層雲峡　大町桂月記念号』所収、東川町の所蔵文献にある）

（写真3）『桂月全集　別巻』の『層雲峡から大雪山へ』

こうしたことにより、大雪山が次第に知られるようになるとともに、塩谷温泉、層雲別など不確定に呼ばれていた地名が「層雲峡」として定着した。

ところで大町桂月の登山計画に関与した地元の関係者、塩谷忠と荒井初一は、当時ほとんど未開だった層雲峡を、桂月の名文で知名度向上につなげたいと、ある策略を考えた。それは桂月が松山温泉（天人峡）から旭岳を往復する予定だったものを、無理やり層雲峡～黒岳～旭岳～松山温泉のルートに変更させてしまったのだという。

当時、このルートは登山路がまだ一部しかなく、危険と苦労が多かったが、結果的には塩谷と荒井に大きな恩恵をもたらした。なぜなら塩谷は大正4(1915)年以来、石狩川岸に小さな温泉宿を営んだ塩谷水次郎（塩谷温泉といわれた）の養子で、自らは新聞記者として身を立てていたが、層雲峡の知名度が上がるのは大歓迎。また荒井は旭川の商工会議所会頭を勤めるなど、財力のある実業家で、塩谷温泉を買収して大きな温泉宿（層雲閣グランドホテルの前身）を経営していたからである。

こうして大雪山と層雲峡の知名度アップが一歩踏み出したのを機会に、大雪山の自然をさらに詳しく調べ、登山者などを呼び込んで地域を活性化したいと考えた塩谷と荒井は、大正13(1924)年に大雪山調査会の設立を決意し、小泉秀雄に協力を求めた。

小泉は大正9(1920)年に旭川を離れ、長野県松本市で女子師範学校の教員となっていたが、荒井の費用負担により、夏休みを利用して大雪山を調査できるのは、願ってもないことである。小泉は大正13年と14年の夏に大雪山を精力的に調査し、新しい情報を加えて『大雪山・登山法及登山案内』（大雪山調査会、1926）にまとめた。小泉は松本時代に日本アルプスや八ヶ岳、富士山などにも登って調査したので、本書には本州の山と大雪山を比較する視点も含まれ、大雪山の総合的案内書としては空前絶後の名著というべき存在となり、昭和20年代前半まで実用的価値を失わなかった。（東川町の所蔵文献にある）

大正13(1924)年に設立された大雪山調査会は、荒井が会長として財政面を支え、塩谷がジャーナリストとして企画や運用面などの実務を担当、小泉が自然科学的調査を進め、この3者が中心となって大雪山の夏期大学を共催するなど、多くの業績を残した。しかし昭和3(1928)年に荒井が死亡すると資金面が細くなり、昭和初年には活動が停滞するようになってしまった。

ところで東川町が編纂した最新刊、『大雪山　神々の遊ぶ庭を読む』（新評論、2015）は、清水敏一・西原義弘が執筆したものであるが、**「旭岳の名付け親・小泉秀雄カムイミンタラを行く」「大雪山の生き字引き・塩谷忠の人生をたどる」**という章もあり、荒井と塩谷がどのような策略をめぐらせて大町桂月の登山ルートを変更させることに成功したのか？　変更した層雲峡～黒岳ルートの未整備部分でどんな苦労を強いられたのか？　など「秘話」に類する数々の事実が、興味深く語られている。

島崎藤村の「夜明け前」という小説は、幕末から明治維新を時代背景として「木曽山中の夜明け前」を語った名作であるが、『大雪山　神々の遊ぶ庭を読む』は、まだ世間に知られていない大雪山を時代背景としながらが、「大雪山中の夜明け前」を語った快作である。（東川町の所蔵文献には、その他に清水敏一『大雪山の父・小泉秀雄』（2004）、同『大雪山わが山小泉秀雄』（1982）、同『大町桂月の大雪山』（2010）など多くの関連図書がある）

6　大雪山の天然記念物・特別保護地区指定への道

6－（1）高山植物園計画のゆくえ

前記の３で例示された東京大学と東北大学の高山植物園の現状は、いずれも大学の研究施設で、前者は「東大植物園・日光分園」、後者は「東北大植物園・八甲田山分園」となっている。北海道大学の場合に当てはめると「北大植物園・大雪山分園」という位置づけとなるだろう。ところが北大植物園が存在する札幌は亜寒帯に属し、園内には岩山（ロックガーデン）に高山植物を栽培・研究する整備も進められている。それなのに同じ亜寒帯の層雲峡に「大雪山分園」を整備しても、その整備効果は高いといえなくなってしまう。それが理由かどうかは知らないが、層雲峡の高山植物園は実現されることがなかった。

6－（2）　北海道の天然記念物の特性

宮部金吾と大雪山調査会が大雪山の天然保護区域を要望したころ、国や北海道の行政では、どのような自然保護対策を考えていたのだろうか。北海道の開拓は、国有未開地を開拓者に無償払下げ処分することで進展したので、原始林が急速に失われた。そのため有志による自然保護意識の芽生えも早かった。

以下の６－(2)（3）（4）の項目は、俵浩三『北海道の自然保護』（1979）と俵浩三『北海道・緑の環境史』（2008）（ともに東川町の所蔵文献にある）からの要点紹介である。

天然記念物と国立公園が国レベルで論議されるようになったのは、明治 44(1911)年の帝国議会においてであるが、北海道では国よりも早く自然保護思想が芽生えていた。例えば浅羽靖（北海学園の創設者）は、明治 35(1902)年に「北海道旅行倶楽部」という自然保護団体を設立、北海道の「古蹟勝優の地を探討調査」し、これを世に知らせると同時に保存方法を考える運動を開始した。浅羽はやがて政治家となったので、恐らくその影響もあり、北海道庁は国に先行して大正２(1913)年に「原生天然保存林」を制度化した。

天然記念物は、大正８(1919)年の史跡名勝天然記念物保存法（昭和 25 年に文化財保護法）で

制度化された。その指定は大正10(1921)年から始まったが、本州・四国・九州では、○○の大イチョウ、××の大ケヤキなど巨樹老木の単木指定が圧倒的に多いのに対し、**北海道では巨樹老木の指定は一件もなく**、後方羊蹄山の高山植物帯、野幌原始林、円山原始林、藻岩原始林など、**すべて群落指定であることが大きな特徴**である。大雪山でも天然記念物を想定して、中井猛之進「北海道石狩国大雪山植物調査報告書」(1930)が公表されたが、実際の指定は戦後まで遅れた。

6－(3) 石狩川上流保護と国立公園の意識

明治44(1911)年の帝国議会では「富士山を中心として国設大公園設置に関する建議案」や「日光山を大日本帝国公園と為すの請願」などが審議されたが、前出の浅羽靖は国会議員となっており、きわめて重要な役割を果たした。すなわち浅羽は「国設大公園の設置に賛成であるが、これは富士山に留まらず、琵琶湖、六甲山、箱根、伊豆、日光、軽井沢など、**北海道では石狩川上流を含め、全国各地の景勝地を選んで国設公園とすべきではないか**」と政府に提案した。その結果「富士山を中心として」という字句が削除され、(全国を対象とする)「国設大公園設置に関する建議」として採択された。

これが日本の国立公園の出発点であるが、天然記念物は「点」で小面積が多いのに対し、国立公園は「面」で大面積が多く、多額な予算を必要とし、権利制限も困難を伴うため、国の行政としては天然記念物が先行し、国立公園は遅れをとった。

ところで浅羽靖が「石狩川上流」すなわち大雪山に言及したのは、太田龍太郎・愛別村長(現上川町も愛別村に含まれていた)からの働きかけがあったからである。

明治43(1910)年、村長に就任した太田は着任するとすぐ、将来の鉄道建設の可能性を探るため、石狩川上流(現在の層雲峡付近)に探検的な踏査を行った。すると川岸には柱状節理の巨岩が立ち並び、「幽玄神秘」な景観は「天下無双と断言せざるを得ず」というほど優れているので、その様子を「**霊山碧水・石狩川源探検**」と題する紀行文として新聞に発表した。するとそんな景勝地があるなら土地を払い下げてほしいという人が続出した。そのため太田村長は、石狩川上流一帯を「**保存禁伐林として断然個人の有に帰せしめず、徐々国家の事業として経営あらん事を切望措く能はず**」という趣旨の陳情書(「石狩川上流霊域保護国立公園経営の件」)を鉄道院総裁あて提出した。太田は帝国議会の動きをよく承知しており、浅羽は太田の要望を聞いていたのである。

この件に関しては太田村長の孫に当る笹川良江さんが、『「大雪山国立公園」生みの親・太田龍太郎の生涯』(2004)(東川町の所蔵文献にある)として詳しく解説しているので参照していただきたい。

6－(4) 国立公園の本質論争―保護か開発か

天然記念物行政は、史跡名勝天然記念物保存法の成立(1919)と同時に、国立公園に一歩先んじて**内務省官房地理課**で開始された。ここでは学識経験者(徳川頼倫・貴族院議員、三好学、白井光太郎、武田久吉など)からなる史跡名勝天然記念物調査会が候補地の選定を進めたが、国立公園も大面積の天然保護地域として天然記念物制度にとり入れるべきと考え、積極的な発言を始めた。造園学者・上原敬二も同じ考えだった。

一方、遅れをとった国立公園に関しては、国民の保健休養という観点から都市公園を所管していた**内務省衛生局保健課**が、国立公園も公園行政の一環として扱いたいと大正９(1920)年、造園学者・田村剛に委嘱して研究を始めた。田村は国立公園の保健休養的役割を重視したが、田村の恩師である本多静六林学博士も保健休養を重視していた。

要するに、地理課では国立公園を、厳正に自然保護する地域であり、観光的利用は目的ではないと考えたのに対し、保健課では国立公園を、自然保護と同時に、国民の保健休養の場として観光的に利用する地域と考えた。そのため大正中期から昭和初期にかけ、国立公園とは何かの本質論争が活発に繰り広げられ、同時に国立公園行政は「地理課」と「保健課」のどちらで所管するべきか、激しい“綱引き”が行われた。

しかし国立公園候補地として浮上してくる地元の要望としては、厳しく自然を保護するよりも、道路や宿舎が整備され、地域が活性化する方向を望んでおり、また優れた景勝地に外国人を招致し、国際観光を振興させようという機運も高まり、**結局は衛生局保健課（後の厚生省・環境庁・環境省）が国立公園行政を所管することになった。**日本の国立公園は自然保護に弱いといわれる一因は、出発時点の所管官庁の性格にある。

（国立公園に関連する東川町の所蔵図書には、前記した俵浩三の２著の他、保護開発論争を詳しく分析した村串仁三郎『国立公園成立史の研究・開発と自然保護の確執を中心に』(2005)、田中正大『日本の自然公園・自然保護と風景保護』(1981)、加藤峰夫『国立公園の法と制度』(2008）などがある）

６－（５）天然保護区域と特別保護地区の指定は昭和 46 年

国立公園は昭和６(1931)年の国立公園法（昭和 32 年に自然公園法）で制度化された。大雪山国立公園は昭和９(1934)年に指定されたが、当時は天然保護区域に相当する特別保護地区という制度がまだ存在していなかった。

昭和初期からの日本は戦時体制が強まり、やがて日中戦争から太平洋戦争へと戦火が拡大し、本格的な自然保護関係行政は“開店休業”の状態に陥ってしまった。

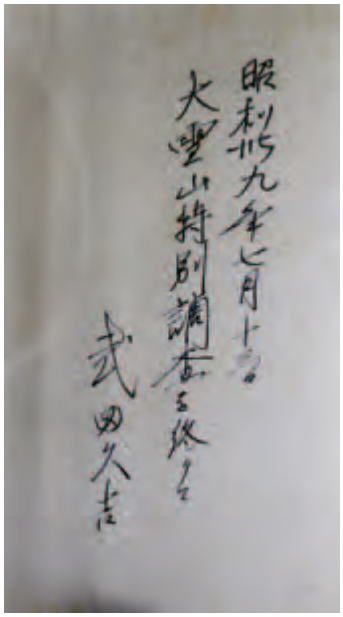
戦後復興に目処がついた昭和 24(1949) 年、国立公園法が改正され、自然環境を厳しく保護する「特別保護地区」制度が新設された。また翌 25(1950)年に史跡名勝天然記念物保存法が文化財保護法に生まれ変わった。それを契機に、戦前からの懸案である大雪山の特別保護地区指定や天然記念物指定も関係者の間で強く意識されるようになった。

ところが残念ながら、昭和 29(1954)年の洞爺丸台風により、石狩川源流など大雪山心臓部の原生林が壊滅する、莫大な風倒木被害が発生してしまった。（東川町の所蔵文献には、『北海道の森林風害記録』(北方林業会)、『風災 1400 萬石』(上川営林署)、『風倒・　風倒木処理終了記念』(上川営林署）などの参考資料がある）

そのため自然保護地域設定などは風倒木処理が完了するまで棚上げされ、その論議ができるようになったのは昭和 40 年前後である。昭和 39 年には、日本山岳会の創立メンバーである重鎮の植物学者・武田久吉先生（当時 81 歳）が団長となり、健脚ぶりを発揮しながら石狩川源流～沼ノ原山～忠別岳～白雲岳～黒岳などを踏査する「大雪山特別調査」(文化庁）が実施されたが、私も道庁職員として随行する機会を得た。写真４は、その時に武田久吉『原色日本高山植物

図鑑』（保育社、1959）の表紙裏に頂いたサインである。（東川町の所蔵文献には「大雪山・特別調査報告書」（北海道教育委員会）がある）

その他に厚生省国立公園部、林野庁なども実地調査を重ねた結果、**昭和46(1971)年、大雪山・トムラウシ山・十勝岳・石狩岳・ニペソツ山などの山頂部一帯を包含する約3万6千haが環境庁（環境省）の国立公園特別保護地区に、ほぼ同じ範囲が文化庁の天然保護区域に指定された。なお後者は昭和52年に特別天然保護区域に格上げされた。**



（写真4） 武田久吉先生のサイン

ただし、6－（2）で前記した後方羊蹄山の天然記念物の場合は山頂部だけでなく、山麓～中腹～山頂に至る垂直分布の植生変化が理解できる範囲が含まれているのに対し、大雪山の場合は原生林が洞爺丸台風で壊滅したため、中腹部以下が含まれていないのが残念である。数十年～百年後には原生林が蘇ってほしいものである。

また層雲峡の植物園計画については、大学の研究施設としての「北大植物園・大雪山分園」は困難だとしても、一般人を対象とする小規模の「高山植物見本園」の整備は、関係者の努力によって実現してほしいものである。

（注釈）

①勇駒別の名称変更

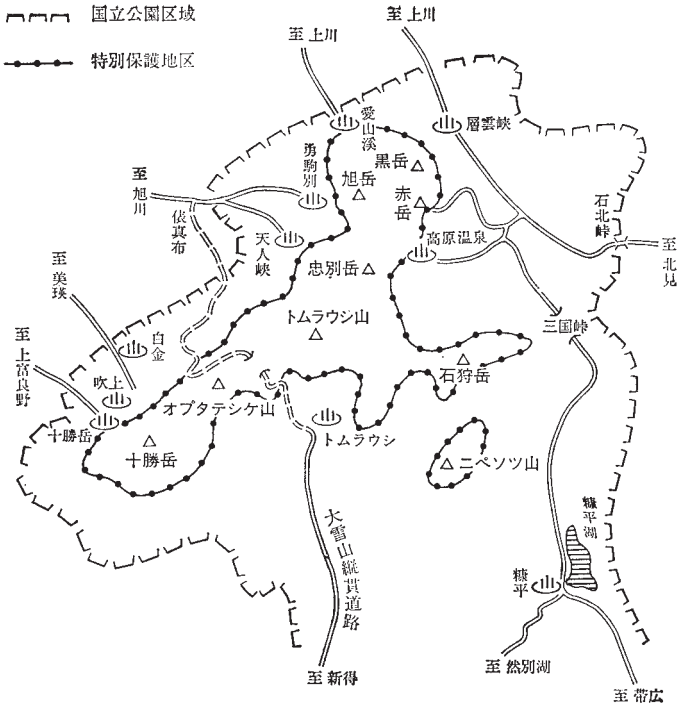
勇駒別温泉は、1982年に旭岳温泉と名称変更された。

②大雪山縦貫道路の建設中止

大雪山縦貫道路の未開削部分（トムラウシ温泉～俵真布）は1973年、自然保護世論の高まりにより、道路計画が撤回された。

③大雪山縦貫道路計画の自然保護問題

計画撤回の経緯を知りたい方は、東川町所蔵文献の俵『北海道の自然保護』p 276～281、あるいは寺島一男「大雪縦貫道」（あさひかわ新聞・25回連載）を参照していただきたい。



（参考図）大雪山国立公園・特別保護地区概略図
（俵『北海道の自然保護』（1979）から転写）

一の弟子・舘脇操と大雪山　宮部博士の歴史的資料発見に寄せて

大雪山房主宰　清 水 敏 一

このたび宮部金吾の「高山植物園新設設計書」が発見されたことを知った。俵浩三先生が約100年の時を経て発見されたのである。ワープロもない時代のこと、当然直筆である。執筆者の氏名も日付の表記もないが、筆跡から宮部金吾と判明したそうである。一読したがきわめて興味深い内容であった。文書は高山植物園構想の計画書、趣意書のようなものであるが、内容もさることながら表現がおもしろい。

まず文語体であること、カタカナ表記であること、難解漢字を多用していることであるが、これらは当時の公文書スタイルであったのである。また面積は坪、山の高さはメートル、つまり尺貫法とメートル法が混在していること、欧米のことを論ずるときは西暦年である。「巴里」(パリ)、「瑞西」（スイス）なども、戦後世代には読みにくいだろう。「ピレ子ー」（子は十二支の「ネ」）も変わった表現である。同じ例は旭川の『川村カ子トアイヌ記念館』であろう。

宮部は達筆であるが、独自のくせ字もある。返り点でも打ちたいような漢文的表現、語彙の漢字も送り仮名無しもあれば、逆に過剰もある。氏名も日付もないので草稿であろうが、だとすれば活字になって公表されたものがあるかも知れない、という思いもしなくはない。今回は宮部の直筆であることがはっきりしたからいいようなものの、もし弟子が代筆したとすれば、代筆者は誰か、真の筆者は誰かも検証しなければならなくなってくる。

今では宮部は歴史的人物である。万延元年（1860年）生まれなので、幕末、明治、大正、昭和も敗戦後まで生きたことになる。エルムの杜の頭脳群像『北大百年の百人』（北海タイムス社・1976年）によると、松浦武四郎と宮部の父が懇意にしていたので、武四郎は好奇心旺盛な宮部を「養子にくれ」と望んだというが、こうなればもはや伝説的エピソードである。また宮部は北大出身者として初の文化勲章を受章、札幌名誉市民第１号である。このような大人物が私と20年近くも時を同じくしたとは、信じられないくらいフシギな気がする。

さて本題の舘脇操に戻そう。舘脇は宮部の一の弟子というべき存在であろう。彼は『寒帯林』創刊号に書いている。同誌は旭川営林会(局)の機関誌であり、1949年12月創刊である。舘脇は「『大雪山の植物』に寄せる」という一文を寄稿した。舘脇著『大雪山の植物』は同年９月、㈶林友会旭川支部から発行したので、そのことにふれて書いたのである。冒頭に宮部が登場する。

1925年（大正14年)、北海道庁主催（すなわち北海道山岳会）で夏期大学が開催され、宮部は講師として「高山植物園と高山植物」を講ずるために層雲峡に入った。それに随行したのが舘脇である。彼にとっては初めての入峡であり、初めての大雪山であった。登山道はできたとはいえ、上川からはバスもなくトラックもなく、宮部は馬で、彼は徒歩でつき従ったという。層雲別（清川）から先はまだかなりの森林で、層雲峡から先は道らしい道もなかった。

小函に行くためには層雲閣前の一本橋をわたらなければならないが、このときほどヒヤヒヤしたことはなかったと語る。彼はこれまでにも宮部に従ってずいぶん旅行しているが、この一本橋には恩師の体をおもんばかって、肝を冷やしたようだ。層雲閣に宿泊ののち、大雪山黒岳に登り石室に２泊し、雲の平から北海沢のあたりを調査している。舘脇の心配にもかかわらず、66歳の宮部は思いのほか元気であった。

小泉秀雄著『大雪山　登山法及登山案内』に、桂月岳を背にして黒岳石室前で撮った１枚の集合写真がある。総勢 35 人、中央金剛杖の宮部金吾と、白服の大雪山調査会理事・塩谷忠しか記名していないが、当然この中には舘脇もいる。宮部の右後ろに付き添い、背広姿の大柄な男である。そのほか河野常吉（講師）、犬飼哲夫、坂本直行、著者・小泉も参加しているので写っているはずだ。ご来迎の時刻まえには宮部に起こされ、固い眼をこすったと舘脇は述懐する。このときに登った宮部のほか、犬飼、舘脇、坂本も、前記『北大百年の百人』は取りあげている。

舘脇はその後、千島、満蒙方面の調査に力を入れたので、大雪山からは足が遠のいてしまった。その前後に大雪山は小泉秀雄をはじめ、兄・小泉源一（京大）、原田泰（北大）、中井猛之進（東大）、秋山茂雄（北大）、木村有香（東北大）、武田久吉、本田正次（東大）、北村四郎（京大）など、一流の植物学者が相次いで入山、調査が進められていった。こういう例は白馬岳、富士山、日光くらいではなかったかと彼はいう。

敗戦翌年の 1946 年、舘脇は久しぶりに大雪山へ、46 歳。そのまえに発疹チブスを発症、予後の回復を計って入山、黒岳石室を中心に小泉岳から噴火口壁を歩き、さらに旭岳から姿見の池に下り、裾合平をたどって中岳を経て石室に帰る。５日ばかりの山歩きに健康にも自信を得て層雲峡に下山した。1947 年にはニセイカウシュッペ、黒岳、北鎮、愛山渓から沼ノ平、当麻乗越を経て姿見の池を探る。1948 年は黒岳から高根ヶ原、トムラウシに登り松山温泉に下山している。

以上、駆け足で３年間にわたる大雪山登山調査の跡をたどったが、その成果が『大雪山の植物』となって結実したのである。本書の装幀は今田敬一（『北大百年の百人』に記載）、林学の専門家であり、自然保護運動の先導者であった。また美術に造詣が深く、この方面の活動も顕著、そのようなことから舘脇は今田に装幀を依頼したのであろう。今田は後年『北海道美術史』（北海道立美術館友の会、1970 年）を著す。布装箱入の格調高い本である。

『寒帯林』1950 年６月号に舘脇は「大雪盆地」を寄稿している。大雪盆地とは今はなき士幌線の終着駅「十勝三股」の一帯である。1949 年の大雪山調査行７月 26 日から 28 日の記録であるが、26 日は快晴でユニイシカリの肩から大雪盆地（三股高原）の森林の大観、360 度山々の大展望を満喫する。27 日、石狩川への下りには、大正年間にこのあたりを歩いた大島亮吉を回想する。28 日はニセイチャロマップの河岸林を調査、雨が降り出し濡れた丸木橋では滑落、ケガはなかったが全身ずぶ濡れという一幕もあった。

舘脇はまた同年８月号の『寒帯林』に「高山植物園と高山植物館」を寄稿した。場所は旭川市常磐公園である。準備から開館、三笠宮ご来館、館内の見取り図、陳列展示品、植栽された高山植物の品種など、こと細かく記述。最後に鮫島（惇一郎）君らの影の大活躍には感激ものと、感謝の意を表している。

続いて９月号に「座談会―道博の高山植物館を語る」が載った。出席者は司会を含めて 13 人、もちろん舘脇の名はない。出席者の言を伝えてこの稿を終えたい。「舘脇さんは実によくやって下さいました。人目につかない所で荒らさないよう採られたことは勿論ですが、一本の無駄もないよう花の咲いたのを山から下ろしたり、花のすんだのを元の場所にかえしたり、学生さんをつかってやっておられましたが、こうした思いやりには頭が下がります」。

ご協力いただいた方たち

東川町がふるさとの山、大雪山に関する本を集め、目録作りを進めていることに多くの方から賛同とお力添えをいただきました。貴重な本、研究書の情報、あるいは原稿をお寄せいただき、また、書籍、資料の寄贈もいただきました。お名前を書き残し、お礼とします。

阿地政美さん、東延江さん、安細和彦さん、石川球太さん、岩舘匡宏さん、上田茂春さん、梅沢俊さん、岡崎哲三さん、大須賀羊一さん、大塚友記憲さん、大橋弘一さん、柏澄子さん、神田健三さん、黒田忠さん、菊地基さん、小泉雅彦さん、後藤昌美さん、斎藤信義さん、堺井勇希さん、佐久間弘さん、笹川良江さん、佐々木茂夫さん、佐藤一交さん、佐藤清吉さん、佐藤文彦さん、鮫島惇一郎さん、塩谷秀和さん、清水敏一さん、下條典子さん、渋谷正己さん、嶋田健さん、菅野由志子さん、宗万忠さん、宗万脩史さん、大門章さん、高津豊さん、高澤光雄さん、武田泉さん、田中博さん、俵浩三さん、寺口一孝さん、寺島一男さん、出羽寛さん、戸川久美さん、鳥羽晃一さん、中谷良弘さん、二橋愛次郎さん、早川禎治さん、林拓郎さん、播磨秀幸さん、春菜英則さん、前田光彦さん、本村勝伯さん、保田信紀さん、渡辺康之さん
日本山書の会、北海道教育大学附属図書館旭川館、北方現代社

大雪山から育まれる文献書誌集 第4集

～豊かな自然・さまざまな生命・歴史文化の記録～

これまで発行した3集までを合本したうえ、新たに加筆して第4集としました。

編集・発行／写真文化首都「写真の町」東川町
〒071-1492 北海道上川郡東川町東町1丁目16番1号
TEL 0166-82-2111
http://town.higashikawa.hokkaido.jp

企画・制作／株式会社 総合企画

発　行　日／平成31年3月